
白蒼月銀狼譚～二つ月の集った世界（種シリーズ？）

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白蒼月銀狼譚〜二つ月の集った世界（種シリーズ？）

【Nコード】

N8550M

【作者名】

汐井サラサ

【あらすじ】

白蒼月紅譚〜二つ月のある世界 の続編。

(<http://ncode.syosetu.com/n33871/>)

剣と魔法と素養の世界二つ月の浮かぶシル・メシアでの永住を決めたマシロ。

彼女の毎日は平穏で安定しているように見えていた。

—— …… ある拾いものをしてしまうまでは……

「落ちているからって何でも拾わないで下さい」と注意されるも空しく

マシロはマリル教会のごたごたに巻き込まれて行く。

相手が居ても逆ハ―風味。二つ月を象徴する二人の甘いかもしれないラブコメディ、第二弾。

本編完結。番外編をちよいちよい更新中

第零話：登場人物紹介という名のコレまでの流れ的な何か（前書き）

お久しぶりですの方も、はじめましての方も

やってきました！種シリーズ第二弾。

9/28より二日に一回更新予定。シリアス系ラブコメディ（矛盾）
良かったらお付き合ってください。

第零話：登場人物紹介という名のこれまでの流れ的な何か

《紅譚より常連》

やまなし ましろ

月見里 真白

何の因果か異世界シル・メシアに落ちて苦学生生活（？）を送っていた真白だったが何とか無事に元の世界へ戻ることに成功！

しかし、戻った世界にはあの人が居ない。

…… 結局マシロは月夜の晩に迎えに来た闇猫と共に異世界シル・メシアに永住することを決意した。

そんな感じだから常に行き当たりばったりな性格。年齢も重ねてしまいい今は18歳。

図書館、中級階位所属。

ブラック（通称：闇猫）

シル・メシア唯一の種屋の店主。世界最強だけど本人に全くやる気がないので基本何事にも未介入。

唯我独尊悠々自適な毎日を送っている。連れ帰ったマシロと折角一緒に暮らせるかと思っただけあっさり振られ週末婚状態。

種の売買管理などが主な仕事。裏の仕事は暗殺業だが別に隠しているわけではない。

明らかにマシロ大好きなエミルは嫌い。カナイはそれなりに使える奴だと思ってる。アルファは遊び相手

年齢28歳。

エミル（エミリオ）

初めてあったその日から恋の花咲くときもある。

王位継承順位から程遠い王子。家庭教師のラウに王宮を出ることを進められ（唆され）カナイ・アルファを引き抜き 途中でシゼを拾い図書館に入学。

元々、王家の素養という特殊素養を抜いては次点に薬師素養を持っていたため

図書館入学後水を得た魚のように生き生きしている。……が、大抵ろくなものは作らない。被害者はいつもカナイ。

王宮育ちの為世間に疎いところあるものの、もともと周りに放って置かれない性質が困ったことはない。

その為、天然暴走気味なことに気がつかない。

図書館、上級階位所属。

年齢19歳

カナイ

王宮嫌いの天才魔術師。

商家に生まれたもののその素養に恵まれず家を出てからずっと一人暮らし（ほぼずっと寮生活）

親に頼ることに引け目を感じ、学費生活費を自ら捻出していた若かりし頃は結構無茶もしていたらしい。

今はエミルのお抱え術師と大聖堂の講師などで生計を保っている。

王宮は嫌いだけどエミルは何だか大好きで子で酷い目に合わされているにもかかわらず、曇っている目にはそんなもの映らないらしい。地味な見た目に反して、大技が好き。小技を連発するくらいならアルファをたきつけて後始末するほうが良いと思っている。

図書館、万年中級階位所属（薬師に属する素養がない為）

年齢19歳

アルファ（アルファアルファ）

王宮所属の天分に富んだ騎士。

小柄な体格からは想像付かないほどの力を発揮。一撃で地面を割ったり大木を切り倒したり出来るが、その跡始末をしているのはいつもカナイ。

見た目は天使だが中身は小悪魔。カナイをからかうことに生きがい

を感じている。

過去の失敗により騎士団をやめるつもりだったのをエミル専属の護衛という形で城を出た為、

未だに騎士団所属という肩書きが残っている。

ブラックのことは大嫌いなのに、相手にそれが伝わってるはずなのにしょっちゅう絡まれて、死闘を繰り返す。只今連敗中。

図書館、万年初級階位所属（素養はもちろん、本人にやる気がない為）

年齢17歳

シゼ（シルゼハイト）

ラウ博士の助手。

年若くして図書館に入学。その才覚により常に孤独……というか本人が他人と絡む気が一切ない。

エミルとその他が居れば世界はそれで回ると思っている。エミルが大好きなのでマシロが嫌い。嫌い嫌い常にいつていくせにいつも何か足りていないマシロに情報を提供してくれる。それもこれも全部エミルの為にやってることだと思いつているが……。

図書館、上級階位所属。この先かなり有望な薬師。将来エミル付きの薬師になる予定。（ほぼ決定）

年齢14歳

ラウ＝ウィル

現王の執政官の息子。

城に在住していた頃は、多岐に渡る才能により王子・王女の教育を一手に担っていた。彼の肩書きは星の数ほど存在しているので敬称など皆バラバラだが気にしてはいけない。

自分のしたいことしかない。好きなことしかしたくない性分で、自分のやりたいこと試してみたいことがあればその手段は選ばない。無邪気で恐れを知らないところがある。

こつそりでもないが、エミル他優秀だけど問題ありな人材ばかり引き抜いて城を出た。

今は図書館勤務。昔からの伝と饒舌で教頭を務めている。
年齢35歳。独身

《銀狼譚より参加組》

レニ

マリル教会・陽だまりの園の関係者

ハクア

白銀狼。マシロの独断により犬決定。明らかに違う。

ロスタ・ユイナその他子ども

陽だまりの園で生活する子どもたち。ユイナは紅譚でも出ていた。
癒し系の素養を持った女の子。

アルム・ヴァジル・ムスカ

図書館学長（翁）大聖堂学長（悩殺美熟女）騎士塔副学長（マツチヨ）

レムミラス

現在蒼月教徒のトップ

メネル・アセア

エミルの異母兄妹。姉メネルは星を詠む素養に長け、妹アセアは王家の素養に恵まれている。第一ターリ。現王・王妃の娘。

第一話：落し物の行方

白い月青い月二つ月

紅く染まる月……在るべきものが在るべき場所に存在して初めて
歯車は回り始める。

回り始めた歯車は……カラカラカラカラ……もう、誰にも止められない

「……どうしよう」

私の名前は月見里真白^{やまなしましろ}。しかし、このフルネームを使わなくなってもう久しい。

剣と魔法と素養の世界シル・メシアに落ちた上、永住まで決めたしまった私は『マシロ』と名乗り現在は、まだ図書館に通う学生だ。

不本意ながら、恋人の援助によって金銭的苦難は去ったものの、世話になりっぱなしというのはどうにも性に合わない。

だから、今も昔も変わりなくギルド登録をし、細々と依頼をこなして生計を補っている。因みに、階位が上がったからランクもこれまで昇格した。戦闘能力がまるでないので、これ以上は上げないということではブラックやみんなに手を打ってもらっている。

と、そんなことよりも……私はそのギルド依頼をこなしている最中。落し物を拾ってしまった。

「こつこつというのは警察？」

いや、でもこの無法地帯っぽい世界に警察組織なんてあるのか？
確か前に、カナイがその類の組織もあるにはあるっていったよ
うな気がする。

—— ……じゃあ、そこに届けて……

駐在所なんて見たことない。てことは王宮まで行くのかな？

このところ急に冷え込んできているし、お日様が高いうちは気持ち
良いくらいだけど日が沈むとこんなところには居られないだろう。

連れて行くにしても依頼を終わらせてからじゃないと……今日は
集金を頼まれたからお金も持たされてるし。

私は依頼主であるミア工房のティンのところへ一度戻った。

ティンは、主に魔法石の加工を得意とするオレンジ猫耳と尻尾を
持った獣族の職人さんだけど、私が心配するくらい無用心だ。

アーチ型の扉を開けると可愛らしいウェルカムベルが迎え入れて
くれる——これは多分本人に聞こえてない。

それほど面識があるわけではないが、いつものことなので店主が
出てくるのを待つまでもない。ずかずかと店……というよりは作業
場へ乗り込んでいく。

売るときは基本露天販売だ。

中央の広い机の上に途中に拾ってしまった籠を置いて、キーンと
金属音も聞こえる奥へ進む。

足踏み式ののこぎりで細かい作業を行っていたティンは、物凄く
近寄って初めて気が付いてくれたようで顔を上げた。

「助かったさ！ マシロちゃん」

「良いけど、こういうのはギルドに頼まないほうが良いんじゃないの？ 集金なんてそのまま持つてどっか行かれたりするとか？」

「うわ。マシロちゃんに注意されるとは……まあ、心配ありがとさん。でもテラとテトはちゃんと身元のしっかりした人じゃないと登録しないし、依頼を請け負わせるのも人を見るから大丈夫。マシロちゃんはあの二人に信用されてるんだって！」

その割りに、私の登録は身元以外も怪しいところばかりだったけど、すんなり登録してもらったけど……カナイの顔利きがあったからかな。

作業の手を休めて「お茶でも淹れるさ」といったティンに後押しされるように、私は机まで戻った。

片手に嵌めていたごつつい皮手袋を外すと、ティンは丸太の椅子に放ってお茶の準備を始めてくれる。私はその姿を目で追ったあと、数件集めて回ったお金を入れた皮袋を机の上に置いた。

「はい、どうぞー…ってマシロちゃん。その荷物何さ？」

ことんと私の前にマグカップを置いて机の上に、どかんつと置かせてもらっている籠を覗き込む。そして顔色を変えたティンは、恐る恐る私に尋ねた。

「マシロちゃんの子？」

「違うからっ！ 絶対違うからねっ！ ……大体私がいつ妊娠してたっていうの。それもなんか失礼じゃない？」

いっただろっな、と思つた疑問なのについて言葉を重ねる。

ちよつと重ねすぎたかな？ と思つたけどティンは気にする素振りもなく「だよねえ」と頷いて手に持っていたマグカップの中身に口をつけた。

「ということは子守も請け負つたの？」

「違うの。ここへ来る途中に拾つたんだよ。落ちてたの」

「……落ちてないよね」

おずおずと口にしたティンに私はうんと頷く。

「赤ちゃんに聞こえたら可哀想だから大きな声じゃいえないけど、捨てられちゃったみたいなんだよね。籠の中にね『誰か拾つてくさい』だつて……」

ポケットに突っ込んでおいた紙切れをティンに見えるように広げてそういつた私に、ティンは「で、拾っちゃったんだ」と盛大な溜息を吐いた。

「いや、拾つたつていうかあんなところに放つて置けないから、警察とか……そういう施設とか連れて行つたほうが良いかなと思つて……」

心当たりないかな？ と、首を傾けた私にティンは、うーんつと唸つたあと答えを出してくれた。

「マリル教会に連れて行くと良いさ。王宮でもそういう施設はあるつて聞いたことあるけど、王宮は駄目。あそこは格差がありすぎるし教育上絶対良くない。マリル教会なら非武力団体だし……ちゃん」と面倒を見てくれると思うから」

マリル教会、か……。

私がこっちに永住を決めてから、私の立場が危なくなるから近づいちゃいけないところだったよね。

「ティン、には」

「無理。オレは忙しいからさ」

取りつく島もなく却下された。

うーっと唸った私に、ティンは机の脇に積んである資料の山から一枚紙を引つ張り出して、穴だらけの机の上で地図を描き始める。

「悪いけど地図くらいは渡すからさ！　だーいじょうぶっ！　こんなあつつい五月蠅いところでもぐーすか寝てられる赤ん坊、どこでも上手くやるって！」

確かに気持ち良さそうに眠っている。

眠っている間に連れて行ってあげたほうが良いのは確かだろう。

もうあの騒動から結構経ったし、私を指したらしい聖女像も私からはかなり掛け離れているものみたいだから……大丈夫、だよな？　私は自分をそう納得させて、ティンが描いてくれた地図を片手にマリル教会を目指すことにした。にしても、机があれだったから紙が穴だらけだ……見辛い。

そんなに小さい建物じゃないから、道なりに進めば見つかると笑顔で見送ってもらったのに……。

見つからない。
どうしよう。

籠の中がもぞもぞと動き出した。起きて泣かれたら私にはどうすることも出来ない。赤ちゃんのあやし方なんてさっぱり分からないよ。わたわたしている間に泣き出してしまった。

取り合えず、抱っこかな？ 抱っこだよな。

私は籠を道の端へ置いて赤ちゃんをそーっと抱き上げる。

——…ぐによん

「うわわわわっ！」

柔らかいっ！ 何でぐにゃぐにゃなのっ。どうしよう。

どこ支えれば……両脇に手を突っ込んで持ち上げようとしたら首がぐによんと残った。

私は慌てて籠の中に赤ちゃんを戻す。

真っ赤になって泣き叫ぶ赤ちゃんの姿はまさにタコ！ 良い感じの湯で加減になってる……って冷静に眺めているわけにいかなくて

——…どうしようーっ！！

「どうか、しましたか？」

おやおやー酷く泣いてますねー。と、背後から生えてきた人影は、籠の中と私を交互に見比べた。おろおろとその姿を見上げると、男性……？ だと思っけど、穏やかな笑みを浮かべた優しい人だ。

「あ、あの、私」

「私が替わりましょうね」

につこりと笑顔のまま察したのかどうかは分からないが、彼はそつと手を伸ばし慣れた手つきで赤ちゃんを抱き上げた。大きな声でしゃくりあげながら泣いていた赤ちゃんは、その腕の中で安堵したのかひつくひつくとしゃくりながらも号泣するのはやめてくれたようだ。

「凄い……あ、ありがとうございます。助かりました」

「いえいえ、それで、この子のお母さん。というわけではなさそうですね？」

鈴が鳴るような綺麗な声でゆっくりと問い掛けられ、私はこくくと頷いた。

よく見ると、彼は一目で聖職者を思わせる格好をしている。

胸には少し大きめで、左右の端にダイヤとブルーダイヤをあしらったような特徴的なクロスペンダントも掛かっていることだし。きっと近くまでは来ているはずだから……

「あの、もしかして、マリル教会の方ですか？」

私の山掛けの質問に、彼は少しだけ驚いたように見えたが、僅かに眉が動いた程度だ。

「ええ。私はマリル教会の者ですよ。因みにここは教会の裏です。あまり一般の方は寄りませんね？」

「そう、ですよ」

「ごめんなさい。迷ってました。」

「えっと、その丁度良かったです。この子八番通りの裏で……そのお……」

ちらりと腕の中の赤ちゃんを見て言葉を濁した私の意図を察してくれたのか、彼は、分かりました。と、頷いてくれた。

「貴方はとても優しい方なんです。悲しいことですが時折あるのですよ。この子も貴方に助けてもらって幸運だったといえましょう」

裏ではこういう子達を売買するものも居ますからね。と、続けて感情の読めない笑みを曇らせた。

やっぱり、私はまだこの世界の表面しか知らないのだろう。とはいえ私にもこういうことに深く首を突っ込むと心配してくれる人たちが居るわけだから深追いは出来ない。

無事に教会の人に預けることが出来たのだから、お願いだけして立ち去ろうと思ったのに……赤ちゃんの入っていた籠を持たされた。

「この子がこれから生活する場所がどういいうところか気にもなるでしょう?」

ともいわれたら、頷くしかない。

第二話：外からでは分からない・入ったからといって分かるものでもない

木戸をくぐると、一瞬にして空気が変わったような気がする。目に痛いほどの白壁に囲まれた聖地のような場所だと思った。

前に行く彼を追い掛けながら、きよろきよろと辺りを見回すが、目に入ってくるのは建物の白とそこかしこにある木々や芝生の緑だ。常緑樹ばかりが植えてあるのだろうか。

図書館の中庭の木々は葉を失っているのに、季節感がおかしくなりそうだ。

大聖堂も聖地と呼ばれそうな荘厳で清浄な場所だったけれど、あそこは建物自体も装飾過多だったし、古さがその雰囲気をもし出しているという感じだった。

でも、ここは違う。

何の装飾も施されることのない柱に囲まれた白い空間。

染み一つ、ヒビ一つ、ないその姿が、まるでこの建物全体の時間^{とき}が止まっているように感じさせる。

気を抜いたら、自分自身もその空間に取り込まれてしまうような気までしてくる。そんな、おかしな空気に少し飲まれそうになる。

「あ、あの……」

なんだか少し怖くなって声を掛けると、前を歩いていた彼は「はい？」と振り返る。

丁度、目的の場所へと辿り着いたのか彼が肩でぎつと押し開いた扉の先には、青々とした芝生が茂った庭が現れて、子どもたちの声

が飛び込んでくる。

「あーっ！ 先生だーっ！」

そんな叫び声を筆頭に、わらわらと子供たちが集まってくる。年齢層も幅広くシゼくらいの子が一番年長さんのようだ。

「赤ちゃんどうしたの？ その子もお迎え待つの？」

彼の腰辺りくらいまでしか身長のない女の子が、彼の服を掴み背伸びをして腕の中の赤ちゃんを覗き込もうとする。その様子に、そつと腰を屈めた彼は「そうですよ」と頷いてから、赤ちゃんの産着の裏辺りを少し弄って、白く小さな包みを引っ張り出した。そんなものがあるなんて気が付かなかった。

「この子はお腹が空いているようです。ミルクを上げてもらえますか？」

いつて見上げてきていた女の子に、そつと赤ちゃんを託す。私でも上手く抱くことが出来なかったのに、大丈夫かと不安になったが杞憂だったようだ。女の子はこくこくと頷いて上手に赤ちゃんを抱えると、他の数人と一緒に建物の奥へと消えていった。

その姿を見送ったあと、彼は赤ちゃんから外した小さな包みを開く。

中からは何か小さな細工物が出てきた。細かな細工の施してある綺麗なものだけど、赤ちゃんが飲み込んで危険な大きさだ。

「それはなんですか？ 私、全然気が付かなかった」

籠の中には拾ってくださいとしか……と、続けた私に彼は笑みを深めて、手の中に納まった物を私に見えるように差し出してくれる。それを指先で掴んで日に翳すとキラキラと光を乱反射して眩しい。

「見覚えありませんか？」

「え？ ……いえ、特に……」

どこかの徽章とかなのかも知れない。問われるとどこかで見たことあるような？ 首を捻ったが、私には行き当たる先がなくて首を振った。

そんな私に彼は、そうですか。と、微笑んで頷く。

「それは、きつとあの子の身元を示すものですよ。何らかの事情があつて置かれる子には、時折あるんです。そういう場合、大抵はこの教会の傍に置かれることが多いのですが、貴方は八番街の裏といつてましたね？」

「え、はい。仕事の帰りだったから間違いないと思います」

赤ちゃんの居た場所を思い出しながらそういった私に、彼はもう一度頷いてくれた。何か不思議な雰囲気の人だ。

「先生の恋人？」

話が一段楽したと判断したのか、傍で待っていた一人が私たちを交互に見てにこにここと問い掛けてくる。子どもって……。

「違いますよ」

「えー、じゃあ、先生が攫ってきちゃったのーっ？」

子どもって……。

「……違いますよ」

あ、ちよつと笑顔に変化が。傷付いたのかもしれない。

「関係ないなら遊ばーっ！ お姉ちゃん名前なんていうの？」

「マシロだ……よ……っつと、ま、つて！」

最後まで私の話を聞くこともなく、ぐいっつと手を引かれてよろけると、そのままの勢いで連れ去られる。肩に掛けていた籠がぼすんと落ちた。ぐいぐい遠慮なく引かれる腕に抵抗しつつ、後ろを振り返ると落とした籠を拾い上げつつ

「もし、お時間があれば付き合ってあげてください」

と微笑まれてしまった。

仕方ないので、私は子どもたちの輪に入った。

本当は直ぐに帰るつもりだったのに。

鬼ごっことか、かくれんぼとか……子ども遊びはどの世界も大差ないようだ。

子どもたちの相手をしていると、敷地に一步踏み入れたときの感覚は薄れていった。畏怖を感じていた気持ちも引いて素直に楽しめた。

でも……子ども元氣過ぎ。

空が茜色に染まる頃。私は子どもたちの輪から離れて、周り縁に腰掛けた。まだまだ、きゃーきゃーとはしゃいでいる子どもたちを眺めながら、ぼんやりと一休み。

「相手をさせてすみません」

そつと声を掛けてきてくれたのは彼だ。そういえば名前を聞いていなかったことに気が付いて「大丈夫です」と首を振ったあと訪ねてみた。

「レニです」

「レニ、先生？」

子どもたちは彼をずっと先生と呼んでいる。だからそれに倣ったらくすくすと笑いを零された。

「あの子たちには読み書きから始まって、私の知識の及ぶ限りは教えていますから“先生”かも知れませんが、マシロさんにとって私は唯のレニですよ」

「そ、そうですね？ はは。じゃあ、レニさんで……」

曖昧に笑ってそういった私に、レニさんはにっこり頷いてくれた。

建物の奥に行ったきりだった女の子たちが戻ってきて、夕食だと叫んでいた。

子どもって、どうしてこう何でも声を張るんだろう？ 苦笑しつつ私は立ち上がると「長居しちゃってすみません」と口にした。

「大したものではありませんが、食事をされていきませんか？」

「ごめんなさい。寮でみんな心配してると思うから、帰ります」

「寮。寮ということはどこかの学生さんですか？」

その問いに頷いて「図書館です」と答えると、私はわらわらと集まってきた子どもたちに別れを告げた。皆一様に泊まって行けとまでいつてくれたけれど、流石にそれは拙い。子どもたちへの対応に困りきっていると、レニさんが上手く交わしてくれ私を解放してくれた。

子どもたちの遠慮のない「また来てね」攻撃に見送られつつ、レニさんが来た道を送ってくれた。先ほどまでの空間をあとにするとやはりここは肌寒く感じる。非武力団体だとティンはいつていたけれど、その割には少し温かみに欠ける場所だ。

「マシロさんさえご迷惑でなければ、本当にまたお立ち寄りください。表の教会から入ってきていただいても結構ですからね」

あ……こっちは裏だったんだよね。レニさんの笑顔に苦笑しつつ手を振って帰路を急いだ。

第三話：家族設定は基本

特に何も怖いことはなかったけど、流石にマリル教会に行つてました。

なんて口にしたら、みんな怒るよね。

「マシロっ！」

何といい訳をしたものかと思案していたから、突然掛かった声に必要以上に驚いた。びっくりと肩を跳ね上げて、恐る恐る振り返ると……鬼の形相のカナイだ。

—— ……いや、でもカナイで良かった。

私は胸を撫で下ろし「お迎え？」と歩み寄ってくるカナイに声を掛ける。カナイは、人の話を無視して「どこに行つてた？」と低い声で聞いてくる。

「え、と。道に……」

「迷つてないよな！ マリル教会に行つてたんだろ」

「えー、カナイ。ストーカー？」

ずばり当てられて茶化した私に、カナイは眉間の皺をこれ以上深く刻むのは無理というほど刻んで、ふっかい溜息を吐く。

「テラとテトに、お前はミア工房の集金に行つたと聞いたから、ミア工房に行つたらティンにとっくに出たって聞いたんだよ。で、行き先も事情も聞いた」

「それなら、納得だよな？」

—— ……わ、私は何も悪くない。

人として当然のことをしたまでだ。

ほっと胸を撫で下ろした私に、カナイは全然納得している風ではなく溜息を重ねる。

「本当に、お前は間違ってないか？ 他に方法はなかったか？」

「そんな子どもにお説教するみたいにいわないでよ」

ぶう垂れた私に、カナイは答えると重ねる。

私は不機嫌な様子を隠すこともしないで、うーっと唸る。だから、私は間違ってないと思う。

赤ちゃんを拾っちゃって、そのままに出来ないから適切な施設へ送り届けただけだ。そりゃ、直ぐ帰らずに子どもたちと遊んでただ。

「何が悪いのか分からないって顔だな？」

呆れたようなカナイの声にだんだん悲しくなってきた。

「お前はさ…… お前は、俺たちが何のために居ると思ってるんだよ」

しょぼんとしてしまった私の頭に、カナイの大きな手が乗っかる。エミルなら撫でてくれるところだが、カナイには叩かれた。

いつものことだけだ。

いてっと叩かれたところをわざとらしく押さえて見上げると、ほんの少し寂しそうな顔をして微笑んでいるカナイと目が合った。

そんな顔をされたら、私は言葉に詰まってしまつ。後悔の念が湧いてきて申し訳なさで泣きそうになる。

「もう少し頼れ」

「――……」

カナイの言葉はいつも重い。

ブラックやエミルが思っている口にしないだろうことを、カナイははっきりと私に口にする。何もいわない私にカナイは、声の調子を戻して話を続ける。

「相談しに戻ってくるくらいの時間あるだろ？ マリル教会に届けるとしても、俺やアルファが行けば済む話だ。お前がわざわざ危険を犯してまで踏み込んでいく必要はない。お前は俺らに迷惑を掛けたくないとか、そんなことを思ったのか、頭にすらなかったのかは知らないが、こうやって気を揉むほうがよーっぽど！ 迷惑だ」

「……ごめん、なさい」

子どもたちと遊んだ楽しい気持ちはすっかり失せた。

「分かったなら良い」

帰るぞ。と、続けて私の手を取ったカナイについて歩く。カナイツて……

「お父さんみたいだ」

「は？」

「カナイツて、お父さんみたい」

ふふっとこみ上げてくる笑いを隠すことなく私は口にした。

カナイは、物凄く不本意だという表情で「せめて、兄貴くらいに」とかぶつぶついつてる。

「あー、お父さん？」

「それはやめろ。で、何だ？」

「はは、あの、さ……他のみんなには内緒にしてくれる？ その、心配するだろうし……特にブラックは目くじら立てそう」

カナイは、私の言葉にやや思案したようだけど「今回だけな」と頷いた。

多分、ブラックの八つ当たりが気になったのだろう。ブラックは、私には甘いからきつと怒りの矛先はカナイたちに向く。

ぶちぶちいいながらもカナイも結局優しい。

まあ、ごたごたを避けただけでもしれないが、それでも嬉しいから、？がれていた手に空いていた腕を絡めて「ありがとう！」と告げる。

カナイは一番平気そうな顔をして、こういうことをされるのに一番慣れていないから直ぐに赤くなって動揺するところが可愛いと思う。

「キスしたいくらい嬉しい」

「キ……っ！……まだ死にたくないなので勘弁してください」

うん。勘弁する。

私からしたっていつでも、ブラックはきつと聞く耳持たないはずだから……。下がりきったテンションもすっかり元に戻って私たちは仲良く寮棟に戻った。

それから、子どもたちの「また来てね」の声に罪悪感を感じながらも、私はいつも通りに過ごした。

赤ちゃんのことも気になるし、あの子たちも気になるけど、私には私を心配する人たちのほうが大切でその信頼を同じ失敗で裏切れない。

今日はギルドの依頼がなかったら調べ物でもしよう、と、図書館内を歩いていると「マシロー」とか「マシロちゃん」という声に足を止めた。

受付に居たカーティスさんと目が合うと、カーティスさんは後ろだと指差してくれる。

その指先を目で追うと一般に開放している階層で見慣れた姿を見た。

「お前が来ないから来てやったんだ」

「違うでしょーっ！ お勉強しに来たの！」

広い机を一つ占領しているその一角に足を運ぶと、口々にそんな台詞が飛び交う。

年中さんから上だけが来ているのだろう。教会内より少し人数が減っている。

「時々ね、こうやって園の外でもお勉強したりするんだよ」

にこにこと説明してくれる女の子に頷いて、こんな小さな子達の勉強くらいなら見られるだろうと私も同席することにした。

「ここならマリル教会じゃないし、誰も気にしなくて良いはずだから。」

「……マシロさん。何やってるんですか？」

「見ての通り、子どもたちに勉強を教えてるんだけど？」

なるべく静かにさせていたものの、他よりはざわついてしまっているだろう一角に私を見つけて、きつと一言物申しに来たと思われるシゼに私は簡潔に答えた。

シゼは一年ちよつとでずるずる背が伸びた。

小さくて可愛かったのに。男の子の一年の成長は怖い。

あつという間に追い抜かれて正直面白くない。

私の答えに驚いたのか「まさか、マシロさんが誰かに物を教えるようになるとは……」とか失礼なことを口にはしている。

「シゼも暇だつたら見てあげたら？」

「……彼らは『陽だまりの園』の子どもたちですか？」

陽だまりの園？ 首を傾げた私に、隣に居た女の子が「そうだよ」と頷いた。シゼは刹那複雑な表情を見せたが、直ぐにいつもの雰囲気に戻った。

「僕は誰かに教える器用なんて持ってませんから」

きっぱりそういったシゼを他に引き止める理由なんてない。だから「そっか」と頷いた。そんな私にシゼは何かいいたそうにしたが、結局は口を開くことなく踵を返す。

「待てよ」

がたり、と席を立った一番年長ではないかと思っていた子、確か名前はロスタとかいったと思う。

彼がシゼを呼び止めたが、シゼは聞こえなかったというように足を止めることはしなかった。ロスタは、ちつと舌打ちして乱暴に椅子に戻った。

「……………」

私は何かいい知れない不安に眉を寄せる。

シゼ……ロスタの声に気が付いていたと思うけど……シゼは、つつけんどんだし愛想もないけど掛けられる声を無視したりするような子じゃない。

例えその声に敵意が籠っていたとしても、だ。

小さな声で隣に座っている子に、二人は知り合いかと聞いたけど「知らない」と可愛らしく首を振られただけだ。気になって、シゼを追い掛けたくて立ち上がると、丁度、レ二さんに声を掛けられた。

みんなの邪魔になつてはいけないからと、子どもたちから少し離れたところで立ち話に興じる。

「まさか、ここで会えるとは思いませんでした」

図書館にはよく来るんですか？ と続けた私に、レ二さんはいっこり微笑んで「そうですね」と頷く。

「ここには一般に開放されている書物だけでも、沢山ありますからね。あの子達には良い教材ですよ」

そういつてわいわいと本のページを捲っている子どもたちを見詰めるレニさんは、とても慈愛に満ちている。

マリル教会を、エミルたちは決して快く思っている風ではない理由は、一体どこにあるんだろう？

「あの赤ちゃん、大丈夫ですか？」

「ええ、元気ですよ。今日は流石にお留守番組ですけどね？」

くすくすと笑ったレニさんに釣られて私も笑う。

「そういえば、マシロさんのご出身はどちらですか？」

不意に問い掛けられ答えに詰まりそうになる。

「どうしてそんなことを聞くんですか？」

「貴方のことだから気になったんです。貴方のことをもっと知りたいと思ひまして」

私にはレニさんの笑顔の下の心は読めない。

穏やかな笑みを湛えたまま、そんな意味深な台詞を吐かれたら……

…大抵ぼやんつとなつてしまひそうだ。

現に私の顔も少し熱い。

「私たちは、もう長い間探しモノをしているんです。少しでも多くの情報が欲しいところなんですよ、少し行き詰つてしまひてね？」

「……私は無知ですから、その、有益なことなんて何も」

「己を無知と語るものは、必ずしもそうではないものですよ？ それに先に述べたように私は貴方に」

いいながらそつと伸びてくるレニさんの腕を避けられない。
触れられるのが怖い。

どうしようもなく瞳を彷徨わせ、くっ！ と、息を詰めるとレニさんの指先は私に触れることなく止まった。

「こんにちは、レニ司祭。彼女に何か問題でもありますか？」

「おや？ エミルさん、これは珍しい方にお会いしますね？」

伸ばされたレニさんの腕は、エミルに取られていた。私は、きゅつと自分の胸元を握り締めてほつと撫で下ろす。

「そうですね。お久しぶりです……」

エミルは少し緊張しているのか、雰囲気がいっつもより硬い。

でもエミルはエミルで、レニさんが腕を降ろすのと同時に掴んでいた手を放して、ちらと私を見ると小さく頷いた。行ったほうが良いということだろう。

私はレニさんへの挨拶もそこそこに、その場を離れた。

第四話：マリル教会と陽だまりの園

まだ少し胸がざわついている。

恐怖とか不安とか：そういうのじゃなくて、一種の予感だ。よく分からないが彼に触れられるのは危険な気がした。

なんだか酷い疲労感に襲われて、私は部屋で休もうと自室へと足を進めていた。その途中、すっかり木々は寂しくなってしまうている中庭で、光合成をしているシゼを見つけた。

「シーゼ！ さっきは引き止めてごめんね？」

呆けていたシゼに、ひょっこりと顔を覗かせたのに、シゼは眉一つ動かすことなく「いえ」と締めくくる。

相変わらず可愛くないな！。そう思いつつも、隣失礼。と、本人の許可もなく私はシゼの隣に腰を降ろした。

「……何かいつてましたか？」

「誰が？ 何？」

「ロスタです」

やっぱりロスタが引き止めたのは聞こえてたんだ。

「何もいつてないよ。シゼはロスタと知り合いなの？ 友達？」

最初にシゼと同じくらいだろうな、と思ったからきつと年も近いのだろう。私の何気ない質問にシゼは逡巡し「友達」と呟いたあと、苦い笑みを零して首を振った。

「貴方は、彼らがマリル教会の者だと知ってますか？」

「う、うん。知ってるよ」

頷いた私にシゼは目を丸くした。

そのあとあからさまに怪訝な表情に戻って「貴方みたいな人、僕は嫌いです」と失礼なことを口にする。まあ、シゼには良くいわれるから今更だ。

「貴方のことだから、また何も前知識なく歩み寄ったのでしょーけど、他人とのそういう係わり方は危険です。誰も教えてくれなかったとか、甘えないで下さい。ここは図書館です。世界の全てが記録されている場所です。探せばマリル教会についても、陽だまりの園についても、多少なりの知識を得ることは可能なんです」

「ご尤もです。」

私はぐうの音も出ない。

思わず黙した私をシゼは冷ややかな瞳で見詰めて、細く長く呆れたような息を吐く。

「マリル教会は、白い月を信仰し『美しいとき』を広める活動を主とする非武力団体です。青い月を信仰している蒼月教団には、そのご神体として種屋の店主が代々宛がわれています。しかし、マリル教会にはご神体と呼べるほど、具体的な何かはこれまで一度も存在したことはありません。彼らは聖女の降臨。生誕を信じ世界の奇跡を集めています」

私が自分で学ぶのを待つより、自分で説明したほうが早いと思ったのか、そうしたほうがエミルたちのためにもなると思ったのか——多分後者だけど——シゼは丁寧に説明を始めてくれた。

「陽だまりの園は、そんな教会が寄付により維持している孤児院です。今は昔ほどの数は居ないといいますが、それでも捨てられていく子どもたちはゼロではない。力のない子どもは自分の力で生きていくことも出来ず、出会う大人に翻弄されます。そんな子どもたちを保護し、十五歳まで面倒を見てくれます。日々の糧を与え、安心して眠る場所を提供し、最低限以上の教育を施してくれます。僕も、九つまで園に居ました」

真面目に話を聞いていたら、最後にそんなことを付け加えるので、私は必要以上に驚いた。え、あ……と、動揺のあまり次の言葉が出てこない私に、シゼは僅かに笑みを零した。

「僕は五つで母に捨てられました。でもまあ、僕はましですよ？ その辺りに置き去りにされたわけではなく、教会の前までは一緒にしたから……」

なんと声を掛けて良いか分からずにいると、シゼは「そんなことは良いんです」と勝手に切り上げて話を続ける。

「その教育を一手に引き受けているのが、レニ司祭です。レニ司祭のお父上が今の司教様ですが、実際にマリル教会を仕切っているのはレニ司祭だと思っても良いでしょう」

ふんふんとシゼの説明に頷き、私は質問するために「はい！」と挙手する。シゼはその様子に呆れたような顔をしつつ「どうぞ」と促してくれた。

ノリは悪いが、切り捨てられないだけマシなのだろうか？ ま、良いや。

「ねえ、シゼ。聖女なんてものに祀り上げられたらどうなるの？」

「どう、とは？」

「私にとってそれは不利益なのかな？ 駄目なことなの？ だから、エミルたちやブラックは私をマリル教会から引き離してたんだよね？」

重ねた私の質問を笑われるんじゃないかと思ったら、シゼは思っていたよりもずっと真摯な態度で考えてくれた。

「ややあつて「不利益かどうかは……」と、口を開いたシゼに、うんうんと頷く。

「貴方の望みによると思います」

「私の、望み？」

「種屋店主や、エミル様たちは、貴方が自由であることが、貴方自身の望みであると思っています。しかし、もしこの根本的な部分に擦れ違いがあつたとするなら、貴方がマリル教会と関係を持つ持たないにも変化があると思います」

「どうですか？ と話を振られて、私は唖る。

「もちろん、自由で居たいというのは間違っていない。でも少しくらいなら、私に出来ることがあるならやっても良いとも思う。」

「恐らく」

黙った私にシゼは長く息を吐いて、話を続けてくれる。

「貴方が聖女としてマリル教会に上がったら、今の生活は出来ないと思つたほうが良いでしょう。彼らは貴方を離しはしない。監禁までとはいかなくても、軟禁状態くらいは確実ですね」

「……そんなこと」

「あります。彼らはそれほどに目に見える奇跡を。白い月の化身の

存在を欲しています。マリル教会は非武力団体ですが、その存在は思いの他、強い影響力を持っています。その要になっているのは『陽だまりの園』です」

シゼの真意は分からない。

自分を捨てた親のことをどう思っているのか、そのあと過ごしたはずの陽だまりの園のことをどう思っているのか……私には全く読み取ることが出来ない。

ただ、淡々と説明してくれるシゼは切ない。

「陽だまりの園では、とても優秀な人材が輩出され各要の役職に食い込んでいます。彼らにとって司教や司祭は絶対です」
「シゼ」

思わずシゼの話を切った。シゼは「はい？」と不思議そうに私を見た。

「あ、あの。うん、ありがとう。良く、分かったよ」

「マシロさん？」

「あの、ごめん。私が知らないばかりに、シゼにこんな話させて、何か、ごめん」

余りにも淡々と話を進めるシゼに無性に申し訳ない気分になった。そんな私にシゼは益々首を傾げる。

「貴方が何を思ってそんな顔をするのか、僕には分かりかねますが、僕は別に教会に置き去りにした母を恨んではいませんし、暫らく生活していた陽だまりの園を悪くも思っていないません」

「え、そうなの？」

あっさりとしたシゼの見解に、私は物凄く間の抜けた声を上げたと思う。シゼはその様子に深く嘆息する。気を使ったのに、失礼な奴だ。

「僕は唯、この世界の住人なら大抵は知っている話を貴方にしたままです。この程度の話、誰に聞いてもしてくれます。まあ、多少なり僕のほうが詳しいかも知れませんが」

シゼは最初に会ったときから、可愛くないお子様だったけど、それは年月を重ねて可愛くない少年になってしまった。

寄った眉が戻らない私にシゼは笑った。

シゼが、あの、シゼが笑った。

すつと姿勢の良い気品ある花が開くように綺麗に……。

「うちの母もマシロさんくらい図太くて、雑草みたいだったら良かったのかも知れないですね」

前言撤回。

褒めてない！ 褒めてないよねっ！ いうに事欠いて人のことを雑草扱いするとはっ！

ひくつと頬を引きつらせた私にシゼは「すみません」と詫びたけど、悪いとは思っていない証拠にまだ肩を揺らしている。

「これはエミル様もご存じないかも知れないのですけど……僕の父は王子です」

「え、ええっ?!」

「母は宿屋で働いていて、そこで出会ったそうです。でも事情があったらしくて……まあ、今思えば母を王宮に踏み入らせることの出来ない、いい訳でしかありませんけど……彼は城に戻り、母は仕事

を続けた。そのあと、生まれた僕を王宮へと上がらせようとしてくれたんですけど、門前払い。僕に王家の素養が僅かでもあれば良かったのですが、僕には、この薬師の素養しかありませんから……認めるわけないんです。母は傷悴しきって、僕を教会に残し王都を去りました。だから今、彼女が生きているかそうでないのかも僕は知らない」

ふっと空を仰いだシゼの横顔が余りに綺麗で、私はまた泣きそうになった。

元の世界の十四、五歳なんてまだまだ親の庇護の下で馬鹿をやっている年齢なのに……シゼは自分の足でしっかりと立っている。

「本当は……本当は、種屋店主に尋ねれば母の生死なんて直ぐに分かるんです」

上げていた顔を不意に下ろして、くしゃりと前髪を掻き混ぜ片手で顔を覆ったシゼは続ける。

「種屋は、全ての種の管理をしなくてはならないルール。つまり、全ての死を知っている唯一の人。僕は、それすらはつきりさせる勇氣を持ってないんです」

腕の間から、ちらりと見え隠れする口元が苦しげに引き上げられ、無理に笑おうとしているのが分かる。私は思わず手を伸ばし、シゼの頭をわしわしと撫でた。シゼの肩がびくりと強張ったが遠慮なく続けると、途中でぱしりと弾かれた。

「ちょ！ もう！ やめてくださいっ！」

全く、子どもじゃないんだから。とか、ぶつぶついながら乱れ

た髪を整えているシゼに、何となく優しい笑みが零れる。

シゼは、エミルがいうように本当に良い子なんだろうなと納得してしまった。

「まあ、そんなわけで貴方のことをとやかくいえる立場じゃないんですよ。本当は！ 僕自身が事実を知ることから逃げているんだから、貴方が何を知らなくても、知ろうとしていなくても……」

それでもまだ微笑んでしまう私に居心地悪くしたのか、シゼは子どもらしくなく咳払いなんかして「話し過ぎました」と不機嫌そうに口にする。

「でも話してくれて有難う」

「……マシロさんって、変な人ですよね？」

折角、素直にお礼をいってやったのに、虚を吐かれたように、きよとつとしたあとの言葉がそれ？ 思わず、引きつった頬を撫でながら

「シゼって可愛くないよね？」

付け加えると、思わずお互いに笑いが零れた。

第五話：少年参加のジंकス

「あはは、仲良くサボってたんですねー？ シゼー」

一体どこから生えてきたのか、ふつと現れたラウ先生に私たちは揃って驚きの声を上げた。

ラウ先生は、胸の前でゆるりと腕を組んで、いつもと同じように微笑んでいるけど、この人もやはり腹の底が見えない。

「戻ってこないから、自分で取りに行こうかと思ったんですけどー、仲良さそうなのを見つけたのでその気が失せました。シゼはこの資料を集めてきてください。今日中です」

につこりと笑みを深めて、ラウ先生はぴんつと指を弾くと、シゼの手の中に一枚の紙切れを出現させた。半分に折られたそれを広げると、びつちり、文字が並んでいる。

シゼはその文字を上からぶつぶつと読み上げつつ立ち上がると「何とかします」と頷いた。

前見て歩かないと危ないよ、と声を掛けると、ああと顔だけで振り返り

「今日の夕食は一緒にしますから、エミル様にもそうお伝えください」

と片手を振って告げ、お約束通り「あ、痛てっ」と目の前の木にぶつかってから、シゼは立ち去っていった。

その後姿が見えなくなってから、私も当初の予定通り部屋で休もうかと思ったら、今度はシゼの座っていたところに腰を降ろしたラウ先生に引き止められた。

「もう少し詳しくお話しましょうか？」

に「っこりと告げられた台詞に私は一瞬なんのことか分からなくて首を傾げた。

「シゼも、きつと知らないでしょう。でも、賢い子だから肌で感じているかも知れませんが、シゼの母親は娼婦だったんです。あの手の騒動は、王宮では少ないのですけどね……王位継承順位第一位の王子だったので、かなり揉めましたね。あのときの、第二タリ様の顔といったら……鬼の形相という言葉をそのまま体現した感じてしたよ。納めるのも大変で……あまり大事にならなかったのは、幸か不幸か、その子自身に王家の素養が備わっていなかったからですけどね。それにしても、シゼの母親は酷い罵られようでした」

本当にお気の毒です。と、重ねた割りにラウ先生はそう思っているようにも見えなかった。

「でも、素養を見るのは七つじゃ」

「それは形式的なものです。まあ、子どもの素養は不安定な場合もないわけではありませんが、持って生まれたものは対象がいくつであつてもあまり変わりませんよ」

「あー、居た居た！ マシロちゃんっ！」

真面目な話？ を、していたのに上から降ってきた声に遮られる。声のしたほうへ顔を上げると、二階の渡り廊下からアルファが身を乗り出してぶんぶんっと手を振っていた。今行くからちよつと待ってて、と続けて私が頷くと、

「よ……っ」

—— ……すと、ん。

降ってきた。降ってきた、降ってきたあ？！

図書館はどの棟も天井が高い造りになっているから、二階とはいえ地上から五メートル以上はあると思う。それなのにアルファは、階段の段差を飛び越えるのと同じくらい軽く、両手を腰ほどまでの柵に掛けて、床をとんと蹴るとそのままひよいと降りてきた。

「アルファ、きちんと階段を使わないとマシロが吃驚してますよ？」
「あ、あれ？ ラウさん居たの？」

「……居たの？ とは随分ですね、居ましたよー、ずーっと。折角マシロを独占していたのに邪魔をするんですね」

私は、何度か二階渡り廊下部分とアルファを交互に見て「大丈夫なの？」と今更声を出す。タイミングを逃した大丈夫の台詞に、アルファはぷつと吹き出したあと「ヘーキです」とにこりと無邪気な笑みを見せる。

天使みたいな顔して、背中に羽でも生えてるんじゃないの。

「でも、危ないといけないから駄目だよ。それに落下地点に人が居たら大惨事だし」

ぶつぶつとお説教してから「何か用事？」と訪ねると、アルファはちらりとラウ先生を見て肩を竦める。

「取り込み中なら良いです」

「構いませんよ。もう腰を折られたのでまた次の機会にでも……」

ラウ先生がいい終わる前に、アルファは「ですよねっ！」と私の腕を取って引つ張った。

その強さに、よろよろと立ち上がり足が釣られる。去り際ラウ先生を振り返ると呆れたように笑いながら手を振ってくれていたので軽く頭を下げた。

「あつはー。もうね、マシロちゃんが初級階位から居なくなっから大変なんですよ。絶対、あのちびっ子、僕を目の敵にしています」

どんつと作業台の上に懐かしくも感じる大きな瓶を置きアルファは愚痴った。

「ちょーつと居眠りしてただけで、コレですよ。一人でやるには多いし、面倒だからすっぱかそうかなと思ってたんですけど、偶然会ったシゼにマシロちゃんが暇だつて聞いたから探してたんだ」

「ふー……ん。これは腎臓だよねえ……乾物になつてるけど。これどうするの？」

「やだなあ、乾燥させたら次は粉にしなきゃじゃないですかー」

あははと笑いながら、私に乳鉢と棒をさつと手渡す。

手伝えってことだね。

私は、はあと嘆息して椅子に座ると作業を開始することにする。どうせこねたつて最後には手伝うことになるのは目に見えてる。

流石マシロちゃん！話が早い。とか何とか持ち上げながらアルファは紙や天秤を用意している。

ていうか役割分担おかしいだろ。普通私が量るほうに回らない？
…… いても無駄だよ。受け取った時点で負けだ。

私はある種の負けを認めて、密封されているガラス瓶の蓋に手を掛ける。あ、あれ？ こんなに硬かったかな？

「開けますよ」

うぬぬーっと頑張っていると、後ろからアルファの手が伸びきて、私の手の上から手を重ねるとぐいっと力を込める。
びくともしてくれなかった蓋はあっさり開いた。

「三十と、五十とを二十ずつと、十五を十用意しないといけないんです。頑張ってくださいね」

…… いや、頑張るのはアルファだろ？

再びがつくりと肩を落として、作業に取り掛かる。
それにしてもさつきはちよつと吃驚した。アルファは小さいってイメージが強かったけど、手も身体も私よりずっと大きいし力もある。

そりゃそうだよ。良く考えなくてもアルファは騎士だ。体格は良くて当たり前で、そのうちムキムキマッチョとかになるのかな……。いやあ、アルファはそのままが良いな…… 天使の容貌でマッチョって…… 有り得ない。

「…… あの、マシロちゃん。さつきから百面相してますけど…… そんな楽しい作業ですか？」

「いや、別に」

顔を上げたらアルファと目が合っと思って思わず噴出してしまった。突然笑われて不満そうな顔をするアルファに「ごめんごめんと謝って話題を変える。」

「そういえばね、今日はシゼが夕食一緒にするっていったよ」

こつこつと乳鉢の中身を粉々にしながら振った話題に、アルファはぴたりと手を止めた。どうかしたのか？ と、手元を見ていた顔を上げるとアルファは何か考え事をしているようだ。

「僕、別に怒られるようなことに心当たりないなあ……カナイさんかなあ？」

「どういうこと？」

「え、あ、ああ。シゼがね一緒にするって大抵エミルさんに怒られるときなんですよ。でも、僕エミルさんのスイッチ押すようなことしてないしなあ……」

マシロちゃんは、もちろん心当たりないですよ。と振られて、別れ際のことを思い出す。あれ……かなあ？

「私、かも、知れない」

恐る恐る口にすると、なんだか確信めいてくるようで怖い。けど、でも……いい訳とか考えといたほうが良いのかな？ でもエミルからは逃げ切れるとは思えない。

私の血の気が引いたのを察したのか、アルファは「ま、まあ！」とワザとらしく声を上げる。

「偶然！ 偶然、一緒にしたくなつたのかも知れなくてすし！ べ、別にエミルさんが怒ってるかどうかなんて、統計的に高確率なだけ

で」

「アルファ……全然フォローになってない」

はあと二人の溜息が重なった。

第六話：張り詰めたお食事会

その後の夕食は、予想通り微妙な空気に包まれた。

シセイコールの図式はカナイも承知のようで、心当たりのある私たちは時折目を合わせて切り出すタイミングを計っているのだけど、これがまた難しい。

正直、食事の前に捕まえて事情を説明しようと思ったのに、案の定アルファの手伝いで時間いっぱいまで取られてしまった。それでも、二人掛かりでようやく仕上がったのだから、途中で抜けるなんて考える余裕はなかった。

なんとか食事を終えても、食事がどこに入ったのか分からない。全く食べた気がしない。

普通に会話していてもどこかぎこちなかったし。主に私とカナイでも、様子を窺っても別にエミルが怒ってるようには見えないんだけど……普通だよな？

—— ……でもっ我慢の限界！

「エミルっ！」

声が裏返った。

その勢いにシゼは、飲んでいたお茶が入ってはいけないうちに人ったらしく、げげほと咽て涙目になった。

ごめん。

エミルは、飲んでいたカップを静かにテーブルに戻して「どうし

たの?」と可愛らしく首を傾げてくれる。

「あの、えっと、その。今日はごめんね。私の代わりにレニさんの話し相手してくれて」

おずおずと口にした私に、エミルは「ああ、そんなこと」というものに微笑んでくれる。

「気にしなくて良いよ。彼もマシロが珍しかっただけみたいだから」
「え」

「図書館に女の子は珍しいでしょ。ああ、でも、マシロ私服だったよね? レニ司祭と面識があったのかな?」

—— …… ギクリ

と、音がなったような気がする。

思わず言葉に詰まった私に、エミルは穏やかに話を続けてくれるけど、その穏やかさが逆に怖かった。

「レニ司祭はどちらの司祭様が、マシロには教えてなかったよね?」

につこりと続けたエミルに答えたのは私ではなくてシゼだった。

「僕が教えました。マリル教会についても知らせてあります」
「そうなの?」

はい。と、頷いたシゼを確認してからエミルは私を見た。私もちゃんと頷く。もしかして、シゼ、助け舟を出してくれるために今日はここに居てくれるのかな?

「そっか、それなら良かった。僕はてっきりマシロは何も知らずに、マリル教会に遊びに行ったのかと思ったよ」

「……っ」

「ごめんなさいいっ！ これ以上無理ですっ。」

明らかに全部お見通し、というようなエミルの笑顔に耐えかねて、私はこの間のことを話した。

エミルは一通りの説明を聞いたあと「そっか……」と少し思案気に零したあと首を傾げる。

「その一度だけなんだよね？ でも、どうして？ その様子だとマシロは教会に通いそうな勢いだけど？」

「え？ そんなことないよ。そうしようと思ったことは思ったけど、でも、私にとってはエミルたちに心配を掛けるほうが嫌だったから……」

これも本当のことだ。

「ごによごによと口にした私にエミルは「ありがとう」といつものやりわりとした笑顔に戻ってくれた。ほっと胸を撫で下ろす。」

「なんだか、マシロがびくびくしてるのが楽しくて、何もいわなかったんだけどね。今日、マシロが陽だまりの園の子達と鉢合わせしちゃったのは僕のミスなんだ。いつもなら、こういう日は寮側からマシロには出入りしてもらおうようにしてたんだけど……ちょっと僕もラウ博士に掴っていてね。間に合わなかった。だから責任は僕にもあるんだよ」

いわれてみれば、レニさんは今日始めて来たわけじゃないようだ

ったし。これまで出会わなかったのは偶然かと思ってたけど、必然だったんだ。

「そういえば、その日ってカナイさんがじゃんけんに負けてマシロちゃん迎えに行った日ですね？ 何も知らなかったんですか？」

私に対しての疑念が晴れたところで、アルファはにやにやとその矛先がカナイに向くように仕向けた。明らかにいつものカナイいじめだ。カナイは、動揺しつつもフォローしかけた私を目で制して「ああ、知ってた」とあっさり認めた。

エミルとカナイの間の空気が二、三度下がったところでシゼが「そろそろ失礼します」と席を立ちそれに並ぶようにアルファが「マシロちゃん、行こう」と私の手を取った。

え、え、えええ……行つて良いの？ 明らかに曇天だよ。ここだけ雷雨警報出てるよ？

かなり後ろ髪引かれたが、アルファに容赦なく早く早くと腕……を通り越して身体ごと引きずられた。エミルはわたわたする私に、いつものように手を振ってくれる。行けってこと、かな……？

「でも、吃驚した。シゼがフォローするなんて」

先に立ったシゼに並んで歩きながらそういったアルファにシゼは「別に」とそっけなく答える。

「エミル様の手間を省いただけです。ですが、レニ司祭と面識があ

るなら気をつけたほうが良い。彼は人心を掌握するのが得意です。善悪の判断はその人の基準だと思えますけど、マシロさんみたいにばーっと流されてるような人は色々と危険です」

馬鹿にされてる？ それとも心配されてるのかな？ シゼに掛けられた言葉にどう答えて良いのか迷って、結局気をつけますと頷くことしか出来なかった。

「では僕は研究室の仕事が残ってますから……」
「え？ 何か忙しいなら手伝おうか？」

もう月も昇っているというのに、これから仕事だなんて。反射的に掛けた言葉に、シゼは眉を寄せて嘆息し「結構です」と首を振るとさっさと研究棟へ繋がる廊下を歩いていった。

その後姿を寂しく見送っているとアルファが軽く笑って、僕らも早く戻りましょう。と、背を押した。

「シゼのことだったら、気にしないで良いと思いますよ？ 大体、僕らにラウさんの研究内容やシゼの仕事内容が理解できるわけないじゃないですか」

アルファの軽口に、うつと息を詰める。いわれてみれば確かにそうなんだけど、でも雑用とかなら私でも出来たと思うし、何より子どもがお手伝いをする時間じゃないと思う。

「それに、シゼのは仕事です。シゼはあれで正当な対価を受け取っているんですから、シゼがやらないと意味がない」

「え。お手伝いとかそんなじゃないの？」

「うつん。違いますよ。シゼあの通り頑固だし、意固地だし。本当は入学するときにエミルさんが彼の学費やその他生活費は見るって

話だったんですよ。もちろん、卒業後は王宮に入ることと条件でね？　なのに、そのときの自分にそれだけの価値があるとは思えないからって駄々こねて、最終的にラウさんが自分のところで使って対価を支払い学費云々に補填することで手を打ったんです」

何かどこかで聞いたことあるような話だな。首を捻った私にアルファは笑って「マシロちゃんみたいですよね」と付け加える。

そか、私か……。

「最初は雑用以下だったし、すごく大変そうでしたよ？　あの通り人使い荒いですからね。ラウさんって……でも、今は殆どのことをやらせて貰ってると思います。それにラウさんは人……というよりは素養を見る目は確かです」

あ、着いちゃいましたね。というアルファの声で部屋の前まで来ていることに気がついた。

なんだかみんなの話を聞いてると、やっぱり私だけがぼーっとしてるといわれても仕方ないような気がしてきてちょっと凹む。はあ、と嘆息して部屋の鍵を開けていると、アルファにこっち向いてと声を掛けられ振り返った。

—— …… こっん。

ぐりぐりぐり……。

「何、やってんの？」

ぬつと伸びてきたアルファの人差し指と中指が、私の眉間を円を描くように揉んでいる。

「マシロちゃん、今日ここに皺寄りっ放しですよ」
「うっ」

ぱあっと頬が熱持つのと同時にアルファは手を離して、いつもとは全く違う気難しそうな表情をワザと作って話し始めた。

「シゼのいったこと、気にしなくて良いと思います。シゼは硬いから。得意分野に関してはそうじゃないけど、他のことにはまだまだガキで、だから、融通が利かないんです。大体シゼが周知のことだと思っっている事柄って一般的じゃないことが多いし」

そして、きょとんと聞いている私に、にこりと表情を切り替えて続ける。

「マシロちゃんはね、聞けば良いんです。エミルさんやカナイさんは独自の情報網を持ってますし、僕だってマシロちゃんの知らないこと知ってるかもしれない、あんまりいたくないけどブラックはこの世界の理に詳しい。んー、僕難しいことは分からないけど、マシロちゃんは自分で知識を得るよりそっちのほうに向いてると思うし……」

ね？ と可愛らしく微笑まれて、なんだか優しい気持ちになる。

アルファなりに私を気遣ってくれてることが素直に嬉しい。

「ありがとう」

私の謝辞に、アルファはにこにことお日様みたいに微笑んでくれる。その笑顔に元気を貰って私たちは別れた。

第七話：慰めて甘えさせて優しくして

ぱたんつと扉を閉めて深く嘆息する。

—— …… 今日はなんか凄く、疲れた。

部屋に明かりを灯して一息吐く。

この世界の明かりは柔らかい。電気はないから、その代わりに魔法石が使われている。今、一般的に流通しているのは人工的な魔法石ばかりだ。

天然のものは私のせいで、価格が高騰しているし、希少価値が高く手が届かない。

私は、左右で括っていた髪を解き手櫛で梳きながら、ふとベッドに目を留める。

黒い塊…… というか黒猫だ。

人のベッドの上で丸くなってうつらうつらと舟を漕いでいる。

「ブラック」

そつと歩み寄って手を伸ばしやわやわと頭を撫でると耳が左右に倒れる。

—— …… 猫だねえ。

こうしてると。癒される。

床に膝を着いてベッドに項垂れ掛かり黒猫を愛でる。寛いでいるその姿を見ていると、なんだか私まで眠くなってきた。

「なんだかお疲れですね？」

「ごしつと目を擦った私に合わせるように掛かった声。

折角、アニマルセラピー中だったのに、その姿は可愛いとは程遠い美形男子だ。惜しいことに猫耳と尻尾は残ってるけど。

「お疲れです。折角癒されてたんだから、今日は猫で居てよ」

「嫌です。四足だとマシロを抱き締められないじゃないですか」

ベッドに腰掛けたブラックは、そのまま私を抱き上げると膝に乗せて、ぎゅうつと抱き締める。

まあ、これはこれで嫌いじゃないけどね。

それにしても、ブラックが休日前以外に来てるなんて、もしかしてマリル教会のことがバレたのかな。ここでもまたお説教かなあ？

「マシロが義理立てするなら、私がギルド登録から抹消してきてあげましょうか？」

「いや、ギルド依頼は関係ないよ。今日は行つてないし」

……エミルとブラックの間で情報交換が行われるはずなかった。水と油だし、余ほどのことでもないと仲良くなると有り得ない。つまり、ブラックはまだ知らないで居てくれるんだよね。

—— ……良かった。

ほんの少しそのことにほっとして、ブラックの背に腕を回すときゆつと力を込めた。

「会いたかった」

ぼろつと零してしまった言葉にブラックが黙る。

普通なら自分もだとか、いつてくれても良いのに……と不満に思
い顔を上げるとブラックが真っ赤になって私から視線を逸らした。

「な、何。もしかして照れてるの？」

今更なんでそのくらいのこと……ブラックなんてもっと恥ずか
しいことをぺらぺら並べ立てるのに。ブラックは私の指摘に、こほ
んつと小さく咳払いする。

「マシロそんなこと滅多に口にしないじゃないですか」

「あー……まあ、あんたほどはね」

ひしつと見詰めてくるブラックの視線から逃げるのは私の番だ。

「飢えてるんです。もっと口にしてください」

「う、うーん。ぼちぼちね……」

「では、態度で示してください」

ちゅつと瞼に口付けが降って来て頬に鼻先、そして唇に注がれる。
今日のブラックの口付けは優しく甘い。お疲れの私を慈しみ慰
めてくれているのだろう。

つい、脳が熱を持ったようにぼわんつとしてきて口付けに応えそ
うになり、はたつと我に返る。

「ストロップ。寮では駄目だっていつてるでしょー！」

「大丈夫ですよ、ここは防音効果大にしますから」

そついう問題じゃないっ！ モラルの問題でしょ！

「では屋敷に戻りましょう？ 明日送りますから。今を逃したらまた数日会えないんですよ。寂しいです。マシロを抱きたいです」

「……………っ！ そ、いう、恥ずかしいこというなっついていてるでしよっ！」

反射的にぐうパンチが出てしまった。

痛いです。と、眉を寄せつつも避けたりはしない。下からだったから顎が少し赤くなってる。でもまあ直ぐ消える程度だし良いや。私は特に気にするでもなく、ひょいとブラックの膝から降りた。

「とりあえず、お風呂入るから」

じゃあ、私も…………と腰を上げたブラックを睨みつける。静々と座り直したのを見届けてから念を押すように口を開く。

「ここは家と違って狭いんだから二人なんて無理！ ……あ、いや、家なら良いとかそついうわけじゃないよ。うん。違うけどね？ ……て、ええっ?!」

いい訳染みた台詞を続けた私の視界が真っ暗になった。

ブラックに呼吸困難に陥りそうなほど、ぎゅうっつと抱き締められて、ギブギブ！ とバシバシ背中を叩くが全く効果なし。

「種屋を家といってくれるんですね！ マシロの帰る場所なんですね？」

何を今更いつているのか…………ああ、もう、駄目、意識が…………今日

は疲れてるんだってば……。

ワザとらしく脱力した私にブラックは慌てて「大丈夫ですか？」と顔を覗き込んでくる。大丈夫だけど、ちょっとは加減して欲しい。瑣末なことで喜んでもらえるのは嬉しいけど、いまいちブラックのツボが分からない。

いろんなことを急に詰め込んだ所為か、次の日もあまり疲れが取れているような気がしなかった。

私は、日がな一日欠伸を噛み殺し、カナイにうつるからやめると何度も小突かれた。

あのあとエミルに怒られたかどうか聞いて見たけどカナイは首を振った。顔色が宜しくないのは気の所為だろうか？

午後の昼下がり私はなんとなく外出を自粛して、バイトは控えた。

エミルに午後の予定を聞かれてそのことを伝えるとエミルは丁度良かったと頷いて私たちは今、図書館管理の温室に居る。

外は少し肌寒さも感じるのに、ここは外気温は関係ないし、緑が目にも痛いくらいだ。

緑以外の毒々しい色も多々あるけどね。図書館の温室は物凄く広い。庭園と呼ばれても遜色ないくらい手入れも行き届いているし、歩く場所はちゃんとレンガで舗装してある。

温室管理をしているチルチル先生——私は心の中でミチル先生と呼んでいる。何となく——の許可証と採取予定の薬草名の一覧をエミルに渡されて受け取ると、エミルは換わりに入り口に積んであ

た籠を一つ抱えた。

「付き合わせてごめんね？」

「うつん、どうせ暇だったし、それに……」

お目当ての薬草の根元に座り込んで籠の中へと採取しながら口にした私にエミルは、何？ と、続きを待っていてくれる。

「迷惑掛けた、よね……と、思っ……」

怒ってる？ と続けた私にエミルは、くすくすと綺麗な笑みを零した。

ガラス越しに降り注いでくる陽光にキラキラ輝いているようだ。

「怒ってないよ」

私にとって予想通りともいえない答えだ。

「でも、普通なら……」

「マシロにとつての普通がどこにあるのか僕には分からないけど、仕方のないことだよ。偶発的な事象に捕らわれてても駄目だからね。出会ってしまったものは仕方ないし、出会ったことを悔やむよりもこれからの対応を考えるほうが先」

直ぐに話してくれなかったのはちょっと寂しかったかな。と、付け加えられ私は肩身が狭い気がした。私の気遣いなんて役に立たないんだ。そう思うと益々申し訳ない気持ちになり心が暗くなる。

そんな私の様子を察してか、エミルは「それにね」と話を続けてくれた。

「カナイに怒られたんじゃない？」

楽しそうにそう口にしたエミルに、私は虚をつかれつつもこくくと頷いた。エミルはやっぱりと微笑んで手元の葉を摘んでいく。

「それに、昨日シゼがマシロに話をしたといってたよね？ だから、きつと凄くきついことをいわれてるだろうなあと思ったんだよ」
「そ、んなこと、ないよ」

在るといつているようなものだ。私は自分の嘘の吐けなさ加減に泣きたくなる。

「マシロは嘘を吐いていたわけじゃない。話さなかったただけだよ。だからそんなに気に病まないで、もし、僕が聞いてたらきつとちゃんと答えてくれたと思う。あー、良い子良い子してあげたいけど、今は手が薬草臭いから止めとくよ。凄く残念」

ひらひらと振って見せてくれた綺麗な指先がうつすら緑に染まっている。

諦めてくれて有難う。

ふっと思わず笑ってしまった私と同じようにエミルも笑ってくれた。私には手袋を渡してくれたのに自分では使っていないんだ。

「……そういえば、私、昨日ね。ブラックにもその話をしたの。皆に話したし自分だけが知らなかったってなるとブラック拗ねちゃうだろうし」

ある程度摘んで、次の種類を確認する為にメモを開きながら話を続ける。

「ブラックも、エミルと同じようなことだったし、それに……きつとエミルも怒ってないってだから心配なら聞いてみれば良いって」

ふと昨夜のことを思い出した。

『—— ……やっぱり、思慮が足りないって怒る？』

『怒る？ 怒りませんよ。その程度のこと大したことではありませんし……もし、問題が生じればマリル教会ごと殲滅すれば良いだけですから』

……本気で実行しそうだった様子のブラックを思い出して私は眉を寄せる。

「何か分からない種類でもあった？」

「え？ ああ、うつん。違うよ。ブラックが怖いことだったの思出しちゃっただけ」

メモを折り畳んで、ポケットに仕舞うと次の種類を探す為に立ち上がる。「怖いこと？」と問い返ししながらエミルも続く。

「問題があればマリル教会ごと殲滅するって、さらりと口にするんだよ。冗談に聞こえないよ」

「……冗談じゃないと思うよ」
「え？」

ぽつと零したエミルを見上げて私は問い返した。エミルは、少し

だけ真面目な顔をして天井を仰いでから繰り返した。

「冗談じゃないと思う。闇猫ならそのくらいのこと、何も感じずに成し遂げるよ。マシロは今のブラックしか知らないから冗談にも聞こえるかも知れないけど、僕らからしたら彼が躊躇なく実行する姿のほうがしつくり来る」

ま、そのときは君の為に全力で止めるよ。と、微笑んでくれる。こちらにも冗談か本気が良く分からない。私の周りは危険人物がいっぱいだ。

第八話：負け犬の遠吠え

それから暫らくは大人しく過ごしていたものの。

―― ……物凄く退屈だ。

あまりに退屈だから、極力近づかなかった王宮に出掛ける、というアルファにくっ付いて出掛けることにした。アルファは少し驚いたようだったが、特に止める理由はないからと一緒してくれた。

「今日も騎士塔？」

「そうですよ。あまり気は進まないんですけど、一応騎士団に属しているんで使われるんですよ。他に暇してる人居ると思うんですけど」

ぶつぶつといいつつも、アルファは公務をサボらない。

図書館ではしよっちゅうサボっているのに、王宮でのエミルの評価を自分の行いで上下されるのは嫌なのだろう。

久しぶりに来た騎士塔は、相変わらず歴史を感じる重厚さだ。巨大な二つの塔から成っていて、塔に挟まれる形で訓練場がある。私たちが到着すると、既に訓練は始まっていたようで、抜き身の剣が風を切る独特の音がしていた。

直ぐに参加するアルファを見送って、私は前に来たときと同じように、隅っこに休憩の為か設けられているベンチに腰掛けてその様子を眺める。

アルファは大剣が一番得意だといっていたけれど、こういうとき

は皆と同じ刃を潰した片手剣を使っているようだ。

弾く音が少し鈍い。

アルファより大きな生徒が殆どなのに、アルファを見ていると体格差なんて全くないようだ。それよりもずっとアルファの一振りの重さのほう勝っているのは、ど素人の私にでも分かる。

一人、二人と音を上げ始め、生徒の大半が地面に膝をついたところで休憩の声が掛かった。

にこにこと歩み寄って来たアルファは——確かに暑くはないとはいえ——あれだけ動き回ったにも係わらず汗一つかいてない。

きょとんとその様子を見ていた私に、アルファは首を傾げたが、飲み物を持って来てくれた生徒から私の分も受け取って渡してくれる。

「あれ？ あつたかい」

「外は冷えるから、気を使っただんだと思うよ。ほら、僕は冷たいです」

ぴとりと私の頬に自分のカップを押し付けてくる。冷やりとした感触に私は肩を竦めた。

「マシロちゃんのも美味しそうだね？ 一口下さい」

一息に飲み干してしまう姿をぼんやり眺めていたが、アルファに両手で暖を取っていたカップをすつと抜かれ我に返る。アルファは私の了承など得ることもなく一口飲んで「あつっ！」と眉を寄せ「おいひいです」と再度勧めてくれた。

私はアルファの二の舞ならないように、ふーっふーっとな入りに

冷ましてから口をつける。

—— …… ココア…… かな？

少し豆の香りがするから、何か入ってるのかもしれない。

そのとき、はたと気がついた。もしかして…… アルファは、毒見のつもりで最初に飲んだのだろうか？ そのことを聞いてみようと思ったら、アルファは生徒の一人に声を掛けられていた。

「えー…… 面倒だなあ。用事があるなら自分から来るようにいつてくれない？」

「いえ、しかし王宮騎士の方もいらしているようですし…… その……」

駄々を捏ねるアルファに困りきっている生徒が、ちらりと私を見た。ココアも美味しかったし、私はアルファの袖を引き「行ってあげたら？」と進言する。アルファは、まだ面倒臭そうではあったが私がいうならと腰を上げてくれた。

「マシロちゃんはここで待ってて…… 一緒に連れて行ってあげたいんだけど、上の人たちって石頭ばかりだし部外者を嫌うんです。マシロちゃんが嫌な思いしたら可哀想だから」

本当に申し訳なさそうにそういつてくれるアルファに苦笑しつつ頷いた。それでも懸念があったのか、呼びに来てくれた人に案内されながらも何度か私のほうを振り返る。

私は勝手についてきたただだから、そんなに気にしなくて良いのに、いつの間にか凄いい心配性になってしまっているアルファを微笑ましく思う。そして、手持ち無沙汰にばらばらと自主的に訓練を再

開いた人たちを眺めていた。

「見ているだけじゃ退屈じゃないですか？」

突然掛けられた声に驚いて声の主を見上げると、はい。と、みんなが使っているのと同じ剣を膝の上に落とされた。

ずしりと重く冷たい感じが酷く恐ろしいような気がする。

「大丈夫です。刃は削ってありますから唯の玩具ですよ」

「で、でも、私、素人ですから」

「普通に騎士塔に入って来られるんですから、部外者ともいい切れないですよ。ちょっとですよ。軽く振ってみていけそうなら、オレの剣を少しだけ受けてみてくださいよ」

駄目だ、とか、無理だ、とか、繰り返したのに、この人は全然聞く気がないようで完全に無視され腕を引かれた。

多くの剣^{けん}拵で、ごつごつとした手の平が私の知っているどの人とも違って少し怖かったけど、仕方ない。

私は、諦めて剣の柄を握った。私がずぶの素人だと分かれば、それ以上を求めてくることもないだろう。そんな軽い気持ちもあった。

ずしりと重くて片手では到底支えられない。

「両手でしっかりと握って、腰を据えて構えるんです。足は片方少し前に出して」

かつんつと足を弾かれて、慌てて体勢を整える。

何とか真っ直ぐ立つことには成功したけど、こんなもの振り回すのは、私にはやっぱり無理。

私が立ったことに興味を示し始めた他の人たちの視線が集まるの

も感じる。早くやめてくれれば良いのに、と思うのに相手は全くそのつもりはないらしく

「それじゃ、そのまま構えててくださいね」

といい残し、私から間合いを取ると自分も軽く片手で剣を構え、驚いて動けない私の剣先に振り下ろした。

—— …… ガシンッ

とても重く厚い音がして、剣から伝わる振動が体中に響き痺れる。やめとけよー、とか、頑張れよー、とか、外野の声が聞こえてくる気がするが、私に剣を渡した相手はにこにここと気にする素振りもなく、何度も私に剣を振り下ろす。

「次は上……次、左……」

下ろす先は、伝えてくれるものの、一撃一撃が重くて腕も足もじんじんと悲鳴を上げている。

「も……無理」

—— …… カシャン……

震える腕では剣を支えられず取り落とし、それどころかまともに立っていられなくて、地面に膝をついた。剣を落としたというのに、耳慣れてしまった音がする。

驚いて顔を上げると、彼はそのまま剣を振り下ろす。

「……っ！」

私は声にならない悲鳴を上げ両目を堅く閉じる。

死なない程度でも痛そうだ。痛みに身構えたのに、その痛みは一向に襲ってくることはなく、代わりにガランっと私が剣を取り落としたときと同じような音がした。

そろそろと双眸を開くと隣には戻ってきてくれたアルファが立っていた。

対峙していた彼の握った剣は柄しか残っていない。
地面には、折れた刃しか落ちてない。

私が落とした剣は、アルファの手の中だ。刃のない剣で弾いた衝撃で相手の剣は折れた。

「どういうことかな？ 刃はなくても当たれば怪我をする。当たり所が悪ければ死ぬことだってある。知らなかったんだ？」

アルファは、きっと私と同じように、剣戟に痺れた腕に耐えかねて膝をついたのだろう相手に剣先を突きつけた。

「教えて、あげようか？」

怒ってる。本気で……。

辺りの空気が全て凍るような冷たい声。

ひゅっと思を呑んだ相手は反射的に「ごめんなさい」「すみません」を繰り返していたが、アルファには届かないようだ。

「君は知らないようだから。これは玩具の剣なんだよね？ それで

も僕が揮えば君の首くらい簡単に飛ぶよ。あの折れた剣みたいだね。やってみよう、使い方次第だと皆にも分かるように……」

「っ！ すみません、ほんの冗談で、軽い気持ちで」

「軽い気持ちで打ち込むんだ？ 素人相手に。しかも女の子相手にこんなもの握ったこともない相手に」

「手加減しました」

「ふーん。じゃあ、僕も手加減してあげる。半殺しくらいで済むんじゃない？ 手加減するから」

私もだけど誰一人間に入れなかったのに、一人が勇気を出してアルファに声を掛けた。

「その辺で、許してやってくれませんか？ 俺も一緒に謝ります。止めなかった俺らも悪いから」

アルファの殺気に立ち上がることにすら出来なくなっている人の隣に立ち頭を下げる。その様子にアルファは顔色一つ変えることなく「良いよ、君も一緒に」と加えた。

「君のいう通りだ。ここに居た全員連帯責任で良いよ。僕にとって君たちの命なんて微塵も惜しくない。死に急ぐなら死ねば良い。嫌なら、全力で掛かってくれば良い。力の差つてものを教えてあげる。大体そんなくだらないことよりも彼女に掠り傷一つでも付くほうが問題だ。彼女は君たちとは違う。身を持って知れ」

ひゅつとアルファが剣を振り上げ、慌てて止めようと声を張ろうとしたのとほぼ同時だ。

「それまでっ！！」

同時過ぎて自分が一瞬男声になったのかと錯覚した。

第九話：二つ目の落し物

低く地を這うような声だったが、とても良く通るものだった。

私たちを囲んでいた生徒が二手に割れて、その間を大きくてガタイの良い一見熊みtainな男の人が楽しそうに歩いてくる姿が見えた。

「だーれが、生徒の前で熱烈な愛を語ってるのかと思えば、アルファじゃないか」

「っ！ あ、愛？！」

一体どの辺が？！ 思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

アルファは、そこには特に突っ込む要素を見つけなかったのか、苦々しく歩み寄ってきた人を見上げて眉を寄せる。

「……ムスカ……」

「先生付けろー、アルファは相変わらず小っこいな。ちゃんと食ってんのか？ ほらほら他の奴らは王宮の外周走ってこーい。八周な」

大きな手を打ちながらそういったムスカさん？ に、生徒からブーイングが上がったが、ムスカさんは簡単に笑い飛ばして

「あと二週追加。夕刻までに戻って来れなかったら更に四周追加。死ぬほど走って来い」

と鬼のようなことを宣言して生徒を散らした。

「お嬢さん、へーきかい？」

ひよいと小荷物でも持ち上げるように私は地面から離され、立たされた。まだふら付いているとアルファが慌てて支えてくれる。

「こいつが何かやったのか？」

「オ、オレは唯、訓練を……」

熊にねずみが睨まれているような感じだ。敵うはずない。いい訳を仕掛けたが最後まで口にすることなく消えた。

「騎士道に反することか？」

「はい」

質問を重ねたムスカさんに、きつぱりと頷いたのはアルファだ。その返事に、ムスカさんは分かったと頷き、私と同じように彼を摘み上げて乱暴に立たせるとふら付いた背中をばしんと叩いた。その勢いで、彼は三メートルくらいはスライディングした。

あれは痛い。

「それじゃ、俺はアレを処断してくるから。悪いなお嬢さん。あんな奴ばかりでもないからまたおいで」

ひらひらーっと大きな手を振って、人懐っこい笑みを浮かべる。そして、途中で滑りこけたままの生徒を拾って塔の中へと消えていった。

一気に静かになる。

私とアルファは同時に嘆息し、重なった溜息に顔を見合わせて笑った。

「なんだか豪快な人だね」

「あの人はムスカ」シルレといって、僕に最初に就いた先生で、僕に騎士道を教え込んだ……というか叩き込んだ人です」

アルファがいい直した理由はなんとなく分かる。教えるというか身体に叩き込む感じの人なんだろうと想像付く。

「怪我ないですか？ おぶりましようか？ 歩けます？」

「え……、ああ。平気、だと思う。歩くのには支障はない」

よろりと一歩踏み出した。

地面を踏みしめると、じんとした鈍い痛みが走る。

重さと緊張とで身体中が、がちがちのぎっちぎちな気がする。腕は筋肉痛。アルファから隠すように手の平の痛みを親指で確認する。指の付け根が何箇所か硬くなってる。多分肉刺になりそうなんだろうなと思う。

「腕も手も冷やしたほうが良いかも知れません。でももう騎士塔には居たくないですよ？ 僕もこの校医にはマシロちゃんを診せるのは嫌なんです。もう少しだけ、我慢して貰えますか？」

校医への不信任は良く分からないけれど、そんな困った顔しなくてもこのくらい平気だ。放っておいても二、三日で治ってしまうくらいだと思う。

「平気だよ。帰ろう」

にこりと微笑んで見せたつもりだけど、アルファの表情は優れない。大丈夫だよ。と、重ねるとアルファは「そう、ですね」と曖昧に微笑んだ。

掴っておいて下さい。と、念を押され私がアルファの腕を取ると私に合わせて歩いてくれる。

「仕事なんですけどね」

「うん？」

「仕事なんです。好きでここに来てるわけじゃない。でも、僕のことを快く思っていない人たちも実はここには多くて……マシロちゃんに無理を強いた生徒はこの間僕が進位試験実技で落としたんです。恨まれてる」

「逆恨みだね。まあ、手にいっばい胼胝作ってたし自分の頑張りへの正当な評価だとは思えなかったのかも……」

苦笑した私にアルファは「胼胝？」と首を傾げたあと納得したのか「ああ」と頷いた。

「今日は中級階位だったから女の子ももちろん綺麗な身体の人はいないと思います。傷が癒える時間なんて待ってられませんからね。最上級階位くらいになれば、少しはマシになって来るのかも知れないけど、僕には永遠に分からない」

きゅっと下唇を噛み締めてそう締め括ったアルファに「え？」と問い返すとアルファは直ぐに笑顔に戻った。

「だって、僕はもう王宮騎士なので、騎士塔になんて仕事以外で来る必要ないですからね」

どうしてだか分からない。

分からないけれど、アルファのその台詞に私の心はきゅっと苦しくなった。刹那、垣間見せたアルファの苦悶の表情が頭から離れな

い。

町に出る頃には私の足も元の感覚を取り戻して、普通に歩けるようになった。他愛ない話をしながら歩いてるとちょっとデートみたいだ。

「そこ行く可愛いカップルさん。二人で甘いクリームはどうだい？」

そんなことを考えていたから、耳に飛び込んできた声に過剰反応してしまう。私たちにいったわけじゃないと思うけど……くいくいとアルファに腕を引かれて首を傾げる。

「マシロちゃん、寒くない？」

「え？ 大丈夫だけど」

「だったら、さっきのお詫び。おじさんもああいつてることだしクリーム食べよう」

待つてと締め括ってアルファは路肩に止めてある装飾過多な馬車に駆け寄った。愛想の良いおじさんが「毎度っ！」と迎えている。きつと自分も食べたかったんだよねと思うことにして私はアルファの後姿を見ていた。

「お似合いの二人にはサービスしちゃうかな」

おじさんは声を潜めることなく、張り上げてそんなことをいいながらちよつと巻き過ぎではないかと思うソフトクリームの上にスプレーチョコを散りばめる。

カラフルなチョコが綺麗だ。

先端が不安定なソフトクリームをなんとか私の元へと運んできたアルファは、はいと小さなスプーンを私に手渡してくれる。

「一緒に食べよう。おじさんが縦に伸ばすから二つ持てなかった」
「神業だよね」

一口掬って口に運ぶ。冷たくて少しキンッとするけど、甘くて美味しい。

甘いものを食べると不思議とほっとするし、優しい気持ちになるような気がする。だから、知らず知らずに幸せそうな顔をしてたんだろう。

アルファが「良かったね」と微笑んでいた。

「僕らお似合いだっていわれましたよ」

そっち？ 続いたアルファの言葉に私はどう答えて良いかわからなくて、もう一口頬張った。

「お行儀悪いけど帰りながら食べようか？ アルファもちゃんと食べてよね」

苦し紛れにそういつて歩き始めた私にアルファはくすくすと笑って隣に付いてきてくれた。

ソフトクリームを食べ終わる頃には、身体が冷たくなっていた。アルファも同じだったのか、私に気を使ったのかは分からないけど、近道だからと私たちは裏道へ入った。夕方が近くなっていたか

ら人通りは殆どないけれど怖い雰囲気のところでもない。

両側に建物が迫っている通りは、開放感には欠けていると思うけどね。

「アルファって王都に詳しいの？」

「え？ 僕ですか？ 僕は王宮にずっと居たのでそんなに詳しくないですよ。この辺りは朝夕のロードワークで通るんです。少しずつ違う道を探検してるので、確かに知ってる道は増えましたけどね？」

ロードワークでこんなところまで来るんだ。

図書館からここはもう近いと思うけど……アルファって何処まで出てるんだろう？

「基本的には、王都の外周をするんです。物事が動くのは朝と夕が多いので、そういうものを見るのにも適してるし、まあ、僕は見たり聞いたりして帰るだけですけどね？ そのあとの判断をしたり、詳しく調べたりするのはカナイさんやエミルさんです。僕には不向き」

にこにこと屈託なくそう続けたアルファに、私はへー……と曖昧に答えた。

良く意味の分かっている私の反応に気がついて、アルファは面白くない話だったと自己反省をし、ふと足を止めた。

どうしたの？ と、私も釣られて足を止め、アルファのところまで戻る。

アルファは細い路地に目を向けて、うーんと唸っている。その理由が最初よく分からなかったけれど、すうっと路地から風が流れてくると、ふとした違和感に私も眉を寄せる。

「……これ、血の臭い？」

私に頷きつつアルファは、辺りをきよきよとする。そのあと確認するように私を見ると「待ってる？」と問い掛ける。

「この辺り特に危なそうなことはないと思うから待っていてくれたほうが良いけど……」

「え、嫌だよ。私も行く」

ここで待ってるのは危険じゃないとはいえ怖いよ。

ぎゅっとアルファの袖を引いて、そういった私にアルファはですよねえと苦笑して「後ろから出ないで下さいね」と微笑むと先を歩いた。

一步、一步と前進することに血の臭いが濃くなってくる。

「血の臭いが残ってるってことは対象は死んで間もないか、生きているってことです」

ぼつぼつと口にしたアルファの言葉に、私はぐくんと唾を飲み込んだ。Ｔ字路に出たところでアルファは足を止めた。アルファの前を覗き込もうとした私を制したがもう遅い。

私は見てしまった。

「犬？」

「大きいですよ。多分これは色々呼び方はありますけど、僕が知ってるのは白銀狼」

そういったあとアルファは、凄いな、とか、始めて見た、とか、感嘆しているけど、問題はそこじゃない。

目の前に横たわる大きな狼は、後ろ足に酷い傷を負い傷口から出た出血により、本来は白いのではないかと思われる毛並みはほぼ茶

褐色に染まっていた。

第十話：飼い主の気持ち

「助けなきゃ……」

一呼吸一呼吸浅く短い、まだ息がある。

アルファの後ろから飛び出そうとして、私は「待って」と腕を捕まえた。

「駄目だよ。手負いの獣に近づくなんて！」

「でも、近づかないと怪我を見られないし、治療も出来ない」

私たちの声に気がついたのか、うー……と低く唸るような声をあげ、苦しそうに片方の瞼だけ持ち上げてこちらを見た白銀狼に、私はある種の確信を得た。

「大丈夫だよ。この子は襲い掛かったりしないし、それにもうそんな力残ってない」

見てるだけなんて嫌だ。と、重ねた私にアルファは嘆息したけど腕を解いてくれた。

私は、ありがとと小さくお礼をいって、負傷している白銀狼の傍で膝をついた。

じわりとスカートの裾に血が滲む。

そつと触れると、一瞬びくりと身体を強張らせたものの、それ以上の抵抗はしない。

そのことに改めて胸を撫で下ろし、深い毛並みをそつと分けて傷の具合を見してみる。出血は大分収まっているようだけれど、深い毛

のと浅いもの、合わせて三本ある傷跡は生々しく、じわじわと血液が流れ出ている。

ハンカチを出したけど、対象が大き過ぎてこれでは到底巻けない。やや迷った末スカートに手を掛けた私にアルファの手が掛かる。

「マシロちゃん、止めて」

「でも」

「良いから」

アルファは私の手を押し留めると、自分の上着を脱いで躊躇することなくシャツの袖を、びっと破き腕から抜き取ると筒になった部分を開いて広い一枚の布にした。

「これで止血してあげて」

「ありがとう、アルファ」

受け取ると私は手早く足の付け根からぎゅっと固く縛る。
小さな声を漏らし、刹那苦しそうな息遣いを見せたが直ぐに収まった。

—— ……これじゃ助からない……

迷ってる暇はなかった。

丁度、上着を整え終わったアルファにまた止められる。

「無理っ！ 無理無理無理っ！ マシロちゃん、どれだけ無謀っ？
！ 何？ 連れて帰るつもり？」

これまで見たことないくらいのアルファの慌てように、私はきょとんっとした。私は白銀狼の前足を肩に掛け何とか運べないかと思

っただけなんだけど……。

「いや、もう、そんな可愛い顔してみても駄目です。確かに近いですが、それならエミルさんとか呼んで来たほうが」

「間に合わないよ」

うーっと唸るようにそういった私と白銀狼を交互に見たアルファは「分かりましたよ」と頷いて、私を白銀狼の下から引き離すと自分が入り、よいしょ、と担いだ。

小さな声で「重いな」と一言零しただけで、アルファはそのまま普通に歩き始めた。慌てて私もその後ろを追い掛ける。

丁度、夕食時と重なったのだろう、寮棟は、がらんと置いて都合が良かった。

医務室へ運ぶのかと聞かれて、私は自分の部屋へとお願いした。寮棟側からの出入り口では、医務室までは遠いし途中で食堂の傍も通る。誰かに見つかる可能性が高い。アルファの部屋は、カナイと同室で、もう一匹同居人は無理だろう。エミルの部屋は、期待出来ないから、私の部屋が一番だ。

最初はベッドにといったのだけど、アルファがそれは駄目だと拒否するので、床にタオルを何枚も敷いてそこに寝かせてもらった。そっと触れるとまだ暖かいし、ゆっくりと胸が上下している。

まだ大丈夫だ。

ほっと胸を撫で下ろすとアルファは「エミルさん呼んできます」

と立ち上がり部屋を出た。

私はその間に必要になるだろうお湯を準備した。

隣から話し声が聞こえて、ややして軽いノックの音とともにエミルが入ってきた。カナイの姿もあつたけどアルファの姿がない。

「布や毛布……必要なものを取りに行ってくれてるよ」

歩み寄って私の隣に膝を折ったエミルの言葉にああと頷いた。

「そこどけ」

背後でこつこつと足を鳴らされ見上げると、カナイが湯を張ったタライを抱えていた。私は慌てて立ち上がるとカナイに場所を譲った。

「マシロは少し下がって」

「でも……」

「縫合とかも必要だと思うから……ね？」

食い下がった私にエミルはやりわりと重なる。

私は、それ以上食い下がれなくて扉辺りまで下がって壁に背中を預けた。途中でアルファが入ってきて頼まれていたものをエミルに渡すと私に歩み寄ってきた。

「僕はもう役に立たないから、着替えに一旦戻るけど、マシロちゃんも着替えたほうが良いよ」

にこにこそうアルファに告げられて、改めて私も自分の格好を眺める。

確かに、どこで大惨事に会ってきたのだろうか？ というような装いだ。苦笑して頷いた私にアルファは、大丈夫だから、ね？ と、重ねてぼんぼんと私の肩を叩くと部屋を出ていった。

「あとは、本人の回復力次第。まあ、白銀狼は生命力が強いし、長命だから大丈夫だと思うよ」

エミルの手際はとても良くて、どれもスムーズに運んだ。きつとそれをいつても謙遜して受け入れられないだろうと思ったから、私は素直に有難うとだけ伝えた。ほっとすると同時にぐうとお腹が鳴る。

私の馬鹿っ！ 完全に皆に聞こえたよね。
ぱあああっと顔が熱くなる。

「あの、えっと、これは」
「お腹空いたね。遅くなっただけで食堂開いてるかな？ マシロは時間外常習者だからきつと待っててくれてるよ、行ってみよう」

ずっとエミルが扉を開くと「僕もぺこぺこですー」と、アルファが一番に飛び出していった。

それにカナイが続き、扉の外に出てエミルが私を待ってくれているのは分かる。私は、部屋の明かりを絞って薄明かりを保つと静かに眠っている狼を見詰めた。

大丈夫だよ。戻ってきたら死んでたとかそъいうの、ないよね。

「大丈夫だよ。今すぐどうとかならないと思う。彼にも目が覚めたとき食べられるように何か用意してもらってこよう？」

私の不安を察してくれたエミルに優しく促され私は頷いた。

エミルがいった通り、食堂ではおばさんが私たちが来るのを待っていてくれた。

お腹を満たして、おばさんに怪我した犬を拾ったからと食事も用意してもらってきた。カナイが「……犬」と曖昧な顔をしていたが、狼拾いましたとは流石にいけない。

アルファは一息吐いたエミルに話があるといい自室に戻った。別に私の同席を拒まれたわけではないけれど、私はこっちが心配だったので部屋に戻った。

ベッドの脇で大きな身体を横たえている姿はとても辛そうだ。私はペットを飼ったことがないから分からないけど、飼い主ならこういうときどうして上げるんだろう？ 脳裏に浮かんだ一名に頭を振り、あれは獣族でペットでは、多分ない。と打ち消した。

そつと、身体に触れると、ふー……と熱の籠った鼻息を吐く。触らないで欲しいかな？ それとも撫でていて良いのかな？ やや迷ったが病気や怪我をして寝ているとき、きつと私だったら誰かが傍に居て触れていてくれると安心すると思う。

だから、私はこの子から離れないことにした。

規則正しくなった寝息を聞いていると急に私も今日の疲労感に襲われる。

身体が重いし、忘れていた筋肉痛までぶり返した。こんなもの、

この子に比べたら大したことないのにそれでもちよつと辛いと思つてしまうのは申し訳ない……もうし、わけ、ない、け、ど……。

「マシロ。マーシロ。起きそうにないな……」

「しっかり掴んでるから離せそうにないし、風邪とか引いちゃわないですかね？」

「馬鹿は引かないから大丈夫だろ、ほら、これでも掛けとけよ」

なんだか遠いところで失礼なことをいわれているような気がするけど、身体も重いし瞼も重い、起き上がれないから、そのままにしていたら、柔らかくて暖かなものに包まれて益々深い眠りに落ちた。

「……ん、んん？」

なんだろ？　なんか、変な感じ食^はまれてる？　こんな冗談みたいなことするのはブラックぐらいな気がするんだけど、いつの間に来たんだろ？

「ブラ……ック？　ふわっ、私まだ、眠……い」

まどろみの中で目を擦り断固起きることを拒否したら……

—— ……ぺろり

鼻先を舐められた！　ひっ！　と、息を呑み慌てて身体を起こすと、身体の節々が悲鳴を上げる。

あいたたた。

―― ……私、床で何を……？

肩に掛かっていた毛布が落ちたのを引き上げながら、目を開けると見慣れない姿に一瞬驚いたけど、そうだった、私昨日は拾い狼しちゃったんだ。最近、良く拾いものをするよね。

「目、覚めたんだ？ 傷の調子どう？ 痛む？」

『大丈夫だ』

「そう、良かったね。お腹空いてない？ 私、食堂のおばさんに……」

肩口に毛布を手繰り寄せ、立ち上がりつつ話を続けていてふと気が付く。

会話が成り立ってる？ 一気に頭の中がクリアになった私は、床に身体を横たえて頭を持ち上げている白銀狼を見詰めた。

大きく鋭い瞳は左右の色が異なっていて凄く綺麗だ。暫らく見詰め合ったあと、私は改めて問い掛ける。

「話せるんだ？」

『私の名はハクアだ。マシロ』

「ハクア？ そう、良い名前だね。じゃあ、手っ取り早いや。これから私は何をして上げれば良い？」

『私は良い。タベ机の上に人間が何か置いて行った。確認したほうがいい』

いわれて私はいつもは中央にあるものの、ハクアの為に部屋の隅へ追いやったテーブルの上を見た。見覚えのある上品な薬入れだ。直ぐにエミルのものと分かる。

その下に敷いてあった二つ折りになったメモ用紙を開く。

『炎症を抑えるものです。目が覚めたら使ってください』

名前はないけど、エミルの筆跡だと思う。私はメモ用紙を丁寧に畳んだ。きつとアルファから聞いたんだと思うけど、みんなの気遣いはとても嬉しいし有難い。

『なんだ？』

「エミルだよ。ハクアの傷を手当してくれた人。他に背が高いのがカナイ、金髪の子がアルファ。皆、ハクアの為に尽力してくれたんだよ」

良かったね、と続けるとなんだか私まで嬉しい気分になって自然と顔が綻んでしまう。

窓の外を見ると、いつも起きる時間よりずっと早いみたいだから、私はハクアに朝ごはんを用意して、暖かくしたタオルで汚れた身体を拭ってあげた。

本当はお風呂に入れて上げられたら良いんだけど、それはまだ早いだろうと思ったから。

第十一話：優しいだけがおかんじゃない

それらが丁度終わった頃、エミルたちが私の部屋を訪れた。

「凄いな……」

包帯を取り替えて消毒をと思っていたらしいのに、包帯を解いたところでエミルは心底感心したように声を上げた。

「もう、糸……抜いたほうが良いよね？」

「え、でも」

一晩で抜糸なんて早すぎる気がして思わず声を漏らしたけど、エミルに手招きされて覗き込んだ傷は浅いものは痕だけになっていて、一番深かったものでも塞がっているように見えた。

「あまり長くこのままにしておくときつと食い込んでくじやうし、今も攣ってるんじゃないかな？」

ハクアはエミルの言葉に頷くように少しだけ動いた。

それと私が納得したのを確認してからエミルは手際良く抜糸を進め、それが終わるとカナイと場所を換わり「もう一回」と促す。カナイはハクアの傷の上に手を添えて口内で何かぶつぶつと唱えているようだった。ほわりとカナイの掌が光を帯びるとやんわりと傷口とハクアを包んで、ややして消えた。

「今日は無理でも明日には動けるだろ」

「でも、死にそうな傷だったのに」

「そりゃまあ、治療も的確だったし俺の治癒術もあったし本人の魔

力もかなりあるからな。流れ出てしまう血液さえ止まればなんとでもなるだろ？」

そんなものなのか？ 私は白銀狼の生態なんて全然知らないから、きつとカナイのいうことのほうが正しい。

だから、そつかと頷いたところで、「僕置いていかないで下さいよ」とアルファが入ってきた。

ロードワーク中だったらしい。

出遅れたことにぶーぶーいつていたけれど、ハクアの傷がほぼ癒えている話になるとアルファも素直に驚いていた。

「それじゃ、不安材料が減ったところで僕のお腹も減りました。朝ごはんにしましょう！」

切り替えの早いアルファに「お前はいつも食うことばっかだな」とカナイが突っ込みまた揉める。ハクアがその慣れない様子に「五月蠅いな」と零した。

「ごめんね、ハクア。直ぐ出て行くから休んでて」

ふわふわとハクアの頭を撫でてそういうと、がしり！ と、エミルに肩を掴れた。何事かと振り仰ぐとエミルは困ったような表情を作っていた。

「ハクアって何？ マシロ名前付けちゃったの？ 駄目だよ、飼うなんて」

「え？ 名前って、本人から聞いただけで、私がつけたわけじゃ」

なんとなくいい訳がましく聞こえるがそついった私に、エミルは眉を寄せたまま首を傾げ「兎に角」と話を続ける。

「飼うのは駄目だよ。こんな大きな動物を室内で飼うのは無理です。それに白銀狼は竜や一角獣と同じように聖獣に指定されてるんだから飼えません」

—— ……お母さん？！

ぴしゃり！ と、そういわれるとなんだか捨て犬でも拾ってきて、お母さんにどうせ世話も出来ないんだからと怒られたときのようだ。

「だ、大丈夫だよ。私も飼う気はないし、怪我が治るまでだから」
「そう？ それなら良いんだけど」

エミルはちらとハクアを見たあと、仕方ないなと肩を竦めた。

今日の授業は毒キノコについて。
教卓に色とりどりのキノコが並んでいる。

某配管工なら巨大になったり1upしたりしそうなキノコだ。

神経系に害のあるものから、ちょっと口にするのも憚られるようなところに害があるものの話をしてるんだけど、激痛が一月ほど続く話とか聞いていると、なんだか身体のどこかがちりちりと痛むような気がする。

そんな私の隣でカナイは全く関係ない本を読んでいた。
こいつも授業自体に興味はない。

アルファと同じで、素養がないから無駄。という、判断かも知れないけど、カナイくらい頭が良いならなんとかなりそうなものだけで素養って一体なんなんだろう？

説明と諸注意を促したあと毒キノコたちは各班に配られた。

毒キノコに関するレポートの提出期限も告げられる。面倒臭いけれど、カナイと違って私は薬師階級しか能がない。

飲んだ種の元の持ち主の為にもちゃんと身に付けなくては……と
思っている。でも今は、それも少しだけ休憩。

「ねえ、カナイ。ハクアについて教えて」

教室内がざわざわしてきたところで、私はこそそとカナイに訪ねた。カナイは読んでいた本から顔を上げて「白銀狼か」と呟くとはたんつと閉じた。

「白銀狼は王都よりずっと北の山奥に群れで生活している種族だ。基本的に山から出ることはない。だから人の目に触れることも殆どなく、その長い一生を終えるといわれている。高い思考能力を持ち、強い魔力と戦闘力を持つ。ハクアは其中でも強い力を持っているものと考えて良いだろう」

「どうして？」

「あいつの眼は金銀妖瞳ヘテロクロミアだった」

私はカナイの呟いた呪文に「は？」と間抜けな声を上げた。
カナイは、ちらと私を見て、はあと嘆息するといい直す。

「金銀妖瞳。ようするに左右の瞳の色が違っていてことだよ。白銀狼でその瞳を持つのはかなり高齢か、もしくは力の強いものだ。余談

だが白銀狼は二百年生きるといわれている。まだ薄汚れてるから毛艶とか分からないけど、恐らくハクアはそんなに年はいってないと思う。いってても……八十歳とか九十歳とか、まあ、どっちにしても俺たちなんかよりずっと年上だとは思うけど」

「あの傷……」

「同族間で争ったあとと見るのが一番自然だろうな」

カナイの台詞に一気に暗い気持ちになる。その気持ちを払拭する為に、私は努めて明るく話題を今朝の話に置き換えた。

「そういえば、今朝のエミルお母さんみたいだったよね？」

くすくすと笑いながらそう口にした私にカナイは歯切れ悪く「ああ」と頷く。

別に悪くいつている訳ではないからそんな困ったように返事しなくても良いのと思うものの、変なところに気を遣うのもカナイの良いところだ。基本的にずれてるけど。

「まあ、名前を与えるってことは所有する証みたいなのだからな」「だから、私が付けたんじゃないってば」

「それはそうとハクアはずっとあのままだろ？」

あのまま、というのは、寝転がったままかという話だろうか？

意図することが良く分からないけれど、ハクアは昨日から歩き回ったりしていない。

歩くような状態になかったことくらい、カナイも承知していると思うのに……。矛盾を感じながらも頷くと、カナイはだよな？ と、重なる。

そして私が納得していないのを感じて、戸惑いながらも「眉唾物

だぞ」と前置いて話を続けてくれた。

「んー……ある程度力のある白銀狼は人の形を取ることが出来るようになる……とかいわれてるんだよ。あいつ雄だったし、白銀狼の中では青年期入りだと想定されるから人型を得るならそれなりに問題だと……まあ、エミルも、思ったんだと、思う」

珍しく歯切れが悪い辺りカナイとしても本当に微妙なんだろう。私は変な心配性のエミルに苦笑して「まさか」と否定しつつも、でもまあと続ける。

「ブラックだって猫になるし、ハクアが人になってもおかしくないよね」

「ん？ それはおかしいぞ。白銀狼は獣族に属さない」

「似たようなものじゃないの？」

「違う違う。全然違う」

あっさり、しかも半笑いで否定された。

「獣族はヒトに近いというかヒトだ。白銀狼は聖獣に認定されている通り獣だ。竜とかと一緒に。あいつらも人型を得ることはあるかも知れないが、常にヒトであることはないし自ら望んでそうなることもない、その必要性があるときだけだ。ブラックのアレは、魔術だよ。獣族だからって猫とか犬とか普通なれない」

ふーん……と、頷いたところで突然ごんっ！ という鈍い音と頭に激痛が走った。カナイも同じだったのか私と同じように頭を抑えて声を殺した。

「たーのしそだねえ、そういう雑談は午後に回してくれるかなあ

「？」

私語どころではなく、すっかり話し込んでしまっていた私たちは後ろにミチル……じゃなくてチルチル先生が居たことにも気が付かなかった。

小さいんだよね、この先生。

今だって、ラウ先生に持ち上げられている……ってラウ先生っ？！
居るはずのないその姿に驚き椅子が、がたんつと鳴った。

「な、何やってるんですか？」

「いえね、遊びにきたら君たちが楽しそうに話しこんでたから、面白くなくて告げ口しました」

抱えていたチルチル先生を床に下ろして、にこにここと答えてくれる。

この答えは納得して良いのかな？ チルチル先生は、ちゃんと観察してくださいよ。と、背伸びして机上を叩くと教卓へと戻っていく。

「……ラウ先生って暇なんですか？」

「あれ？ 分かります？ 暇なんですよ」

認めたよ。この人あつさり認めちゃったよ……。なんだかこの人と話をしているとどつと疲れが出る気がする。

知らず知らずのうちに神経すり減らされてる感じた。

第十二話：私に関する七不思議

ラウ先生の告げ口により、私とカナイの課題は増え提出期限が短縮された。

のんびりしている暇もないので、昼食後、ハクアのことはエミルとアルファに任せて、私たちは図書館の中階層奥を陣取って課題消化に勤しむ。

カナイとか、課題も無視しそうだったが進位しないのは良いけど、退学処分を受けるのはまずなので最低限のことくらいはやるらしい。

「……カナイ、いつてくれれば私、本探してきてあげるからさ、コレ止めてくれない？」

こつこつと机上を指先で叩いて文句をいった私に、カナイは顔を上げるとどうして？ と、不思議そうだ。さっきから私の前を、ちよこちよこと行ったり来たり元気に頑張ってくださっているカナイの傀儡^{くぐつ}さん方……今日は働き者のネズミさんが、エプロンに三角巾の姿で頑張っている。

「物凄く可愛いと思う。和むと思う。でもねっ！ 集中できないのよっ！」

どういう設定で動いているのか知らないが、芸が細かいのだ。

こちよこちよ集まって相談して、本を探しに行って三匹掛かりで運んでいても、途中で一匹潰れてみたり躓いてみたり、それを残りが元氣付けたりしていて、小さなドラマを繰り返している……これが気にならないなんてっ！ 尋常じゃない。

「俺は集中できる」

ほら、あと三枚で終わり。と束になった紙をひらひらとさせる。
くうっ！

「じゃあ、さつさと書き上げて撤収させてよ！」

「はあ？ 何が気に入らないんだ。もしかして、ネズミが駄目なのか？ いやあ、俺もツバメと迷ったんだよなあ」

その迷う基準が分からない。

全く話が噛み合わなくて、私は俯いて眉間を指でぐぐうっと押すと深い溜息を吐いた。

もう良い！ と、妥協しようとしたら、目の前で小話を繰り広げていた三匹がぽんつと小さな煙を上げて消えてしまった。

「誰か来たな？」

と、通路のほうを見たカナイにつられて振り返る。

静かな足音と共に姿を現したのはシゼだ。私たちを見つけてそのまま近づいてくる。

「探しました」

「カナイを？」

「残念ながらマシロさんです」

どの辺りが残念なんだ。シゼは相変わらず可愛くないことをさらっという。そして机上に並べられていた本のタイトルの殆どが菌類に関してだったから「キノコ？」と怪訝な表情で首を傾げた。

「提出期限が迫っているレポート書いてたんだよ。でも、集中力が

切れてきてたところだから良いよ、何？」

隣の椅子を引きながらそういった私に、カナイが「端から微塵も集中してなかったぞ」と付け加えたので手近な本の角をぶつけておいた。

シゼはそのやり取りを呆れたように見ていたが、私の隣に腰掛けて片手にしていた分厚い本を開いた。

「エミル様に頼まれて探してきたんですけど」
「エミルに？」

これを写せば課題なんてすぐさま終わる！　みたいな内容だったらしいのに、と思いながら覗き込んだが全然違った。

色々絵柄は載っていたが、今の私に必要なものではなさそうだ。

「貴族連中や豪族連中の徽章を纏めたものだな。それがなんだ？」

身を乗り出して本を覗き込んでいたカナイの言葉に、シゼは頷き、話を続けてくれた。

「先日、貴方が保護した乳児が手にしていたものに彫られていたものがないか探して欲しい。とのことだと思います」

「……え……それ、全部？」

多分、赤ちゃんの襟元から出てきた判子くらいの大きさの物の話しをしているのだと思うけど、あれから色々あったし、ばたばたしたから記憶に自信がない。

それに机上に置かれた本の分厚さから考えて……私の気力が続くとは思えないけど？

困惑した私にシゼは当然だという顔をしたがカナイが苦笑しながら

ら助け舟を出してくれる。

「一覧があるのは手前の方だけだろ。そこから後ろは家の略歴とかそんなのが書いてあるはずだから、本の厚さの三分の一もないはずだ」

「そ、そか……それならなんとか」

ほっと胸を撫で下ろしたのに、シゼが追い討ちを掛ける。

「こちらにないようでしたら、別の物を持ってきますからそちらを確認してください」

「えっ?! ないこともあるの? 似たようなもので妥協とか……」
「しないでください。徽章とは家を現すものです。瑣末な違いで全く違う家になったりするもの。とても大切なものです。覚えていないんですか?」

厳しい口調で語って最終的には呆れたような声を出したシゼに私は唸った。

「見ていけば分かるよ! ……多分、ね」

シゼは、ワザとらしく深い溜息を吐き首を振った。

「……まあ、エミル様もお急ぎではないとのことでしたから、ゆっくりじっくりご覧下さい。興味があれば、熟読されても良いと思います」

興味があれば、と念を押して立ち上がったシゼをぼんやりと眺めた。

きつと何かに必要になるかもしれないから、読んでおけ……。そ

ういうことなんだと思う。シゼは、意地悪だし必要なことを直ぐに教えてくれるタイプではないけど、無駄をさせるタイプでもない。

やっぱりシゼは可愛いなと思い気分上昇。

明るく返事をする、シゼは曖昧な顔をして「分かっていただけなら良いです」と立ち去っていった。

「で、課題はどうするんだ？」

「やるよっ！ 先にそっちを片付けて……！ ちょこちょこ忙しいネズミも居なくなっただしがつりしつかり書き上げます！」

ペンを持った腕の袖をまくってそういった私に、カナイは、ふつと鼻で笑って「ま、頑張れー」と口にしてくれた。

部屋に戻るとアルファはいつも通りおやつタイムで、エミルはのんびりと本を読んでいた。

ハクアも私が出て行ったときと同じように、ベッドの傍で眠っている。昨夜のぐったりといった感じではないから大丈夫そうといえば大丈夫な気もする。

エミルは、私が部屋に戻ると本を閉じ「変わりないよ」とにっこりと迎えてくれる。そして、私の手の中にあった本が目についたのか「シゼに会ったの？」と続ける。

「うん。まだちゃんと見てないんだけど、探してみるよ。レポートももう終わるし」

「シゼには暇が出来たときで良いっていったんだけど、シゼはやる

ことが早いね。マシロが早くこないからね？」

のんびりとそう口にしてくれたエミルに、有難う、と微笑むとアルファが今日のお勧めを渡してくれる。だから、アルファに合わせ、ておやつ取ってたら、転がって移動したほうが早くなりそうだから勘弁して。

「カナイさんはどこ行っただんですか？」

「荷物片付けてから顔出すっていったよ」

私は机の上に荷物を置いて、ハクアの前に跪きそつと頭を撫でる。うつすらと瞼を持ち上げたハクアは、私の姿を確認すると頭を持ち上げて摺り寄せてきた。ふわふわの毛がくすぐったくて目を細める。

「もう、歩けそう？」

私の問い掛けに答える為か、ハクアはゆっくりと立ち上がり、僅かにグラついたが直ぐに体勢を立て直し部屋の中を少し歩いた。大丈夫そうな姿に胸を撫で下ろし、ハクアの大きさに少し困る。もともと二人部屋を一人で使っているし、不要なものは家に――種屋に――持ち帰っているから、荷物も少ないはずだけど、エミルがいうように確かに部屋で飼うにはハクアは大きい。

両足を肩に掛けられて立ち上がられると、私より遥かに大きいと思う。

軽めのソックのあと、カナイが扉を開けて歩いていったハクアに驚いて一歩引いてから、ああと納得し入ってきた。狭いから早々に移動しなくては……。

「ねえねえ、マシロちゃん」

「んー？」

「これさー、まだ貯金箱代わりに使ってるんだよね？」

机の隅に置いてある小さな瓶をジャラジャラと揺らしながらそういったアルファに、そうだよ。と、頷く。貯金というか生活費を入れてあるんだけどね？ 無用心だから何度もカナイにやめるといわれているのだけど、諸事情でほったらかしだ。

「最近ギルド依頼もこなしてないのに、減らないですよねえ？ ていうか、僕コレの嵩が変わってるのあんまり見たことない」

心底不思議そうにそういったアルファと、目を合わせないまま私は答える。

「それはね。お金の湧く小瓶なんだよ。嵩が変わるとね、勝手に元の位置まで増えてるの」

不思議でしょう。と、乾いた笑いを零した私にカナイの溜息が聞こえる。予想が付いたのだろう。素直に、へーっと感じているアルファとは流石に違う。

「わ、私だって、必要ないっていつてるんだよ？ いつてるんだけどね！ 勝手に入れていくんだから仕方ないじゃない。付き返したって、無意味だし」

ぶーぶー零した私にエミルがくすくすと笑う。

「良いじゃない、受け取っておけば。ブラックは好きでやってるん

だよ」

「まあ、貢がれるのも特権だろ？」

……有り難い限りだけど、現金貢がれるのは正直気が引けるんだよね。

でも、まあ、必要なもので、結局使ってるからなんともいえないけど。

ごによごによと曖昧に零す私を他所に、アルファは「なるほど」と納得したようで、ぽんつと手を打つと

「じゃあ、マシロちゃんの七不思議のひとつも解決したことだし、ご飯にしましょー」

私の七不思議って何？ てか、今の今までおかし頼張ってたよね？ それなのにまたご飯？ もうアルファの食欲には誰もノータッチなのか、そうだね。と、エミルも腰を挙げ、それに続く形で皆私の部屋を出た。

私もそれを追いかける形で話題の小瓶から銀貨一枚引っこ抜いて、ハクアにご飯を待っていてくれるように念押しして部屋をあとにする。

第十三話：おかんが心配していた件について

翌日はとても上天気。

このところ朝夕が特に冷え込んでいたのにそれも感じないくらい暖かかった。だからハクアに午後一でお風呂を約束していたので、私は特に深く考えることもなくユニットバスにお湯を張り、ハクアの身体を流した。ゴールドンレトリバーやセントバーナードみたいな大型犬より二周りくらい大きいかなという感じのハクアでは狭いのは仕方ない。でも聞いた話では本来白銀狼は雪を紡いだように白く煌いているらしいのにこのままでは野犬と間違われても可哀想だ。

「傷、染みたりしない？ 大丈夫かな？」

『平気だ。問題ない』

ハクアの驚異的な回復力はもう傷跡も消していたけどやっぱり気になり声を掛ける。

「泡流すから目瞑っててね」

一言添えてからシャワーで泡々になってしまっているハクアの体を流した。きつちりと流し終えて私がシャワーを止めると濡れそぼった身体が気持ち悪かったのか立ち上がってぶるぶるぶるっと身体を振るうものだから私もとも辺りもびっしりだ。

「ハクア、ちよつとは加減してよ……」

ぽとぽと髪の毛から滴る水を切りながら嘆息した私にハクアは短く詫びた。

「マシロ」

タオルタオル……と、出しておいたタオルが駄目になったから洗面台の上から新しいタオルを引っ張り出していると名前を呼ばれて「何？」と返事をする。そして振り返ると同時に何かが覆い被さってきて私は目を見開いた。

「――……っ！」

「私だ。大きな声を出さないで欲しい」

思わず悲鳴を上げそうになって口を塞がれた。大きな手の先を見ると金銀妖瞳と視線が絡む。

「ハクア？」

ももごと手の奥でそういった私に目の前の男性はこくこくと頷いてゆっくり手を放してくれる。ふと、カナイが人の形を取ることがあるといっていたのを思い出した。

「吃驚した。用があるならそのまま話掛けてくれれば良いのに……」
「このほうがマシロに近い気がする。マシロ、話がある」

「そ、そう？ 良いけど、聞くけど、拭いてからにしたらどう？
怪我が治っても風邪引いちゃうよ」

窓から差し込む陽光に雫が煌く上から私は手にしていたタオルを掛けた。拭いてあげようと手を伸ばしたが、その手を捕まれて私は困惑する。

「人が来るまでに聞いて欲しい。私は、群れから単独で離れたもの

を追い掛けてここまで来た。説得を試みたが間々ならず、争いになり守りに徹したばかりに深手を負ってしまった」

カナイが予想していた通りの話に私も頷く。

「私はまだ、山へ戻るわけには行かない。マシロ、私の主になって欲しい」

「主……ってことは飼い主になれってこと？ なってあげたいのは山々だけど駄目だよ。エミルたちも反対してたし、それに実際問題、ここでは貴方は窮屈だと思っし……」

「この姿ならそれほど場所はいらない」

いや、そうなると大きさ以上の問題が発生するということまでは……考えられない、よね？ 白銀狼だものね。人間の、学生の事情なんて分からないよね。なんて説明すれば良いんだろうと黙り込んだ私にハクアは名を重ね「頼む」と懇願する。

左右で色の違う瞳はとても綺麗で、真っ直ぐ見詰められると吸い込まれそうなほど、細かく光を反射している。私が迷っている間にハクアの手が伸び頬に触れる。

「私の主になり、私と血の契約をして欲しい……少し痛むが、我慢を……」

じわりと私との距離を締め柔らかく染み込むようにそう告げると私の首筋にハクアの吐息が掛かる。

「マシロー、出掛けているの？ また鍵も掛かってないけど……お風呂？」

足音が近づき開けっ放しにしていた扉からエミルが顔を覗かせた。

驚いたエミルと目が合って話し掛けようとしたら、そんな隙なかった。

「アルファ」

エミルに名を呼ばれ傍に居たのだろっアルファが、たんと床を蹴るのとは同時にどんっ！と鈍い音がして私は拘束が解かれたが……浴室の壁が崩壊した。

あ、あああああ……。

アルファの一撃でハクアは壁もろとも吹っ飛び、直ぐに体勢を整えるとアルファはすらりと剣を抜き戦闘へと突入してしまった。早くて二人とも何してるかさっぱりだよ。時折、アルファの剣とハクアの爪がぶつかってキン……っと冷たい音を弾いている。じゃなくて！

「エミル！ アルファ止めて！ あれ、ハクアだから！」

隣に立ったエミルの腕を掴んでそういった私にエミルは「なるほど、不審者かと思ったよ」と微笑む。そうじゃなくて、止めないと寮破壊しかねないというか破壊してるけど。

「カナイ、確保」

どちらとも付かない間にそう続けたエミルの言葉にカナイは「はいはい」と返事して争っている二人に手を掲げる。

「アルファ！ 下がれ！」

カナイの一言にアルファは、たんつと地面を蹴ってハクアとの間合いを取った。間髪居れずにカナイが続ける。

「現出っ！」

その声に反応して地面が揺れると、いくつもの柱がそり立って来て檻の形を成し、あっという間にハクアを囲んでしまった。

「カナイ、幻視」

続けて口にしたエミルに、カナイは頷くとポケットからクナイのような刃物を取り出してうちの浴室と檻の奥に付き立て、パチンッと指を鳴らした。目には見えないが、多分何かに囲まれたのだと思う。

ざわざわと集まってきていた他の生徒が、口々に「なんもねーじゃん?」「さっきすげー音したと思ったのに」といいながらもわらわらと立ち去っていく。

角部屋で良かったけど人の部屋破壊しないでよお。

「それで、マシロは何をされてたの?」

つかつかとハクアを閉じ込めた檻に歩み寄りつつそういったエミルの後ろを追いかけて説明する。

「怪我が治ったから、身体を洗ってあげてて」

「マシロちゃん、一緒に入ったの? びしょ濡れだよ」

何事もなかったようにそういつて歩み寄ってきたアルファは私の

頭からタオルを被せて、がしがしと拭いてくれるけど。

「い、痛いよ！ アルファ、ちょ、ちょっと、ま……っ！」

なんとかアルファの手をどかせてタオルから顔を出すと話を続ける。

「一緒に入るわけないでしょ。ハクアはあんなに大きいし」

「小さかったら入るんだ？」

「それはどうか分からないけど、ハクアは犬みたいなものでしょ？」

何度か柵に体当たりをしたがびくともしないから諦めたのかハクアは元の狼の姿に戻っていた。私と同じようにちらりとハクアを見たあと

「犬、ねえ？」

と三人がわざわざ声を揃えたのに、うっと一步下がる。気持ち的に。

そして、溜息を重ねたあと、カナイはつかつかと崩壊した部屋に歩み寄っていく。多分修復してくれるつもりなのだろう。流石にアレでは拙い。

「それからどうしたの？ 洗ってるだけであの状況にはならないよね？」

苦そうな顔をしてそういったエミルに、あ、ああと頷き話を続ける。

「んっと、ハクアが……」

『マシロ、同族間の話は』

「……えっと、訳あって帰れないから私に主になって欲しいっていつてて……それでそのあと、なんだったかな……金銀妖瞳に気を取られて……そのあと直ぐにアルファが吹っ飛ばしたし……」

皆にはハクアの言葉は伝わらないのかな？　そう思いつつ誰によつて怪我をしたのかという部分は伏せて話をした。アルファは、ふーん……と納得したのかどうか分からないような返事をしたあと

「怪我が治ったならもう出て行ってもらえば良いじゃないですか？」

暴言を吐いた。聞いてたのかな？　私の話。

「とりあえず、部屋と壁は元に戻したから中で話そうぜ？」

そういつてハクアの檻を消し去り皆を招いたカナイに促されて私たちは部屋に戻った。つか、直つて良かったよ。ほんと。

「要するに彼には里へ帰る気はないってことだよな？」

困ったねえと口調はのんびりしたものだったがエミルの目は笑ってなかった。ベッドの脇で大人しく丸くなっていたハクアを暫らく眺めたあと「仕方ないから……」と前置いて話を続ける。

「ブラックは来る予定はないの？」

「え？　ああ、週末には来ると思うけど」

「……あと二日もあるね。じゃあ、カナイ馬車を手配してきて」

不意に話を振られたカナイは「は？」と声を出したあと、何か思いついたのか「ああ」と頷いて立ち上がった。

「と、いうわけでハクアの件は、ブラックに一任しよう？ マシロだって、どうこうするのにブラックに話を通さないわけにも行かないよね？」

「え、うん。まあ、そうだね。話はするつもりだったけど……」

「じゃあ、今から行って聞いておいでよ」

今からっ？！ と思ったものの、三人のこの様子では行かないわけには収まらない感じた。確かにエミルのいうとおりブラックには話すつもりだったし、もうカナイは馬車まで呼びに行っちゃったし、行くしかないねと納得した。

第十四話：黒猫様のいう通り（1）

がたごとと馬車に揺られながら考える。

ほぼ確実にブラックは良しと合わないだろうなと。犬猫を飼うとかそういう問題じゃないし、ブラックが白銀狼について何も知らないということは考え難い。と、なってくると理由はどうあれ、聞き入れられないだろう。

うーん……と唸って隣を見る。

御者の人が吃驚してはいけないからと、無理がないなら人の形で乗って欲しいと提案したらハクアは「問題ない」と、了承してくれ大人しく人の姿を取って座ってくれている。

「さつきは大丈夫だった？ どこも痛くしてない？」

病み上がりなのに、ごめんねと続けるとハクアは軽く口角を引き上げた。笑った、のかな？ 人の形を成せばハクアは獣族と変わらない。

凄く透明度の高い銀髪が綺麗だし、色白だし——でも、同じ銀髪でもエルリオン先生の髪とは少し違うなあ？ なんだろう、金色の色素を抜いていった銀って感じなのかな？——体型だって均等の取れた美しい筋肉のつき方は——別にそういうのが好み。というわけではなくても——彫刻染みていると感じるほど、綺麗だなと思う。思わずまじまじと見詰めてしまった私に小首を傾げつつも真顔で「問題ない」と答えてくれる。

「なら良いんだけど……その、みんな、悪気があるわけじゃないか

ら、許してあげてね？」

「ああ、分かっている。全て主を護る為だ」

「私、ハクアの主さんになってあげられるか分からないよ？ 多分、無理だと思っておいたほうが良いと思うし……一応、手は尽くすつもりだけど」

「私が誰を主に持つかというのは私とマシロが決めることだ。他人が介入すべきことではない」

—— ……ん？

ま、まあ、いわんとすることは分からなくもないけど？ 主イコール飼い主ではないのか。いや、飼い主って……うーん……益々良く分からなくて、結局のところハクアが良いならそれで良いや、と私は辺境の町までの道のりを楽しむことにした。

「随分と遠くまで来たな？」

「だよねえ、遠すぎなんだよ。もう夕方だし、泊まって帰るしかないよねえ。明日授業あるしレポート提出だし」

馬車から降りるのを手伝ってくれたハクアにお礼をいって、いつもの道を歩き始める。その隣を同じスピードで並んで歩いてくれるハクアは私の話を一々真剣に聞いて居る。

「レポート……あの遅くまで書き物をしていたあれか？」

「そう。あれ。チルチル先生って普段は面白おかしい先生なんだけどね、怒るとねちっこいんだよねえ。重箱の隅突くみたいに……」

「重箱？」

「ああ、そか……そうだよな」

重箱なんて分からないか、ここでは。

お花見はやったから、今なら紅葉狩りとかの季節だったりするのかな？ でもこの季節つていきなり変わる感じするし、紅葉していくじわじわ感はないか。

少し黙り込んでしまった私の顔を、ハクアは心配そうに覗き込んでくる。

本当に綺麗な、文字通りの金色と銀色の瞳。

銀のほうは少しだけ水色に近くて——深い水の底の色をしたアルファの瞳の色とはまた違う色だけど——とても、綺麗な。

私はハクアのこの瞳が好きだな。

人になっても狼に戻っても同じなのは瞳の色と……耳と、尻尾……。

—— ……か、可愛いというか問題だね。

ふつと視線を逸らして笑いを堪える。大の大人の男性に動物耳に尻尾は……。ま。ブラックもそうだけど、アレは慣れた。ハクアも慣れるくらい一緒に居られれば良いな。

—— ……がちゃ

ドアノブに手を伸ばしたら、ハクアに身体を引かれた。

何かと思ったら、中からお客さんが出て行くのと被ったらしい、ハクアが居なければぶつかっていた。別にぶつかるくらいは平気だけど、中から出てきた女性が大事そうに抱えていた光の玉が壊れて

しまっていたかも知れないから良かった。

「ありがとう」

軽く頭を下げて、擦れ違った女の人を見送ってお礼をいうと、ハクアは刹那不思議そうな顔をしたあと、首を振った。

中に入ってしまったええもうハクアが人である必要もない。

「犬に戻って良いよ」

「……犬ではないのだが」

「あ、ああ、ごめん。狼？」

慌てていい直した私にハクアは苦笑しつつ、ふ……っと狼の姿に戻った。

『ところでここは種屋か？』

「ハクア、種屋を知ってるの？ そうだよ、ここは種屋さん。店主に会いに来たんだよ」

『何故？』

「何故って、その必要があるからだよ」

ハクアが、どうしてそんなことを聞くのか分からなくて首を傾げると、ハクアは一瞬足を止めたが直ぐに何かを思い直したようで「分かった」と、続いてくれた。

二階へ続く階段を昇り、書斎の前で足を止める。

さっきお客さんがいたってことは居るはずだし、私が来てることもカナイが知らせているか、それがなくても、この屋敷に入った時点で気が付いているはず。今更、緊張する必要なんて微塵もないんだけどな。自分から帰るのってなんとなく気恥ずかしいというか、未だにちよつと慣れない。

ハクアに待つようにいつて、ノブを握ったまま苦笑した。
深呼吸したあと軽くノックしてドアを押し開く。

「ブラック……居る？」

「マシロ！」

後ろ手に扉を閉めて奥の机に向かって足を進めると、そこへ到着するまでに、お帰りなさいとがつつり抱き締められる。

腕の隙間から、ちらちら窺える尻尾が嬉しそうにゆらゆら揺れて……相変わらず可愛い。私、動物フェチなのかな……？

「それで、今日はどうしたんですか？」

ややして私を解放すると、椅子を勧めつつ問い掛けてくれる。

間違っていないけど、理由なく帰ってくるとは流石のブラックも思っていないわけだ。私は、腰を降ろすのは遠慮して、あー……と、頬を掻きながらごによごによと切り出す。

「あの、ね。今日はちよつとお願いがあつて」

「お願い？ 珍しいですね」

につこりと微笑んで、可愛らしく首を傾げるブラックの視線から逃げるように俯いた。

「おねだりですか？ 何か欲しいものでも見つけました？ 服ですか宝飾品ですか？ それとも別宅でも構えますか？」

「そ、そんなものじゃなくて……その、い、犬」

「はい。犬？」

「そう！ 犬が飼いたいのに！」

思わず叫んだ私にブラックは、すうっと瞳を細めて「犬……ねえ」と微笑む。

その笑みは、私を通り越して後ろにした扉の向こうを見ている。

私はじりつと後退った。

ブラックが怖いわけではないが、何となく扉を挟んでいるのに二人が睨み合っているような気がしたのだ。

「大丈夫。ちょっと大きいけど、大人しくて良い子だから」

後ろ手に、そつと扉を開くと、するりとハクアが大きな身体を滑り込ませてくる。

するつと、私とブラックの間を通り過ぎ、私の隣に並ぶと腕に額を摺り寄せた。反射的に頭を撫でるとハクアは心地良さそうに瞳を細める。

ブラックは黙ってその様子を眺めていたが、派手に溜息を吐いて肩を落とし、俯くと顔を覆うようにこめかみを押さえた。

「貴方が白銀狼を連れてきますか？」

そういったブラックの声が、酷く悲しげに聞こえて、私はきゅつと痛む胸を押さえた。

「え？」

「いえ、こちらの話です。それにしても……エミルたちには反対されて、結局どちらも押し切れなかったから私のところまで持ってきたって感じですね」

その通りです。

「あの、あのね！ この子はハクアって言って、事情があつて群れに戻れないの。だからその事情が解決するまでも良いから」

「ハクア……今、一番勢力のある長ですね。その長殿の事情、ですか？ 縄張り争い程度のこと王都まで広がつてくるとは考えられません……兎に角、どういう事情があるにせよ、私は反対です。今、マシロの元に白銀狼を置くのは良策ではない。それが私の判断です」

「でも、ブラック」

「駄目です」

ぴしゃりといい切られ、私はしょぼんと肩を落とす。

いうと思つたけど、もしかしたら私のお願いなら聞いてくれるかもしれない。と、思つたのに一刀両断とは。もちろんそれでも、その位で引き下がる気はなかったから、次はどう持ちかけようかと思案していたら「もういい」とハクアが口を開いた。

『誰の承諾も必要ない。私が主を定める』
「ハクア？」

すうっと人の形を成し、私に手を伸ばしたハクアの指先が私に触れると思つたのに……瞬きをする間に私の視界には見慣れた後姿が映っていた。

全然気が付かなかった。

—— ……どん！

と、屋敷が揺れ、一面が本棚になっている壁にハクアが叩きつけられていた。衝撃に棚から落下した本は、床に落ちることなくその場に留まっている。

「マシロに触れないで頂きたい」

冷たいブラックの言葉に狼の姿に戻ったハクアは立ち上がり首を振ると、低く唸り声を上げ絨毯を敷き詰めた床に爪を立てる。

僅かな隙にでも、床を蹴り飛び掛つてきそうだ。ぐっとハクアが前足に力を入れたところで私は慌ててブラックの前に出る。

「駄目っ！ ハ、ハクア！」

『何故』

「何故って！ ブラックは私の大切な人だからだよ！ 傷つけて良い人じゃない」

い、いや、傷つけて良い人なんて居ないけど……と、付け加える前に「マシローっ！」と感極まったブラックに抱き締められた。ぐえつと可愛らしくない声が漏れ、位置を保っていた本がばさばさつと落下する。一冊ハクアの頭に当たった。

「ちよっ！ ブラック！ 今、そんな場合じゃ」

『……主は傷つけてはいけないものばかりだな』

ハクアの言葉にブラックの身体がぴくりと反応する。

『種屋をその背に庇うものが居るなど……私は、見込み違いはして居ない』

ブラックは私からそつと離れると、私を背にまわしてハクアと向かい合う。

「マシロに白銀狼など必要ない。マシロにはきちんと守りをつけて

います。役に立たないことが多いですが、まあ、貴方よりは個々の力は増している」

「ブ、ブラック……」

きゅっとブラックの背を掴むと、私のほうへちらりと視線を送ってくれる。その瞳はいつもと変わらず柔らかいのに、ハクアに向ける言葉は辛辣だ。

『私が必要か必要でないかという話ではない。主には命を救われた。その借りを返すのは当然だ』

「そう思うのであれば、素直に離れなさい。通常であるならば、貴方の申し出は心強いかもしれませんが、先にも述べたように彼女には必要ない。戦う力のみならばアルファのほうが上ですし、魔力もカナイのほうが上です。上策を思いつき人を束ねることに長けているのも、恐らく貴方よりはエミルのほうが勝るでしょうし、どれも私には敵わない」

ブラックの並べる言葉に、ハクアは唸り声を上げたがそれ以上食いつ下がることもなく、たんつと床を蹴って部屋を出て行ってしまった。

ブラックが意外にもエミルたちを認めていることに驚いて、少し呆けてしまったけれど、ハクアの尻尾がドアの向こうに消える瞬間慌てて声を上げた。

「ハクアっ！」

私の声に刹那足を止めたような気がしたが振り返ることはなかった。

第十五話：黒猫様のいう通り（2）

追い掛けようとした私の手を、ブラックは離さない。

苦々しくブラックを睨みつけると、困ったように微笑んで「そんなに怖い顔しないで下さい」と引き寄せて頬を撫でる。そして、大きく嘆息したあと「……マシロ、何でも拾わないで下さい」と付け足した。

「ご、ごめんなさい」

その表情があまりにも重たくて、反射的に謝った。悪いことはしていないのに。

「でも、ブラック酷いよ！ 気に入らないのは分かるけど、あんな風にハクアを傷つけて追い出しちゃうなんて！」

「大丈夫ですよ」

「どうして！」

食い下がった私に、ブラックは困ったように微笑み。

何とか私に分かるように、とても思案してくれているのだろう。

やや黙した後、改めて口を開く。

「大丈夫です。彼は貴方を諦めたわけじゃない。もう既に、彼はマシロを”主”と呼んでいました。白銀狼は主と定めたものには忠実ですし、離れたりはしない。近くに居ると思いますよ……」

そこまで、白銀狼のことをわかっているのなら、ハクアにあんな酷いことをいつてまで追い出す必要はなかったと思う。そう思った私の気持ちを察したのか、それに……と付け足してブラックは遠く

を見た。

「白銀狼と種屋は少々因縁があります。私は個人的に彼らがどうとは思いませんが、彼らは違うでしょう」

ブラックの言葉に、私はきゅつと唇を噛み締め押し黙った。

因縁があるということは、寝首を掻こうとする相手ということだろうし、それを私が引き入れてしまったということは……確かに良い話ではない。

ハクアを見た瞬間、ブラックの表情が曇ったのはきつとその所為だ。

でもハクアはそんなことしなないと思うし、そんなことさせない。そう伝えようとしたら先にブラックが口を開いた。

「さて、その話はもうやめましょう。今夜は泊まりますね？ 私は用事が出来ましたから、マシロはゆっくり過ごししてください」

につこりとそういつて頬に唇を寄せる。ちゅつと可愛らしく触れて離れると、くるりと私を扉へと向けた。出て行けということか。私は、それ以上話をするのが叶わなくなったことを悟って、渋々書斎をあとにした。

日が暮れて、二つの月が真上に昇ってもブラックは寝室には戻ってこない。辺境だということもあって、ここの夜は物凄く静かでは虫の声もしない。

最初は、ハクアを探そうかとも思ったのだけれど、ブラックがいうようにハクアは傍に居るのならそれで良いかと思い直した。

わざわざブラックが私に因縁があるといったのだから、その対象を招き入れるのは間違ってる。双方を傷つけないためにも、傍寄らないことも大事だと自分を納得させた。

暇を持て余した私は思いついて薬の調剤でもしようと部屋を出た。

こっちで生活するようになって、私は暇なときはブラックの薬を作り置きしたり、薬草棚の在庫のチェックをしたりして過ごすことが多くなっていた。

ブラックのことだから、特に抜けがあることはないのだけど、今は少しは任せてくれているのか作り置きがなくなっていることもある。

多く作ったものは、町の人にも買い取ってもらったりすることもある。まあ、儲けることが目的ではなくて、ここは辺境だし手に入らない薬草も多くあるから、破格値なんだけどブラックがそれに文句をいうことはない。

その為か、町の中でも一線を画していたこの屋敷も今は『月の館』なんて呼ばれ方をするようになっていることをこの間、近所のお爺ちゃんに聞いた。

この町に人が増えない原因は種屋だ。

残念だけど、これは事実で変わりようがない。私が知っていると、いうことを、ブラック自身が知っているかどうかは知らないけれど、ブラックは昔、ここに屋敷を構えたときにブラックにとっての面倒每を持ち込んだ人を、片っ端から手に掛けたいらしい。

だから、行く先のある人は都や他の町や村に非難した。その結果、残っているのは頼る当てのない人や、金銭的に貧しい人たちだけになってしまった。

私は、はあと嘆息して到着した半地下になっている一室の扉に手を掛けた。

—— …… あれ？

少し開けると明かりが漏れてきた。誰か居るのかな？ って、居るのは一人だけど。

「…… ブラック？」

居るの？ と、続けて扉を開けると地下へ下る階段を、こつこつと下りて行く。地下一階の作業場は奥には温室に抜ける通路もあり、乾燥場もあり、無菌室もあるし、図書館の研究室並みに設備が整っている。

「珍しいね？ どうしたの？」

「マシロこそこんな時間にどうしたんですか？ 眠れない？」

作業台の傍まで歩み寄ると、ブラックは手を止めて不思議そうに私を見た。私が来た目的を話すと、そうですか。と、頷いてくれたもののこんな時間から行うほど急を要するものはないと、当然のこととをいつてくれた。

「休んで置かないと寝坊しますよ？」

くすくすと笑ったブラックに私は眉を寄せる。否定しきれないから私は話題を変えた。

「ブラックは何をしてるの？ それ、何？」

ブラックの手元を覗き込んで訪ねると、ブラックは「ちょっとした細工物です」と説明してくれたけど。用途は不明だ。

「……それって天然の魔法石？」

「ええ、そうですよ」

天然の魔法石は今とても貴重なものだ。

透明度が高くて、紅く部屋の明かりを複雑に反射しキラキラと輝いている。綺麗。

「マシロにも何か贈りましようか？ 大量に大きなものは手に入りませんが、このくらいなものなら時折手に入るんですよ。これも、偶然手に入ったものだったのですが、こうなってくるとここに来るのは決まっていたようですね。こんなにも早く、行き先が決まるなんて思っていませんでしたから……偶然は必然……と、いったところでしょうか？」

ブラックの話は良く分からないけれど、少なくとも私への贈り物ではないということは分かった。なんだかちよつとだけ残念に思うのは私の我侭だ。

でも、そうだとしたら一体誰のものになるんだろう？ ブラックの手の中で細かな文字が削られる魔法石は、腕輪のような形状をしている。

種にも、それ以外の仕事にも、きっと関係ないように思う。

「マシロ……？」

「え？ あ、ああ。うん。何か手伝えることない？」

ぼんやりとしていた私の顔を覗き込んできたブラックの視線から逃げて、そう訪ねるとブラックはやや不思議そうな顔をしたが、こ

とんと手にしていた魔法石を机に置くと私の腰に腕を回し抱き寄せた。

「もしかして、寂しい思いをさせてますか？」

私の鳩尾辺りに顔を寄せてそう呟くブラックに、うつと言葉を詰める。

「直ぐ終わるといえなくてすみません。ですが、明日の朝までにはなんとか仕上げますから……我慢して貰えますか？」

「——……っ」

う、ううーっ。

私、凄い我侭っ子みたいだ。

寂しがり屋で駄々こねて……るわけじゃない！ 断じてないけど……なんだか違うよ。と、否定できない自分が居る。私はここでも学校でも、常に誰かに構われているから、きつとやっぱりブラックが指摘するように寂しいんだ。

「続けてて、良いから……その、ここに居て良い？」

照れくさくて、途切れ途切れに口にした私に、ブラックは迷うことなく返事を返してくれる。

「構いませんよ。眠くなったら寝心地は悪いと思いますが、あちらのカウチソファで休んでください」

顔を上げてあちらと指差した先を見ると、アンティーク調のカウチソファの上に、ぼんぼんと三つも四つもクッションが現われ、

毛布がふわりと掛かった。

私がこくこくと頷いたら、ブラックはそつと腕を解いて作業に戻った。

「話、しながらでも平気？」

「平気ですよ」

私はこうして結局邪魔をする。それを許すブラックも悪い。責任転嫁。

「ブラックはさ、白銀狼の言葉分かるよね？」

「ええ、分かりますよ」

「普通は分からないの？ エミルとか、最初私が白銀狼から名前を聞いたっていったら不思議そうな顔をしたの」

ブラックは手を休めずに「ああ」と、頷くとちらりとだけ私を見て笑みを深めると「思い当たりませんか？」と問い掛けて手元に戻る。

「んー……？」

思い切り首を捻った私に、ブラックはくすくすと笑いを零し答えをくれた。

「種です。マシロは言語の種を飲んでいますからね。だから、白銀狼と通じることが出来るんです。あと竜族とかとも通じることが出来ると思いますよ。彼らは文字は使いませんから……」

最初はここで主に使われているシル・メシア語すら分からなくて、意思疎通も間々ならなかったんだよね。だから……

「マシロ。顔が赤いですよ?」

「赤くないっ!」

「もしかして、思い出して赤くなってるんですか? ふふ、マシロって可愛いですね」

楽しそうに笑うブラックの後頭部に拳を構えたけど、作業中だからぐっと堪えた。

「今はもつとマシロが恥ずかしくなるようなことに、キスしたことが恥ずかしいんですか?」

——…バキッ

そのまま永遠に机に沈んでろっ!

我慢した拳を遠慮なく振り下ろして、ブラックを机に静めると私は乱暴にカウチソファに横になった。ぽすんとクッションが一つ落ちたので拾い上げ、膝から毛布を広げて引き上げる。柔らかなクッションに頭を沈めて、復活し作業を再開したブラックを眺めていると、なんだか眠くなってきた。

きつと揺れてる尻尾に催眠効果が……ふわあああ……。

ま、どっちでも良いや、寝よ。

第十六話：最大限の譲歩

翌朝、ブラックとひと悶着あったあと、寮の前まで送ってもらった。

直ぐ傍だから面倒ないのだけど、どうせなら部屋に直接送ってくれば良いのと思った私にブラックは短く謝罪した。

「図書館自体、魔力的な干渉を受けないように囲ってあるのですが、マシロの部屋は特に強く囲われてるんですね。壊すとカナイが五月蝍いので……」

どうやら私の知らないところでセ。ム張りの警備がなされているようだ。

一度だけ部屋に戻って制服に着替えると、隣の部屋の扉を叩いた。

「おはよう、エミル。起きてる？」

私から部屋を訪ねることは珍しいのだけど、エミルは特に驚いた風もなく「おはよう」と出てきてくれた。

「朝ごはんまだだったら、一緒に食べよう？ 私、食べてくる時間がなくて」

夕食も一人だったから実はあまり食べていなかった。

一人の食事に私は慣れてない。

私の誘いに、朝早くても、夜遅くても、変わることもない春風のように暖かく柔らかな笑顔で了承してもらった。

カナイとアルファも、誘うともちろん了承を貰った。

アルファは自室から出てくると、真っ先に私に部屋を遠慮なく開く。私の隣に居たエミルが「鍵また忘れてるよ」と苦笑する。ごめんね。

自分の個室に鍵をかける習慣なんて付いてなくて。

「ハクア、居ないですね？」

やっぱりその確認だったのか。

苦笑した私の頭をがしりと掴んだのはカナイだ。ぐきつと首を折られて首筋を露わにされる。痛い。痛い、痛いからっ！ 暴れると「ああ、悪い」と手を離してくれるが、お願いだから前置きくらいして。

「いや、昨日血の契約がどうのつていつてただろ？ ……もしかして、消した？」

「消してないよっ！ 消さないよっ！」

さらりとカナイが物騒なことを口にするので、全力否定する。争っても気にしない、という雰囲気であったのは否定しないけれど、ブラックだって私の連れをむやみやたらに消したりしない。

「あのねえ、そんな物騒なことブラックがするわけないでしょ」

多分。と、心の中だけで付け足した。

えーっと不満そうな顔を全員がするので「私の前で」とも付け足した。あー、と納得の声が聞こえそうだ。悔しいけど仕方ない。日頃のブラックの行いの所為だ。

「ブラックの話では、授業が終わる頃には追いつくと思うっていつてたから」

「置いて来たんですか？」

「う……そういわれると、イタイんだけど。どこかに行っちゃって、見付からなかったから」

あんまり心配もしていないから探しもしなかったんだけど。

「それで、結局どうなったんですか？」

廊下を歩きながらそう訪ねてきたアルファに、私はえへへと笑いを零す。

「ブラックもね、話せば分かるんだよ。うん。飼うっていうか、ハクアの事情が解決するまで傍に居させても構わないって」

嬉しいので隠すこともなく、そういった私に三人とも揃って驚いていた。

絶対に駄目だ！ というに決まっていると思っていたのだろう。私もそうだったから。でも、今朝になってブラックは本当に「構わない」といつてくれたのだ。

図書館へ戻る準備を整えた私のところへ来たブラックは、私に箱を渡してくれた。

中身の確認をすれば、昨日せつせと作っていたものだ。

何コレ？ という視線を投げた私に、徹夜明けだというのにブラックは、欠伸一つ零すことなく説明してくれる。

「これを、ハクアの前か後ろの足に付けてください。本当は首輪にしようかと思ったんですけど、マシロが付けて良いのは私だけですから」

—— …… Mに鞍替え？

というか、私にはそんな趣味はない。

さらっと寒いことを口にしたブラックを睨みつけると、ブラックは前言はなかったことにして、話を続ける。

「迷子札みたいで良いでしょ？」

「……これ、つけて貰ったら傍に置いても良いの？ 痛くなったり、苦しくなったりしない？」

細かく傷つけられた細工を指でなぞるが、細かすぎて何と彫られているか私には分からない。

「心配しなくても大丈夫ですよ。私だって、マシロのお願い事は叶えて差し上げたいんです。最大限譲歩してこれだけは譲れません」

認めてもらうことは半分以上諦めていたから、どうやって隠していこうかと思っていたところだったのでブラックの申し出は凄く嬉しい。

「それに、そうでもしないと、マシロは隠れて飼いそうです」

—— …… バレてた。

私の表情で確信を得たのかブラックはワザとらしく嘆息して首を振った。

「う、ごめんね？ でも、その、有難う！ 何をあんなに頑張ってるのかと思ってたんだけど、ハクアの為だったんだね」
「マシロの為です」

どうして私が白銀狼の為に労を尽くさないといけないんですか、とかぶつぶつ零しているが、何の為だろうと嬉しいことには変わりない。

誰の為のものなのか？ とか、勝手に考えてもややもやしていたのも馬鹿みたいだ。

—— …… とんっ

ほっとしたし、嬉しいし…… 私は僅かに開いていたブラックとの距離を縮めて、ブラックの胸の中に納まる。

「マシロ？」

不思議そうに名前を呼ぶブラックは可愛い。
顔を挙げ、ぐんつと背伸びをして「有難う」と、頬にキスをすればもつと目を丸くして、もつともつと不思議そうな顔をして、あろうことか頬を染める。

ブラックは、誰かに感謝されることに慣れていない。

職業柄仕方ないとはいえ、とても寂しいことだ。だから出来る限り、出来る限り、だけど、気持ちは素直に伝えてあげようと思う。

そんなことを思い出して、ふふつと笑ってしまった私に、アルフアは素直に「気持ち悪いです」と口にした。失礼だ。

カナイは嘆息し、エミルは「彼が物凄くマシロに甘いことを忘れてたよ」と残念そうに零した。

兎に角、今回の件は私の勝ちだ。

いや、勝ち負けの話じゃないけど……ハクアが戻ったら伝えてあげよう。と、とても嬉しかったし、ハクアの帰りが待ち遠しかった。

ブラックがいつていた通り、ハクアは午後には戻っていた。

何事もなかったようにしなっと私の部屋に居た。別に入っていないも構わないのだけど、鍵掛けたのにどこから入ったのかと思ったら窓が開いていた。

私って……何か抜けてる。

そういえば授業中突然カナイが「あ」と零した。聞いたけど別に大したことじゃないといわれ忘れてたけど、多分、私の部屋への侵入者を感じたのだろう。

「お帰り、ごめんね、先に帰っちゃって」

「問題ない。大した距離ではない」

大した距離だよ。王都から辺境までは片道最低四時間は掛かるんだよ。

「そうそう、それからね。ハクアに朗報があるの」

机の上に教科書などの荷物を載せ、代わりにブラックから受け取った箱を開けて中身を取り出す。窓から差し込んでくる陽光に反射して、とても綺麗だ。

真っ白なハクアの毛並みにもきつと似合う。

「これを付けて欲しいの」

『それを付ければ、マシロは私の主になるのか?』

振り返ると真後ろにハクアが立っていた。心臓に悪いから、気配もなく背後に立たないで。人型で……。

「き、期間限定、だけど、ね?」

嬉しそうに瞳を細めて、大きな手が私の頬を撫でる。だから、近いんだってば!

「ほ、ほら、付けてあげるから手を貸して」

犬だ。犬だ。犬だ。

目の前のは犬だから、違っ! 狼だから!

って、狼のほうか余計変なほうになってる気がする。

兎に角、私は赤くなる顔を隠すようにハクアから顔を逸らしてハクアの片手を取る。

私がすることに興味はないのか、ハクアは特にそのことに注意を払うことなく、開いた手で私の髪を撫でつけ耳元に顔を寄せる。

幾ら私でも、この距離は近いと思います! くすぐったくもあって、出そうになる声を無理矢理飲み込んで、私はハクアの指先から魔法石で出来た輪を掛けた。

それと同時に、ぺろりと耳を舐められて、肩を強張らせた勢いで輪が腕に滑り込む。

「——……っ!」

弾けるような閃光が腕輪から溢れ、その強い光にハクアは息を呑み私は瞳を閉じた。

何事だと、慌しく皆が駆けつけてくれた気配がする。

驚いてへたり込んでいた私が恐る恐る目を開けると、目の前に居たはずのハクアが居ない。

「ハクア……？」

びくびくと名前を口にする、直ぐ近くで「なんだ？」と返事が聞こえる。けど、その声も何か変だ。ぱちぱちと瞬きし声の主を見ると……

「それ、誰？」

カナイの声が降ってきた。隣にはエミルが「大丈夫？」と傍に寄ってきていた。

「誰、といわれても……ボク、どうしたの？ どの子？」

「……皆さん、冷静になってくださいよ。この状況どう見てもその子どもハクアでしょ？」

アルファが一番冷静だった。

目の前の少年——というか五歳くらいの男の子だ——は何を今更というように頷き首を傾げる。自分の姿が分かってないのだろう。

私は、よろよるとエミルに支えられ立ち上がると机の上にあった鏡をハクアに向けてあげる。

—— ……ちーん。

ハクアの時間が止まった。

そして慌てたように立ち上がり、ぼむっと白銀狼の姿に戻る。

「可愛い！」

思わず出た声に、なんだか低い声が被さった気がする。

ちらとカナイを見ると、目を逸らされた。

柴犬の仔犬くらいだ。赤い腕輪がキラキラしている。ハクアは、その腕輪に牙を立てたが、傷一つ付く様子はない。

カナイは見せてみると、ハクアごと抱き上げて腕輪を観察する。
へー、とか凄いな、とか零してるけど、抱えた腕をハクアに、がつつり噛まれているのは気にならないのかな？ 痛くないのかな？
ややして黙っていたエミルが、我慢出来ないというように笑いを零した。

「エミル？」

「い、いや、ごめん。うん。妙だと思ったんだよ、あの、ブラックが……。今、マシロの傍に白銀狼を置くことを許すなんて」

「笑い事じゃ有りませんよ。憎まれ役を私のところに回さないで下さい」

ぐいっと腕を引かれてエミルから離れると、背後にはブラックが立っていた。

「ブラック！ これ、どういうこと？」

「時を吸い取らせただけですよ。痛くもななかつたと思いますよ。今も苦痛は伴わないと思います。力は体格の差がありますから、低下したかも知れませんが、魔力はそんなに変わってないと思いますし」

問題ありませんよね？ にとっこり。私は別に問題ないけど。

「時間があればカナイにでも作ってもらったのですけど、急がないと何しでかすか分かりませんからね。マシロの傍にケダモノを放置しておくわけにはいきません」

唸ってる唸ってる、唸ってる。

物凄い睨んでる。

ブラックを。

ああ……でも可愛い。

大きさが違うだけで、凄みは全くなかった。威厳とかそういうのもゼロだ。愛くるしい感じが断トツ際立っている！ メロメロだ。特にカナイが。カナイが主になれば良いのに。

「貴方が里に帰るときにでも、外して差し上げますから、用があるならそのままで済ませてください。出来る限り早急に」

カナイの腕の中に耐えかねたハクアは、何とか抜け出すと私の足元に擦り寄ってきた。可愛い。腰辺りまでであった身体は今膝下くらいまでしかない。

ブラックに少し止められたけど、しゃがんだ私は小さい子を諭すようにハクアの頭を撫でた。

「ごめんね。私も知らなかったとはいえ、ちゃんと説明も出来なくて。でも、あのままじゃ誰も納得してくれなかったから……許してくれるよね？」

「もちろん、許します！」

……あんたには聞いてないよ。ブラック。
今、エミルもなんかいい掛けたよね？ いわないで居てくれて有難う。

はぁ、と喜色満面のブラックの台詞に脱力感を覚え肩を落とすが、ハクアの毛並みって超サイコー。ブラックのは短毛だからね。
ハクアは大きなときと同じように気持ち良さそうに瞳を細めると、ぐいっと額を手のひらに押し付けてくる。可愛くて思わず抱き締めた。

「マシロちゃんって、小動物にかなり好かれる傾向にあるんですね。猫とか犬とか……」

—— ……二人ともかなり小さくはないんだけどね……。

第十七話：王子様は金銭的に麻痺してる系

物凄い見られてる。物凄い見てる。

私は、のんびりと屋上庭園でハクアを遊ばせるためにベンチの一角を陣取っていた。だけど、ワンコ……もとい、ハクアは遊ぶつもりはないらしい（当たり前）座っている私の足に、背をぴったりとくっつけ隣に丸くなりお昼寝中。

どっちに何か用事があったのか、なかったのかは、知らないが、カナイがさつきからその隣を陣取っている。

「あ、あの、カナイさん？ 触りたいなら、触らせてもらえば？ 可愛いよね？」

「ば！ 馬鹿！ そんなことあるわけないだろう！ 俺が見てるのはそっちじゃなくて」

どっちだよ。

今明らかに耳に当たる風がくすぐったくて、耳をぴるぴる振るわせたのに釘付けだったじゃん！ カナイも可愛いものの好きなら好きで、無理しなきゃ良いのに、バレてないとも思ってるならある意味凄いだろ。ていうか隠す気があったのかな？

はー……と、嘆息した私にカナイは、こほんっと咳払いして「兎に角」と話を始めた。

「なんかさ、昨日はブラックの実力見せ付けられた感じだよ」

「ハクアの愛らしさを認めちゃった感じじゃなくて」

「いや、そっちもだけど」

そっちもなんだ。

ふわふわと寝てるハクアの背を撫でた私に続いてカナイも手を出

したが案の定噛まれた。でも挫けない。痛くないのかな。

「あいつ、あっさり俺にいうつもりだったっていったら？」

こつつとハクアの前足にくっ付いている紅い輪を弾く。

確かに、昨日時間が有ったらカナイに頼んでたっていった。面倒臭がりだからね。自分は滅多に動かないんだよ。ごめんね。

「俺が作ったら、間をはしよったとしても、最低でも五日は掛かる」
「え？」

「だーからー。こんなもん一晩で出来るか！　ってこと。まず魔法石手に入れて、禁書棚に入り込んで構築式を組んで……だろ？　絶対無理……あ、いうなよ。俺が愚痴ってたこと」

「……アルファテンション上がるだろうね」
「だからいうなって」

苦い顔をして重ねたカナイに、私は笑って「はいはい」と頷いた。その様子に納得したのか「なら良いけど」といいつつ私の向こう隣へ視線を送る。そこにあるのはこの間シゼから預かった徽章便覧だ。

目を通したのか？　と、聞かれたので、まだだと正直に答える。ぱらりと見はしたけどそのくらいでは何も得られない。

「シゼは、お前に知ることを強いているみたいだけど、あまり気にするなよ。あいつは、まだ子どもで……無知は罪だと思っているところがある」

確かに、シゼはいつも自分から知ろうともしない私のことを嫌う。その意見も私は尤もだと思うから、特に反発を持ったこともないのだけど、カナイや他のみんながどう思っているかなんて考えてこ

ともなかった。

「でも、私は知らないことで、みんなに迷惑を掛けてきてるし」

ぽつりと零した私の言葉にカナイは「お、殊勝な態度だな？」と茶々を入れる。むすつとむくれた私の頭をカナイはぽんぽんと叩いて困ったような笑みを零す。

「お前、知っててもどうせ同じだろ？」

ぐさつ。

いっちゃったよ。この人いっちゃったよ。

本人に悪気が全くないところがまた痛い。間違っていないのも痛い。益々眉間の皺を濃くした私の眉間をカナイは指で弾く。痛いんですけど。弾かれたところを抑えて睨みつけるが、カナイは凄く真面目な顔をしていたから怒るに怒れない。

「知ることは全てじゃない。知ること、分かったつもりになるのは一番危険なことだ。それは俺が一番良く分かってる。大体、過去帖なんて捲ってるより、お前は自分の目と耳で確認して回ったほうが性に合ってるんじゃないのか？」

まあ、俺の個人的な意見だと苦笑しつつ、最後に一撫でとハクアに手を伸ばし、噛み付かれてから立ち上がった。何か前にも同じようなこと……。あ……

「私、アルファにも同じようなこといわれた」

ぽんつと手を打ってそういった私に、カナイは凄く不味いもの

を口にしたときのように苦い顔をして眉を寄せる。

「……何か俺っていつも二番煎じ？」

「だね」

デジャヴだ。

だったらいうんじゃないかと肩を落としたカナイに思わず笑ってしまう。それとほぼ同時に「こんな所に居た！」と、エミルが昇降口からこちらに手を振った。どうしたのかと歩み寄ると、エミルは「デートしようよ」と微笑む。何事かと首を傾げると、エミルは楽しそうに話を続ける。

「下でアルファとシゼも待ってるよ？ カナイも行こう。ハクアは行くんだったら人の形で宜しくね？」

君の大切な主のためだよ。と、念を押したエミルにハクアは、ぽふっとお子様の姿になって私の手を取った。そして、空いたほうの手をエミルが取って、ほぼ強制連行状態で階段を下りた。

因みに荷物はカナイ持ち。

図書館の入り口で待っていたアルファによって、ハクアは大きな目のキヤスケットを被せられ、少しだけ色の付いたサングラスまで掛けられた。特に眼鏡は嫌がったが、アルファまで「マシロちゃんのため」と重ねたので渋々外すのは諦めたようだ。

珍しくみんなで出掛けたのはいつもの市より離れたところだった。そこでは沢山の露天が軒を連ねて賑わっている。私が初めて、こちらで市を見たときくらいには賑わっている場所だった。

「それでも少しは減ったんだよ。僕とシゼは午前中に一度来たんだ。マシロたちは授業があったし、早い時間じゃないと特殊なものは手に入らなくなっちゃうから」

にこにこと、逸れないように私の手を取って歩いてくれるエミルに話し掛けられ頷いた。

「この市は渡来品が中心で、三ヶ月に一回開かれてて、本当はね、もっと早くマシロもここに連れて来てあげたかったんだけど」

といいつつエミルは先に見える露天の商品を指差した。

「ここはマリル教会に近いんだよ」

エミルが指差しているのはロザリオだ。

レニさんの胸にも揺れていた特長的なものだ。私はなんとなく納得し頷いた。エミルの指先に気が付いた店主がにこにこと声を掛けてくる。

「このロザリオは一級品だよ。これを身に着けていればマリル様のご加護も一気に強まるってもんさ！ どうだい？ 可愛い彼女に買ってあげたら？」

「ありがとう。でも、遠慮するよ。それは彼女に相応しくないから」

につこり穏やかにそういわれると、店主は食い下がれなかったようだけど、結構、凄いというか失礼なことをいわれてるっておじさん、気付いてるかな？ 気付いてないよね？ 苦笑しているとシゼが「エミル様こちらですよ」と声を掛けてくれる。何？ と、エミ

ルに訪ねるとにこにこことエミルは嬉しそうだ。

「マシロに似合いそうなの見付けたんだ。まだ残っていると良いんだけど」

エミルに腕を引かれ、小さな手に握られている感触がふと消えてきよろきよろと辺りを見回すとハクアはアルファたちと何か見ていた。誰かと一緒ならハクアも心配ないかと思い、そのままついていく。

「エミル、私聞きたいことがあるんだけど？」

足を止めることなく声を掛けた私に今度はエミルが「何？」と私を見詰める。

「昨日、絶対にブラックがハクアのことを許すはずないっていったよね？ どうして？」

私の問い掛けにエミルは、ああと頷き答えてくれる。

「白銀狼を聖獣に指定しているのは国だけれど、それに加えてもっと特別な意味を持たせているのはマリル教会なんだよ」

「特別な意味？」

「うん、そう。マリル教会には、夜空を飾る白い月以外に明確に祀る対象がないからね。白銀狼の見た目と、その能力から、直接白い月から加護を受けているとしているんだ。さっきのロザリオ覚えてる？」

「え、うん。あの両端に宝石が埋まってるやつだよ」

「そうそれ。あれはね、白銀狼を現しているんだ。金銀妖瞳を模造してる。だから、今、マシロが白銀狼なんて連れて歩いた日には、

マリルが転生しましたよーっていつてるようなものだよね」

マシロが拾ってきたときには、かなり驚いたよ……と、苦笑したエミルに私は肩を落とす。

間違ったことはして居ないと思うけど、やっぱり思慮には欠けたかも知れない。気落ちした私を氣遣ってかエミルは繋いでいる手に力を込めて「そんなことよりこっちだよ」と手を引いた。

「あつた、コレだよ、どうかな？」

エミルがそつと手にとって見せてくれたのは、綺麗な紅珊瑚のネックレスだ。混じり気の全くない紅は、深く濃く鮮やかで見るものを魅了する。

「マシロの肌は白くて肌理も細かいから、きつと似合うと思うんだ。午前中にふらふらしてるときに目に付いちゃって一目惚れしたんだけど、マシロはこういうの嫌い？」

そんなキラキラ王子様スマイルで聞かれても。
宝飾品が嫌いな女の子なんて少ないと思う。でも、明らかにコレは分不相応に高級そうな気がする。私が身につけたのでは紅珊瑚に申し訳ない。

「同じコーラルなら白もありますよ？ エミル様」

「へえ、綺麗だね？ でも指輪って……シゼ、意外と大胆だね？」

「っ！ い、いえ、別に他意はなくてですね」

二人が他の商品で話しこんでいる間に、私はそつと紅珊瑚を商品棚に戻した。惜しい気もするけど、きつと今の私の手持ちでは足りない。ちよっぴり引かれる後ろ髪を振り払うと私はくいくいっ腕

を引かれた。ハクアが戻ったのかと思っただけだった。

「やっぱりお姉ちゃんだ！」

くりくりと大きな目が愛らしい女の子だ。私がこの子とあったのはそれほど前の話じゃない。今日は買い物？ と続ける女の子に私は頷いた。

「久しぶりだね、ユイナちゃん」

少しだけ腰を折ってその声を掛けると「知り合い？」とエミルの声が降ってくる。それと同時に……

—— …… シャマリ……

私の胸元にさっきの珊瑚が光る。

「え！ ちょ、エミルこれ」

「プレゼント。ほら、やっぱり良く似合うよ。ね、君もそう思うよね？」

「えっと、えと、はい」

エミルっ！ ユイナちゃんまで巻き込まないで。見目麗しい王子様になっこのり訪ねられたら子どもとはいえ女の子。頷くことしか出来なくて当然だ。私は何とか外そうと首の後ろをまさぐるのだけど、エミルが止め具を握ったままだ。強引なエミルに結局

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

という結果になる。でも、本当に綺麗だ。今の私には勿体無いような気がするけどこういうのが似合う女性になりたいなと素直に思う。

「あ、紹介遅れてごめん。エミルに、シゼだよ、あっちの方で買い物してるのも一緒なんだけど……ちょっと見えないな。それから、この子はユイナちゃん。前に種屋で一緒になったんだよ」

と簡単に紹介する。愛想良くとまで行かないまでもシゼも普通に挨拶を交わしてくれてほっとする。店先では迷惑になるだろうから私たちは人ごみを抜けた。

「今日お爺ちゃんは？」

実は迷子だったのではない、そう訪ねた私にユイナちゃんは刹那逡巡して顔を上げると、一緒じゃないよと首を振る。

「ユイナ、今はね、陽だまりの園に通ってるんだよ。今日はレニ先生のお使いでみんなと来たんだ」

「通っているということはレニ司祭に何かご教授いただいているのですか？」

大抵、一歩も二歩も離れているシゼが私の直ぐ隣に居た。

若干前だ。物凄く珍しい。「きょうじゅ？」と可愛らしく首を傾げたユイナちゃんに、エミルがにっこりと「何か教えてもらっているの？」と聞き直した。

ユイナちゃんは、やっと合点がいったのか、こくこくと頷いた。

「ユイナはね、いっぱんきょーよーと、痛い治すのを教えてもらってるんだよ」

そういえばユイナちゃんには癒し系の素養があるとブラックが告げてたなと思いつく。そうか、偉いねとエミルに良い子良い子されて、ユイナちゃんはぽんわりとした笑顔になる。

分かるよ。うん。エミルからは基本マイナスイオンが出てるよね。

思わず和んでいると遠くから「ユイナちゃん！行こー！」と大きな声が掛かる。ユイナちゃんは帰らなきゃと顔を挙げ、私たちにさよならを告げて足早に立ち去っていく。私もユイナちゃんが見えなくなるくらいまで見送ってたのに、エミルとシゼが私の前に立っていた。

二人の背中しか見えない……。

陽だまりの園の子達から、私が見えないようにしてくれたのだと思うけど、相手は子どもだしちょっとびり行き過ぎな気がする。でも、まあ、やり過ぎ感が否めないのはいつものことか。曖昧に苦笑したところでそろそろ帰ろうと、みんな合流した。

カナイは相変わらず用途不明な細工物を握っていた。

第十八話：今更ながらのお勉強

週末の夜は大抵、ブラックと一緒に外食をして、種屋に戻り週明けまで過ごすことになっていた。

「凄く美味しい！」

今夜は、もちろんいつもとは違って、私の前には明らかに不貞腐れているブラック、隣には、不器用そうにスプーンでスープを掬っているハクアが居る。

「ブラックって、料理も上手だよね」

「口に合ったようで良かったです……良かったですけど……どうして私がハクアの分まで用意しないといけないんですか」

「だから、それは私が用意するっていったのに、させてくれなかったから」

「ハクアがマシロの手料理を食べるのは、面白くなかったんです」
「だから、私たちのも作るっていったのに」

むすっと、そういった私の台詞を流すように、ブラックは、グラスが空いてますね。と、赤ワインを注いでくれる。因みに、ブラックは見た目に反して下戸だ。（花見をしよう！参照）自分のグラスにも注いでいるけど、きっとアルコールが抜けている。

私は、これからそういう機会もないとはいえないから、ブラックのような芸当が出来ない以上、慣れておくに越したことはない少量ずつだけど練習中。

それにしても、こいつ、私の料理に不満があるのか？ むっとした私の気を削ぐように、かしゅんっ！ と、皿を弾いてハクアがス

ブーンを取り落とす。

難しい顔をしながら取ろうとしたハクアを止めると、ずっと新しいものがハクアの前に現われる。有難う、とブラックに告げると、ブラックは短く嘆息して首を振る。

既に三本目だ。

ハクアは、身体が大きさが急に変わってしまったのと、慣れない人型での食事のため、四苦八苦している。でも、それを望んだのは本人だ。ペット同伴でお店に入るわけにも行かない、だから家まで戻ったのにハクアは人型で私の傍から離れなかった。

「そうだ！ 私、少し聞きたいことが」

黙っていると息が詰まりそうだったので、私は切り出した。ブラックは、にこりと私に続きを促してくれる。ハクアはナイフと格闘中だ。こう、軽く引くときだけ力をいれるんだよ、と、手を重ねて助言したあと、座りなおして話を続ける。

「素養ってさ、素養ってどういうものなの？」

私の問い掛けに、ブラックは「今更ですねえ」と苦笑したものの、それほど驚いた様子はない。でもハクアは驚いたのか、格闘していた手を止めて私をまじまじと見る。

「どう、とはどういうことだ？ 素養とは生まれ出でたときに持ち備える魂の一部だ」

ハクアの真面目な台詞に「あー、それは何となく分かる」と頷く。それ以上のなんだ？ という風にハクアは首を傾げたが、ブラック

は穏やかに話を始めた。

「素養というのはですね。器のようなものです。種類はそれこそ星の数ほどありますし、種に定められた素養は掛け合わせにより無限の可能性があります」

例えば、このワイングラス。そういつてブラックは、目の前にあったグラスの中身を飲み干してから、ことんと置いた。

「これをマシロの薬師の素養だとしましょう。貴方は、種によりこれだけの素養を得ました。そして今現在進行形で、その器に、薬師の知識を注いでいる……」

いいながら、とくとくと注がれている紅い液体を眺める。

ブラックは、そのままワインを注ぎ続ける。

もちろん、いっぱいになったグラスからは、ワインが溢れ出てきて真っ白なクロスを紅く染める。

「これが限界です。私は、あの時手元にあった一番良いものをマシロに売りましたから、この限界は最上級階位を得、無事卒業するにとくらいまではあるでしょう」

ことんとテーブルの上に瓶を戻すと、テーブルの上の染みは最初から何もなかったように白く戻った。

「マシロの周りには、正直、各分野に特化したものしか居ないので、とても説明し難いのですが……」

うーん、と少し唸ったあとブラックはテーブルの上に食前酒を飲

むとときに使った小さなグラスを並べた。

「マシロやシゼ、カナイにアルファの話で進めると、少々分かりづらいかもしれませんが、大抵の人は先ほどのグラスのようにただ一つ大きな、というか他のものよりは優れている素養を持っています。例えば魔術、カナイの話になりますが、火・土・水・風……などのエレメントも通常そのうちの一つないし二つ程度のものです。しかし、カナイは……」

カチャカチャと小さなグラスを寄せ合わせ

「こんな感じで、一つの器になっているんです。彼は生来より特出すべき魔術系の素養を持たず。魔術系の全ての素養を備えています。“稀代の天才魔術師”と、彼が称されるのはそのためです。同じように、アルファも、シゼも……そしてマシロも……」

そこまで話し終わるとブラックは、余分なグラスを消し去って「なんとなく、分かってもらえましたか？」と問い掛け「マシロの、知りたい答えに近かったでしょうか？」と振る。私は「うーん、なんとなく」としか答えようがなかった。

「主は何故そのようなことに興味を持つ？」

「え。変かな？」

「変だ。この世界のものが、素養に疑問を持つなど有り得ない……」

この世界のものが……と、繰り返したハクアが言葉を重ねる前に、ブラックは「それでは」と口を挟んだ。

「デザートにしますか？」

「――…何かおかしくありませんか？」

「ブラックは今日、不満ばかりだね？」

食事も済んだし、ブラックが残った仕事を片付けている間に、私はお風呂に入ったり寝る準備を整えてベッドに入っただが……。

「どういう経緯で、三人仲良く並んで寝ないといけないんですか？ 私だってマシロに腕枕なんてしてもらったことないのに」

ハクアを真ん中にして、腕枕してあげてたらこれだ。子どもにやきもちを妬くお父さんみたいだ。思ったけどそれはいわない。あとが怖いから。

ハクアは人型に馴染んだのか、そのまま寝ている。

多分、ブラックに気が付いているとも思うけど、面倒がつて起き上がることはない。私は、うとうとし始めていたから目を擦りつつ起き上がる。

「ハクアは白銀狼なんですから、外でも廊下でも何処でも良いでしょう？ 百歩譲って寝室に居ても良いですけど……せめてベッドサイドとか……」

「仕方ないよ、一緒に良いっていうし。良いじゃない別に子どもなんだし」

「見た目だけです！ それに私はいつもマシロと居られるわけじゃないんです。傍に居られる間くらい近くに居たいのに……」

思い切り、しゅんつとするブラックも可愛い。

ブラックのいい分も、分からないわけじゃない。私だって二人きりの時間があっても良いと思う。でも、この状況で無理をいうのは、やはりハクアに可哀想な気がするし、なんだか恥ずかしい。

「私にどれだけ我慢しろっていうんですかっ！」

「発情すんなっ！」

—— …… ぼすっ！

ハクアを無視して抱きついてきそうなブラックに、むんずつと掴んだ枕を投げつけた。顔面にヒットした枕が、ぽふつと膝の上に落ちると、高い鼻の上が赤くなってる。

そして物凄く凹んでる。

凹んでいるという言葉を、体現しているようにはつきりと落ち込んでる。

「……ブラック、その、あの、えーっと、ずっとじゃないわけだし、私も我慢するからさ」

—— …… 何を？

私も天パってきた。

自らの発言に突っ込みを入れ、がくりと肩を落とす。これ以上ここに居ると、墓穴を掘りそうなので、私はベッドからにじり出て「私の部屋で寝るよ」と告げた。

それに続く形で、むくりとハクアも起き上がる。

当然だけど寝てなかったんだよね。

「行かないで下さい」

当然のように抱き留められる。

期待を裏切らないというか、こういうところはブラックがいくら年上でも可愛いと思う。行かないで。後ろから抱き締められ、そう重ねて首筋に口付けられる。それと同時に、凄く申し訳ない気持ちになって私の口からは謝罪の言葉が零れた。

ブラックのほうへ首を捻ると、軽く唇が重ねられる。

甘く唇を食まれ、うっとりとし顔を落とすといくいと袖を引かれた。

あわわわわっ。

私って、なんて流されやすいんだっ！ 私は慌てて現実引き戻され「ごっ、ごめんね！」とハクアを見下ろす。

「私は邪魔か？」

寂しげな瞳で見詰めてくるハクアの言葉に「邪魔じゃないよ！」と「邪魔です」が被る。私は、反射的に裏拳でブラックを沈めて、そんなことないからね。と、宥めてハクアをベッドの隅へと座らせた。

「それはそうとマシロ……珍しいものをつけていますね？」

座ったハクアの前に腰を折って頭を撫でていると、背後から私の腰に片腕を回し空いた手で首元にぶら下がっていたペンダントを揺らしたブラックに、私はこれまたしまったと思った。

ここに来る前に外して置こうと思ったのに……疚しいことはない

けど、説明するのが面倒だから……。

「ふーん……その反応は、誰かに貰ったんですね？」

私の肩に顎を乗せて面白そうにそう告げるブラックの声がむず痒い。答え損ねて黙っていると「ま、良いですけどね」と、思ったより簡単に私から離れた。

私も背を伸ばすと、やっぱり外しておこうと止め具に手を掛けたが、ブラックにそつとその手を下ろされた。不思議に思った私を他所に、ブラックはそつと腰を折るとペンダントトップを掬い上げ唇を寄せる。

「エミル、ですか？ それとも、彼の助言を得た他の誰か、でしょうか？」

そのまま見上げてくるブラックの妖艶な瞳にたじろぎつつ、私は頷いた。ブラックは私の返答になるほどと呟きつつ姿勢を正すと、口元を覆って面白そうにくつくつと笑いを零す。怪訝な面持ちで首を傾げた私にブラックは短く詫びて話を続ける。

「ケレブターリは素養を否定しました。エミル本人も、素養への疑念と戸惑いがある。それなのに、逆らえない……シル・メシアでは当たり前のことなんですけどね。エミルには見極める目があります。役目に適した人材を、人が必要としている物を、的確に見極め配置することが出来る。これもまた王家の素養の一端です。思い出してください、貴方をここへ導いたのは誰だったか」

つんと胸を衝かれ、はたと気が付く。

あのとき、気持ちの整理の付かない私を、種屋へと促したのはエミルだ。

第十九話：共同生活事情

シル・メシアは悪天候が続くことは少ない。今夜も例外なく二つの月が夜空を明るくし夜の闇の中でも迷うことの無いよう世界を明るく照らしている。

ぼんやりと窓辺に立ち降り注ぐ月光を浴びるのは心落ち着く。太陽の光は眩しすぎるから正直好きではない。

「何をしている？」

「月見です」

むくりと寝台から起き上がった外見年齢のみ少年の白銀狼に簡潔に答えると、ブラックは窓を背にハクアを振り返る。

「種屋は何故私の力を奪わなかった？」

「貴方は何故血の契約を行わないんですか？」

互いの投げた質問にやや黙したあと、同時に、ふっと口角を引き上げる。

「私は誇り高き白銀狼だ。白銀狼が生涯をとして使える主はたった一人。自らの命を持つて護る……だが、今の私では例え私の命と引き換えても主を護ることは叶わない。だから今は契約は行わない」

「そんな貴方だから、私は力までは奪わなかった。考えなかったわけでは有りませんが、力の使い方を知っているもの、己の分を弁えているものにまで手を掛ける趣味は有りません。……今は、という意味ですけどね」

大体……と零して呆れたような溜息を吐いてからブラックは話を続ける。

「貴方もよく種屋へ足を踏み入れますよね？ 私にとっては遠い記憶ですが、貴方にとってはまだまだ鮮明に記憶されているものでしょう？」

ブラックの言葉にハクアは子どもの容姿らしくない笑みを零して「そうだな」と頷く。

「だが、私の父を殺したのはお前ではないのも知っている。同じ種屋だが、お前ではない」

「そうですね？ 私と同じですよ。私は貴方の父上を知っていますよ。手に掛けたときの感触も鮮明に記憶されています。私怨から白化し保管することもなく見せしめのように種を破壊した。あのとき貴方一族に根深い憎念が根付いたことと思いますよ」

「喉けたのは父だ。一族間ではそのことは葬られかけている。皆、私よりも老齢のものばかりだというのに今更都合の良いことばかりを表沙汰にしてどうしようというのか……痴れものどもだ」

「なるほどー、完璧な統率力を誇っていた長も引き継がれてからは一枚岩ではいられなかったわけですね」

どこまでも軽く言葉にするブラックに、ハクアは眉を寄せ短く溜息を零す。

「否定はしない。だが私は……父を慕い今も尚憂いで居る仲間を捨て置くことは出来ない」

「……それが、マシロが隠す事情というやつですか」

窓の棧に体重を預け、寝台の上で心地よい眠りに落ちてしまっているマシロを暫く眺めたあとゆっくりと口を開く。

「種を内包していない魂……世界で唯一素養に疑問を持つ者囚われぬ者……人々に美しいときを分け与える白い月の少女」

静かに寝台に歩み寄り、ぎしりと寝台に片方の膝を着き腕を伸ばしてそつと髪を梳くと「ん……」と身を振るが目を覚ます気配はない。ブラックはそれに満足そうに微笑んで立ち上がると「少し出掛けます」とハクアに告げ戸口へと向かう。ノブに手を掛けたところで「種屋」と呼び止められ動きを止める。

「主は世界のものか？」

真摯なハクアの問い掛けにブラックは笑みを深めて「ご冗談を」と肩を竦める。

「マシロは私のものです。誰が世界になんてくれてやるものですか」

では留守番頼みます。朝には戻りますからと姿を消した。

—— ……ぺらり

それから暫く私の周りはとても平和で、のんびりした時間が戻ってきた。昼間でも寒いな、なんて感じるようになってきたから、図書館でもふらふらと中庭や屋上を散策している人影も殆どない。だ

から私は屋上の一角で徽章便覧を捲っていた。

ハクアが愚痴ることはなかったが彼のほうは手掛かりも何もぶつとりと途絶えて久しく、仲間の搜索は難航しているようだった。

「寒くないか？」

「うん、平気。ハクアがくっ付いてくれるから暖かいし」

それに少しくらい寒くないと、眠気が勝ってきてしまう。種屋の徽章は単純で分かりやすいのに、この便覧に載っているものはどれも複雑で模写しろといわれても私では到底描けないようなものばかりで正直この中にはあの赤ちゃんの手掛かりなんてないんじゃないかと思い始めていた。それに時間が経ってしまった所為もあり記憶が曖昧で詳細が思い出せない。

「だーめだ！ 見つからなーいっ！」

両手を後ろに付き、くわーっと空を仰いだ私の視界に青空は映らなかった。

「何やってるんですか？」

すっごい大きな口。と付け加えられて私は慌てて姿勢を正す。

「ア、アルファ。覗き込まないでよ。恥ずかしい」

「外で見られて恥ずかしいようなことを堂々としているほうが良くないと思うけど。でもゆるーい感じが可愛かったですよ？」

ハクアとは反対隣に腰を降ろしたアルファは私の手元を覗き込んで「また面白くもないものを見てるんですねー」と零す。間違っていないからつい「まーね」と答えてしまったらすよね！と明るく

笑われてしまった。

「アルファは何の用事？」

「用ってほどじゃないし、別にどこでやっても良かったんだけど、どうせ何処でやってもいいことならマシロちゃんのところで行うかなと探してきたんですよ」

といって、座ったばかりのベンチから滑り下り、ストーンと石畳の上に腰を降ろした。首を傾げた私を一度だけ見てにこりと微笑むとアルファは作業始める。

ジャラジャラと腰から下げていたキーホルダー………だけど武器一式………を取り外し、ポケットからパウダーとか布とか手入れに必要なものをぽこぽこ取り出した。

いつも思うけど、アルファのポケットとか持ち物って未来の猫型ロボットのポケットと同じ造りになっているんじゃないだろうか？あんなに入ってるなんて嘘だ。

「僕静かにしてるんで、マシロちゃんも作業続行してくれて全然大丈夫ですよ」

そういわれて私も本に意識を戻したが、一度逸れてしまった気はなかなか元には戻らない。

暫らくは我慢して睨めっこしていたものの、ふと顔を挙げると、アルファがうつとりと刀身を眺めていたので、ねえ、と声を掛ける。恍惚状態っぽかったから気が付かれないかと思ったけど直ぐにアルファがはいと振り返る。

「アルファってそれ全部使えるんだよねえ？」

周りに広げられていたのは、大、中、小それぞれの大きさの剣と、
槍。湾曲刀とかまである。ちょっとした武器コレクションだ。

「使えないもの持ち歩いてても邪魔なだけですよ。どれも一通り以上は扱えますよ」

屈託なくはつきりとそう答えるアルファに凄いと繋ぎつつも私はこの間王宮で握った模擬刀のことを思い出す。

「大丈夫です。もう二度とマシロちゃんに刀なんて持たせませんから」

「え……あ、ありがとう」

自分は持たないとはいえないんだよね。アルファは騎士だし護る為に剣を持つんだから。私の不安を察してそういつてくれたアルファに曖昧な御礼しか返せない自分がちよっとかっこ悪いなと思う。

「皆そうやって持ち歩いてるわけじゃないよね？ 王宮とかでは普通に帯刀してる人居たし」

「ああ、これですか？」

アルファは並べていた剣を一つずつ鞘に収めていった。ちんつと鞘に完全に収まると片手に収まるほど小さく縮小してしまう様子はとても不思議だ。

「これはねー、酷いんですよっ！」

「え、何？」

「図書館の寮に入って直ぐの頃は部屋に置いておいたんです。普通に！なのにカナイさんが『ここは武器庫じゃねえ！』って勝手に激高しちゃって。僕の可愛い愛刀たちに魔術を施しちゃって……」

今ではすっかりこんな姿に……カナイさんだつて直ぐに本の返却サボって部屋の中を本で埋め尽くそうとするくせに僕だけこんな扱いなんて不当です」

あ、ああ………なんというかご愁傷様です。そのときの様子がありありと脳裏に再現されて私は納得した。

「まあ、慣れたら慣れたで便利なんですけどね？」

アルファが前向きな子で良かったよ。苦笑した私にアルファはとも不思議そうに首を傾げたが私はなんでもないよと重ねた。

第二十話：自由というのは責任が重い

日を増すごとに寒さが厳しくなってくる。外に出ると息が白くなることも珍しくなくなってきた。図書館などの建物の中は常に気温が一定なのか、激しい寒暖の差を感じることはないけれど、北風吹いて寒そうな外を眺めていると身体が冷えてくる気がする。

――…パタン

重たい本の表紙を落とす。出来る限り協力したい。そう思うし、私には他の皆みたいに特定の研究内容とかがあるわけではないから暇な午後の時間を使って多くのものを確認しようと今日もページを捲っていたのだけど成果なし。そろそろ折れてきそうだ。なんとなくこれかなあ？ という感じのものが無いわけではない。でも決定打に欠けるというか、コレ！ と断言するのが怖かった。

館内にはもちろん動物の入館は禁止。なので私はハクアと寮と図書館の間にあるフリースペースを陣取っていることが多い。本当はもっと奥まったところでこっそり居るべきなのかも知れないけれど、全く人の気配のない場所ではあまり集中できなかったりもする。屋上とか中庭とかなら別なんだけど、今、外は寒いしね。

「マシロ、ここに居たんだね？」

お疲れ様と顔を覗かせてきたのはエミルだ。綺麗な水色の髪が大窓から差し込んでくる陽光に煌いて綺麗だ。王都には噴水や水場、水路くらいしかないけれど、辺境の町まで行く途中にある湖は時間帯によって色が変わりとても美しくて大好きで、エミルの髪はそんな色をしてる。

「私を探してた？」

「うん。進行状況はどうかなあ？　と思って」

にっこりとそういつて私の隣に座ったエミルは膝の上で閉じられてしまっている本の表紙をコツつと叩く。私は曖昧に微笑んで、ごめんね。と答えるとエミルはゆっくりと首を振った。

「あのね、なんとなく、これかなあとか思うのはあるの。でも、シズが確実じゃないと駄目だっていつてたし、確かに似たり寄ったりのものも多いし……だから、記憶と照らし合わせてるんだけど見れば見るほどこっちゃになっちゃって……その、役に立たなくて、本当、ごめん」

しょぼんつとしてしまった私の頭をエミルは優しく撫でつつ、私の膝の上で本を開く。

「シズは完璧主義なところがあるからね。まあ、そうでないと駄目なんだよ。彼は薬師だから、僕みたいに思いつきで何かをしてしまっわけにはいかないんだ。天才たちは融通が利かないよね？」

そういう、何かに固いところが僕は好きなんだけど。と笑ったエミルにつられて微笑む。

「それで、どの辺りが近いなと思うの？　徽章っていうのはね、見ていると分かると思うけれど細分化してみると数が多いと思うけど、ある程度は形や象徴しているもので絞れるんだよ」

優しい声色で訪ねてくれるエミルに促され、私はぱらぱらと本のページを捲る。私の記憶では星が幾つか刻まれていてそれが太陽の光を反射してキラキラして見えてたような気がする。その星も五芒

星ではなくて、六芒星で……私がぶつぶつと呟きながらページを進めていると隣でエミルがうんうんと頷いてくれている。そしてお目当てのページに到着すると「この辺りかなあ……？　これ、とか、これ」と指先で弾く。エミルは特に穏やかな調子を崩すことなく頷いてくれた。

「この小さなのが幾つあったのかと良く分からないし、それに沿って描かれていたのもよく思い出せないの……あ、でも最初のほうにもこんな形のが……」

そういつてページを戻そうとするとエミルに手を止められた。

「良いよ。うん。何となく見当が付いたよ」

「本当？」

「うん。ありがとう。今日はずっとそれと睨めっこしてたんだよね？　この時間なら食堂も空いてるだろうしお茶にしない？」

そう誘われて私たちは食堂に向かった。殆ど無能な私でも役に立てたなら良いんだけど。そんなことを思いながら。

「オレンジペコだね。丸い味がする」

元の世界に居るときはあまり紅茶と縁がなかったけどこちらに来てからは珈琲を飲む機会は少ない。だから自然と紅茶を飲む機会が増える。暖かなカップを両手で包み込み、ほうつと一息。人型になって隣の席に着いたハクアはマグカップに入れてもらったポタージュスープをふーふーっと必死に冷ましている。猫だけじゃなくて、犬も熱いの苦手なのかな？　なんだか微笑ましい。

「今日はどこかに出掛けてたの？」

「え？ ああ、ちょっと人と会ってたから」

珍しく曖昧な返答に私はそうなんだと頷きつつも疑問が残る。普段のエミルなら私に知らせたくないことなら最初から口にしないし、知ってもいいことならちゃんと説明してくれるのに、どうしたんだろ？

「ごめん、別に隠すようなことじゃないんだ。ちょっとメネル……異母妹と会ってたんだよ。僕には沢山母親の違う兄弟が居るんだけど、彼女とは小さなときから仲が良くてね？」

私の疑問に気が付いたのか、改めてエミルは説明してくれる。妹さんの話をするエミルはとても優しい顔をしている。きつと本当に可愛くて大切に大好きな子なんだろうな。なんとなく私まで優しい気持ちになって「良かったね」と頷いた。私の言葉が的を外したのかエミルは刹那きよとした顔をしたけれど、直ぐににっこりと微笑んで「そうだね」と答えてくれた。でも、そのあと直ぐ難しい顔をしてテーブルの上に乗せた手を組むと思案気に揺らしながら、話を続けた。

「マシロは……マシロはこれからどうするのかな？」

少しだけ戸惑い気味に問い掛けてくるエミルに私はこれから？と重ねて首を傾げる。

「一応、ハクアの用事が解決出来るようにしたいなと、思ってるけど」

とりあえず続けた言葉にエミルは苦笑して、そうだねと頷き言葉を重ねる。

「そのあとはどうするのかな？ マシロは気が付いているかどうか分からないけれど、僕にはここでの素養の限界が来ている。僕は図書館の薬師階級で最上級階位は取れない。今日明日ということはないけれど、僕はここを出て王宮……王城に戻らないといけないんだ。遅くとも次の祭りの頃には……」

お祭りというのはこの王都で年に一度開かれる大きなものでそこで行われるパレードは王家の人たちがこぞって参加しなくてはならないものだ。エミルはこれまでその参加を避けてきた。でも、もう、タイムリミットが近いということなのだろう。

「マシロはまだここで伸びると思うんだ。でも、僕がここを出るということは、カナイやアルファもここを離れる。ラウ博士も王城に戻れると思う。シゼにはまだ暫くここで学んでもらわないといけないことが多いから残ってもらうことになる……だからもし、マシロが図書館に残るならシゼに任せることになるけど……マシロはどうしたいのかな？と思って」

なんとも表現しがたい困ったような顔をして微笑んだエミルに私は逡巡した。確かにここで私は知り合いも増えたし、良くしてくれる人も増えた。でも、やっぱり三人が居なくなると不安だ。シゼが頼りないわけじゃない、でも、それでもやっぱりここには女の子がアリシアしか居ないし、アリシアは今同じ階位に居るけど伸び悩んでもしかしたら種を考えているかも知れない。あのきはきと何でも口にするアリシアが最近私の前で良く口ごもっている。私ではこの世界の人の素養への悩みはちゃんと分かってあげる自信がないから追求はしていないけれど。

「ごめん。なんだかすっかり悩ませちゃったね？」

「え。あ……そんなことはないんだけど、急だったから……」

エミルは、曖昧に答えた私の頭をいつものようにゆっくりと撫で
てくれる。

「君が望むようにあれば良いと思う。選択肢は沢山あると思うけど、
その中に僕らと一緒に王宮に入るというのもあることを覚えておい
て欲しいんだ」

「え、私が、王宮に？」

「うん。その中でも立ち居地は色々有るからそのときに決めれば良
い。図書館を出てブラックの元で生活するというのも、ここに残る
というのも選択出来る」

頭を撫でてくれていた手がそつと下りてきて頬を包む。今の季節
には懐かしくも感じる柔らかな翡翠色の瞳に見詰められ、その瞳は
柔らかく細められる。戸惑いがちに「でも……」と繋いだが、エミ
ルはそこで言葉を飲み込んで首を振ると静かに手を離れた。

「機会があつたら考えておいて欲しいんだ。もしくはブラックと相
談してみると良いと思う。彼も全く考えがないというわけでもない
と思うから」

にこにこつとそういい終わったエミルはそのあとこの話を持ち出
すこともなく他愛ない話を続けてくれた。

第二十一話：初雪

平和ボケって本当だと思う。

この世界に居ると大抵毎日が慌しくて忙しく過ぎていくのに、それすらなくのんびりとした時間がゆっくり穏やかに流れているとそちらに適応してしまい、ちょっとした変化が凄いいことのように感じてしまう。

「今日は冷えるね。ハクアは寒くない？」

「私の住んでいるところはもっと雪深いところだ。この程度では寒いとはいえない」

ベッドの上で毛布を手繰り寄せて、ううつ寒いと丸くなった私にハクアが呆れたように口にした。隣で眠っていたはずのブラックは、もう随分前に起き出したのかベッドは冷たくなっていた。

私はもぞもぞと起き出して出てきた欠伸を噛み殺すと、自室に戻り身支度を整えてからハクアと朝食を取った。ここまではここ最近の家、というか種屋での過ごし方だ。予定では夕方までのんびり過ごし夕食時には寮に戻るつもり。明日からまた授業もあるし、ハクアの探し人というか狼だつて王都から外れたこんな場所には居ないことが確実だからいつもより帰宅の予定も早い。お昼ご飯くらい用意してあげようと思ってリクエストを聞くために書斎へ向かう。

大抵、姿が見えないときは書斎だ。人が亡くならない日はなくて、外出までは控えるもののなかなか訪問者ゼロの日はない。

「マシロは滞在中です。そういう趣味の悪いことはやめてください」

考え事をしながら辿り着いたものだからついノックを忘れて扉を開いた。開くと洩れてきた声に「私がどうしたの？」と顔を上げると見慣れない光景が飛び込んできた。

「ああ、マシロ。おはようございます」

ブラックは至って普通だ。でも私の頭の中は突然真っ白になって全く思考が回らなかった。

そのまま扉を閉めて、廊下を戻る。歩いていたのが早足になり最後は走って部屋まで戻った。ばたんっ！と乱暴に扉を閉めた。閉めた扉を背にしてずると座り込む。心臓がバクバクいつて五月蠅い。

「な、んで、逃げちゃったんだろ？」

自分でも良く分からない。唯、いつも通り来客があつて、ブラックが対応していて……その女性がしなだれかかっていただけだ。

もしかしたらとても大切な人を亡くして立っていることも間々ならなかったのかもしれない。別にそれ以上もそれ以下も、ない。そのはずなのに、どうして？ どうして私はこんなにドキドキして胸が苦しいんだろう。ぎゅうっつと胸元を掴んで膝に顔を埋める。痛い。どうして、泣きそうなんだろう。

「マシロ、マシロ？」

コンコンと背後でノックの音がしてブラックの声が聞こえる。もう少し低い位置でもコンコンと鳴るのが聞こえる。嗚呼、私ハクアまで置いてきちゃった。どうかしましたか？と掛かる声がとても心配そうだ。

扉なんて開けなくてもブラックなら入ってきそうなものだけど、ブラックは私にそんな無粋は働かない。どうしよう、私凄く嫌な子だ。あ、開けなくちゃ……。

「良かった、大丈夫ですか？」

よろりと立ち上がったのろろと扉を開くとブラックは開くまで待っていてくれた。そして、開ききったところでゆっくりと声を掛けてくれる。顔を上げると凄く困った顔している。当たり前だ。

「平気。ごめん、なんでもない……」

「マシロ？ あ、えー……っと、その、泣きそうな顔、してますよ？」

戸惑いながらそういつて手を伸ばす。

「——……っ」

思わず、身を引いてしまった。何にも触れなかった指先が虚空を掴んで所在無いまま降りていくのを眺めていた。どうしよう、どうしよう……傷つけたかも。傷つくよね、私、ブラックを無意識に避けちゃった。

ドクドクドクドクと心臓の音が変わらず五月蠅い。

「わ、私っ！ 帰る」

「え？ あ、それなら送ります」

「良い！ まだ昼前の辻馬車があると思うし、平気。一人で戻れる」

駄目、ちゃんと話をしないと。謝らないと。分かってる、分かっ

てるのに、私はそれが出来ずに「行こう、ハクア」とブラックの横を通り過ぎた。

お願い今だけは引き止めないで……私の声が聞こえたのかどうかは分からないけれど、ブラックは私を引き止めなかった。

ややして、ハクアは私の隣に静かに並んだ。運良く辻馬車は空いていて私の他に、年老いた女性だけだ。私は馬車の隅っこに乗って膝を抱えた。

「主……？」

「今は黙ってて」

私最低。ハクアにまで八つ当たりだ。

片道四時間近くあるというのに、そのあと私は一言も口を開かなかった。ハクアも黙って隣で馬車に揺られていてくれた。一人で居たかったけど一人じゃなくて良かったとも思う。凄い矛盾だ。

「図書館は道が違う」

「うん、少し、散歩」

いつもの停留場所に到着して降りたのに、私が足を向けた先が図書館でないことを指摘してくれたハクアに私は短く告げる。先に帰っていても良いといっても付いてきてくれるだろうから私はそれ以上は何もいわなかった。ハクアはとぼとぼと歩みを進める私に静かに並んでくれた。

「今日は、やけに冷えるね。雪降りそう……ハクアの居たところは雪山なんだよね？」

「ああ、雪深くなる。夏のひと時だけ草原が広がる美しいところだ。人が重宝するようなものは何もないがな」

そんな他愛もない話をぽつぽつと繋いで私は当てもなく歩いた。どのくらいぶらぶらしていたか定かではないけれど、道行く人影も疎らになってきていた。もう、皆帰路につく頃合いなんだろう。肉体の疲労を感じてきたら、なんだかちよつとだけ落ち着いてきた。

「ごめんね、なんだか私自分勝手に動いちゃって」

落ち着いてきたら自分の取った行動が物凄く恥ずかしくなってきた。ブラックにも謝らないといけない。私、話も聞かずに何をやってるんだろう。

「変だよ。うん。変だよ。私ね、勝手に……ブラックは私以外の人は傍にも寄せないと思ってる。だから他の女の人が寄りかかっているの見て、凄く動揺しちゃって。あんなの、全然大したことじゃないのに、躓いたところをえただけかもしれないしさ、悲しみに暮れたたのを慰めてただけかもしれないのに」

種屋はいつだって悲しみに包まれている。言葉にしてみると本当に馬鹿みたいだ。馬鹿みたいで……なんだか泣けてきた。

「私、本当に何やってるんだろう。きつとブラックを傷付けた。力では護れなくても気持ちだけは護ってあげたいと思ってたのに……私って本当にくだらない」

ゆっくりでも前に出していた足は終に止まってしまった。とりあえず路肩によって溢れて止まらなくなった涙を必死に手の甲で拭うのに、全然引っ込んでくれなくて情けなくて益々泣けてくる。

「主、泣くのは構わない、だから瞳を傷つけるからあまり擦らないほうが良い」

私の上着の裾を引いて心配そうに声を掛けてくれるハクアに私は
頷くことしか出来ない。

「主」

尚もごしごしと涙を拭っている私にハクアが声を掛ける。

「主は間違っていない。種屋は主しか寄せ付けない。今日とてあの
者が主の姿をしていなければ種屋は触れられる前に遠慮なく消して
いただろう」

「……え？ 私」

「主は直ぐに居なくなっただから見えてなくて当然だ。どういう魔術
か私には分からないが、女は主と同じ顔をしていた」

そういえば、ブラックは趣味の悪いことはやめろといった。

ブラックが瑣末な理由で人を殺めるのは嫌なのに、私の姿をして
いたから躊躇ったと聞いて現金にもほんの少しだけ嬉しくなる。

最後に流れ出た涙を拭って、私は何とか笑顔を作った。きつとこ
れまでで一番不細工だと自分でも思う。

「それなら尚のことブラックに謝らないと」

「種屋なら、寮で待つといていた」

「え？ そ、そんなの聞いてないけど」

「落ち着いたら伝えて欲しいといわれた」

あーうー……穴があつたら入りたい。私格好悪いにもほどがある
だろ？ 私はがつくりと肩を落とした。日も暮れるし帰ろう。ブラッ
クだけじゃなくて皆も心配しちゃうよ。

私は改めて自分の居る場所を確認する。結構入り組んだところま

で足を伸ばしてしまっていたけど、この裏通りなら知っているとこ
ろだし迷子にはならない。私はそのままハクアと一緒に図書館に急
いだ。

寒い時期の日が沈むのはとても早い。太陽が残してくれる明かり
なんて直ぐになくなってしまふ。私は小走りに進んだ。

ふと、ハクアが足を止めて、すんつと鼻を鳴らす。私も足を止め
どしたの？と訪ねようとする声と悲鳴が重なった。私はびくりつ
と肩を跳ね上げ、声のしたほうを見る。

声の感じからして、子どもだ。甲高い声で叫んでいるのに、ここ
は工業区だから夕時人影はなくなってしまう。現状を確認しないと
と慌てて走るとハクアも白銀狼の姿に戻って着いて来る。角を曲が
ると同時に

「助けてっ！」

と私に飛びついてきたのは忘れるはずもないユイナちゃんだ。私
は反射的にユイナちゃんを後ろへ隠すとユイナちゃんが走ってきた
ほうへと顔を上げる。

「主っ！」

ハクアの切羽詰った声が途中で掻き消される。

「白銀狼っ?!」

腕輪をつける前のハクアと同じくらいの大きな体格の白銀狼が簡
単にハクアをレンガ造りの壁へと叩きつける。ひゃんつと短い声を
上げたハクアに視線を向けたその瞬間、対峙した白銀狼は私へとそ
の鋭い爪を立てた。

「あ、るじ！」

倒れていたはずのハクアが、白銀狼の首元に飛びかかり何とか食らい付いたが体格差が歴然だ。敵うはずがない。

—— …… ボタボタボタ……

刹那状況を理解するのに時間が掛かった。洒落にならない量の出血が地面を赤く染め外気に晒された傷口が鋭い痛みを脳に伝える。それに悲鳴を上げたのは私じゃない。付かず離れずの距離でユイナちゃんが、がくがくと震えている。

「お、ねえちゃ、ん」

「だい、だいじょうぶ。ユイナ、早く逃げて……はやく」

怯えて足が進まないユイナちゃんの背中をどんっと押すのと、ハクアがもう一度地面に叩きつけられるのが同時だった。

ユイナちゃんは誰か助けてと叫びながら勢い良く走っていった。もう少し、ここで白銀狼が私に気を取られてくれたら、ユイナちゃんは助かる。ハクアも、助けなくちゃ。

そんなことを考えるまでもなく白銀狼は私に向かってきた。ちらりと視界の隅に移ったハクアが動かない。

何とか両腕で身体を庇うように構えたけれどそんなものの何の意味もなく容赦なく私の肩口から喉元に太く鋭い牙が掛かり服ごと皮膚を切り裂いていく。

ピン…… つか細い音がして地面にはらばらと紅珊瑚の粒が散らばってしまった。ああ。折角エミルにプレゼントしてもらったのに、ごめんね。

もう、立って居られなくてがくりと地面に膝をつき自らの血の海の中へと身体を横たえた。

ずくずくと襲ってくる痛みの上に、はらはらと白く冷たい綿が舞い降りてくる。

映画みたい……こんなときに、初雪なんて……。

死んじゃうのかな……？ 嫌だな、私、まだ、謝ってないのに……。

白銀狼が唸っている声が酷く遠いところのような気がする。見上げていたはずの真っ暗な空から舞い降りてくる雪まで、黒く赤く深く沈んでいく。

「大丈夫だよ、心配しなくても真白ちゃんは僕が見てるから。お母さんはお仕事に行って」

懐かしい声が聞こえてきて、目を開けると懐かしい姿が飛び込んできた。

「でも、娘が熱を出しているのに出社するわけにも」

「大丈夫だって、郁だって一緒だし。食事薬もちゃんとしてあげるから」

ね、真白ちゃんとお兄ちゃんの懐かしい笑顔と郁のほんの少しだけ不満そうな顔とお母さんの心配そうな視線が向けられる。でも、こういうときの臣兄は強引で、お母さんは仕事に行かないといけな

い雰囲気になる。

こういう日、決まって臣兄はいつもよりちょっとだけ郁斗より大きなプリンを作ってくれる。だからいつも郁斗はふくれつつらでそれを見ている。なのに、絶対欲しいとはいわないしずるいともいわない。いつもなら私の分まで横取りしてしまうのに、なんだか凄く可愛い気遣いに嬉しくなっていた。お兄ちゃんが片付けの為に席を外すと必ず郁斗が手を握ってくれていた。お兄ちゃんの前では絶対やらないのに、居なくなったらたんきゅっと私よりほんの少しだけまだ小さな手が握ってくる。

「おねーちゃん、死なないで……」

そうそう、いつも縁起でもないことを口にして……。

第二十二話：堕ちた月（1）

「おねーちゃん。おねーちゃん……」

夢……瞼が重い。それでも何とか持ち上げるとうつすらと見覚えのない天井が映る。きゅつと手のひらに圧迫感がありか細い声が届く。郁斗の声はいつの間にか女の子の声になってると思ったたら……ユイナちゃんだ。

今度こそはつきりと目を覚まして、起き上がろうとしたら全身に激痛が走った。

「お姉ちゃんっ！ 起きた！！」

ぎゅつと私の手を掴んだまま立ち上がったユイナちゃんの動きにまた身体が悲鳴を上げる。激痛に眉を寄せるとユイナちゃんが慌てて握っていた手をそつとベッドに戻して、私の顔を覗き込んでくる。

「大丈夫？ おねーちゃん」

「ユイナ、ちゃん……いた、い、とこ、ない？」

声が掠れる。寝起きだからだろうけど……情けない声だ。私の言葉にユイナちゃんは「え？」と零したあと、大丈夫だよと頷く。良かった……ほつと肩の荷が一つ下りた気がする。

「ハク、アは、いる？」

ユイナちゃんは大きな瞳を瞬かせてハクア……と繰り返したあと悲しそうに首を振った。

「お姉ちゃんの連れてたワンちゃんだよね？ ユイナ、見てないの。ごめんなさい、今まで忘れてた」
「い、よ」

物凄く申し訳なさそうに肩を落としたユイナちゃんの頭を何とか自由になるほうの手で撫でた。はあ……自分の吐き出す息が熱い。頭が重い鈍く痛い。身体は、もう良く分からない。

「お姉ちゃん、ずっと寝たままだったの。三日経ったんだよ。ずっと眠ってて、夢見てたみたい。怖い夢？」

心配そうに問い掛けてくるユイナちゃんに何とか笑顔は作れたかな？

「優しい、夢だよ……」

優しくて懐かしい夢だ。私はゆっくりと重たい瞼を閉じた。それとほぼ同時に聞き覚えのある声が気遣わしげに掛かる。

「ユイナ、目を覚ましたら直ぐに知らせるようにいつて置きましたよ？ 今はまだ、マシロさんに無理をさせてはいけません」

ユイナちゃんはその声に立ち上がり「ごめんなさい」と短く詫びて訪問者と入れ替わるように立ち去った。

「レニさん」

視界に入った姿に身体を起こそうと思ったけれど無理だった。レニさんはそんな私に苦笑して「少しだけ起こしますね」といってそ

つと私の背に腕を通し持ち上げてくれた。ずきりつと肩と腕の傷が痛み顔を顰めたがなんとか我慢は出来そうだ。

「喉が哽れていますね。お辛いでしょう?」

入ったときにサイドテーブルに置いたのだろうゴブレットをそつと私に握らせて「飲んでください」と促す。身体を支えてくれているのはこの為だろうけど、ちょっと近い。そんなことを考えてしまったのを躊躇っていると思ったのか中身を説明してくれた。

「化膿止めと熱冷ましです。変なものは入っていませんよ」

「そんなこと疑ってませんよ」

ちびりと喉を潤すと少しだけ声を出すのが楽になった。そのままゴブレットの中身を飲み干した。美味しくはないがそんなに味はない。

「傷の消毒をしますから、こちらに背を預けてください」

傍にあつたクッションを枕元に重ねてレニさんはそつと腕を抜いた。重心が移るとき痛みはあつたけど我慢出来ないほどではない。

「包帯解きますけれど、あまり見ないほうが良いかもしれません」
「平気です」

きつぱりとそついった私にレニさんは、そうですかとそれ以上は止めなかった。片方の袖を抜き、肌を晒すと少し寒いような気もする。すると腕の包帯が取り除かれると最初にハクアに出来ていた傷を思い出す。

左腕の肘から手首にかけて大きく裂けていたのだらう。綺麗に縫

合してあるもののまだ傷跡は痛々しくて、ちよつと刺激があつただけでも指すような痛みが走る。奥歯をぎゅつと噛み締めて我慢していたもののじわりと涙が浮かんでしまう。

「傷跡は残りそうなら治癒師の方に頼んで消していただきますよ。というか、ほぼ確実に残りますね……ですが、運は良かったのだと思いますよ」

これだけ深く挟られていて一体どの辺りが良かったというのだろう？ 苦悶の表情を取り除けないまま私はレ二さんの話の続きを待った。レ二さんは手際良く消毒を終えて綺麗に包帯を巻き終えると、肩口の包帯に触れる。少し抵抗があつて肩を強張らせたが「すみません」と短く謝られたらそれ以上の抵抗は出来ない。私は怪我人だ。

「本来ならマシロさんの首は飛んでいたかも知れない。でも首元に何かされていたのではないですか？それが引っかかって深い傷には至りませんでした」

いわれて私はそつと無傷な右手で喉元に触れる。縫合の必要もないくらい浅い引っ掻き傷が残っている。エミルに貰ったネックレスの犠牲で私は助かったわけで……あれはやはり私の為にあつたといえるのかな？ その隣はやはり深い傷で、正直見たくない感じの痕になっているだろう。怖いので触るのは控えた。

「あの、ユイナちゃんにも聞いたんですけど、ユイナちゃんに怪我はないですか？」

「ええ、貴方のお陰で……」

「良かったです……それから、仔犬を見ませんでしたか？ 私の傍に倒れていなかったかと思うんですけど」

「犬……ですか？見ていませんね。私が駆けつけたときにはマシロさんが倒れていただけでした」

きつぱりとそういいきつたレニさんに、ある種の違和感を感じながらも私はそうですかと頷くしかない。でも、本当に居なかったのなら、ハクアは無事に逃げてくれたのかも知れない。そうだったら良いのになと思った私が服を調えるのを手伝ってくれながらレニさんは、ふふつと堪えきれないという笑いを零した。どうかしたのかと訪ねると軽く首を振りベッドの横においてあつたさっきまでユイナちゃんが座っていたんだろうなという椅子に座り直すにつこりと優しい笑みを浮かべてくれる。

「マシロさんは他人のことばかり気にするのだなと思ひまして……今一番苦しく辛いのはマシロさんではないですか？ 傷からくる熱も下がっていないですし、傷自体まだ塞がっていないので僅かな震動でも激しい痛みが伴うはずです。それを嘆き己の身をあんじるのが先ではないですか？」

「……はあ、そんなものでしょうか？」

いまいちレニさんのツボが良くわからなくて曖昧に答えるとレニさんは益々肩を揺らした。

「あ、あの……それより、私すっかりお世話になってしまってるみたいなので、その失礼でしたら……」

楽しそうに笑っていたレニさんにそう切り出すとレニさんはぴたりと笑いを止めて「それは無理です」と首を振った。えっ？！と驚く私の背中から詰めたクッションを抜き取りつつ私の身体を支えて話を続ける。

「良く考えなくても今の状態をお分かりになるでしょう？ マシロさんがご自身で戻ろうとなさるのは自殺行為です。兎に角、熱が下がって傷が塞がるまでは絶対安静です」

「でも……その……い、っ……」

ゆっくりとベッドに戻されただけに痛みが身体中に響く。思わず眉を顰めた私にレニさんは本当に申し訳なさそうな顔をする。レニさんが私を慎重に扱ってくれたのは分かる。それなのに我慢出来ない私の方が悪いと思う。だからこんな状態でといわれるのももちろん分かる。

きゅつと唇を噛み締めた私にレニさんは細く長く溜息を零し「分かりました」と頷いた。

「では、こうしましょう。図書館にこちらから使いを出します。そして、迎えに来ていただいたらどうでしょう？ 私としましてはやはりあと二三日は安静にしていって欲しいのでその旨も添えさせていただきますが……」

それで宜しいでしょうか？ と重ねられ、私は胸の悶えが取れたようにほっとして「はい」と頷いた。その様子にレニさんも穏やかな笑みに戻った。

「では何か食べられそうなものを用意してきますからそれまでお休みくださいね。大丈夫、直ぐに眠れますよ…… ゆっくり休んでください」

レニさんの言葉を最後まで聞くことなく私はうとうとと再び眠りに落ちた。

次に私が目を覚ますと夜だった。

頭がぼんやりするのはきつと眠り過ぎた所為だと思う。

ベッドサイドに置かれていたランプには魔法石が灯っている。物音一つ生き物の気配一つ感じない、真っ白で、真っ暗な空間。外から入り込んでくる日の光から時間が過ぎ行くのは分かるのに、時間の感覚が狂って行くような気がする。

変だなと思いつつ、無傷な右腕を突っ張って身体を起こしてみる。さつき起きたときほどの痛みはない。頭も痛みは減ったと思う。きつと薬が効いたんだろう。

「目が覚めましたか？」

「え、あ……レニさん……こんな時間にすみません」

私が目を覚ます時間が分かっていたように、かなり良いタイミングだ。レニさんはトレイに食事と薬湯を載せて運んでくれていた。

「食欲は余りないかもしれませんが、もう彼は何も口にしています。少しでも食べてくださいね」

と微笑んで傍に座ったレニさんはそつとトレイの中身を掬って私に差し出してくれる。ええつと……。思わず戸惑った私にレニさんは「おや」と少し驚いたような声を上げたあと「そうでした」と苦笑して僅かに頬を赤らめると、お皿にスプーンを戻しトレイを私の膝の上に乗せてくれた。

「すみません、子どもが多いのでつい……」

「あ、ああ……そう、ですよね。うん。小さい子は、あーんすると喜びますよね」

はははと私も乾いた笑いを零して、折角持ってきてもらったので食事を口にする。通常よりもっとずっと柔らかい感じのリゾットだ。熱の所為で味覚がぼやけていて正直味は余り分らないけれど、きつと美味しいのだろう。

「これ、レニさんが作ったんですか？」

「え？ ああ、はい。夜は特に他に用を足すものがありませんから、私が全て面倒を見ます。とはいっても子どもたちは子どもたち同士で面倒を見合っていますけれどね？ 私は唯居るだけの監督みたいなものです」

ふふつと優しい笑いを零すレニさんに釣られて私も微笑む。食事をする間、レニさんは他愛もない話に付き合ってくれた。日々子どもに接している所為か、レニさんの物腰はとても柔らかくてほんと安心するものだ。

済んだトレイをサイドテーブルに避けてくれたレニさんは昼間と同じ薬湯を私に手渡ししてくれる。

「ご馳走さまでした……あの、薬もわざわざすみません……薬湯で作るの面倒だと思います……でも効きも良くて、その、大分痛みが引きました。まだちょっと、頭はぼーっとするんですけど」

苦笑しつつ、私は薬湯に口をつける。おずおずと口にした私にレニさんはお気になさらずにと微笑んでくれる。

「寝たきりになっていましたし、太陽の恩恵も殆ど受けていませんから頭の中がぼんやりとしているのでしょう。明日は日の高いうちに目が覚めると良いですね」

やんわりとそう告げられて私は本当にそうだなと思いつつ頷いて、

空になったゴブレットをレニさんに手渡すとゆっくりとベッドに身体を倒した。直ぐに緩い眠気が襲ってきて「お休みなさい」と声が掛かると深い眠りへと落ちていく。

第二十三話：堕ちた月（2）

次に私が目を覚ましたのは夕刻だった。

子どもたちがわらわらと私の部屋を覗きに来て、入室を許されていないのか窓辺から次から次と違う顔が出たり引つ込んだりしていた。なんだか人間もぐら叩きでも見ているようで、ちよつと笑ってしまう。目が合って同じように笑ってくれたのに「うわっ！ 先生だ！ 逃げろっ」という声でクモの子を散らすようにばたばた走り去ってしまった。

「私は鬼か何かですか、全く……」

ぶつぶつと零しながら軽いノックと共に部屋に入ってきたレニさんと目が合ってレニさんは笑って肩を竦める。こうして内側に居ると絵に描いたように平和だと思う。日中は子どもたちの活気に溢れ、夜は静かに更けていく。当たり前前の日常だ。

「……あの、誰かから、連絡ありませんか？」

「ありませんねえ。暫くは絶対安静だと加えたので皆さん時間を置いているのではないですか？ お忙しいとか……」

「そう、ですね」

昨日と同じように食事と薬湯を用意してもらい口にしながらそんな話をする。でも……おかしいな。ブラックやエミルが忙しいにしても、アルファやカナイなら直ぐに来てくれそうな気がするのに……！ というか、エミルが直ぐにでも迎えをよこす手はずを整えてくれそうなもののに。

かちやかちやと食器の中身を行儀悪くいじめて口に運べなくなってしまった私にレニさんはやんわりと話を続けてくれる。

「都合が付かないだけです。ある程度回復するまでこちらに任せてくださっているのかも知れませんが」

そんなに泣きそうな顔をしないで下さいねと続けられてくんと頷くことしか出来ない。レニさんがいうことは分かる。分かるけど……寂しい。

「それより、傷の調子は如何ですか？」

「あ、はい……昨日よりは良いと思います。動かすのはまだ、少し……」

「そうですか。傷の様子を後で見て、明日、明後日のうちには糸を外して起きましようね。肉が絡むと痛みますから」

はは、レニさん、食事中の会話じゃないよ。

曖昧に零した私の笑いに気が付いたのかレニさんは、すみませんと少し慌てたように謝罪した。レニさんって結構人間味溢れる感じの人なんだな。どこかその様子にほっと胸を撫で下ろし私は食事を続けた。同じように薬を飲み、眠りに付くと今度はようやく日中に目が覚めた。怪我をしているのも上半身だけだし、自分で起き上がることも割りと平気になった。もぞりとベッドから起き出して、ぶらりと腕が下がっていると傷が痛むので手近にあったストールを三角巾替わりにして腕をつり、少しだけ外に出る。

冷たい風がひゅうつと吹いてきて私は身体を縮めた。部屋の中は全く寒暖なんて感じなかったのに、外はやはり寒い。

—— ……雪、だ。

緑と白の単調な印象だった教会は今、白一色に変わっていた。この辺りに人が寄ることは少ないのか見える庭には誰の足跡も残って

いない。

「おねーちゃん」

怖いぐらいの静寂の中私は痛む身体を抱き締めた。声が掛からなければ泣きそうだったかもしれない。私は掛かった声に振り返る。私に声を掛けてくれたのはユイナちゃん、私の姿にぱたと駆け寄ってきてくれた。

「おねーちゃん、起きて大丈夫なの？」

「平気だよ。寝てばかりだと根っこが生えちゃう」

にこにこそう口にするとユイナちゃんは、明るい声で笑ってくれた。元気そうで良かった。こんな小さな子が、今の私と同じ痛みを受けるくらいならやはりこれで良かったのだと思う。

「あ、ユイナちゃん。レニさんから何か聞いてない？ 誰かが私を迎えに来てくれるはずなんだけど」

「ううん。何も聞いてないよ。誰か来てくれるの？ あ！ 市場で会った王子様？」

屈託ない笑顔でそういったユイナちゃんに、私にもこりと微笑んで頷いたものの……なんだか自信なくなってきた。

「他にも、来てくれそうな心当たりはあるんだけど、皆忙しいみたいで」

口に出すと余計に寂しくなってきた。本当に、皆忙しいから来られないのかな……本当に……

「おねーちゃん！」

「っえ？」

「大丈夫！　きっと迎えに来てくれるよっ。ここの皆ね、皆。誰かが迎えに来てくれるの待ってるの。でも誰が迎えに来てくれるかわからない子ばかりだから、皆少し寂しいの。でも、おねーちゃんはちゃんと分かってるんでしょう？　なら、大丈夫だよ！　きっと、大丈夫！」

ぎゅっと小さな握りこぶしを作って力強くそういつてくれるユイナちゃんに、私も何とか「そうだよね」と笑って見せた。子どもにそんな心配を掛けるなんて私もどうかしている。

—— …… 大丈夫。きつと、大丈夫。

そう、何度も何度もいつて聞かせたのに、不安は庭を覆いつくす雪のようにどんどん私の心を覆い尽くして…… 傷の痛みよりも、今は心の痛みの方が酷くなった。

無事に抜糸も済ませてもらい、勢い良く動かしさえしなければ耐えられる程度まで回復した。今日はレニさんが魔法士さんと呼んでくれると聞いていた。授業で聞いたことによると魔法士という人は魔法の力で傷跡を消したり煩っている部分を見つけたりしてくれる人で、治癒師と薬師の素養を併せ持った人のことをいうらしい。

私は日がな一日ぼんやりと外を眺めていることが多かった。自分で歩くにも不自由しなくなっただし、帰らなくてはと思うものの、私はマリル教会から出ることが出来なかった。あれからも何度かレニさんに使いの話は聞いたのだけど、確かに連絡は届いているはずだ

といわれるのに一向に図書館から連絡はない。

—— …… 私はもうあの場所には必要ないのかもしれない。

どうしてだか分からないけれど、そう思えてならなかった。

「これは酷い。女性にはお辛い傷跡でしょう。大丈夫ですよ、余ほどの古傷でない限り治せない傷はありません」

そう、魔法士は豪語したのに傷跡は表面的なものだけで盛り上がった肉芽は消えることはなかった。レニさんは酷く申し訳なさそうで、私なんかよりずっと焦燥してしまっていたけれど、私は元のよう動きさえすれば特に問題なかった。

「今日の薬です」

そういつてここで初めて目が覚めたときから一度も休むことなく私は薬を飲み、今も尚飲み続けている。頭の中に掛かったもやのよくなものが晴れなくて、意識ははつきりしているはずなのにぼんやりする。きつとこれは、心に巢食ってしまった寂しさが考えることを拒否しているのだと思い、私は特に気にしないようにした。

「おねーちゃん、おにーちゃんたちから何か連絡あった？」

来る度にそう訪ねてくれるユイナちゃんに今日も同じように首を振った。

白い雪が深々と音もなく降り積もっていく。色鮮やかだった私の心も真っ白にしていく。

「ごめんね、臣兄、郁斗……」

いつものように誰にも踏み荒らされていない真っ白な庭を見詰めて膝を抱え込む。元の世界に戻ったとき、私はその選択は間違いだと思った。私はシル・メシアに戻りたいと願った。そして後悔なんてしないと思った。きっと元の世界で私のことを気に掛けてくれているだろう人たちの為に後悔なんてしてはいけないと思った。

ブラックの傍に居るとき、もしもこの関係が崩れてしまつたらということも考えた上で、私はある程度覚悟もしていた。王都で一人で生きていくことがあるかもしれないからきちんと手に職をつけて自分の力で立たなくてはとシュミレートしたこともあった。でも、それがまさかこんなに早く来るなんて思っていなかった。

—— …… 私は誰にも必要とされない子で、私は一人きり、誰も私を……。

「マシロさん」

急に掛かった声に私は顔を上げると、肩に暖かいストールが掛かった。冷え切っていた身体がじわりと熱帯びる。

「折角怪我が治ったのに、次は病人になってしまいますよ」

そつと差し出された手に、私はそつと手を伸ばす。手のひらが重なるときゅつと握り締めて一息に立ち上がらせてくれる華奢に見えるのに力強い腕。見上げる先はいつもの笑顔だ。

「泣いていたんですか？」

「え……いえ、泣いては、いません」

確認の為目じりを拭ってみる。私は泣いてなんていない。大丈夫ですよと、口角を引き上げて見上げると、レニさんは悲しそうに眉を寄せて私の頬を撫でる。

「可哀想な子」

きゅつと心臓が縮む。

「遠い月からたった一人で落ちてきたのに、誰にも必要とされない悲しい子」

レニさんの静かで優しい慈愛に満ちた声が私の心に積もっていく。

「愛したものには裏切られ、その身は引き裂かれた」

彼は私しか愛せないといった。私しか必要ないと……信じているのに、信じていたのに。心が悲鳴を上げる。痛くて痛くて、心から何かが溢れ出てくるようで、私は必死に胸元を押さえつける。

「マシロは哀れな子。貴方は彼らを必要とするのに声は届かない。彼らは貴方を必要としない」

私は必要のない子……たった一人でこの世界に残されて、たった一人で生きていく。哀れな子。

「そんな、こと、ない」

目が離せない。違うと否定しこの場から走り去れば良いのに、私に枷はもつないはずなのに逃げ出せない。

「誰も……来ませんね……」

そう哀しげに締め括られ、はらはらと私の頬の上を涙の粒が滑り降りた。

「可哀想な子」

大きな両の手が私の頬を拭っていく。

「マシロ、助けてください。私たちには貴方が必要なのです。貴方でなくてはならないのです」
「私」

レニさんの手のひらが私の頬を包み顔を固定する。もう、彼の瞳から逃げられない。もう、誰も私を必要としない、この世界で、彼はこの場所は私を必要とする。

「何が出来るんですか？」

あれ……？ おかしいな。シゼは、レニさんの何に気をつけるといつていただろう？ 記憶がどんどん曖昧になる。まあ、良いか。そのシゼだって私のことなんて必要としない。最初から私を嫌っていた。今も、ずっと嫌っている。

—— ……僕は貴方のような人嫌いです。

ああ、何も今それを思い出さなくても……きりきりとお腹の裏側
辺りが傷む。

「魂に種を孕まない。唯一の存在。私たちを美しいときへと導く神
使い。貴方はただ在るだけで良い。それだけで、私たちには大きな
救いとなり人々の助けとなる」

本当に、それだけで私は誰かの役に立つのだろうか？

でも、もう、誰にも必要とされなくなった私。居場所を失ってし
まった私。それなのに私はここに居て良いのかな？

遅疑逡巡してしまう私の視界は衣擦れの音と共に覆われた。とく
ん、とくんと優しい音が伝わってくる。暖かな血の流れを感じる。
一人きりの私に居場所を与えてくれる。私は何も持つては居ないの
に。そんな私を必要としてくれる人。

心に悲しみが降り積もり、孤独が支配して、何もない闇にあった
私への光。頭の中の靄がより一層濃くなり、私の思考は閉ざされて
いく。

「聖女となり、私たちを導いてください」

私を求めるもの、孤独を払うもの、私は……私は……。

「……はい」

今日も雪は降り続いていて、もう止むことはないんじゃないかと
そう思った。

第二十四話：仕組まれた盲点

「おじちゃん、おじちゃん」

図書館の受付カウンターを必死に覗き込み声を掛けてきた少女にカーティスはのんびりと「どうしたい、お譲ちゃん？」と問い掛けた。

「あのねユイナ、おねーちゃん……ああつと、マシロちゃんのお友達に会いたいの」

「マシロちゃんのか？ エミルたちなら最近忙しそうに何かやってるな。んー、ああ、待ちな。呼んでやつから」

「急いでるの！ ユイナ、自分で行くから場所教えて！」

「駄目だよ譲ちゃん。寮棟へは部外者は入っちゃいけないよ！」

子どもの素早さには敵わない。結局場所も聞くことなく図書館の奥へと入り込んでしまった。「ああ、ちよつと」と追い掛けようとしたカーティスは別の訪問者に捕まってしまった。

「待て！ 落ち着け！ これ以上破壊するな！」

「落ち着いています。何も壊そうなんて思っていないせん」

マシロが良く使っていたフリースペースの一角で打開策を得ない面々は集っていた。

「お前な、魔力が垂れ流しになってるんだよ！ これ以上俺に幻視と結界を続けさせるな」

「では解けば良いのです。図書館がなくなっても誰も私を責めませんよ」

壁に背を預け苛々と口にするブラックにエミルが冷たい声を出す。

「マシロは責めるよ。ここはマシロの帰る場所だ」

「帰る場所は、種屋ですっ！」

「そのどっちにも帰ってこないんですから、いい合ったって仕方ないでしょー」

四人は堂々巡りの会話をずっと続けていた。あの日、マシロとハクアは共に消えた。馬車で王都まで辿り着いたことは分かっているのに、そのあとの足取りがぶつつりと途絶えている。何度も何度も都の中は探して回った。ブラックに至っては白銀狼の里にまで足を伸ばした。

「大体、元はといえばちゃんと送り届けなかったブラックが悪いんです」

最初のうちはアルファの暴言に一々噛み付いていたが、ブラックも正直凹んで居た。いい返す気も失せている。短い溜息だけで答えた。しかし、ぴくりと耳を緊張させたブラックは「誰か来ます」と図書館へと続く扉へと視線を送った。壁から背を離れたブラックはカナイに幻視を解くようにいって、アルファに扉を開けてくるように命じた。自分で行きなよとぶつぶついいながらもアルファは従い、扉を開く。

「う、わぁっ！」

それと同時に小さな少女が雪崩れ込んできた。子どもには重たい扉だったのだろう。転げた女の子に驚きつつも抱き起こすと、少女は「見つけた！」無遠慮にエミルを指差した。続けて、ブラックの姿も見つけて「あれ、おにーちゃん？」とも続けたものの、一人でそんなことどうでも良いの！と纏めて駆け寄ってくる。

「どうして！ どうして、誰もおねーちゃん……ちが、マシロちゃんを迎えに来てあげないのっ！ マシロちゃん、泣いてた！ ずっと、ずっと待ってた！」

がたんっ！ と音を立て座っていたエミルも、カナイもアルファもユイナに詰め寄る。

「ユイナちゃん、だったよね？ 君はマシロの居場所を知っているの？」

「知ってるも何も！ ……知らないの？ おにーちゃんたち……何度も、使いを出してるって先生いつてたのに」

先生？ と全員が眉を潜めたのに、きょんととしてユイナは話を続ける。

「レニ先生だよ。マリル教会の……。マシロちゃん、白銀狼に襲われて」

「ハクアにつ？！」

慌てた様子のアルファにブラックが「それは有り得ない」と黙らせる。ユイナは「ハクアは犬でしょう？ マシロちゃんが探してた」と答える。

「大きな白銀狼だよ。ユイナが追い掛けられてたんだけど、おねー

ちゃんが助けてくれて、代わりに酷い怪我をして、ずっと、起き上がれなくて、だから、ずっとおにーちゃんたちを待ってた。迎えに来てくれるのをずっと待ってた」

ぎゅっとユイナは握り締めていた拳に力を込めた。

「いつも顔を合わせると何か連絡はなかったかと聞くから、ユイナも気にしてたんだけど、最近変なの。昨日くらいからそんなことひと言も口にしなくなってる……今朝は、ユイナにずっとここに居るか、いつでも会えるねっていつてくれたの。ユイナは嬉しいけど、おにーちゃん、変だった。だから皆で相談してこっそりここに来たの。レニ先生が子どもは心配しなくても大丈夫だっていつて大事なことは任せてくれないから……」

「ど、して、今まで気が付かなかったんだ。どう考えたって一番怪しいだろ？ 何故あそこには近寄れなかった……」

口元を覆いぶつぶつとそう零しながら唸ったカナイにブラックが恐ろしいほど静かに答えた。

「どうやら、私が一番初めに謀られていたようです」

ぎゅっと何かを握り締めていたブラックは手の中でそれをばきんと握り潰した。はらはらはらと粉碎された赤い粒が床へと落ちていく。

こつつと一歩踏み出したブラックの尋常ではない狂気にユイナはびくりと身体を強張らせた。

「ブラック、落ち着いて」

「落ち着いています」

「怨み骨髓に徹すのは分かる。でも、これは全て消し去れば良い問

題じゃない」

「そんなことは私には関係ありません。無くなってしまう方がいいんです！」

びりびりと辺りに張り詰めていた空気が一息に窓や明り取り用に張られていた天井のガラスを破壊した。落ちてくる破片は凶器となり床に容赦なく突き刺さる。反射的にカナイがエミルやアルファ・ユイナたちを囲ったがブラックは落ちてくる破片は気にならないのか、ぴ……っ、ぴ……っ と頬や手の甲を傷つけていく。

「マシロはもつと痛く苦しく傷付いたことでしょうね……」

ぼつ、と零して止めた足を進めたブラックの腕をエミルは慌てて掴む。思い切り邪魔そうに払われるがそれでも絶対に離すつもりはないらしい。刺すような瞳で睨みつけ、普段からは信じられないほどどっしりとした声で制する。

「何をする気だ」

「消すんですよ。面倒なので、全て失くすんです。貴方だってそうしたいでしょう？」

「君個人の意見を押し付けしないで、僕はマシロが立ち直れなくなるようなことはしない。マシロは絶対に彼らを活かす道を探すはずだ。殲滅すればいいなんて思わないし、そんなことが自分の所為で行われてしまったとすれば彼女は立ち直れない」

「そんなもの！ 私が全て忘れさせます。痛みも悲しみも全て！最初からなかったことにします」

「いい加減にしろ！ 抑えろっ！ そんなことを実際にやって、また闇猫は闇に戻るつもりかっ！ 闇は光を見つけたんじゃないのかっ！」

絶対に普段では有り得ない大きな声。荒々しい言葉。エミルに怒鳴りつけられてブラックは「……つく」と息を呑み、乱暴にエミルの腕を振り払った。

マシロは命を惜しむ。尊む。例え自分を傷つけた相手であったとしても、その命を奪うことを良しとはしないだろう。そのくらいのことは直ぐに行き当たる。ぶつける先のない怒りは矛先を失い鉛のように体内に溜まっていく。

「……ユイナ、さん。次のミサはいつですか？」

ぎゅっと握り締めた拳。手のひらに食い込んだ爪あとから流れ出た赤い雫がぼたぼたと床を汚していた。指名を受けたユイナはアルファの後ろから少しだけ顔を出して答える。

「明日、です」

「では明日。マシロを迎えに行きます」

その答えに頷いたブラックはこれ以上話すことはない、ロビーを後にする。その姿が見えなくなり足音が床に吸い込まれて消え、静寂が戻ってくるまで呼吸をすることすら戸惑われた……。

第二十五話：どうせやるなら景気良く

私は何をすれば良いのかと訪ねると白銀狼を連れて立っでいてくれれば良いといわれた。私は居るだけでその価値があるのだと、そう、いわれた。

真っ白な服に袖を通し準備を整える。手の傷は揃いで付いていたアームカバーで隠れたし肩口に残ってしまった傷は立て襟だったから人目に晒されることはない。最後に首からロザリオを掛け支度を整えた私は同じように真っ白な布に光沢のある白い糸で丁寧な刺繍の施されたストールを羽織廊下へと出る。

今日は珍しく、雪が止んでいた。

お日様が真上に来る頃、同じように正装したレニさんが大きな犬を連れて迎えに来てくれた。

「大きな犬……」

「犬ではない」

「ああ、そうだ……そう、だった」

私はこんな会話を以前もしたことがあるような気がする。

「マシロさんは白銀狼の言葉を解するのですか？」

嬉しそうにそう聞いてきたレニさんに頷くと、やはり貴方は間違いないと笑みを深めたあと「参りましょう」とそっと私の背に手を添えて先導してくれた。

いつも居住区にしか居なかったから礼拝堂に入ったのは実質初めてだ。円形の天井には白い月に天使、シル・メシアの木だろうと思われるものが描かれている。美しい宗教画といえるだろう。両側の壁には惜しみなく美しいステンドグラスが埋め込まれ、柔らかな日

の光に彩を添えていた。

「綺麗」

「気に入っていただけましたか？ 今日からここが貴方の居場所です」

祭壇の中央へと促され私はそこへ立つ。ゆっくりと歩みを進めてきた白銀狼は静かに私のその隣に立ち付き従うように寄り添った。顔を上げると集まった人々が神々しいものでも見詰めるように祈りを捧げている。その祈りがもしかして自分ひとりに注がれているのではないかと思うと私は自然と萎縮した。しかしそんな私にレニさんはそっと私に唇を寄せ耳元で囁く。

「怖がらないで、心配しなくて良いのです。皆、貴方を待ち望んでいました。恐れるものではありません」

レニさんの言葉に私は頷く。頭の霧は晴れないけれど、きっと、これからまた新しい出来事で埋め尽くされれば、ゆっくりと晴れてくれるはずだといって私と不安を共有し慰めてくれたレニさんの為にも頑張りたい。

そう思っ顔を上げると同時に、玲瓏と鐘が鳴り響き時を知らせる。レニさんが説教台に立ちミサの開始を宣言すると締め切られていた扉が大きな音と煙を上げて開いた……というか破壊された。反射的に白銀狼は私の前に立ちその前にレニさんが庇うように立った。ざわつく室内を完全に無視して、乱入してきたのは二人……。

「ドアくらい普通に開けなよっ！」

「別に良いじゃないですか、建物ごと破壊しなかっただけ落ち着いていると思ってください」

「これ、絶対僕が一番損な役回りですよ。こんな暴走特急止められ

ないし、うわあ、結構人はいってるし怪我人ゼロは絶対無理」

「死者ゼロも無理ですからね」

何事か楽しげに会話して居たうちの一人が、真っ直ぐに祭壇上を見詰めた。目が合った。そう思った瞬間ちりちりと頭が痛み、立ちくらみを起こす。

「だ、れ？」

アレは誰？

とんつと軽い身のこなしで邪魔をする人波を飛び越えて、とつと祭壇に上がるとどこからか杖を出た。持ち手を軽く捻ると、するりと抜けきらりと刀身が姿を現す。仕込み杖だ。男は、司祭様と聖女を守れっ！と勇敢にも立ちはだかった人たちを容赦なく切り捨てた。

しかもたつた一振り。一瞬にして勝負が付く。この人、強い……怖いつ。身体の底から湧き上がる恐怖に手を握り締め、ふらりと一歩下がる。それを見計らったように、天井が崩れ頭上から大きな白い塊が降ってくる。ひっと息を呑むと、白い塊は真っ直ぐに白銀狼へと落ちてきて、そのまま、その鋭い牙を私の前にいた白銀狼の首筋へと立てた。白銀狼が頭を振るとそれに合わせて血の飛沫が上がって真っ白な室内を赤く染める。

「ハクアっ！」

思わず叫ぶと、ちかちかとまた目の前が明滅する。頭の中が真っ白になり何も考えられなくなる。二匹の白銀狼は絡まりあうように祭壇から転げ落ち、地響きのような唸り声を上げて互いを傷つけあう。

「もうちょつと温厚にいかないもんか？」

頭上から声が降って来て見上げると、こちらを見下ろしていた人影は、ひょいと崩れた天井の隙間から降りてきた。かなりの高さがあつたにもかかわらず、と……つと簡単に舞い降りて「次はこつちか」と混乱している人々へと向き合う。

「私はね、貴方は消えれば良いと思つたんです。今もそう思つてます」

すつと剣先をレニさんの喉下に突きつけている男に私は息を呑む。

「ですが、貴方だけは消さない方向で、生きていることを後悔したくなるような時間。長い苦痛をじわじわと与え続けるべ、き」

——…バキッ！

「痛っ！」

「そんな気持ち悪いこと考えちゃ駄目！人を簡単に殺しちゃ駄目だつて！いつもいつてるでしょ！」

はっ！私は気がついたら反射的に殴っていた。何人もの人を切り殺し今も尚レニさんに剣先を向けていた男を容赦なく、ぐうで。わざとらしく頭を抱えてしゃがみ込んだ男は床を尻尾で掃除していたが、すつと立ち上がると私を見て凄く哀しげに微笑んだ。頭に掛かった靄が一層濃くなって思考を邪魔する。反動のように頭は痛み、それ以上にずきりと心の奥が痛む。

「あ、一つだけ弁明しますけど、そうしろといったのはエミルですよ」

あー。エミルならいいそう。……って、エミルって誰だ？ 頭の中で何かがフラッシュバックするように明滅を繰り返す。頭が痛い。割れそう。頭を抱えてぐらりと揺れた私を支えてくれたのは殴ってしまった男だ。彼は酷く傷付いたような顔をして私を抱きとめてくれる。どうして、そんな顔をするの？

「酷いな、僕はそこまで酷いことはいってないよ？」

現状ではあまり意味を成していない祭壇の奥にあった扉を開けて出てきた人は「あー、良い天気だね」と崩壊し青空を覗かせる天井を仰いで場違いな感想を述べてから続ける。

「予想通り、司教様はお亡くなりになっていた。司祭、これはどういうことですか？ 司教様の死を隠し、図書館の生徒をかどわかしか来野生でしか生活していない白銀狼を引き入れ……貴方の罪状は数知れぬものになっていますね？」

こつ、こつと歩み寄ってくる青年の言葉に私は眼が回る。

レニさんが私をかどわかしていた、私を唯一必要としてくれていて、私を助けてくれていて、私は信じていた……。何を？ 誰を……？ うつろな瞳を彷徨わせた私を抱き止めていた腕に力が籠る。そのまま、ぎゅっと抱き締められる。

「今は何も考えないで下さい。急に思い出そうとしないで、苦しいだけです。安心して下さい……迎えに来ましたから」

遅くなっすみません。と続けられ、私の心は何かでいっぱい

なり頭の中は何かいろいろなものが明滅を繰り返し激しい痛みを覚える。痛い、痛い……息が出来ないくらい苦しい、でも、忘れていたくない……私は、何を思っ、そして、信じていたか……。

「マシロ？ マシロ。今連れて帰りますからね」

—— ……霽が、ようやく晴れる……。

「ブラ、ック……」

謝らなくちゃ……そう思っ、伝えたいのに、おどおど伸ばした手は彼を掴む前に下へ落ちた。視界が揺らいで、焦点が何処にも合わなくなつた。意識が、保、て、な、い——。

ん……声が聞こえる。

「ほら、郁斗。そんなに拗ねない。真白だっ、てお年頃なんだから好きな子くらい出来るよ」

「拗ねてねえよっ！ それよか、なんであいつなんだよ」

「ええ？ 僕はあまり知らないけど、女の子の間では人気が高いっ、て真白がおるおろになっ、ていっ、てたよ」

「……真白。絶対面食いだと思っ」

「あーうん。そうかも。でも母さん曰く僕らの所為らしいよ？ 男を見る目がないっ、てさ。皆紳士だと思っ、てる」

二人の声が聞こえるっ、てことは夢だな。懐かしいな。郁斗っ、ていっ、つも愚痴っ、ぱいんだよね。愚痴っ、ぱくて年より臭くて、私より年下なのが不思議なくらいしっ、かりしてて……お兄ちゃんはとっ、ても

優しくて、私や弟、兎に角家族に甘かった。

「気にすることないよ、真白には僕が居るよ。信じられなくなったらいつでも戻っておいで、いつだって真白の味方だからね。護ってあげる、いつでも、いつまでも……」

私が傷付いて泣いているといつもそういつて慰めてくれて、いつでもどこにでも駆けつけてくれた臣兄。

「真白は大体馬鹿なんだよ。本当、馬鹿。馬鹿で馬鹿で大馬鹿なんだよ」

何か失敗すればいつもそればかりいうクセにいつも手を貸してくれた郁斗。

お父さんもお母さんも殆ど家には居なかったけど私は寂しいとは思わなくて、とても恵まれていて……そんな私が選んだのは……

第二十六話：晴れた雪の日

「えー、今ですか？ 私は忙しいんですよ」

「仕方がないからマシロのことは任せるけど、解くのはそんなに時間かかるようなことじゃないよね？」

「時間は掛からないですけどー、もう封印は綻び始めてるんですからそのまま解けるの待てば良いじゃないですか、そうすれば少しでも長く王宮から逃げていられますよー」

エミルと……ブラックかな？

「悪いね。君は星を詠まないと決めたから知らないかもしれないけれど、もう潮時なんだよ」

「あー、そうですね。それなら好きにしてください」

ブラックもエミルも相変わらずだな、もっとお互い優しく会話すれば良いのに、二人とも私には優しいのに、勿体無いなあ……そんなことを頭の片隅で思っていると閉じた瞳の向こうで何かが弾けたような気がして、私は眼を覚ました。

ぼんやりと辺りを見回すとエミルの姿はなかった。見慣れた天井。どうやら図書館の寮で私は眠っていたらしい。

—— ……そう、私が選んだのは異世界。

そして、今、心配そうに顔を覗き込んでくる黒い猫。

掛布の間から腕を出せば両手で大事そうに包んでくれる。私が必要としていて……そして私を必要としている人。

「良かった、目が覚めたんですね？ 調子は如何ですか？ どこか

痛みませんか？」

「んー……頭が少し」

「頭。そう、そうですね。あまり何かを思い出そうとしないで下さいね。ゆっくりで良いんです。もう直ぐ、シゼが作ってくる薬を飲んで、ゆっくり……そうすれば自然と記憶は戻ります。繰り返しある程度長い期間飲まされていた薬の所為で、本来の効果より強い効果が出ているようです」

ブラックがそういつてくれている間に、短いノックが聞こえて「シゼです」という声と共に扉が開いた。

「一応、いわれたとおりに調剤しました」

「では、それをあと六服用意して置いてください」

さつさとシゼが持ってきてくれたトレイを取り上げて、そう口にしたブラックにシゼは「え」と声を詰める。ブラックはその様子に、なんですか？ と片方の眉を引き上げて睨んだ。

「ラウには話を通して在ります。彼は私に……？ いえ、マシロに協力的です。だから好きなように貴方を使って構わないと許可していただいています」

問題ないでしょう？ と続けたブラックに、シゼは眉間に寄った皺に手を当てて、はあと嘆息すると、分かりましたと踵を返した。そして、部屋を出て行く際、慌てて「シゼ！」と呼び止めた私に足を止める。

「あ、ありがとう」

他にもっと何かシゼには話さないといけないことがあると思うけ

れど、思い出そうとすると頭が痛む。何とかそれだけ搾り出した私にシゼは、ふっと口元を緩めた。

「お帰りなさい」

パタンと扉が閉まってからも暫く私はその扉を見詰めていた。シゼって絶対男前になるよね。

「さ、マシロは薬を飲んで……」

「ブラック！」

「はい？」

私の為に水の用意とかしてくれちゃってるブラックに声を張ってしまった。ブラックは少し驚いた様子で首を傾げる。

「あの！ あの、ね……ごめん。私、謝りそびれてて、その本当にごめん。私、自分が自分で思うよりずっと嫉妬深いみたいで……凄く、凄く、嫌だったの」

「ええつと……私、嫌われてますか？」

人の話を聞いていたのか聞いていなかったのか、きょんとしてそう聞き返してくるブラックに虚を衝かれ「は？」と一瞬間の抜けた顔をしてしまったと思う。

「まさか！ 好き、だ、よ」

痛つ。頭がずきずきと痛む。釘でも刺さっているように、刺すように痛む。息を吞んで俯いた私の頭をそつと撫で、自分のほうへ引き寄せてくれる。

「今は良いです。薬を飲んでください。記憶、想いが縛り付けられているようなものです。きっと長く苦しんだんですね。長く苦しんで、猜疑心に捕らわれて、不安で……本当にすみません。もっと早く気がつけば良かった。私の責任です。貴方を一人で行かせてしまった」

「私、一人じゃ……そう、ハクアは？」

痛い……ハクアのこと思い出そうとすると、ぎゅううつと締め付けられるようだ。

「大丈夫ですよ。ハクアは驚異的な回復力を持っていますから、通常、殺すことの方が困難です。封環……あの魔法石の環のことですが、あれを解放しましたから……元氣です。マシロより余ほど軽い」

あ、そういえば私も怪我をしてたんだ。痕が残ってて、気持ち悪いから嫌がられちゃうかとも思い、ブラックにもたれ掛かったまま、そつと左腕に触れる。

—— …… あれ？

指先に触れるはずの肉芽がなくて私は身体を起こして袖を捲くつた。ブラックが音もなく笑って「大丈夫ですよ」と声を掛けてくれる。

「でも、凄い傷が……」

「ええ、痛かったでしょうね。私が替わって差し上げられたら良かったのに……」

「魔法士さんでも色が戻っただけで治せなくて」

わたわたと口にした私に、ブラックはくすくすと楽しそうに笑っ

た。

「私を誰だと？ 全てを納めるものです。あの程度の傷、なかったことにすることはそれほど大変なことでは在りませんよ？ マシロさえ無事ならば、私は気にしませんがやはり女性は気になるでしょう？」

いつもの部屋着になっているのは気にしなかったのだけど、わたしと肩口も確認する。こちらもしっかり綺麗に治っていた。

「安心しましたか？ それならばとりあえず、今は休んでください。今、マシロに必要なのは休息です。貴方自身が思っているよりもずっと疲れています。心が弱りきっている。お願いですから、もう少し、いや、沢山？ 心も、身体も休めてください」

私が頷くと、そつと薬を含ませ水で流し込まれる。甘い。小さい頃駄菓子屋さんで売ってた水で溶かして飲むジュースを舐めたときくらい甘い。

それから私は丸一日寝込んだ、というかベッドから出してもらえなかった。日を跨いでようやく外に出た。といつても中庭に散歩に出ただけだ。ブラックが冷たい風は良くない！ と怒ったけど、過保護過ぎるのも良くない。部屋の窓から見える範囲に出るくらい大したことじゃないと思う。

頭のほうは随分はつきりとしてきた。掛かっていた靄が晴れて私はどうしてあんなにうじうじしていたのかと今では信じられない。いつもの私なら迎えが来ないくらいであそこまで落ち込まないし、落ち込んでも自分で詳細確認に動いたはずだ。なのに一歩もマリル

教会から出ることも出ようと思うこともなかった時点で何かがおかしかったのだ。

「そろそろ、私、全貌を聞いても大丈夫だと思うの」

ベンチに軽く積もった雪を払って、座ると隣に「寒いのは苦手です」と猫らしいことをいってブラックも腰掛ける。

「全貌、ですか……特に目新しい事実は私は知りませんよ？　ずっとマシロに付つきりでしたし。私に分かるのはマシロを見つけるまでの自分が如何に愚かだったか。ということくらいです」

んー？　と首を捻った私にブラックは重たい溜息を零した。

「用意周到といいますが、私が油断しすぎていたのですが……」

ぼつぼつと苦々しく話をしてくれたブラックの内容はこうだった。マリル教会の企てはあの日種屋に来た私にそっくりな女の人の訪問から……彼女は、最初はその姿を私に見せ私とブラックの不仲を狙ったのかと思われたけれどそれは種を仕込む表向きのものだったらしく、彼女の狙いは、ブラックに正当な結果に行き着くことのないように作られた強い魔法石を持たせることだった。

その所為で本来なら直ぐに辿り着きそうなマリル教会への疑念は全く向けることが出来ず、あさってな白銀狼の里とかまで探しに行っていたということだ。

それに気がつくきっかけを与えてくれたユイナちゃんに感謝大だ。

「マリル教会ごと殲滅するつもりだったのですが、エミルが面倒臭いことをいい出しまして……」

ありがとうエミル。心の中でお礼を告げた。

「まあ、私はマシロさえ戻ればあとのことがどうなろうと、どうでも良かったので。ハクアも見つからなかったですし、種が放置されているという風でもなかった。ですから恐らくマリル教会のどこかで閉じ込められているのだろうと簡単に予想出来ました。そちらはカナイに任せ、見つけ次第、封環を解くようにと頼みました。エミルのほうは、マリル教会が今、強行して聖女確保に走ったかということに興味があったらしく、騒ぎに乗じて中を調べたようです。そこで居るべきはずの司教はなく既に種となっていた。詳しくは知りませんが、レニはそのことで相当焦っていたようです。次のマリル教会を担うものを指名することなく司教が先立ち、教会最高位の座が空位になってしまった。これを埋める為の、誰かを探していたんですよ」

「それが、私？」

そんなのおかしい。シゼの話では実質レニさんがマリル教会を仕切っていたって話だった。もし、司教さんが亡くなったのならそのまま順を追ってレニさんが次の司教になるべきなのに……居るかどうか定かでもない聖女が存在に頼ろうだなんて。

「最初は白銀狼を、とも思ったようですよ。ハクアが話してくれました。レニは白銀狼の里まで赴いて彼にその話を持ち掛けたと、しかし、ハクアは王都で人々や宗教観での柵しがらみに捕らわれることを嫌い、聞き入れなかった。ですが、皆がそういうわけではなく、抜けてしまったものが居た。今回それを追ってハクアは出てきていたようですよ」

「どうして、レニさんになろうとは思わなかったの？」

当然の質問なのに、ブラックは「んー…」と少しだけ唸った。

「私が直接見たわけでは在りませんし、確実な話はまだ分かりませんが……多分間違っていないと思います」

「何？」

「司教を務める素養がなかったのでしょうか」

素養って、そんなものなくても皆次の司教は彼だと思っていたはずだ。それなのに

「素養は絶対です」

今更な台詞を重ねたブラックの言葉が重かった。

第二十七話：素養に準じた役目

私は、ずっしりと重くなった気分を振り払うように話を変えた。

「ところで、そのハクアとかエミルたちは？」

ブラックが居てくれるからあまり気にはしていなかったが、まだちゃんと会っていないしお礼もいえてない。私の質問にブラックは素直に不満そうな顔をする。「私が居れば良いじゃないですか」と予想通りのボヤキを聞かせてもらった。

「ここに居たんだね？」

「マシロちゃん！ 元気になったーっ？」

「お、復活してる」

それぞれのことを口にしつつ三人とハクアが、歩み寄ってきた。ブラックは心底邪魔そうに見ている。思わずそんな顔しないの頭を撫でる。

「ハクア、傷はもう平気？ あのあと大丈夫だったの？」

歩み寄ってきたハクアは騒ぎを警戒してか人の形を取ってくれている。私は立ち上がりハクアの頭の前から足の先まで一通り眺めるが、特に動くのに庇っているようなところはなさそうだ。本人も短く「問題ない」と口にしてくれた。

「良かった。心配してたんだよ。あ、そうだ、聞きかじっただけなんだけど、問題は解決したのかな？ それで姿が見えなかったの？」

ぼこぼこ話し掛ける私にハクアは苦笑して頷いてくれる。

「私の用は済んだ。解決したといって構わない。邪魔な封環も必要なくなっただけ……」

ずっと、捕らわれているようなものだったハクアにとって封環が必要なくなったということは大きな意味を持つのだろう。私は小さなハクアも可愛くて好きだったけど、でもその所為であんな目にハクアがあってしまうのならこれで良かったのだと思う。そっかと思いが零れた私にハクアは頷いて尻尾を振る。犬だねえ、やっぱり。ほっこり気持ちが暖かくなったところで、そつと傍寄ったエミルが話し掛けてくれる。

「マシロに付き合ってほしいことがあるんだけど、体調はどうかかな？」

エミルの問い掛けに私は大丈夫だと答えなかったのに先にブラックが答えてしまった。

「大丈夫なわけじゃないです。まだ全然本調子じゃないんですよ。それなのに、何をさせようというんですか」

聞いているんじゃないよね拒否してるよね。そのいい方じゃ頭からやれやれと嘆息した私は「何をすれば良いの？」とブラックを押しつけてエミルに訪ねた。ブラックは「ちょっとマシロ！」と怒っているが、私はもう十分元気だと思う。

「うん、僕もマシロはまだ本調子ではないと思うよ。でもね。どうしても立ち会って欲しいんだ」

そういつて申し訳なさそうに微笑むと、雪の上だというのにエミルは地面に片方の膝をつき頭を下げた。それと同時にカナイとアルファも膝を折る。事の成り行きがさっぱり分からない私は「え、ちょ、何?!」と動じるばかりだ。

「明日の午後、今回のマリル教会の騒動と、今後のマリル教会について話し合いが持たれる。僕はそこで現王の名代として出席しその処遇の決定権を任されている。その場に、マシロも同席して欲しいんだ」

続けてゆつくりと……そして慎重に「白い月の使い。シル・マリルとして」と繋いだ。おろおろとしてブラックを見るとブラックは予想の範疇だったのだろう、面倒臭そうに溜息を吐いていた。

「と、兎に角っ！ 三人とも立ってよ！ 濡れちゃうよ？ 風引いちやうし！」

「了承を得られるまでは無理だよ。僕にも役目がある」

役目？ エミルの選ぶ言葉に、何かが引つ掛かる。引つ掛かるけど真っ直ぐに見上げてくるエミルの瞳に耐えかねて私は「分かった！ 分かったから」と重ねる。

「出来ることなら何でも手伝うから。もう、やめてよ」

慌てた私とは対照的にエミルはいつも通りの穏やかな笑顔で「ありがとう」と答えると、すっと立ち上がり、本当、濡れちゃったねと笑う。あれ？ いつも通りかな。感じた違和感に首を捻りつつも、当たり前だよ。もう、と息を吐く。カナイが「そうだな」と得心したように頷いてぱんっと手を叩く。そうすると三人とも何事もなかったように元通りだ。……ちよつと騙された気分。

「と、いうわけだからブラックも来るよね？」

「マシロが行くなら行かないなんて選択肢ないでしょう。私もマシロも傍観者で良いと思いますよ？ それをわざわざ」

はあと溜息を重ねる。ブラックにちよっぴり申し訳ない気持ちになる。だから、謝罪を重ねるとブラックは微笑んでくれる。

「マシロが、白い月の少女シル・マリルとして立つなら、私はリン・イシルとして立ち会うのは道理です。貴方の所為ではなく、エミルの言葉を借りるならこれも私の役目です」

いまいち意味不明だけれど、怒ってはいないということだよね？ 私は胸を撫で下ろしありがとうと続けると「続きは中で話そう」とエミルに促される。確かに雪の積もった屋外なんて立ち話には向いていない。

中途半端な時間帯、人が少なくて寛げて、なんて条件に当てはまるのは食堂だったりして私たちはいつもの一角を陣取った。アルファは早速大量のおやつを広げて「忙しくてご無沙汰だったんです」と口に運ぶ。私が寝ている間に、皆何がどう忙しかったのだろう。

「それで、その、話し合いつて他に誰が来るの？」

「当事者のレニ司祭・王城からは僕・蒼月教徒からは財団幹部が一人・各学園の校長が来て、あとはマシロとブラック……それにハクアも来てくれる」

まあ、学園の責任者は今回立会人という形で発言権はないけどね

？ とにっこり微笑んでくれるけど、くれるけどそれって……

「いわゆる、トップ会談という奴ではないの？」

恐る恐る確認を取るとあっさりそうだよと頷かれる。ちょ、ちょっと待って、そんな大それたところに私みたいな一般市民がほいほい参加して良いの？ 大体、学校長に発言権がないってわざわざいうってことはつまり私には発言権があるってこと？ 私にそんなところで何をいえっていうの？

軽いパニックを起こして、私は落着こうと揺れているお茶を一口運ぶ。

「百面相見てるのも面白いけど、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。マシロは好きなときに好きなように口を挟んでくれて構わない。マシロはあまり自覚ないかもしれないんだけど、十分この世界の中枢に位置しているんだよ？」

「そんな馬鹿な！」

「うわ、あっさり否定」

私の上げた声にアルファが突っ込んでくれるけど、口の中無くなってからにしてね。美少年が台無しだよ。マシロは謙虚だねと掛けてくれたエミルの言葉に無知なだけだとカナイが被せる。本当、いつも通りだよ。いつも通りだけど

「ねえ、どうしてエミルが立つの？」

私の疑問に、アルファとカナイの時間が止まる。落着いているのは本人だ。エミルはゆっくりと噛み締めるように告げた。

「タイムリミットだよ。もう少しあるかと思ってたんだけど、事は

起こったし世界は動いた。僕も僕の好きなことだけしている時間は終わったんだ。現種屋店主に前種屋店主が僕に掛けたいらしい封印を解いてもらった。だから僕は正式に王城に上がる。一昨日、アルファと共に一時帰城した際、改めて素養の認定をもらった。年齢と経験から僕の継承順位は第三位。皮肉にも亡き兄セルシスと同じだね」

私の心には死刑宣告のように響いたのに、エミルの顔は清々しさすら感じるほど潔いものだった。未練とか後悔とかあともう少しとか、そんな気持ちはなかったのだろうか？

「マシロがどうしてそんな悲しそうな顔をするの？ 大丈夫だよ、僕は好きに生きてきたから……ああ、でもこの間話していたことは考えておいてね」

そんな風に私に掛けてくれる言葉が余計に私を苦しくさせる。私はまたエミルを護れなかった。

第二十八話：狼と猫と私

「ところで、どちらで行うんですか？ マリル教会は崩壊寸前ですよね？」

「俺が直した。寸前じゃなくて崩壊してた」

なんだか微妙にやつれた感じでそういったカナイにブラックは軽く笑って「それはご苦労様でしたねー」とあっさり流した。カナイは苦々しく眉を寄せて話を続ける。

「直したんだから、マリル教会を使う。ほんっとーに大変だったんだぞ、原型を留めていない上に元の形も知らないものを直すなんて芸当」

「図書館にはマリル教会建造時の資料も合ったでしょう？ それに貴方なら、そのくらいちよつと頑張れば大したことじゃないでしょうに……鈍りましたか？」

「微塵も手伝わなかった奴にだけはいわれたくない」

「私はマシロの看病で忙しかったんです」

きつぱりいい放ったブラックに、はあと深く嘆息してカナイが突っ伏す。んー、結果的に私が悪いのかな？ やっぱり。取り合えず謝つとこうと謝罪すると、いいってという風に片手をひらひらと振られた。雑談中ちらりとエミルの様子を窺ったがどこか上の空な感じだった。なんだか妙な不安が募る。

「それじゃあ、僕たちはまだ明日の準備があるからレニ司祭を護るにせよ裁くにせよ情報が必要だからね」

かたんとエミルが席を立つと、それに続く形でカナイとアルフ

アが椅子から立ち上がる。それなのに私は座ったままで、もう彼らと並ぶことは無い。そう痛感させられたような気がした。氣遣わしげにブラックが名前を呼んでくれるけれど私はそれに応えることが出来ない。

「無理させて御免ね。今日はゆっくり休んでいて」

そういつて微笑んでくれたエミルを見上げていたが、それに気が付かない振りをしてエミルは「明日ね」と踵を返してしまう。
こんなの変だ。

「エミル」

掛けた声に気付かない振り。だって、今まで一度だってエミルが私の声を聞き漏らすことなんてなかったのに……エミルは誰の声だって聞き漏らさなかった。振りなんてらしくない。

きゅつと拳を握って立ち上がると隣のブラックに「少しごめんね」と詫びた。ブラックは諦めたように嘆息して「どうぞ」と肩を竦める。

一度だけ深呼吸して、お腹に息を溜め込み叫ぶ。

「エミル！」

人が居なくて良かった。居ても気にしないけど。これで聞こえないとかいうなら補聴器を勧める。足を止めたもののそれでも振り返り難そうなエミルの肩をカナイとアルファが叩いた。私は机から抜け出して、エミルに歩みを進める。

「エミル、エミルはエミルだね？」

たった一つの素養が目を覚ましたか眠ったままかだけの違いで、これまでのエミルが根底から変わってしまうなんて有り得ない。

「もちろんだよ」

諦めたのか振り返ってくれたエミルはそういつけれど私を見ない。

「私はあまり難しいことって分からないけどさ、エミルがそんな顔をしなくちゃいけないならやっぱり何とかしなくちゃいけないと思う。私に出来ることないかな？」

「マシロにやって欲しいのは明日の会に参席してもらうことだよ」

突き放すようなエミルの言葉に胸が痛む。もっと上手にエミルの気持ちを解いてあげられれば良いのに、上手く言葉が思いつかない。やっぱり私は駄目だな。

「それは王城の人がそういつてるんでしょう？ エミルの言葉を借りるなら、役目。だよな？ そうじゃなくて、エミルに私がしてあげられることはないかっていつてるんだよ」

「ないよ」

早かった。即答過ぎて一瞬頭で理解出来なかった。その所為で軋み始めていた心に直接止めとなる楔を打ち込まれたようだった。

「王子様。私の姫を泣かせないでもらえますか？」

「今のはエミルさんが悪いですよ」

「いい過ぎだろ？」

いつの間にか傍に来てくれていたブラックが私の肩を優しく叩く。いわれて頬を拭くとまだ泣いているなんて状態ではないけれど、確

かに視界が緩い。泣いたりしたら大変だとこしこしと顔を拭う。

「良い、良い。私の食いつきすぎだよね。確かにエミルはエミルだよ。変わるわけないし、ごめんね。引き止めて、私も明日レニさんがこれ以上辛い思いをしなくて済むように頑張るよ！レニさんも頑張ってきたんだし」

声に出してみれば確かにその通りだと思った。思ったのに、全員の視線が私に集まっている。なんだろう？居心地悪いな。ハクアまで遠巻きに驚いているようだ。

「ふ、ふふ」

エミルが堪えきれないというように零した笑いを皮切りに全員に笑われてしまった。カナイには「ほんっとお前って馬鹿だよな」とばしばし頭を叩かれる。そんなに叩くとミソが出る。やめてよ！とカナイの手を弾いて睨みつけるが、正直これがいつも通りだ。そして、ふわりと大きくて優しい手が私の頭に乗っかって「カナイは乱暴過ぎ！」とエミルが窘めつつ私の頭を撫でてくれる。そう、これがいつも通りだ。

「マシロが望むようになるように僕も頑張るよ。彼がそうしてきたように……。あ、でも、お互い無理はしないようにしように、ね？」

優しい声でゆっくりとそういつてくれたエミルはようやくいつものエミルだ。優しくて人のことをたくさん考えてて、考えてる人たちが自分のことで苦しまないようにな自分のこともちゃんと大事に思える強いエミル。

私は強く安堵して「うん」と頷いた。

「まあ、マシロをいじめたんだから命が消えないギリギリを永遠に味わえば良いと思うけど。個人的には」

そして、ちよつと黒いエミル。

「エミルって絶対私より悪役向きですよね？」

面白いからほつときますけどと三人を見送りつつそう零したブラックに私は苦笑した。

ブラックにしつこいくらいに休むようにといわれたので、それに従おうと食堂をあとに自室までの廊下を並んで歩いてた。そして、さっきのツボはなんだったのかと聞こうとしたら次はハクアに声を掛けられた。

促されて外回りで自室を目指す。中庭を突っ切れば良い話だから別に構わないし、誰も踏みつけていない雪の上に新しい足跡を刻むのは楽しい。ざっくざっくと跳ねるように足跡を付ける。

「マシロ」

もう一度呼び止められ、私は後ろに居たハクアとブラックを振り返る。ハクアはちらりとブラックを見て、二人で話がしたいといったのだけどブラックはそれを許さなかった。

「えー……つと、私はブラックに聞かれて困るようなこともないんだけど、ここじゃ、拙いかな？」

ブラックを説得するのは面倒そうなので、取り合えずハクアが折

れないか確認してみた。ハクアは少し間をおいて「主が構わないのなら」と頷いてくれてほっとする。でも、私はいつまでハクアの主で居るんだろう？ ふと疑問が浮かぶと、ハクアの話の内容はそこだった。

「話途中になっていた契約を交わして欲しい」

そつと私の頬に触れてそう紡ぎだすハクアを見上げて、なんだか凄く昔のことを思い出すように私は唸った。

「……えーっと、確か、血の契約がどうというあれ？」

首を傾げて問い返した私にハクアはそうだと頷く。

「でも、あれはハクアが仲間を探す為にとってことだったんじゃないかな？ たっけ？ だとすれば、私への義理立てなら必要ないよ？ もう心配事がないのなら前までのハクアの生活に戻ったほうが良いんじゃない？」

白銀狼は王都にまで降りてくることも、ましてや人間と係わって生きることと殆どなく長い一生を山で過ごすと聞いていた。だからハクアがこの王都に住み続けるという選択は酷な様な気がしたし、私はハクアに無理を強いるつもりもない。

「命を助けたお礼と思うなら、もう十分返してもらったし。元々私はハクアを連れて帰ると駄々をこねただけで、運んでくれたのはアルファだし、そのあとハクアを助けたのはエミルだし……一緒に住めるようにしてくれたのはブラックだから、私は結局何もしてないに等しい気がする」

いつてみると本当にその通りだ。すると頬を撫でるハクアの指がくすぐったい。にしても本当に金銀妖瞳って不思議だな。左右瞳の色が違っていても世界は同じ色に見えるのかな？

「こつもいったはずだ、主は私自身が選びそして従う。私はマシロに付き従いたい。貴方の短い生が尽きるそのときまで……」

そういえばカナイが白銀狼は二百年とか平気で生きる話をしていた気がする。とすれば私の一生なんて本当に僅かなものだろう。白銀狼の長すぎる一生の中で少しくらい違う世界を見せて上げられるなら、と思いつつも僅かに迷いちらりとブラックを見る。ブラックは面白くないという顔をしていたが「マシロの好きにして構いません」といつてくれた。

改めてハクアを見上げて「良いよ」と頷くとハクアは綺麗な瞳を細めて鋭い犬歯の覗く口を僅かに開いて私の首筋に触れ……る、かと思っただけなら触れなかった。

—— ……ゴリゴリゴリ

「この至近距離で発砲されなくなったら、離れてください」

ハクアのこめかみに銃口を押し付けたブラックは引き金を引いていないのが不思議なくらいの形相だった。

「ブ、ブラック？」

「マシロも抵抗してください」

「え、でも血の契約とやらに必要なんじゃないの？」

「確かに必要ですけど、厭らしく首筋に傷をつける必要ないでしょう。白銀狼との血の契約は、主従関係を結ぶ相手の少量の血液を持つて交わされるはずですよ？」

ハクアは突きつけられた銃口にひるむこともなくにやりと口角を引き上げた。

「確かにそうだが？　だから席を外せば良いといったんだ」

「抜け抜けと……」

「え、ええっと！！　つまりっ！　血がいるだけなんだよね？　私が指先でも切れば良いね！　うん、そうしよう。それで解決だよ。だから、二人とも睨み合わない！　ブラックは銃を仕舞って！」

勢い良く二人の間に割り込んでそう纏める。ブラックは私の言葉に、まだ納得はいかない雰囲気だが銃は消してくれた。そして、私の頭を抱え込むように抱き締めると外側に來た右手だけをハクアに受け取らせる。

「あまり深い傷を付けないで下さいね！　私以外がマシロに傷を付けるなんて」

深い深い溜息。ていうか自分は良いんだ？　といってもブラックは絶対に私に傷なんてつけないだろうけど。

なんて考えていると右手の中指に暖かく柔らかな感触が纏わり付く。私からでは見えないけれど恐らくハクアが私の中指を口に含んだのだろう。嫌悪感はないけれど、これから傷が入ると思うとちょっとだけ怖くて自由になる左手でブラックをしっかりと捕まえる。下準備でも整えるように、ゆっくりと舐められ、きゅっと瞳を閉じ息を詰めるそれと同時にちりつと鋭い痛みが走った。

「……ふっ」

息声が漏れブラックを掴む腕に力が入り身体が強張る。大丈夫、

直ぐ終わりますよ。と耳元で囁かれ気を逸らす為か耳殻をつつと舐める。次は変な声が出そうになってそれを堪えるのに必死だ。

最終的に、吸われている感触がなくなっても私の手を離さないハクアにブラックが切れる形で、血の契約は終わった。

なんだかどやどやしてしまったけど、本当はもつと整肅な儀式なのではないだろうか？もめている二人を眺めつつそんなことを考える。気を使ったのか付けられた傷は殆ど目立たなかった。

第二十九話：コスプレじゃないよ正装です

—— ……ん、んーっ！

ここに帰ってくるのも凄く久しぶりな気がする。私は大きな窓を開け放って夜の空気を部屋へ入れた。

大きく伸びをして深呼吸一つ。

冷たく刺すような外気だけどほんの少しアルコールが入った肌には気持ちが良い。ハクアは群れから離れていた仲間と話し合いをしに出掛けてしまった。

だからあのあと久しぶりに、ブラックと外食をして種屋に戻った。玄関開けたらブラックがもう一人居て正直肝を冷やしたのだけど、私を探したりしていた間、店番を任せていた傀儡らしい。何も自分そっくりに作らなくても良さそうなものだけど、店主不在というのは、この店の特異性を考えると危険らしい。

私はこちらに住むようになるまでは、結構頻繁に交代していたらしいのだけど、白化は本体にしか出来ないから結果的に傀儡の店番率は下がった。

「折角元気になってきたのに、次は風邪を引いてしまいますよ？」

ふわりと背後から伸びてきた腕に抱き締められて、私は平気だと首を振ったのに窓はぱたんっと閉じられてしまう。

「仕事キリが付いたの？」

「ええ、面倒なので、適当に白化後の記憶の残像が必要な人には送りつけておきました。気がつくまで光が持つかどうかは、私の知ったことでは有りません」

「それはちよつと意地悪じゃない？」

「良いんです。折角、マシロが戻ってくれたのに、誰とも知れない方々の種に振り回されるのは面倒極まりない」

いつもならちゃんと仕事はやらないと駄目だとか、お説教をするところなのだけど、正直私も今日は待つ気分じゃなかった。

ブラックの腕の間から伸ばした手でふわふわとブラックの髪を撫でる。時折触れる耳がくすぐったそうにぴるぴると震えるのがちょっと楽しい。

そんな私の手を捕まえて「くすぐたいのでやめてください」とギブアップしたブラックは私の肩口に顔を埋めて首筋に唇を滑らせる。

「断られると思いました」

「何を？」

時折軽く吸い付かれ、ほわんっと身体が熱を帯びてくる。

「明日の予定が決まっているのに、家に戻るのを了承してくれるなんて……吃驚です」

本当に不思議そうなのが余計におかしい。私はブラックを振り返りとても近い位置にあった唇にそっと重ねる。

「私だって、我慢してるっていったよね」

そう静かに唇が触れ合う距離で紡げば、あとは雪崩落ちるようなものだ。

シーツの波間でたゆたうと幸福感と共に申し訳なさが込み上げてくる。そんな私に気が付いて、痛くしたかとか、どこか調子が悪いかとか、顔を覗き込んで本当に真剣に訪ねてくる姿に私は曖昧に微笑む。

「マシロ？」

「……ごめん、ちょっと考え事してたから……」

私が伸ばした手に頬を摺り寄せてきて、そのまま覆い被さるように抱きしめると耳元で問い返してくる。私はくすぐったさに肩を竦めるが話さないわけにもいかない雰囲気なのでぼつぽつと口を開く。

「自己反省してたんだよ。なんていうか、私って駄目だなあと思って」

「駄目？ どうしてですか？」

こんな私でも駄目なところなど一つも思いつかないという風に答えてもらえるのは嬉しいけど、実際駄目なところばかりだと思う。

「私、ブラックのことはもちろん、皆のことも信じてるつもりだったのに、実際には信じ切れなくて流されてたし」

誰も来ない不安。誰にも求められない不安。不要だと宣言される不安。存在価値全てを否定される不安。何もかもが不安で疑心暗鬼に取り付かれ私は勝手に堕ちた。そんな自分がとても情けない。

じわりと浮かんできそうな涙を堪えてきゅつと唇を噛み締める。ブラックは肘について少し身体を持ち上げると私の顔を覗き込んで微笑む。情けない顔を見られなくて顔を背けたいのに逸らせない。

「マシロは本当に自分を過小評価し過ぎですよ。責任も感じすぎだし。私なんてマリル教会破壊しましたけどなんとも思いませんよ？ 僅かでも形が残っただけでも感謝して欲しいくらいです」

ブラックの基準は極端だ。思わず、ふっと息を抜いて笑ってしまった私にブラックも口角を引き上げる。

そつと私の前髪を梳き、額に口付けると話を続ける。

「マシロは私たちを信じてくれていたんです。とても深く信頼してくれていた。だから、そこに付け込まれたんです。日々体内に染み込んでいく薬は正常な判断を鈍らせる。優しい記憶に蓋をして痛みだけが残れば誰だって不安になります。不安で苦しくて痛くて痛くて痛くて……その痛みに耐えかねたとき、そつと小さな種を蒔くんです」

「種？」

「そつ光の粒です。その光に抗えるものなんてそつ多くないです。レニはそういうものを見極めるのに長けていた。マシロは良く耐えていたと思います。本当に辛くて苦しかったと思います」

なんと慰められても私にだって悪いところは鬼のように合ったはずなのに、私を見ているブラックの瞳が涙で濡れるから私は救われる。

「なんでブラックが泣くの？」

「泣かないです。泣かないですけど、もしそつでもマシロが泣くよりはマシです」

そつ、なのかな？ でもブラックがそついうんだからそつなのだろう。きょんとした私にブラックは、ごしつと目元を乱暴に拭つてから、そついえばと切り出す。

「虚ろに捕らわれている貴方を見たとき、少しだけ高揚しました」
「悪趣味」

眉を寄せ素直に嫌悪感を現したのにそれでもブラックはどこか嬉しそくに話を続ける。

「私を想って想ってその想いの強さ故……壊れてしまった。なんて、熱烈な愛情表現だと思いませんか？」

……外野も含まれていたようですけど。ぼそりと付け加えられた台詞がかなり不服そうでちょっと笑ってしまった。そんな私と目が合うとブラックも笑みを返してくれる。瞼を落とせば優しい口付けが降ってくる。

「もう二度とあんな失態は起こしません」

「私のもっと……っ」

「マシロはどうかそのままで」

言葉を無理矢理遮られ、私は甘やかされる。だから私は心の中だけで誓いを立ててそれを身体に刻み込むように口付けに応えた。

やっと……私の平穏が戻ったのだと実感した――。

翌日ももちろん晴天だ。路面の雪は片隅に追いやられ肩身が狭くなっている。

私たちはハクアとも合流し少し早目にマリル教会に到着した。今

回ハクアは私の付き添いだといい、白銀狼の姿で傍に着いてくれている。そんな私たちよりもエミルたちの方が早かったようだ。初めて正面から見たと、真っ白で巨大な建造物を見上げていると門が開いた。

出迎えてくれたのはいつもの三人だけど私は少し戸惑った。

にこやかに迎えに出てくれたのに止まってしまっている私にエミルは首を傾げる。おーい、とアルファに目の前で手のひらをひらひらと泳がされて、あ、と声を上げた。

「な、なんか三人ともいつもと違くない？」
「そうかな？」

エミルは不思議そうに自分を見たあと傍の二人を見たが私の話が分からないという風だ。

「なんというか、その、アルファは騎士らしいし、カナイも術師って感じだし……エミルは王子様だ」
「……いや、そりゃ、いつもと一緒だろ」

カナイの遅れた突っ込みに、それはそうなんだけど……と口ごもる。だってなんていうか三人とも格好良さが確実にランクアップしている。

「一緒だけど一緒じゃないよ。だって、アルファなんて帯刀してるよ？」

「え？ ああ、まあ、今日はそういう役回りなんで……騎士服着て帯刀してないと変でしょう？」

「カナイなんていっつも面倒だからって感じで、制服ばっかりだっ

たのに…… ロープなんて着てる。オプシヨンの杖まで持ってるし」

「…… お前微妙に失礼だな？」

「エミルはなんというか…… 格好良い」

さらりと流れるように羽織ったマントも似合ってる。なんだかここに来てファンタジー色の強い格好を見た気がする。

「マシロは今日も可愛いよ」

にこりとそういつてもらえるのは嬉しいけれど、私はそんなに普段と替わらない。ブラックも普段からきっちりしてる方だから、それほど目新しくもないし。

「私のは着せてもらったままだから」

ぼやんつとしていたので一瞬自分の爆弾発言に気がつかなかった。刹那黙した三人に気がついて、我に返る。ぬつと伸びてきた腕に絡みつかれて声を詰める。

「マシロは素材が良いので選び甲斐があります」

「ちょ、ちよつと、違っ！ 違う、くないけど、いや、やっぱり違う！ …… も、早く入ろうよ……」

真っ赤になる顔を隠すこともなく否定したけど、今更だ。私はがつくりと脱力してブラックもろとも足を進める。

第三十話：世界の多分偉人大集合

「ねえ、カナイ」

数度の深呼吸で落ち着いた私は数歩前を歩いていたカナイに追いついてその顔を覗き込んだ。カナイは私の声に足を止めることはなくちらりと見て「ん？」と視線を投げる。

「眼鏡、いつもと違うね？ ラウ先生みたいにモノクルに変えたの？」

カナイは普段から眼鏡愛用者であるけれど、それは本を読んでいるときとか細かい作業をしているときくらいのもので、常に顔にあてているというわけではない。でも今日は建物の中に入ると直ぐ、カナイは片眼鏡をあてた。

「ああ、これはラウさんのとは違う、と思う。魔法具だよ」

「魔法具？」

「今日はここに要人が集まってるだろ？ だから何かがあつてからじゃ遅いからな。まあ、護る必要もなくこの能力が高い人たちばかりだから必要性はないかもしれないけどな……」

いいつつ片眼鏡を外して、私の眼にそつとあててくれる。自慢じやないけど私は両眼2・0だ。眼鏡なんて掛けたことない。反射的に眼を閉じてしまった。そんな私にカナイがふつと笑ったのが分かる。「度はないから大丈夫」と繋がれ恐る恐る目を開けるとレンズを通してみる視界は少し色が褪せて見える。

そのままきよろきよろと辺りを見回していた私の前にカナイは拳を突き出すと、ゆっくりと開いた。カナイの手のひらには淡い色の

渦がぐるぐると回って球体を作っていた。

「見えるか？」

私がこくんつと頷くとカナイは私の顔から片眼鏡を取り除いた。

「あ、あれ？ 消えた」

「これは練り出された魔力を目視出来るんだ」

もう一度あてがってくれる。確かに見える。私が納得したのが分かったのかカナイは差し出していた手も片眼鏡も元に戻した。そして自分の顔に片眼鏡を戻しながら続けた。

「まあ、大抵感じ取れるけど、保険みたいなものだ」

要するにそれなりの緊張感を含んだものだという事かな？ 私は頷いて、不機嫌そうに話をしていたエミルとブラックのところに並んだ。

案内してもらった部屋の前には、アルファと同じように帯刀していたりするごつい感じの人がわらわらと居たが、私たちが近づくと潮が引くように開けた。ブラックが隣で短く嘆息し、面倒臭いとまだぼやいている。

アルファとカナイが扉の前に立ち、呼吸を合わせたように観音開きの扉を開いた。

音もなく滑るように開いた扉の先には、広い会議室、というか会

食でも行われるかのような間が広がっていた。

そして、私が一步部屋に踏み入れると、囲まれた。

「おおつ、貴方様がシル・マリル様か！」

「これまはまたお可愛らしい」

「道理で審議の場所がこちらになるわけですな」

「本当に種をお持ちでないのですわね」

「白銀狼まで従えておいでとはなかなか」

ほぼ同時に口を開かれては誰が何をいつているのか分からない。
新手のいじめか？

「ちょ、ちよつと落ち着いてください。こんなに大勢のお言葉一度に捌けません」

エミルが前に押しやられていたのをなんとか戻ってきてくれて間に入ってくれる。きよろきよろとするとアルファとカナイは変わらずまだ扉の横に立ち、その傍でハクアとブラックは傍観している。助けるといつても彼らは多分二人とも極端なのでそこでじっとしててください。

ふうつと息を吐いてからエミルは私ににこりと微笑み「取り合えず紹介するよ」といつてくれた。

「まず、図書館、学長のアルム」

エミルに名を上げられ、かなり高齢かなと思われる老人が一步進み出て穏やかな笑顔で手を差し伸べてきた。私はそれに応える形でその手を取り挨拶を交わす。

「マシロです。お世話になってます……で、宜しいですか？」

「ああ、構わんよ。ワシのほうこそ挨拶が遅れたの？　ラウが目を掛けておるお嬢さんじゃったな」

にこにこ話をしてくれるけど、私は物凄く立派な顎鬚から視線を離せない。軍艦、じゃなくて寮監さんも凄いけど、図書館では髭がブームなのだろうか？　つんつんつとエミルに突かれて「注視し過ぎ」と囁かれた。慌てて真っ赤になってしまった私にアルムさんは特に気分を害しては居ないようで良かった。続けてエミルが紹介してくれたのは大聖堂の学長。ヴァジルさんだ。ヴァジルさんは官能的な雰囲気的美女だ。傍に寄るだけでこんなに薰り高い人に私は出会ったことがない。同性とはいえ思わず見惚れる。握手を求めて手を出すと、篤い抱擁を受けた。豊満な胸に潰されて目の前がくらくらしそつだ。

「ねえ、マシロさん。あたくしお聞きしたかったのですけれど」

身体中を包み込んでしまうような魅力的な声だ。そつと頬を寄せられて訪ねられると自然と頬が熱を持つ。そして少しだけ声を落として囁かれる。

「カナイの好みって分かります？」

「は？」

「ですから、カナイの好みのタイプですわ。あの子だったらあたくしの授業で唯一落ちなかった生徒ですよ。可愛くない。貴方のお話は、大聖堂でも良く耳にしましたわ」

どんな話を耳にしたのかも気になるし、授業中、落ちる落ちないって話になる自体どんな授業なのかも気になる。私たちは揃ってちらりとカナイを見ると物凄く怪訝な顔で睨まれた。

「そういえば、カナイは前にしおらしいタイプが好きだっていつてましたよ？」

かなり前の話だけど間違いない。私が殴り倒したときだったと思うから。私の返事にヴァジルさんだけでなく近くに居たエミルも「へー」と訳知り顔でカナイを見た。カナイの表情は険しくなるばかりなので、これ以上はやめてあげよう。私と同じ気持ちだったのかエミルが先に進めてくれた。

「彼は王宮管轄の騎士塔より副学長、ムスカ。学長はぎっくり腰で起き上がれず代理らしいよ」

うわあ、ずる休みのいい訳聞いてるみたいだよ。でもムスカさんは知った顔だからほっとする。改めて宜しくなと握手をされにこりと微笑んだ。でもまさかムスカさんが副学長さんだとは思わなかった。そんな失礼なことを私が考えていると閉じられていた扉が再び開く。

「私が呼ばれたのは査問会だったはずだが、お茶会か何かに変更になったのかな？」

物凄く分かりやすい皮肉だ。その第一声に皆の視線は彼に注がれた。こつつと一歩室内に踏み入り扉が閉まると同時に、何かに気がついたのか彼は慌ててブラックに向けて腰を折った。

「ルイン・イシル様。先日はご不興をかってしまい申し訳ありませんでした」

「頭を下げる相手を間違えていますね」

微動だにしないブラックの言葉に身体を強張らせた彼はぎこちな

くこちらに振り返り私に向かって歩いてきた。グレーのスーツに眼鏡。インテリっぽくて堅物で、学校の先生で一人は居そうな生徒に敬遠されるタイプの人だ。身構えた私の正面まで歩み寄ってくると彼は改めて頭を下げた。

「シル・マリル様。私は現在蒼月教徒を纏めている財団長、レムミラス。貴方様の真意を疑い不敬を働いたこと私共の総意ではないとはいえこの場を借りて正式に謝罪したい」

……不敬？

直ぐに思い当たらなかったが、視界の隅にカナイが入って、ふと思いついた。ああと合点がいくけれど今更だ。何も応えられない私を気にするでもなく彼はわざとらしさすら感じる感嘆の声を上げる。

「素晴らしい、貴方様はルイン・イシル様と同じ色で世界を見ているんですね」

ぎゅっと手を取られて反射的に半歩程下がると、するりとエミルが間に割って入り、レムミラスさんの真後ろにブラックが立ちにこりと呪いの言葉を囁いた。

「蒼月教徒は優秀な人材に溢れているのでしょうか？ トップの据え換えくらい直ぐに済みますね」

レムミラスさんの明らかな作り笑いにヒビが入る。詳細は分からないけれど、エミルとブラックの息が合うなんて、きっと何かしそうな雰囲気だったのだろう。なんで私こんな初対面の相手に憎まれているんだろう。

「さ、メンバーも揃いましたし。始めましょうか」

エミルはあっさり何事もなかったように切り上げると、カナイに「頼むよ」と告げ私たちに着席を促す。

「貴方の護りは固そうですね、蒼月教徒は常に好戦的ですわ。特に貴方のような可愛らしい方は目の敵にされてよ？」

席に着くまでに隣に並んだヴァジルさんがそつと耳打ちしお礼をいうと「あたくしああいっく粘着質な殿方嫌いなんですの」と普通の声で告げる。聞こえるっ！ 聞こえてるから絶対！ それでも全然気にしない風で、にこりとウインクしてみせるヴァジルさんはなんだかその容貌とは裏腹にとても可愛らしくて好感が持てた。

エミルが上座、エミルからやや下がったところにアルファが立った。私とブラックは長方形に配置された席のエミルから右手に座り、その後ろにハクアが控えた。

あとは、それぞれに腰を降ろしていく。最後にレムミラスさんが着席すると同時に扉が開いてカナイとレニさんが入ってくる。レニさんは酷く憔悴しているように見える。レニさんはカナイに促されエミルの正面に座った。ハクアはあんな状態のレニさんになんの警戒をしたのか分からないが私の傍に寄って、座った。丁度肘掛の上に頭が出るから軽くそこに頭を乗せた。

第三十一話：償いの形

そして、エミルの宣言から始まった会話は話し合いといったけれど、雰囲気的にはレムミラスさんが口にした査問会というのがピッタリ来る。

先に行われていたらしい尋問の内容確認が主で、今回全てを取り仕切るらしいエミルが質問し、レ二さんが完結に応える形だ。余分な話なんて一切ない。

レ二さんにも事情があったとはいえ犯した罪も多い。

最初の罪は父親が死亡していたことを隠蔽していたこと。結界の中に種を閉じ込めブラックの目を欺いていた。

それに続いた罪は、聖獣指定を受けている白銀狼に接触したこと。そして、理想論のみで白銀狼を使役し王都まで連れてきていたこと。そのあとは私の話になるのだけど……。少し気が重い。ふうと嘆息してレ二さんのほうを見ると、いつの間にか扉の傍にラウ先生が立っていた。私と目が合うと、につこりと綺麗に微笑んで小さく手を振ってくれる。あの人、ほんっとーに暇なんだね。

延々と続くかと思つた罪状はようやく終わりを告げ、審議の必要もないようにエミルは続ける。

「こちらからの提示する刑罰は王城地下牢にて無期限の幽閉」

告げられた内容に直面していたレムミラスさんは、レ二さんを卑下するような目で見た。

「……それが妥当だと思われませんが、この場で他に意見のある方は」

このままでは、レニさんは一生お日様を見ることなく終わることになる。私は思わず声を漏らしていた。レムミラスさんはそんな私を凍えるような瞳で見た。思わず萎縮しそうになるがこんなのオカシイ。だからお腹の下あたりにぐつと力を込めて改めて口にする。

「こんなの、おかしいです」

「おかしいとは、これまた酔狂なことを」

エミルは私に発言を許してくれていた。私の言葉を嘲るように遮るのはレムミラスさんだ。しかし、それ以上の彼の発言をエミルは許さなかった。直ぐに、発言権は私に戻ってくる。私は何か考えが合ったわけでもないし、上手い話が出来るわけでもなかったのだけれど、レニさんがそんな罰を受けて良いとは思わなかった。

「レニさんがやったことは確かに行き過ぎてたかも知れないですけど、でも、だからつてずつと閉じ込めておくことに意味なんてあるんですか？」

「意味？ 再発は防げるんじゃないかな？ それに、マシロは今回被害者でもある。そんな貴方が彼を庇うのかな？」

他の興味津々という目を向ける三学長やラウ先生と違い、エミルは問い返しながらもほんの少し嬉しそうに見えた。そのことに胸を撫で下ろし私は話を続ける。

「私のことは構いません。確かに、白銀狼に襲われて怪我もしたけど、その怪我だって治してくれたのはレニさんだし、レニさんはこのマリル教会を護りたかっただけだと思います」

「流石美しいときなどという夢幻を謡う月の使者だけはありますね。」

寛大なご意見だ」

茶々を入れるレムミラスさんをエミルは目だけで制した。

「寛大とは思いません。罪は罪。償うべきだと思います」

きつぱりといい切った私にレムミラスさんは、眼鏡の奥の瞳を不機嫌そうに眇める。

「ただ、その償いが、じつとしているだけというのはどうかといっているんです。大体、彼がここから居なくなったらこのマリル教会と陽だまりの園の子どもたちはどうするんですか？ 彼には、働いてもらうべきです」

「教会の運営は他の信者たちで執り行うでしょう。別に彼である必要はない」

「そんなことないです！ レニさんじゃないと駄目だと思います。私は余り知らないけど、でも、子どもたちを見ていれば分かるし信者の人たちだってそう思っていると思います。レニさんは一人で頑張り過ぎただけです」

そう、レニさんは頑張りすぎただけなんだ。

急にお父さんが居なくなつてそのあとのことが全て空白になつて……だからなんとかしなくてはと紛争した。そのことは自己保身のためではなく皆の為であつたことは明らかだ。だって、彼は一度だつて自分が上に立とうとしたわけじゃない。

まだ、何かいいそうだったレムミラスさんを最終的にブラックが黙らせた。そしてゆっくりエミルが口を開く。

「でもね、マシロ。彼が司教となるには素養が必要なんだよ」

「それなら種を飲めば良いじゃない」

「その方法なら、彼が飲む必要はない」

これじゃ、堂々巡りだ。

どうして、この世界の人はこんな単純なことが分からないんだろう。どうして私にはそれを伝える言葉が足りないんだろう。必要なのは素養なんてものじゃなくて、これまでレニさんが歩いてきた軌跡だというのに……。

きゅつと唇を噛み締めた私にか細い声が掛かる。一瞬誰か分からなかったが、声のしたほうへ顔を上げるとレニさんだ。ちらりとレニさんがエミルを見るとエミルはそれを許すように軽く頷いた。

「マシロさん。貴方のお気持ちは嬉しいですし、ありがたいと思います。しかし、私は罪人ですしそれに父の種を受け入れる勇氣もありません」

「逃げちゃ駄目です。レニさん、逃げちゃ駄目。あのね、確かに私は全然怒っていないかといえは嘘になるけど、でも、そんなの大したことじゃないんです。大体、私は罰だといっているのにレニさんに拒否権はないでしょう？」

レニさん本人が口を挟んだことで私は胸を撫で下ろし頭で考えながら時々言葉を詰めながらだけど話を続けた。

「それにそんなにメジャーな話じゃないのかな？ 私がいうのもなんだけど、種は白化されて素養自体と記憶は別れるからお父さん自身をお父さんの全てを受け入れるわけじゃないんですよ？」

ね？ とブラックを見ると、そうですねと微笑んでくれる。良かったと安堵したのも束の間。

「値は張りますが」

「え？　そ、そこは流れるにおまけとかないの？」

おどおどと問い返した私にブラックは物凄く良い笑顔で「ないです」といい切る。

「マシロは構わないといいますが私は構います。正直、幽閉なんて緩い刑が妥当なんて誰かさんの根回しだとしても何故国が考えるのが不思議です」

「ぶ、ブラック」

焦った私にブラックは「それに」と少し強く口を開く。

「種の売買は世界のルールです。それにもし彼が素養のほかはこの場所に在るべき存在であるならば、種が必要だと思うものが在るのならはずと種は彼の手に渡ると思います。マシロのときのようにね」

「私のとき？」

ここに來て突然自分の話になって驚いた。素直に首を傾げた私にブラックは「そうですよ」と続ける。

「私には貴方が必要だと思った。だから種を渡した。後払いなんて今まで一度もしたことありません。そして、彼らにも貴方が必要だと思った。だから借金の肩代わりを申し出た。ほらね？　貴方自身がなんとかしなくても貴方自身を必要だと思うものたちがなんとかするんです。同じように彼を必要とするならば、必ずしも素養が必要ならば、他の信徒がなんとかするでしょう。それに、まあ、当面ここをどうにかするものが居ないといけないのは事実です。その辺りは今エミルが思案中なのではないですか？」

冷静に最後まで言葉を紡いだブラックの言葉に促されるようにエミルを見る。ふとエミルと目が合うとくすくすどこか楽しそうに笑っていた。

「マシロのいい分も、もちろんブラックのいい分も良く分かったよ」

エミルは机の上で組んでいた指先をゆらゆらと揺らしながら暫くレニさんを見詰めていた。エミルの決断でレニさんの処遇が大きく変わる。私は固唾を呑んで見守った。

「僕もマシロの話は多少寛大すぎるのではないかと思うけれど、王城としても陽だまりの園をそのまま吸収するのは現段階で難しいと問題視されていたところでもある。だから、レニ司祭には陽だまりの園とマリル教会の運営の一部管理を任せても良い」

信じられないという風に立ち上がりかけたレニさんをカナイが隣で制した。

「でも、無条件とはいかない。そうだな、誰か監視をつけよう」

それでどうかと締め括ったあとエミルは反論が出ないかやや黙した。

「で、監視役には誰が立つんです？ まさかシル・マリル様ご自身が立たれるわけではないでしょう？ まあ、それが一番だとは思いますがどね？ 力関係上。然程重要視されてきたわけではないマリル教会ですが、ここでもし王城の管理下に下るようなことがあれば均等が崩れ、争いの原因にもなりかねない。そのくらいのことお考えでしょう？ お優しく寛大な議長殿」

蒼月教徒の人って皆あんな感じなのかな？ 嫌味つたらしいたらない。私は素直に眉を寄せた。別に私に監視しろというのならやつても良い。どうせ身の振り方も考え直さないといけない時期なのだから。

むつと気分を害したまま名乗りを上げようとした私をブラックが隣で制した。ちらとブラックを見たがブラックは感情の読み取り難い表情のままレムミラスさんのほうを見て「まだです」と告げる。

そして、私の替わりに口を開いたのはついさっきまで白銀狼の姿のままだったハクアだ。まるでシル・メシアの白い木が佇んでいるような凜とした姿に立会人として黙っていた学長たちもざわめいた。

「監視役は私が勤めよう。私は、この国の利害関係には一切関係なく疎遠で中立な状態のものだ。完全なる外からの目としてみることも出来るだろうし、教会側からの反発も少ないだろう」

「ハクア」

監視役なんかにくという事はハクアは山に帰ることは出来ない。どのくらいの期間になるかは分からないが、きっとハクアのことだ。私の命が有る限りこの町にこの場所に留まってくれるだろう。くんと腕をひっぱった私をちらりと見て、ハクアは「問題ない」と微笑んでくれた。

「紹介遅れましたが、白銀狼の彼はハクアといって今の彼らの族長です。今回騒ぎに関係した同胞の責任を何らかの形で取りたいと申し出てくれました。僕も彼に任せるとするのは良い提案だと思います」

エミルの紹介と決定に異議を申し立てるものは居なかった。レムミラスさんも面白くなさそうではあったがその口を噤んでいる。なんとか、レニさんの自由は確約されそうだ。私はほつと胸を撫で下

ろして決定と共に元の姿に戻ったハクアの頭を撫でた。

「さて、貴方は査問会と仰っていましたでしたが確か召集時そのようなことは一切告げていなかったと思います。今回の趣旨はレニ司祭の一件だけではありませんからね。あくまで話し合い、です」

エミルは感情の起伏を見せることなく穏やかにレムミラスさんに話を続ける。

「僕が重きを置きたいのは貴方も先ほど仰っていた、争いの原因になりそうな事態を少しでも収めてこの場で平和条約を交わしていただきたいと思っています。その為に各学長にもお集まりいただいているんです」

証人という形で、と微笑んだエミルにレムミラスさんは僅かに頬を引きつらせた。

第三十二話：自分に向けられる感謝の意味

色々和不都合を述べてレムミラスさんはサインすることを拒んでいたが結局ブラックは今まで通りどこにも属さないという形で折れた。

私、には大した権限ないと思うけれど、その私とブラックは全てに置いて中立の立場を崩さないということを制約し、蒼月財団・マ ril 教会・王室はそれぞれに関与しないことを取り決めた。契約上は争いごとが起きない形を作り出したのだけど、ブラックは小さな声で「大した意味はありません」と苦笑して呟いた。でも僅かな抑止力にしかないとしてもゼロじゃないだけましだと思っしかな い。

会議が終わり皆がそれぞれの挨拶を交わし、その帰りを見送ったあと私はエミルにお礼をいった。

「うん。マシロは予定通りに話を進めてくれたからとても助かったよ。こちらこそ、ありがとう」

「……予定通り？」

なんだか歯に何か詰まったような物いいのエミルに私は首を傾げる。

「マシロなら彼の処遇を改めるように進言してくれると思ったんだ。かなり大騒ぎになっていたから、国王陛下の耳にも入ってしまったていて極刑は間逃れそうになかった。僕もそれに反対はしていなかったんだけど、昨日マシロに詰問されて目が覚めたよ。極刑を宣言して覆すのは難しいから何とか無期限の幽閉まで王宮審判たちに譲歩

してもらった」

「つまり、最初からエミルはレニさんをここに戻すつもりだったの？」

「戻すというのは違うかな、彼にはここに居てもらわないと困ると思ったんだ。監視役はハクアに頼んだけれど、王宮からも出すよ。彼はマリル教会の維持を行いつつもここで期限抜きの軟禁状態だ。この真つ白な檻の中からの自由は許さない」

エミルはそういつて傍の柱をぽんつと叩いて見上げた。エミルの苦しげな言葉と瞳にきゅつと痛む胸を抑えて私は眉を寄せた。

「そんな悪役みたいな台詞吐かなくても良いだろ？ 軟禁つていつてもレニにとつて殆ど今までと変わらない生活がおくれるんだ。普通なら有り得ない」

後片付けを終えて戻ってきたカナイにそういわれてエミルは曖昧な笑みを零すと「僕が彼をここに縛ることに変わりはないよ」と呟いた。

「このあとこの決定を受け入れさせるのに骨を折るだろ」

「それは大丈夫、全権を委ねられてるんだからなんとかならないことじゃない。カナイには余計な心配を掛けるよね。そういえば、アルファのほうは無事済んだのかな？」

「僕も戻りました」

どこか遠い世界で行われているような会話をぼんやり聞いていた私の後ろから機嫌良く抱き付いてきたアルファに息を詰める。アルファはそのまま話を続けた。重いから離れる。

「王宮に非難していた陽だまりの園の子どもたちはシゼが連れて戻

つてくれたし、僕は門を開けただけですけど」

「それで良いよ。じゃあ、あとアルファは潰れそうなマシロの上からどいて、もう少し教会内部を調べてから、戻ろっかな？」

エミルの言葉に、アルファは「はい」と返事して、ひょいと離れる。そして私に送れなくてごめんねと謝ってくれるエミルに首を振る。

「エミル」

「え？」

それじゃあと、立ち去りそうなエミルを捕まえた。エミルは不思議そうに振り返りくいくいと手を引く私に僅かに腰を折ってくれた。私はおもむろにエミルの頭に手を乗せてよしよしと撫でる。細くて繊細な髪が指の間を抜けて凄く気持ち良い。

「え、ええつと……マシロ？」

私はなんだか満足だったが困惑しているエミルが面白い。

「エミルは頑張ってるから良い子良い子してるんだよ」

いつてよしよしと重ねるとエミルはふふつと笑いを零して折っていた背を正した。私の手がするりと髪の間から落ちてしまい少しだけ名残惜しい。エミルはその手を取って甲に唇を寄せると「ありがとう」と微笑んだ。

「本当に、マシロには敵う気がしないよ」

ぼうつと熱を持つ顔を隠すことも出来ずにエミルを見上げていた

私にエミルはそれだけいういつものように、ぽふっと大きな手を私の頭に乗せてよしよしと撫でてから「またあとでね」と今度こそその場をあとにした。またねとぶんぶん手を振ってくれるアルファに手を振ったあと、面白くなさそうにしているんじゃないかな？と思ったブラックを振り返る。

しかし、さっきまでそこにあつた姿はなく、私は首を傾げたがブラックに限って迷子ということはないだろうから特に気にしないで私も散策というかユイナちゃんたちを探すことにした。音もなく私の隣に並んでくれたハクアを確認して部屋を出る。

「レニさん……」

子どもの声に誘われて廊下を歩いているとぼんやりと子どもたちの遊ぶ姿を見詰めているレニさんに出会った。レニさんは私の姿に気がつく、「ああ」と零して弱々しい笑みを浮かべる。

「先ほどは過大な慈悲をありがとうございました」

恭しく腰を折るレニさんに私は両手を振った。

「頭を上げてください。私は何も……それにこれがレニさんにとって楽な道ではないのくらいは私でも分かります。私はレニさんに辛い道を示したでしょう？」

私の様子にレニさんは微笑んだままちらりと子どもたちを見る。私もそれに誘われるように視線を送ると、シゼが絡まれてた。小さい子は苦手そうだから物凄く揉まれてる。

その様子にシゼには悪いけど私まで笑ってしまった。

「マシロさんの仰ったとおりです。私は私で責任を果たさなければなりません。逃げるような姿勢を正していただけたことも感謝しています。私がもし美しいときを刻むのならやはりこの場所しかないと思います」

ゆっくり、噛み締めるようにそういったレニさんはそつと私の両手を取った。そして気遣わしげに左手に指を這わせて確認すると胸を撫で下ろしたように一息吐く。

「良かった……綺麗にしていただけたのですね」

「大丈夫ですよ」

「流石です。本当にすみません。私には治癒師の素養はありませんし知人の中では彼女が一番優秀だったのですが、やはり種屋さんには敵いません」

「ああ。ブラックは規格外なんで気にしないで良いと思いますよ」

あつさり規格外と口にした私にレニさんはふふつと声を出して笑ってくれた。良かった。良く消沈しているように見えたから心配だったけど大丈夫そうだ。

「色々と予定しないことが起こってしまったて……本当は白銀狼とユイナが会おうようなことはなかったはずで、貴方にあんなに酷い傷を負わせる予定でもなかったんです」

そうぼつぽつと呟くレニさんの言葉にハクアが「白銀狼は血の臭いに惑わされる。特に年若いものと老いたものは制御が仕切れない」と囁いた。

「しかし、全ては動き出してしまった。途中で止めるわけには行か

なかつたんです」

苦悶に満ちるレ二さんに私まで苦しくなる。

しかしその様子に気がついてかレ二さんはぱつと暗い表情を消して笑顔で「そうでした」と切り出し、握ったままになっていた私の手に何かを握らせてくれる。私はレ二さんに促されて手を開くと見覚えのある宝石がキラキラと輝いていた。

「これ……」

「すみません。探したのですが、それだけしか見つからず腕飾りにまでしかありませんでした」

「いえ！ 十分です。ありがとうございます！ 凄く大切なものだったんです」

受け取ったものは原型よりかなり短くなっていたけれど、間違いなくエミルから貰った紅珊瑚だ。私の喜びようにレ二さんも嬉しそうにしながら「付けましょう」と私の手首に掛けてくれる。

「あの場では店主殿も貴方の為に話を合わせたようですが、恐らく父の種はもう使えないのだと思います。長く封印し隠し続けていたんです。そうであってもおかしくない」

ぽつぽつと噛み締めるようにそう口にするレ二さんに私は「そんな……」と思わず零す。そんな私にレ二さんはやんわりと慈愛に満ちた笑みを浮かべて話を続けた。

「何を持って、司教の素養とするのか素養を見ることの出来ない私では分かりませんが、そういう特殊な素養は血縁者から認められるケースが多い」

「……はい」

よく分からないけれど真っ直ぐに私を見詰めるレニさんの視線から逃げられず、私はレニさんを見詰め話に耳を傾ける。

「私とマシロさんの子どもならその可能性も高まるのではないかと
思います」

「は？」

ぎゅっとレニさんの手を握る力が強くなる。

「私と結婚してくださいませんか？」

「はい？」

急展開についていけず、脳内でレニさんの声が反響する。結婚？
ということは今私は求婚されているのか？ 何故、私？ レニさん大丈夫か？ 苦難のあと何か変なものに目覚めてしまったのではないだろうか？

—— ……ゴッ……

「やはり消しておくべきでした」

「おや、いらしたんですね？」

片腕を私に回し自分に引き寄せて、対峙したレニさんの額に銃口を押し付けているのはブラックだ。

「自分の立場を理解していないのでしょうか？ いけしゃあしゃあ
とよくいえたものですね」

「これでもとても緊張して口にしたのですが」

いや、レニさんもそういう問題じゃなくて。もう、なんていうか、そういう雰囲気じゃないよね？ 私は、嘆息し事態の收拾に掛かる。「ブラック。大丈夫だから銃引っ込めて。子どもたちに見つかるとうまくないから」

伸ばした腕でブラックの腕を掴んで自分に引き寄せる。ブラックは簡単に腕を下げるとそのまま私を捕まえた。その一連の騒ぎの所為でシゼで遊んでいた子どもたちがこちらに気がついて走ってくる。

「おにーちゃん、おねーちゃん」

駆け寄ってくる子の中にユイナちゃんを見つけて私はブラックの腕を解きしゃがむ。どんつと勢いよく飛び込んでくるユイナちゃんを受け止めてその衝撃で尻餅をつく。でもどこも痛くなかったし、お日様の香りがするユイナちゃんを抱きとめるのはとても心地よかった。

「ありがとう、ユイナちゃん」

「おねーちゃんも、おにーちゃんもありがとう！ 先生を助けてくれて、ありがとうっ！」

ユイナちゃんの声を皮切りに集まっていた子どもたちが一斉に頭を下げ「ありがとうございましたっ！」と声を揃えた。私は大したことはしていない。していないけれどそれでもこれだけ気持ちの籠ったお礼をされるのは気恥ずかしいのと同じくらい嬉しくて、ブラックは一体どんな顔をしているだろうと、ぐんつと首を逸らして見上げると果然としていた。それがまた可笑しくて、私はぷつと吹き出して声を上げて笑った。

シゼは呆れ気味だし、レニさんは真っ赤になってしまっている。

本当、おっかしい。

第三十三話：白い焰の住むところ

そんなわけで大きな騒動は終結を迎えたわけだけど、私はまだ今後のことを決めていなかった。

話し合いの翌日から私はいつもの生活に戻った。ブラックには休むことも勧められたけど別に体調不良ということもなく至って健康だ。だから休む理由はない。よいしょと今日の授業で使う教科書一式を抱えて部屋を出るとカナイが待っていてくれた。

「おはよー、どうして居るの？」

「居るの？　って授業があるからだろ」

きよろきよろとしてもエミルとアルファの姿はない。あれから誰かが戻った様子もなかった。カナイもさっきこっちに来たくらいだと思う。朝食のときに一度駄目もとでノックしたけど居なかったし、朝食はどういうわけかシゼが付き合ってくれた。

廊下を歩きながら私は話を続ける。

「忙しいんじゃないの？」

「忙しいよ。ホント。でも俺は別に王宮勤めってわけでもないし、それにエミルは他と同じくらいお前のことを気に掛けている。信頼している奴を傍に置いてないと落ち着かないんだろ？」

「じゃあ、私がここに居る間はカナイとかに手間掛けさせるわけだ」

はあ、と嘆息して零した私の愚痴にカナイは首を振った。

「方向性が決まるまでだ。まだ、何も決めてないだろう？　このまま図書館で学ぶことを選ぶなら、それなりの対処を考えるだろうし、

王城に一緒に入るといふのならそれもまたそれなりの対応をする…
…決定するまで一時的なことだ。それに俺はエミルも居ないのにこ
こで勉強を続ける意味がない。俺は中級階位以上の資格を取ること
は出来ないからな」

カナイの言葉に私はグラスから溢れたワインを思い出した。カナ
イの器には薬師系の注ぎ場所がない。

「ここに残るなら多分シゼに任せる方向でまずは検討するだろうけ
ど、あいつは誰かの面倒を見ていられるほどの器用を持ってないか
らな。没頭すると他が見えなくなるタイプだ。それに護る術には長
けてない。一応、学長連中にまでお前の立場と顔を明かしたんだ、
それ相応の待遇はしてくれると思うが……」

「え？」

「ん……？ ああ、仕方ないだろ？ これ以上、お前のことを隠し
ておくことも難しいしそれで余計な騒ぎが勃発しても拙い。そうな
るくらいなら先に牽制しとけーってとこだな」

そういえば、ブラックも条約なんて形だけだといった。それよ
りも面々が揃っていたことのほうが大きな意味を持つ的な話をして
いたような気がする。

「私ってそんなに特別？」

ぽつつと零した台詞にカナイは、んーっと唸りながら私の頭の先
から足の先まで見たあと。

「中身と見た目は置いといて、立場は特別だな」

—— バコ！

悪かったわねっ！ 中身も外見も特別なところは何もなくてっ！
持っていた教科書で反射的に殴っていた。カナイは痛いと言わんと
らしく当たった肩を庇いながら、でも……と付け加える。

「お前の頭は柔軟だし、突飛だし。間違いなく俺たちとは違う目を持
ってる。そういうのはこれからとも貴重だ。お前はもっと発言
権を持たされて良いと俺は思う」

いつになく真摯なカナイの言葉に恐縮する。

「っていつても、お前はどこにも属さない。だから、そんな肩肘張
らなくても今まで通り好きなようにやってれば良いんだよ」

ぼんつと頭に手を乗せられてバシバシと叩かれる。痛いっ！ 痛
いし、髪が乱れるから止めろっ！ カナイの腕を弾いて、ずんずん
歩いていく。

本当、私これからどうしようかな……？

「はー…… 良い天気ですね」

「ええ、とても」

外気温は低いと思うけれどお日様が当たっているところは比較的
暖かい。太陽の恵みに感謝しつつ暖を取り、周り縁でのんびりと暖
かいお茶を飲む。至福のひと時だ。午前中の授業が終わってマリル
教会に用事があるというカナイにくっついて私も教会を訪れていた。

「何、和んでるんだ！」

「あ。カナイ、お茶菓子？」

「違っただろ！ お前着いてきただけなのになんで腰据えて落ち着いてんだよ、いや、それよりも、レニ司祭。一緒になつて寛ぐ暇があるんですか！」

本当。カナイってカルシウム足りてない系だよね。きゃんきゃん怒るカナイに嘆息しつつ私は再びぼんやり。考え事をしたい時だつてある。

「指定されていた資料は纏めておいたと思います。それをチェックして提出してくださいるのはカナイさんのお役目ですよ。私はそれが終わるのを待つてるだけなのですが」

「……資料って、あの執務室に山のように積んであったやつですか？」

「やつですよ。頑張ってください」

カナイは短く嘆息して「ああもう！」とぶちぶちいいながら執務室へと戻っていった。私はその惨状を知らないけれどカナイがぼやくぐらいだ。凄い量なのだろう。ハクアはレニさんの監視と銘打たれていても、どういうわけか子どもの玩具になっている。まあ、犬の背に乗るのって楽しそうだよ。子どもの夢だよ。

「そういえば、レニさんはいつどうして私がフツーじゃないって気がついたんですか？ 昨日、素養が見えるわけじゃないっていつてましたよね？」

冷めてしまっ前にお茶を飲み干してそう訪ねた私に、レニさんは「ああ」と頷いて話してくれた。

「初めてお会いしたときに分かりました。マシロさんの瞳はとても印象的ですし、それに何より連れてきてくださった赤ちゃんが持っていた徽章を知らないといいましたよね？」

「……あ、あれ、そんなに有名どころだったんですか？」

おどおどと問い返した私にレニさんは、くすくすと笑いながら「ええ、まあ」と頷く。

「あれは占星術師が使っているものです。王都ではとても有名で知らない人は稀だと思います」

「占い師……ですか？」

じゃあ、私がエミルに教えた徽章は違う家のものだったんだ。駄目だな。全然。エミルに直ぐ会えるかな、それともカナイにお願いして伝えてもらえば良いのかな？ どうしよう。シゼがいったようにちゃんと全部確認してからいえば良かった。

空になったカップをぎゅっと握り締めて唇を噛んだ私にレニさんがどうしたんですか？ と声を掛けてくれる。

「私、エミルにそのことを聞かれて……それで、一覧から似たようなのを選んでしまつて、何か大変なことになったらどうしよう。占い師さんのマークなら、全然関係ないですよね」

しゅんつとそこまで話をするレニさんはぽんぽんつと慰めるように私の肩を叩いた。

「大丈夫ですよ。王子はその程度で何かを見誤るような人ではありませんし、それに、無関係でもありませんよ？」

「え？」

「その占星術師の本家筋は王家へ入っています。私の記憶が確かなら第一ターリ様。お妃様です。その家その流れを汲んでいたと思います」

それ以上の詳しい話は知りませんけどと締め括ったレニさんに、はあと頷いた。

「あの赤ちゃんは元気、なんですよね？」

「ええ、名前もありますでしたのでナルシルと名付けました」
「可愛い名前ですね」

素直な感想を述べるとレニさんは少しだけ頬を上気させて嬉しそうに笑みを深める。

「白銀の炎という意味ですが、マリル様を求めて来たものへの力となればと……」

青い空を仰いで眩しそうにそういったレニさんに、私はなるほどと頷くことくらいしか出来なかった。

第三十四話：世界で一番優秀な家庭教師

―― …… 静かな夜だ。

カナイはエミルの元へ書類を届けなくちゃいけないからと今日もやはり寮を空けた。アルファも居ない。エミルはもちろん居ない。シゼはさっきまで私のことを気に掛けてくれていて傍にいてくれたのだけど、ラウ先生に呼ばれてしまった。渋っていたけど、もう月も高い。そのうちブラックが来るからとシゼを送った。

屋上にはまだ雪が残っている。足元からの冷気に眠気などおきない。

これから先の私。これまでの私。考え事するには丁度良い。

シゼのあの様子からして、やはり私の選択って実質三択だ。図書館を出てどうするか。出ることは決定したほうが良いだろう。エミルたちが居なくなってからたったの数日だけど、エミルたちが図書館から居なくなるかも知れないという噂はあつという間に広がって、誰が次に私を担当するかで色んな人に声を掛けてもらった。私はまだ中級階位だから上級階位の誰かに世話を焼いてもらわないといけないのがルールだ。

これまで気がつかなかったけど、エミルたちの抑止力はかなりのものだったようで、籠が外れたように人に揉まれる。これではシゼに迷惑が掛かるのは必死だし勉強という雰囲気でもない。だから、私はここを出るべきだ。アリシアが上級階位になってくれていたらこちらからお願いしたのと思うと溜息が零れる。

「溜息は幸せを落としますよ？」

月を背にふらりと現われたブラックに顔を向ける。ブラックはゆつくりと歩み寄って来て、そっと私の頬に触れ軽く口付けてから隣に座る。

「こんな所に居ると風邪を引きますよ?」

「うん。でも、そこそこ回りが五月蠅いからここが丁度良いんだよ」

いつて苦笑した私に、ブラックはそうですかと頷いたあと私と同じように月を仰いだ。月光に照らされる横顔は青白く冷やかだけど端正な顔立ちを際立たせていると思う。いつもと同じ、同じなんだけど

「ブラック、何か悩んでる?」

「はい?」

私の問い掛けが本当に意外だというようにブラックはどうして分かるのかと知っているのか、そんなわけないといっているのか分からないけれど数回大きく瞬きをして私を見た。

「悩んでいるのは私ではなくてマシロでしょう?」

それはそうなんだけど。

「私に出来ないことを探すほうが難しいので、安心して頼ってくださいね?」

につこり平然とそんなことを口に出来るのはブラックくらいだ。その余りにも溢れすぎている自信にちょっと笑ってしまふ。そんな

私と同じように、ふふつと笑ってくれるブラックが好きだし、頼りにしてる。

頼りにはしてるけど、頼ることと甘えることの違いが私には良く分らない。

だから出来る限り自分でなんとかしたいと思うんだけど、本当私個人に出来ることって限られてるんだよねえ。はあっと息を吐き出すとほわりと綿菓子のように白くなり風に攫われていく。

「マシロ、寒い好きじゃないです」

「じゃあ、部屋で暖かいものでも飲もうか？」

いつて立ち上がると仲良く寮棟へ降りる。でもブラックは暑いのも苦手だ。体温まで面倒臭がりなのか調節を嫌がってる気がする。

翌日驚くことが待っていた。

「どうしたの？」

朝早くから部屋の扉を叩く音に目を擦る。起きなくてはいけない時間になってはいるものの、一人だと朝ごはんを食べに行く気もしなくて今日から寝る時間に宛てることにしたのに。と不満げなまま扉越しに訪問者の名を尋ねて驚いた。

「おはよう。寝てたみたいだね？ 朝は食べたほうが良いよ？」

「あ、うん……ごめん」

私の問い掛けは無視なのか、朝からいつもの爽やかスマイルでそう告げてくれたのはエミルだった。

「僕お腹空いてます！ マシロちゃん、早く早くっ！ 顔洗ってき

てください」

「え、えあ、うん」

横からによきつと生えてきたアルファに押されて私は扉を閉め慌てて顔を洗いに行きながら「なんで？」と首を捻る。兎に角急いで身支度を整えて、再び廊下に出る。私的には凄く急いだのにアルファに「遅いよー」とぼやかれて反射的に謝ってしまった。

ずるずると殆どアルファに引きずられるように食堂に付きいつもの場所に腰を降ろす。えーっと？と首を傾げる私にエミルがやっとなつこり答えてくれた。

「もう少しここに居るよ」

「え？ ええ！ でも」

「こつちの授業は午前中だけだし、向こつのはうは午後からにしてもらふことにしたから」

え、えええ？ 驚きが拭えない私に、トレイを器用に抱えて戻ってきたアルファはいつものように皆の前に置いて楽しそうに笑っていた。

「マシロちゃん、驚きすぎ。金魚がぱくぱくしてるみたいですよ？」
「いや、金魚は酷いよ。ていうか普通驚くよね？」

だって、もう私が王宮に入ることを選択しない限り、特にエミルは会えないんじゃないかと思ってたから凄く嬉しいし凄く吃驚だ。

「昨日までは、この間の会議の資料を纏めて陛下まで上げるのに少し手間取ってたんだ。でも、まあ、あの場で決めた通り押し通したし通ったから気にしなくて良いよ。それが済めば少し落ち着いたから、先にいったようにしようと思って」

にこやかに話してくれるけど、それってもしかなくても私の為にまた余計な仕事が増えているんじゃないだろうか？

「マシロちゃんって本当甘え下手ですよ？　甘やかしてくれる人が居るんだから甘えとけば良いのに」

あっけらかんとそう口にしたアルファをカナイが制し、苦笑して私に告げる。

「ブラックが発破掛けに来たんだよ」

カナイの言葉に私は益々怪訝な顔になるが、エミルはふふっとお上品に笑って続ける。

「良いんだよ。本当のことだしね。素養に寄り掛かって一つのことしか出来ない無能だといわれたよ」

怒ってる？　怒ってない？　怒ってるよねえ？　ひくつと頬が引きつるのを我慢出来たかな？

「ブラックも素直じゃないんですよ。マシロちゃんが心配だから傍に居てあげてっていえば良いのに」

ねえ？　とアルファに振られても私が困る。そ、そうかな？　と答えるのが精一杯だし笑いも乾いてたと思う。

「実際僕も気になってたから、困ったことになってそうな気がしてだから一度はこちらに戻るつもりだったんだ。夜の勉強会は続けて上げられないんだけど、図書館に居る間は一緒に居て上げられるか

ら安心してね」

無理を押して傍に居てくれる皆になんだか嬉しいけど申し訳なくて領き損ねていると、エミルがにつこりと「こういうときは？」と促してくれた。

「……………」ありがとう

それで十分だよと微笑むエミルたちの気持ちに泣きそうなくらい嬉しかった。嬉しかったから私はその日の午後直ぐに行動に出た。

「というわけでね、お願いみたいな、相談があるんだけど……………」ブラツク？」

今日は平日にしては珍しく、私たちは久しぶりに夜は外で取ることにした。わけだけど、いつものお店のいつもの席。料理もいつも通りその日のお勧め。私がギルド依頼を受けて知り合いになったお店で、ちょっとした隠れ家的なところが気に入っているのだけど。いつもなら食べるの後回しにしても私の話を聞いてくれていたブラツクが上の空だ。

名前を呼んでも気がつかないからもう一度改めて呼びかけると「あ、はい」とやっと気がついたようですよやく目が合う。

「どうかしたの？　ぼーっとしてるなんて珍しいよ。私の話聞いてた？」

「大丈夫ですよ。聞いてました。えっと、エミルたちに釘を刺しに

行つた話しですよ？」

「……それは会つて直ぐ、怒つた話。本当のことだしエミルたちも迷惑には思っていないから私が気にしなくても良いって、強引に治めたんだよね。でも、私が気分を害したならと連れて出てくれたんじゃないかつたつけ？」

私の言葉にブラックは「ああ」と零して、そうでした。と眉を寄せて微笑んだ。今のブラックは十人居たら十一人くらい聞いていない人までオカシイといつてくれるだろう。

「体調が悪いとか、機嫌が悪いとか、心配事があるとか、何かあったらちゃんといわないと駄目だよ？ 役にはたたないと思うけど」

過去に一度、倒れてしまった経験のあるブラックはそのときのことを思い出したのかほんの少し苦い顔をしたものの直ぐにいつも通りに戻るとにつこりと微笑んで「私は大丈夫ですよ」と話を戻した。

「少し考え事をしていただけなので、そのことはまた私の考えが纏まったら聞いてください」

余りにも普通に戻つたから私はそれ以上言及出来ずに、え、ああ。うん。と頷くに留まつた。そして改めて座り直すと自分の話を続ける。

「えっと、さっきの話はブラックにお願いがあるって話して……うん、そう！ 私ね、ブラックに家庭教師をお願いしたいんだけど、駄目かな？」

「私に、ですか？」

不思議そうに首を傾けたブラックに私はうんうんと頷く。そして、ブラックは構いませんよと頷いたあと、のんびりと食事を続けながら問い掛けてくれる。「マシロは少しエミルに似ていますね？」と前置いて。

「どという話の流れでそんなこと思いついたんですか？」

「あ、そうだった。ごめん」

うん、不本意だと思ったけど私も十分説明上手とはいえない。

「これからどうするかを決めて欲しいってエミルにいわれてたから考えてただけ。それでね、私、図書館を出ようと思って」

一度間をおいてちらりとブラックを見たけれど、特に驚いた風ではなく目が合うと続きをどうぞというように頷かれた。

「私ね、アルム学長に直接会ってきたんだけど」

そう続けるとあの人とすんなり面会出来るなんて流石ですねーと感心顔だ。ラウ先生に会いたいとお願いしたらすんなり名前パスだったけど普通は違うのかな？ 首を捻ったものの私には得る答えはないから話を続ける。

そして、なるべく順を追って詳細を説明していくと、それが終わる頃にはお腹もすっかり満たされて私たちは店を出た。

第三十五話：バカップルですが何か？

ブラックはいつでも大きな魔術の発動も難なくこなしてしまうから、どこへ戻るのも直ぐだけど、店を出たあとは暫く散歩することになっている。腹ごなしというわけではないけど、なんとなく並んで歩くなんてことする機会も少ないし、毎日会うわけでもないからのんびり話をするにはこういう時間が丁度良いと前に私が提案したのだ。ブラックは最初とても不思議そうだったけれど、今は一緒に楽しんでくれていると思う。

「マシロの話は大体分かりました。要するに図書館は出るけど試験は受けない、でも自己学習だけでは不安だから私に教えて欲しいということですね？」

「凄く簡潔に纏めたよね。まあ、そうだけど……」

どうしようかなと少し不安に思っていると学長が、にこにこ例の髭を撫で付けながら「お前さんにはお前さんだけの優秀な家庭教師がいるように思うがの？」と口にして私は促されたのだ。私だけと強調され、思い至ったのがブラックだったわけで、本人も二つ返事で了承してくれたわけだし間違っではないと思う。

「それで、マシロは図書館を出たあとどうするんですか？ 勉強を続けることとかは分かりましたけど」

遠回しなブラックの問い掛けに私は少し緊張して口を開く。

「ここで住みたいなと思ってる」

「王宮へは行かないんですか？ マシロならそう選択してしまうのではないかと思っていたのですが」

種屋に戻るという選択を一番に思いつけない辺り、私、ブラックに可哀想なことをしているかもしれない。少しだけ申し訳ない気持ちになった。

「王都に居ればそんなに遠いわけじゃないし、それに何かあったわけじゃないし……そりゃ、何かあれば力になってあげたいと思うから王宮に上がるのも、選択しないこともないんだけど……もし、私がブラックなら家に戻るといわないのに、エミルたちのところへ転がり込むといわれたら嫌かなと思って」

「ごによごによと口にした私にブラックは「そうですか」と答える。さらっと口では返事したけど指を絡めて繋いでいた手にはきゅっと力が入って、きつとほつとしたのだらうと思うと私も顔が綻ぶ。

「だからどこかアパートメントでも探して」

「駄目です」

「え？」

当然というように話を続けた私の腕をぐいっと引いて足を止めるとブラックは私を自分に向き合わせ重なる。

「駄目です。他人の持ち物に間借りするようなことしなくて良いです」

「え、でも……私、家なんて管理しきれないし、普通に寝起き出来て勉強出来る環境があれば」

おずおずと口にした私にブラックは頭を抱えて深く嘆息したあと「兎に角駄目です」と重なる。

「王都に住みたいというのなら屋敷くらいなんとかします。そうですね、管理云々広さなど気になるようなら、出来る限り小さくして一階部分を店舗とかにしてはどうですか？ 空いている間はそれこそ貴方がオーナーで誰かに貸しても良いでしょう」

借りる物好きがいればの話ですがと小さな声で付け加えられたことも聞き逃せなかったが、こういいだしたブラックはもう引き下がらないだろう。大抵のことは二つ返事で聞き入れてくれる人だから駄目だといったことは梃子でも動かせないことはもうそこそこ付き合いが長いので分かる。私は、反対するのはやめにして「分かったよ」と頷いた。

了承を得たブラックはありがとうございますと微笑んで、止めてしまった足を図書館へ向けた。表はとつくに締め切られているので裏へ周り寮の裏口へと向かう。こちらからのほうが私の部屋は近いから便利なのだけど、日が高いうちは学生もうろろしてるし人影があるので気にならないけど夜になると表通りの街頭の明かりと月明かりしかなくなるから極力一人では利用しないところだ。

寮棟のドアノブを握ったところで「ああ、そうだ」と呼び止められブラックを振り返る。

「寮を出るのはいつですか？ 住む場所の準備が整うまで家に戻るんですか？」

うわあ……物凄い期待されてる。戻るよねオーラが凄く出てる。真っすぐに見詰めて私の返答に期待しているブラックから目を逸らした。申し訳なくて見てられない。

「考えてなかったけど、うん。そうだね。こっちの準備が済むまで

寮に居られるようにお願いするよ」

一気にテンションが落ちたのが見なくても分かる。確認する必要もないくらい落胆してる。私にだって一応思うところがあってそういうのだから汲んで欲しいところなんだけどな。

「どうしてですか？ 送り迎えくらいしますから、一緒に住みましよう？」

顔を逸らしたままの私の肩を掴んで向き直させると、珍しく直球で問われる。確かに好きな人との生活に夢がないわけでもないのだけど。

「でも度々になると迷惑だろうし、ブラックだって家にずっと居られるわけじゃないでしょう？ いつでもというわけにいかないし」「確かに常に屋敷に居るわけではありませんけど、週末だけではないくてもっとマシロと居たいです」

どうしたんだろう？ 強引というか我侭というか、いつもと何かが違うブラックの様子に私は顔を上げた。問い掛けそうになる私の視線から逃げるようにブラックは私に近づくとぎゅっと抱き締めた。

「あの、ね。ブラック」

「はい」

「私だってブラックと一緒に住みたくないわけじゃないんだよ？」

ももごとそう口にするとブラックは少しだけ腕の力を緩めて、「問題があるんですか？」と問い返す。

私はその問いの答えを口にしたくなくて、あーとかうーとか唸っ

たものの、無回答では済ませてくれない感じた。私は小さく嘆息し赤くなる顔を伏せるようにブラックの胸に額を押し付ける。

「それが良くなっちゃうから」

「はい？」

「だから、一緒に良くなるから嫌なの。ずっと一緒に良くなって、離れられなくなって距離が分からなくなっちゃう。そうしたらきつと沢山我侭になってブラックを困らせると思うし、お互い駄目になっちゃう気がする。少しでも私がこの世界で自立してちゃんと立てるようにしないと……」

頭の中まで熱くなってぼーっとしてくる。もーっどうしてこんな恥ずかしいこと一々口にしなくちゃいけないのか、嫌になってくる。はあと強く息を吐き出しその反動で吸い込んだ冷たい空気で頭を冷やしてから顔をあげ重なる。

「大好きな人の重荷や枷になるのは嫌なの」

人が物凄く恥ずかしいことを、わざわざ口にしたというのに物凄くきよとんつとしたあと、こともあるうか目の前の猫は噴出した。失礼極まりないっ！

「ちょ、ちよつと、何で笑うの？ 失礼だよな！ 聞いておきながら笑うなんて！ そ、そりゃ、笑わないようになんて釘刺してないけど、わ、笑わ、ないでよ」

最後にはなんだか哀しくなってきたてそう口にしたら私にブラックはまだ口元を覆って笑っていたが、やっとひと心地付いたのか「すみません」と謝ってやんわりと瞳を細めた。それは私だけに向けてくれる笑顔で、私の大好きな顔だ。

「本当、可愛いですよね」

よしよしとブラックに頭を撫でられると、ちょっと不満だ。エミルにされるのはなんとも思わない。でもブラックにされるのは子ども扱いされているようで凄く嫌。それもあつてなんとか自立したいとも思ってるのに。ぶっすーっと不貞腐れてしまふ自分に、これだから駄目なのだと思いつつも止められない。

そんな私の頬を包んで軽く口付ける。こんなところで突き放したい気持ちともうちよつとだけと甘えてしまふ気持ちが入り混じって、後者がちよつと勝った。

「そんな風に考えられるマシロがそうそう墮落するとは思いませんけど、寧ろしていただけると嬉しいくらいなんですよ？」

額同士をくつつけたまま、そんなことをいいつつ、ふふつと笑ってそうですか、そうですねと何かを勝手に納得したようだ。唇が微かに触れる位置で紡がれる言葉はくすぐったくて身体の奥の熱を燦らせる。早く離れて部屋に戻るのが私にとってベストな選択だと思う。思っから、僅かに離れると、ぐいっとなと抱き寄せられ一息に唇が奪われる。

「……っんん！」

抗議に似た声は外に漏れることなく深く喉の奥に沈められる。身体が自由が奪われ、呼吸と心音が上昇する。

「今日は帰す気がなくなりました」

「っ……な……」

そう口にしたブラックに文句をつけようと思っても、もう遅い。私たちの足元には魔方阵が浮かび、淡い光を放ち始めている。魔術が発動すれば私には止められない。自分だって帰りたくないと頭をよぎってしまったことのいい訳のようなことが脳裏を掠め私は返事の替わりにブラックの首に腕を絡めた。

第三十六話：王宮ってちょっと遊びに行くところ？

翌日カナイとアルファに盛大に笑われた。

「マシロちゃん、真面目にそんなこといったんですか？」

「部屋を借りるってそんなに变？ 私の居た世界では至って普通のことだと思うけど」

かなり不満気な調子でそう口にした私にカナイが「普通ならな」と無理矢理笑いを押しとどめたような顔でいう。

「確かにお前一人ならテラとテトにでも頼めば直ぐに住むところらしい世話してくれるだろうけど、絶対長くは置いてもらえないぞ？」

失礼だ。私は別に人様に迷惑を掛けるほど生活態度が悪いわけじゃない。

「まあ、ブラックなら上手く行き来するでしょうけど、面倒臭がりですからねえ。どこかで見付かったら闇猫と通じているような住人絶対に置きたがらないと思いますよ？」

「そんなこと……」

「マシロとブラックのことを理解出来るのは上層でも極僅かな人間だけだよ。残念ながら、種屋の悪評は根深い。仕事柄民間にまで理解を求めるのは無理だよ。本人もそんな面倒好むとは思えないし……」

動揺した私にエミルがそつと説明を付け足してくれる。

「ブラック、そのこと分かってたよね。私もしかして傷つけた？」

「そんなことで傷付く繊細な神経してないと思うぞ？ それにいつはそのこと自体反対はしなかっただろ？」

カナイにいわれて私は素直に頷く。もともと反対されるなんて微塵も思っていなかったけど。話には続きがありそうだったのに、エミルに呼びかけられてその話は終わった。

「つまり、その準備が整うまでは僕らもマシロの傍に居て良いんだよね？」

「え？ ああ、もちろん。図書館を出てからだって普通に……は、立場上来られない、のかな？」

ちよっぴりよぎった私の寂しさに気がつかないようにエミルは話を変えた。いつもだけど、エミルの話の内容には脈絡がないというか順序が色々とばらばらだ。

「今日の午後空いてるかな？ 良かったら王城に遊びに来て欲しいんだ」

一体どういう流れでそんな話に辿り着いたのか皆無だけど、にこにこそう告げるエミルに、萎縮しながらも断れるはずはない。私はおずおずと頷いた。

「なんの用事があるんだろう？」

エミルとアルファは午後一番で王城へと戻り、私とカナイはマリル教会へ立ち寄ってカナイは経過観察と書類回収。私はその間ハク

アと一緒に子どもたちの相手をしていたけれど疲れたので一休み。
ハクアにもたれ掛かってうとうととする。夕べはあまり眠っていないからちよつと眠い。ふわふわの毛皮に包まれてハクアのゆっくりとした呼吸で上下する胸は安心する。揺り籠に抱かれている赤ちゃんってこんな心地良さなのかな。

そんな安堵感に包まれて直ぐだと思ふ。カッソカッソとお尻に痛みが響く。うーっと唸ってみる。

「起きろ馬鹿」

—— …… コッソ。

もう一度叩かれてなんとか覚醒し瞼を持ち上げる。私の幸せタイムを邪魔する奴は誰だ。まあ、いわずと知れたカナイなのは間違いない。大体女の子を起こすのに足先でお尻を蹴るなんて何事だ。綺麗に磨かれている革靴をぐうで思い切り殴る。

「っ」

私のほうがダメージが大きかった。不貞腐れてもう一度寝なおそうとハクアに埋もれたら「早く起きろ」と首根っこ捕まれた。

「カナイってさ、私の扱い酷くない？」

「…… 正当な扱いだろ。普通の女がこんなところでごろごろ寝転がって熟睡したりするか」

カナイと論議して敵うわけないから、私は流した。

「用事は済んだの？」

「ああ。お前らが居なくなってるから少し時間が押してる。余り時

間がないからさっさと行くぞ」

どんつと私の背中を押して、廊下を進ませたあと直ぐに隣に並ばないから振り返ると何事かハクアと話をしていた。ハクアは、深く一度頷いて身体を起こすと、すつと人の形を取りカナイと一緒に歩み寄って来て「行こう」とそつと私の背を押した。どうしたのかと聞いても問題ないと返されただけだ。

ちよつと待て。ハクアの主は私のはずなのにどうしてこう私は蚊帳の外なんだ。食い下がって問質せばきつと答えてくれるとは思うけどそこまでしないとイケないのだろうか？ 腑に落ちないまま私は道連れが多いのは悪いことではないかと一人納得した。

王城へ着くとアルファが迎えに来てくれた。そしてそのままエミルと合流するとんでもない事を聞かされる。

「え、ちょ、待って。私普通の格好だし、そんな、え？ エミル遊びに来てって……王様に会うようなこと出来ないよ」

「ごめんね。陛下はいい出したら聞かないんだよ。僕もなんとか先延ばしにして置いたんだけど……本当ごめんね？ 変なこととかさせないように気をつけるから少しだけ老人の話に付き合ってくれないかな」

エミルにそんな困った顔をされてしまったら嫌だと私がいえないのくらい、分かってくれてそうなものなのに、ていうか多分分かっていていつてるんだよね。がっくりと肩を落とした私はしぶしぶ、国王陛下との謁見を賜ることにした。賜りたくない。

「彼のいうことはほぼ聞き流して良いからね。今日は本当はこれが

メインじゃないんだ、本当は僕の妹たちに会って欲しくて呼んだんだけど」

王様二の次にして良いんですか？私はそうなんだーと乾いた笑いを浮かべつつ、右見ても左見ても上見ても足元見ても絢爛豪華な城内を突き進んだ。

前を歩くアルファやカナイですら違和感ないのに私には場違いも良いところだ、エミルはもちろん我が家的な感じだし。

心細くなつてハクアに傍寄る。ハクアは元々場に気おされるなんてことはまずないだろう。今も別に普段と変わったところはない。

こんなにデカイ扉にする必要ないんじゃないの？ という大きくて彫り物がつつりしてある扉の前に到着。きつとここを潜ると謁見の間というやつなのだろう。王城とか普通に有り得ない世界だったから凄く緊張する。

「主？ 心拍数が上がっている」
「平気です」

分かってるけどバレると恥ずかしい。

ハクアに顔を覗き込まれてぷいっと答えたのに声が裏返った。皆はもちろん扉の両隣に配置されている兵士さんにもくすりと微笑まれてしまった。

そして重厚な音を立ててゆっくりと両側から開かれた扉の奥には私の想像力は貧困だったと実感させられるくらい圧倒的な広さと、煌びやかさが待っていた。つか、こんなに広い必要ないじゃん。私が通ってた学校なら室内運動場くらいだよ。

はあ、と嘆息した私の背をエミルがそつと押してくれる。その手が暖かくて優しく、肩の力がほつと抜けた。

扉から正面に位置した玉座に座しているのが当たり前だけど王様だろう。それなら隣はラウ先生のお父さんという話の執政殿かな？ 恐らく定位置まで来たのだろう、アルファとカナイが一礼して両脇に離れた。深く呼吸してから、顔を上げると合わせるようにエミルが紹介してくれる。

王様をエミルは老人だといったけれど、どう見ても五十歳前後くらいに見える。家のお父さんよりちょっと上かなあと思うくらいだ。外見上エミルと似ているとは思わないからきつとエミルは母親似なんだろう。

「ジルライン・ドール・アラニオン陛下だよ」

え？ と息を詰めた私にエミルはそつと囁く。

「呼び名なんて何でも良いよ。そんなことあの人は気にしないから」

にこりと告げてくれたけどでも国で一番偉い人でしょう？ 陛下

……とかで良いのかな？

「貴殿が白月の姫か。白銀狼を従えてこの場にやってくるとは実に素晴らしい！」

座つてて良いからっ！ と思わずいいそうなくらい、目の前まで来るのが早かった。すつと両手を取られこともあるのかそのまま唇を寄せて指先に触れるまでばやんつと見届けてしまう。

「えと、私はマシロです。その、出来ればそう呼びください。陛下」

「陛下とはまた他人行儀じゃな？ 愛情を込めてジルと」
「呼ぶ必要ないから」

陛下の言葉をあつさり切って捨てたのはもちろんエミルだ。私じゃない。心情的には近いけど私じゃない。もしかして、エミル、お父さんともあんまり仲が良くなかったりするのかな？ ジル陛下も私の手を握ったままエミルと睨みあうのやめてください。

「我が愚息には勿体無い美姫だが、そういえばラウから色々聞いておる」

見た目に反して、翁っぽい話し言葉だなとか悠長なこと考えちゃ駄目、だよな？ そして、血の成せる業なのかエミルと同じように美的感覚は狂っているようだ。自分の息子は愚息とかいうくせに、私を美姫とお世辞にも程があるから私はあえて触れない。恥ずかし過ぎる。

「博士から何をお聞きになったのか知りませんが、それは陛下が口出しをされるようなことはありません」

なんか火花散ってませんか？！ 凄い陰悪なんですけど、誰か助けるって周りを見ても皆いつものことなのか失笑している。執政殿も含めて、だ。

第三十七話：知らされなかった事実

「あ、あの！ 今日はどういう用向きで」

無理矢理割って入った。なんとか陛下の興味がこちらに戻ってくれたらしく、につこりと「ああ悪かった」と話を戻してくれた。

「何、用などない。唯、噂の白月の姫にお目通り願いたかっただけじゃ。この愚息が、都合が付かないばかりいいおって本当に情けない」

ちらりとエミルを見ると悪戯な笑みを浮かべて肩をちよつと竦めた。その様子から本当に私を連れてくるというのは最終手段だったのだろう。

「そういえばラウから図書館を出られると聞いたが、どうじゃ？

ここに身を落ち着けてはみんか？」

「いえ、私は」

「そういえば白月の姫は、闇の猫とも懇意とか？」

断りかけた私の台詞を遮って、ジル陛下は台詞を重ねる。あれ……？　なんだか雲行きが怪しくなってきた。私はなんだか嫌な予感を感じながらも否定する理由はなく「はい」と頷く。陛下は僅かに瞳を細めて憂いを帯びた瞳で私を見ると話を続ける。

「あれは心を持たぬ闇の者。民の救い手となるべき姫が気を許される相手とは思えん」

「陛下！」

「父と呼ばぬか愚息よ」

良くない流れを感じてエミルが止めに入ってはくれたがジル陛下は止める気は毛頭ないといった様子だ。私が答えなくてはいけない問題なのだろう。私はなるだけ冷静な声を作るようにそつと深呼吸してから「誤解です」とゆっくり口を開いた。声が震えないか心配したけどまだ大丈夫だ。私の言葉に陛下はエミルを見ることなく私を見て興味深そうに「ほう」と零した。

たったそれだけの動きなのに私は萎縮する。国を纏め上げているだけの人だ、その存在感や重さは人一倍感じさせる。でも、だからって私も黙ってばかりは居られない。ブラックはなんていわれても気にもとめないだろう。それは分かっているけど、大切な人を蔑まれて平気なほど私は大人じゃない。私は意を決して言葉を続けた。

「陛下はご存じないんです。彼は孤独に心を凍らせていただけで、持ち合わせていないわけじゃない。彼は誰よりも真っ直ぐで純粹だと思います」

いつもならアルファやカナイ、エミルにいたっても笑ってしまいそうなことを口にしたのに、誰も茶化したりはしなかった。唯、陛下だけが好戦的な笑みを浮かべる。

「流石は白月の姫。闇猫にまで慈悲を掛け美しいときをとお願いか？ では姫、貴殿はその純粹な男がマリル教会の一件でどれほどのものを犠牲にしたか知っておるか？」

「父上お止めください。彼女には関係ないことです」

ジル陛下はエミルの制止をあつさり無視して告げる。

「報告では二十七人とあがっておる。敬虔なる信者。一目聖女を拝もうと集まった民衆。優秀な騎士をつけていたのにも係わらず、多

数の死傷者を出した。それでも尚同じことを申すのか？」

—— …… 二十七人

あの騒ぎでこの人数が多いのか少ないのか分からない。分からないけれど決して少ない数ではないと思う。

どう応えて良いのか分からなくて黙した私に陛下は細い溜息を吐き、苦しそうに僅かな間黙祷するように瞼を落とした。ややして瞼を上げた陛下は愁いを帯びた瞳で私を見た。

「確かに天上人であられる二つ月には関係のない事柄かも知れぬな」

ぼつんと最後に零された言葉に私はくつと唇を噛み締めた。罵られたり蔑まれたり怒られたり怨まれたりするほうがマシだ。ジル陛下の言葉は本当に呟きで、雲の上を見ているようだった。今、目の前に居る私は居ないようなものだそう捨てられた気がして泣きそうになった。私はここに居るのに。

「父上お話が違います。カナイ、ハクアとマシロを連れ退室を」

すつと完全に私と陛下の間に割って入ったエミルは静かにそう告げた。私が構わないと顔を上げようとすると、既にカナイが隣に立って「行こう」と囁き右手で私の背を支え左手で私の手を取った。

「ああ、姫。ここへの在住はご検討あれ。いつでも王城は姫を喜んで迎え入れるじやろう。滞在中は城内禁止区域も排除しておこう。寛がれよ」

あんなことをいったあとにいう言葉じゃないと思う。いう言葉じ

やないと思うけれど、陛下は単に自論を述べただけで私を貶したり排除したりしようとしたわけじゃない。私はなんとかありがとうございますと搾り出してカナイに導かれるまま謁見室をあとした。重たい音を吸い込んでしまうようにびったりと扉が後ろで閉まる。

「馬車回すから今日は帰れ」

カナイにいわれて私は首を振った。呆れたようなカナイの溜息が聞こえる。取り合えずここを離れようと促されてそれに続く。

「ここに鏡がなくて残念だけどな？ お前、顔真っ青だぞ」

来た道に戻ることなく、城から出ると中庭に出た。ところどころに雪が残るといふのに、青々とした芝が敷き詰められていて、少し奇妙な景色だ。少し歩いて円筒形のポーチに到着。促されるまま腰を降ろした。ハクアは人型で居るより元に戻るほうが多分好みなのだろう。狼の姿に戻ると私の膝の上に一度頭を擡げたあと足元に伏せた。言葉少なだけどきつと心配してくれているのだろう姿にちょっと和む。

「平気。まだ、帰らないよ。少しだけ休む」

「お前が帰っても俺たちは責めないぞ？」

いつになくカナイの言葉尻が優しくてちょっと笑ってしまう。

「エミルは妹さんに会って欲しいって言ってたし、そっちが本命だっ
っていつてから」

だからまだ帰らないと締め括った私にカナイはやれやれと嘆息し私の隣に腰を降ろす。少し戸惑いがちに私の肩に腕を乗せて、自分

のほうへ引き寄せてぽんぽんと頭を叩く手のひらがなんとなく不器用そうで優しい。

大丈夫、大丈夫……ちょっと哀しかったただだから。この世界から孤立した存在だと断言されたような気がして、当たり前のことなのにちよつとだけ哀しかった。

少し溢れてしまった涙を指先で拭くと、私の頭を抱えたカナイの腕に力が入った。カナイがそんならしくないことをするから、ちよつと零れたただだったのに涙が止まらなくなる。

私はいつだって強く在りたいと思うのにいつも弱い。

「カナイさん、やーらしい」

「っ！」

ややして私の涙が止まったのを見計らったようにアルファがひよっこりと背後から顔を出した。慌ててカナイが私から離れて、私はごしごしと確認するように顔を拭いた。

「お、お前遅いだろ？」

「あのですねー、僕はカナイさんじゃないんですよ。城内がどれだけ広いと思っただけですか。それでも急いで探してたんです」

「あ、あー……そうか」

「マシロちゃん、大丈夫？ あのあとすっかりエミルさんが釘刺してくれましたからね？」

そういつてアルファは私の頭をイイコイイコと撫でる。……エミルが刺す釘……それはまた抜け難そうだね。うん。ふふつと笑いを零した私にアルファはにっこりと天使の笑みを浮かべてくれる。華

やかで暖かい笑顔だ。

「も、大丈夫。ごめんね、途中で抜けちゃって」

「構いませんよ。全く、王陛下はご高齢ですからね。愚痴っぽいんですよねー」

「アルファ」

「ああ、そうでした。僕はカナイさんと違って王宮仕えだから陛下が主なんですよね。あーあ、早く代替わりすれば良いのに」

あまり効果はないと思うがほんのちよつとだけ声のトーンを落として、そう愚痴ったアルファは私を見て、内緒ですよ？ と唇に人差し指を添えまたにこりと笑みを作る。そうして和んでいると息を切らせたエミルが合流した。

「っは……はあ、もう、アルファもカナイも居場所を教えてよ」

柱に手を着いて一休み、顔を上げたエミルと目が合うと困ったように微笑まれた。

「ごめんね。泣かせちゃったみたいだ」

歩み寄ってくれる姿に私も腰を上げる。別にエミルが気に病むことじゃない。そつと涙のあとを辿るように頬を撫でたエミルに、私はなんとかにこりと笑って見せたつもりだけど、大丈夫かな？

「先に帰ってしまったって構わなかったのに、大丈夫？」

重ねたエミルに平気だと答え、待っていた理由を告げるとエミルは目を丸くしたあと呆れたように微笑んで「ありがとう」と頭を撫でた。

第三十八話：王妃と王女

道すがら妹君のお話を聞いた。

アセアとメネルという双子の姉妹で妹アセアは素養に恵まれたものの身体が弱く今は床に伏せりきりらしい。昔は違っただけだと哀しそうな笑みを浮かべるエミルが印象的だった。メネルのほうは星を詠む素養に恵まれ、王家の素養を持たなかったお陰でエミルと同じように王宮より出て大聖堂で勉強中らしい。その子が暫くぶりに戻ってくるらしいから会えると良いなということらしいけど。

「そういえば、メネルさん？　って図書館まで来てた子？」

「ん、あ、あー……　そういえば、そうだね？　あの時は、確か良くない星を見たお知らせに走ってくれたんだ。あのあと例の事件が起こったんだけどね」

曖昧に微笑んでそう話してくれるエミルに、なんとなく申し訳ない気分になった。

「お陰で最悪の事態は避けられたと思っているよ？」

陛下の話を聞いた限りでは最悪に近い結果になっていると思うんだけど。きっと顔色がさえないのだろう私にエミルはゆっくりと説明してくれる。

「世界はマシロを失わなくて済んだ。それに、蒼月教徒に和平を持ちかけ結果を出した。これはね、マシロが思うよりずっと凄いことなんだよ？　彼らはいつでも上の合図さえあれば王宮を狙っていた。

ここを抑えれば国を独裁出来るからね。実際、過去の歴史でも種屋が蒼月教徒に加担した時期は壮絶な争いが長く続いたらしいからね」

生まれるよりもずっとずっと昔の話だけだね？ と締め括ったエミルに、ふーんっとしか答えられない私はやはりまだまだ勉強不足だ。

歩いていた廊下の両端に兵士が立っていた。珍しくはないけど、何となく違う気がして通り過ぎてても尚振り返ってしまうとエミルが「ここから王妃様の領域になるからね。許可のないものは通れないんだ」と説明してくれた。妹って王妃、つまり第一ターリ様の子どものことだったんだなと思いつつ私は頷いた。ということは他のターリ様もこんな風なら城の殆どはターリ様の住処となるのだろうか？

「王城で生活できるのは王妃様だけだよ。他のターリ様達は王宮内に点在している屋敷に身を置いている。数字が近いほうが王城に近いんだ。だから僕の実家は王城からかなり離れているよ？」

私の疑問ってどこから垂れ流しなのかな？ 淡々と答えてくれたエミルに私はまたまたふーんと返す。通された部屋は寝室だった。他の場所と違い些か消毒の香りが残っている。扉のところでアルファとカナイは足を止め部屋にまでは入らなかった。王宮って色々難しいところなんだなと、肌で感じる。可愛いメイドさんがベッドに横たわっていた女の子を優しく起こすと天蓋から降りたカーテンを開けベッドの柱に引っ掛けて私たちを招いてくれた。

——…くいつ

私がエミルの袖を引くとそっと振り返る。

「ん？」

「体調良くないならハクアは出てたほうが良いんじゃない？」

動物ってあんまり身体に良くなさそうな気がする。ハクアはあれから面倒になったのか白銀狼の姿のままここまで来ていた。奇異の目で人間に見られるのは特に気にならないらしい。私ももう珍獣扱いだから気にならないけどね？

私の言葉にエミルはにっこりと微笑んで「ハクアには居てもらわないと困るんだ」と答えてくれる。何か引つかかる物言いだな？と思いつつもそれなら良いけどと遠慮なくベッドへと歩み寄った。

「兄様に、聖女様ですか？」

にこりと愛らしい笑顔を浮かべたのは綺麗な綺麗なお姫様だった。

「また体調を崩したと聞いたけど、大丈夫？」

エミルはいつも優しいけれどそれにもっと拍車をかけて柔らかい声で語り掛けている。本当に大切なのだろう。メイドさんに促され私もエミルもベッドの傍に腰を降ろす。問い掛けられたアセアさんはアルファと同じかもっとずっと幼く見えた。透明に近い日の光を紡いだような金髪が流れるようにベッドの上まで垂れている。

「平気、平気。兄様は心配しすぎ」

ころころと楽しそうに笑う姿も儂げに見える。

「そう？ 今日マシロが白銀狼も連れて来てくれたんだよ？ 物

語ではない白い月の少女はとても暖かい子なんだ」

「エ、エミル。恥ずかしいから程ほどに」

そのまま褒め殺しに会いそうだったのでとりあえず、袖を引きストップを掛ける。エミルは本当のことなのにと笑いながらも止めてくれた。アセアさんはその様子に、微笑み改めてまじまじと私を見詰める。髪と同じ色をした瞳がガラス玉のようだなと思う。

「そうだ！ マシロ様、アセアは絵を描くのが得意なんです。一枚白い月の少女を描かせてもらえませんか？」

「様は良い、です」

「では、お友達のように構いませんか？」

にこにこつと無邪気そうな笑顔に変えてくれたアセアに釣られて私も笑顔で頷く。思っていたより馴染みやすい感じの女の子で良かった。

それから私は彼女のスケッチにのんびり付き合った。その隣でエミルも退屈そうにするでもなくその様子をのんびりと眺めている。とても穏やかな時間に思えたのにそれはそう長く続かなかった。入って来た扉とは違う部屋の奥の扉が開き派手な女性が出てきた。彼女は私に目を与えることもなくエミルのところまで歩み寄ってくる、立ち上がり掛けたエミルの足元に膝を着きエミルの手を取った。

「エミル様。どうかわたくしたち親子にお慈悲を」

続けるようにそう告げてエミルの手を自らの額に押し付けて懇願する。私が声も出せずにその様子を見てみると、エミルと目が合った。エミルは困ったように微笑んで尚も続ける女性の願いを遮るように「王妃」と彼女に取られている手に開いた手を重ねて立ち上がる。

それに釣られるように床から膝を上げた女性は潤む瞳をエミルに向けた。

「母様、聖女様の御前です。場を弁えてください。エミル王子もお困りです」

凜とした声でそう告げたアセアにも驚いた。そして、このゴージヤスな感じの女性が王妃様というのにも驚いた。

「アセアっ！ 貴方のことをお願いしているというのになんという態度！ 貴方こそ改めなさい」

王妃はヒステリックな声を上げた。そんな風にいわなくても口出ししそうになった私よりも早くエミルが「王妃」と囁き、彼女を促して出てきた扉へ進んだ。

「直ぐに戻るから」

につこりとそう告げて扉が閉まると妙な沈黙が流れる。エミルの言葉通りエミルは直ぐに戻ってきた。その表情は少しだけ疲労が窺える。大丈夫？ と問い掛けた私に「平気だよ」と微笑み優しく髪を撫でると、アセアに断って私の退室を促した。

私と入れ替わるようにカナイが中に入り、残された私とアルファは待ちぼうけ。アルファはエミルの護衛だからこの場を離れることは出来ないらしい。ハクアを残してきてしまったことに不安を感じ中へ戻ろうとしたらアルファに止められた。私は目の前の中階段を下りたところに広がっていたエントランスまで降りて窓際に置いてあったソファに腰掛けた。ここならアルファも見えるし傍には兵士さんも居るし、余計な心配はないだろう。ちらりと階上を見上げるとアルファがニコニコと手を振ってくれた。

「お仕事大変ですね？」

手持ち無沙汰だった私は傍に居た兵士さんに声を掛ける。無言で立っていられるとちよつと息も詰まるしね？兵士さんは私語は禁止なのか私の問い掛けに、そのようなことはありませんと答えたあとまた黙した。続けて私語なんてしていると怒られるのかと問うと首を振ったので話しに付き合うようお願いしたら、ようやくこちらを向いてくれた。

日常会話の基本！今日の天気の話から始まって当たり障りない会話を続けていたが兵士さんがふと零した。

「聖女様はまるで人のようですね？」

と……。私は人以外の何に見えていたんだ？私が眉を寄せると兵士さんは慌てて謝罪する。別に怒ったわけじゃないんだけどね？苦笑した私に兵士さんも苦い笑いを零した。

「兵士さんは私をなんだと思ってたんですか？」

「は。月から召された尊いお方で、唯一、私共に美しいときを与えてくださる女神様だと」

「……あー……期待に添えなくてごめんなさい」

乾いた笑いを浮かべてそういった私に兵士さんはとんでもないと首を振った。

「ご謙遜されるのですね？エミル様の素養が認められたのも蒼月教徒が刃を納めたのもマリル様のお導きだと噂されていますよ」

「噂です。それは本当に唯の噂です。エミルのことだって私は何もして居ないし蒼月教徒とのことは被害も大きかった。とても功績と

は呼べないと思いますよ？」

苦笑した私に兵士さんはゆっくりと首を振った。

「マリル教会の事件を私は余り知りませんが、それでもそのご結ばれた和平は素晴らしいことだと思います。犠牲は確かに手痛いことでしょう。しかし、ひとたび争いが勃発してしまえばその程度では済みません。私も、交替の時間を向かえ一日の仕事を終えて兵宿舎に戻り仲間と酒を飲み交わすことが出来る。それが行えるのは平和であるからです」

「じゃあ、兵士さんはもう”美しいとき”を見つけてるんですね？」

兵士さんの言葉にそう答えた私を兵士さんはまじまじと見詰めたあと……そう、でしょうか？ と不安そうに零したので私はそうですよと頷いた。

美しいときなんて誰かに分け与えられるものじゃなくて誰もが持っているものはず。白い月の少女なんて偶像に縋るからそれすら気が付くことが出来ない人が多い。

なるほどと笑いを零した兵士さんと一緒に私も笑う。そんな穏やかな時間が突然開かれた扉から乱入してきた人影が破壊した。私は慌てて立ち上がり、兵士さんが素早く前にでる。

第三十九話：素養に狂わされる人々

「ケレブターリ様！ お控えください」

反対側に居た兵士さんが、一輪咲きの花のように美しく儂げな女性の前に立つ。水面を映したように美しく流れる水色の髪。若草を思わせる瞳の翠。美しい宗教画にでも描かれていそうな立ち姿だ。そして呼ばれた名。直ぐにエミルのお母さんだと分かった。

「高々兵士の分際で、わたくしに意見し行く手を阻もうとは愚かなこと！愚行を控えなさい！」

ぴしゃりといい放った声はどこか常軌を逸していると思った。

「マリル様。アルファ様のところへお急ぎください」

こそりとそう囁いてくれた兵士さんに促され私は降りてきた階段にそっと歩み寄った。別に私はこそこそする必要はなかったけれども見付からないに越したことはなさそうな感じた。

「その色！ その娘がマリルですね！」

うわっ！ ご指名はどうやら私だ。私がぎくりと肩を強張らせ、振り返ると兵士さんを振り切ったケレブ様が憎しみに満ちた瞳で私を睨みつけ走り寄ってくる。きらりとその手元が光った気がした。

—— …… カラン……

身構えた私の視界にはケレブ様は居なかった。その代わりに見慣

れた後姿があつて対峙したケレブ様の手首を捉えている。足元には用を成すことのなかった短刀が落ちていた。この人初対面の私を殺す気だつたんだ。私は向けられた殺意に心が冷えた。

「ここは、王妃殿です。その場でこのような騒ぎを起こすことのほうが余ほど愚行じゃないですか？」

騎士塔のときよりは幾分か落ち着いているものの、怒りを含んだアルファの冷たい声を聞いてもケレブ様は悪びれる風もなくその手を振り払い

「我が最愛の嫡男セルシスを死に追いやった、騎士風情が知った口を叩くな！」

そう罵声を浴びせると共に反対の手でアルファの頬を思い切り打った。アルファはそれに抵抗することなく、もう一度、重ねられた手のひらをその頬に受ける。衝撃で口の中を切ったのだろう。じわりと口の端に血が滲んだ。

「お前が騎士であることなど許されない！ わたくしに残された最後の愛息であるエミリオの傍に置くことなど、わたくしは許していない！」

もう一度手を振り上げられ慌てて私はアルファの横から出てその手を掴んだ。こんな痩せ細った腕からこんな力があるなんて思わずにはいられない勢いだっただけ、至って健常な私だし止められないほどではなかった。マシロちゃん下がってと声は聞こえたけれども下がない。だって今手を離したら私が殴られちゃう。いや、そこが問題じゃないけど？ それにこんなのは間違ってる。アルファは十分にその責任を感じているし反省している。ずっとずっと悔い

ている。それを知ろうともしない理解しようとしもない人にアルファのことをとやかく攻め立てることなんてして良いことじゃないことは明らかだ。

だから私は絶対に引かない。きつ！ と対峙するケレブ様を見上げてはつきりと口にする。

「アルファは悪くない！ 今彼を責めるのは間違えていますっ！！」

決して気圧されないようにしっかりと見据えて負けないように怒鳴る。しかし、ケレブ様は口角を引き上げ簡単に私の手を振り払い、そしてホールに響き渡るように高らかに笑い口を開く。

「騎士に罪がないと？ はっ、笑わせるな。護衛対象が死に何ゆえ、騎士のみが生き残る？ こんな唯の小娘がマリルとは、どうかしている。このような娘が居るから全てが狂う。わたくしからセルシスを奪いエミリオを奪い……これ以上わたくしから何を奪う！」

狂気に満ちた瞳に私は立ちすくむ。それでも何とか、違うと声を上げたかったのに後ろになっていたアルファが私の腕を掴んで「堪えてください」と呟くものだから私はそれ以上食い下がることは出来なかった。アルファが我慢しているのに、私が我慢しないわけにはいかない……きゅっと下唇を噛み締めると、傍で早くキリア様をターリ様付きはどこだと騒ぎ立てている声が私の耳には静寂にしか思えない。全ての音が消え去り、ケレブ様が紡ぐ呪いのような言葉だけが頭に反響する。

—— ……私の所為……私の所為で、全てが狂う……。

「わたくしにはエミリオしか居ない。今のわたくしにはあの子が必要なのに……あの子はわたくしの元から去り、わたくしを取り残す。

全てはマリルの仕組んだ罠。この小娘がわたくしの可愛いセルシスを誑かし引き離す」

私の心に直接打ち込まれた楔がより深く食い込んでいく。彼女が明らかに錯乱状態にあるのは分かる。もう既に二人の息子の区別すらつき難くなってしまうているのだから。エミルと同じ色をした瞳が涙で濡れている。

私にはその憎しみを受けることも交わすことも出来ず、心が震え動揺に視界が揺らぎ立ちくらみを起こすと何かが聞こえてきた。

『我が声は白き月の歌声。我が謡う詞は青き月の調べ。我が紡ぎだす旋律は荒ぶる者に静寂を与える』

扉から吹き込む風に乗って紡がれる唄。優しい風が私たちの間に割って入り、私の身体はアルファが支えてくれた。対峙していたケレブ様は、ふっと膝を折るとそのまま床に倒れこんで意識を手放してしまう。

「早くキリアを呼びなさい。久しぶりに戻ってみれば何の騒ぎですか？」

こつつと扉を潜ってきたのはつい先ほどまでベッドの中に居たはずのアセアだ。……そう思うってことはきつと彼女が双子の姉メネルなのだろう。彼女は手にしていた杖をくるくると回して後ろに持つとニコニコ私たちのところへ歩み寄ってきた。

「貴方がマリル様？」

やんわりとした笑みを湛えて私の顔を覗き込んできた美人さんに私はアルファに支えられたまま「マシ口です」と答える。

「おい、何の騒ぎだ？　今誰が魔術使ったんだ」

慌しく階上から聞こえてきた声に私は安堵し、助けを求めるように仰ぎ見ると声の主だったカナイは……カナイなんだけど……。

「あんたこそ、何やってたの？」

血だらけだった。

私はかなり不機嫌だ。不機嫌という言葉を身体中で現しているつもりだ。その証拠にハクアが目の前でおろおろし尻尾を揺らしながらうろつろつとしている。遠巻きにエミルたちもどうフォローしようかと思案中なのだろう。

つか、直りませんから！　ちょっとフォローが入ったくらいじゃ私の機嫌は良くなりませんからねっ！

「主」

「何！」

これの繰り返しだ。

カナイの血だらけの理由はハクアだった。私はまだ薬師でも中級階位だから、知らなかったのだけど、聖獣指定を受けている白銀狼の血液はかなりの秘薬精製に役立つらしい。それを利用してアセアの延命に役立てたいということだったらしいし、その所為でアセアとメネルのお母さんはあんな調子だったようだけど。

だからといって私にひと言の断りもないのはどういうこと？！

「主……私には何故、主が怒るのか皆目見当が付かない。許してはもらえないのか？」

椅子に腰掛けて、ぶう垂れている私の膝頭に額を押し付けてそう寂しげにされると、私が悪いことをしているようだ。いや、それは違うっ！断じて違う！違うと思うのに……。

「本当に分からないの？」

ゆっくりと問い返した私にハクアは顔を上げて真っ直ぐ私を見詰めるのと分からないと答える。はあ、私、この金銀妖瞳には弱いな。綺麗過ぎる。意地悪している気になってしまふ。私はSじゃないからそんな風に感じてしまつたら、これ以上強くは出られない。はあ、と嘆息して私は話を始める。

「あのね。私はハクアの主でしょう？　だったらそんな大切なこと内緒にしないで。ていうか主従関係とか関係なく、話さなくて済ませるようなことじゃないでしょ！　そっちの三人にもいつてるんだからね！」

いきなり矛先が自分たちに向いて、三人がこわばったのが分かる。頬を冷やしていたアルファが氷袋を取り落とした。ちよつとだけ楽しい。

「しかし、主に害が及ぶような話ではなかった」

ひくつとこめかみに青筋が立ったような気がする。ゆらりと立ち上がって指差し確認。人を指差しはいけません。でも今は例外。

「あ・の・ね！　私に害がなくてもハクアには害があつたわけだし

よっ！ その前足の傷は何！

「これは明日には治る」

「いつ治るかが問題じゃないのっ！ これまでだってちよいちよい同じようなことが合ったけど大抵黙ってたよ？ エミルたちが間違っようなことするはずないって、私の為にと黙ってくれてるって信じてたから」

なんか口に出したら泣けてくる。泣いてる場合じゃない。きゅつと下唇を噛み締めた私にカナイが恐る恐る「お前話したら絶対反対するだろ」と口にした。その発言にぎっ！と私に睨まれてカナイは一步下がる。

「反対するよ！ 当たり前じゃないっ！ 反対するさっ！ 一度はね？！ でも、ちゃんと説明してくればアセアの為だって話してくれたらちゃんと納得するよ。そうしたら、ハクアの傷の痛みは分け合えなくても心の痛みくらいは分けられたでしょ？ 誰だって、自分自身に傷を作るのはそれなりに覚悟が要るんだよ。私はハクアの主でしょう？ 貴方の痛みくらい私にも少し分けてよ」

—— …… はらり……

堪え切れなかった涙が頬を滑り降り反射的にしまったと思った。今日はこんなばかりだ。慌てて顔を拭おうとしたら視界が暗くなり、自分の足で立っている感覚がなくなった。この重圧感 realistically ハクアだ。何度も私に乗っかるなといったのに忘れてしまっているらしい。

「風よ！」

床との接触を覚悟して、きゅつと目を閉じると慌てたようなカナ

イの声が聞こえた。滑り込むように吹き込んできた風がクツションになって床との直撃を間逃れた私は圧し掛かったハクアに頬を舐められた。お陰で涙は引っ込んで良かったけど本当勘弁してください。がつつりハクアにホールドされてしまっている私を解放する為に慌ててカナイとアルファが寄ってくれる。

「マリル様は私が思っていたよりもずっと近い方なのですね？」

「うん。とても近いよ。もっとずっと手の届かない人だったら良かったのにね」

視界の隅に見えたエミルとメネルの会話は聞こえないけれど、きくと久しぶりに会ったのだから咲く話もあるだろう。それにしてもエミルの表情が些か暗い。ああ、そうか。お母さんのことかな？ 多分あまり人に見られたいものじゃないだろうし、傍に寄ったエミルに気が付いたケレブ様はキリアさんがくるまで縋り付いてうわ言のようなことをずっと呟いていた。起き上がらせてもらいながらそんなことを考えていると、メネルが傍寄ってきていた。

「少しお散歩しませんか？」

どこか少しエミルに似た優しい笑顔だった

第四十話：貴方は誰かの一番ですか

ここは王城。

お二人には敵わないまでも、降りかかる火の粉くらい払えます。
と、エミルの部屋から庭園へ出るまで供をすろといったカナイとアルファをあっさりと切り捨てて、私はメネルと二人夜の庭に出た。

とつくに日は傾いていて辺りは暗くなっていたが、庭の散歩道には両脇にほんのり明るい明かりが灯っていて、ゆるゆると道を照らし出していた。

空にはいつもと変わらない二つ月。

今日は星がとて多く見えるような気がする。私たちはある程度城から距離をとってから話を始めた。

「アセアのこととは本当は仕方ないんです。星の定めたもの。私たち姉妹はこの終わりを知ってます。ですが、お兄様には受け入れられなくて、足掻いて……可哀想です。変えられない運命があることを十分にご存知なのに」

柔らかくなつた空気を再び冷えさせるだけの効果のある話題だった。

「で、でも、ほら、ハクアの血液があれば特別な薬が出来るんですよ?」

わたわたと言葉にした私にメネルはふっと空を仰いだ。

私にはどれが何の星なのか分からない。

分からないから綺麗だな、と、思うだけで済むけれど、星を詠むメネルにとってこの星空は壮大な預言書みたいなものだろう。

やっぱりとても重いのだろうか？

「そうですね。少しは生き永らえることでしょう。しかしアセアはこの生を既に全うしています。やるべきことはやった。彼女が世界に蒔く種はもう蒔き終わったんです。あとはそれが育つのを待つばかり」

そう呟くメネルの潔さが哀しくて、その姿が大切な人と重なって私はぽつと呟いた。

「メネルも動じないんだね」

「え？」

「妹さんが……ってなったらエミルみたいなのが私の居たところでは普通だよ。藁にも縋るってやつでね。何でも良いの。どうしても生きていて欲しい。どんな形でも生きてさえいてくれれば……そういうの、シル・メシアではあまりないね。命がとても軽い。ただ流れていく時間の上に、あるだけの存在。流れていく時間に刻まれるのは一つまみの特別な人間だけ」

「貴方もその一人ですよ？ マシロ」

「んー、どうかな？ 私は唯の人だよ。何も出来ない。ブラックが居なかったら言葉も通じなかったし、居場所もなかった。私は運が良かっただけじゃないのかな？」

あのときは決して自分の運が良いなんて、微塵も、思えなかったけど。と、付け加えると自嘲的な笑みが零れる。

「大体この世界の人はちょっと変だよ。美しいときなんて乙女チックな話信じているくせに、白い月任せでしょう？　美しいときなんて曖昧なものもつと現実を、今あるものを見るほうが堅実だしそれに本当は皆もう持つてるのに気がつけないのはその所為だと思っただけだなあ」

と、そんな話をこの世界の、しかも、星詠みをしている女の子に話す私もどうかと思うんだけどメネルは凄く真面目に聞いてくれている。

そして、やれやれと嘆息した私に慈愛に満ちた笑みを浮かべる。

「マシロは優しい世界の住人だったのですね」

「……少なくとも他人に命を奪われる可能性は低い世界だと思うよ」

どうしようもない答えに私は苦い笑いを零した。

そんな私を見てメネルはやりわりと話題を変え問い掛けてくる。

「ケレブ様に付けられた傷は癒えそうですか？」

ケレブ「タリ様の話を持ち出したメネルに驚いたら、ふふっとお上品に微笑まれる。」

「え、と。アルファに助けてもらったから私に傷は付いてないよ……。アルファのほうが被害者だと」

「ごによごによと続けた私の胸をメネルの綺麗な指先がぴんつと弾いた。」

「……のことです」

メネルの瞳は全てを見通しているようだった。

私は、その瞳から逃げるように顔を背けて「平気ですよ」と答える。メネルは何かをいい掛けて、一度止めると変わりに「少しだけ昔の話をしましょうか？」と切り出した。

もちろん駄目なわけないから私は頷いた。

「私も何分生まれる前の話ですから詳しくはないのですが、ケレブ様はそれはそれは美しい美姫だったそうですよ。一時は陛下からの寵愛を一身に受け輝いておられたとか……」

確かに綺麗な人だった。

今は病んでいる風ではあったけれど健常であれば今も尚輝いていると思う。

「その勢いは何故彼女が第一ターリに据えられなかったのかというところにまで及んだ……」

「え？」

「それほどまでに陛下に愛され慈しまれる存在であるケレブ様が第五ターリであるのはおかしいと異議を唱える声も上がっていたということです。その波の所為で私たちの母とケレブ様にはどうしても和解出来ない蟠りがあります。しかし、ケレブ様には他のターリ様より圧倒的に足りないものがあつたんです」

時折、空を仰ぎながらメネルは丁寧に御伽噺をするように語り聞かせてくれる。

「後ろ盾やもともとお持ちの地位が低かつたんです。王侯貴族よりも民間に近かつたケレブ様の地位は他のターリ様を差し置いて数字を上げられるようなものではなかつたんです」

「ケレブ様は一番になりたかったの？」

私の素朴疑問にメネルは緩く首を振った。

「数字など形だけのものですから、ご本人はそう気に留めることなく穏やかにお過ごしになっていたそうですよ」

だとしたら、やっぱりセルシスの死がケレブ様を変えた一番の原因なのだろうか？

「ケレブ様が、少しずつ変わられたのは陛下のお渡りがなくなっただけです。何が原因なのかご本人はもちろん分かりません。ただ陛下からのご寵愛が冷めたのだらうと噂されたり何らかの手回しがあったという噂もちらほらとしていたそうですが、どれも決定的というのは遠かった。それまで一身に受けていた愛を感じられなくなったケレブ様は塞ぎこみ、徐々に二人の王子へと執着するようになった。しかしそのときには既にセルシスは城に上がっていましたその偏った愛情はお兄様に注がれ変質した愛情がセルシスに注がれていたと……そう、私は傍のものに聞きました」

とても、とても……寂しい人だったのだらう。

寂しくて哀しくて苦しくて、全てが疑わしくて孤独で……そう思うと、とても苦しくて私は胸元をぎゅっと握り締めた。

「ケレブ様の内包した闇はとても、とても深いものになってしまった。色々なことが複雑に絡んでしまって、もう解くことは困難なほどに……。王宮はそういうところですよ。煌びやかに見えてその内側はとても深い闇に皆覆われている。お母様も既に長く病んでいらっしやる。それに気がつくものは少なくて誰もが見て見ぬフリをする。素養に支配されているこの大きな籠は全体が病んでしまっている」

ふうと嘆息して夜空を仰いだメネルは、ふいに顔を私に向けてにっこりと微笑む。

「私、次の王陛下の代に賭けています。少しずつきつと少しずつ変わると思います。私は王陛下にはエミル兄様をと思っています。ですが、お兄様はそれを望まれないかもしれませんし、現第二継承順位を持つておられるハスミ様、第四継承順位のキサキ様。お二人ともその瞳は外へと向けられている。どなたが上に立たれても上位継承順位の皆様はお力沿えしてくださると思います」

ゆっくり穏やかに、明るい未来を夢見て言葉を紡ぐメネルは、やはりどこかエミルと似ているなと思う。

本当に、そうなると良いのだけど……。

「なりますよ。なります。今の世には貴方が居る。私はマシロに会ってこうしてお話して、より強い確信を持ちました。」

というかいつものことだけど、私の疑問や不安は垂れ流しなのだろうか。

「私は」

「マシロはご自身を過小評価し過ぎる傾向があるようです」

メネル。

見た目に反して強引だ。

とても強引に自分のペースに引き込むタイプで、私は総じてこういうタイプに弱い。

「それならそれで、私、ではまだお付き合いが浅いですね？ お兄様や、カナイ様、アルファ様貴方の傍に居てくださる皆様を信頼されてはとうですか？ マシロはそういうの得意そうです」

にこにこつと無邪気に笑ってくれるメネルにつられて「それなら出来る」と私も笑みを取り戻した。

エミルが、この二人をとても大切にしているのも分かる気がする。まだ皆幼い頃、三人でよく学んだといっていたエミル。きつと、自分の大好きな絵を描き、大好きな星を語り、そんなキララした二人を見守るエミルが居て……穏やかで優しい時間だったと思う。

私にもこんな妹が居たらきつと可愛くて仕方ないと思う。

ちよっぴり臣兄の気持ちも分かるかも。ま、私はこんなに可愛い妹ではなかったと思うけど。ふふつと零した笑いにメネルは優しく微笑んで、続けて「ねえ、マシロ」と切り出した。

第四十一話：選んだ理由

「お兄様と種屋店主様との違いはなんですか？　どうして、マシロは店主様を選ばれたんですか？」

「え・ええっ?!」

ここに來てまさかの恋話っ?!

私は突然のことで瞬間湯沸かし器の如く赤くなった。

その様子にメネルは、くすくすと楽しそうな笑いを零す。そして人差し指を可愛らしく唇に添えて、私の顔を覗き込むと質問を重ねる。

「妹の私がいうのもなんですけど、結構良い線いつてると思うんです。顔も見られないほどではないと思いますし、今なら地位も権力もそれなりにお持ちですが、それに胡坐をかくわけでもなく別け隔てなくお優しいですよ。お兄様そんなに駄目ですか？」

「いや、いえ、その、勿体無いお言葉です」

重々承知しています。

本当にどうしてエミルが今まで余っているのか、不思議なくらいだと思っています。

はい。

でもね、私は選んだんだよ。

陰険で陰湿で孤独な種屋を……しかも今はそんな彼を可愛いとまで思ってしまうくらい、馬鹿になってたりもする。本当自分でも救いようがないと思います。

はい。

私は動揺に息苦しさを覚えて、夜空を仰ぐ。

仲良く並んだ二つ月。

それを眺めていると自然に言葉が紡がれた。

「……強いていうなら」

「はい」

「強いていうのなら……きっと、ブラックは独りだからじゃないかな。それを不便に感じたり寂しいと思ったりするような人じゃないのは分かってるけど、なんていうか、それを見る私がキツインだよね」

それ以上の答えがなくなってしまうて、もごもごとしている私にメネルは、ふふつと笑って話を続ける。

「先ほどマシロは自身に力はないとおっしゃいましたけれど、それは違いますよ？」

「え？」

「貴方のひと言でどれほどの人間が動くと思いますか？ アルファ様は騎士としての才覚は例え、最上級階位を取得していなくとも素晴らしい、それに対して敬意を表しているものも多く従うものも多いです。カナイ様にしましても彼の實力は過去を差し引いても尚素晴らしく彼を敬愛しつき従うものが多いのです。我が兄にしても、貴方のひと言があれば簡単に動くでしょう。先ほども述べたように兄は今ここでマシロが思っているよりもずっと強い立場にあります。他にももっと沢山のものが貴方の声で動くでしょうし、何よりも、種屋店主様は全てを統べるもの」

そつと、私の両手を取って、きゅつと握り締めると、そのことを決して忘れないで下さい。間違えず、迷わないで下さい。と、重ねて念を押した。

そのあと私はメネルと長く雑談し、エミルの部屋へと戻った。
帰り道の間に私がメネルはエミルに似ているというところ、ちょっと
恥ずかしそうにでも嬉しそうに笑ったメネルの顔が印象に残った。

「あれ、メネルは？」

「あれ、皆は？」

部屋に入るとエミルとハモった。

あまりのタイミングの良さに笑いあって改めて問い直し答えあう。

「メネルはアセアの様子を見に行ってくるって」

「アルファは騎士団詰め所で会議。カナイは、あー……シゼの手伝
い」

最後いい難そうにそう口にしたエミルに苦笑する。

鳩尾辺りに擦り寄ってきたハクアの頭を撫でながら「もう怒って
ないよ」と二人に声を掛けると揃って安堵したようだ。

「ていうか、シゼも来てたの？」

「え、ああ、うん。シゼはマシロたちより早く城に入ってたよ。顔
出さないうちで声掛けただけ、図書館で毎日顔を合わせてるから
必要ないらしくて……うーん、照れ屋だからね？」

それは違うと思うけど、エミルがそう思ってくれていて良かった

ね、シゼ。心の中だけで伝えておいた。

窓際に合ったティーテーブルに促されて腰掛けると、メイドさんが静かに入ってきてお茶を用意してくれた。

基本的に人払いがしてあるのかこの周辺に使用人の姿はあまりない。

彼女も用意が整うと直ぐに退席した。

「今日はごめんね？　ここに泊まりたくは、ないよね？　やっぱり。帰りはカナイに送らせるよ」

直ぐ戻ると思うから、お茶でも飲んで待っていよう？　と、続けられ頷いた。

ハクアは私が暫くここから動く気配がないと察すると、外の空気を吸ってくる窓からとんと外に飛び出してしまった。

ここが三階だということは気にしないで置こう。

「アールグレーだ。美味しい」

「ふふ、マシロは利き茶が得意だね？　王室管理の茶畑で取れたやつだから、街には出回ってないのに……あ、ああ。もしかして、種屋で飲んだ？」

あそこには卸してる可能性があるな、と、一人納得したエミルに私は分からないと首を振った。

家には紅茶のブレンドを楽しむのに困らないくらいの種類が用意されているが、どこ産かまでは気にしたことなかった。

それに家主自身そんなにこだわりを感じない。

「それにしても、本当に今日はマシロに嫌な思いばかりさせてしまったよね。ごめん。こんなはずじゃなかったんだけど」

星を詠んでもらったときには、今日が最良と出てたのにな。と、続けて肩を落としたエミルをまじまじと見詰めたあと私はぷつと吹き出した。

そんな私の反応が不思議だったのかどうしたの？ と、首を傾げる姿がまたおかしい。

「エミルも占いなんて信じるんだ？ 今日はお友達をうちに招くと良い日ですとかって出たの？」

占いは女の子の専売特許のような気がするが、そんなことを真面目に気にしているエミルは可愛いと思う。

「お友達……か、まあ、そうだね。でもね、ここで星詠みは簡単な占いとはちよつと違うんだ。それにメネルの星詠みはかなり高確率で当たる。政にも用いられるんだよ？」

まあ、外れることもあるみたいだけど、と肩を落とした。

「気にしなくて良いよ。それに、確かにちよつと吃驚することのほうが多かったけど、エミルがこれからどんなところで生活しなくちゃいけないのかとか色々分かったから。そういう意味では今日で良かったんじゃないかな？」

改めてそう口にすれば、本当にそんな気がしてくる。

私にとって傷付くような出来事はここに居た今日だけだ。

本当に嫌だと思うならばもう二度と足を踏み入れなければ良いだけの話。

本当の顔を知らずに何度も通いつめた末、見せ付けられるよりもずっと良いし、それにここがエミルが図書館に来るまで生活していたところで、これから生活していくところだと知ることが出来たことは悪くない。

「マシロ……」

「ん？」

「ありがとう」

ぼやんと、また降り始めたのかな？ と、僅かな雪がちらつく窓の外を眺めていた私に掛かった言葉に、私は僅かに心臓が跳ねた。

窓から顔を逸らし声の主を見たら、とても優しそうな柔らかい笑みを浮かべていた。

なんだか、そんな笑顔を向けられる自分が急に恥ずかしくなって、一瞬どう対応して良いのか分からなくなる。

「……どう、いたしまして？」

ぽつんと答えた私にエミルは笑みを深める。

居た堪れなくなって私は、そういえば！ と急に話を振った。

「ナルシルの徽章なんだけど」

「ナルシル？」

「あ、そう、私がこの間保護した赤ちゃん。その子の名前。レニさんが付けてくれたんだって」

「白銀の炎……か。確かにレニ司祭の好みだろうね」

「凄い！ 直ぐ分かるんだ」

ぽんつと手を打って歓喜した私にエミルが首を傾げる。

「古い言葉だつて聞いてたから。私はさっぱり、カナイは術とかで使うらしくて詳しかつたけど、エミルはそういうわけじゃないよね？」

一般教養なのかな？ と、重ねるとエミルはふふつと笑いを零してそうだねと頷いた。

「一般的とはいえないけれど、何かの儀式のときは使う言葉だからね。僕はラウ博士に教わったよ。幼いときに……あの頃はアセアとメネルも一緒に教えてもらってたんだ。アセアも走り回るくらい元気でメネルのほう引つ込み思案ではにかみ屋だった」

ぽつぽつとそう話をしてくれるエミルは窓の外を仰いで遠くを見た。

きっとその頃は記憶は優しいものなのだろう。

私も釣られるように外を見る。ちらちらと舞い落ちる雪が月明かりに照らされて綺麗だ。

第四十二話：薄灰色の事実

ややしてエミルが「マシロ」と呼びかけたので振り向くと、エミルはまだ窓の外を見ていた。でも、私の視線には気が付いたのかぼつりと問い掛ける。

「これは、僕の独り言でちょっとした愚痴だから聞いたら忘れてくれる？」

多分、確実に忘れないだろうけど、聞かなかった振り、忘れた振りにくらは出来る。

だから私は「分かった」と頷いた。

その返答にエミルは僅かに口角を引き上げたあとふうつと息を吐いてから話を始める。

「ナルシルの徽章の話聞いたなら、それが王妃の流れを汲んだものであることも聞いたよね……」

私はこくと頷いた。

エミルはこちらを見てはいなかったけれど、きっとガラスに映っていただろう。そのまま話を続けた。

「ナルシルは、きっとアセアの子どもだ」
「っ」

思わず息を呑んだ。

「急にアセアの体調が崩れたのもその所為だと思う。メネルがアセ

アはこの生においてやるべきことは全うしたといった。だから、きつとそうだと思う。僕にはそれを確かめる勇気も問う勇気もない。でもきつと間違いないと思う。王妃は、王家の素養に取り憑かれている。相手は恐らく王家の素養を持った近親者だ。王族間ではこれまでも時折あることなんだけど、許されることじゃない。ルール違反でもあるけれど結果としてもあまり良いものではないんだ。血が濃すぎるから」

「で、でも、アセアはまだ子どもで」

思わず口を挟んだ。

エミルはやつとこちらを向いて、とても、とても悲しそうな顔で微笑んで首を振った。

「ここでは十七歳で大人だし、王家の人間、というよりは素養を持った人間はもつと早くから大人として扱われるんだ」

驚きを隠せない私の瞳から逃げるように、エミルは視線を外して「それにどちらにとってもココロは関係ない」と繋いだ。

—— …… 心は関係ない。

つまり好きとか嫌いとかそういうのは、どうでも良いということだと私は理解した。

「じゃあ、どうしてそこまで無理を押したのにナルシルは捨てられないといけなかったの？」

「生まれて直ぐ素養が確認出来なかったからだと思う。王妃は機が熟すのを待つことにしたんだ」

「でも！ ナルシルは路地裏に捨てられてたんだよ。レニさんがいうにはとても危険なことだって……」

私はあまりのことについて、エミルに責任があるわけでもないのに食いついてしまった。

エミルはそんな私にゆっくりと説明してくれる。

「こついのを良く思わないものも多いから、妨害に在ったんだと思う。少し前アルファを通してその類の話があることは耳に入っていたんだ」

そういえば、前に騎士塔に居たときに王宮騎士の人とかに呼び出されてたな。

そのあとエミルに伝えないといけないことがあるって、アルファがいつていたことを思い出しあの時かなと納得する。

「どちらにしても王妃は出来る限り長くアセアを生かし、そしてその命が尽きたときその種をナルシルに与えるつもりだと……そう、思う」

強い素養を得るのは出来る限りあとのほうが良い。潰される確立が減るからね。と、付け足したエミルはまるで自分のことを指しているようだった。

テーブルの上で緩く組まれていたエミルの指先に、ぎゅっ、と力が入って僅かに震えていた。私は居た堪れなくてその手を覆うように重ねる。

「エミルは違うよ」

エミルは違う……重ねたけど、私はどうしてそんなことを口にしたのか良く分からない。

私でも良く分からなかったのに、驚きに目を瞬かせたエミルは意味を解してくれたようで、落ち着き安堵したように、ふっと口元を緩めた。

「うん。そうだね。僕は違う。僕の話じゃない。あの人に必要なのは王家の素養ではなくて自分の傍を決して離れない人形だよ。自分に似た……優秀で忠実だった兄のような。だから僕は素養を閉じられていて、隠されていて……そこまでののに、それなのに、僕は城を出た。あの人が作った籠から逃げ出したんだ。僕はセルシスじゃない。僕は」

「エミルだよ！ エミルだよ。エミルだから……お願い、泣かないで……」

強く。強く。

私はエミルの手を握った。

エミルはいわれるまで気が付かなかったのか、大きく瞬いた瞬間、はらはらとテーブルを濡らした雫に動じた。

「っ、あ……ご、ごめん。格好悪いな。どうして泣いてるんだろう」

慌てて私の手の中から手を抜き出すと顔を拭う。

「別に哀しいわけじゃ」

「哀しいんだよ。哀しくないわけじゃないよ……エミルは哀しいんだよ」

重ねて私は、椅子から腰を上げて腕を伸ばすとエミルの頭を撫で

た。

本当は抱き締めてあげたいくらいだったけどそれはきつとやっちやいけないことだから、私は何度も何度もエミルの頭を撫でた。

エミルは頂垂れたまま素直に撫でられる。

「本当……格好悪いな……」

「良いよ。独り言でしょう?」

笑って答えてあげると、エミルは「そうだった」と肩を揺らした。

第四十三話：動き始めた齒車

—— …… マシロに出会ったことは、僕にとって掛替えのない幸運だよ。

別れ際そういつてくれたエミルの言葉がとても優しくて暖かくて、ジル陛下に突き放されたことも、ケレブ様に否定され罵られたことも、全てチャラにしてくれた。

今日ここに来たお陰で、分かったことも多くあるし、メネルに会えたのは私にとってとても良かったとも思う。

まあ、それに私は自分の脳細胞が単純に出来ていて、本当に良かったとちよっぴり思った。

「ハクアが居るから大丈夫なのに」

「俺も帰るところなの」

アルファは結局まだ詰め所。

戻ってきたのはハクアとカナイだった。

私は雪がちらつく大通りを二人と一匹で歩く。もう夜も随分遅いから、大通りは静かだ。こういう時間は裏通りのほうが盛り上がっている。

「エミルこれからあそこで、あんな人に囲まれて生活するんだよね。大丈夫かな」

ぼつりと零した私の台詞にカナイは苦笑した。

「そうだな。そうだけど、お前が見たのは一遍に過ぎない。悪いところだけじゃない。何せ俺が知る限りはずっと国を治めてきたのはあの王家だ。どんな争いも最終的には収めてきた。肝心要のところで人心を掌握するだけの力を持つてるんだろうな？　俺には分からないけど、今も昔も上手いことやるんだよ、王宮の連中は」

苦笑しつつも評価しているという風に口にしたカナイの言葉になんとか納得する。

「それならもつと先手を打って、争わないようにすれば良いのに」「やっただろ？　ちゃんとやったじゃないか。お前もそれに協力した。大聖堂や図書館、王宮、つまり騎士塔では、もつと複雑な締結が今後定められる。今回のことはその足がかりに必ずなる」

真剣にそう口にしていたカナイは、それにしてもと前置いてちらりと私を見ると首を振った。

「なんだ？　また何か私に小言があるのか？　身構えたのに何もいわないカナイに「何？」と問い直す。」

「お前ってさ」

「何よ」

「強いのか弱いのか、良く分からないな？」

それは褒められているのか、貶されているのか図りかねる台詞だ。

私は思わず眉間に皺を寄せて返答に困っていると、カナイは話を続けた。

「俺はしょっぱなからマシロを泣かせたし、だから、弱いものだと

思ってた。だから囲って護ってやらないと駄目だと思った」

「えー……つとそれはありがとう？」

冷たくなってきた手を擦り合わせて、はぁ……と、息を吹掛けつつ答えた私にカナイは苦笑した。

「世界に美しいときを分け与える白い月の少女なんて、ただの御伽噺だと思っていたし、世界の落し物なんてこの世界の不純物でしかないと思っていた」

同じように自分の手に、はぁ……と、息を吹掛けてそう続けるカナイは、ちらと私を見て寒いからと私の手を取った。

節張った大きな手をそんなに暖かいとは思わなかったけれど、別に嫌だとも思わなかったから私はぎゅっとその手を握り返した。

空いた手は隣を歩くハクアの毛の中に埋めると凄く暖かい。

「でも今、エミルが思い描く美しいときは確実に現実に近い感じにいる。マシロはレニを許したし、活かしただろう？ エミルはマシロがそう判断すると分かったて」

「ああ、そんな口ぶりだったよね？」

苦笑した私にカナイはこくと頷いた。

「エミルとマシロは少し似てる。エミルも昔大罪人を許した。外に出てはいけない罪人を解放した」

「それで、上手くいったの？」

素直に聞いた私にカナイは、どうだろうな？ と、苦笑して肩を竦めた。えー、そこが分からないと私のいったことが良かったのかどうか分からないじゃん。

僅かに眉をひそめた私に、カナイは微笑む。

少し遠くを見ているような、でも柔らかく慈しみを込めた表情。出会った頃には絶対見ることは叶わないものだったと思う。

「それは……それだけは俺には永遠に分からない」

私にとってそれはカナイらしくない答えだと思った。

カナイはどちらかといえば、なんでも白黒はつきり付けたがるほうだし、分からないことは分かるまで突き詰めたいと思うタイプだ。

「なんだか、らしくないね？」

「どうだろうな？ でも、お前だって自分のことなんてそうそう分からないだろう？」

緩く笑いながらそういったカナイを私は仰ぐ。

それはつまり、エミルが解放した大罪人は自分だといってるのだろうか？ 黙っている、するりと繋いでいた手が解けかけた。

私は指先が離れてしまう寸前で絡め取る。

刹那、カナイの手がこわばったのが可笑しかった。笑った私にカナイは声を詰めた。

「なんで逃げるの？ 私の知らないときのカナイはもちろん知らないけどさ、今は結構知ってると思うよ？ 地味で、嫌味で意地悪で、可愛くないことばかりいってる本の虫でしょう？」

褒めてないだろと目を眇めるカナイに私は笑う。

「でもいざというとき、とても頼りになるよ。自分で優秀っていつちやうだけはあるよね？」

皮肉ったつもりなのにカナイは、まあな。と、笑う。

拍子抜けだし調子が狂う。

それにそんな柄にもない優しそうな目を向けられたら、ちょっと恥ずかしい。

私は居た堪れなくて顔を逸らしほんの少しだけ足を速めた。素直に馬車に揺られていれば、そんなに時間は掛からなかっただろうけど、考え事もしたかったし断った自分に反省しろといいたい。

図書館と王宮はちよつと遠い。

翌日からもまだまだ寒い。はあと手に息を吹掛けると白い。

空を仰ぐと澄んだ青に霧のような薄い雲が掛かっている。多分天気は崩れない。

私が王宮にいつてから数日経った。

午前中はいつも通り授業を受け、午後はエミルたちを見送ってから私もギルドへ向かう。

マリル教会の一件も片が付いたから、私も行動範囲を制限されるようなことは基本的にない。

相変わらず簡単な依頼を中心に受けることにして、私は請け負った依頼書に目を通す。陽だまりの園からの講師の依頼だ。

私はまだ中級階位だけど、一般教養の延長線上にある程度の薬草学を、とのことだから私に出来る範囲のことだ。

きつと私がいったら吃驚するだろう。

私は足取り軽く、教会の前に立った。今度は間違いなく正面。私は一人苦笑して真っ白な門を潜った。

「マシロさん……」

すっかり綺麗になった礼拝堂に足を踏み入れると、丁度、説教後だったのか台の上を片付けているレニさんに会った。

ステンドグラスから差し込む光がレニさんの真っ白な修道着をカラフルに染めている。やっぱりこの人ほどこの場所が似合う人は居ないだろう。

どうしたんですか？ と、分厚く大きな教本を抱きかかえて歩み寄って来てくれるレニさんに、微笑んで「ギルドから来ました」と告げ、依頼書を開いた。

レニさんは、ああ。と、頷いてこちらです、と、案内してくれる。

相変わらず真っ白な建物に気圧される部分はあるものの、前ほどの閉塞感を感じなかった。

長い廊下を歩いていると時折教徒の人たちと擦れ違う。

レニさんに深々と頭を下げたあと私に気が付いて慌てて振り返る人多数。でも、深追いしてくるような不躰な人は居なかった。

「結構人が居るんですね？」

「昼間は居ますよ？ 色々と手を貸してもらっています。事件後去ったものも多いですが、残ってくれたものも多い。マシロさんが知っているのは奥まったところなので、あの辺りには関係者でも極一部、あの時なら私だけですし今はそれにハクアさんと王宮からの監視の方が居るだけなので今でも人気は余りありませんが」

「監視続いているんですね？」

ぼつりと付け足した私にレニさんはくすくすと笑った。

「まだ一月と経っていないのですよ？ 当然です」

そうか、まだ最近のことなんだ。

あまりにも通常通りに戻っているし、静寂に包まれているから…
…もう遠いことのように思われる。

私が居たから起きてしまった事件だ。

ケレブ様がいったように私が居なければ事態は起きなかった。
陛下のいったように私は他人事としてしか見ていないのだろうか。

ふとそんなことを考えると暗い気分になる。

「マシロさん。動き始めた齒車は決して止まることを許されませんが、だから貴方が責を感じることはない。私は犯した罪を償う為に、これから的一生を費やすでしょう。ですがそれで救われたのです」

「レニさん」

「物事は多くの局面を持っています。だから、貴方にとって辛い面を見せることもあるかも知れない、かといってそれだけではないことと忘れないで下さいね」

着きましたよ。と、扉の脇に立ち、木戸を開いてくれたレニさんは綺麗に微笑んでいた。そして開いた先では子どもたちの笑い声が木霊している。

第四十四話：シゼとロスタ

顔見知りの子どもたちに暖かく受け入れられて、順調にお話も終え、次があれば何か実物を持ってくると約束をして帰ろうとしたら、庭の隅の目立たないところで棒を削っているロスタを見つけた。

私は少しだけ迷ったけど気になったから「ロスタ」と声を掛けてみた。

ロスタは目に見ても明らかに驚いたようで、びくっ！と肩を跳ね上げる。そして慌てて手に持っていたものを足元に隠した。

「なんだ、マシロか」

そして振り返った先に居たのが私だったのを確認して、あからさまにほっとしている。私はそんなロスタに歩み寄りながら「何やってたの？」と続けた。

「別に」

ぶっきらぼうにそう答えたロスタは、踵で足元のものをすっかり隠してしまった。

「そつえば、ロスタはさっき居なかったね？」
「興味ないから」

まあ、万人受けするようなものじゃない。
私だってこんな風にならない限り一般教養以上のことを身につけることなんてなかっただろう。だからロスタの気持ちも分からなく

もない。

「ま、面白い話じゃないからね」

そういつて笑った私にロスタは「は？」と声を裏返した。

「だから、薬学なんて面白くないでしょ？ まあ、今日は別に近くで取れる薬草の話をしただけだから、豆知識程度のことだけど」

「……参加しなくても怒らないのか？」

「まあ、折角だから聞いていつて欲しいとは思っけど、強要はしないよ？ 居眠りしてても良いからその場にくらいは居て欲しかったかも知れないけど」

にこにこと隣に座った私をちらとだけ見てロスタは「分かった」と頷いた。結構素直な子だ。

「ロスタは何に興味があるの？」

別に特別な質問じゃないと思う。
でもその質問にロスタは苛立たしげに地面を踵で掻いた。

「何もない。オレは大した素養を持ってない。生きるに困らない程度だ」

私にすれば、それは十分な素養だと思うけど。

でも、ちらりとロスタの足元を見る。

やりたいことイコール素養の人って少ないと思う。ロスタもそんなすれ違いのある子なのかも知れない。

「ロスタとシゼって仲良かったの？」

そういう雰囲気だった。

何か蟠りがあってお互い近寄らなくなってしまうっている気はするけど、嫌っている風には思えない。

「昔はな」

「昔っていうとシゼがここに居た頃？」

問い返した私にロスタは少し驚いたように「知ってるのか？」と目を丸めた。

私はその問いに頷いてシゼから聞いたことを伝える。ロスタは複雑そうな顔をした。

「シゼはこのことを悪くはいつてないし、思っても居ないよ。同じようにロスタのことも悪くなんていわないよ。どちらかといえば

……あー……」

「遠慮してるんだよ。オレに……」

うん。そんな感じだ。

「あいつ、喋らないしおどおどしてるし馴染もうとしないし……それに、泣かなかった」

ぼんやりと今日も良い天気のを空を仰いでロスタは目を細めた。

「オレは物心つく前からここに居たから親は知らない。でも親を知っている奴は皆泣くんだ。捨てないで、一人にしないで、迎えに来て……涙が枯れるまで、枯れてもまだ、ずっと、ずっと泣き続

ける。そんな奴らには、レニ先生がずーっと付いて、大丈夫だときつと迎えは来るからといいくるめる……でも、シゼは泣かなくて、状況が分かってないのかと思っただらそうでもなくて、先生が困った。泣いたり怒ったり騒いだりして感情を出すのが子どもだから……凄く心配して、オレが頼まれた。目を離さないように」

五歳の子どもがそんなことを考えるのだろうか？ 目を離すなということは必然的に死なないように見張ってるという意味にも取れる。

「だから自然とオレはシゼの近くにいたというか、連れてまわってたから一緒だった。大分経ってから一度聞いたんだ、なんで泣かなかったのかって」

いいつつロスタは自嘲的な笑みを零し肩を竦めた。

「母親が泣いてたから、ずっとずっと泣いていて、だから自分が泣いたら駄目だと、自分がここに居れば母親の涙はきつと止まるからと。自分は間違いで存在してるからと……」

「……っ」

間違いだなんて……じわりと目頭が熱くなってしまふ。

「あー、泣くなよ？ 女は直ぐ泣くな？」

はつきり不機嫌そうに眉を寄せてそういったロスタのお陰で私は泣かなかった。

「何となくオレも義務的なものじゃなくて目が離せなくなって、結局一緒に居た時間が一番長くて、だから、ここへ王宮の奴が来たと

き物凄く揉めたんだ。緑色の長い髪の胡散臭い男が先生を説得して、エミル様がシゼを説得した。シゼは首を縦には振らなかったけど、先生のいうことには逆らえない……それにオレは知ってたよ？ あいつが凄いことくらい。だから、ここに居ちゃいけないのも」

それからの経緯は何となく想像が付いた。

だから、早く仲良く戻れば良いな。と、思っ て口にする とあっさり「無理」と否定された。

「そんなことないよ。シゼ、ちよつとは可愛い性格になつてるし、ちよつとは素直だし……」

なんとか取り成してやろうと思うのに、私、シゼのこと嫌いなのか？ と、というような台詞しか出てこない。

ごめん、シゼ。

心の中で詫びた。そんな私にロスタはぷつと吹き出して「違う違う」と首を振る。

「話はした。この間、事件の前後王宮に居たとき、あいつも付き合っ て居たから。無理っていうのはオレ王都から出るんだよ。近いうちに船に乗る。商船だ。オレにも迎えが来たってことだろ？」

親ではないけどな？ と、笑ったロスタになるほどと頷いた。そして、もう一度足元を見た。

「じゃあ、それは趣味？」

「お前さ、こういうのは見て見ぬ振りするものだろ？」

大人気ないと眉を寄せられて苦笑する。

悪かったね、大人気なくて。

ロスタは本当なら剣術系の素養が欲しかったらしい。

でも結局自分にはそういうのは無く、だから趣味までも行かず下手の横好きというやつらしいが止められない。

どうしようもない。と、自嘲気味に笑ってるロスタに別に止めなくても良いんじゃないかという少しだけ驚いたように目を丸くしていた。そして「先生と同じことをいうんだな？」とほんの少しだけ柔らかく笑った。

でも、そのまま行くと海賊とかになってそうだね……ロスタって……。

なんだかその姿が余りにもしっくりき過ぎていて私は考えないようにした。

第四十五話：女の子だって欲しがります

「遅い」

私の独り言は誰にも捕まえられることなくあっさり消えていく。

基本的にブラックが姿を見せるのは週末の夜だけど、それ以外にもちよいちよい顔を出していたのに、あの日から一度も来ていない。

第六感的な予感はないから悪いことが起こっているわけじゃないと思うけど、私だって会いたいと思うことくらいある。というかこのところ重たい出来事ばかりだから、ちょっとくらい癒されたい。耳とか、尻尾とかさ……だからこの距離は物凄くもどかしい。

苛立たしく何か暇を潰すことはないかと部屋をうろうつろといったり来たりしていると、どんっ！ と、ぶつかった。

「ちょっと遅いんじゃない？」

そつと両肩に手を掛けてくれる人物はもちろんブラックだ。それ以外がこんな風に遠慮無しに人の部屋に現われたりしない。

あからさまに不機嫌な調子でそういった私に八つ当たりされたブラックは、気分を害することもなく穏やかな調子を崩さない。

「いつも通りだと思いますけど」

「遅いの！」

自分でも理不尽極まりないことくらいは分かっているけど、怒ら

れても仕方ないくらい当たってるのも分かってる。

でも、そんな刺々しい私とは対照的に、ふわりと空気が柔らかく揺らいだ。

そつとブラックの唇が頬に触れる。

「そんなに恋しがってくれるとは思ってませんでした。何かあったんですね？」

ブラックは大人だ。

本当に憎らしいくらい大人だ。

やんわりと問い掛けられて私はブラックの胸に額を押し付ける。

王宮でのこととか話したらブラックは激高しそうだ。私に対して大人だけど、私のことになると思えば暴走気味だから。

私は小さく笑って首を振ると、顔を上げ、くんと背伸びをしてブラックの首に腕を絡めるとそのまま引き寄せて口付ける。私からこんなことをすれば、何かあったといっているようなものだけど、きつと触れないで居てくれる。

その予想は外れることはなくブラックは、私の口付けに応える形で、ゆるりと私の身体に回した腕に力を込めた。

何度も口付けを重ねると、もつともつと欲張りになる。

どうやら私は自分で思っていたよりもずっと寂しかったらしい。それがおかしいのか制止を感じさせない唇の触れる距離でブラックは囁く。

「寮ですよ？」

そんなことは分かってる。分かってるけど

「や……もつと」

離れたくない。

その気持ちのほうで勝った。

それに皆が戻ってくる時間はもつと遅いし、今日は週末で私が居ないのは分かっているから戻ってこない可能性のほうが高い。

深く口付ければ了承を得たとばかりにベッドに押し倒された。

普段掛かることのない二人分の体重にベッドのスプリングがギシリと軋む。

そんなこと気にならないとばかりにブラックの首に腕を巻きつけ引き寄せる。

私に応えるように口付けを重ね、そつと離れると頬や脛、こめかみや耳、首筋に軽く唇を寄せ、抱き締められる。

僅かに掛かるブラックの体重が心地良い。

真綿に包まれるようにゆるゆるした愛撫が心地良い。

——でも、これってなんだか……。

宥められてるみたいだ。

もつともつととしがみついていた心がやんわりと屈みいてくる。

「……ブラック？」

「落ち着きました？ 寂しい思いをさせてすみません」

はたはたと五月蠅かった心臓の音が、少し落ち着いている。凄く近い距離にドキドキはするけどがつついていた気分は治まっていた。

「それで、どうしました？」

長い指で私の髪を梳き整えながら問い掛けられ、私は短く唸る。

「大したことないよ。大したことないんだけど……王宮に行ったわ。陛下や王妃様、エミルのお母さんにも会ったし」

思い出すと胸が苦しくなる。

カナイに強いのか弱いのか分からないといわれた。

私自身分らない。私は強くありたいと思うし、そのつもりだけどうしてブラックに甘やかされると自分が凄く弱いんだと実感する。

続きを口に出来ない私にブラックは優しく微笑んで、私の前髪を、そっとかき上げると唇を寄せる。

「マシロは優しいですから、きっと沢山の影響を受けたんでしょうね」

可哀想に。と、続けて、大丈夫、もう、心配ないと重ね優しく抱き締めてくれる。

「……ところで、マシロ、本当に一人暮らしをするんですか？」

「うん」

「良い物件は見つけましたし、今中を弄っているんですが……見に行きますか？」

「ううん。良いよ、任せる」

心地良さに瞼を落として頷いた。なんだかほっとして眠くなってくる。

私、疲れてたのかな？

「私は物凄く心配です。出来ればあまり他人と関わらせたくありません。マシロは優しいです。お人よしだし騙されやすいし、だから今よりきつとずっと沢山傷付くこともあると思いますし……何より寂しいですよ？」

「大丈夫だよ。ブラックも居るし……慣れるよ、きつと、すぐ」

なんだか少しブラックに違和感を感じながらも、私は無性に瞼が重くて、抗えなくてゆっくり深く落ちていく。

遠くなる意識の中でブラックが何か呟いたような気がしたのに拾えない。

傍に居られて嬉しいはずなのになんとかとても切ない気持ちだが、ぼっと灯った。

次に私が目を覚ますと家に戻っていた。

いつものブラックの寝室で目を覚ますと隣には誰も居ない。

窓にはまだカーテンも掛かっていなくて夜空に浮かぶ二つ月が窺

えた。私は眠い目を擦りながら身体を起こし、ベッドから這い出ると欠伸をかみ殺して部屋を出る。

向かった先はもちろん書斎だ。基本的に家主はここに居る。

扉の前で人の居る気配を感じて私はぼんやりしたまま扉を開けた。机に向かっていたブラックは私の姿を確認して「おはようございます」と微笑んでくれる。

そしてその日は家で食事を取って普通に休んだ。

我ながら良く眠れるなと思うけどなんだかとても疲れが出ているのか眠りが深かった。

第四十六話：知らぬは本人ばかりなり

—— なんか変だ。

いつも通り週明けには図書館に戻った。

「マシロ、大丈夫？」

なんか変だ。 変だ。 変だ。

あの妙な雰囲気はなんだろう？

抱き締めてもらったし、キスも貰った……でも、それ以上はなかった。別に不満というわけじゃないけど凄く珍しいことだと思う。

「マシロちゃん、折角のパンケーキが穴だらけだよ？」

なんかああいうの聞いたことがあるような気がする。
なんていうんだっけ？

「……………」

—— …… ジャボ。

「ん？」

私は小さく上がった飛沫にふと我に返る。

私が握っていたフォークはミルクの入ったマグの中だ。表面に張っていた白い膜がフォークに絡み付いている。確か今朝はパンケーキを食べてたと思ったのに。

状況が良く理解できなくて眉を寄せる。

「食べ物粗末にするなよ？」

溜息混じりにカナイにいわれて、トレイから顔を上げると三人とも私を見ていた。

どうやら隣に座っていたカナイが、心ここに在らずの私の手元を摩り替えたらしい。カップの横には悲惨な姿になったパンケーキがあった。

「う、ごめん」

「良いけど、何かあった？ 役には立たないかもしれないけど相談くらいには乗るよ？」

やんわりとそういいながら、エミルは自分のホットサンドと私のパンケーキを交換してくれた。

遠慮しようとしたけど「良いから、ちゃんと食べて」と勧められ断りきれなかった。なんだかお腹の底に鉛でもあるように、ずしりと重くてあまり食欲はなかったけど、こうされては無理矢理にでも食べないとエミルに申し訳ない。

きつとエミルもそのくらい承知でやったんだろう。

私はエミルに「ありがとう」と告げてホットサンドを口に運ぶ。

美味しい。

もののすごく不味ければ食べなくても良さそうなものなのに残念だ。

その様子をまじまじと三人に見られて居心地悪く、私は「大丈夫だよ」と念を押した。

納得した風ではなかったけれど、私が話を切り出さないと確信を得てしまったのか皆食事を再開した。

午前中はなんとか、多少鍋から火柱は上げたが無事に授業を終了させ——でも、カナイが一緒じゃなかったら教室中に火が回ったかも知れない。カナイ様々だ——馬車で王宮に向かうエミルたちを見送って私はいつもならギルドへ向かう足を図書館へ向け時間を潰した。

「そつえば、ブラックが王宮に来てて」

「え？ ブラックが」

夜遅く戻ってきたアルファがお土産片手にやってきた。

お茶でもと中に誘ったが、もうおねむの時間らしく首を振られ、扉を背にして立ち話だ。

「マシロちゃんの新しい家。大通りから一つ奥まった場所で、少しだけ王宮よりみたいですネ？」

「一等地ですよ。と、笑ったアルファに私はそうなんだとしか応えられない。

もっと辺鄙なところでも良かったんだけど。

「もしかして、知らなかったんですか？ 内緒だなんていわれなか

ったですけど」

「え、あ……ああ、全部任せてあるから」

そういった私にアルファは何の疑いもなく、そうなんですか。と、にこりと微笑む。そして、じゃあもう直ぐですねと続けた。

「今週中にはなんとか片付くから、手続きをしておくようにエミルさんにいつてたから」

「え」

そんなに直ぐなんだ。

確かに皆の負担にしかないこの状況を長く続けるのは得策じゃない。

でも少しの不安と寂しさがぐるぐると渦巻く。

—— ……私、一人になるのか。

こうやってひょこりアルファがおやつを持って扉を叩くこともなくて、夜はブラックが来なければ一人なんだ。

「……あ」

自分の中で「一人……」と、繰り返し、なんだか妙な合点があった。

零してしまった声にアルファがどうかしましたか？ と、可愛らしく首を傾げて顔を覗き込んでくる。

「マシロちゃん、なんか顔色悪くないですか？」

「え？ あ、ああ。なんでも、なんでもないよ。部屋の明かりが暗

いのかな？ 取り合えず、ありがとね。じゃ、じゃあ、お休み」

慌ててそれだけ告げるとアルファは不思議そうにしつつも「はい、お休みなさい」と応えて扉を静かに閉めてくれた。

突然行き付いた答えに私は膝を折り、ぺたんつと床に座り込んだ。

なんか聞いたこと在ると思った違和感。

ユキが確か倦怠期だったり、別れ話の前だったりするときに、こうなんとも居心地の悪い妙な空気になるっていった。

お互いに余所余所しくて踏み込めない壁が出来る。

膝を掻き抱いて、頭を埋めると落ち着け自分と繰り返すが。小刻みに奥歯が鳴ってしまふ。

—— …… そう、だよな。

付き合い始めがある以上終わりだつてきつとどこかであるはずだ。

終わらない、変わらない関係なんて、きつと……ない。

でも、どうして。私何かしたかな？ いや、でも……私なんかと別れる理由は山ほどあつても付き合い続ける理由のほうが無塵もないかも知れない。

そっか……、そう、だよ、うん。

考えたら、結構前から「？」と思うことがあった。

第四十七話：貧乏暇なし

「おはよう！ ごめんね、今朝ちょっと調べごとがあるから朝一緒出来ない」

翌朝、いつもよりちょっとだけ早く部屋を出る。

運良く、ロードワークから帰ったところなのだろうアルファと出くわした。丁度良かった、とばかりにそういった私にアルファは面食らったようだけど、少しの間私の顔をまじまじと見たあと、分かりました、と、頷いて廊下を走る私を見送ってくれた。

—— …… 大丈夫。私は元気だ。

誰にも心配掛けずにやっていける。
だって、ここではもう私は大人だ。

「今日は手際が良いな？」

「普通だよ！ いつもこんなもんでしょ」

私の勢いにカナイは「そ、そうか」と少し引いて頷いた。

実習でだって失敗なんてしてられない。

一人でだってなんでも出来る。

誰にもおんぶに抱っこなんて世話にはならない。

だから、頑張る。

私はとっても頑張ってると思う。思うのに、ことあるごとに三人に大丈夫？ と問い掛けられる。

変なの。

時間に追い立てられるように、私はギルド依頼を寮の門限ギリギリまで入れて走り回った。

調剤とかの依頼もあるけど、部屋にじっとしているのは今は無理、だから配達とか片付けとか身体を使う依頼を受けた。

くたくたになれば何も考えずに眠れるし、そのほうが健康的だ。

今日はマリル教会の傍まで来たから、少しだけ立ち寄ろうと足を向けると一匹の白銀狼に捕まった。

ハクアと同じ耳と尻尾が付いているから白銀狼だろう。

金銀妖瞳なのか、そうでないのかは分からない。

片方の目は縦に出来た傷跡で塞がれてしまっていたから。

私はまたあの刃に掛かるのだろうか。

ふとそんなことが脳裏を過ぎったが、物凄く落ち着いていた自分が可笑しかった。強がっては見ても一人になるくらいなら消えてしまっほうが良い……なんて思ってしまったのかもしれない。

そんな私の予想に反して対峙した白銀狼は静かに頭を垂れた。

「貴殿を傷つけたのは私だ」

そして、すまなかったと続けられ私は面食らった。

ややして頭で理解すると、ああ、やっぱりと納得し、ずきりと跡形もなく癒えてしまっている傷口が痛んだような気がしたが……そ

れも気の所為だ。

「私は先代頭首の死に様が忘れられなかった。憎しみが目を曇らせ、新しき頭首の言葉を聞き入れることが出来なかった。そして人間のくだらない夢物語に付き合う気になってしまった。私は未熟で愚かった」

ただ黙ってその姿を見ていた私に白銀狼は首を傾げる。

「人の形なりならば言葉が通じると思ったのだが、私の声は届かないか？」

「……っえ？ あ、ああ。大丈夫、通じてるよ。それに私は貴方が白銀狼の姿であつても言葉を解せるよ」

……ただ、ちょっと、殺されるのかなと思つたから。

ぼそりつと付け足した私に白銀狼は口角を引き上げて、その割には落ち着いて見えると笑つた。そして、小さき人間であるのに肝が据わっている。流石は頭首の主だと……多分褒めたのだと思う。

「私はこのまま頭首の命により郷へと戻る。もう二度と貴殿と会うこともないだろう」

それだけ告げて白銀に煌く尻尾が弧を描くとそのまま白銀狼の姿に戻り、たんつと音もなく地面を蹴って身軽に走り去ってしまった。

「……消してくれば良かったのに」

思わず零れた自分の台詞に、自分自身驚いて口を塞ぎ私はマリル

教会へ立ち入ることなくその場から逃げ出すようにギルド事務所へ戻った。

今夜もそのあと少しだけ仕事をこなして、遅くなり寮の裏から扉を潜るころには、へとへとだった。

重たい身体を引きずるように寮に入ると、そこで待ち構えていたのは物凄い珍しい、アリシアだ。

薄暗い中でも彼女の周りだけは明るい気がする。

「どうしたの？」

「なんか、貴方雑巾みたいになってるわね？」

—— …… 雑巾は酷いよ。アリシア。

私は苦笑しながら部屋の鍵を開ける。

かちやりと開錠して扉を開いてもアリシアは部屋に戻る気配はない。私は、不思議に思いつつも「入る？」と問いかけると「お邪魔するわ」と返ってきてもつと驚いた。

「私、シャワー浴びるから適当に寛いでて？ お茶とか勝手に入れてて良いから」

閉めたドアにアリシアが鍵を掛けてくれたのを確認して、私は着替えを片手に浴室に入る。

そういえば、アリシアは素養のことで悩んでいたみたいだから、そのことで相談でもあるのかもしれない。

私はそう思い至ってさくさくと用事を済ませた。

第四十八話：女の子といえば恋バナ

濡れた髪を拭きながら部屋に戻ると、ふんわりと紅茶の優しい香りがした。こんな紅茶あったかな？ と首を傾げた私にアリシアが口を開く。

「色々種類が揃ってたから、勝手にブレンドさせてもらったわ。貴方も飲みなさい」

「凄いね。アリシア。紅茶のブレンド得意なの？ 私も時々するけどこんなに優しい香りでないよ」

にこにこと褒めちぎって席に着いた私にアリシアは、ほんの少しだけ頬を上気させて当たり前だと口にした。

「薬師なのだから紅茶くらい……まあ、そうね。確かに、ハーブ系にあたしは強いかもしれないわ」

いつてカップの中身を見詰めて揺らす。

「それで、私に相談事？ 力に慣れれば良いけど」

にこにこと話を振ったのに、アリシアは勢い良く私の顔を見て綺麗に整えられた眉を寄せた。

「なんでそんな顔をされるんだろう？ と首を傾げた私にアリシアは短く嘆息して「あのね」と話を始めた。

「貴方最近変よ。前から少し変わった人だと思っていたけれど、それよりもずっと変よ。馬鹿みたいに見えるわ」

な、なんだろう、このアリシアの直球勝負。私は避けきれない直撃に、うっと言葉を詰める。

「女同士のほうが話しやすいだろっからって、わざわざエミル様があたしに相談に来たのよ？ 分かる？ そのくらい、今の貴方は変なの」

「そ、そう、かな」

オカシイ。

完璧だと思ってたのに。

そう思っていたのは私だけだったのかな？

「そう！ 今の貴方は自分から話すのを待ってられないくらい変なの。自覚なさい。変よ」

きっぱりいい放ったあと、アリシアは優雅に紅茶を傾けた。変だ変だと連呼され私はがっくりと肩を落とすしかない。

「別に大したことじゃないよ」

「そうね。きつとあたしにとっては大したことじゃないと思うわ。きつとどうでも良いことね。でも、貴方にとってはそうじゃないんでしょ？」

私はアリシアの小気味良いところが好きだ。

なんだかむやみやたらに花を振り撒いているときより、きつと今のアリシアのほうがらしい気がする。私は苦笑して、アリシアが入れてくれた紅茶に口をつける。香りの通り優しい味がする。

一人で虚勢を張っていても仕方ない。私は小さく嘆息してあのねと切り出す。

「恋人に別れを告げられそうなの」

言葉にすると急に真実味を帯びてくるような気がして、ずっしりと胃の辺りが重く目頭が熱くなる。

「エミル様そんな風に見えなかったけれど、貴方の勘違いじゃない？」

「え？ 私、別にエミルと付き合ってないよ？」

「嘘？ だって貴方、ターリ様候補だって噂されてるわ。あたしもてつきりそうだと」

「そんなの知らない。確かにエミルにはお世話になってるけど、恋人とかじゃないよ」

……物凄い根本的なところから違っている。

そうなの、とか、物凄く意外だわ、とかぶつぶついつてるアリシアにちよっぴり笑ってしまう。なんかこんな女の子っぽい話、凄く久しぶりだ。

学校の帰りとかこんな感じだったな。

ユキとサチの恋愛相談とかよく聞いたり、学校での噂話とかに花を咲かせたり毎日飽きもせずそんなことを語り合ってた。

「そういえば、貴方、図書館をやめてしまつと聞いたわ。本当？」

「うん……それは本当。ちよっと私の環境が特殊だから、普通には通えなくて」

「そう、残念ね。折角同じ階位になつたのに」

そんな風に思ってくれるのはアリシアらしくない感じがしたけど、なんだかちよっぴり可愛くて嬉しかった。

「それで、話戻るけれどどうしてそう思うのかしら？」

「え、あ……それは、その。なんか距離を感じるの。私に隠し事してると思うし」

「隠し事くらい誰でもあるのではないかしら？ 相手の全てを知らないで貴方は受け入れられないの？」

アリシアは驚くほど淡白だった。でも私もそう思うしその考えは私に近い。

「そんなことないけど、でも、変なの。彼はとても上手に嘘を吐くだろうし、隠し事だって上手にするタイプなんだよ。絶対私に知られるようなことしない周到なタイプなのに、私に変だと思わせるなんて」

普通なら有り得ないよ。と、口にして改めて本当にそうだと思えた。ブラックが私に感づかれるような隠し事をするなんて……。

「貴方の恋人って本当にエミル様ではないの？」

「え？ 違うよ。あれ？ でもそういえば似てるのかな、あの二人」

いわれてみると確かにあの二人には共通点が多いかもしれない。でも本人にそんなことをいおうものなら……物凄い反応が返ってきた。そうでなんだか可笑しい。

「私、その人に学費も援助してもらってたし、ここを出たあとの住む場所も用意してもらっただけ」

「パトロンの？」

「え……えええ……そう、なのかな。いや、そうか、そうだよ。恋人というより保護者だったのかな？」

なんか哀しくなってきた。

「でもかなり凄いパトロンなのね。愛人との手切れ金代わりに家つて……羨ましい限りだわ」

「いや、愛人では」

「良いじゃない、なんでも。恋人でも愛人でも貢いでくれるのならばそれで構わないわ。マシロ。愛だけでは生活は成り立たないの」

……アリシアって見た目に反してかなりの現実主義だ。

「それに良い女は去っていくものを追い掛けたりはしないものだと思うわ。別れを直感したならこちらから切り出して差し上げるくらいの心意気で居ないといけないわ」

「わ、私からいうの？」

「そうよ！ 捨てられるくらいなら捨ててしまったほうが良いじゃない」

いい切つてにこりと微笑んだアリシアは清々しく、辺りに花を撒き散らしていた。この子は敵に回さないほうが良いタイプだと別な意味で感心した。

「ああ、それはそうと働きすぎなんじゃないの？」

たった数日根をつめただけでこんな風に心配されてしまうくらい私は体力なしだ。

「忙しくしてれば、何も考えなくて良いから。疲れてれば……そのまま、眠れるから」

苦笑してぽつぽつと零すと、それと同時にぽちん、ぽちんっとデールに雫が落ちてしまった。慌ててごしごしと拭いても止まらない。

「不安なのね？」

空気が少し柔らかく、そして暖かくなり俯いてしまった私の頭をアリシアの手がそつと撫でる。

第四十九話：そんな役回りでも少しはお得

こんな風になる前から、別れる別れないのシュミレーションは何度もした。

だから大丈夫だと思ってるけど、そういえば私、ブラックに家庭教師まで頼んでたんだった。ブラックのことだからきっとそれは守ってくれそうだ。

でも私にはきついな。

うん。それだけは断ろう。うん。

私はアリシアに話を聞いてもらったあと、ぼんやりと考えていた。だから結局、うとうととしたのは明け方で、私は午前中もずっと起きられなかった。

—— …… コンコン、コンコン

何度も何度もしつこいくらいに鳴り続けるノックの音に、私はようやく眼を覚まし重たい身体を持ち上げた。

ごしごしと目を擦っていると、扉の外から聞きなれた声が会話しているのが聞こえる。

「……中に居るんだよね？」

「んー、居ると思うけど」

「僕、ドア破壊しようか？」

エミル、たち、か……ふわあああつ。何？ こわ……

「壊さないでっ！」

慌ててドアノブにしがみついた私はドアを押し開いた。

「ほら、居ただろ？」

「あれー、マシロちゃんお寝坊さん？　もうお昼ですよ」

呆れたようなカナイの声に、底抜けに明るいアルファの台詞。良かったと胸を撫で下ろすように息を吐いたエミルが扉の前に立っていた。

「えっと、その、大丈夫です。ごめん、ね？」

「良いよ。大丈夫なら。もしかしたら部屋で倒れているのかと思っただ。最近調子良くないみたいだったし……僕とアルファはこれから王宮に向かうけど、マシロはカナイとお昼でも食べると良いよ。お腹空いてると良い考えは浮かばないからね？」

エミルの王子様スマイルに、ありがとう。と、答えるとカナイが「え？　俺！」と驚きの声を上げている。

予定にはなかったようだ。

着替えてくるから待ってて、と、カナイを廊下で待たせ私は手早く身支度を整えて廊下へ出た。お腹はあまり空いてないけど、多分頭がぼんやりしているのはろくに食べていない所為だろう。

「付き合わせてごめんね？」

「もついい。別に俺は王宮にそんな用事ないしな」

食堂につくと人は疎らだ。
時間がずれている所為だろう。

私を席に着かせカナイがランチを取りに行ってくれる。普段ならそんなことしてくれるタイプじゃないけど、どうも足元が怪しいと突っ込まれた。

「あれ？ カナイは食べないの」
「俺は食った」

いつてティーポットからカップに静かに紅茶を注ぐ。
動かない私に「食べよ」と念を押した。私はやや黙したあと嘆息してフォークを手に取った。取り合えずサラダとか摘んでみる。

暫らくくだらだと私が食事をしている間、カナイはいつもと変わらず読書をしている。本のタイトルからして古代語だから私に理解出来る範囲のものじゃないことは分かった。

私の視線に気がついたのかカナイはぽふっと本を閉じて、掛けていた眼鏡を外すとあー……と唸ってから、諦めたように嘆息して話を始めた。

「アリシアから聞いた」

どきんつと心臓が跳ねる。

アリシアはエミルに頼まれたっていつてたし、そりゃ伝えるよね。それに、特に内緒にして欲しいなんていわなかったし……。

「へ？ あ、ああ。あはは……心配掛けてたんだよね。ごめんね？」

「そりゃあれだけわざとらしければ普通変だと思っだろ」

呆れたような台詞だけどいつもほどそっけなくはない。カナイは、取り合えずと口火を切った。

「気になることがあるなら、本人に聞いたほうが良いぞ？」

「……カナイってデリカシーないよね。聞けるくらいなら聞いてるよ。私だって怖いの……べ、別にね、そういうことがないとは思ってないよ。だって、私だし。だから、私だってちゃんと考えてたんだよ。考えてたよ、一人でもちゃんとやっていけるように」

考えてたよ。と、繰り返すと、昨夜に引き続き、ずーっと我慢していた涙がはらはらと零れてしまった。

カナイが慌てた様子でガタつと椅子を鳴らしたので、慌てて拭うがその程度で止まるようなものではなくて涙はあとからあとから溢れてくる。

「分かった！ 分かったから落ち着け。お前が切羽詰ってたのは良く分かった。泣くな、こんなところで……俺が泣かせてるみたいだろ？」

場所変えるぞと、カナイは慌てて立ち上がると、私の手にハンカチを握らせて「先に出てろ」と背中を押した。

憎らしいほど今日も天気が良い。

冷たい風が火照った顔を冷やしてくれて心地良い。

屋上庭園の一角で赤くなってしまった鼻をハンカチで隠すように抑えて深呼吸。少しでも落ち着いた。

「お前さ、あいつのこと信じてないの？」

俺は信じてないけど。そういつて肩を竦め、あつさりいい切ったカナイに笑った。

「私は信じてるよ？」

なんでそんなことを今更、と、赤くなった目を隠すことなくカナイに向ける。カナイは、困ったように笑ってウサギみたいだと皮肉ってから話を続けた。

「それならそれで良いだろ？ 正直、俺らからすればあいつがお前と別れたいとか思ってるとは微塵も思わない。いや、有り得ない、馬鹿馬鹿しい。世界が消滅するよりないことだと思う」

「いや、いい過ぎ」

「うん。いい過ぎた」

カナイの勢いに思わずお互い笑いを零す。

そんな私の頭をぽすぽすとカナイは叩くと「兎に角、勘違いだ」といい切った。

「どこからそんな自信が湧いてくるかな？」

「そんな理由がないからに決まってる。俺たちの知らない原因が在るなら別だが、本人にすら曖昧なくらいのこと、お前の考えているような結果に結びつく理由にはならない」

それにだ、とカナイは一呼吸置いて話を続ける。

「あいつお前のこと考えてるだろ？ ちゃんと」

「う……そういわれると、多分、きつと、うん……？ 沢山出資させちゃってるしね」

「金銭的なことはあんま関係ないだろ。あいつも金銭感覚麻痺してる系だから。そんなことじゃなくて、だ。マシロは自由にしてるし、何より俺たちから引き離されてない」

真摯な態度でそう告げるカナイに私は首を傾げる。

カナイはそんなことにも気が付かないのかという風に呆れたように笑った。

「そうか、お前は知らないんだよな。今のブラックしか」

しみじみと口にするカナイに私は頷くしかない。本当のことだ。

「これまでの種屋店主やブラックなら、気に入ったなら確実に囲う。誰の目にも触れさせないように閉じ込めて、飽きるまでそうしたあとは消すだけだ。そのくらいなんとも思わないよ」

黙った私にカナイは以前のってことで今じゃないから、その辺は流せよと苦笑する。

「兎に角、お前は自由にさせてもらってるだろ。特に人間関係。ブラックはブラックなりに考えてのことだと思っぞ？ あいつはああいう職業だ。獣族が人間より多少なりとも寿命が長いにしても老いが来ないわけじゃない。どういう形で店主が交代しているのか、俺は知らないが、前種屋店主。という存在が居ることを知らない。ということとは、だ……いいたくはないが、新しく店主が立つとき前店主は」

「消されるんだよ。種屋は種で受け継がれるの。ブラックもそうだったっていった」

奥歯がかちかちと鳴ってしまった。

そんな私の頭を引き寄せて胸に抱き、カナイはこつんと、顎を乗せると「今は考えるな」と囁いた。

「ブラックにとって面白くないだろうが、エミルは国の有力者だ。アルファや俺もそれなりに発言権がある。もしものとき、お前が誰を頼ってもお前一人の存在くらいどうとでもしてやれる。お前が本当の意味で一人になることは絶対じゃない」

俺がいうのは違うと思うけど……と前置いたあとカナイは一つ深呼吸して

「それがお前が愛されている証拠じゃないのか？」

いい放った……。

第五十話：引越しセンターとかないよね

「……カナイ」

「今の忘れる。なんか凄い柄じゃない。寒い。俺何いつてるんだ……」

苦し紛れに人の頭を掻き雑ぜる。
混ぜるなら自分の頭にしてくれ。

はたと我に返ったカナイが、悪いと謝罪してぐっしゃぐっしゃにしてくれた髪を梳き整えてくれている。これまた珍しいことだけど、髪を触られるのは嫌いじゃないからしてもらおう。

「あとさ、これは俺の予想だけど」

「何？」

この際なのでなんでもいつてください。

「お前がこっちに帰るとき……それを俺らに手伝わせたのも、同じような理由じゃないかと思うんだ……」

「……それはまた、買い被りすぎじゃない？」

思わず苦笑した私にカナイは「どうだろうな？」と苦笑して肩を竦めた。

確かにブラックがどこまでも見通して何をしているかなんて、私にも図れないから答えもないのだけど……とりあえずは……

「カナイがいつてくれることは分かるけどさ、分かったけどさ……じゃあ、何を隠してるんだろう？ 今だっていつもなら、どこでど

これから聞いてたんだよっ！ て、突っ込みたくなるくらいなタイミングで出てきても良いのに来ないし。やっぱり私あからさまに避けられてるじゃん」

腰を降ろしていたベンチの上に足を乗せて膝を抱え顎を乗せる。身体が冷えてきたから丸くなるとちよつと暖かい。

ぶつすーつと不貞腐れた私にカナイは「そういえば」と今思い出した風に口を開く。

「なんかあいつ探し物してたみたいだぞ？ 鉱石だかなんだか？ レアなものだったと思う。王都の中で見かけなかったか聞かれたから、原産地に行くしかないんじゃないかって……確かキカルだ」

キカルってどこ？ 遠いの？ と、問い返した私にカナイは白い目を見る。地理くらい把握しとけという無言の圧力だ。それでもカナイは説明してくれる。

「海を渡ったところだよ」

「ここ以外に国があるの？」

「国じゃない。町だ。王が居るのはここだけ。王家に近い貴族が納める領土だな。あいつになら距離は関係ないだろうから夜はこっちに帰ってるだろうけど昼間は手が離せないんじゃないか？」

私はもう、ふーんとしか返すことしか出来なかった。

そして、今週もブラックは余分に姿を見せることはなかった。

私の不安は増すばかり。
行き場のない苛々が募る。

カナイに答えたとおり、私はブラックを信じてる。信じてはいるけどそれとこれとは別問題だ。

そんな私のことを心配したエミルたちは、極力、私をひとりにしないように気をつけてくれているようだったけど、私は自分から一人になることを選んでいった。

悪いとは思ってる。

思っているのだけれど……空元気でもそれを行うのは今の私には無理だった。どちらにしても心配をかけてしまふのだったら、一人でぼんやり黄昏て居るほうが良い。

そして私が何かの答えだすことも、時間は待つてはくれなくて……人伝で聞いた引越し日は近づいていた——ていうか直接いいにこないとはどういうことだ——ぶすつと不貞腐れたまま私はスーツケースに蓋をした。

でも、そういうえば引越しの準備なんて誰もいわなかったな？こちの世界で引越してどうやるんだろう？最初は私何も持つてなかったから全部こっちで用意したし……もしかしたら、準備なんていらないのかも。

ふとそう思い至ったらそんな気がしてきた。

「やーめた」

馬鹿馬鹿しくなってきた、私はベッドに大の字でごろりとする。

大抵、このタイミングで人は入ってくるのか、今日も例外なく鍵も掛けていなかった扉をノックと同時にエミルが開いた。

飛び起きた私に「あ、ごめん」と短く詫びたけど、いつものことでお互い慣れっこになってしまった。私はベッドの端に腰掛けると歩み寄って来てくれたエミルに顔を向ける。

「これが、書類と、新しい学生証。アルム学長が直接サインしてくれたらしいから……図書館内でも外でも身分証として使って大丈夫だよ」

エミルは私の傍に膝を折ってベッドの上に書類の類を並べて説明してくれる。

「あと、午前中は駄目だけど、午後は暇な先生が個人授業をしても良いつていてくれるらしいから、彼らの負担にならない範囲でお願いしておいたから、存分に使うと良いよ」

「それじゃ、結局負担になるんじゃない」

「大丈夫大丈夫。彼らは教えるのが仕事だからね。負担になるんじゃないは建前。使えるだけ使って問題ないからね」

いい切った。

にこにこ微塵も気にすることなく……王子様の人使いの荒さは素晴らしい。

「そういえば、エミルたちも寮を出るんだよね？ 準備とかないの？」

「準備？ ああ、荷物はカナイが必要なものだけ送ってくれるし不要なものは寮監さんが処分してくれるから特に必要ないよ。それに

直ぐに誰かが入る予定はないから急ぐ必要もない」

にっこりとそういったエミルに私はやっぱりなと肩を落とした。
エミルはふと部屋の隅にあったスーツケースに目を留めて「ああ、
ごめん」と謝罪した。

「もしかして自分で運ぶつもりだった？　ちゃんと説明が足りてなくてごめん」

「良いよ。途中でそうじゃないかと思ったから止めたところだったの。皆忙しいんだもん、仕方ないよ」

これから一人の時間もずっと増えるんだから、この位で寂しいと思うのは駄目だと、ちゃんと分かっている。

「私、先週末からブラックに会ってないんだけど」

本当に今日なのか？　と、続けるとエミルは、はあ……と、ふっかい溜息を落とし前髪をかき上げる。

そして、何をやってるんだろうね。あの猫は……と、私の替わりに愚痴る。

その姿に私は苦笑し、ほんの少しだけ救われる。

「日が沈むまでには迎えに来ると思うよ？　僕はこのあとちょっと王宮に戻らないといけないから、今日は無理だけど近いうちにマシロの家に行きたいな？」

招待してくれるよね？　と、にっこりと微笑まれ私はきょとんとしてしまう。その様子にエミルは「ん？」と首を傾げるから私は慌て

て取り成す。

「も、もちろん。いつ来てもらっても良いよ。で、でも、大丈夫なの？　王子様が街中ふらふらしてて」

「大丈夫だよ。確かに毎日は無理かもしれないけど、僕だって出来る限りマシロに会いたいよ」

真顔でいわないでください。王子。

ふわふわと柔らかいもので包まれたような心地になる。

赤くなる顔を隠すように、私はベッドの上に並べられていた書類を纏めながら、ありがとう。と、告げる。

私の慌てぶりが楽しかったのかエミルはくすくすと笑って立ち上がり「さて、と」と口にして何か他に伝え忘れないかと、やや思案する。私は資料を抱えて立ち上がりエミルの続きを待つが特になかったようだ。

エミルは、何かあつたら直ぐに連絡をするようにといって部屋を出たけれど、連絡ってどうやってするんだろう？　お城の住人へのアポの取り方なんて知らない。

廊下まで出てきていたカナイたちと合流して、寮を出て行く皆を見送って私は部屋へ戻る。

そのタイミングを見計らったように、ブラックは部屋に現われてなんのわだかまりもないように「お待たせしました」と微笑む。

うん。と頷いたものの、なんだか胸の辺りがずしりと重くなりきりきりと痛む。カナイはあぁいってたけど、明らかにおかしいブラックの態度に不安にならないはずはない。

「少し距離がありますが、歩きますか？」

「そうだね。ぽんっと思っちゃうと場所が良く分からないから歩くよ」

手ぶらで良いの？ と問うと、あとで一括しますから構いませんよ。と、微笑まれる。

いつもと変わらなくも見えるけど、僅かな緊張を含んでいるようにも感じる。

私は頷いてブラックの手を取ると、きゅっと思り返してもらえてほっとする。

大丈夫。

—— …… 大丈夫……だよね？

第五十一話：恋人に望むことはなんですか？（１）

—— …… 別れを直感したならこちらから切り出して差し上げるくらいの心意気で居ないといけないわ。

って、なんでこのタイミングでアリシアの台詞を思い出すの！ 私っ！

歩きながら、うぬうつと眉を寄せた私にブラックは気が付かない。やっぱり、変なの。

いつもならどんな瑣末な動きでも気を配ってくれてたのに。自分が過剰なのは分かってる分かってるけど、胸が痛いよ。ブラックが何を考えてるのか良く分からない。あ、でも、それはいつものことか？ 思わず嘆息したのにそれでもやっぱりブラックは無反応だ。

「わあ、可愛い」

会話らしい会話もなくアルファから聞いたとおり、大通りから一本奥に入った通りに家はあった。

話していた通り一階は店舗部分になるのか、がらんとしていたがブラックのこじんまりは、予想通りかなり広い。

建物自体は買収したような話だったけど、リフォームはブラックの好みだろう。少し種屋と似ている。

「一階は店舗の他に、奥に温室と調剤が出来る部屋と乾燥庫があります」

二階に上がる階段の傍で、ブラックが廊下の先を指差しながら話してくれる。

「広くない？」

「そうですね？ 手狭かなと思って、両隣も加えて建て直そうかも考えたんですけど」

我慢してくれてありがとう。

そんな引越して直ぐ近隣問題が上がるようなことしないでくれ。そんな話をしながら階段を上がる。

取り合えず扉を数える。5つだから思ったよりは少なくて良かった……少ない、かなあ？ あ、まあ、扉の数だからね。うん。

「とりあえず、こちらが書斎でこの奥が寝室に繋がってます。一応、生活に必要なものは揃えておいたのですが、足りないものや必要なもの、いつて頂ければ用意します。寝室のサイドテーブルの上に瓶も用意しておいたので、好きなように買い足して頂いても構いません」

いつて開けた書斎は、寮の部屋と同じくらいの広さだから馴染みがある。

本棚には私が好きそうな本と、必要そうな本が並んでいる。

暖炉の前にはカウチソファとローテーブルが置いてある。

一通り説明を受けて書斎に戻った。とりあえずの感想は、一人暮らしの家じゃない。

だけど、多分狭い家とかで生活したこと、これまで一度もないんだろうな。ブラック。

本当にこんな感じで大丈夫なんですか？ と、何度も聞かれた。

元の世界の私の家なんてすっぱり入ってしまいそんな建物なのに、広さに不満だなんて。

やれやれと溜息を零した私に気が付いてブラックは私の顔を覗き込む。

「何か足りないものでも？」

問い掛けられて首を振る。

「結構歩きましたし、疲れました？ 細かなことは明日以降に回して、食事にでも出ますか？ それともここで用意しましょうか？」

日が落ちてきたので、ぽふっと暖炉に火を入れてくれた。

私はそれにも首を振り、カウチソファに腰掛ける。

ごろ寝用って感じだけど、ぐんっと高い肘掛に肩を預け暫し黙する。ブラックはその隣に腰掛けてテーブルにお茶の準備をしてくれる。

どうぞ。と、勧められありがとう、と、応えるとそのあと暫らく無言のときが流れた。

別に二人で居ても四六時中話しているわけではないから、普段と変わらないといえば変わらないのだけどどうにも居心地が悪い。

私は用意された紅茶を一口喉の奥に流し込んで一息吐く。

—— …… こんなの嫌だな。

そう思って、意を決すると私はテーブルにカップを戻してブラッ

クを見る。

思ったことが一緒だったのか第一声が被った。

お互いに曖昧な笑みを零して譲り合ったあと、発言権はブラックに渡った。

「あの、最近何かありました？」

「別に」

真っ直ぐブラックの顔を見ていらなくて私は、再びソファに体重を預けて暖炉の火を眺めた。寒いなんて感じなかったけど、暖炉の火はなんだか温かみがあって良いなと思う。

「最近もマリル教会に行ってますか？」

「え？ …… ああ、この間カナイの用事で一緒に着いて行ったりギルド依頼で行ったりはしたけど、それがどうしたの？」

「え、ああ、いえ、なんでもないです」

歯切れが非常に悪い。

おかし過ぎるだろ。

いつものブラックなら絶対こんなことないと思う。

いい難いことでも悪びれる風もなくあっさり口にしてしまうのがブラックだ。

私はワザとらしいくらい大きな溜息を吐く。

—— …… もう、良いや。

はつきりしないのはとっても気持ちが悪い。 覚悟は決めた。

私は座り直すと隣に居るブラックを見た。二人の間に開いた微妙な距離に胸が痛い。

「いいたいことがあるならはつきりいつて。聞きたいことがあるならはつきり聞いて。私、もうこんなの嫌だ！」

浮かびそうな涙を堪えてぴしゃりといい放った私に、ブラックは僅かに驚いた風だ。

しかし、同時に何かを決意したように膝の上の拳に、ぎゅっと、力を入れごとりと喉を鳴らした。そして、教えてくださいと切り出した。

心臓がドキドキを通り越してドンドンと激しく打っていて息苦しい。大きく一度深呼吸してからブラックはゆっくり、しかし、はつきりと口を開く。

「マシロは結婚したいですか？」

「は？」

私は物凄く間抜けな声を出したと思う。

聞かれるとしても別れたいか、別れたくないか、とかそんな話だと思っていた。予想していなかった単語に次の言葉が出ない。

「ですから、結婚です。マシロも女性ですからやはり婚姻関係を望むんですか？」

「は？」

尚も重ねた疑問符にブラックは少しイラついたのか、むうっと眉を寄せる。

その怒り方は可愛いから。
ぴったんぴったんソファを打ってる尻尾と同じくらい可愛いから。

「なんで、そんな話なの？」

「なんでって、この間レニ司祭に求婚されていたとき、マシロ嬉しそうでした。だから、レニ司祭は罪人なので結婚相手としてはどうかと思いますし、物凄く不愉快ですけど……」

「ちょ、ちよっと待ってストップストープ！」

慌ててブラックの口を両手で塞ぐ。

話を続けたそうだったブラックは、ふがっと息を詰めてどうして止めるんだろう？ と、というような視線を投げた。

「嬉しそうなんかじゃなかったから！ 絶対ないから！ 吃驚しただけだからっ！ ちよっと、待ってブラック、それで、そんなことで最近様子がおかしかったの？ とうかそれ凄いい前……そんな前から、そんな、馬鹿なこと……」

私の台詞にブラックは数回瞬きしてそっと私の手を両手で取ると自分の口元から下ろした。

「おかしかったですか？」

「おかしかったよ」

即答した私にどの辺りがと目が問い掛けている。私は、深い溜息を吐いた。

「私の話は聞いてないし、機微に気が付かないし、ぼんやりしてたし、週末以外部屋に来てくれることもなかったし…… 兎に角凄く変

だった。私、てつきり」

いい掛けて口を嚙むと、ブラックがなんですか？ と、続きを待つ。

口にするのが怖くて、首を振ったがそれで許してもらえぬ雰囲気ではなくて、私は凄く小さな声で「捨てられるのかと思った」と呟いた。

その言葉をブラックは笑い飛ばすことなく、驚いたように目を丸めたものの直ぐに「まさか」といつもの笑みを浮かべて私を抱き寄せた。

「私が駄目でマシロに捨てられることがあったとしても逆はないですよ。いったじゃないですか、私にはマシロしか愛せないって」

ぎゅっと回された腕に力が籠る。

「不安にさせていたんですね？ 本当にすみません。一度は気にするほどのことでもないのかなと思ったんですけど……そんなことに関係なく、マシロは私を愛してくれているようでしたし……ですが、有耶無耶にしておくと、いつまでこうしていられるのか見当も付かなくて、私にそんなこと教える人は居ませんでしたし……」

「結婚云々？」

もぞりと腕の中から顔を上げると「ええ、まあ」と頷いたブラックは顔を赤くしていた。

「やはり女性はそういう形式を大切にされるということでしたし……とは、いっても私も色々考えたんですけど、やはり種屋は家庭を持つべきではないと思うんです。そうになると、行く行くそのことで

マシロを悲しませたらどうしようかとか、でもだからって手放すのは絶対嫌で、どうして良いのか分からなくなってしまっ……」

「因みにそれは誰情報？」

腕を突っ張ってブラックの腕の中からもぞりと顔を上げて、問い掛けるとブラックは私から視線を逸らした。あからさまに怪しい。誰？と重ねると渋々口を開く。

「ジルラインです」

ジルライン……なんだか凄く最近聞いた名前のような気がする。私は、刹那考えて直ぐに思い至る。

「お、王様に、そんなくだらない話したのっ！」

あっさりくだらないといってしまった私に、ブラックは物凄く傷付いたという風に声を上げたが直ぐに萎んでいった。

「くだらなくはないですよ！ 私にとっては死活問題です。それに、その……仕事のついででしたし……」

ブラックの仕事ってことは、人の生き死にとか種関係だ。

そんな重たい話の次いで、聞くようなことじゃないと思う。

それに相手は五人も奥さんの居る人なのに、そんな人が普通の感覚を持っているとはとても思えない。

私は呆れて二の句が告げなくなった。

第五十二話：恋人に望むことはなんですか？（2）

それなのに、しょんぼりと下がってしまっている耳と所在なさげに、ぱたんぱたんつと、ソファを打つ尻尾に毒気がどんどん抜かれてしまう。

「マシロの想像通り、あの人からは大して参考になるようなことは聞けなかったの…… 図書館で少し蔵書も漁ったんですけど……」
「図書館に来てたのに、顔も見せてくれなかったの？」

これには今度は私が少し傷付いた。

そんな私の様子にブラックはまた少しだけ視線を彷徨わせたあと、
はあ……と嘆息してぽつぽつと話を続ける。

「私が図書館に行ったのは色々と事情がありまして、夜も遅かったですし、マシロはとくに寝ている時間でしたから」
「そんなのいつも気にしないでしょう？」

それに私は最近ゆっくり眠った記憶なんてない。

浅い眠りの中を漂っているだけだったのだから、僅かな物音でも目を覚ましたはずだ。

ブラックが顔を出してくれていたならどれだけ、ほっとしたか分からない。しゅんつと俯く私にブラックは「それに……」と話を続ける。

「私自身、答えも見つけていないのに、マシロの顔を見たら絶対、この間我慢した所為で抱き締めてキスして確実に押し倒す自信があ

ったので……それでは我慢した意味がないと……」

どこに自信を持っているのか、もうよく分からない。

「じゃあ、答えは見つかったの？」

短い溜息と共にそう訪ねた私に、ブラックはまたまた、しょぼーんと耳を下げた位置で揺らした。

—— ……どうしよう。

なんかそれだけで何があっても私は許せそうな気がする。アニメルセラピー……。って和めない！ 和めるわけない！ と思っても、耳と尻尾が視界に入るとちよつと負ける。

「私にはやはりこうという決め手はなく、分かりませんでした……だから、マシロに聞いてみようと思って……」

最初からそうすれば良いのに。

私もそうだけど、ブラックも酷く遠回りをしている。

お互いどうしようもないなと思うと微かに笑いが漏れてしまいそうになる。

「ねえ、マシロは……マシロはどう思いますか？」

「結婚がどうのという話？ そんなこと急に振られても良く分からないけど、全然考えてなかったし……そういえばこっちは十七で大人なんだから、結婚適齢期なんて時期も早いんだよね？ うーん……んー……別にそれだけが想いの形じゃないんじゃない？」

締め括ると、ぱっとブラックの表情が明るくなった。

忙しい奴だな。

實際元の世界でも晩婚化が進んでるし、結婚しない人も多い。家庭に入るというのも悪くはないと思うけど、自分の仕事を持って適度に恋をしていつまでも輝いている女性には同性として少し憧れる。だから特に拘るつもりはない。

「良かった、マシロがそう思ってくださるなら……」

本当に悩んでいたのか胸を撫で下ろしたように、一度深呼吸したあと「先程の話ですが」と切り出した。

先程つてどの辺りの話だろう？ 私は無言で続きを促すようにブラックを見た。

ブラックはさっきまでのしよげ返っていた姿を一掃している。

「私としたことがうつかりしてたんです」

にこにこ嬉しそうに話を続けるブラックに、私は何？ と、首を傾げる。ブラックは、話を続けながらそつと私の手首に触れた。そこにはお守りのように紅珊瑚が揺れている。

「カナイやエミルでもマシロに贈り物をしているのに、私は何もしていないなと」

「は？ 私、ブラックからはいっぱい貰ってるじゃない」

それこそ、一々上げたらキリがないほどだ。それなのにブラックは首を振る。

「そんなの必要最低限のものでしょうか？ 贈り物だなんていえません」

十分です。と、思わず肩を落としてしまった私の前にブラックはひよいと小さな箱を出した。

ピアスとか指輪が入るくらいの小さな箱に可愛らしくリボンが掛かっている。

「これを用意していたんです」

突然のプレゼントに困惑し、誕生日でもなんでもないのに……と、ぼつと零した私に「では、今日を誕生日にしたらどうですか？」と、とんでもなく適当なことをいう。

あのねえ、と、眉を寄せた私をブラックは気にすることなく、なんでもない日でも良いじゃないですか。と微笑み、取った私の手に箱を乗せ、リボンをしゅるりと解いた。

こつという強引さはブラックらしい。

中に入っていたのは宝石用のケースだ。ブラックはそつとその蓋を開けた。

「綺麗……」

中央に落ち着いた色を湛えるピンクダイヤが赤銅色の台座にゆったりと腰を据えるように収まっている。

そつと取り上げると指輪だ。

「キカルにいたりしたのこの為？」

「あ、あれ？ どうしてマシロがそのことを知ってるんですか？
なんか必死になってたみたいで恥ずかしいじゃないですか」

カナイから聞いたことは伏せたほうが良さそうだ。

ふふつと微笑んだ私の手の中から、ブラックは指輪を取り上げると左手の薬指にそつと挿し入れた。こちらでも意味合いは同じなのかな？ 今日初めて身につけたのに、昔からそこにあったように落ち着いて煌く石に暫し見惚れる。

「やはりよく似合いますね。嬉しいですか？」

「うん……嬉しい……」

嬉しい……。

「良かった。でも、指輪は調剤するときに邪魔ですよね？ チェーンも用意したので、コレに通、せ、ば……マシロ？」

細長いケースから同じ色のチェーンを取り出したものの、それを私に手渡すことはなく、気遣わしげに私の頬をそつと撫でた。

私は恥ずかしくも、馬鹿馬鹿しくも……

泣いてしまっていた。

我慢しようと思えば思うほど涙は止まらなくなって、仕舞いにはしゃくりあげてしまう。

「う、めん、私、良くないことばかり考えて……馬鹿みたい」

一気に気が抜けた。張っていた緊張が全て解けてしまつて、もう
本当駄目だ私。

顔を拭おうとする私の手を取つて、ブラックは止まらない涙を片
手で拭つて頬を包むと、そつと目尻に唇を寄せ微笑む。

「そうですね。馬鹿みたいです……でも、そうさせてしまつたのは
私ですし、気がつけなかったのも私です。マシロ……行き届かなく
てすみません」

本当に、本当に、こいつは私を馬鹿みたいに甘やかす。

「とはいえ、何故捨てられるとかそのような馬鹿な発想になるんで
すか？」

「……だ、つて。さっき、もいった、でしょ。ブラックが私に、分
かるような隠しごと、する、なんて、変じゃん。口数も、少なかっ
たし……」

「そ、それだけですか？ 私の愛はそれだけで疑われたわけですか
？」

「それだけつて、こともないけど、大体それだけだよつ仕方ないじ
ゃんつ！ 別に疑つたわけじゃなくて、私はいつも、自分に自信が
ないんだよっ！」

ぺいつとブラックの手を払つて、ごしごしと止まらない涙を拭
いつつ、やっぱり最終的に逆ギレする私にブラックが笑つたのが分
かった。

「だから、マシロは自分を過小評価しすぎなんですよ」
「仕方ないでしょ。私は何も持っていない」

人から評価されるほどの何か、なんて……私は一つも持っていない。

元の世界でも、シル・メシアでも与えられてばかりだ。

「何も持っていないは酷いですね」

ほんの少し傷付いたように零したブラックに私は驚いて顔を上げた。

ブラックは僅かに眉を寄せ、微笑むと頬を摺り寄せて続ける。

「マシロは私の全てを持っているんです。せめて、私に愛されている自信くらい失くさないで下さい」

「だ、だから、その理由が……っんう！」

ブラックの腕の中でもがいた私を離すつもりはないのか、がつつりと抱き締めて、次の台詞を遮るように唇を奪った。

割り入ってきた舌が深く口内を犯し、うだうだと考えたり悩んだりするのが面倒になる。

遊んでいた腕をブラックの背に回すと、うつすらと瞼を持ち上げる。

ふと視線が絡むとブラックは僅かに離れた。

「私は口が上手いので幾らでもマシロに理由くらいつけて差し上げられますが、そんなことよりも今は少しでもマシロに触れたい。繋がって居たいです」

真っ直ぐ瞳を見据えられ、時折触れる唇から紡がれる言葉に逆らえるはずもなく、私は回した腕に力を込めた。

「マシロも、そう思ってくださいるときがあるようですから」

そつと耳元で繋がれた台詞に私は、かつ！と頬が上気した。

そんなわけない！ と、暴れたかったがそんなこともう許されなくて、反射的に振り上げた手は、ブラックの長い指に絡め取られた。

「打たれるのも悪くないですが、今は、もつと……」

「んっ」

耳に這う舌先に頭に上がってしまった熱が全身に行き渡る。

「今の季節は夜が長いことだけが利点ですね」

ふつと妖艶に微笑んだらうブラックの吐息が、私の脳をすっかり麻痺させた。

大好きな人の腕の中で、私は深く堕ちて行く。

第五十三話：これが私の生きる道（1）

季節は巡って、私の一人暮らし生活も板についてきた頃、その知らせは届いた。

「ああ、居た居た。マシロさん。こちらにサインして」

カーティスさんの本の返却作業を手伝っている中。最後の一冊と、本棚に本を納めたところに走り寄ってきたのは相変わらず小さなチルチル先生だ。

ミチル先生……もとい、チルチル先生は私に封書を押し付けて、一枚の羊皮紙を近くの机に載せる。私より先に内容を把握したのかカーティスさんが「おお！」と声を上げた。

「凄いいじゃないか！ マシロ。これで薬師として店も出せる」

「え！ じゃあ、この間の実技試験も通ったんですか」

「通ったから、こうやって許可証が王宮から届いたんです。今の学生証は返却しますから、出してください」

淡々と事務作業をこなしていくミチル先生……チルチル先生に私とカーティスさんは顔を見合わせて苦笑したあと、いわれたとおりサインをしたり学生証の返却を行った。

小さな両腕に書類一式を抱えたチルチル先生は最後にひと言だけ「おめでとう」と付け足してちょこちょこ職員室へと戻っていく。

カーティスさんはここに来るときには本が山と載っていたカートを押し、立ち去り際に手伝いへのお礼とお祝いを告げて、私の頭をくしゃりと撫でると鼻歌交じりに去っていく。

私は入学したのも変な時期だったし、ここを出てからは変則的な

授業だったから他の生徒とはずれた時期の試験だった。

「ごそごそと貰った封筒を探ると学生証と同じような小さな手帳と小冊子が入っている。」

小冊子にはこれからの進路的なものが書かれていて、このまま研究員となることを強く押していた。

研究員になれば外から通うのも駄目ではなくなる。

実際研究員には家庭を持っている人も居るし、学生とは違う階位になるから今までの校則的なものは全て除外される。

でも、私は町で薬屋さんをすることに決めている。

ブラックが予想したとおり、私の家の一階は今もがらん、と空いたままだ。最初はテナント募集の張り紙もしていたが途中で諦めてクローズの札を掛けておくだけになった。

何もない空間はとても寂しい。

だから私は早くそこを埋めようと、これまであまり力を入れていなかった勉強にも力を入れてそれなりに頑張った。

そんな私に飲んだ種は応えてくれたのだろう。私はこうやって無事に薬師の資格を得た。許可証の最後には王家の徽章がでんと押されている。

国家資格みたいなものかな？

私は直ぐにでも皆に知らせたい気持ちを抑えて、持ってきていたペンと紙を机の上に広げる。これはカナイに貰った品で、用件を認めて飛ばすと相手まで届けてくれるものだ。

最初は半信半疑だったが、他に王宮まで無条件で直ぐに届く連絡方法がなくて利用していたら、結構有能だった。

魔法雑貨を扱っている店では、珍しくない品らしいが正確性が問題視され、私ほど遠くに飛ばす人は居ないようだ。

因みに私のはカナイのお手製だから、これまで郵便事故にあったことは一度もない。

まずはエミル宛に合格を認めた。

多分、カナイとアルファにも伝わると思ったけど、二人にも大体同じ内容で書いた。マリル教会にも宛てた。そして、もう一枚白紙を用意して、私は机をコツコツと叩く。

「うーん」

唸ってちらりと左手に納まっている指輪を見る。もうあれから結構経つのにそのときの気持ちが蘇って、ほくそ笑んでしまう。

「まあ、良いか」

ブラックには口頭で伝えようと決めた。

何より、神出鬼没だから今どこに居るのが良く分からないブラックへの手紙は、私の部屋へ戻ってくることが多かった。それと同時に大抵本人が私の部屋に現われる。

大窓から差し込んでくる陽光にキラキラと石が煌く。

『凄いわね。それはね、愛の叶う石だといわれているのよ？ 女の子は皆懂れるわ』

アリシアに、そう教えて貰ったとき凄く嬉しかったのと同じくらい凄く恥ずかしかった。

そして私の杞憂だった話をするとう物凄く笑われた。でも、ひとし

きり笑ったあと「良かったわね」といつてくれたアリシアの顔が素直に暖かくて華やかで良く覚えている。

「一人でニヤニヤしているのは不気味だと思うわ」

かたんと私の正面の椅子が動いて音を立てると、そこに腰掛けた人物が声を掛けてくる。顔を上げればアリシアだ。

「資格取れたってチルチル先生から聞いたわ。おめでとう。やっとオープンの看板が出せるわね？」

くすくすと訳知り顔でそういったアリシアに私も頷く。

アリシアはあれからやつぱり種を飲んだ。代金は拝み倒して分割にしてもらい以前の私のようにギルド登録をして依頼料を返済に充てている。

それもそろそろ終わるころだと思う。

アリシアは私と違って世渡り上手だから稼ぎ始めたら早かった。

「アリシアは上級階位を卒業したらどうするの？」

今、最上級階位にはシゼが居る。

でもそんなところまで上り詰められるのは、ほんの僅かな人間だけらしい。だから基本的に上級階位を通れば大抵の資格取得資格は得られる。

「あたしは家に戻るわ。うちの無駄になっているハーブ園を整えて、盛り返さないと食い逸れる家族が居るのよ。うちの男共は役に立たないのばかりだから」

そんな憎まれ口を叩きながらも、家族の話をするときのアリシア

は嬉しそうだ。これまであまり知らなかったのだけどアリシアはかなり生活苦をしょっていた。アリシアの行き過ぎた現実主義者っぷりはそんなところから来ていたようだ。

「そのうち、マシロのお店にも卸させて欲しいわ。良いのを育てるから」

くすくすと笑いながらそういったアリシアに私は二つ返事でもちろんと頷いた。

ひとしきりアリシアと話をしたあと、私は図書館を出た。

話しながら折った紙飛行機を一応王宮のあるほうへ向けて飛ばすと、ぐんつと風を切って高いところを飛び去った。見えなくなるまで見送ってから私は帰り道を急いだ。

第五十四話：これが私の生きる道（2）

それからあとは、本当にあつという間だった。

ブラックは私と同じように喜んでくれたけれど、「家庭教師はお終いですか？」と少しだけ寂しそうだった。

お祝いという名目で全ての準備が整うまでに数日要しただけという、驚異的なスピードで開店準備は整えられた。王家の力は侮れない。

「主、これはどこに置けば良い？」

「ああ、それは温室のほうに運んでおいて」

ハクアは相変わらずマリル教会に監視という名目で住み込んでいる。家族で。

ハクアを探して来たという、白銀狼とのひと悶着は大変だった。今思い出すとちよつと微笑ましいけど、今はハクアの奥さんになっている彼女も最初は私との血の契約を反故にしようと私の命を狙ってきた。

私に牙を向けた白銀狼——シラハという妙齡の美女、美白銀狼？だ——を容赦なく消そうとしたブラックを止めるのに本当に労力を要した。

そのあとハクアとの契約に問題があるのだと別の火種に燃え移って、今度はブラックがハクアを消そうとするし、ほんつとーに私の周りはいつでも物騒で仕方ない。

今ではその甲斐あつて、シラハとも仲良くしてもらっている。ハクアが私に懐くのは面白くないようだが、どちらにしても命の恩人だし、白銀狼にいわせれば人間の寿命なんて取るに足らない程度の

ものらしい。

私が死んだあとは、もうなくなった火種で彼らはもうひと悶着起こしそうだ。

―― …… カランカラン

「ごめんね。もう準備終わっちゃったかな？」

可愛らしいウエルカムベルを鳴らして入ってきたのは、相変わらず美しいエミルにそのお付の人だ。

そついうとカナイが複雑な顔をするので、とりあえず使うことにした。カナイはからかうとても面白い。アルファの気持ちが良い分かる。

「いらっしやい。皆のお陰であらかた終わったよ」

にこにこと出迎えると、そうか、残念と微笑み久しぶりとハグをする。

「もっと早く来たかったんだけど、いつものようにごたごたしててね？」

「大丈夫だよ。奥でシゼがとりあえず並べて置いたほうが良い薬を作ってくれてるよ。エミルが顔を見せたらきつと疲労回復すると思うな」

夕べからシゼは一睡もせずに頑張ってくれている。

無理をする必要は全くないのに、エミルさんに一日でも早くといわれているから。と、黙々と作業を続けていた。エミルは苦笑してそれなら良いんだけどと奥へと様子を見に行ってくれた。

「それにしても……」

「あーこういつちゃんだが」

店内をぐるりと見回してアルファとカナイが眉をひそめる。

「女の子のお店って感じしませんね」

「なんか毒々しいな……」

失礼な第一声だ。

「五月蠅いなっ！ 薬師の店なんてこんなもんだよ」

いったあとで「あ」と三人で顔を見合わせる。軽い既視感だ。そして、ふっと笑いあう。結局最後まで見ることの叶わなかった、エミルの部屋の予想が付いた。

王宮のごたごたは正直黒すぎて私には手に負えない。

アルファやカナイは私が心配したら駄目だからと口にするのではないけれど、どうやらエミル暗殺未遂は一度や二度の話じゃないようだ。ブラックが楽しそうに聞かせてくれた。

楽しい話ではないと私が眉を寄せると、二人が付いていればそう安々と達成されることはないとブラックは笑う。

他には先日、一番有力視されていた継承順位第一位の王子がその

地位を降りた。

表沙汰的には彼の持つ思想は民衆に受け入れられ難く、このままその地位にあることは許されないと、内部批判が高まり、その煽りで自ら降りたことになっていたけど、実際は色々あって剥奪されたそう。

私は多分女性問題だと思う。

カナイの話では今一番王位に近い存在になっているのはエミルらしい。順位は二位だけれど王宮から出ていた王子ということで民間支持率がパレード非参加期間が長いというのに高いそう。

「別に否定的なわけじゃないが、なんというか仕組みれてるっぽいよな」

カナイがここにお茶を飲みに来ていたときに零した台詞が印象的で、私は少し気になっていた。

そんなことを思い出して嘆息すると、もう一度ウェルカムベルが訪問者を告げる。

「こんにちは、何かお手伝い出来ることはありませんか？」

にこりといつも通りの笑みを浮かべて入ってきたのはレニさんだ。私は意外な訪問者に目を丸めた。そして、その手に抱かれていたナルシルに手を伸ばす。

「マーシロ」

短い腕をいっばいに伸ばしてこちらに笑顔を向けてくれるナルシルを受け止めた。あまり会う機会があるわけでもないのに、ナルシルの初めて話した言葉は「シロ」だった。あとからマが付いてきたから私のことだと理解出来ただけ、それで良いのかは些か不安

だ。

「もちろん、一人では無理ですから王宮の方は外で待つてくれます。それに、シラハさんも一緒にしてくださいましたので……」

問題ありませんよね？ 王子……と、締め括られ私は奥の調剤室を覗きに行っていたエミルが戻ってきていたのに気が付いて肩を強張らせた。

「相変わらず司祭は人心を操るのが上手いですね」

嫌味にもレニさんは「光荣です」とにこりと答える。

うん。この二人もきつと合わないんだね？ そんな私の引き気味の感情を察したのかナルシルが「マーシロ」と頬をぺちぺちと叩いてくれる。

—— …… ああ、可愛い。

癒し系だ。

その様子を複雑な面持ちで見詰めているエミルに気が付いて、何かフオローをと思ったのと同時にレニさんがそつと隣に寄り添い口を開く。

「こうすると家族みたいですよね？ 可愛い奥さんに、可愛い子ども、絵に描いたみたいです」

爆弾発言だ。

レニさんの暴言にレニさんが知らないところで、私たちは振り回されていた過去を思い出し苦笑する。そんな私の腕からつかつかと歩み寄ってきたエミルがナルシルを抱き上げる。エミルは子どもに

好かれるのか、それとも血縁者だからか、泣かれることはない。

「僕のほうが似てるよね。このまま、三人でどこか遠くへ引っ越そうか？」

……いや、ホント勘弁してください。明日、お店を開けようかというところまで来てるんです。

「駄目ですよー。エミルさんは今日陽が落ちるまでに王城に戻らないといけないんです。逃がしませんよ」

えー……つと眉を寄せたエミルにアルファは天使の笑顔向け「ね？」と念を押す。正論をいつている人のほうが強い。これは当然だ。

第五十五話：これが私の生きる道（3）

「騒がしいと思って来てみれば、なんですか？ この人口密度の高さは」

「ブラック、カウンター座るのやめて。明日から使うんだから」

聞き慣れた声に振り返ると、いつの間にか出てきていたブラックに眉を寄せ、歩み寄ってしっしと追い払う。

ブラックはとんとカウンターから降りると、私の左手をとりそつと指輪に口付けたあと、ぎゅーっと私にしがみついてくる。

あの日以来恒例のようになってしまった一種の儀式だ。

「マシロは私の子どもを産むんです」

こつちも爆弾発言かつ？！

「え、マシロちゃん赤ちゃん出来たの？」

「出来てませんからっ！！」

きょとんと可愛らしく聞いてくれたアルファに盛大な否定をする。そんな私に、物凄く真剣な顔をして歩み寄ってきたのはカナイだ。ぽんつと私の両肩に手を乗せて真摯に告げる。

「最低でも男と女の一人ずつ。いやそれ以上頼む」
「はあっ？！」

ぐうを作った私にカナイは、一步下がってお前知らないのかつ！と力説。

「獣族は優性遺伝なんだ！　ほぼ確実に、お前らの子どもは獣族だ」
「そうですね。私は両親とも獣族なのでそうなると思います」

肩越しにそう頷いたブラックの耳が視界の隅に入る。

—— ……これか！

カナイの狙いはこれかっ！　どこまでこいつは可愛いものに目がないんだ！　つか、その狙いは変態だからっ！　私の子どもに何をするつもりだっ！

私はこめかみに青筋を立てたがふと冷静になって素朴疑問を投げる。

「優性遺伝の割りに獣族って少なくない？」

やわやわとブラックの頭を撫でてそういった私にカナイは、あー……と唸る。私もしかして拙いことを聞いただろうか？

「少ないんだよ。獣族が普通の人間と結ばれることは、ね？」

抱いていたナルシルをレニさんに返しながらエミルがぽつりと答え「こんなに可愛いのに？」と首を傾げた私に苦笑しつつも話を続けてくれた。

「獣族は仲間意識が強くてあまり人間を快く思っていない……のかどうかは分からないけれど、獣族が人間に好意を持つことはとても稀なことだと思うよ……」

ねえ？　と、話を振られたブラックは「私は獣族も人間もどうで

も良いです。マシロが良いんです」と私の首筋に擦り寄ってから姿勢を正し「まあ、エミルがいうことは間違っていないですけどね？」と小さく嘆息する。

私の知っている獣族はギルド管理者の二人とミア工房のティンくらいいけど二人とも全然そんな感じではなくてフレンドリーなんだけどなと思ったけれど、きっとこういうのは私には理解できないほどの根深いものがあるのだろう。

「一応、このくらいあれば良いと思います。在庫は用意していないので明日から合間を縫ってご自分で用意してくださいね」

シゼだ。

店内の騒ぎをものともせず調剤室から出てきたシゼはカウンターの奥の棚に瓶とか箱とか、並べてくれる。

シゼが唯一の常識人に見える。

ありがとうとお礼をいいながらブラックを引き離して、カウンタ―に越しに商品を見上げる。

「マシロさんでは明日開店に絶対間に合わせられないと思ったから手を貸したまでです。あとは知りませんよ」

冷たくいい放つが、きつと助けてといえは手を貸してくれるのはこの場の全員が知っている。だから思わず笑ってしまうとシゼは顔を赤くして兎に角っ！と声を大にした。

「皆さんも何をしに来ているんですか？ お祝いムードも結構ですが、それならそれで上に上がったらどうです。邪魔です」

「それもそうだね？ ごめんね。シゼ」

「エミル様は良いんです」

そうか、良いんだ。

あははーと、笑いつつ私も皆を上に通すべきだった。私はそういうことだからと皆を促す。

「それから、ブラックさんも。ハクアが裏で貴方が持ち込んだ鉢植えに困惑していましたよ。温室を破壊される前になんとかしたほうが良いんじゃないですか？」

「あー……じゃあ、それはシゼに頼みます」

「ブラック。シゼは徹夜明けなの。何を持ち込んでくれたのか分からないけど、ブラックがなんとかして」

ね？ と自分でも寒いくらい可愛らしくいつてみた。カナイとシゼが引いていたが気にしない。ブラックは二つ返事で温室に消えていった。効果絶大。

「ねえねえ、マシロ。今の僕にもやって」

階段を上がりかけた私の袖を引いたエミルに「私も」とレニさんまで便乗する。俺はもう二度と聞きたくないと腕を擦るカナイは足蹴にしたいが強請られても困る。

「恥ずかしいから無理」

即刻却下した。

最終話：一生に一度の恋の行方

お祝いは皆から沢山貰ったのに、今日も沢山持ち寄ってくれて TimeInterval は充実していた。

だから余計に人気がなくなるとがらんと見えた。

日が暮れる頃、皆それぞれ家路に着いた。

私はそれを見送ったあと店内をぐるりと確認して、噂の温室にももう一度足を運ぶ。

ブラックが持ち込んだ植物は……生きてた。

いや、全部生きてはいるんだけど、うん。動くんだよね。植物園で見た奴の小型版だ。荒らされないかと聞いたら肉食だから他のものを枯らしたりはしないといわれたけど……本当に問題はないのか。

温室内をうろろろしていたそれを見下ろして嘆息する。

「害虫駆除に良いんですよ？ それに実が生れば美顔薬にもなるので女性には大人気です」

ふわりと背後から抱き締められてそう説明を重ねられる。もちろん居残っているのはブラックだ。

「ケテオセラってこんなものに生るの？」

「そうです。動いてるのは初めてですか？」

初めてですよ。心の中だけで零した声に自ら脱力する。

ねえ、マシロ？ と問い掛けつつ、耳を食むブラックに身体を擦って見上げれば夜の闇と同じ色の瞳に私が映っている。

うん、と返事を返してブラックの髪に指を差し入れ引き寄せると口付けた。

「幸せですか？ 私は貴方を幸せに出来てますか？」

本当は寂しくないかと聞きたかったのだと思う。

もう、元の世界に帰れないことを寂しく思うことはない。と、何度ブラックにいつてもブラックは唯一自分の力及ばぬところだと哀しく思ってしまう。

「私は幸せだよ。有体だけどそれこそ怖いくらい幸せだと思う」

本当にそう思っているのに、言葉にするととても軽い。ブラックは私の言葉に少しだけ微笑んだ。

「ねえ、ブラックはどうしてそうではないと思うの？」

問い掛けると少しだけ腕の力が緩んで私はブラックと向き合った。ブラックは「それは」と僅かに口箆って視線を彷徨わせたあと、意を決したように私の瞳を見詰める。

ただそれだけで私の胸は高鳴るのに聞こえないのかな？

「時折泣いています。マシロは何か夢を見て泣いています」

いわれて私はああと得心する。

それで私がいつまでもしつこく元の世界に焦がれていると思ったのか。私は苦笑して、それでも話すかどうか少し迷った。遅疑逡巡したあと私はゆっくりと口を開く。

「元の世界を夢見て泣いてるんじゃないんだよ」

「では、何を夢見ているんですか？」

「……ごめんね……もう、絶対そんなことないって分かってるんだけど……分かってるんだけど、夢だけはどうにも出来なくて……独りを想って泣けてくるの」

マリル教会の奥に幽閉されていた期間。傷の痛みと高熱と……孤独。

レニさんを怨む気持ちも怒る気持ちももうゼロに等しい。でもそのときの感情だけはどうしても消えなくて、それは時折悪夢となつて私の心に戻ってくる。

きゅっとブラックの胸元を掴んでぼつと告げた私をブラックは掻き抱いた。詫びるように強く抱きしめられて私は微かに笑った。

苦しいよ、と零せば僅かに腕の力が緩くなる。

「私は幸せだよ」

重ねた。

「私はそれよりもっとずっときつと幸せです」

「疑問が残るんだね？」

「まさかっ！ 言葉にするとどれも軽くてなんていって良いのか分からないんです」

「口は上手いっていったのにね」

くすくすと笑うとブラックの顔は見えないけど、きつと子どものように不貞腐れて眉を寄せている。見なくても気配で機微が分かる。そのくらいはもう一緒に居た。

「私はとても浮いた存在だった。今もそうかもしれない。でも、少しずつ、少しずつだけど、この世界に、シル・メシアに根付いてきていると思うんだ」

こうやって、私だけの場所も出来た。だから余計にそうあって欲しいと思う。

さっきの冗談めかした話題ではないが、もし、もしも本当に私が子どもを産んでその子がまた誰かと恋をして生をつなげて行くことが出来たなら、きっと私はもうこの世界の住人だと思う。

白い月の少女とかそんな馬鹿げた異質な呼び方ではなくて……もつとずつと普通の……うん。今のところは薬屋の店主ってところくらいで……。

だから……

「ブラック。長生きしてよね」

「……そんなに老体ではないですよ。いつまでも現役で居られるように善処します」

私の言葉の真意が分からないほどブラックは鈍くない。

ブラックは青い月だなんて崇め奉られる以前に種屋で多くの業を背負っていて……彼の最期は決まっている。

僅かでも衰えれば消されるだけだ。

そして、私は残される。

そんなの……嫌だ……。

「でも……そのときには、私も一緒に……」
「……善処、します」

ぎゅっと更に腕に力を込めたブラックの声は少しだけ掠れていた。

白い月青い月二つ月

紅く染まる月……在るべきものが在るべき場所に存在して初めて
歯車は回り始める。

回り始めた歯車は……カラカラカラカラ……もう、誰にも止められない

止まらない歯車のひとつに組み込まれた私はずっと壊れるまで回り続けるだろう。

叶うならその流れが穏やかであるように、人為的な崩壊が訪れないように私は祈り

私を囲む歯車はそれを叶える為にゆっくりと、じっくりと、時をかけて回っていく。

白い月 青い月 二つ月

剣と魔法と素養の世界シル・メシアには今二つの月が浮かんでいる。

あとかき

第二弾も無事に終了しました。

長い間お付き合いいただきましたこと本当に感謝しています。

それではお粗末ながら、少しだけ白銀狼譚……あとかきとか書かせてもらおうかな？ と思います。雑談ですので不要という方はもちろん。そのままスルーしてくださいね？

—— ネタバレありますので、読了後目を通していただけると嬉しいです ——

あ、ここで書くのもどうかと思いますが、一応宣伝宣伝。笑。

皆様、ケータイは何をお使いですか？

もしも、ソフトバンクをご利用でしたら是非ご協力ください。

ソフトバンク専用コンテンツ【タダ本】 ↓ ライトノベル人気
投票 ↓ 白蒼月紅譚 ↓ 二つ月のある世界 参加中です。毎週木曜
日更新10/9/23より

目出度く審査通過して……本当長いし拙い部分もあるというのに
パピレスさんソフトバンクさんは心が広い……でも、私は別社ユーザー。
ザー。

本当にごめんなさい。

田舎はねソフトバンクあんまりつかえないんです。がつがつアンテナ増やしてください。そしたら検討します……そう、そして、参加できる運びになったんです。

（ん？　なんかはしよりすぎてる気もしないでもない）

今回は紅譚での参加ですが、人気維持できれば、紅譚に表紙がつかますよーっvvv　絵師さんが、彼らを描いてくれますvvv　そして、白銀狼譚も参加できる機会が得られるかもっ！！　……それは勇み足ですが。

良かったら、ぼちっと投票してやってください。

それはそうと、白銀狼譚のお話でした。

白銀狼譚は、主に白い月にスポットを当てました。マシロちゃん为主役だから。

正直私は宗教観というものを持ち合わせていないので、何か……というか信仰に入れ込む人の気持ちが良く分からない。だけど、要するに、神様。今回は月。に対してオタクなんだよね？　という部分から掘り下げました。（根本的な間違い？　苦笑）

だから白い月に対してレニさんは盲目。

責任感が強くて自分ひとりですべてを抱え込んで何とかしなくてはいけない、護らなくてはいけない、自分が信じる唯一つのシル・マールの為に……。

本当は素直で良い人なんですけどね。

彼の環境がそれだけでは許さなかったんです。だから、性格がスチールウールのように複雑に……ほろり。

外伝で書くかどうか微妙なのでここで触れますが、蒼月教徒とマール教会は深い因果関係にあります。

それは今の世代本編では既に亡くなっていた、レニさんのお父さんが居なくなっただけから、一番色濃く出ている問題でレニさんに移り変わったことから目立ってきます。

その一番の原因は……レムミラスさんが、レニさんのお兄さんであるということです。名前が似てるからもしかして血縁者？とか思ってくれた方は鋭いっ！（つか、私を分かってますねーvv嬉しい吃驚デスv）

彼ら兄弟も素養に振り回された犠牲者です。

レニさんは術師系の素養にはとんと恵まれませんでした、それとは対照的にレムミラスさんは術師系、しかも攻撃魔法系（因みに水系）の素養が強く慧眼しました。

その所為で、非武力団体であるマリル教会に不満を募らせ、大聖堂を卒業したあとマリル教会に戻ることなく蒼月財団に入りました。そこで水を得た魚のように頭角を現し今の地位まで上り詰めました。因みにレニさんも大聖堂卒業生。

メネルと同じ星詠階級の卒業生です。

この兄弟別に憎しみあっているわけではないんですけど、相対する組織の性質上仲良くなることも出来ません。子どものころはもう少し近かったはずなんですけどね。

そんな裏話も含んでいた白銀狼譚。

タイトルになっているのだから白銀狼にスポットをと思ってたのに……彼についても深く掘り下げきらなかった部分があります。

もちろん。

ブラックも口にしていた白銀狼と種屋の確執。白銀狼は一時期”種”を明け渡すことを拒んでいた頃がありました。それはそのときの長が、最愛の妻の種を奪われるのを拒んだことから始まります。

ブラックは簡単に長の死しか語りませんでした、このことで多くの白銀狼が犠牲になり、命を落としています。

絶滅まで行かなかったのはそれが世界のルールで、時の種屋店主が白銀狼殺戮に飽きたからです。やーめた！ と勝手に終わりを告げ、収束を決めてしまったのですから、白銀狼側としてはしこりが消えなくて当然。

しかし世界のルールも護らなくてはいけない。
苛々した状態のままなんですよね。だから白銀狼は基本的に種屋を敵視しています。

ハクアは無駄に流れた同族の死を多く見ています。だから好戦的というよりも仲間意識が強いハクアは残された一族を守ることを優先し、穏健派を通したわけです。

あー……。

第三弾は一応予定しています。（只今執筆中です）

今度は王宮がメインになります。

エミルたちの兄弟話……かな？ その割りにちょっと毎度のコトながらずれてブラックが暴走したりするのだけど……。

正直、銀狼譚よりダークです。内容的に……シリアスです。

私は基本的にハッピーエンド推奨派なんですけど、ハッピーエンドにならないかも……。いやー、でも誰か殺すのは嫌なんですよね。嫌なんですけど……そこそこ死にます。予定ではね。

でも死んでいただかないとシル・メシアの重さが伝わらない。

シル・メシアにおける命の軽さとか、種の重さとか……。

そついうのが……だから必要悪。……だと思ふ。思つけどそれを文章にしたいだけの人に受け入れてもらえるか。

正直……ラブラブっつーか。一部、ドロドロ？ 世界になっちゃいそつです。いや、なってるかなーもう……。血なまぐさい展開です。一部。

そんなわけでそれまでの間、番外編アップさせてもらいます。そして、少し間があきますが、2011年くらいから第三弾開始できれば良いなと思っています。

番外編については、リクエストっぽいものを頂いて書いたお話一本。

カナイさんが気の毒なお話一本を予定しています。引き続きお付き合いいただけると嬉しいです。よろしく願います。

ここまで目を通して頂きありがとうございました。

汐井サラサ

前編

私は猫を飼っている……もとい懐かれています。

黒猫だ。

毛艶も良くスタイルも良い。

躑もそこそこは出来ていると思われる。思われるけど問題は……

—— ……朝…… ————

その日私は夢を見た。

ここに来て長くなるけど最近は見ることのなかった私の生まれた世界の夢だ。夢の中で私は笑っていたと思う。何を見て、もしくは何をやって笑っていたのかはつきりとは思いつけないけれど……もう、戻ることの無い世界は私に優しい気持ちだけを残してくれる。そんな中でまどろんでいると、頬に掛かる柔らかなものに撥らればんやりと覚醒した。

「……耳」

—— ……さわさわ。

視界に入った獣耳をとりあえず撫で付ける。黒い短毛で包まれた耳は滑々でとても気持ちよくて軟骨のくにくに感が堪らない。

「……猫が飼いたい」

「私を飼ってください」

ぎゅうつと大きな身体に抱き締められて、私は刹那息を詰めた。

サイズだ。猫として明らかな問題はサイズだと思う！

「いい、いらない……ブラックだけは飼わない」

「酷っ！ 酷いです」

ギブっ！ ギブアップですっ！ 益々両腕に力を込められて私はベツドをばすばすと叩いた。

「あ、すみません。つい愛が溢れて」

「……ああ、そう……」

その溢れた愛に溺れそうだったとしても私がいえば満足なのだろうか？

ずっと私から両腕を離れたブラックは、どこことなく不満そうに眉を寄せる。私は、はあと嘆息して「おはよう」と目の前にあったブラックの額に口付ける。

正直照れ臭いし恥ずかしいから嫌なんだけど、それだけでブラックの眉間の皺は取れるから良しとしよう。そしておはようといっておきながら出てきた欠伸を噛み殺して私はもぞりと起き上がると、んーっと思ひを一つ。

本日も例外なく晴天だろう。

私に優しい穏やかな季節だ。シャワーでも浴びようとルームシューズを履きながらブラックに今日の予定を尋ねる。基本的に年中無休だから私が休日に戻っていてもブラックは普段どおりだ。家には居るからそれなりに気は使ってくれてるんだと思うけど。

「マシロの予定に合わせます」

いつものように答えになっていない答えを貰って私は唸りつつ遮光カーテンを開く。私の予想通り晴天だった。

「天気も良いし、温室の手入れでもして……書庫の本でも漁って……」

ぶつぶつと口にした私の傍にいつの間にか来ていたブラックは「代わり映えしませんね」と苦笑する。

「好きなことを好きなようにしてるだけだから良いじゃない」「それでも、私に気を遣ってでしょう？ 出掛けても構わないんですよ？ ここには人形でも置いておきますから」

くるくると私の髪を指に巻きつけて遊びながらそう口にするブラックにそういうわけじゃないけど……と零して外を見る。

平日午後は大抵外に居る。

でも、確かに……ブラックと外出するといえば食事くらいのものだし……どこかへと思わなくも無いこともない……うん。ない。一人確信して大丈夫だと口に仕掛けてブラックにストップを掛けられる。

「そうだ。今日は午後少し出掛けましょう。ティータイムくらいで構わないので、マシロのその予定を片付けてからで大丈夫です」

にこにこ勝手に決定する。多分私に拒否権はない。

「どこに行くの？」

「少し散歩です。良いことを思い出したんです」

マシロはきつと喜びますよと、にこにこされるとどうでも良くなる。私は分かったと了承してブラックと軽く口付けを交わすとそのまま風呂場へ向かった。付いてきそうなのを沈めた回数は数知れず。大分学習したのか今日は付いてこなかった。

そのあとは予定通り、温室へ行き調剤用と観賞用の植物の世話をした。といっても大半はいつもブラックがやっているので、私のすることといったら葉の汚れをとってあげたり霧吹きで水を上げたり程度のことだ。図書館の温室管理当番に宛てられているときのほうが余ほど忙しい。

「それでブラックは何をしてるの？」

「マシロを見ています」

「それは見れば分かるけど仕事でもしてれば？」

温室の一角に設けてあるテーブルセットに座って暇をしている風に見えるブラックに声を掛けるとブラックは悪びれる風もなく嫌ですと答える。これじゃ、あえて家にいる意味がないと思うのだけど。

「上は傀儡が適当に回しています。だから、出掛けても構わないといつたじゃないですか」

ふうと嘆息して、そうだったと頷くと私も片付けを始める気になった。ふと手元の霧吹きを見て、ちらとブラックを見る。余りに可愛くないことを連呼するブラックに悪戯心が湧いた。私はとことこブラックの傍に歩み寄ってにつこり。

「寝癖付いてるよ。直してあげる」

「え？ そう、ですか？」

—— …… 付いてないけどね？

私は、そうそうと頷いて背後に回るとそつとブラックの髪に触れる。細くて柔らかくてちよつと羨ましい。少し撫でると頭上の猫耳が左右に垂れる。きつと気持ちが良いんだろう。これって意図的に動かしているのかな？ 私に浮かんだ素朴疑問。小首を傾げつつ、和みつつ……手に握っていた霧吹きをしゅぱっしゅぱつと掛けてやった。

「ちょ、マシロ？ 私は植木じゃないですよ？」

「—— ……」

しゅぱつ。

動きそうになるブラックの頭を押さえてもうひと噴き。

「ええつと……直りました？」

「—— ……」

も、もう一回くらいなら許されるかな。調子に乗ってもうひと噴き。

しゅぱ……っ。

「マシロー？」

「っ……ぶっ、くく、く……」

駄目だ。我慢の限界。

私は勢い良くブラックを背後から抱き締めた。だって、だって、だって……

「可愛いっ!!」

叫ばずには居られない。

しばしば水掛けたら、み、耳がつ。ぴるぴるぴるって水を払って
る。ぴるぴるぴるって振るって……ああああ。もう私の負け。可
愛いよー。タダの猫なら良いのにつ！

前編（後書き）

若干好きなネタは使い回し気味です。
でもこちらの公開のほうが先だったかもしれません。

中編

——…昼から夜…——

午後は予定より早く家を出た。

おやつにあのあと焼いたパウンドケーキを持って……馬で。

「馬なんて飼ってたんだね？」

「飼ってますよ？ 最初から裏に厩舎があつたじゃないですか。遊ばせていたわけではないですよ」

ごめんね、大きな物置だなと思っていた。

掘っ立て小屋には見えなかったけど、どこも豪華に作ってるから、物置も立派なのだと思って、それに疑問すら感じなかった。だって、ブラック移動に馬なんて使ってるの想像出来ない。

猫は馬に乗らないだろ。

その予想に反して馬が良い子なんだと思うけどちょっとお尻が痛いかな？ と、思う以外は実に快適だ。辺境はそう呼ばれるだけあって辺りに何も無い。何も無いから大草原状態で広々としていて気持ちも良い。因みにこれは散歩ではなくて明らかに遠乗りだ。それでも尚快適だと和んでいたのにつ

「走るのも早いんですよ？」

なんていい出して、私の了承も待たずに、ブラックはぱんつと馬のお腹を弾いた。舌を噛まないように気をつけてくださいねと付け加えてもらったけど、ちょっと遅い。噛んだ。

「――……ええつと、怒ってます？」
「怒ってない。機嫌が悪くなっただけ」

通常その状態を怒っているというのだろうけど、私の知ったことじゃない。

ブラックが連れてきてくれたのはどの辺りか分からないけど湖だ。聖域の湖よりずっと拓けていて明るい雰囲気のある場所で水面から吹き上がってくる風が頬を撫で傍の木々を揺らしていく音はとても心地良いと思う。思っけど、お尻と舌が痛い。変な意味じゃなくて。普通に痛い。身体は緊張から多分明日には筋肉痛とかになる。絶対なる。

――……ぴとっ

「冷たっ」
「本当は暖かいものを持ってきたんですけど、冷たいほうが良さそうだったのでそうしてみました」

大きな木の幹に背を預けて座り込んでいた私の頬にキラキラと氷が煌いているグラスが当てられる。

「……ありがとう」

いつまでも膨れているわけにも行かないし、それがとても無駄な

ことにも思えて、私は素直にグラスを受け取った。

ちよつと口をつけるとご丁寧にラベンダーの香りがした。

その様子にほつとしたように微笑んだブラックは私の隣に座って自分もグラスを傾ける。

湖の畔では、二頭の馬が喉を潤している。私は一人で馬に乗れないから一頭で良かったのだけど運動不足だろうからともう一頭連れてきた。

凄く穏やかだ。荒立った気持ちすらあつさりと風ぎいてくるくらい空気が優しくて柔らかい。

「そついえば、どうして今日なの？」

ふと、問い掛けた私にブラックはにつこりと微笑んで口元に人差し指を立て「内緒です」と答える。その答えに私が首を傾げるとブラックは折っていた足を伸ばしてばんぽんと叩く。

「少し横になっても良いですよ？　ずっと緊張してたみたいですから疲れたでしょう？」

「……もしかしくなくても膝枕してくれるっていつてるわけ？」

普通は逆な気がする。

思わず怪訝そつにそつ訪ねた私にブラックは当然というように頷いた。

「ここはそう危険の無いところなので、腕でも肩でもこの身全てでもお貸しして構わないのですけど」

「膝で良いです」

何をされるか分かったもんじやないので、私は素直に膝を借りた。

別に眠かったわけじゃないけど正直真っ直ぐ座っているのは痛かった。

腰とかお尻とか……うん……。

ごろんと女の子らしくも無く転がるとふわりと足元にブランケットを掛けてくれる。紳士的だと思うけど、相手にされている私は淑女とはいいい難い。

ぼんやりと少し固い枕に頭を預けて青い空に掛かった薄い雲を追いかけていると、視界にゆらゆらとちらつくものが凄く、すぐく気になる。

ひょいと手を伸ばして捕まえるとブラックの身体が僅かに強張ったのが分かる。

苦手なんだよね？ 尻尾掴めるの。どこかの異星人みたいに力が抜けるなんてことはないだろうけど、こういうのって多分一番無防備な部分なのだろうなと思う。

ちらとブラックを仰ぎ見て「駄目だった？」と問うと「いえ」と微笑んでくれる。だけど、若干頬が引きつっていることは見逃さない。

でも尻尾も離さない。

だって気持ち良い。滑々だし。頬擦りしたい！という気になっても仕方ないと思う。

なんとなくくねむーい気持ちになりながら、触り心地の良い尻尾の先っぽを苛めているとブラックに呼ばれて顔を上げる。影になっているのだけどほんのり頬が朱に染まって見えるのは気の所為だろうか？

「その、もうそろそろ、尻尾、離してもらえませんか？」

少し弱い声でそう告げたブラックに私はどうして？ と、首を傾げつつも尻尾の先を撫でる。だって何かふわふわだし、その中にある骨なのかな？ がこつこつしてちよつと楽しい。

「っ」

丁度そのときブラックが声を殺したのが分かった。あれ？ もしかして……

「ブラック？」

私は片方の腕を突っ張って上半身を少し起こすとブラックの顔を覗き込んだ。ワザとらしく視線を逸らされるけど、頬が赤いのは気の所為ではなかったようだ。

ねえ？ と重ねた私にブラックは気まずそうに軽く咳払いをした。

「もしかしてくすぐったいの？」

「……くすぐったいというか、その、えー……と……」

と言葉を濁したあと、そつと私の顎を持ち上げて軽く口付けると唇が離れない距離で続きを口にする。

「ぞくぞくします」

つつと私の下唇を舐めて「ちよつと危険です」と続けそのまま唇を塞いでしまう。危険の意味を察した私は直ぐにブラック以上に真

っ赤になり、慌てて尻尾を離してブラックの胸を押した。当然そのくらいではびくりともしない。

「ただ、駄目だよっ！ 外だし」

「誰も見ませんよ」

「馬っ！ 馬が居るっ！」

「じゃあ、消して」

「消すなっ！」

じたばたと暴れた私をブラックはぎゅっと抱き締めた。

どうするつもりかと刹那息を呑むとブラックがくつくつと肩を揺らす。もしかしくなくても笑ってる。

その気配に眉を寄せた私を確認するように身体を離れたブラックはそつと大きな手で私の頬を包み指先を滑らせながらいつもの余裕の笑みに戻って口にする。

「では、続きは戻ってからの楽しみにしましょう。折角ここまで来ましたし、もう直ぐ日が落ちます」

弱点とかだと良かったのになと思ったのに、私がブラックの弱点を見つけるなんて土台無理な話だったのかもしれない。

中の中編

そして辺りがすっかり暗くなった頃、凄く不思議な夜だった。

もう少し水辺に寄ろうとブラックに手を引かれて湖の淵に立った。畔で傍で仲良く並んで休んでいた馬たちもその身体を起こし佇む。

いつもは白い月と青い月が煌々と夜空を明るくしているのに、今夜の月はとても控えめだ。そんなことを思っている間に突然それは起こった。

一つキラリと星が流れた。

「流れ星っ！」

思わず歓喜の声を上げるとそれを合図にしたように幾つもの星が放物線を描いて夜空を滑り降りていく。

もう何度目かの凄いを口にした私の耳元でブラックがそっと囁く。

「足元も見ただほうが良いですよ」

その声に促されて首が痛くなるほど見上げていた顔を湖へと向けた。

「凄い、綺麗…… ——」

水面を星が滑っていくようだ。湖面の色々な場所で光が点在し輝いては消えている。

「気に入りましたか？」

「うん！……あ」

ブラツクの穏やかな声につい勢いよく頷いてしまった。

なんだかちょっと子どもっぽかった気がして恥ずかしくて、ちらりと隣を見ると目が合つてにつこり微笑まれた。

「ああ、マシロ。この流星群の下で口付けを交わす恋人たちは幸せになれるそうですよ」

いつて間合いを詰めると緩く私に腰を折った。

私は今でも十分に幸せだと思うけど、それが少しでも長く続くことを心から願うからブラツクの声に応える。

「……んっ、う」

こういうときのキスは普通誓いの口付けのように軽く触れるだけと、相場が決まっているような気がするのに、唇が触れたとたん腰を引かれて固定されてしまった。抗議の声を漏らせば音も無く「駄目」といわれたような気がして私は観念してブラツクの背に腕を回した。

あっさり割り込んできた舌先が深く口内に侵入し私の舌を絡め取っていく。未だに深く口付けられると上手く呼吸が出来なくて私は直ぐに酸欠気味になって赤くなり涙目になってしまう。

膝が折れそうになって腕に力を入れるとブラツクが「あ」と声を漏らして少しだけ私を解放した。

どうしたのかと目で問うと悪戯っぽい笑みを零して「終わっちゃいました」と告げて空を仰ぐ。私も釣られて空を見ると数え切れない

いほど流れていた星空は、しんつといつもの静寂を取り戻していた。少しだけ残念だ。

「すみません。マシロが可愛い顔をして上ばかり見ているものですから、ちよつと妬けました」

「――……」

てへっ。じゃねーだろ……。

ブラックが連れてきたくせにそのいい草はなんだ。私は多少呆れたものの、まあ良いやと気を取り直した。何もいわない私に疑問を感じたのか首を傾げたブラックに「帰ろうか？」と告げる。

雪の降る頃じゃないとはいえ夜は冷える。そうですねと頷いたブラックと一緒にまた馬に乗る。

帰りは行きよりももつと気を使ったのかとても静かで柔らかな震動だ。

「エミルたちも見えたかな？」

いつもと変わらない星空を見上げて呟いた私に、ブラックは素直に嫌な顔をしてから「見てないと思いますよ」と答える。あんなに沢山の星が流れてあんなに綺麗なのに……どうして？ と私が重ねて問う前にブラックが話してくれる。

「あんなに流れて見えたのはあの場所だったからで、王都ではそれほど見えなかったでしょうし、それに、誰も星が流れる程度のこと気に留めたりしません」

「そうなの？ あんなに綺麗なのに」

それを見ることもしないなんて少し残念だし勿体無いと思う。

「マシロならそういうと思いました」

ふふつと笑い声を漏らしたブラックに私は背を預ける。そして夜の空と同じ色をしたブラックを見上げる。

「じゃあ、あのセオリーみたいなのはなんだったの？」

誰も気に留めないなら恋人同士のお約束みたいなのが出来るはずない。物凄く尤もらしかったのになと思って眉を潜めるとブラックがまた笑った。

「そうだったら良いな」と思ったので、私が作りました」

マシロの気も引きたかったのと恥ずかしげも無く口にするブラックに怒る気も失せる。

だから何もいわなかった私にブラックは「怒ってます？」と可愛らしく問い掛けてくる。怒られるのを覚悟しているのか頭上の耳がしよげているのが凄く可愛い。私は笑って首を振った。

「私もそうだったら良いなと思ったから許す」

あーあ……好きとか愛とか恋とかどこまで人を馬鹿にさせれば気が済むんだろう。

声に出来ない贅沢な愚痴を飲み込んで、前を向くと改めてブラックに体重を預ける。規則的な揺れが心地良く眠りを誘う。

でも眠ったら落ちる。落ちたら痛いだろうな。

馬は見ると乗るでは凄く違う。

下から見ているときはそれほど思わないけれど乗ると地面からの距離はかなりある。眠気を殺そうとごしごしと目を擦った私に「落としたりしませんよ」と声が掛かった。その声に許しを得たようにうとうとと私は舟を漕ぐ。

後編

—— ……そして帰宅、就寝前…… ——

途中、はしょったのか行きより随分早く辺境の町へ到着した気がした。町に入ると家に明かりが灯っているところも少なく、しんと静まり返っている。

馬を厩舎へ戻す為、裏へまわるとブラックは短く嘆息した。眠い目を擦りながらどうしたのか聞くとブラックは尚も溜息を重ねる。

「嫌な訪問者です。もう少しここで時間を潰しましょう」

「あふ、折角時間が合ったんだから、会ってあげれば良いじゃない。私先に中に入ってるから」

水を飲んでいた馬にありがとうと告げたあとそう答えた私にブラックは、えー、と不満を零す。

「きつとマシロも会いたくない人だと思いますよ？」

「……？ 私そんなに人の好き嫌いないよ」

首を傾げたが訪問者を確認して納得した。

その存在だけで私の体感温度を数度下げてくれる人物。蒼月財団々長レムミラスさんだ。ブラックがいった通り、玄関先で鉢合わせた私はそつとブラックの後ろに隠れる。

既に見付かっているから無意味だけど、苦手なんだよね。あの冷たい目。眼鏡の奥から冷徹ビームとか出そうだよ。

「随分と仲がお宜しいんですね？」

私への嫌味も忘れない。

「それで、こんな時間にどいう用向きですか？ 種の売買以外なら帰ってください」

冷たい放つブラックにレムミラスさんはご挨拶遅れてすみません。と深々と頭を下げた。そして顔を上げて早々仕事内容を語る。

「不穩分子が今夜ある場所に集まっているので」

「お断りします」

「は？」

最後までいわけなかったブラックに、レムミラスさんは声を裏返す。

かなり虚を突かれたのか刹那姿勢が崩れた。

「さつきもいったでしょう？ 種の売買以外は今夜は受けません。明日以降にしてください」

「何故です。今なら一掃出来るのに！」

話の内容から多分、というかほぼ間違いなく誰かを消す依頼だろう。それにあっさりノーを出すブラックにレムミラスさんは本当に分からないという風に首を振る。

「そんなもの決まっているじゃないですか。私はこれからマシ口を抱くんです」

「は？」

私も、は？ だ。ですから……と、重ねそうだったブラックの腕を容赦なく抓った。

「あ、いたた、ちょ、マシロ、抓らないで下さい」

ブラックの泣きにとりあえず手を離すと、ブラックは兎に角と口火を切ってお断りしますと重ねた。

「この程度で私の業がどうにかなるとは思いませんが、マシロに触れる日だけは手を汚さないと決めているんです」

今夜、例外を作ることになりそうですが……と、続けて、ふっと手を上げるとその手には銃が握られていた。

銃口は真っ直ぐレムミラスさんを見据えている。

ブラックはいつだって本気だし今もきつと彼が引かないようなら、あっさり彼に向けた引き金を引くだろう。

レムミラスさんは憎々しげに私を見たあと、はあと嘆息し「分かりました」と頷いた。

去っていくレムミラスさんを少しだけ見送って家に入った。

「マシロは少し休みますか？ 疲れていますよね。私は傀儡の様子を見てから休みます」

そう促されて私は素直に頷いた。眠気はすっかり失せていたから先にお風呂に入ることにした。なんとなく……今はブラックを一人にしたほうが良いような気がして……。

「……………」

ゆっくりと固まった筋肉を解して上がると、まだ書斎に居るだろうと思っていたブラックはベッドにごろりと転がっていた。濡れた髪を拭きながら顔を覗き込むと眠っているようだ。

……………

私はベッドの端に腰掛けて、ブラックのほうへにじり寄ると顔に掛かっている前髪をそつと梳いた。そして、ブラックの言葉を思い出す。

正直いうタイミングはどうかと思うけれど、そんな風に思ってくれていたのは嬉しいような呆れるような……どうともつかない感情に私は苦笑する。

私はブラックが思っているほど上等ではないと思うし、決して良いとは思わなければブラックの仕事についても理解しているつもりだ。そしてそれをブラックが好き好んでやっているわけではない、ということもちゃんと分かっている。

静かに眠る……というかきつと起きていると思うけど、ブラックにそつと口付ける。すぐに離れるつもりだったけれど予想通り起きていたブラックに捕まる。

黒曜石のような綺麗な瞳が外から差し込んでくる月の光を映して煌いている。

その瞳に映る私はとても普通でなんだか申し訳ない気になるし恥ずかしくなる。だから無言に耐えかねてどうしたの？ と、問い掛

けるとブラックはふつと息を吐いて「なんだか……」とぼろぼろと零すように口にする。

「傷付いているような気がします。マシロ、慰めてください」

普段なら絶対に聞かないお願いだ。聞く必要も無いと思うだろう。でも、なんとなく今夜は私がブラックを甘やかせなくなった。

「良いよ」

ブラックも意外だったのだろう私の答えに刹那驚いたようで、それがとても可愛かった。

ブラックの顔の両脇に肘をつき指先で前髪を上げると、一度視線を絡めてからいつもブラックが私にそうしてくれるように、額に口付け、瞼、頬、鼻先と順に降りてきて、そのあとそつと唇を重ねる。最初は軽く啄ばむように重ねて、僅かに開いた唇の奥にそつと舌を侵入させ歯列を撫でる。

ゆるりと身体に回されていたブラックの腕が、私の身体を撫でるのに合わせて口付ける角度を変える。

「……っ」

僅かに息を詰めたブラックに苦しかったかな？ と、離れるとすぐに駄目だと引き戻された。

歯がぶつかってしまったのも気にせず、深い口付けを続けると私からやったはずなのにいつの間にか私のほうが組み敷かれていた。

あれ？ と、思った私に気が付いたのか、ちゅつと可愛い音を立てて離れるとブラックの妖艶な笑みが向けられる。

「今日は怒られてしまったので、我慢しようと思っていたのですが、無理・みたいです」

いって首筋に顔を埋め「マシ口でしょう？」と舐めたあと強く口付ける。

ちりつとした痛みが走って、心臓が跳ねる。きつと所有物の証のように赤い華が咲いているだろう。

昨夜は昔の夢を見た。

今夜はきつと貴方の夢を見る……。

—— ……眠らせてもらえれば、きつと……ってあ、れ？
なんだか私猫に飼われている気がしてきた……？

後編（後書き）

リク的なものを書いてもらえたのが嬉しくて、勢いづいて手がけてしまいました。

登場人物が極めて少ない番外編。休日をぼつさり過ごしてみましたが、楽しんでいただけたでしょうか？

もし一人でもそう思っていただけなら、幸いです。

番外編は今のところあと一本用意してあります。良かつたらお付き合ってくださいね^^

(1)

それは一つのお届け物から始まった。

「はい。ご苦労様」

いつもの配達屋が幾つかの荷物を持ち込んだ伝票にサインして見送ったあとマシロは荷を確認した。

一つは在庫が切れかけていた薬瓶などの類。もう一つはアリシアのハーブ園から届いた紅茶。薬瓶の類は店の奥の調剤室へと運び、紅茶の缶は二階のキッチンと一階のミニキッチンにも運んだ。

最後の一つの包みもアリシアからのものだった。

マシロは何の疑いもなく箱を開けると中には瓶と手紙が入っていた。瓶を取り上げると色とりどりの可愛い飴が入っている。

マシロはうんしょと瓶の蓋を開けて、一つパクリ。パッションフルーツっぽい味がするなと思いながら手紙も開く。

「ふー……ん、っと、何々、いつもお疲れさま。はい、お疲れさま。今日はとても面白い魔法食が手に入ったのでお裾分けします」

マシロは首を傾げつつ唸る……魔法食？ 魔法食というと確か魔法石みたいに魔法的效果を含んだ食材とかそういうのをいったはずだ。ということは、この飴がその魔法食なのだろう。

マシロはもう一度瓶の中身を明かりに掲げてみる。色とりどりの飴は光を反射してキラキラしている。

「フツのキャンディー以外の何ものでもなさそうだけど」

そして手紙の続きを読む。

「この飴は……ああ、やっぱりキャンディーなのは正解なわけね」

頷きつつ、マシロは続けて目を通し、やや黙したあと慌てて口を押さえるときよろきよと口の中のものを吐き出す先を探した。

—— …… カランカラン

「今日も相変わらず暇そうだな。エミルがサボりに来てないか？」

いつもと変わらない調子で遠慮なく店の扉を開きやってきたカナイはカウンターの奥で出たり引つ込んだりしているマシロの頭を見て眉を潜め「何やってるんだ？」と歩み寄った。

よいしょとカウンターに腹を預けて覗き込むと奥でマシロはしゃがみ込んでいる。首を傾げて「おい」と声を重ねるとマシロはばたと手を振って何かを拒否しているようだ。

「その声は、カナイね。いいい、いらっしやい」

「あ、ああ」

「良い子だからそのまま回れ右して帰って」

「は？ 何いってんだよ、どこか調子悪いのか？ 腹でも痛いんだったら……」

マシロの不可解な台詞に素直に眉を寄せて問い返すカナイにマシロは良いから帰れと重ねる。重ねたのに、カナイはあっさり無視し

てマシロの頭頂部に手を置くとうぐいつと顔を上げさせた。

「だ、ダメっ」

マシロの忠告も空しく目が合ったとたん、目をあけていられないほどの光が走った。反射的に二人とも目を固く閉じる。

どのくらいそうしていたか定かではないが、カナイは徐々に戻ってきた視界に目を擦り、ふらりと立ち上がる。きよろきよろと辺りを見回すと行きつけの薬屋だ。不思議なのはさっきまでカウンターの外に居たはずなのに、立ち上がるとカウンターの内側に居て……

—— …… やけに、視界が低い

ことだ。そして、目の前に居たはずのマシロの姿はない。

「おーい、マシロ？　っ!!」

自ら発した声に驚いて慌てて口と喉元を覆う。

「あ、あー、あー……」

—— …… 俺の声じゃない……。

カナイは突然襲ってきた事実困惑しつつ、店主を探す為にきよろきよろと辺りを見回し、はたと通りに面したウィンドウに映る姿に愕然とした。

視界が低いのも声が妙なのも、直ぐに得心がいく。

しかし、納得はしたものの一番納得出来ないのは、どうしてこん

な事態になったのか？　ということだ。カナイはふとカウンターの上に広げたままになっていた手紙と瓶を見つけて手に取った。マシロが今しがたやったのと同じように多少の罪悪感を覚えつつも手紙に目を通す。

そして最後まで読み終えて、くしゃりと手紙を握り潰した。

「――　……口に入れて食べているときに最初に目が合った人と入れ替わるも、の……です……」

ということは何が変わるのか直ぐに分かる。中身だ。

「俺がマシロで……マシロが、俺……？」

分かった。それは分かった。いや、分からない。なんでこんな変なものあいつは口に入れていたんだ。絶対この手紙を読む前に口に入れてそのままこれを読んで……

「ありえねえ……」

でも想像付くその姿にカナイはカウンターに突っ伏した。

確かに魔法食には失敗なのか成功なのか何の冗談なのか分からないようなものも多々ある。一部を除いて悪戯みたいなものだ。

それで？　どうしてマシロ、いや、俺か？　はここに居ないんだ

……もしかしなくても普段押さえてる魔力が暴走したんだろうな――
……変なところに飛ばされてないといいんだが。

はあと重たく溜息を吐いたカナイはとりあえずとカウンターを出ると店の看板をクローズに裏返した。

一番飛ばされている可能性があるとしたら一番良く行くところだろうから……とりあえずは城に戻るのが無難だろうかと首を捻り、カナイはカウンターに出しっぱなしになっていた諸悪の根源を仕舞いこんだ。

「マシロちゃん、今日は閉店かい？」

先回りして看板は返したものの鍵を閉めるのは忘れていた。申し訳なさそうに扉を開いてそう声を掛けてきたのは腰の曲がった老女だった。

「すみません。今日はとても大切な用事が出来てしまつて……」

とりあえず当たり障りない理由で客には帰つてもらわないとカナイは僅かに開いた扉から顔を覗かせていた老女に歩み寄り扉を支えて謝罪した。老女は「そうかい、そうかい」と頷いて相槌を打つたものの話を続ける。年寄りには決まつて人の話を聞いているのかどうか微妙なところがある。

「この間のね、薬が良く効いてね。ここまで歩いてこられたんだよ。だからね、また作つてもらえないかと思つてね」

ということとは足とか腰の何かだろうか？ 店の顧客情報まではさっぱり知らないが、あまり客が居るとは思えないこの店に来るくらいだから容姿とか教えれば、あとでマシロに話は通じるだろうかとか考えつつカナイは唸つたあと

「今日は無理だけど、近いうちに届けるから、ごめんね？」

こんな感じだろうかとりあえず手探りで返答してみる。老女は

「そうかい、そうかい」とまた頷いてゆるい動きでポケットを探ると幾枚かの銅貨を差し出した。

「えっと、お金はあとで良いよ」

「でも、マシロちゃんこの間は『効くかどうか分からないから効いたときに良い』っていつてくれただろ？」

こいつは商売する気が有るのかとカナイは呆れた。

「良く効いたから、これは御代。足りなかったらごめんよ？ また、次のときになんとかするから、それで良いかい？」

自分ならほぼ確実に答えはノーだが、マシロなら間違いなく

「良いよ」

と答えるだろう。

カナイは老女から銅貨を受け取って老女を見送った。じゃらじゃらと手の中で転がした銅貨は暖かい。きっと大事に握っていたのだろう。カナイは、ふっと息を吐いたあとそれを仕舞って改めて出ようとしたらまた扉が開く。

この店の閉店表示は無意味なのか！ 苛々と扉を振り返ると

「あれ？ 今日はもう閉めちゃうの？」

エミルだ。

こいつこんなに変力だったのか。見慣れた姿を見上げてカナイは「サボリ？」と口にした。

「え？ 違つよ。サボってないよ？ うん。多分」

絶対、サボつただろ。今頃城ではきつと帝王学とか叩き込もうとしている教師陣が探している。そして、アルファや自分に泣きついてくるのだらうと嘆息した。

「んー……」

そんなことを考えているとエミルがまじまじと顔を覗き込んでいた。それに気がついて弾かれるように後ろに身を引くとエミルは姿勢を正して顎に手を添えて何か考えるように曖昧に口にする。

「髪型……も、変わってないよね。口紅の色とかも変わらない、よねえ？ 服もいつもと同じ感じだと思うし……なんだろう？ マシロ、何か変わったことがあった？」

中身が違つんだよ。即答したかったが、刹那伝えることに戸惑いカナイは首を振った。

「そんなことより、カナイ見なかった？」

「え、カナイ？ カナイだったら城に居たよ？」

その答えにカナイはほつと息を吐く。思っていたより直ぐに見付かって良かった。エミルはそんな姿に不思議そうにしつつ「何か用事？」と加えたあと話を続ける。

「魔法具管理部の人たちに連行されていたから、暫らくは解放されないと思うよ」

「魔法具っ！ー！」

全然良くなかった……。

(2)

マシロはまだぐらぐらしていた頭を振ったあと辺りを確認する。

「この装飾過多な雰囲気からして城ね」

そして同じように口から出た声に眉を寄せ、視界の高さに驚いたあととりあえず、部屋の中にあつた鏡に姿を映す。

「……本当の話だったんだ……」

呟いて溜息。

それにしても、なんで城になんて飛ばされているんだろう？

そんな効果は手紙には書いていなかった。城内の地理にマシロは全く明るくないが、壁とか柱とかは別としてその他の調度品のシンブルさからいってほぼ間違いなくカナイの私室だろう。

勘の良いカナイのことだから、きつとこのことに気がついて迎えに来てくれるはずだからあとはここでのんびり待つていれば良い。

そう思ったのに、突然のノックの音にマシロは肩を強張らせた。でも居るのに居ないフリは出来ない。マシロは恐る恐る扉を開いた。扉を叩いたのは二人の青年だった。部屋主の姿を見つけてあからさまにほっとしている風だ。

「カナイ様。お部屋にいらしたのですね。城外に出られたという話

も耳にしていたので、居ないのではないかと冷や冷やしておりまして」

「え、ああ、まあ」

実際は出掛けていた。というかこの様子からしてサボりにきたのはカナイだったのではないかとマシロは嘆息する。

そして、こちらへどうぞと続けられ、断る台詞すら思いつかなかったマシロはそのまま二人のあとに付いていく。その途中でエミルの姿を発見して「エミル！」と声を掛けると、こちらに気がついてくれたのに「頑張つてね」と手を振られただけだった。

その姿が若干挙動不審に思えたマシロは、あれはほぼ確実に抜け出すつもりだと悟った。

連れてこられた先は城からは少し離れた棟だった。

「こちらに集めておきましたので、エミル様周辺の魔法具の点検と魔力の補填をお願いいたします」

と一室に押し込まれた。

あのっ！ と声を掛ける隙もない。

「……点検つてことは危険そうなものがないかチェックしろつてことよね。あと、魔力の補填つて、どうするんだろっ？」

とりあえず広い机の上にマシロにとって用途不明そうなものが、山と摘まれているのに歩み寄るといくつか手にとって首を捻る。

「そんなに、急ぎの用事なの？」

渋々といった風に来た道を一緒に戻るエミルに問い掛けられカナイは頷いた。カナイはどうせ始めれば直ぐに終わるからと後回しにしていた仕事を、待ちきれなくなった連中が自分を捕まえにきたのだろうというのは直ぐに分かったようで、エミルが店で一息つく間もなく店を出た。

大股で息が上がりそうなほど急いでいるというのに……

「遅い。足が短い」

ぼやいた。

「あ、ごめん。足速かったかな？」

エミルの的外れな謝罪にカナイは首を振り、嘆息する。エミルは自分と違ってマシロの歩幅に合わせて歩いている。だから気にする必要はないのだが、よくよく考えると自分はマシロに頻繁に歩くのが早いと怒られていた。確かに、このリーチで自分たちに合わせて歩くのは辛いかもしれない。ほんの少しだけ反省したが今欲しいのはスピードだ。

魔術もつかえないこの身体は物凄く不便だ。

「今日は無口だね？」

「は？ いや、そんなことは」

ある。非常に在ると思う。が、隠すことなのか隠さなくて良いことなのか良く分からない。良く分からないイコールばれないほうが

良いだろう。そう判断して出来る限りぼろが出ないようにしているつもりではあるのだが……カナイは居た堪れず「走る」と口走って最終的には走った。

—— ……お、遅い。

自分も運動が得意というほうではないがマシロはもっと不得手らしい。直ぐに、息が上がって、喉がゼロゼロいう。

「えーっと手でも引いたほうが良いかな？」

エミルは口にするのと同時に、カナイの手をとってとっと走り始めた、殆ど引きずられるようにそれでも自力だけで走るよりは早く王宮に向かっていた。

「そんなに急いでるなら馬車でも捕まえれば良かったね」

王宮の門を潜ったところまで全力疾走したエミルは、少し上がった息を整えながらそういつて微笑む。確かにその通りだ。

普段なら絶対に思いつくようなことに、きっと天パってるか、マシロ脳が馬鹿なんだ。カナイは勝手にそう決め付けて「もう、良い」と首を振った。走りすぎて喉から血の味がする。

門を潜って城までは馬車を使うと中は何か慌しかった。エミルは急いでいる風な衛兵を一人捕まえて何事か訪ねる。

「ああ！ エミル様！ ご無事でしたかつ？ 今皆で探しておりま
した」

「何事？」

「分かりません。分かりませんが、魔法具管理棟の一角で爆破が起
きて内部テロではないかと」

「違うつ！」

動揺している衛兵の台詞をカナイは途中で切った。驚いた衛兵を
無視してエミルの前に回りこみ両手を取って

「話はあとでちゃんとするから！ マシロはもう走れない。管理棟
まで頼む！」

懇願した。

エミルは刹那驚いた顔をしたものの「良いよ」と頷くと

「ようするにマシロを管理棟まで運べば良いんだよね」

と纏めてひよいとカナイを抱え上げて「走るから舌を噛まないよ
うに、しっかり掴っててね」と注意して止める衛兵を無視して走っ
た。

「運べたっていったけど横抱きじゃなくても」

「舌噛むよ」

カナイの抗議はあっさり却下された。

「あつれー？ エミルさんにマシロちゃん、何やってるんですか？」

カナイは無性に恥ずかしいのと不安定なので、不本意にもエミルの首にしがみつきこんなところ誰にも見られたくなくて、額をエミルの肩口に押し付けた。

カナイの努力むなしく悪目立ちしていることに本人はきつと気がつかない。

とつとこ走っているエミルたちが城を一旦抜けたところで合流してきたのはアルファだった。アルファこそどうしたのかと訪ねるとニコニコ顔で答える。

「何か管理棟でカナイさんが面白いことになっているらしくって、見物しに」

「お前は鬼かつ！」

思わず叫んだカナイにエミルとアルファはきよとしたが、直ぐに騒ぎの起こっている管理棟に到着した。

そして現場は騒然としていた。騒然としていて本当に面白いことになっていた。

「大丈夫ですよ、カナイ様」

「そうですよ、お気になさらないで下さい」

「で、でも、いったい壊して、皆怪我して……私も怪我した、絶対怒られる。ごめんなさい」

駆けつけていた救護班の女性に囲まれてカナイは泣いていた。大泣きしていた。

「だ、大丈夫ですって、怪我人は埋もれている人はまだ確認出来て

いませんが他の方は皆自身で結界など張って無事だったようですし、どちらかといえばカナイ様が一番の負傷者かと……」

「そうですね、その怪我もわたくし共がきちんと治しますし、壊れた棟も大丈夫ですよ。宮廷術師は皆優秀ですから直ぐに元の姿に戻してくださいますよ」

そして、慰められていた。

その様子にうわ……と固まっていた三人の中で一番に我に返ったのはカナイだ。カナイはエミルに抱きかかえられたままの状態から暴れて降りると、大股で救護班を掻き分けて自分の傍に寄ると、がつんと拳骨一つ落とした。

ひつくひつくと泣き止みかけていた涙がカナイの姿を捕まえて再び溢れ出す。

「カナイ遅いよーっ!」

「もう、それ以上俺の格好で恥を晒すのは止めてくれ。とりあえず、泣くな」

カナイは、はぁと重たい溜息を吐きマシロの足元にしゃがみこんだ。

「泣きたいのはこっちだよ……本当、どうして慣れない身体で魔力とか使うんだよ。俺の力が半端ないのくらい知ってるだろ……本当、勘弁してくれよー……」

頭を抱え込んでぶつぶつ零すカナイの傍に歩み寄ったエミルに顔を上げると、嘆息して立ち上がり

「エミル……頼むから一生のお願いだ。かん口令を敷いてくれ」

と願い出た。エミルは首を傾げつつも空気を察してくれたのか、頷いて辺りに集まっていたものの全員にかん口令を告げた。やや辺りはざわつきはしたものの第二継承順位の王子の命令だ従わないはずはない。

そして跡始末を任せると、ヘタレているカナイ、もといマシロの腕を引いて場所を変えた。

(3)

あまりに城内はざわついていたので裏から馬車を手配しそれでマシロの店まで戻ることにした。その車中……大きな身体を小さくしていたマシロと小さな身体で居心地悪そうにしているカナイにエミルは説明を求めた。アルファは笑うのを我慢するのに必死みたいで、管理棟についてからずっと涙目で口元を押さえている。

「お前説明……出来そうにないからやっぱ俺がするしかないんだよな……」

はあ、と嘆息してカナイがことの次第で分かっているところを二人に説明して聞かせた。エミルは少し吃驚していたようではあったが特に動じた風もなくなるほどと納得してくれたようだ。アルファは堪えきれないのかマシロたちに完全に背を向けてしまった。

「じゃあ、その魔法食の効果が切れれば二人は元に戻るんだね？」

どのくらいなの？ と重ねたエミルにカナイは、もう数え切れないくらい吐いた溜息と共に「丸一日」と答えた。

「ふーん。分かった。それじゃあ、次はカナイ……じゃなくて、マシロなんだよね？」

戸惑いながらマシロに声を掛けたエミルにマシロはこくこくと頷く。少しまだ目が赤い。

「どうしてあんな騒ぎになったの？」

訪ねられてまたじわりと涙目になったマシロにカナイは泣くなど突っ込み、我慢し切れなかったアルファは、ぶふつと噴出した。

「城では冷静沈着だなんていわれ、て、る……くくつ、カナ、イ、さんが、泣いてる」

「アルファ黙れ！」

「あ、はは、ごめ、マシロちゃんに、あはは、カナイさんか？ ああ、もう、わけわかんない、はは、怒られちゃったよ」

喧嘩の内容はいつもとあまり変わらないが、実際見た目ではマシロとアルファがいい争っている姿は珍しい。エミルはその姿に短く息を吐いて続きを促すようにマシロを見た。マシロはぼそぼそ話を始める。

「お城の人に、あそこに連れて行かれて、魔法具の点検と魔力の補填を頼まれたの。よく分からなかったんだけど、でも、頼まれた以上何かしないといけないかなと思って……」

「魔法具との相乗効果かな？ それで大爆発になっちゃったんだ？」

妙に得心が行ったようにそういつて微笑んだエミルにマシロは「多分」と頷いた。

「それで、凄い大騒ぎになって私流血しちゃってるし、瓦礫に埋まってる人が居るとかいいうし全部壊れちゃって、私どうしたら良いか全然分からなくなっちゃって……」

息を詰めながらそう説明するマシロに騒いでいたアルファもカナイも黙った。

「私の所為で誰かが死んじゃってたらどうしよう。私の所為で何か取り返しのつかないことが起こってたらどうしよう……私が、何の警戒もしなかったから、あんな悪戯グズみたいなので……こんな大騒ぎになっちゃって……ごめ、ごめんなさい……」

ひ、うつと結局また手首の内側辺りで涙を拭いつつ泣き出したマシロにカナイも怒る気力が失せる。それに、昔の自分を見ているようだ……加えて、自分が泣いている姿がこんなにみっともないとは思わなかった。思わなかったから

「泣くな」

ぐんつと腕を伸ばして頭に手を乗せるとわしわし撫でた。

「とりあえず、泣くな。元に戻ったら、何とでも始末つけてやるから。あの程度で宮廷術師は死なねーよ」

「……本当に？」

「死なない死なない。それよか、俺は自分の身体が心配だ。どこか動かないところとかないのか？ 洒落にならないほど痛むところとか」

「わかんない、いろんなところが痛い……」

「うわあ、マジで？ ……まあ、良いか。お前んち薬屋だもんなんとなかなるか」

はあ、と長く息を吐き出したカナイにマシロは力なく頷いた。その様子を見ていたアルファは「いつてることはいつも通りな感じですけど……なんというかこう、物凄い違和感が……」とちよつと引いていた。

「僕なんてあまり考えたくないけど、カナイを抱っこしてたんだよね」

ぼつりと零したエミルの台詞が少し泣けた。

(4)

店に戻ると二階でエミルが怪我をしているカナイの身体の傷を診た。

「打撲と切り傷くらいだよ。額を少し切ったから出血量が多少多かっただけで、心配しなくちゃいけないような怪我はないと思う」

額にガーゼを貼って包帯を巻きながらそういったエミルにマシロはこくと頷いた。

「それで？ 二人は今夜どうするんですか？」

「気になるから、僕も一緒に居てあげたいけど」

「エミルさんは駄目です」

ぴしゃりとアルファに釘を刺されて、エミルはそうだよな。と、

苦笑する。

「カナイさんは部屋でも謹慎してるといえば、どうとでもなると思いますけど……エミルさんは、上に適当ないい訳しとかなないと拙いです」

尤もといえば尤もなことを口にしたアルファを、こつん、と軽く叩きエミルは「いい過ぎ」と小さく呟く。その声にアルファは「あ」と何かに行き着いたのか、申し訳なさそうに俯いてしまっているマシロを見て小さな声で詫びた。

微妙な空気になってしまった一同の雰囲気は一瞬にして払拭される。

「マシロー。今日も良い子にしていましたかー？」

——……ぎゅっ

何の予告もなく、ふつとカナイの背後に現われたブラックに抱き締められ、カナイは素っ頓狂な声を上げた。その声に驚いたブラックは、腕を解いてマジマジとカナイを見たあと「ブラック……」と傍で呟いたマシロを見た。

そして、やや黙したあと、ふーんと頷いて「面白いことになってますね？」と微笑んだ。

「面白くない！」

とハモったマシロとカナイにブラックは真剣な顔で続ける。

「困りましたね。私は今日マシロと湯浴みをも思っていたのですが、マシロが中身のカナイと入るか、カナイが中身のマシロと入るか、物凄く難しい問題です」

というか、カナイ殻と入っても面白くないですね。だからといってここでマシロを脱がせると、カナイにまでマシロの肌を晒していることになるわけですし……ぶつぶつと続けて「ああ」と苦悩するブラックに

「どっちも入るわけないでしょっ!!」

条件反射的に手を振り上げたマシロの手をブラックは軽く避けて、パシリと受け止め

「マシロに殴られるのは気になりませんが、カナイに打たれるのは

ちよつと嫌です」

にこりと告げる。俺の格好で女言葉は勘弁してくれと泣きが入ったカナイを他所に、うつつと唸ったマシロにブラックは軽い調子で問い掛けた。

「それで、どうしてこんな面白い流れになるんですか？」

そして一度説明する為に一階に降りたマシロは例の飴と手紙を持って戻つてくると、事の次第を説明した。面白そうにマシロの話を聞きながら瓶を眺めていたブラックに頃合いを見計らってエミルが問い掛ける。

「今日城であつた騒ぎを知っている？」

その問いにマシロの肩がびくりと強張り、苦悶に満ちた瞳が不安に揺れた。ブラックはその様子を眺めながら「外見がカナイでも、中身がマシロだと何となくマシロに見えてきますね？」としみじみ口にしてからエミルの問いに頷いた。

「それが管理棟崩壊の件だつたなら知っていますよ」

「死傷者は居た？」

「居ないですね。面白いことがあつたからと呼びつけられただけで別に種の回収に行つたわけではありませんから」

仕事のことを問われて素直に答えるのは、とても稀有なことだが簡潔にそう答えて肩を竦めたブラックにマシロは、ほっと息を吐いた。その様子にエミルも頷き「ほらね？」と微笑む。

そして、かなり面白い像が残っていましたが……と、切り出したところでアルファが思い出したのか、ぷつと吹き出して皆に背を向けて笑いを必死で殺していた。

「あれは、マシロが泣いていたのですね？」

だとしたら遅くなってすみませんでした。と、続けてそつとマシロの頬に触れる。ブラックが距離を詰めそうだったので、カナイが慌ててブラックの肩を掴んで「それは俺！」と引つ張った。

「あ、そうでした。私に男を抱く趣味はありません」

「ああ、そうだな。俺も抱かれる趣味はねーよ」

「マシロの姿でそんな言葉遣いしないで下さい」

「そう思っんなら何とかしろよ」

普段ならほぼ同じ目線の相手をこんなに見上げて喋らないといけないというのは、かなり違和感がある。カナイは素直に嫌な顔をして尚もブラックを睨みあげた。

「私からもお願い。幾ら明日元通りといっても、戻れるなら早いほうが良いよ」

「……カナイの女言葉もちよつと」

これは全員にほぼ同時に突っ込まれた。

ブラックは二人を順番に見たあと、そうですねーと考える素振りをして「出来なくはないですけど」と前置き予想の範疇の台詞をにこりと口にした。

「私のお願いも聞いてくれますか？」

「……お風呂なら一緒に入らないよ」

やっぱりそれだったのか、あっさり拒否されてブラックはしょぼんと耳を下げた。かなり下の位置に来ている尻尾をゆるゆると揺らしながら「――……どうしてですか？」と問うけれど、にべもなく切り捨てられる。

「……は・や・く・戻して」

暫らく睨みあつたが、結局折れたのはブラックだ。盛大に残念そうな溜息を吐いて、分かりました。と頷いた。

「折角ここに来たというのにこれではマシロを抱き締めることも出来ませんし、要するに入れ換わる直前まで二人の時間を回帰すれば良いでしょう」

そう簡単に口にしたブラックはマシロとカナイを招き寄せて正面に立たせるとそれぞれの額に手のひらを押し付けて、目を閉じると暫し黙した。

その瞬間、ぴんつと辺りの空気が緊迫したのが伝わる。

「マシロ、荷が届くのはいつごろですか？」

「午後のティータイムのあとくらいだよ」

では、五時間ほど遡りますと宣言したあと直ぐに飴の効果が出たときと同じ光が弾けた。

(5)

その眩しさに目がチカチカして、マシロがよろめくと、そっと慣れた腕に助けられ反射的に礼を告げる。そして、あっという間に視界が戻ったその中で自分の発した声に素直に喜色を示した。

「戻ってる！」

「戻したんですから当然ですよ？」

「凄いよ！　ありがとう」

自分の身体に戻ったとたん降りかかってきた痛みに、大げさに反応しているカナイを無視してマシロは諸手を挙げて喜んだ。

「私は最初から凄いですよ。惚れ直しましたか？」

「ん？　別にそこは凄くなくても好きだよ」

つい反射的に答えてしまった答えがブラックの動きを止めたことにも気がつかず、マシロは「そうそう、カナイ」とカナイの傍によりおもむろにポケットを探る。

「マシロちゃんって、あれ天然なんですかねえ。あの闇猫が赤面してますよ？　気持ち悪い」

「……んー。そこはまあ、マシロの美点じゃないのかな？」

呆れたようにそう零していたアルファとエミルもカナイの奇声に二人を見る。

「変な声出さないでよ。ちょっとポケット探っただけでしょ？」

「探るなっ！　いえ、口でいえ！　出してやるから」

真つ赤になつて怒鳴るカナイを簡単に無視してマシロは、カナイのポケットから取り出した銅貨をジャラジャラ「カウンターにあつただけど、何のお金？」と転がした。カナイは、ああと納得して入れ替わつて直ぐに來た客の話をする。

「あー、クシュナさんところかな？ そつかー、足良くなつたんだね」

良かった良かったと頷いたマシロにカナイは嘆息しつつ眉を寄せ
る。

「でもそれじゃ何の薬も買えないだろ？ またあとでつていつては
いたけど、それで商売成り立つのか？」

カナイの尤もな意見にマシロはにこにここと氣にとめる風もなく答
える。

「あとつていつたんなら良いんじゃない？ それに、足が治らない
と動けないし動けないと仕事が出来ないでしょ。仕事が出来ないと
収入もないよね。そうなるとどうにもならないんだから、治るのが
先じゃない？ 順番的に」

正論ではある。正論では有るが実際にそれを通すような店は稀有
だ。

「それにね。お金はあるところには、いくらでもあるからそこか
ら貰えば問題ないつて助言してもらつたの」

ぼつたくりだ。それは明らかにぼつたくりだと。三人は助言した

のだろう猫に突っ込みたかったがブラックは軽く肩を竦めて「マシロが困っていたので助言したまでです」と悪びれる風は微塵もなかった。

疑問も問題も解決したところでぽんつと手を打ち「よし！」と頷いたマシロにどうかしたのかと続きを見守る。

「皆、お腹空いてるよね。折角だから何か作るよ。食べて帰る？」
「駄目ですつ。エミルさんと早く城に戻って跡始末をしないといけないので！ カナイさんは謹慎中ということにしまして上げますからご馳走になれば良いと思います」

あからさまに焦りを感じるアルファの台詞に素直に眉を寄せる。

「俺も管理棟の様子が気になるから」

「管理棟なら綺麗に片付いていましたよ」

まあ、邪魔なので帰っていただけで結構ですけど、と、カナイを落としてから一応助けたブラックにカナイは「そうだよなっ！ 邪魔だよなっ！」と爽やかに締めた。

「むー……。食べたくないなら食べたくないって言えば良いじゃん」
「マシロも疲れているでしょう？ それに気分も滅入っているでしょうし、外で食事にしませんか？」

につこりとブラックに促されマシロは渋々頷いた。

大通りに出るまでは全員でぞろぞろと歩いたがそこで別れた。

「明日、傷薬持っていくから」

そういつたマシロにカナイはいらないといい掛けたが、それを飲み込んで「ああ、待ってる」と答えて手を振ったのを見送ってから三人に背を向けて歩き出す。

暫らく無言で歩いていたがふとブラックが「先程の話しなのが」と問い掛けてきた。マシロは首を傾げて「何？」と隣を見上げる。ブラックはマシロを見ることなくいつもと変わらず夜空に浮かんでいる二つ月を見ながらぼつと続ける。

「マシロは私の何が好きなんですか？」

今更過ぎる質問にマシロは少し面食らったあとちよつと笑ってしまつた。

「地位や権力や富……全てを統べる力。私は全て持ってます。でも、マシロはあっさりそんなものなくても良いといいました。ですが、それを取ってしまったら私はタダの獣族で何の価値も無くなります」

笑ってしまったマシロに対し、ブラックは至極真剣だ。

マシロはそんなブラックの横顔を暫し見つめたあと、そつとブラックと腕を絡めて手を繋いだ。

「今更過ぎてすごく難しい質問だと思うんだけど、今は特に可愛いところかな」

「か、可愛いですか？ 私が？」

いわれることのない台詞にブラックは虚を突かれた。

「ええっと、それは耳とか？」

マシロが可愛いと興味を示すのはそのくらいだ。

「それもあるけど、それよりも今は、そんなことを真剣に考えて答えが見付からないから聞いてみよう！　っていうブラックの思考が可愛い。人の本当の価値なんて持つてるものとか、外側の何かじゃないことをちゃんと分かっているのに、それを自分に当てはめられないブラックがとても可愛くて、私は愛しいと思う」

くすくすと楽しそうに笑いながらブラックの腕を抱き締めたマシロにブラックは「はあ……」と曖昧に頷いた。

(6)

翌日、午後のティータイムに合わせて私は城へ入った。

最初は迷っていた城内もエミルの私室くらいまでは迷わずに到着出来る。門番さんや表の警備についている兵士さんとは顔見知りにもなった。迷えば道案内もしてくれる。

そんな城内をとりあえずカナイの私室は良く分からないから、エミルのところへ行こうと歩いていた私は、背後から激しく突き飛ばされた。

突然のことに、ふぎやっと可愛くもない声を出して床に膝を着く。

「わりい……」

ここでは不似合いな軽口での謝罪に顔を上げると、その先にはカナイが居た。

私は差し出された手を取って立ち上がると、丁度良かった。と、口にしたのにカナイは全然良くないのかじゃあなと早々に姿を消した。

慌しい……。

それを追いかけるように走ってきたメイドさんたちが、私の姿を見て急に足を緩め静々と私の前を軽く会釈して通り過ぎる。そして、距離をとるとまた走り出した。

私は首を傾げつつも、まあ、元気そうで何よりだということにして、エミルの部屋へ向かった。

丁度時間が良かったのか、エミルが私室でお茶を飲んでいた。いらつしゃいと招き入れられて私もエミルの傍に腰を降ろす。それほどほぼ同時にアルファも入ってきて私の姿を見つけるとニコニコ歩み寄ってきた。

「カナイさんならもう直ぐここに到着すると思いますよ」

お茶を用意してくれたメイドさんにお礼をいったあとアルファにそうなの？ と答える。アルファは円卓に着きながら頷いて楽しそうにしている。

「そういえば、カナイが思ったよりずっと元気そうだったんだけど。さっき擦れ違ったとき……というか、メイドさんに追い掛けられてたような気が……」

私が恐る恐る口にするとアルファが「マシロちゃんも見たんですねー」と笑った。そうか、間違いじゃなかったんだ。

「今朝からカナイは忙しそうだよ。朝は揉まれてたけど結局逃げたんだね」

エミルまでくすくすと楽しそうだ。どうなっているのか訪ねるとアルファが教えてくれた。

「なんかね、カナイさんが可愛いらしいですよ？ だから、我先にと皆がカナイさんの怪我の手当てをしたいらしくて……あんなに走ったり詠唱破棄で術使ったり出来るんだから、十分元気だと思うんですけどね？ カナイさんって結局どこにいてもモテるんですよ」

ね」

けらけらと笑いながら話してくれたアルファにエミルが付け加える。

「昨日の涙が効いたらしいんだ。女の子ってどの辺がツボに入るのが良く分らないよね」

というかそれが原因なら、また私の所為のような気がする。つか、城内も結構平和じゃないか……。

私は、今日も変わらず良い天気な空を仰いで、一息。そつと紅茶を含む。優しい香りは、ここでしか味わえないものだ。

—— ……いつものことだけど、貧乏くじはやはりカナイの十八番らしい。

(6) (後書き)

ご愛読ありがとうございました。そしてメリークリスマス。季節行事と全く関係ないものを平気でアップする私です。

毎度ながら気の毒なのはカナイさん。本日もいい感じで貧乏くじを引いてくれましたが、お楽しみいただけただけでしょうか？そうであつたなら幸いです。

それでは、皆さま良いクリスマスイブをお過ごしください。

(1)

私はここにきて有り得ないものばかりに出会ってきた。

有り得ない事件にも多々巻き込まれてきた。うん。だから、かなり順応力というものが身についているはずだ。身についていないわけない。

私は驚かない。

驚かないっていつてるじゃん。

—— …… 例え、己の身体が幼児化していても……。

「はあ」

私はクローゼットにある姿見に自分の姿を映して大きく嘆息する。昨日何か変なものを食べたっけ？ 何か変わったことやったっけ？ この間力ナイが小さくなったばかりだね。いやいやいや、以前ブラックも時間回帰したよね。で、今回もつて、他所でやってくれ、他所で……。

大体、これ誰得？

ま、まあ、きっとブラックがこのくらい何とかしてくれるよね。うん。きつと……というか今日来るのか？

「マシロちゃん、また鍵閉まってませんよー」

—— …… がちゃ

「…… あー、ごめん」
「えっと、えっと……えーっと？」

今朝も朝ごはんの時間ですよーと誘いに来てくれたアルファは、遠慮なく私の部屋の扉を開けた。そして戸口で私と部屋の位置を確認したあと混乱しているようだ。意外と普通の反応でありがたい。

「お客さん」

「マシロちゃんです」

「あー……オカシイな。朝走ってきたところなのに、まだ目が覚めてないみたいだ……」

「大丈夫。おかしいのは私です」

はっ！もしかしたら、カナイでなんとかなるかもしれない。なんといいっても天才魔術師でしょう。

「カナイは、まだ部屋？」

頷いたアルファを追い越して、私はアルファたちの部屋へ乱入した。

即、退出した。

カナイのセクシーショットを見てしまった……。

「着替えがまだだっと思いおうと思ったんですけど」
「うん、ごめん。ばっちり目が合った」

がつくりと、私が肩を落としたところで「あれ？」ともう一人の声が聞こえる。

「どこの令嬢？」

私のどこらへんをみて”令嬢”なんて単語が出てくるんだろうなあ。顔を上げればエミルと目が合つて、エミルは、え……と顔を強張らせて止まった。

何？ 推定四もしくは五歳児くらいになつてしまつてゐる以外は変わりないと思うけど、どうか変？ 声も子どもっぽい感じになつてしまつてゐるけど……

「マシロの子どもっ？！」

「そんなわけあるかっ！！」

反射的に突つ込んでしまつた。

「え、でも、そっくり……ああ、従姉妹」

ぼんつと手を打つてもその答えはないだろう。エミルが天帕つてゐる。異世界人の私の親戚がこんなところにいるわけないのに。

「部屋の前で朝から騒ぐなよ……それより、なあ、さっきちびっこのが乱入してきたんだけど、どこのガキ？」

ガキで悪かつたわね。

「なんかマシロちゃん本人らしいですよ？」

開けたドアから顔を覗かせていたカナイは、こつちこつちとアルファに下を指差されて視線を落とした。そして、私のところでぴたりと止まる。

「――……何食ったらそうなるんだ？」

食べ物限定っ？！ 食べ物限定なのっ？！ カナイはよっこいしよと扉に挟まれつつ私の前にしゃがみ込んで顔を覗かせる。

「別に変なもの食べてないよ」

「ふーん」

僅かに睨みつけるように目を細めたあと、ぴっ！ と人差し指を立て、続ける。

「じゃ、ちょっと上向いて、下向いて、横向いて、くるっと回って腕上げて」

思わずいわれたまま指の動きに合わせて、回るところまでやってしまった。

そして腕を上げたところで、目の前のカナイの頭頂部にぐんっ！と落とした。

「おお、マシロちゃんだ」

アルファのその確認基準も問質したい。

「べ、別に魔力的なものは感じない。やっぱり、なんか食べたか、変なもの身につけてるんじゃないのか」

ワザとらしく私が殴ったところを押さえてそういったカナイが、手を伸ばそうとしたところで私の視界は、ぐんっ！ と上がった。

「駄目だよ、カナイ。可愛いからって、手を出そうとしちゃ」

「ちょ、エ、エミル、高い！ 怖い！ 降ろして」
「落とさないけど、暴れないで」

エミルにひよいと抱き上げられて、いつもよりも高い視界に緊張し、物凄い近いエミルの顔にドキドキする。

慌てて、エミルの首にしがみ付き、改めて、睫毛長いなー、鼻高いなー……肌綺麗だなあ……ってそんなところ見てたら、目が合ってしまった。恥ずかしい！ 頭の天辺から湯気でも上がりそうだ。

「魔術系でもなくて、魔法具でもないんだったら……あと病気？」

一体どんな奇病だ。私はもうわけも分からない脱力感に襲われて、エミルの肩口に頭をこてんと預ける。それにあわせて、よしよしと頭を撫でられると、凄く心地良い。

感覚までお子様になってしまっているのだろうか？ もう、どうでも良いや。どうでも良いから

「カナイー、ブラック呼んで」

神頼みならぬ、黒猫頼みだ。私の気だるい台詞にカナイが「ああ」と今更気がついたように、腰をあげた。

「ていうか、お前こそ連絡方法くらい用意してないのかよ」

「してないよ。大抵ふらつと来るんだもん。ケータイとかもないしさ」

「は？ 何携帯すんの？」

話がかみ合わない。

「とりあえず、中はいりましょう？ どうせ、もう今日は授業休ん

で良いですよ。『ご飯貰ってきましたよー』

ちよつと静かだと思ったら、アルファはちゃっかり朝食ゲットしてきていた。

確かにそろそろみんな朝食やらで、出てくる時間だ。こんな姿勢わけにはいかない。

アルファに促されてもちろんいつも通り、カナイとアルファの部屋に入る。

(2)

―― …… 何故だろう。

「とりあえず、種屋には傀儡を送つとくから、ひよっこりくるか、連絡があるだろ?」

よつと部屋の窓を開けてカナイは、机の上にあつた紙で創り出した鳥を外へ放つた。私はそれに頷きながら、居心地悪く柔らかな湯気をくゆらせるマグカップを口に運ぶ。

「熱いから気をつけてね?」

「……うん」

気を使つてくれてるんだよね? 心配もしてくれてるんだよね? だからなんだよね。うん。それは分からなくもないけど……私はエミルの膝の上から解放されない。というかどうして誰も突っ込んでくれないんだ。明らかにお子様扱いだろう。

そりゃ、外見は幼児かもしれないけど、中身は変わらない。

この状況がすこぶる恥ずかしいのにつ!

「そつといえば、二人ともものんびりしてるけど、授業は良いの?」

エミルがちらりと机の隅に置かれていた時計に視線を送って、そついうとアルファがあからさまに「えー」と不満そうな顔をした。

「ちゃんと単位とつとかないと、退学になるよ? 僕の傍に居てく

れるんじゃないかったの？」

にこやかにそう告げられると、アルファは、ぶうつと頬を膨らませたけれど、かたんつと席を立ち「いつてきます」と机の上に放り出されていた教科書を持って出て行った。

それと入れ替わるように「失礼します」と入ってきたのはシゼだ。

「アルファさんに、授業の前に来るようにいわれたんですけど？」

そのアルファはぷりぷりと廊下を闊歩していつてしまった。

「ああ、シゼ。多分、こいつのことだと思っぞ」

入れよ、とカナイに続けられ「マシロさんがまた何か？」と眉を寄せる。

問題児で申し訳ない。

こっちこっち、と呼ばれて死角になっていたエミルの前に回ってきたシゼは首を傾げる。

「誰ですか？」

「僕の子ども」

ぎゅうつとエミルに抱き締められて、うぐつと息を詰める。エミル、それ、もう良いから。腕の隙間から見たシゼの顔色が青くなっている。

信じてるっ！ シゼ確実に信じてるからっ！

「マシロだよ」

と、カナイに告げられて、青くなっていた顔が次は真っ赤になった。ばさばさつと抱えていた本を床に落とし

「えっ！ マシロさんのっ？！」

誤解がどこかとーくへいつてるううっ！！

「そうなんだよ」

エーミールー。純粹なシゼをどんどん樹海へと追い込んでいくエミルを止めなくてはと思い、尚暴れた。兎に角、私を圧死させる気か。

なんとかエミルの膝の上から、降りて一息「ああ」というエミルの残念そうな声は聞こえなかったことにする。

「私がマシロなのっ。朝起きたらこんなことになってて……」

服もぶかぶかで、朝っぱらから格闘したのだ。半袖のものをなんとかワンピースっぽく着ただけで大変だった。

「……何食べたんですか？」

—— …… もう、良いよ。みんなの中で私は口汚いイメージなんだね？

はあ、と嘆息したところで、カナイがこれまでの経緯を説明してくれた。

シゼは、はあ？ と不思議そうに聞きつつ、私の正面に膝をつき、顔を覗き込んでくる。そして、一度、ぷつと吹き出し「結構可愛いんですね」と付け足す。褒められた気は微塵もない。

「少し診ても構いませんか？」

問われて頷くと、シゼがそつと触れてくる。くすぐったいから少し目を閉じていた。シゼがこんなに近くにくることはないから、不思議な感じた。

その間に、エミルが「マシロの服、サイズ直してあげたら？」とカナイに振り、カナイが「そうだな」と頷いたあと

「制服で良いだろ？ 部屋から勝手に取ってくるぞ？」

勝手に纏めたので「良いよ」と見送った。まあ、部屋に出してあるといえば制服くらいだ。

「――……マシロさん、ここ何か傷がありますけど覚えありますか？」

首筋に、そつと触れてそういったシゼの言葉に首を傾げる。何か、何かあったかなあ？

「そういえば、昨日温室で何かに噛まれたって、騒いでなかったか？」

戻ってきたカナイの手には子供服になってしまった制服が握られていて、ほらと手渡された。それを受け取って「あっち使えよ」と浴室を促される。

「一人で着替えられる？」

「出来ますっ！――！」

エミル……完全に中身まで子どもになってると思ってるよね。ネジがいくつか外れちゃってるよ。もうっ！

浴室の扉を軽く閉めたところで、カナイが説明してくれてるのが聞こえる。

「虫ってなんです？」

「さあ？ 俺も見てたわけじゃないから、痛みも直ぐ引いたらしいからアリじゃないかと本人はいつてたぞ？ 昨日は痕にもなってなかったから俺も気にしなかった……」

きゅつと襟元のリボンを結んで、着替え完成。やっぱり服のサイズはぴったりの方がよいよね。

「なるほど……ですが、先程見たところではかなり炎症を起こしていましたよ……毒性の何かだったのでしょうね。残念ながら、今日はラウ博士が居ないんですよ」

—— …… カチャ

「いいよ、別に。夜にはブラックがきてくれると思うし。きっと直ぐに元に戻してくれるよ」

どこかおかしいところはないかと、チェックしながら浴室から出てくれば、エミルに可愛いと頭を撫でられる。

「種屋店主殿いらっしゃるんですか？」

「うん。カナイに連絡してもらったから」

「そうですか、それで、どんな虫だったか分かりますか？」

え、だから、大丈夫だと重ねそうになって、シゼに「それは、そ

れ」といわれ続きを迫られた。

「ええと、姿は見てないんだけど、大きなものじゃないと思うよ。本当にチカッ！ としたただけだったの……痛みも直ぐに引いたし……」

「これまでそんな症例あつたかな……もしかしたら、マシロさんにだけ反応したんでしょうか……僕ちよつとこれから調べてみます」

「え、でも授業は？」

「それよりマシロさんの方が興味深いので、どうでも良いです」

物凄く良い笑顔をみた。シゼのあんな笑顔はレアだ。輝いてる。カナイさんも行きませんか？ と誘われて、カナイは「そうだな」と頷いて出て行ってしまった。全く、秀才コンビは良く分らない。

「じゃあ、僕たちも行く？」

「どこへ？」

「ここを片付けてから、折角だから散歩でも」

そついったエミルに私は曖昧な笑みを零す。

ここでじつとしても問題ないと思うのに……まあ、別に外に出て問題ないから、一緒だけど。小さく溜息を落として頷いた。

(3)

朝食の後片付けを済ませて、寮棟の裏口から外に出た。今日もいつもと変わりなく良い天気だ。朝から用事もなく外に出るということとは少ないから、私的には新鮮だ。

そして、この視界の低さも新鮮すぎる。というか足も短いし、歩くのが凄く遅い。
はい、と差し出されたエミルの手を取ってとことと表通りに出る。

そして宛てもない散歩を堪能したあと、カフェで一息。パフェがこんなに大きく見えたのは記憶に残っている限り初めてだ。
ちょっと嬉しい。ぱくりと頬張って

「エミルって、子どもが好きなの？」
「んー？ 別に嫌いじゃないけど特に好きというわけでもないと思うよ？ どうして？」

どうしてって、今日のエミルのテンションはちょっと違うと思う。

「ただ、ちょっと懐かしいなと思って」

アイスの冷たさに、頬を押さえてエミルの返事に首を傾げる。

「僕には異母妹が居たから。初めてあったのはあの子達が七歳のときだったけど、その頃の僕はとてもじめじめした陰気な子どもだったから……」

陰気なエミル。想像がつかない。でも、きっとその頃でも綺麗な子だったんだろうから、薄幸の美少年とかそういうのだったんだろうな。

「勢いに圧されてばかりだったけど、もっとちゃんと向き合ってあげれば良かったなと……今だったらいくらでもこうやって相手出来るのにな……ってちよっと思っただ」

くすくすと私の頬についてしまったクリームをぬぐって、パクリ。美味しいね。と微笑んだエミルが、根暗だったとはとても思えない。人は変われば変わるものだ。でも、エミルの話しかたからすると

「えっと、もしかしてその……」

いい辛そうにそう口籠れば、エミルはたと気がついたように「大丈夫大丈夫」と笑って両手を振った。

「生きてるよ。会おうと思えば会えるし。うん」
「そっか」

ほっと胸を撫で下ろす。

「でも、あの頃にすっかりしてなかったから、未だに敷かれてるよ」
心底困ったというようにそいつたエミルが、口にした台詞よりもずっと穏やかで幸せそうだったから、なんだか心がほわりと暖かくなる。

「それに、こういうことでもないとあまりデートらしいデート出来

ないもんね？」

幼児を相手にそんなこといっちゃ駄目だよ。王子。誰かに聞かれ
たら白い眼で見られるよ。

「マシロを抱っこするなんて機会そうそうないよ」

そう付け加えたあとエミルはさんざん私を連れまわした。

寮に戻る頃には、お日様が傾いていた。

一緒に遊びに行きたかったと拗ねるアルファに餌付けをしつつ、
私はというと体力の限界でエミルの腕の中でうとうととしていた。

シゼとカナイは、解毒剤開発に嬉々として取り組んでいるらしい。
あれは放って置くと思いと思う。

私は実験台にされる前にブラックに元に戻してもらえばそれで
満足だ。

それにしても、ブラックは遅い。ちゃんと傀儡は届いているのか
な？ なんとというかこの伝達手段はもう少し発達しても良いと思
うのだけど。魔法とか簡単にあるからあまりみんな不便を感じない
のかもしれない。そんなことを、考えているとようやく

「――……マシロの部屋がものけのからですが……」

待ち人來たり。

私は眠い目を擦りつつ身体を起こすと、ブラックが若干引いた。

「エミル……」

ああ、なんて分かりやすい軽蔑の視線。

「嫌だな、ちゃんと見てよ。僕の子……」

「エミルっ！」

「あー、ごめん。マシロだよ」

エミルは私を膝の上から下ろしつつそういった。ブラックはこつこつと歩み寄ってひょいと腰を折る。

そして、私が両手を伸ばせば抵抗なく抱き上げて「凄いですねえ」と感心する。

「来るの遅いよ。忙しかった？」

「こんなことなら直ぐにでも来たのですが……傀儡は、仕事を済ませてからといったので……散々遊ばれたみたいですね？」

私のひらひらエプロンドレスの裾を軽く引いて笑ったブラックに、むうっとむくれる。

「今、シゼとカナイが解毒剤を作るんだって盛り上がってるんだけど……被験者になるのは嫌なの、なんとかならない？」

「原因は分かってるんですね？」

にこやかに問い掛けられて「うん、これ」と私はブラックの肩口に頭を預けて首筋を晒す。

私では目視できなかったところを見せた。

ブラックは、そこにそつと触れたあと、ああ、と得心したように頷いた。

「何だっただらう?」

「さあ、毒虫でしょうねえ。でも、これが原因ではつきりしているなら、簡単ですよ……でも、そのままでも時間経過で戻ると思いますが?」

「待つてられないよ、この大きさヤダ」

ええ、可愛いのに、と外野二名から声が掛かったが無視した。

「そうですねえ、この状態で何かしたら犯罪っぽいですね」

—— ……しなつと何する気だよ……

楽しそうにそういったブラックに眉を寄せたけど本人はなんとも思っていない。私があと嘆息すれば「戻しますよ」と苦笑した。そして、私の了解も得ないまま、

「ひっ!」

ぱくりと傷口に口つけて、ぐつと吸った。

うわ、なんか気持ち悪い。身体の中の液体がぐるぐるかき回されているような気がする。目の前がぐるぐるしてブラックに掴む手に力を込める。

「—— ……っっ」

我慢出来ないと声を上げそうなる直前私の足は床に着いた。そつと口元を押さえたブラックが、私から離れて部屋の隅にあったシンクに、ぺっと口の中のを吐き出した。

直ぐに、ざあつと流してしまいが、青かった。青かったよっ！
私から何出たの？！

「身体、どこか不具合とか出ていませんか？」
「だ、大丈夫」

いわれて改めて見た自分は普通の大きさに戻ってる。
服も含めて……で、良かった。良かったけど……。

「そういう格好も似合うよね」
「マシロちゃん可愛い」

い・やーっ！ こんなフリフリエプロンドレスじゃないーっ！
年齢的にも多分アウトだと思っーっ！ 恥ずかしさに耐えかねて、
私は慌てて部屋から逃げ出した。

そのあと食堂で夕食をとっている間に、輝かしい笑顔で解毒剤完成を告げた二人が落胆したのはいうまでもない。
もう一回刺されると暴言吐いたカナイには、グーパンチをお見舞いしておいた。

(1) (前書き)

バレンタインにメルマガにて先行配信させていただいたものです。

カナイとマシロの前日の行動は「小話45：可愛いんだから仕方ない」を参照ください。

(1)

「じゃじゃーんっ！」

私は昨夜種屋で頑張ってチョコレートケーキをたんと作った。

一つはラウ先生の研究室に届けて、一つは切り分けてラッピングし、アリシアやカーティスさんに配った。最後の一つは今、目の前に置いてある。

「チョコケーキだ！」

「チョコケーキだね？」

何のお祝い？ と可愛らしく首を傾げてくれた二人に私はバレンタインの説明をした。ま、簡単にお世話になっている人への感謝ということ……因みにカナイは逃げた。

ちっ。

二人に聞いたら用事で出掛けたという話だったけれど、非難したとは思えない。私が何か作ってくるのを知っていたのはカナイだけだ。

「みんなにはいつもお世話になってるし、夜を徹して作ったの！」

完成品の倍は廃棄処分を余儀なくされた。ごめんなさい。沢山の食材たち……。

だから、ここに持ってこられたのはとても出来が良いものだと負っている。だって、味見は出来ないから、味の保証はない。

「食べてくれるよね？」

にこりと微笑めばエミルはもちろんと返してくれるけれど、アルファは警戒色を強めた。失礼だ。

「食べ物です。お菓子です。大丈夫」

「や、やだなー、マシロちゃん。た、食べないなんていつてないですよ？ えっと、僕がお茶を」

「私が淹れます。アルファは切り分けて」

「カナイは待たなくて良いの？」

はいつ、とアルファにナイフを押し付けたところでエミルがぽつと聞いてきた。

「カナイは良いの。残しておかなくても良いくらいだよ、もー」

カナイの逃亡は許し難い。むくれてそういった私にエミルは苦笑して「じゃあ、先にいたどうか」と止まっているアルファの背を押した。

アルファは盛大な溜息を落としたあと「分かりました」とナイフを入れる。

重ねるけど失礼だ。

ことつとティーカップをみんなの分用意して、私も椅子に腰掛けた。

ちゃんと私の分も切り分けてくれているのは、きつと優しさではないだろう。その証拠に私のが一番大きい……。良いけどこの複雑な気持ちはなんだろう……。

「マシロちゃん、どうぞ。味見も出来てないよね」

「うん。ホールで持ってきたからね……。って、一緒に食べようよ。失礼だな、失敗したのは持ってこなかったんだから、きつと美味しいよ。それとも何か盛ってあると思ってる？」

不機嫌そうにそう告げれば、二人揃って、まさかつ！と首を振ってくれる。

「じゃあ、みんな同時にね」

せーので一緒に一口食することにして、私は声を掛けた。

—— …… せーの

ぱく。

「—— …… マシロちゃん」

「何もいわないで、何もいわなくて良いよ、アルファ。ごめん……」
「ねえねえ、これどういう特殊効果？ 凄いな。チョコケーキがこんな変質を遂げるなんて聞いたことない。新発見だよな。戻ったら、僕論文書くよ。生成法教えて」

「う、うつつ。ただのチョコケーキだよお……」

エミルの瞳が輝いてる。本気で信じてくれてるのは嬉しいけど、これ、あきらかに誰かに何か盛られてるよね。

私は、自らの小さくなってしまった手をじっと見る。愛らしいピ

ンク色の肉球がぷにぷにとしている。

正面で、ふにゃーんっと漬れている仔猫は多分。アルファだ。エミルは興味深そうに自分の尻尾を追いかけている。

「おや？ どうしてマシロまで、可愛らしい姿になっているんですか？」

あからさまに諸悪の根源である登場人物に私は睨みを利かせて、怒ったけれど口から出てきた音は、

「にゃーっ！ー！」

だった。がつくりと自ら発した音に肩を落とすと、ひょいと抱き上げてもらう。

「マシロは仔猫になっても可愛いですね」

「にゃーっにゃ（ちよっと！ どういうことよっ！）」

「うふふ。何いってるかさっぱり分かりませんよ？」

「にゃーにゃにゃー（てんめー、マジでぶっころす！）」

「……ん。何か殺意を感じました」

下からもアルファがぶつくさぶつくさいってるけど、きつとにゃーにゃーとしか聞こえないのdaru。エミルは「なんだ薬かー」とがっかりしている。着眼点がずれていてちょっぴり残念な感じた。

(2)

「マシロも一緒に食べてしまうのは、予想外でしたけど……八時間くらいしか効き目はないので問題ないですね」

「にゃーっ！（問題大有りだっていうのっ！）」

「だってー、マシロが鼻歌交じりで、すごく楽しそうにエミルたちに作ってるの見てたら、苛つとしたので……仕方ないですよね？」

につこりしたって、どの辺が仕方ないかさっぱり分からないからねっ。

やきもち？ やっぱりやきもち妬いてたの？

それがこの結果って……巻き込んでしまった申し訳なさに、しばらくとして、二人を見下ろして「ごめんね」と零す。

『良いよ、別に。マシロが悪いわけじゃないし、それに戻る時間も決まってるなら、問題ないし』

『問題大有りですよ、エミルさん。とりあえず、待機場所を変えますよ』

『え？』

事情が分かれば、問題ないとしたエミルに対しアルファは項垂れていた体を起こし、うろうつろとしている。綺麗な金の毛並みが午後の陽光に煌いて美しい。

ブラックは、私を抱いたまま二人の前にしゃがむと、こつんこつんっと二匹の額を弾いた。

「大丈夫ですよ。二匹の世話は、外で拳動不審だったカナイに頼ん

でおいたので、存分に可愛がってもらってください」

そして、につこりと告げた台詞は殆ど呪いだった。体毛に覆われた状態では少々分かり辛いものの、二人ともさあつと青ざめた気がする。ブラックが立ち上がるのとほぼ同時に部屋の扉が開き、ブラックが出て行くのと入れ替わりでカナイが戻ってきた。

「お、ソマリとロシアンブルーの仔猫じゃん。なんでこんな毛色の良いのが飼われてねーの？」

喜色を含んだカナイの声とは裏腹に、エミルとアルファの悲鳴が聞こえた気がした……。

ほんつとーに、ごめんなさい。二人とも……。

「仕事の途中だったので、家に戻りましょうか？」

ふーっと諦めて、ブラックの腕の中で丸くなるとそう声が降ってくる。

『まだ、家に戻ってないの？』

「ええ、マシロを送ったあとは外回りしていたので、まだ家には戻ってません」

『じゃあ、書斎にもいつてないんだ』

「……？ ええ、まだですけど」

『ふーん……ていうか、会話通じてるよね』

「あ……」

もう、何も突っ込む気にならない。人の料理に薬盛りやがって……私の信頼は地に落ちたようなものだ。折角みんなに美味しく食べ

てもらいたかったのに……ああ、もう、なんか泣きそうだ。

—— ……とっ

家に戻って私は、書斎の応接セットのソファに飛び乗った。ブラツクはそのあとを着いてはいると、ふと机上に目を留める。

可愛らしいピンクのリボンの掛かった箱とそれより一回り小さな箱が置いてある。

もちろん。

私が今朝置いたものだ。一つはガトーショコラ。もう一つはカフスボタンだ。昨日買い物に出たときにとても綺麗なものを見つけたから、直ぐにブラツクにと思った。

「……え、っと……物凄く居た堪れない感があるのですが」

おずおずと口にしたブラツクから私は顔を逸らして、ソファに丸くなった。私がブラツクの分を用意しないわけないし、エミルたちに渡すものと同じわけないのに。一応、本命チョコなのだから気合の入りが違う。

私は不機嫌を隠すことなく、更に体を丸くした。ああ、なんだか自らのふわふわ毛皮も心地良いかもしれない。

ていうか、あれ……みんな食べないで居てくれれば良いのだけど、丁度お茶の時間に合わせて配ったから多分……図書館は猫で溢れているだろう……。

ああ、もう、なんていって謝ってまわれれば良いのか今から頭が痛い。

「ええと、マシロ？ バレンタインってなんですか？」

『知らない』

「マシロ……」

物凄い情けない声を出す。

—— …… コンコン

ソファまで歩み寄って、私の前にしゃがんだブラックがしょぼーんつとしているところへ、お客さんだ。静かに開いた扉に、ブラックは苛々と立ち上がる。

「邪魔しないでください」

「にゃーっ!!」

「あ、痛っ」

立ち上がると同時に今忙しいのです。と銃口を扉に向けたブラックの手を慌てて引つ掻いた。こんなことくらいで客を消そうとするなっ！ 客人は慌てて、扉を乱

暴に閉めると、すみません。ごめんなさいと走って逃げた。

ああ、多分戻ってはこないだろう。足音はどこまでも遠ざかっていく。

『今、撃とうとしたよね？』

「してないですよ。ちょっと、威嚇を…… あー、まあ、少しは邪魔になれば……」

即邪魔にしようとしてたくせにつ。ブラックは私がつけてしまった引つ掻き傷を、軽く擦って苦笑する。しまった。今は猫だし、仔猫だから割と鋭利な爪をしている。赤くなってしまうている手の甲をちらりと見て、申し訳ない気持ちになった。

ブラックはその視線に気がついたのか「平気ですよ？」と微笑んで、ぎゅっと反対の手で握り締めると、次に手を離れたときには綺麗に痕が消えてしまっていた。ほらね？ というような笑みに胸を撫で下ろす。怒っていたのは私なのに変な気持ちだ。

『もう良いよ』

はあと嘆息して私は素直にブラックの腕に抱かれた。ちらりと、時計を見て確認。真夜中近くで元に戻るならそれまでのんびりしているしか私に残された道はないだろう。

ブラックはほんの少し、申し訳なさそうな顔をしてそっと私の頭を撫でてから机に戻った。椅子に深々と腰掛けたブラックの膝の上に丸くなれば、ブラックの大きな手が優しく体を撫でてくれる。

ああ、なんか心地良いなと思ってしまふということは感覚まで猫？ ブラックも普段こんな気持ちになつてゐるのかな？

「私にカナイのような小動物を愛でる趣味はないですけど、マシロだと愛らしいですね」

ああ、カナイ……愛でてるんだろうなあ。アルファ、嫌がってるんだろうなあ。

そして、ブラックはそのまま仕事を始めたので、私もうとうととしていたら本当に眠ってしまった。

(3)

柔らかな紅茶の香りに鼻腔を攪られ瞼を持ち上げたときには、もう背にした窓からはお日様の影は消えてしまっていた。

「おはようございます。紅茶入りましたよ？　っと、今は飲めませんよね。とりあえず、マシロが作ってくださった、ガトーシヨコラでも一緒にどうですか？」

私はその台詞に体を起こし、ひょいと机の端に前足を着いて机上进行を覗き込んだ。真っ白なティーカップには上品なグリーンの模様が描かれている。お揃いのデザート皿には私が頑張って作ったガトーシヨコラが綺麗に切り分けられ乗っかっていた。

ふと気がついたらゆらゆらと尻尾を揺らしている自分に気がつく。これは本能的なもので、意図的に揺らしているわけではなくて……
……ああ……。

ブラックは、くすりと微笑んで一口食べたあと、私にも小さく切り分けてどうぞとフォークを差し出してくれる。お行儀悪い格好だけれどそのままぱくりと頂いた。美味しい。流石私。

「これ、クリムラの味に似てますね？」

『うん。だって、クリムラのおばさんに教えてもらったんだもん。寮で作るわけにもここで作るわけにも行かなかったから、おばさんをお願いして作らせて貰ったの。それで、見かねて色々教えてくれたの』

だから確実に美味しいだろうという保障があった。同じように貰

ったレシピで他も作ったのだけど、やっぱり一人で作ると何かとはしよられているのか上手くいかなかったんだけど……。

そのときのことを思い出して苦笑した私に、ブラックは心底感心したという風に、感嘆の声を上げた。

「マシロはやはり凄いですね。店を切り盛りするものからそのレシピを聞き出すなんて、普通出来ません。例え再現能力に乏しくても……」

褒められたのか貶されたのか微妙だ。私が眉間に皺を寄せ、苦々しく瞳を細めれば、ブラックは「褒めてますよ？」と加えるけど、とてもそれだけとは思えない。

『おばさんは、優しいよ。それに上手に出来てるね。美味しい』

自画自賛した私に、ブラックは機嫌良さ気に「そうですね」ともうひと口。そして、優雅にティーカップを傾けてから、コツと残った箱に指を打ち付ける。

「こちらは何ですか？」

『まだ開けてなかったの？ ブラックへの贈り物だから開けて』

素直に嬉しそうな顔をして、ブラックは小さな箱のほうのリボンへ手を掛けた。すると解きながら、バレンタインについて問い掛けてくる。

私はそれに答えつつ、ぷるぷると髭に引っかかった粉糖を振るった。

「マシロの世界はサプライズで溢れているんですね？ 流石美しいときを刻む場所です」

『それはどうかなあ……私の住んでいたところは平和だったけどね』
それにブラックの居ない元の世界はとても色褪せていた。だから私にとつての美しいときはここにある。

「おや、珍しい。クリソベリルですね」

『そうなの？ 猫目石っていわれてるやつかなと思ったんだけど』

「猫睛石びょうせいせきともいわれるものなので、同一でしょうね。綺麗です。魔法石に加工も……しませんよ？ しませんが、このくらい純度が高いものならかなりの法力を内包させることが出来るでしょう、という話です。マシロつてもものを見る目がありますね」

ありがとうございます。と、柔らかい笑みを浮かべ、続けてふわりと頭を撫でられる。

凄く気持ち良いけど……早く元の姿に戻りたい。

戻って、ちゃんと抱き締めて欲しい。

この姿はとても不便だ。

ふうと長い息を吐いたところで

「もうすぐ戻りますよ」

それが合図になったように、私の体はぽふっと元に戻った。ちょこんとブラックの膝に座ったままだったので慌てて立ち上がろうとしたら、そのまま腕を引かれて抱き締められる。

「やはりこちらのマシロのほうが良いです」

ぎゅぎゅーっと腕に力を込めて耳元で囁かれる。

「――…ん、私も」

そつと背に腕を回して力を込め擦り寄ると、少しだけ早くなった鼓動が聞こえる。それがとても心地良いし暖かい。胸が温かくなつて、好きが溢れてくる気がする。

軽く胸を押せば少しだけ腕の力が緩む。窓から差し込んでくる月明かりが、ブラックの頬を青白く見せてとても綺麗だ。

つ……つ、と指先を滑らせて両頬を包み込んで引き寄せれば自然と唇が重なる。甘く食んで離れれば、柔らかく細められた瞳と視線が絡む。それがなんだか気恥ずかしくてお互いに微笑む。

本当に馬鹿だなと自覚する。

でもふと我に返って眉を寄せる。

「あ、でも……私、怒ってるよ。私の作ったものに勝手に薬とか混ぜちゃって！ もう！ 明日みんなに謝って回らないと……」

「すみません。独り占めしたいんです。マシロ全部。無理なのは承知してますけど……」

う。そんな可愛いことをいわれてしまつては、私はそれ以上責められない。責められないって分かつていてる？ ってこういうところにブラックからは計算的なものを感じない。

なんというか、こういう部分がブラックはまっさらなんだ。それを私一人が汚している。

私はそれにとつともない優越感を感じる。

だから、もう仕方ない。明日は謝って回ろう。

後遺症的なものが残るようなことではないし、きっと許してくれるよね。

「で、なんでしなつと制服脱がそうしてるの？」

「皺になつては困るかと思ひまして」

「――……」

静かに睨みつけければしよぼーんつとしてお預け食らった犬みたいだ。猫だけど。ていうか……私が戻ったってことは……エミルたちも戻ったんだよね……。ああ、酷いことになっていなければ良いのだけれど。

そう思うと急に心配になってきた。

すつとブラックの胸を押して立ち上がると、不思議そうに見上げられる。

「私、寮に戻ったほうが良いよね。エミルたち酷いことになってるような気がしてきた」

外れたボタンを留めなおしつつ、そう告げればブラックは素直に嫌そうな顔をした。自分でまいた種だからね。えー、もしかして、私がバレンタインなんて考えたところから拙いの？ ああ、根源なんて今更どうでも良いのだけれど。

――……ぐいっ！

「え？」

引かれた力にしたがつて私は再びブラックの膝に腰を降ろした。今度は背後から抱き締められる形で……。私は多少暴れたけれど前に回された腕に力を込められて、諦めた。体格差も力の差もある。

がつくりと頂垂れば僅かに髪の間から覗いた首筋に唇を寄せられ、ぴくりと肩を跳ね上げる。そのまま話を続けるから、くすぐったくて仕方ない。

「駄目です。帰しません。大体カナイは昨日良い思いをしているのですから、少しくらい突っ込まれても平気です」

ん？ 待て。カナイって大好き仔猫に囲まれて役得かと思ったけど……どうしよう、一緒に寝てたりしたら。それでもって、元に戻ったら。

考えただけで面白……いや、気の毒だ。アルファに殺されてなきやいいけれど、ボロくなってる気がする。

今すぐ見たい。

見たいけど……今は擦り寄ってくる背後の猫の方が可愛い。

「大体、マシロを責める人なんて居ませんよ。明日戻れば分かります。それより『愛の誓いの日』なんですよね」

存分に誓いましょう。と、首筋を強く吸われて、ちりつと痛みが走る。それにふわりと熱を持つ体は正直恥ずかしいと思う。思うけど、首を捻って見上げれば、自然と降ってくる口付けがやっぱり嬉しい。

—— …… ハッピーバレンタイン…… ——

確かにこんなに満ちたバレンタインは初めてだ。

(4)

翌朝、一番に、アリシアに掴った。

「もう、あたし貴方がどんな田舎から出てきたのか知らないけれど、そんな風習があつたなんて知らなかったわっ！ 来年はあたしが仕掛けるから覚悟しなさいね」

とよく分らない宣言をされた。困惑気味に頷いたものの、アリシアはにこりと愛らしい笑みを浮かべて、なかなか楽しかったわ。と締め括って、踵を返した。

その足音が遠ざかってから、隣の部屋の扉が開き、エミルが「おかえりー」と顔を出した。

「あーごめんね。バレンタイン……だっけ？ 事態収拾のために、悪戯しても良い日に摩り替えちゃった。みんな笑って許してくれたから大丈夫だよ？」

ほんの少し、申し訳なさそうにそういったエミルに私は胸を撫で下ろした。

「そっか……ありがとう。大変だった？」

「いやあ、僕は貴重な体験が出来たと思わなくもないけど……カナイはちょっとトラウマになってるみたい。不屈の精神を持つてるからそのうち元に戻ると思うけど」

そんな説明を受けつつ、恐る恐る向かいの部屋をノックする。だ
ーれーと不機嫌そうなアルファの声がしたので、名を告げると「は
いはーい」と機嫌良く扉は開かれた。

「マシロちゃんっ！ 聞いてくださいよっ！ カナイさんが！」

ああ、なんか一杯話したいことがあるらしい。部屋に入りつつ、
ちらりとカナイを探したらベッドで丸くなってた「猫怖い猫怖い」
とかぶつぶつ聞こえる……カナイ。ごめん。

「それでね……」

と話し始めようとしたら、アルファが足元に擦り寄ってきた白猫
——耳と尻尾が薄灰色——を発見。アルファは、短く嘆息して、そ
の仔を抱き上げると、猫の片手を取って

「マシロちゃんです。はじめまして」

と振って見せた。そうかその仔が、カナイがこっそり飼っていた
マシロちゃんか……。私はどう反応すれば良いのだろう？

「なんかね、アルファ。凄い猫にモテてね。マシロちゃん、帰らな
くなっちゃったんだよね？」

エミルが訳知り顔でくすくすと笑いながらそう告げる。それに合
わせたように、カナイのぶつぶつが「あんなに可愛がってやったの
に」に変わった。本当にすみ

ませんねっ！ 私に非はないと思うけど、カナイって小動物ラブ過
ぎて小動物に警戒される残念なタイプなんだろうなと理解出来た。

「あー、ちょっと気になったんだけど、二人とも戻ったときどうだったの？」

私の素朴疑問に、二人、いや、三人は、うつと息を詰めた。

「カナイさんってば、僕らを抱いて寝ようとするんですよ……」

うわあ、最悪予感が当たってるう。

「因みに、マシロちゃんと一緒にシゼも連れてこられてたんだよね。研究棟の裏に新入りが居たって……」

「ベッド見事に折れましたねー……真つ二つに」

「それはアルファが暴れるからだろ」

「暴れますよっ！ 暴れますよねっ？！ リアルに鼻先にカナイさんの顔があるんですよっ！ キスしそうなくらい近くにっ！！ 僕、トラウマになりそうです」

俺もだよ。とベッドからの嘆きも聞こえたけど、無視されるよね。

「あれ、ラウ先生は？」

「ラウ博士？ あの人は食べなかったよ。というか、シゼに毒見させたね。あれは……」

しみじみとそういったエミルに、ああと妙に納得してしまった。らしいよね。はあ、きつとこのあとシゼに謝りにいったら、益々嫌われるんだろうな！。怒ってるんだろうな！。

「と、とりあえず、みんなごめんね？ えっと、その、日頃の感謝を伝えたかっただけなの……そのきっかけに丁度良いかなと思いつ

ただで、まさかこんな騒ぎに……」

ちと、もう一度力ナイを確認。悲惨な状況に慰める言葉も浮かばない。面白いとか思っではいけない。

私はそこまで鬼じゃない。
笑わない。

「良いよ、僕はそれなりに楽しかったから」

いいいいこといつもように頭を撫でてくれたエミルに胸を撫で下ろす。そしていつの間にか隣に来ていたアルファが、つんつんと人の脇腹を突く。

「ぷっ！ く、はは」

やめてっ。我慢してたんだからっ

「笑いたかったら笑ったほうが良いですよ。カナイさん暫らくあの状態で糞虫になってますよ。ああそうだ、これからカナイさんのことは糞虫と」

「呼ぶなっ！」

がばりっ と血相変えて飛び起きたカナイに我慢の限界。

ぷっ、く、駄目。ごめんっ。

あっはははは……と笑い始めるとみんな同じように笑いだしてしまった。これもきつと私たちらしいのだろう。

やっぱり私はこの場所が好きだ
……—

その後シル・メシアのバレンタインは、悪戯騒ぎが横行することになったのは、私の知るところではない、よ？

(1)

「アルファ、ちょっと待って早いよ」

「そうですかー？ 手、引きましようか？」

「い、いい、いや、いい。さっき引いてもらって死ぬかと思った」

私は至って真剣にそう告げたのに、アルファはにこにここと笑って「またまた」と片手を振って私の手を取った。

「は、走っちゃ駄目だよっ！」

「はいはい、分かりましたよー。僕についてくるーなんていうから、ロードワーク諦めてお散歩にしてあげたのにー。それでも息が上がるなんて、マシロちゃん運動不足ですよ」

「それについては返す言葉ありません」

私は、がっくりと肩を落として、アルファに手を引かれるまま裏道を歩いた。どうしてまた、そんなことになったかといえば……――

「マシロちゃん、ごめんね。今、手が離せないからカウンターの上の持って帰って」

私は町の雑貨屋さん。エリスさんのお店に、お直しをお願いしていたスカートを取りにいったところだった。

奥からエリスさんの忙しそうな声が聞こえて、私はカウンターへと視線を泳がせると紙袋が二つ並んでいるのが目に付いた。

開けて良いのかどうか迷ったけれど、どちらか分からないから、手前にある袋の口を開く。

赤いチエツクの柄が見えたからこちらで間違いないだろう。

私はその紙袋を抱えてエリスさんに声を掛けてお店をあとにした。

あと私の身長が五センチくらい高ければ、お直しなんてなくても既製品で問題ないのだけれど——そうばやいたら、最初から仕立てさせれば良いんですよ？ と普通にいわれたので……約三名に。口には出さないことにした。

部屋に戻ったら、まず試着。

鼻歌交じりに、袋から取り出して足を通してみたら……ホックがきつかったのだ。

心当たりはありすぎる。ここでの餌付け頻度は半端ない。

前だったら、元の世界に帰れるかとか、色々頭悩ませることも多くて精神的に病んでいる部分もあったから、その辺でカロリー消費していたと思う。

でも、今は平穩そのもの。

特に気を使うわけでもなく、大好きな人と会うにも不自由なくて好きなことを好きなようにしている。自由気ままなものだ。

それなのに食生活に変化がなければ身になって当然だろう。

—— ……このままじゃ、本当に転がったほうが早くなる。

いや、それよりもブラックに愛想つかされたらどうしようっ。

という至極真面目な理由で、アルファのロードワークのお供を願
い出たわけだ。だって、普段から運動している知り合いなんて、ア
ルフアしか居ない。カナイもエミルもシゼも基本的に引き籠もりだ
し、ブラックは……運動しているイメージが全くない。なのに、あ
の人たち食べたもので消化しているんだろう？ 絶対にズルイ。
でもカナイに文句いおうものなら、きっと頭で使ってるときっぱ
り告げられるだろう。

私は難しい顔をして眉を寄せたあと、はあと嘆息した。

「でも元々マシロちゃんって、身体動かすの大好きーってタイプに
も思えませんけど？ 急にどうしたんですか？」

「あー、うん、ええっと……あ、アルファとデートしたいなと思っ
て。うん、そう」

即席ダイエットとはいえなかった。

私の返答にアルファは、犬なら盛大に尻尾を振っている感じの笑
顔で「本当に？！」と問い返してくる。

しまった……変なスイッチ押してしまったかもしれない。

「じゃあじゃあ、今日は僕の好きなところに連れて行ってあげます！」

「え？ あ、ああ、うん。でも、食べ物系はパスね？」

アルファ イコール 食べ物という図式が出来上がってしまったている私は、反射的にそう口にしたのだけど、アルファは考えていなかったのか、僅かにきよとしたあと「分かりました」と笑みを深めて強く頷いた。

そのあとはどういうわけか、さっきまでの足早な雰囲気はなくなるんびりと足を進めてくれて私の上がった息も徐々に整ってきた。

「アルファの好きなところって？」

いつになく足並みをそろえて歩いてくれるアルファに、どこか気恥ずかしさを感じる。くすぐったさに居心地を悪くして、そう問い掛けた私にアルファはのんびりと辺りを見ながら「この辺です」と口にした。

「この辺って、裏通り？」

「はい。裏側の活気って表には出ないけど、でも、なんとなく偽れない感じが好きです」

夕時が近づいてきて通り過ぎていく忙しそうな人たちを見送りながら、ぽつりと口にしたアルファを見上げる。

普段キラキラとしているアルファが、物憂げに瞳を細めているのはなんというか、珍しい……珍しすぎて、変に意識してしまいそうになる。

「僕は、王宮で護衛騎士としてたっていた期間は短かったですけど、それでもやっぱり取り繕うことは多かったです、王宮というところはそういうところなんです。外を何重にも重ねて……自分を殺さないといけないところ。特に僕は感情を必要とされない騎士だから、命令にさえ従順で完璧に遂行できさえすれば良かった」

ぽつぽつとそう重ねたアルファは、繋いでいた手を緩めて、ずり指を絡めるとぎゅっと力を込めた。それに答えるように、ちゃんと力を返せば、にこりと笑顔が寄越される。

「その命令すら完遂出来なかった僕は駄目だと思うんです……あれ？ 喧嘩だ」

アルファは話の途中で、路地の奥まったところで揉めている数人に目を走らせた。

(2)

「ぼこぼこですねー。痛そう」

「助けないの？」

少し怖くてアルファのほうへ身を寄せれば、アルファは小首を傾げて「そんなもんですか？」と不思議そうな声を上げた。いや、無謀に突っ込めとはいわないけれど……アルファが怪我するのは困るし。

「ご、ごめん。危ないもんね。私がなんとか……」

「もつと危ないですよ」

よいしょ、と足元の石を拾い上げた私に、アルファはけらけらと楽しそうに笑って、私の手を下へ押し下げた。

そのわちゃわちゃを聞きつけて、一人を囲んでいた大勢の方がこちらに気がついて「いちゃついてんじゃねーよっ！」と凄んでくる。

絵に描いたような悪役に、笑いそうになるが駄目だ。

緊張感がなさ過ぎる。

「だって僕たちはデート中なんだから、いちゃついてて問題ないと思うけど？」

「ふーん……女同士でデートねえ？」

あ、今、アルファの逆鱗に触れた。

体ばかりデカイ男に見下ろされて、アルファの気配が変わった。すっと腰に手が伸びるのを、私は慌てて抑えて「殺しちゃ駄目だよ」

と小声で囁く。アルファはもちろんそのつもりだったのか私の台詞に「え？」と声を上げた。

その一瞬の隙に、ごつと風を切る音がしてアルファめがけて真っ直ぐに拳が振り下ろされる。

悲鳴を上げる隙もなく声を押し殺して目を堅く閉じた。

「ちょっと、まだ、話してる途中なんだけど……やめてよね」

バキンっ！ と、有り得ない音と鈍い悲鳴が聞こえた。

ドキドキと目を開くとアルファが、相手の拳を捕まえていたのは分かるけれど……分かるけど……え、え……えええっ

「ちょ、潰れ……」

拳潰れてないですかっ！！ 変な方向に曲がってるうっ！

もう、堪え性がないなとアルファは、ぺいっ握り潰してしまっていた手を落とした。それと同時に相手は地面に倒れ痛みに転げまわって喚いている。

「この程度でこういう人死なないですから、気にしなくて良いですよ」

「気にしますっ！ 気にしますっ！ 手当てしないとっ！」

「マシロちゃん、前に出ないで、危ないから……」

いった傍からぐいっしと頭を押さえつけられて、何しやがると襲い掛かってきた相手を受け流す。

「死なない程度。了解したので、下がる。時は、壁を背にして置いてください。それか、僕にくっ付いておいてくれるかどうかでお願いしますね？」

にこりと微笑んだアルファは少しだけ喜色を含んでいた。怪我させない程度と加えるべきだった。痛みを失ってしまった、最初の一人をちらりと見下ろして、短く溜息。

そして私はレンガの壁に背中を預けて見守ることにした。

「あ……」

自分よりも一周りも二周りも大きい感じのする人たちを伸している姿は、確実にアルファが怪我をする心配はなさそうだ。

胸を撫で下ろした私は、周りを見る余裕が戻ってきた。

そして、その騒ぎから抜け出すように、よろよろと被害にあっていた青年が、逃げていくのを見てしまった。その姿に僅かにいい表しきれない気持ちが溢れてくる。

でも、きっとそれも仕方ないのだろう。

私はその姿が完全に見えなくなってから「アルファ！」と声を掛けた。

それは丁度、剣の平らな部分で「よいしょ」と相手の脇腹を叩き、壁へと激突させて終わったところだった。

「もう、大丈夫だよ。行こう」

眉をひそめてそういった私にアルファは「そうですね」と微笑む。もう他には立っている人は居なかった。苦しげに地面で「化け物」と零した人を丁寧に踏みつけてアルファは私へと歩み寄ってきた。

「誰か、呼んだほうが良いよね？」

「これだけ騒いだので、誰かすぐにきますよ。面倒になる前に僕らは行きましょう」

にこにこつとそういったアルファは、ぐいっと私の手を引いた。

「ちょ、ちよつとアルファ？」

「急いでください。変なところで時間取られたから、早く早く」

ぐんぐん早足だったのが駆け出すと、私は殆ど引つ張られる形になる。引きずられることになるのも時間の問題だ。

「いや、駄目！ これ以上早く無理、ころ、転んじゃう」

舌を噛まないように途切れ途切れに紡ぎ出した声に、アルファは「転んじゃ駄目ですよ」と急に足を止める。その勢いでアルファに、どんつとぶつかりと私が姿勢と息を整える暇もなく、ひよいとお腹に腕を回された。

「え？」

「舌噛まないようにしてくださいね」

え、ええええつ！ 勘弁してください！ 誰か止めてっこの暴走特急っ！

私の足はそのまま地面からさよならして、アルファは私を小脇に抱えたまま、軽々しく片腕を塀に掛けると、ひょいと飛び上がり、とんとと塀に乗っかる。

そして、そのまま走り出した。

頬を切る風が痛い。というか怖いっ。

怖い怖い怖いっ！ お前は猫かつ！ 人の歩く道を歩いてっ！
走っても良いからもつと平坦な道をつ！

そう思った私の期待を綺麗さっぱり裏切って、今度は、ひょいと民家の屋根に上がってしまう。

ああ、もう私意識を手放したほうが良いような気がしてきた。

(3)

「あ、マシロちゃん身分証持ってます?」

「と、図書館の学生証なら……ポケットにい……っ」

なんの必要があつての確認なのかはよく分からないが、アルファは「なら問題ないです」と纏めて歩みを少しだけ緩くした。

「そ、そろそろ、降ろして、もらえ、たら」

「ここは不安定だからやめたほうが良いですよ。あそこから館内に入りますからそこで降ろしてあげます」

そういつてアルファが指差した先をなんとか見上げれば塔だ。

一人絶叫マシーン気分を味わった末、ようやく目的の場所に着いたのか、アルファは私を降ろしてくれたけど、屋根の上だ。

足元怪しくよろめけば、アルファがひよいと抱えて、目的地らしい塔の窓の棧へと腰掛けさせてくれた。薄暗い塔の中は、天辺まではまだ遠いのか螺旋状の階段が続いている。

その横からすると中へ入ったアルファは、とんとと階段に足を降ろすと、私に手を伸ばし丁寧そこへ降ろしてくれた。

「ここどこ?」

流れから上がるのだらうと、私が階段を登り始めればアルファもその隣に並ぶ。

「図書館ですよ。だから、身分証が必要だったんです。持っていない

と弾かれちゃうので……研究棟の裏から登ったから、マシロちゃんには、馴染みないかもしれないですけど、僕は結構来るんです。物置に使われている埃臭い物見塔なんですけどね」

にこにこ話しながらアルファは、数段上がったところで、膝が笑ってしまっていた私の手をとって引いてくれる。急いでいた感じだったのに、足並みをそろえてくれるなんて少し紳士的で嬉しい。

そう思ったあとの「抱っこしましょうか？」は、余計だったけど。

私はそれを丁重にお断りして、騎士様に半分くらい体重を持ってもらい階上へと上り詰めた。

—— ……ふわっ

「っ」

視界が開けると同時に吹き込んできた風に目を閉じる。ほんの少し冷たい夕暮れ時の風だ。

アルファはそのまま私の手を引いて「こっちですよ」と案内する。

そして硝子の嵌っていない窓は私たちの眼下に広がる街並みを一望させてくれる。

「うわー……」

思わず感嘆の声を上げた私にアルファが音もなく笑った。

「綺麗ですよ。僕ここ大好きなんです。カナイさんとかは、馬鹿と煙は高いところが好きなんだーって笑うんです。だからカナイさんには秘密。エミルさんにも高くて危ないから秘密の場所なんです」
「ちよつと待って、それって私なら間違っ
て落ちてても良いってこと？」

窓の棧に手を掛けて、夕焼けに赤く染まり、全てがレンガ色になる町を眺めているところで、ふと気がついてそう口にする。

「まさか」

私の台詞にアルファはくすくすと楽しそうに笑いながら、私の手の横に手を置いて真後ろに立った。背中にアルファの身体が触れて、じわりと身体の熱が伝わってくる。

「大丈夫ですよ。絶対に危ない目にはあわせませんから。お姫様を守るのは騎士の役目でしょう？」

さつきもちやんと守ったし。と付け加えたアルファの台詞に少し申し訳ない気持ちになる。助けたはずの彼はアルファにお礼をいうこともなく逃げていってしまった。

結局、アルファに危険なことをさせてしまったただけだ。

だから、ごめんね。と口から零れた私にアルファはとても不思議そうに「どうしてですか？」と問い返していた。

だって……と、口籠ればアルファは、特に気分を害した風もなく続ける。

「気にしなくて良いですよ。マシロちゃんはああいうの見るの嫌で

しょう？ だから早く終わって良かったじゃないですか」

「気がついてたの？」

「え、まあ、一応。これでも王宮騎士なので、あの程度の相手で見えなくなったりはしないです。普通の対応ですよ、アレ。誰でも厄介なことに関わるのは嫌なものです。特に大した素養も持たない民間人は生きるのに、己の中の平和を保つのに精一杯なんだから」

いったアルファに不安になって、後ろを振り返ろうとしたら「あつち見てください」と指を指された。

「あれ、騎士塔ですよ。ここから見ると、ちっちゃいですよねー。それで、ずずいと右によったら大聖堂です」

アルファに指を指されるまま視線を動かす。そのあと、真っ直ぐに抜けている大通りを見ればそこを歩く人たちは点でしか見えない。

凄くちっちゃい。

毎日あんなところを私は駆け回っているのだなと思うと、とてもちっぱいだ。

「あの建物ギルド？」

「うん、そうですね」

「じゃあ、あの辺りにクリムラがあって……あつちにエリスさんのお店があるのかなあ？」

「そうそう。それであそこが、マシロちゃんがよくサボってるカフエ」

「失礼だなサボってないよ。ちよつと生き抜き？」

いつて笑いあえば普通にデート中な感じだ。

「じゃあ、あつちにキラキラしてるの海？」

「ぶぶー、外れです。あれは、湖。あちらは内陸ですからね、僕らが背にしているほうが海になりますよ。ここからは見えないかな？」

後ろといわれて私は反射的に後ろを振り返ると、アルファと目が合った。物凄く近いところにあつた碧い目に心臓が跳ね上がり、慌てて顔を戻すと他に知っている場所をと視線を彷徨わせる。

私の密かなどきを、知ってか知らずかアルファは囁くような声を掛けてくる。

「ねえ、マシロちゃん。僕、今日ちゃんとマシロちゃん守れましたか？」

「え？」

(4)

アルファの問い掛けに、もう一度緊張気味に顔をあげようとしたら、肩にアルファの顎が乗った。呼吸が直接肌に触れるくらい近い距離に、流石に身を縮める。

「マシロちゃんて甘くて優しい香りがしますよね。女の子だからなのかなあ？」

「ア、アルファ。ちょっと近いよ……恥ずかしい」

声を発する震動さえも伝わる距離に居た堪れなくて、そう告げたのに「少しだけ」と重ねて離れてはくれなかった。

「た、食べても美味しくはないからね」

「食べないように努力します」

努力するまでもなく、そんなこと考えないでください。本当、もう……。

片方の腕で肩を抱き、私の手の隣に並んでいたアルファの手が、そつと重なってきゅつと握る。

犬とか猫とかが暖を取るために擦り寄ってくる感じに似ているとか、そう思うと少し五月蠅い心臓が落ち着いた。

そうだよな。アルファだもん。風、冷たくなってきたただだよな。

「あー、えっと、アルファはちゃんと騎士様だったと思うよ？ 私、全然怖くなかったし……あ！ で、でもっ！ 小脇に抱えて走るのはやめて、あれは怖かったから」

それに重いし……と、ごによごによと続ければ笑われてしまった。ちっ。乙女心の分らないやつだ。

「僕、こう見えても力持ちですよ？ カナイさん担いでも平気です」
カナイと一緒にされるのは心外だ。大体、男性と女性では重さの基準が違うような気がする。

むうっと眉を寄せた私に、気がついたのかどうなのか知らないけれどアルファは楽しそうに笑っている。

その震動が少し心地良くなってくる。

そして、改めてぎゅうつと腕に力を込められて、心臓がまた五月蠅くなった。

なんかやだな。アルファなのに、いつも子犬みたいに愛くるしいアルファなのに、普段はちっとも感じないのに、私より広い胸も大きな手も力の強い腕も……全て男性だ。

「アルファ、あの、ね」

頭の天辺まで熱持ってくるような感覚に耐えかねて、そう搾り出した私の声が届いたのかどうか分からない。分からないけれど

—— …… かぶっ

「ひうつー!!」

食べたっ！ こいつ人にかぶりつきやがったっ！ しかも噛み付いたーっ！

私は肩を跳ね上げ、跳ね上げたあと思い切り暴れた。

「ちよっ！ ちよっと！ 食べないでよっ！ や！ もう！ くすぐったいっ」

「あはは、ごめんなさい。いやもう美味しそうだったから、つい。ねえねえ、マシロちゃん少し太りました？」

アルファは暴れた私から手と、ぱくりと首筋を銜えていた口を離すとホールドアップして失礼極まりないことを口にした。

「ままま、まさかつ！ そんなわけないじゃない！」

「ふーん。なるほど、それで急に僕についてくるーなんていいだしたんですね？」

「そんなに変わってないってばっ！」

アルファに抱き締められているよりも、更に赤くなる顔を隠すこともせずに叫んだ私にアルファは転げ出しそうなほど楽しそうに笑った。

「酷いっ！」

恥ずかしさに泣きそうになってくる。

気にしてるのにっ！ 気にしてたのにっ！！

私は、かつんと踵を鳴らして、昇ってきた階段のほうへと足を踏み出した。ここは図書館だといっていたのだから、降りたらどこ

分かるだろう。迷子になっても生徒に聞けば良い。

道案内なんて必要ない！　ぷりぷりと階段を降りはじめた私をアルファは「え、あっちゃっ！」と慌てて追い掛けてくる。

「ちよつと待って！　待ってよ、マシロちゃん。見せたいのはこのあとで……」

「もう良いよっ！　何も見たくないっ！　帰るっ！」

じわりと瞳に溜まってしまふ涙を無造作に拭って、一段飛ばしに降りていく。

「え？　嘘っ。マシロちゃん、泣いてるんですか？　え、ご、ごめんなさい。えと、その、冗談ですよ。冗談。本当にそんなこと思っ
てないですよ？　危ないですから、気をつけて降りないと……」
「放っておい……て！」

—— ……がつんっ

うっ。予想通りヒールが階段に引っかけた足で踏み外してしま
った。がくんとした衝撃に、息を吞めば直ぐにアルファが支えて
くれる。

「あ、ありが、と……も、だいじょぶ、だから離して」

ぎゅうつとまた後ろから抱き締められて、僅かに息苦しい。身動
ぎしても、びくりともしない。

「嫌です。離したらまたマシロちゃん怒ったまま、逃げちゃうじや
ないですか」

額を私の肩口に押し付けてそう続けたアルファの声が余りにも情けなくて、ふうと吐いた溜息とともに怒気が抜けてしまった。まあ、実際、本当のことをいわれたから気に障っただけで、アルファが悪いわけじゃなくて私が悪いのだ。

「怒ってないよ……ごめん。大人気なかった……」

「大人って……マシロちゃん、僕を子ども扱いしないでください、一つしか変わらないでしょう？ それにさっきのは冗談だって」「ホントだよ。私、太ったと思う」

アルファが子どもじゃないのくらい分かってる。嫌ってほど痛感させてもらいました。でも、そのことをこの状況で認めるのは拙いような気がして、私は話を戻した。

なんか自ら認めて口に出すと、一緒に涙まで出てきそうだ。

恥ずかしいし情けない。

「え？ 僕、グラム単位では分らないですけど、変わってないと思いますよ？」

「もう良いよ。だって、スカート入らなくなってたし……」

ごによごによと前に回っているアルファの腕に顔を埋めるように呟いた私に、アルファが背後で首を傾げたのが分かった。

もう、この話題から遠ざかって欲しいのだけど……。

「それ、何かの間違いじゃないですか？ 僕、伊達に毎日マシロちゃんに抱きついてないですよ？」

「うー、間違いじゃないよ。も、もう、そのことは良いからさ、えと、その、恥ずかしいからみんなには、いわないで。えっと……ブラックには特にいわないで、ね？」

アルファはようやく私から腕を解く。

寮に戻ろう。と、私が振り返るより先に、ぐいっとな肩を押されて壁に押し付けられた。さっきまで背中ではアルファの体温で温かったのに、急に石の冷たさに全て奪われていく。

(5)

「ちょ、アルファ、痛いよ」

「ブラックはマシロちゃんの見た目が変わったら、マシロちゃんから離れてくれるんですか？」

「え」

真摯な瞳で見つめて率直に問い掛けてくる。

「そ、そんなの、分かんないよ」

多分、大丈夫だと思う。大丈夫だと思うけれど、絶対かどうかは分からない。というか、アルファの目が怖い。

どうして良いか分からなくて揺らいでしまった瞳に、アルファは、はたと我に返ったのか。腕の力を緩めてくれた。

「ごめんなさい。僕だったら絶対にそんなことないっていえるから……だから、その……ごめんなさい……」

私の身体から腕をするりと離して、俯いてしまったアルファが背にしていた、明り取り用の窓から光の筋が、すうっと走った。

その刹那の煌きに「あ」と場違いにも声を漏らしてしまうと、アルファが顔をあげて背後の窓辺に歩み寄る。

「残念」

と零しながら私にもおいでと手招きした。そろりと歩み寄って外を見れば多くの屋根が邪魔をして遠くまでは見えなくなってしまうているが、その屋根屋根の際が薄っすらと光と帯びて見える。

「さっきの場所からだ、地平線に光が走るんです。それを見せたかったんだけど……」

—— ……今日は僕の好きなところへ連れて行ってあげます！

とキラキラの笑顔でそう告げてくれたアルファを思い出して、私は急速に申し訳ない気持ちになってきた。

「マシロちゃんに、僕の好きなもの沢山見て欲しかったです。あー……でも、その、無理に引っ張って連れまわして、ごめんなさい」
それから、泣かせちゃって……と肩を落とすアルファに、ごめんと口に出ないくらい申し訳ない気持ちになってきた。

ぽつぽつと塔の中に魔法灯が灯り始めた。

太陽の残り日が消えてしまったら、今日は終わってしまう。

胸の中に、すうつと冷たい風が吹き込んできたような気がした。

「ねえアルファ？」

くいくいつと腕を引くと、アルファは「何？」とこちらを見下ろしてくる。

「また、一緒させてね」

「……だから、別に変わってないっていつてるのに」

「そうじゃなくてっ！」

「？」

「そうじゃなくて、また、アルファの好きなもの見せてねっていつ

「てるだけだよ」

なんとかにこりと口にすれば、アルファは暫らく私の顔をぼかんと眺めたあと、とびきりの笑顔で「はい、もちろんです」と、答えてくれた。

今度は、普通の道を通って欲しいのだけれどと付け加えれば「善処します」と帰ってきた。

普通に進む気はないらしい。

「―― …… あれ？ えらくゆっくりしてたんだね？」

アルファと仲良く寮に戻ってくると廊下でばったりエミルに会った。アルファは、その姿ににこにここと「聞いてくださいよーっ」と駆け寄る。何をいうんだか、と、どきどきしつつ私もそのあとに続いた。

「今日ね、マシロちゃんとデートしてきたんですよ。悪漢からも守ったし、いっぱい良いところに連れて行ってあげたんですよー」

本当に楽しそうにそう口にするアルファに否定的な言葉を投げることはとても出来ない。そうなの？ と私をちらりと見たエミルに、そんな感じと苦笑して肩を竦めた。

「そう、良かったね。でも今度は悪漢に出会わないようなところを選んで、デートしてね」

エミルの着眼点もちよつと違う気がするけど、まあ良いや。それが、らしいのだろうとこつそり納得したところでエミルが抱えている袋に目が留まった。

「エミルも外に出てたの？ エリスさんのところにお買い物？」

私の問い掛けにエミルは、ああ、と頷いた。

「これ、マシロにだよ。寮監さんが預かったんだって。マシロ、午後一番に店に行かなかった？ 持って帰った袋を間違えてるからって、マシロが持って帰っちゃったものは明日にでもまた引き取りに来るっていつてたらしいよ？」

そこまで告げて、私にその袋を「どうぞ」と渡してくれる。かさと、袋の口を開けると、私が持って帰ったのと同じ柄が目に入っ

た。

その一番上にはメモが乗っていて、私はそれを袋から出すと廊下を歩きながら開く。

『マシロちゃんへ』

ちゃんと商品を手渡せなくてごめんなさい。

マシロちゃんが持って帰ってしまったものは、ステラおばさんちのお孫さんのスカートです。サイズが全然違うから、開いてみれば分かったかと思うのだけれど、本当にごめんね……また、明日にでも、窥います。

エリスより』

「——……子ども、服……」

「ほら、変わってないっていったじゃないですか」

脱力気味な私と、得意気なアルファを見比べて、事情の全く分らないエミルだけが首を傾げた。

兎に角、今回は誤解だったけれど……間違いじゃなくなる日もこのままじゃ来るだろうから、日頃から気をつけよう！ と、私は心に強く誓った…… —

「あ。それから、これ食堂のおばさんがマシロにとって……カップケーキを……」

そして、早速挫折しそうになった。

飼い猫の誘惑（前書き）

一部R15くらいに相当するかな？ という表現が含まれます。
苦手な方は回れ右ぷりーずです。

急に書きたくなっただけのお遊びネタですので、メルマガ小話く
らいの長さです。気軽に楽しみください。

（メルマガ配信済み）

飼い猫の誘惑

—— …… ぼすっ。

ベッドに身体を沈めて大きく深呼吸。

いつでも清潔な洗いたてのシーツの香り。持ち主とは不似合いなお日様の香りがする。でも、ここでもうすると、帰ってきたなー、ただいまー、と思うくらいには馴染んだ。

ベッドの上が馴染んだってどうだろう？ いや、でも眠りは大事だよ。うん。

私はそう納得させて、綺麗に並んだ枕を一つ引つつかんで抱え込むと、欠伸を一つ。長湯をしてしまったせいもあって、すぐにうとうとと睡魔が襲ってくる。

ブラックは少しだけ書斎を片付けてくるといつていた。直ぐに戻ってくるだろう。それまでの間、少しだけ……少しだけ、目を閉じていても、失礼にはならない、よ、ね……。

心地良く安らかな眠りに落ちる狭間に私は多分いたのだと思う。

「—— …… つんう…… つす、ぐったい……」

飼い犬とか飼い猫とかにじゃれつかれているような感覚。

…… 飼い猫？

正体に行き着いたのに瞼を持ち上げられない。

疲労感の方が勝っている。

勝っているから、黙っている。

反応が薄ければ、きっとそのうち諦めるだろう。諦めて、きっと一緒に眠ってくれると、思う……。背にした気配を無視して目を閉じていれば、首筋に何度か唇が寄せられて、肩から腕に掛けて撫でられる。夜着の上からではあるけれど、くすぐったいというよりは、心地良くなってくる。

身体が触れられることに慣れてしまっているのだろうか、と思うと気恥ずかしい。

相手をして、というように擦り寄ってくるブラック——それ以外だったら怖い——を無視していると、どんどん下がっていつてしまう。諦めて、ベッドを抜け出すのかな？ と思ったものの、ふわふわと身体を撫でていた手は、私の足をそつと撫でていき、舌で愛撫する。

「——……つつ、ちょ……と、や……」

膝の裏辺りを、つつつと舐められると、ぞくぞくとした感覚に楽寝は許されず、意識は無理矢理現実に戻される。

「ブラック、やめ、て……私、眠い……」

「駄目、です」

軽く拒絶してみても、同じく拒絶され、全くやめてくれる気配はない。それどころか、私の目が覚めて気を良くしたのか、より強く触れられる。

「んう、ちょ、ねえ……やめ、て、ってば」

膝の裏辺りを舐めていたのに、ふくらはぎに下がり軽く足を持ち上げられて、踝を甘く食む。そのまま踵を舐められて、つうつと土踏まずを舐められ、そのまま足の親指を含んでしまう。

口内で、つうつと爪と指の間に舌を這わされると、くすぐったいよりも意図しない甘い息が漏れた。ぎゅうつと抱いた枕に力が籠り息を殺す。

「ブラック……！」

大きな声を出したつもりだったのに、とても弱々しく甘ったるい声になってしまった。その声に応えるように上掛けから覗いた尻尾がゆらりと揺れる。

やめたと続けても、抵抗力がない。

じたばたと暴れても、簡単に強い力も掛からずに押さえつけられてしまう。

私、もう、どれだけ感じやすいんだ。自分でもちよつと情けなくなる。

それを分かっている、ブラックは、指の間へも舌を這わせて丁寧に舐めてしまう。緩やかな優しい眠りは、甘い疼きに完全に目覚めさせられてしまって、身体中がじんわりと熱を持ってしまっていた。

「っあ、ん、もう、やだ……って」

ぺろぺろと両足とも足の指も付け根も丁寧に舐め、手を滑らせる。息を殺す私に満足したのか、ブラックはもぞりと上に戻ってきて、

上掛けと私の間から顔を出し枕を取り上げて、ぽいと投げってしまった。

うううー……。

「相手してください、久しぶりに戻ったのですから」

ねえねえと擦り寄られて唸る。

確かに、週末も実技……というか実習的なものが入っていて、戻ったのは二週ぶりだ、それまでにちょこちょこ顔を見せてくれていたから、私はそれほど寂しいとは思わなかったけれど、猫は寂しかったらしい。

抱き締めていた枕の替わりにブラックを抱き締めて、文字通り猫っ毛の細く柔らかな髪の毛に頬を寄せる。

「でも、だからって、足舐めちゃ駄目だよ」

「どうしてですか？ 気持ち良さそうでしたよ？」

「っ！ そ、そんな、こと……」

なくはない。なくはないけど……

「綺麗じゃないよ」

「ごによごによといいわけのように口にした私にブラックはくすくすと笑いを零す。

「大丈夫ですよ。先ほど湯殿で丁寧に洗ってあげましたし、汚れているところなんてありません」

「——……っだ、だから」

そのお風呂でのごことで疲れて寝てたんだよっ！

私は口に出来ない台詞を飲み込んで変わりに、ブラックの耳を引っ張る。びくりとブラックの体が強張ったのが分かったけど、やめない。

取れたら怖いのであまり強くはしないけど……。

「痛いです」

「うん……知ってる」

「っん、」

痛そうな声を出すクセに、ずりずりと下がる。私はもう掴んでいるだけで引っ張らせているのはブラックだ。

「ちょ、ブラック、痛いんでしょう？」

「そういうのがお好みなら構いません」

そんなわけあるかつ！

しなつと口にしたブラックの台詞と、はむつと夜着の上から胸を食まれた感覚に驚いて手を離してしまった。拘束がなくなれば、そのまま深く銜えて暖かい吐息とともに服の上からでも分かるようになったしまった、一番高い部分に舌を絡める。

「っんう、や、」

「声、甘いですよ」

「だ……っ……んう」

シーツを掴む手に力を込める。

素肌を直接愛撫されるよりも淫猥で、妙ないやらしさに胸がどき

どきと高鳴り身体が熱くなる。体力的に辛いと零していたのに、直ぐに感じてしまう身体が憎らしい。

「ねえ、寂しかったんです。良いですね？」

唇を離すことはなく空いた手で器用にボタンを外し、するりと間から手を滑り込ませると、腰を撫で背に腕を回す。

そのまま、ぐいっと引かれてブラックの上に乘せられてしまった。視線を合わせると、大きな手が私の髪を撫で頭を引き寄せて口付ける。深く、濃く。上に居るのは私だから、嫌なら腕を突っ張れば良いだけだ、良いだけだけれど、

「—— …… ん、う」

口の端から熱い吐息を漏らして、ブラックの背に腕を回すとより深く口付けに答えた。

結局折れるのは私だ。

だって、ブラックはいつもぎりぎりのところで私が逃げられるようにしてしまうから、私はそれが出来なくなる。本気で嫌ならやめても良いという甘さが、私に絡み付いて離させない。

ちよっと、ズルイ。

大好きなズルさだ…… —

* * *

「シゼー、薬頂戴」

なんとか午前中の授業を終了させて、シゼの研究室の長机に突っ伏す。シゼは、そんな私に素直に眉を寄せて不機嫌そうな顔を隠そうともしない。

「貴方も同じ図書館生でしょう。どうしてここへ来るんですか」

「私とシゼじゃ、優秀さが違うよ。シゼの方が確実に確かなんだもん」

ぶーぶーっと重ねた私にシゼは深い溜息を吐きながら、滋養に良い薬を用意してくれる。

「全くどうして、休み明けの貴方はそうなんですか？ 週末何をしてるんですか！」

「え、えーっと、ギルド依頼？ とか？」

とりあえず、嘘を吐いた。嘘はいけない、でも正直に戯れが過ぎたとはいえない。いえるわけない。

「もう、金銭的に苦しいわけではないでしょう？ 管理者の方たちに甘えられているのではないですか？ マシロさんが断れないようなら」

「大丈夫っ！ 大丈夫です。今度はちゃんと体力配分考えますっ」

慌ててシゼを止める。

そう、シゼは箱入りなのか、物凄く素直なのだ。

他三名とかに言えば大抵邪推されるに決まっている——本当のことだけど——ことでもシゼは私のいったことを信じて、疑っている

素振りはない。だから、つい、ここにきてしまう。医務室よりも、ね？

「本当、ちゃんとしてくださいよ」

仕方ないなという風に嘆息して、普通より早いタイミングで薬湯を出してくれる。……もしかして……

「用意してくれてたの？」

「そんなわけないでしょう！ さ、さつさと飲んで出て行ってください！ 僕は忙しいんです！」

真っ赤だ。必死に否定していることが、肯定していることになるって分からないのかな？

ぷいっとそっぽを向いて、シゼは私が来るまでにやっていた作業に戻った。シゼは本当に可愛いなー、ふふーっと笑いを零しつつ、用意してもらった薬に口をつける。

「——……甘っ」

どういう配慮か、シゼの薬は基本甘い。激甘だった……飲むの辛い。

でも身体もだるい。覚悟を決めて一息に呷り、もうブラックには流されないぞっ！ と、強く誓いを立てる。

それも毎回のことなんだけど……な。

天然系。(前書き)

カナイ視点です

天然系。

「お前さ、その無精ひげなんとかならねーの？」

大聖堂にて予定されていた授業を終え、片付けをしていた俺にちよつかいを出しにきたクルニアに迷惑そうなのを隠すこともせず告げる。

クルニアは微塵も気にすることなく、口の端で噛み締めた煙草のフィルターを苛めるだけだ。

「俺のひげはお洒落なの。モテ系なの」

「お前モテないだろ」

「……カナイってさ、俺に冷たいよな。これって愛？」

「お前の思考回路がさっぱり理解出来ない。愛情表現だと思えるお前はどんな状況下でも幸せだろうな」

ぱんつと鞆の蓋を閉じればポケットに入るサイズまで、小さくなる。

その荷物をポケットにしまいこんで、掛けたままになっていた眼鏡を外しながら面倒臭そう——いや、実際面倒臭い——に答えた。

その返答にも全く動じていないクルニアにはお手上げた。

「まあ、お前はモテるからな。可愛い子いたらまわして」

マシロちゃんとか。にやにやしながらそう付け加えたクルニアに、益々眉を寄せる。

「んで、そこであいつの名前が出るんだよ」

「出るだろー。マシロちゃん可愛いじゃん。ちまっとふわっとした感じが美味しそうだし」

「お前にだけは会わせない！」

「えー、カナイ独占欲強いなー、良いじゃん、減るもんじゃないし」
「減る。確実に減る。お前何するか予想できない分、減る気がする。それから、あいつは俺のもんじゃない」

「え、やっぱり王子様のもん？ あのととき、お前弄りたかっただけなのに、マシロちゃんが迷惑被ったと、俺、何日か眠れないくらい怒られたもんなー……」

「あれは、お前が悪いだろ」

苦い記憶（小話：親指姫の憂鬱）が蘇りぶつぶつと不機嫌そうにそつつげて、さっさと実習室を出て行く。

足早に歩く俺の後ろを、カツカツと白衣をひらひらさせながらクルニアはまだ着いてきた。

どうやらかなり暇らしい。

「俺を図書館まで送る気かよ」

気持ちが悪いから勘弁してくれ、と続けた俺にクルニアは「まさか！」と大仰に肩を竦めたあと、ここまでだよ、と笑って礼拝堂の一角を顎で指す。

「っ！ あいつ」

その先には珍しい姿がある。苦々しく、クルニアを振り返ったあと、煙草を啜えなおしていたクルニアを無視して、その姿に歩み寄る。

「お前何やってんだよ？」

「あ、カナイ。待ってたんだよ。配達でこの辺まで来たからさ、出るときにエミルが今日はカナイ大聖堂だっていつてたし」

俺の苛々を察することもなく、にこにこそう告げるマシロに益々不機嫌に続ける。

「お前な、ここに一人でふらふら来るなってあれほど……それに俺がもうとつくに帰ってたらどうするつもりだったんだよ」

「そのときは、適当に引き上げるだけだけど？　いたんだから良いじゃない」

子どもじゃないんだから、と少し不貞腐れたようにそういつて立ち上がったマシロは続ける。

「大体、ここは一般解放されてるところだし、別に問題ないでしょう？　折角待っててあげたのに、ありがとうの一言もないなんて……」

「俺はマシロちゃんに会えて嬉しいよー」

むかむかとした怒りを露わにしていた俺を押しつけて、前に出たクルニアに、マシロは数回大きく瞬きをしたあと「こんにちは」と軽く頭を下げた。

「クルニア、さん、でしたっけ？　カナイのお友達の」

「そうそう、おともだ」

「友達じゃねーよ。ほら、帰るぞ」

「えー、カナイ良いじゃん。マシロちゃん、折角大聖堂に来たんだし、散策してかない？　俺が案内してあげる」

クルニアのここにこにはにやにやにしか見えない。実際そうだろう。いつて素早く手を伸ばすとマシロの手首を掴まえた。

マシロはとろくさいので避けることも出来るわけない。

「マシロちゃんだって、気になるよねー。大聖堂の内部なんて関係者しか入れないし」

「じゃあ、マシロは関係者じゃないだろ」

「うわー……それいつちゃうんだ、お前が。まあ、良いよ、俺の関係者ってことにするから」

クルニアは一切引かない。大聖堂内で無闇な術発動はご法度。やってはいけないことだ。際限ない連中が多いから。一番厳しく取り締まられる規律でもある。

ぐいぐいとマシロの腕を引いてしまうクルニアに、僅かに躊躇したが仕方ない。俺は今、大聖堂生徒ではないし、構わないだろう。バイトはここ以外でも出来るし……。自分にいい聞かせて、術を発動させようとした瞬間マシロが声を上げた。

「用事がっ！」

「え？」

「用事があるんですっ！ あるんでしたっ！ え、ええと、ね？
ねえ、約束してたんだよね？」

いきなり話を振るな。

力強く目で訴えられて「あ、ああ」と頷く以外の選択肢を失くす。

「大聖堂の中はとっても魅力的なんだけど、ええっと、その、また、日を改めて……」

いいつつ、マシロはクルニアに掴んでいた手を空いた手でそつと

解いた。クルニアにも拘束するつもりはなかったのだらう。直ぐにその手は離れて、はとが豆鉄砲くらったみたいな顔をしている。

「煙草、落ちますよ?」

いわれてクルニアは慌てて口の端で支えていた煙草に手を添えた。そんな、クルニアをマシロはくすくすと笑ったあと、今度はマシロが俺の手を取って、ぐいと手を引いた。

「っ、おい?」

ほらほらと引かれて、俺はちらとだけクルニアを見て、そのまま背を向けた。もう、二度とクルニアと顔を合わせたくない、心から思うような顔をされてしまった。

がつくりと頂垂れる俺に、丁度小突きたくなる位置に頭頂部のあるマシロが気がつくはずはない。

もう、あいつに絡まれるのは諦めるしかないな。

* * *

「なんで諦めたんだ? お前、ああいうの好きだろ?」

大聖堂を背にし、俺はずんずん歩くマシロに問い掛けた。好奇心の塊みたいな部分があるから、行こうといわれて嫌だとは思わなかった。

「んー、興味、なくはないけどさ、カナイ。危ないことしようとしたでしょ?」

ちらりと睨むように見られて、ちょっと構える。

「別に大したこと考えてない。面倒だからクルニアを弾いてやろうとは思ったけど……」

ぶつぶつと口にすれば、弾く？ と眉を寄せる。う……、どうして、俺はこいつに弱いんだ。情けない。

「そんなことだと思った。カナイって見た目に反して、結構アブナイ系だよな。ある意味アルファと同等、もしくはそれ以上喧嘩っ早いかもしれない」

「冗談だろ。あいつほど頻繁に、揉消さないといけないようなことやってない……と、思う」

アルファは、情報操作とか面倒臭くなったら元から絶つタイプだ。最近はその頻繁ではなくなったものの——マシロにいわせれば、物騒といわれるようなことは少なくなった——ゼロじゃない。

俺はゼロだ。

いや、まあ、さっきは始末書レベルのことはやろうと思ったけど……面倒だから。って、これじゃアルファと同レベルだった。

「カナイの恥ずかしい話を一つ」
「は？」

「だから、止めたお礼に……」
「あのなあ、お前があんなところで、ばやーんっと待ってなかったら、普通に帰ってたんだよ」

ったく。俺は恥ずかしくねーよ。

「ふーん……そんなこというんだ。カナイの好きそうなもの、今日の依頼の途中で見つけたんだよねー。あれは職人技だったなあ。あんな細かい仕事他では見たことないよ」

「どこ？ どこでだ？」

おかしいな。このあたりの店はチェックしているはずなのに。

は……思わず食いついてしまった。そう、気がついたときには遅かった。マシロは、にやりとクルニアと同じように意地の悪い笑みを浮かべて顎を上げた。

「今度何かおごつてやるから」

「えー、今日じゃないんだ」

「今日はこれからそれを見に行くんだよ」

「カナイも好きだねー……」

「別に好きで良いだろ？ 気になるんだよ……」

自分に足りない何かが。本当に、素養なんてものを持っていないと、それ以上なんてことが出来ないんだ……魔法具の調整は苦手じゃないんだけどなあ……。

「カナイは出来ることの方が多いんだから、無理に粗を探すようなことしなくて良いじゃん。自虐趣味ー……」

「は？」

少し前を歩いていたマシロが振り返り眉を寄せる。
失礼な。俺は自虐趣味なんてない。

「……俺に出来ることなんて魔術系のことだけだ」

「そんなことないよー、うん。頭にも残らないのにあれだけ本を読もうと思うのも、カナイくらいだと思うし、あんなに大好きなのに小動物に避けられるのもカナイだけだと思うし。どんだけ妖しくてもエミルの『大丈夫だよ』の一言で薬飲むし」

私には到底出来ないことばかりだと半笑いで告げられる。

こいつ……。

俺は引きつる頬を押さえて眉を寄せた。

「私、実はカナイって馬鹿なんじゃないかと思うんだよねえ」

「本人前にして、いうことかよ」

「本人前じゃないといわないよ。こんなこと。私、陰口みたいなこと好きじゃないんだよね。面倒臭い」

にこりと微笑んでそういったマシロにどきりとした。竹を割ったようなとか、裏表がないとか……そんな風にいうのだろうけど……こいつの場合は、それだけの器用がないんだろーと分かる。

器用がないくせに、こういうわけか欲しがる言葉はいい当てるし、他人の機微を察しやがる。

術発動の魔力の動きなんて術師でも読み取るのは困難だ。

普通出来ない。

こいつも出来たわけじゃない。

わけじゃないけど、マシロは俺を知っている。知っているんだ…

…

「よし。今日おごつてやる。何が食いたい？」

そこに行き着くとなんだか急に気持ちが晴れた。

「ちょ、頭の上に腕乗せるのやめてよっ。縮むでしょ」

「気にするほど伸びてねーだろ」

「だからだよっ！それに、食べ物限定って、カナイ私のことなんだと思ってるの」

「マシロだよ」

「は？」

「だから、マシロだと思ってるよ」

出てくる笑いを堪え切れなくてそういつて笑った俺にマシロは怒っているのかなんなのか、顔を真っ赤にして「もうっ！」と顔を背けてしまった。

今日もシル・メシア王都は快晴。

本当に、悪天候とは無縁の場所だ。ほんの少し寒さが増してきたとはいえ、息が白くなるにはまだまだ掛かる。

「今日は何かないかな？」

「あるよー」

「あるあるー」

私は午後、暇を持て余して、ギルド事務所を訪ねていた。いつものようにギルド管理者をしているテラとテトに笑顔で迎え入れられる。嬉しいけど、ちよつと、正直……なんというか、耳に痛い。二人同時に声を発してもらうと酔いそうだ。

苦い笑いを零して「どんなやつ？」とカウンターに歩み寄った。

* * *

ぽちやんと天井から水滴が落ちて、私はぴくりと肩を跳ね上げた。

「エミル、エミルってさ、常に冷静だよね、物事に動じないよね」

「んー？ そうかな」

「だって、この状況で焦ってないんでしょう？」

眉を寄せ思わず嘆息してしまう私とは対照的に、エミルはのんび

りと岩肌を撫でて、周りを物珍しそうに観察していた。

ここは、紛うことなき洞窟だ。それ以外に表現する方法はないくらい、はつきりと洞窟だ。白骨とか転がっていそうなイメージではない。どちらかといえば湿った空気が立ち込めていてひんやり。そして、爬虫類とか低温動物が好みそうだ。

因みに入り口は崩れた。

落盤した。

つまり出口もついでに塞がれてしまったわけで、私は普通に焦っている。

私の掛けた台詞にも、エミルは「焦る？」とのんびり首を少しだけ傾けてきっぱりと答える。

「大丈夫だよ」

その泉の如く湧いてくる自信が、どこからなのか是非とも聞きたい。

「で、でも、頼みの綱のカフスだって落としちゃったっていったでしょ？ ブラックも今日明日は連絡が取れないっていったんだよ？」

凄く珍しいことではあるけれど、時々ある。海を渡った先へブラックは出張中なのだ。

落盤の衝撃で、少し被ってしまった土ぼこりをエミルが丁寧に拭ってくれる。でも、私は子どもではないので、そのくらい出来る……と、力説しても、結局私が折れるのは目に見えている。だから最初から、エミルの好きに、やって貰いながらぼんやりと思いつく。

＊ ＊ ＊

「え？ 珍しいね？」

「ええ、本当は物凄く嫌なんです。本当は貴方の傍を離れたくはないんです。ですが、マシロには、きっとそうしたほうが好かれると思うので、我慢します」

ブラックの意味不明な台詞に首を傾げれば、説明を加えてくれる。

「離島で、大聖堂が大きな魔術実験を行ったんですよ。どうやらそれが大きな失敗をしたらしくて」

あっさりと口にするけれど、ブラックが動くのだ。人が沢山消えてしまったのかもしれない。

「地形も少し変わってしまっていますし……その確認と、種の回収なんですけど」

ごにごによと続けるブラックに苦笑する。別に私はブラックの仕事に今更否定的な気持ちはない。何か後ろめたく感じる必要もないのに。

「以前なら種だけ回収して戻るのが」

いつて、ブラックは嘆息する。大体、大聖堂も自分たちの失敗くらい、自分たちで尻拭いをするべきなんです。とぶつぶついいながらも、諦めも入っているのだろう。強くはいわない。ただ、本当に

私のことだけを、気に掛けていて迷っている。

「やっぱり、そうして帰りましょうか。マシロのことにも心配だし、やっぱり嫌だな……」

「平気だよ？ そんな何日もあけているわけじゃないんでしょ？

私だって子どもじゃないんだから……それに、平日だし、普通に授業受けて、普通に簡単なギルド依頼受けてあとは寮に居るだけだし、変わらないよ？」

「……それは、私が居なくても良いという意味ですか」

あ。ブラックが不貞腐れた。

不機嫌そうに寄せられた眉とは対照的に、耳がしょんぼりと垂れている。

「違うよ。心配しなくても良いよってってるだけ」

「本当に？」

可愛らしく重ねられると、噴出してしまいそうだ。

どうして、美形で綺麗系なのにこんな可愛いんだろう？ 笑える。

「でも回収以外に何？ 地形でも直すって？」

私の頭では良く分からないけれど、有り得ないことでもやってのけてしまうのが、ブラックだし、何をいっても今更驚かない。

「違います。その……現地で、白化も済ませて帰ろうと思っていて……」

「こによこによ」といいつつ、やっぱりやめようか。と、迷っている。

その姿がとても愛しい。

そこまで説明してくれば、それが私のためだと直ぐに分かる。ブラックは、私のためにしかそんなこと考えないだろう。そう思うととても嬉しい。

「ありがとう。ちゃんと、残ってる方に返してあげてね」

「……私のこと、もっと好きになります？」

見下ろされているのに、見上げられている気分だ。

どうしてこの猫は、本当にこんなに可愛いんだろう。ぞくぞくする。警戒し様子を窺うように揺れる尻尾が視界に入る。

「なるよ。沢山、好きだよ、大好き」

にこりと答えれば雲が晴れた空のように、ぱあっと表情が明るくなる。

「ちゃっちゃと終わらせて直ぐに戻りますから、危ないことしないでくださいね？」

「しないよ、約束する」

* * *

—— ……約束、したのになあ……。

「僕ってそんなに頼りないかなあ？」

ぼんやりと物思いに耽っていた私に、エミルは寂しそうに零した。慌てて、そんなことないよっ！ ととりなしたのに……

「まあ、何も出来ないけど……」

あっさり口にされる。

何か出来るのかと僅かに期待した私の予想を簡単に裏切って、にっこりと微笑み肩を竦める。

「ちょっと、探検しようか。奥にいつてみよう」

「え、でも、こんなに暗いの……」

この場に居たほうが安全なような気がしなくてもない。うろろうしても、大丈夫なものだろうか？ つい、不安が態度に出てしまった私にエミルは「ああ」と何か納得したようで、話を続けてくれた。

「僕は割りと夜目が利くんだけど、マシロは普通だよな？」

「え、あ、うん…… ちょっとここにエミルが居るなあとか、表情が気配で分かるくらい」

「ふふ、気配で表情まで分かってくれるんだ？ 恥ずかしいね？」

「えっ！ いや、だから……」

「僕もマシロがどんな顔してるか分かるよ」

くすくすと笑ってそういうエミルがどんな顔をしているかなんて誰にだって想像つくと思う。別に私が特別敏感に感じ取れるというわけじゃない。慌てる私を楽しそうに見るエミルはいじわるだ。私は「もう！」と怒ってエミルの腕を叩こうと思って手を挙げると、その手をひよいと掴まえられ引き寄せられた。

「足元危ないよね…… ええと、ちょっと待ってね」

いいつつ、エミルは、自分で私を引き寄せたくせに「少しの間だけ壁に触れてて」と、そつと壁に触れさせた。ひんやりとして、少し水分を含んだ岩肌だ。エミルは私がふらふらしていないのを確認してから、少しだけ離れた。

反射的に「え」と不安そうな声を漏らしてしまった私に、エミルは「大丈夫、少しだけだよ……」と口にして、いつもの優しい笑みを浮かべてくれたのだと思う。

その雰囲気だけで、私の不安は、すうっと静かに引っ込んだ。

私が「うん」と頷いたのを確認してから、エミルは、注意深く足を元をこんこんと弾いていく。途中でぴしゃんと水が跳ねた。窪みに溜まっている水があつたのだろう。

「動かないでね、濡れちゃうから」

そういったエミルに頷くと「せーの」とひと声かけてエミルは盛大に水を撒いた。

「う、わ……」

思わず声を漏らした。

エミルが撒いた水が地面に落ちると、光の道が出来る。辺りには小さな光の粒も舞う……。というかこれ……。

「光虫……だよね」

「うん。正解。これで少しは明るくなったかな？」

光虫といっても本当に虫ではなくて、ヒカリゴケの一種だ。水に反応して胞子を撒くのでそんな名前がついていて、今回の採取すべきものでもある。

「こんな手前に群生してるなら、奥がどうのここのというのはなかったね……」

「そうだねえ、まあ、入り口、この場合出口かな？ も、塞がっち

やったし、やっぱり奥にいつてみよう。何処かに抜けてるかもしれないし」

多分、行き止まりだと思うけど。にこにこと付け加える必要ないよね。そんな不安要素。私は、短い嘆息を零して、伸ばされた手を取った。

エミルは重ねた手を、きゅっとしっかり握ってくれる。

微塵もこの状況に危機感を持っていない様子のエミルは、私を十分に冷静にしてくれた。

私はエミルの傍に寄り、一緒に歩く。

奥はどのくらいあるのか分からないけれど、横幅はそんなに狭くはない、でも、洞窟内は薄暗いし、湿気が多く少し肌寒い。自然とエミルの腕を取り、もう少し近く、と、思ったものの、あまり近くなると歩き難いかもしれない。私は少し遠慮して距離を取った。

「歩き難いから、良かったらもう少し近くに来て？」

躊躇した私の機微に直ぐに気がついてくれたのか、そういったエミルは私との距離を詰めた。え、と声をつめた私に、エミルは「駄目？」と可愛らしく問い掛けてくる。私が駄目じゃないというのは、想像に硬くないハズなのに、ね。

エミルは、育ちのせいかいつでも私を“お姫様”扱いしてくれる。最初は、もっとずっと戸惑っていたのだけど、今はあまりにもスマートな対応に慣れてしまった。

「ありがとう……」

短くお礼を告げた私に、エミルは「どういたしまして」と答えて

腕に添えた私の手を、大丈夫というように二度叩いてくれた。

足で踏みつけるたびに、ふわりふわりと光の胞子が舞う様子は幻想的といえなくもない。暗い場所では水を撒いたくらいじゃ発光しないから、出入り口があった状態では気がつかなかった。

エミルは時々、足先で水を弾いて視界が途切れないようにしてくれる。

「……出られなかったらどうしよう……ごめんね、巻き込んで」

とぼとぼと歩きながら、私は頂垂れる。

ギルド依頼はこの光虫採取だったのだけど、王都の中には生えていない。誰か一緒にと図書館に戻れば、今日に限ってエミルが一人だったのだ。

エミルはもちろん二つ返事で了承してくれて、馬を出してくれた。そんなに遠出ではないから、夜には戻るつもりで出た。特に危険な地域でもないからと特別な準備もない。

「そんなに不安そうな声出さなくて大丈夫だよ。巻き込まれたとは、僕思ってたないし、寧ろマシロを一人にしないで良かったと思ってる」
「子どもじゃないから大丈夫だよ。一人だったら一人だったで、良い子で待ってるよ。助けに来てくれるでしょう？」

「勿論来るよ。勿論……」

私の冗談めいた台詞に、エミルは強く答えて、私に触れていた手に力を込めた。

「アルファなら粉碎するだろうし、カナイならあの程度の瓦礫あつてないようなものだ。でも、僕はどうにもしてあげられないから、

やっぱり一度王都に戻ることになる、だとしたら、マシロは数時間ここで一人だ。そんなの僕が絶対耐えられない」

「……エミルが？」

私が耐えられるかどうか気がかりだというのなら、分かるけれど、エミルがつて……いい間違いかと思って問い直したけど、エミルはあっさり「そう、僕が」と重ねた。

「マシロは頑張り屋さんだから虚勢を張るだろうけど僕は嫌。そんなことを、マシロにさせるくらいなら一緒に迷っているほうが良い」
「え、ええー……っと、ありが、とう？」

返答に困ってそう告げれば、エミルはくすくすと笑って「どういたしまして」と返してくる。

「それに、どんなにカナイたちが時間が掛かったとしても、何日もここに居るなんてことにはならないよ。僕らはギルドの依頼でここに来ているんだから。多少時間が掛かっても夜明けまで、だと思っ
よ」

こういうところ、私はエミルの潔さだと思う。

自分を良く分かっているというか、身分のある人はそうなのかもしれないけど、頼りにするということに遠慮がない。

カナイたちが自分を探して当然だと思っているし、微塵も心配していない。もしも、来なかったら、なんて万が一にも有り得ないと本気で思っている。

—— ……まあ、確かにあの二人はエミル教信者だから、確実に探すと思うけど。

くすりと笑ってしまった私に、どうしたの？ と聞いてきたけれど、その返答を待たずにエミルは足を止めた。

「終点、みたいだね。思ったより深くない」

辿り着いた先は広い空洞になっていた。鍾乳洞だ。洞の奥半分くらいが水場になっていて、天井からと地面から無数の鍾乳石が突き出している。

その皇かな岩肌には、発光系のコケでも付着しているんだろう。光源の少ないこの場所で僅かに光を帯びている。ここまで通ってきた、横道に比べればずっと明るい。ぼんやりとしたものではあるけれど……。

とても幻想的で、神秘的なところだ。空気だけなら、聖域のものと酷似していると思う。

「曲がったつもりはないけど、海が近いのかな？」

エミルが、あたりを観察しながらぼつと述べる。

「このあたりまでくれば急に落盤したりしないだろうから、少し休もうか？」

落盤？……あ、そっか、そうだよね。

出入り口はそれで塞がっちゃったんだし、その付近でじつとしているのは安全とは考え辛い。だから、エミルは探検なんていい出したんだ。

「凄い綺麗だね……なんか泳いでる……」

おそろおそろ、水辺によって水面に目を凝らすと、小さな黒影が、すいーっと泳いでいくのが見えた。

「気をつけて、あまり水辺には寄らないで」

ぐっと腕を引かれて、私はよろりとエミルの腕の中へ納まる。エミルは、私ではなく水の奥へと瞳を細めて、水面を睨んでいたが、ふうと肩を落として、とりあえず離れようと促した。

「とても静かだから、ここに直接の危険はないと思うけれど、何が生息しているかわからないから、水場には寄らないほうが良いよ。もし、引き込まれでもしたら、助ける方法が極端に少ない」

きつぱりと口にしたエミルに、私は胸がきゅっと苦しくなり、暗い水面をちらりとみてから、顔をそむけた。確かに底が見えるところもあるけれど、深いところもあるかもしれない。そこに何がいるかなんて私には分からない。

エミルは私が納得したのに頬を緩めると、少し休もう。と、壁際の岩に腰を降ろした。そして手招きして自分の膝を叩く。

多分。

いや、絶対そこへ来いということだと思うけど……

「と、隣で良いです」

「駄目だよ。濡れちゃうかもしれないし、それに出来るだけ傍に居て。僕、念のために一つだけ結界石を持ってるんだ」

いつてエミルはポケットから、もうこちらで見慣れてしまっていた緩く赤い色を放つ石を取り出して私に見せた。

「効果がある範囲も限られているし、離れているのは得策じゃない

よ」

「で、でも、膝は、その、私軽くないし」

「重くもないよ。それに、僕、カナイやアルファと違って役に立たないよ？ ほら、何か出るかもしれないし？」

にこにこ告げるエミルの笑顔に、私は思わず後ろを振り返った。

何もない。

怖いくらいの静寂があるだけだ。

ぼーっと暗闇に浮き立つ鍾乳石もおぼろげで恐怖心を煽る。

「おいで」

私が心を震わせるのを肌で感じたように、良いタイミングでエミルは重なる。私は、伸ばされたエミルの手を取って、足の間に入り片方の膝をお借りした。

物凄く近いけど……肌寒さはなくなったし、少しだけほっとした。エミルに触れられるのは陽だまりに抱かれているようだ。それなのに

「身体が冷えてるよ？」

大丈夫？ と、重ねられて緩く抱き留められると、いつも傍にある香りだけど、いつもなら落ち着く香りのはずだけど、私はぱあっと全身が急に熱持ったような気がした。

「ブ、ブラック！」

湧いてくる熱を振り払うように、急に声をあげた私にエミルは驚

いたと思うけど、そんなに変わらない調子で、くすくす笑うと「うん、ブラックが何？」と問い返してくれた。私は特にそのことで話題があったわけではないから、わたわた、ぐるぐるとしつつ何とか話を繋ぐ。

「獣族って、優秀なんだよね？」

別に自分の恋人が優秀だという話をしていてるわけではない。切り口がブラックからだったからそう思われても可笑しくはないんだけど……。

「うん。そうだね……重職。というよりは貴重な職かな？ に就くものには獣族が多いよ」

エミルは特にブラックに限った話ではないというように取ってくれたようで、ほっとした。

「ブラックもそうなんだけど、テラやテトだって、良くしてくれてるし、そんな風に感じたことなかったんだけど……やっぱり他の人とは溝があるんだよ、ね？」

私に対してみんな良い人だ。ブラックは勿論だけど、テラやテト、ティンだって良くしてくれる。でも、彼らは人間を良くはいわない。悪くもいわないけれど無関心だし平行線。下に見ている節もある。

「溝、かどつかは分からないけれど、やっぱり人間と獣族は違うかな？ 彼らは僕らよりずっと優秀だ。器の大きさが違うんだよ、だから自ずと備わる素養も変わってくる。だから、彼らが僕らのような人間と同じように肩を並べているという考えを持たないのも、分からなくもない」

「……そう、なのかなあ？」

「マシロは特別だから。だからきつとこの差を感じないで居られるんだよ。彼らの存在は人の劣等感を刺激する。世界にとって必要だからお互いに排斥されるようなこともないけれど、今以上の歩みよりもない……」

エミルは、どこかぼんやりとそう口にしながら前に流れてきていた私の髪を指に絡めとり、肩に回していた腕を私の頭に添えて自分の胸に引き寄せた。規則正しい鼓動が耳に届く距離だ。

「それが、普通？」

「それが普通」

エミルの答えは少しサミシイ。

けれど、世界が抱いている価値観を私一人が、変えるなんて無理な話だ。だから、私は、それ以上の問い掛けをしないことくらいしか出来なかった。

「ねえ、マシロ？」

少し疲れていたのかもしれない、僅かな沈黙が落ちただけでも、私は、うとつとしてしまった。その狭間から引き戻すようにエミルに声を掛けられて、私はぼんやりと返事する。

「マシロは、どうして、ブラックを選んだの？」

……突然の質問。そして今更な質問だ……そして、私はその問いに対して明確な答えを持つてはいはしない。

「—— ……そう、背中を押してくれたのはエミルでしょう？」

どこか投げやりな返し方だったかもしれない。

別に後悔もないし、責めている部分があるわけでもない。とはいえ、そんな風にとられても可笑しくない返し方だった。

でも、エミルは気分を害した風もなく、そうだね。と頷いて私の頭に頬を擦り寄せる。

「そうすべきだと思ったんだ。マシロがとても辛そうだったから……助けてあげたかった。でも、今でも『どうして』が消えないんだ」

心の中で浮かぶ『どうして』は、なかなか消えるものじゃない。それが私に向けられるようなことではなくても、明確な理由がそこにあったとしても、望む形でなかった場合、妥協した結果であった場合、どうしても消えないものだ。

みんな幾つもの『どうして』を抱えているのだと思う。

私の答えは、エミルの『どうして』を解消しては上げられないということも分かっていた。

「ねえ、エミル……」

「うん」

「エミルはどうして、私が好きなの？」

恥ずかしいくらい、自惚れた台詞。それでも、エミルから今も変わらず向けられる好意に名前を付けるとしたら『恋心』が一番に来るような気がする。そう、見せているだけかもしれないし。本当、なんて誰にも分からないけど……。

「私が、別の世界の住人だから？ 落ちて来たのが私ではなくても好きになった？」

「もしかして、僕は今試されてる？ それとも、意地悪をされてる？」

「——……分からない」

口にした私自身やっぱり分からない。

でも、いつでも感じてしまっている疑問だ。私は特別な人たちに愛されるには、普通過ぎる。

襲ってくる眠気を振り払うように、軽く首を振ると「大丈夫？」と問われ頷いた。

「違うと思ってるよ？ 僕はマシロだから好きなんだと思う。でも、マシロ以外の子が落ちてきていて、同じように面倒を見てあげるこ
とになったとしたら、大事にはするかなあ？」

「お姫様だから？」

エミルは王宮育ちの王子様だ。みんなに優しいけれど、フェミニ

ストでもあるから女性には特に優しい。女の子に冷たく当たっているエミルは、想像できない……。

私の陳腐な問いにエミルは、くすくすと笑った。

「そうだね。そうだけど……特別だからかな？」

「とくべつ」

「そう、特別。別の世界から落ちてくるなんて、特別だ。二人と居ない。珍しくて特別。世界の特別」

繰り返される特別に口を閉ざした私にエミルは「悲しい？」と問い掛けて頬を撫でた。そう聞かれると、悲しいかもしれない。寂しいのかな？

「悲しいっていつてくれたら、僕は嬉しい。不安になってくれたなら、僕はもつと嬉しい……」

身体にまわされていた腕に力が籠る。

「落ちてくる子は世界の特別。でも、マシロは僕の特別だよ。一方的に気持ちを押し付けるのは、悪いと、少しだけ思ってる……」

少しだけ。と重ねて、尚腕に力が籠る。

熱情に当てられて、どきどきしても、拒絶しても、構わないと思う。私には恋人がいる。別に別れたいと思っているわけじゃない。現在進行形で大好きだ。でも、どうしてだろう……酷いことしてるんだと思う、思うのに、私はエミルの手を弾くことは出来ない。

だからといって、必要以上のどきどきもしない。

落ち着いているというよりは、ぼーっとしている。水の中にも落ちているような、浮遊感もある……。

「マシロ、眠いのかな？ 気分は悪くない？」

「へい、き、と思う」

「ごしごしと目を擦りながら答えれば、優しい笑いが降ってくる。エミルの纏う空気は、とても穏やかで春の陽だまりの下でお昼寝しているみたいな気持ちになれる。」

「マシロの髪、綺麗だね……」

「いつて、優しく撫でられる。大きな手、気持ち良い。でも、こんな髪特別でもなんでもない。黒に限定すれば、ブラックの髪の毛のほうがずっと綺麗だし、同じ色身としてもカナイのほうが黒に近い。私の髪は赤みがあった黒だ。お日さまの下では、赤茶けて見えると思う。」

「誰とも違う、優しい色」

「そんなこといわれたことないよ」

「そう？ じゃあ、僕が初めてだね？」

「そんな、意味深ない方駄目だよ」

「意味深にいったんだよ。マシロに意識してもらいたくて」

「エミルのいうことはどこまで、私だけに向けられているのか分からない。嘘。ではないと思う、嘘ではなくて誠実な筈なのに、どういうわけか、不安になる。」

「瞳の色も綺麗。肌も綺麗、抱き心地なんて最高だから、絶対に離れたくなくなっちゃう……だから、そのどれも大好き、でも、一番の理由は……僕自身に向き合ってくれること。分からないことがあれば、知ろつとしてくれるところ。裏がないこと……教えて欲しい」

と願ってくれること……」

柔らかく唇が髪に触れ、こめかみに触れる。

「マシロの心が僕に向いていないこと、分かってる。分かってるのに、僕は好き。隠せない。隠せなくてごめん」

本当にごめん。と、重ねられると私は堪らなく苦しくなる。本当は拒絶したほうが良いのではないかと思っても、恋愛感情に変わらなくても良い、変わらず傍に居て欲しいと、願われ謝罪され、私は甘えてしまう。

「マシロは特別。特別な女の子……」

違うよ、私はただの弱い女の子。

弱いからいつでもなんでも確認したくなるだけ。エミルのためじゃない、私の安心のため、いつも不安な自分のため。自己保身のためだけに……沢山知りたいと思ってしまう。なんでも、どんなことでも……拒絶されない限り際限なく。

「もし私が死んだらどうする？」

だからこんな意地悪な質問だつて平気で出来てしまう。答えが怖くてブラックになら絶対聞けない。

エミルは僅かに息を詰め、短い沈黙のあと、静かに答えてくれる。

「もしも、なんてないけど、もしもそんなことがあつたら……きっと生き返らせる。死なせない……。マシロは種を有していない。肉体は勝手に乖離しない。だからきっと出来る。僕は、マシロを手放せない……」

ぎゅっと抱き締められる。

—— …… 死なせない。

か、とても重い台詞だ。

私は死を許されない。本当に私が生き返ることが出来るかどうか、置いておいたとしても、そう出来るようにきっと努めてくれるだろう。

私を生かそうとしてくれる。

きつと、みんな……。

有り得ないことが普通のこの世界では、それがきつと普通……

でも……もしもブラックなら一緒に死んでくれると思う。

口にすることも怖くて出来ないけれど、聞けばきつと即答。

私が終われば彼も終わる。

生き返らせるなんてこと、考えもつかないだろう。

そのくらい真っ直ぐで、馬鹿な人だ。

とても利口ではない。私はそこがとても気に入っている。

「――……死なないように気をつけるよ」

もぞりと少しだけ動いて、目を擦る。

なんか、本当に、眠い。

こんな緊張下で眠いなんて、私どれだけ図太いんだろう。

確かにエミルが居れば、色々心配しなくてもきつと何とかしてくれるとは思っけど……それにしても……ふわぁ……私は出てきそうな欠伸を噛み殺して、エミルの胸に額を擦り付けた。

エミルは私のそんな様子に、くすりと笑いを零すだけ。気分を害したり咎めたりはない。

「そっいえば、マシロ。昔付き合っていた彼に浮気、されたんだっけ？」

「……ん？ うん、そんなこともあった、かな……私、心が狭いから、弁解にも耳を傾けなかったの、覚えてる……」

そうだ。私は心が狭い。

何度も謝ってきた彼を許さなかった。許せなかった。そのくらい私だって好きだった。恋をしていたんだ。

たった一度でもその裏切りは大きい。今だってそのときのことを思い出すと胸が痛い。裏切られたり、相手の一番でなくなることが

怖い。

きゅつと唇を噛んだのに気がついたのか、エミルが短く「ごめんと口にしたのが分かる。別にエミルは悪くない。」

「このまま、ずっと、僕と二人ならマシロは傷付かないよ」

ずっとこのままなら良いのに……重ねて髪に顔を埋める。

じわりと伝わってくるエミルの吐息が暖かくて、心地良い……このまま、このまま……ずっと二人なら、私は裏切りにあうことはない。

「それじゃ、いつまで経ってもエミルは一番になれないよ？」

零れた笑いととも告げれば、エミルは当たり前というように「構わないよ」といいきってしまう。エミルの思いは不思議だ。

私にいわせれば、有り得ない。

……ああ、この世界には有り得ないことしかないんだった……。

「もちろん、マシロの一番になりたいけど、でも、無理でもこうして傍に居られて、抱き締められるくらい近ければ良い」

そうこの近さを許してしまっているのも私だ。元の世界でなら許さない。当たり前だ……と、思う。私もどこか有り得ないに染まってる気がする……自分に自信がなくなる。

「それにね……その彼の気持ち、少しだけ分かるよ？」

突然戻した話題の、意外にも感じるエミルの台詞に、私は顔を上げた。エミルは、軽く腕を緩めると、目を合わせて曖昧な笑みを浮

かべて肩を竦める。

「エミルも、浮気に正当性があるって思うの？」

少し険を含んだいい方になってしまった。私はやっぱり心が狭い。

「……うーん、正当だとは思わないけど、でも、彼の気持ちはなんとなく分かるかなあ？」

「私には分からない。全く分からないよ」

自然と語気が強まった私に、エミルはくすくすと笑いを零す。

「そうだよな。うん。そうだ。マシロは真っ直ぐで真っ白で汚れていないから……」

だから、エミルの中でどんな理想の女の子になっているか分からないけれど、私はそんなに良い子ではない。

許すという簡単な事だってあの時は出来なかった。

今はもう、怒っていない。苦い思いだけが残っている。

私に、彼を掴まえておくだけの魅力がなかったのが悪いとも思う。だから、今だっていつも不安だ。

「その彼、マシロのこととても好きだったんだと思うよ？」

なんとなく苦しく感じて、この話題から遠ざかって欲しかったのに、エミルはそうするつもりはないようだ。

「そんなことないよ。私はあっさり裏切られた」

「……練習っていつてたんでしょ？」

「下手ないわけだよな」

ぐつと眉間に皺を寄せた私にエミルは唇を寄せて、こめかみに軽く触れた。優しい魔法が掛かったように、荒立ちそうな心が凪ぎいた。

「エミル？」

顔を上げれば、エミルと目が合う。エミルはにっこりと笑みを深めて、何ごともないというように話を続ける。

「男って馬鹿なんだ。格好つけたがる。特に、好きな子の前では、下手なことしたくない。練習が出来るなら、どんなことでも予行練習しておきたいんだと思うよ」

「――……」

そんなの、分からない。

格好つけたいからって、そんなことするほうもさせるほうもどうかしている。

「エミルも、そうしたいと思うの？」

「僕？ 僕はどうか……」

曖昧に微笑む。曖昧に微笑んで……。

「……っ」

唇に触れてきた。優しくそつと唇を食まれる。

どこか頭がぼーっとしていて、それがキスだと頭で理解するまでに少し掛かった。

「練習？」

なんでこんなところで、私はエミルの練習台になっているんだろう？ 強い拒絶も出来なくて、ややわと重ねられる口付けにぼんやり問い掛ける。

唇が触れる距離でエミルが笑った。

「本番」

「……………」

「マシロに嫌われるのは嫌。それとも、僕にも練習が必要？」

必要かどうか、私には分からない。重力に負けた瞼をゆっくりと閉じる。ふ、と身体が軽く心地良くなる。

「…………私、どうしてエミルに、キス、されてるの？」

口付けの合間に、口にした問いが滑稽なのくらい、分かる。分かるのに緩い拒絶もやっぱり出来ない。気だるげに唇を開くと、ゆっくり深く長く口付けられどこか遠いところで告げられる。

「マシロのことが好きだからだよ…………ずっと、二人きりは無理だから、せめて今だけ…………それから……………」

それから、なんだろう…………？

その疑問が解消されることなく、私は深く落ちた。

* * *

次に目を覚ましたときには見慣れた部屋の中だった。

私が馬鹿になって居なければ、ここは寮の私の部屋だ。ぼーっともやの掛かったような頭の片隅で、記憶の整理をしたいけれど、出来ない。

私、何やってたんだっけ？

重たい身体を起こしたところで、気遣わしげなノックが聞こえた。私の返答を待たずに、扉は開かれて、起きていた私に少しだけ驚いた顔をされた。

「やっと、目が覚めたんですか？」

「——……ただいま」

「おかえりなさい。こちら、解毒剤になりますから、起きたのなら飲んでください」

ベッドまで歩み寄ってきたシゼは、お盆に載せてきていたマグを私に握らせた。

甘い臭いがする……。

反射的に眉を寄せると「苦くないですよ？」と可愛い声がかかった。薬は苦すぎて嫌だけど、甘すぎても駄目だと、どうして誰もシゼに教えてあげないんだろう。

そんな私も、いえずに居る一人だ。

「あの、エミルは？」

「エミル様でしたら、ギルド事務所に依頼完遂の報告に上がつています」

「私、は、何してるの?」

「寝ていたのでしょうか?」

……どうやって問い掛ければ、私はシゼから欲しい情報が聞きだせるのだろうか?

困惑した私に気がついたのか、シゼは、兎に角手の中の薬を飲むように告げて話を続けてくれた。

「昨夜遅く、カナイさんとアルファさんが、戻らないお二人を迎えにいったんですよ。そして、マシロさんは光虫の胞子の毒に当てられて、ぐったりと……。エミル様が、なるべく吸い込まないようにしてくださいましたということだったのですけれど、ゼロではなかったのでしょうか?」

確かにヒカリゴケ種は、胞子に微量の毒素を含んでいるものもある。

あの中では、視界の確保があまり出来なくて、細かな種類の特定までは至らなかった。エミルが平然としていたように思えたから、そんなこと頭からすっかり消えてしまっていた……。

私は、ちびりとマグに口をつけて、やっぱり甘いことを確認し、勢いをつけて一気に煽った。チビチビなんて飲んでたら途中で吐く。甘すぎて吐く。

うーっと唸った私の手から、シゼは空のカップを抜き取って「少し休んだら直ぐいつも通りに戻りますよ」と締め括った。

では、忙しいので、と、それ以上の説明もなく、シゼは部屋を出て行ってしまった。

それと入れ替わるようにエミルが戻ってきた。
普通に元気そうだ。にっこりと、いつもの穏やかな笑顔で「大丈夫？」と傍に寄る。

「私は、平気だけど……エミルは平気なの？ 毒って……」
「僕？ 僕は大丈夫だよ。ほら、僕は王族だから」

……意味が分からない。

余程、私が不思議そうな顔をしていたのだろう、エミルは説明を続けた。

「ある程度の毒には耐性があるんだよ。だから、自然界で浮遊している程度の毒性では僕は影響受けない。マシロは、辛かったかな？ 大丈夫？」

心配そうにそう続けて、ベッドの脇に腰掛けたエミルは私の頬にそっと触れる。

「だい、大丈夫っ！ 大丈夫だよっ！」

急にハッキリと思い出してしまった。

私、エミルにキスされて……。

いや、いやいや、夢かもしれない。

ふわあつと顔が熱くなるのを隠すことも出来ずに、僅かな希望を込めて問い掛ける。

「え、えええつと、私、エミルとキス、とか、して、ないよね？」
「したよ？」

—— …… したんだー、やっぱり。あれだけ都合の良い夢じゃないんだー……。

私は、あの人を責めることは出来ない。私ってば、私ってば、私……。うう。どうして、あのときなんとも思わなかったんだろう？いくら私がエミルに気を許していたとしても、凄く恥ずかしかったはずだし、避けなければならぬ事態でもあったはずだ。

なのに、私、私…… ぼーっとって、何？ 有り得ない。 毒？ 毒のせいかな？ 毒のせいだよ。ということとはつまり……

「き、緊急避難的な？」
「ううん。したかったから」

あ、ああああああ……。頭を抱えた私にエミルは楽しそうに笑う。

「良いよ。緊急避難的な感じで」

ふわふわと頭を撫でながら「マシロがマシロを許せなさそうだから」と続けられ、私は益々沈んだ。

「本当に、平気だからなかったことにして良いよ」

静かに続けられた言葉に、私は顔を上げエミルを見た。エミルの深い水の底の色をした瞳が、私を優しく見つめている。

「マシロが楽なように……」

続けて私の頭を抱え込むように腕を回すと、そのまま引き寄せて

髪の毛に口付けた。

「……エミル、私に甘すぎるよ」

「好きな子に甘くなるのは当然」

もう一度だけ、頭にキスを重ねて、エミルは立ち上がる。

情けなく、ありがとうと零した私にエミルは普段と変わらない調子で「シゼの薬ほどじゃないよ？」と続けた。

「あれ、何とかするように進言してよエミル」

「無理、無理だよ。あれはシゼの優しさだから」

多分……と、続け机の上の瓶に「報酬だよ」とじゃらじゃらと私に止める隙もなく銀貨を投下した。明らかに全額だ。

「それに、シゼの薬が無駄に甘いのはマシロの分だけだよ」

もしかして愛されちゃってるのかな？ と冗談なのか本気なのか分からない調子で口にしたエミルに私はがっくりと頂垂れた。

「ねえ、僕考えたんだけど」

「ん？」

そんな私に気がつくこともなく、机の端に体重を預けて、私に向き合い、にこにこいつもと全く変わらない調子で話を続けてくれるエミルに私は首を傾げた。

「王族は、一夫多妻制みたいな感じなんだけど、逆でも良いと思わない？」

「ぎゃ、逆って？」

「多夫一妻制とか」

エミルの冗談はいつも本気なのか嘘なのか分からない。カナイ曰く常に本気だそうだ。

ということは、これも本気……本気でそんなことを考えているメリットが意味不明だ。一夫多妻制には理由がある。あるのだろうと思う。一人の女性が繋ぐ命の数は限られている。その観点からどうしても多く必要なことだってあるだろう。私はそこに含まれたくないけど、決して。

「メ、メリットは？」

恐る恐る問い掛ければエミルは「メリット？」と繰り返し、んーと唸る。唸ったあと、ぽんつと手でも打ちそうな閃き顔で

「心の平穩」

と人差し指をぴんつと立てて、にっこり告げてきた。告げられてもっ！ いや、いやいや、待て、まだもしかしてが残っている。

「ハーレム作ろうつて奥さんは、た、大変だね？」

「え、マシロ大変？」

やっぱり私かっ！ 流れ的にそうじゃないかと思ったんだけど、あまりの有り得なさに全否定したかった。

「そっか、大変。大変だよね……うん。みんなマシロが大好きだから……」

その折っている指は誰を数えているんですか?! 折り返してき
たんですけど……勘弁して下さい。みんなからの愛。重すぎます…

赤くなったり青くなったりしているだろう私に、エミルは歩み寄
って来て、ぽすつと頭に手を乗せてそつと撫で、顔を覗き込んでく
る。

「薬効いてきたみたいだね。良かった……」

「え？」

「うっん。なんでもないよ。今日はゆっくり休んでいてね」

外出禁止。と可愛らしく付け足して「また、誘ってね」と重ねた
エミルに、うんと頷けば、とても幸せそうな顔をされてしまった。
ほんわりと私の頬まで熱くなる。

* * *

「なんだ? 思ってたより直ぐ回復するんだな?」

エミルが出て行って暫らくすると、カナイとアルファがどやどや
と押し掛けてきた。私が平気だといって、二人にお茶を準備してい
ると、持ってきた多分私へのお見舞いと思われる品をアルファが、
開封……試食しているのを横目で見ながら、カナイが告げる。

「うん。そんなに毒性の強いものじゃなかったみたいだし。心配し
てくれた? ありがとう」

と気楽に声を掛けて、お茶を出す。

二人はそんな私の台詞に、顔を見合わせてから私を見た。なんだろう？

「そうなのか？」

「え、」

「だって、マシロちゃん、真っ青だったんですよ。僕、駄目だったのかなーと思いました」

……アルファ、あんたはもつと気を遣え。

「あのねえ、ヒカリゴケ種の胞子には毒性を含むものも多いけれど、直ぐに生死にかかわるような猛毒種はないっていわれてるんだよ？」

私でも知っていることだ。

眠気が襲ってきたり、吐き気があったり……軽い幻覚症状を起したり、そんな程度のものだったと思う。

「それに、何よりエミルさんが、見つけたときは元気そう、というか、どうしてだか、機嫌良さそうだったんですけど……」

「――……」

それに関してはノーコメントです。知りません。私は何も。

「マシロちゃんの様子が確認出来るようになって、思ったより多く胞子を吸っちゃってたみたいで……エミルさんとたんに真っ青になっ……」

あんなに動じてるエミルさんはじめてみました。と、感慨深げにアルファは頷いて、机上のロールケーキを頼張る。フォーク出すか

ら、丸ままかじりつこうとするのやめて……。もう遅いけど……。

「自分自身に変化がなくて、気がつくのが少し遅かったんだと……。それで、スゲー責任感じてたみたいだぞ？ 甘かったって、凄い悔やんでた。だから、俺も結構やばいのかと思ってた」

「まさか！ シゼだって大丈夫だっていつてくれたでしょう？」

私の台詞に、カナイとアルファはもう一度顔を見合わせて「それはそうだけど」と前置いて「なー？」「ねー？」と可愛らしく頷きあう。

そういえば、この二人は薬師素養がないから細かいことまで覚え切れないんだよね……。

でも、エミルは、この二人とは違う。ちゃんと分かっていたはずだ。顔色を変えてしまうほど悔やむことも気にすることもない。

それに、さっきは、そんな風には見えなかった。冗談としか思えないことも口走ってたくらいだ。逆にいえば、いつもよりテンションは高かったと思う……。でも、この二人が私にそんな嘘をつく理由はない。

私、まだまだ、エミルのこと理解出来てないな…… —

— 6 — (後書き)

「ご愛読ありがとうございました。」

予定より更新が遅れてしまい申し訳ありません。そのお詫びも込めまして、次回配信予定のメルマガにて、このお話のエミルサイドを配信させてもらう予定です。良かったら、そちらの方も楽しみください。

エミルサイド―1―（前書き）

メルマガで配信していた、君と二人で……のエミルサイドです

エミルサイド―1―

今日もカナイとアルファは、それぞれに出掛けていた。

マシロも元気良く、今日の天気のように晴れやかに出て行ってしまうので、珍しく？ 一人で過ごしていた。

だから、マシロから「一緒に依頼をこなして欲しい」と、声を掛けてもらった時は嬉しかった。

持ち帰っていた依頼書にざっと目を通す。

依頼内容はそれほど難しいものではなさそうだ。直ぐに持ちかえられるようなものだ。ただ、王都から出る必要があるから、マシロは誰かを呼びに来たのだろう。

きっと、僕ではない誰か、だ……。

偶然、今日は僕しか居なかったから僕に白羽の矢が立った。

後ろ向きにも取れるけど、きっと事実だ。マシロは僕に頼りたがらない。

頼るなら、カナイあたりかな？ どういうわけか、カナイには僕やアルファに対してはない気安さがある。正直なところ、ちょっと羨ましい。

こ一時間ほどで到着した目的地で、馬から降り、手綱を木に括りつけながらぼんやりとしてしまっていた。振り返ればマシロが居ない。

小さく溜息を吐いて、僕はマシロを探し始めた。

木々の立ち並ぶところだから、隠れるところには困らないだろうけれど、見通しがそれほど悪いわけでもない。見つけるのはきつと簡単だ。

「エミルー！ この辺りじゃない？」

きよろきよろとしていれば、直ぐに声が掛かった。

隠れていたわけではなく、いつものように先走ってしまっていたのだらう。にこにこ手を振っているマシロに悪意の欠片も見えない。

それにしても、洞穴？

「あまり奥に行かないで」

注意を促しながら歩みを速める。

ばさりつと大きな羽音がして、反射的に振り仰ぐ。フクロウ？

こんな時間帯にどうしてだらう？

不思議に思いつつも「早く！」というマシロの声に、返事して振り返る。

「――……マシロっ！」

間に合って、良かった……。

「マシロ、怪我不い？ 平気？」

「う、うん……平気……でも……エミルは？」

「僕？ 僕も平気。少し汚れちゃったくらい、かな？」

ぱんぱんっと肩を叩き、微笑む。それにしても、参ったな……。そつと、耳に触れれば、いつも触れるものがない。さっき慌てて洞穴内に駆け込んだ際、落としてしまった。きっとこの瓦礫の下だと思ふ。

恨めしく瓦礫の山をねめつけて一つ溜息。

……まあ、良いか。そのくらい。

マシロ側に居られたことに胸を撫で下ろし、それ以外のことは大したことじゃない。時間さえ気にしなければ、直ぐになんとかなるだろう。

んーっと目を凝らせば洞穴だと思っていた場所は洞窟だったようだ。奥に続いている。小高い部分の地盤が緩んで、落盤したようだったし、ここに留まるのは良策じゃない。

静かだし、そつと岩肌に触れれば、濡れている。足元も水っぱい……。

獣系の魔物はこういう場所は好まない。大型のものや危険に直結するものは居ないと考えても大丈夫だろう。

そんなことを思案している間、マシロは不安げにどこか見ていた。ここには居ない、誰かに思いを馳せているのかもしれない。

ちりつと胸の辺りが傷んだ。分かっている、理解していることなのに、現実つて厳しい。

その痛みに気がつかないフリをして、僕はマシロに手を伸ばす。マシロは迷うこともなく僕の手を取ってくれるのに……。僕の位置は、もしかしたら友達以下かもしれない……。そう思うと少しだけ切

ない。

その手を引いて、洞窟の奥へと歩みを進めれば、じわりじわりとマシロとの距離が近くなる。ヒカリゴケ程度の光源では心細いんだろつな、と思うと、とても可愛い。

軽く躓いて、慌てて僕の腕を取った後は、そのまま、腕を支えに使ってくれる。体重を預けそうな距離にきて、マシロは少しだけ離れた。妙な気遣いだ。

怖いくせに……。

「歩き難いから、良かったらもう少し近くに来て？」

と声を掛ければ気遣わしげに残った距離をつめる。本当、可愛いっतरらない。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

マシロから掛かるお礼に応えはしたけれど気を遣ってしまったのが、バレたかな？　そういうのは少し格好悪い。

出られなければどうしよう。というのなら、分かるけれど、マシロは僕を巻き込んだと気に病んでしまう。

僕が好きで着いてきているということはないがしろだ。

マシロの優しいところでもあり、甘え下手なところでもある。

僕は余程、頼りなく……と、実際頼りないかもしれない。アルファやカナイなら、こんな探検必要なかっただろう。

僕だから、こんな道を歩かなくてはいけないんだ。

マシロに責められることがあっても謝罪してもらつようなこと、絶対はない。

なんとかマシロの気を紛らわせることが出来るように、話を繋いだけれど、成功したかどうかは分からない。分からないけど、少し、笑顔が戻ったみたいだから大丈夫、なのかな？

「終点、みたいだね。思ったより深くない」

マシロが強い女の子で良かった。けど……

「気をつけて」

好奇心の強い女の子でちょっと怖い。不用意に水面を覗き込むマシロの腕を掴んで、掴まえられたことにほっとした。

マシロの居た世界って、本当に何の危険もないようなところだったんだろうな……。マシロの無用心さは筋金入りだ。

簡単に注意だけ促したけど、理解は早いから十分だと思う。

エミルサイド―2―

ここが、行き止まり……行き止まりということは、待機場所になる。そんなに閉所感はない。天井も高いし。マシロが暗所恐怖症とかでなければきっと大丈夫だろう。

まあ、今更、暗いところが怖いということはないと思うけど……心細さ、くらいはあるかな。

少しでも休める場所を、確保するため乾いた場所を探しながら、ここまでの道のりをおっかなびつくり歩いていた姿を思い出して、そり笑いを零す。

割と平らな岩を発見。

そう苔むしている感じもないから、ここなら大丈夫かな？

不安そうにこちらの様子を窺っていたマシロを振り返り、おいでと手を伸ばした瞬間、ほんの少しだけマシロが逡巡したのが分かった。僕に対する迷いか、それとも、今この場に居ない誰かに対しての迷いか。そのどちらにしても胸苦しい。

* * *

僕が考えていたよりは、早く、二人とも迎えに来てくれた。出入り口付近の瓦礫を破壊したのだろう。

僅かな空気震動が奥まで届いた。

そのあと、ばたばたと足音が聞こえてくる。あの軽さはアルファかな？

腕の中のマシロは、静かに眠ったままだ。ヒカリゴケの胞子に当たられたのだと思う。ヒカリゴケ種の毒は、それほど強いものはないし、マシロの様子から眠りを誘う程度のものだと判断した。

ただ、眠っているだけ。それだけだと分かっている、少し不安だった。もう一度だけ、ぎゅっと抱いた腕に力を込めて頬を擦り寄せる。

名残惜しい。

永遠に二人だったらどんなに良かっただろう。たとえ、まだその心が僕のものでなかったとしても、他に誰も居なければじっくりと時間をかけることも出来る。

マシロも、僕も、ただのシル・メシア国民で、王都かそれより離れた場所でのんびり暮らしていたとしたら……。

「あ、カナイさん！ 二人とも居ましたよ。大丈夫ですか？ エミルさん」

跳ねるようにかけてきたアルファが、にこにこ僕に向って手を振ってくる。急な魔法灯の明るさが目に染みた。

それに先に気がついたカナイが、アルファの頭を小突いて明かりを僕らから逸らした。

「大丈夫か？ マシロ、どうかしたのか？」

いつもより数倍心配そうな声でカナイが歩み寄ってくるのが可笑しい。アルファも「マシロちゃん怪我でもしたんですか？」と少し焦っているのが可笑しい。

これでは、到底、二人だけ、なんて妄想でも無理だ。

—— ……ん？

そつと、マシロを抱き上げて立ち上がり、僅かな明かりでその表情が確認出来た。

「カナイ、明かりこつち！ マシロが見えるようにして！」

「え、あ、ああ」

僕の焦りに同調するように、少し慌ててカナイが洞窟内を明るく照らしてくれた。やんわりとした光に包まれていた薄暗い鍾乳洞は、その神秘さを失ってただの穴になる。

「真つ青ですね？ 死んじやつ……」

—— ……バキッ！

「っ！ いった！ イタイじゃないですか！ 今、何で殴ったんですかっ！」

景気良くアルファの頭を叩いたのはカナイだ。僕じゃない。

「……結構吸ったみたいだな……あ、つと、アルファは、このあたりのコケを採取しておいて……どれをとっても光虫に違いはないだろうから、適当で構わない。カナイ、僕らを図書館に送って、早く」

「へ？ あ、ああ」

思わずカナイを急かして、アルファを忘れて帰ってしまった。でもアルファは最初の予定通り、僕らが乗って出た馬も連れて、特に機嫌を害することなく戻ってきた。

「え、ええと、エミル様？」

真っ青な顔をしたまま眠っているマシロを見ていられなくて、シゼの研究室をうろろした。

「何？ いつマシロの目が覚めるか逆算できた？」

「あ、いえ、はっきりとは……ですが、ご存知だとは思いますが、ヒカリゴケ種の毒は……」

「分かってる。分かってるよ……でも、僕のミスだ。もっと早く気づいて、もっと早く対処してあげるべきだった。たとえ症状が軽いものだったとしても、吸い込まないに越したことはないのに……」

出てくるのは後悔ばかり。

珍しい形での二人きりが嬉しくて、マシロが眠ってしまうのが惜しくて、沢山話しかけてしまった。嫌なことまで思い出させて、話をさせてしまった。

「エミル様。まずは、ご自身が薬を飲んでください。マシロさんと同じように、症状に関係なく、吸い込まないことに越したことはありません」

いつて、当然というように薬湯を差し出される。薬を睨みつけたって、マシロが眼を覚ますわけではない。

薬を受け取って、一息に煽る。ラウ博士が、ふらふら出歩いて研究棟にいないものだから、シゼに負担が掛かった。

「明日の昼ごろには目が覚めるのではないかと思います……それからマシロさんには、薬を服用してもらったので問題ないと思います。先ほどアルファさんが持ち帰ったものをサンプルに、少し頂きましょう」

たが、血の流れが少し悪くなり体温が下がって、強い眠気を呼ぶ程度です。少し貧血は起こすかもしれませんが、後に引くようなものは残らないと考えられます」

「……そう、分かった」

分かった、というか、分かっていた。が正解。杓子定規の回答なら、僕にも直ぐ導き出せる。

ここに居てはシゼにまで当たりそうだ。そんな自分に苛々して、薬の精製だけ念を押してから部屋を出た。

ここまで、自分に苛々したのは久しぶりだ。

王宮に居た頃はそれが常だったけれど、出てからはそうでもなかった。心だけは平穏で在れたと思う。

だから、変わったつもりで居た。

何も変わらないのに。

好きな子一人守れない。

僕は何も守れない…… —

うろうろしても仕方ないし、自分の責任には向き合えない……。そう、思いなおして、マシロの部屋に戻った。室内ではカナイとアルファが着いてくれていた。

「エミルさん、大丈夫でしたかー？」

「うん、僕は平気」

頷いて、ちらとマシロを見る。

まだ青白い顔をして目を閉じている。

「大丈夫、平気って顔してないけどな？ お前こそ休んだらどうなんだ？」

「無理。僕はマシロの傍に居る。居なきゃだめだ……二人とも休んで……というか、席を外して」

自分でも珍しいと感じるくらいだ。二人はもっと珍しいと感じただろう。僕の命令染みた台詞に顔を見合わせたあと、互いに苦笑する。

見透かされているようで、居心地が悪い。

「りょーかい。一応、俺、起きてると思うから、何かあったら声掛けろな？」

「じゃあ、僕、本当に寝ちゃいますね」

カナイは寝たほうが良い。

そういつても、きっとカナイのことだ深い眠りは得られないだろう。それが分かるから、僕も、分かったよ。と頷くにとどめた。

—— ……ぱたん……

静かに閉まった扉から完全に音が消えると、僕は、ベッドの傍に椅子を引き寄せて腰掛けた。

悪い夢は、見ていないようで良かった。

「……ごめんね」

そつと額に掛かった髪を流しても、ぴくりとも反応しない。深い深い眠り。

エミルサイド―3―

―― …… もし私が死んだらどうする？

きゅつと唇を引き結ぶ。

マシロはなんて怖い台詞を簡単に口にするんだろう。

僕が死んでも代わりなんて幾らでも用意できるけれど、マシロだけは無理なのに……。

誰かの死を怖いなんて思ったことはない。

でも、マシロの死を思うと途端に怖くなった。

失うのが怖ければ何も得なければ良いとさえ、思っていたこともある。

でも「何も持たないということは、貴方だけでは無理です」とラウ博士がはつきりと告げた。それが王家の素養だと……一人になるのは無理。絶対に……何かを背負わなくてはならない。だからその苦しみから早く解放するために、肅清されていくのかもしれない。僕が消えたら、マシロは悲しむだろうか？ 泣いて心を乱してくれるだろうか？

「どうかな」

自嘲的な笑みが零れる。マシロには、ブラックが居る。

それほどまでに、僕のためにまで心を乱すことはないだろう。

そつと、マシロの手を取り指を絡める。いつもなら、マシロの手の方が暖かいのに、今はもしかしたら、僕の方が熱いかもしれない。

……僕がもし死んで落胆するような人物……カナイとか、アルファとか？ シゼ、とか、……でも、シゼはまだ何からも縛られる必要はないから、ちゃんと迷わないように用意してあげないといけない……それにしても、ぱっと思ひ浮かぶ面々が同性ばかりというのも、なんか虚しくなってくる。

僕の周りの女性なんて、痛めるほどの心なんて持っているのだろうか？ 王宮で出会う女性は皆同じ顔をして、同じような態度を取った。

僕でなくても同じ。“王子”に対しての対応。教育の行き届いた使用人も同じ。みんな同じで……僕にはもう違いなんて分からなかった。

台詞も全て、決まっているんじゃないかとさえ思えた。数パターンの台本を読み上げているようなものだ。

だから、僕の対応も同じ。

本当に馬鹿馬鹿しい……。

マシロは、どうして、自分が好かれるかわからないって？ 好きにならないほうがどうかしている。

天真爛漫で、奔放。楽天的かと思ったら、妙に後ろ向きだったり、悩んだり。でも、マシロが、頭を痛めるときは、大抵、他人のことだと知っている。

自己保身ではなくて、誰かを思って、心を痛める。

そんな人間僕の周りには居なかった。獣族に居るとも到底思えない。

そんな規格外のマシロを、愛さずには居られない。誰にも変わりはない、誰とも違う。

最初は、日の光の下に咲く花のようだと思っていた。けれど、月明かりの元で、花を咲かせることが出来るかもしれないと気がついたとき……いつか、手放さなくてはいけないとも思った。

それでも僕は……

「……き、だよ。好き……大好き」

だから早く、その目を開けて大丈夫だと微笑んで。僕の声に微塵も反応しないマシロに、胸が痛む。痛いのを通り越して潰されてしまうように苦しい。

好きなんて告げれば、いつもなら、顔を真っ赤にして怒るのに、青白いまま生気がない。

僕の配慮が足りなかったから。
いくら猛省しても足りない。

ぎりつと唇を噛み締めると、ちりつとした痛みが走った。傷口を確認するように触れれば赤い染みがつく。大した傷じゃない。ぺろりと舐め取ってしまえば、止まる程度だろう。

「あ」

ふと、キスをしてしまったことを思い出した。ふわりと触れた唇の柔らかさを思い出して、身体中が、かぁ！　と熱を持つ。

握っていた手を離して頭を抱える。抵抗されないことを良いことに、何度も重ねてしまった。

非道すぎる……。

やっぱり、まずかったかな？ マシロ、怒ってるかな？

朦朧としている女の子にそんな風にするなんて、ずるいとか以前の問題のような気もする。

頭を抱えた腕の間からマシロをちらりと見る。

唇の色も少し青い。

今触れたら、少しひんやりとしそうだ……。

それを確かめるように、もう一度触れたいと思う欲求を抑えるのが大変だ。

「——……マシロが可愛いのが悪いんだよ……」

はぁ、と一つ溜息。同時に解いた腕でもう一度マシロの手を握る。

あんな風に、マシロを抱き締めたのは久しぶりだった。

優しくて甘い香りがして、暖かく、心地良かった。肌に触れるよ
うな、声の震動まで心地良くて、身体がじわりと熱を持って……や
っぱりそれも心地良く幸福感に満たされた。

「本当に……」

どうして、ばかりが溢れてくる。

お願いだから、どうして好きなのかなんて聞かないで。そんなこ
とを聞くくらいなら、僕に嫌いになる方法を教えて欲しい。

「……頼むよ」

返事はない。なくて良い。

この部屋から二ヶ月が明るく見えなくて良かったと、ほんの少しだけ思った。

* * *

翌朝。

サボろうとするアルファをカナイに預け授業に向わせて、僕は、ふと依頼を思い出して、ギルド事務所に向うことにした。枯れたら二度手間になる。アルファが限度なく持ち帰ってくれたから……。

サンプルとってもまだまだ余る。

平皿に盛る程度で構わないのに……バケツ山盛りいっぱいでもまだ溢れそうだ……。

適当な量をケースに入れ、残りはラウ博士の研究室へと持ち込んでおいた。笑顔で迷惑を表すことができるラウ博士は、凄いと改めて感心する。

まあ、今更その程度、気にしないけど。

そして戻ってくると部屋の前で、シゼに会った。シゼは「もう元気そうですよ?」と微笑んでくれる。

目が覚めたんだ。

薬を処方し飲ませてくれたシゼにはお礼を告げて別れた。その背中を見送ってドアノブを握った手を見つめる。

嬉しいのと、気恥ずかしいのと申し訳ないので、少し緊張する。
すー、はぁ……と、一つ深呼吸。ぐっとノブを握る手に力を込めて扉を開いた。

「大丈夫？」

僕を見たマシロの顔が、笑顔で本当にほっとした…… —

* * *

マシロに安静を告げて外に出た。熱くなってしまった身体を冷やすために、庭に出る。頬に触れるといつもよりずっと熱い気がする。

赤くなったりしないかな？

マシロの言葉に一喜一憂している恥ずかしい僕に、どうかマシロが気付いていないと良いなと思い、そつと唇に指を添える。

ほんの少しだけ、忘れてくれていても構わないと思ったキスのことを、覚えてくれていて、嬉しいと思ってしまった。

覚えていても拒絶されなかった。

嬉しい……まだ、僕はマシロの傍にすることが出来る。冗談をいえば、過剰に楽しい反応を返してくれる、友人というよりは、ほんの少しだけ、異性を感じてもらえるもどかしい距離だけど、あれで終わりにならなかったことが素直に嬉しい。

君と二人だけで、居ることは叶わないけれど、手を伸ばせば届く距離は許される。もう少しだけ、少しだけ……どこがギリギリのところか分からない。けれど、それを試す気にはなれない。

踏み込んだら最後。

もう二度と戻れないかもしれないから。

僕はとても臆病でズルイ男だと痛感する。

でも、きつと……太陽なら許してくれる、よね。永遠にあればどこまでもに美しい月と出会うことは、ないのだから。

振り仰いだ空は今日も変わらず晴れていた。

離島にて……（前書き）

君と二人で……展開時のブラック

離島にて……

面倒臭い。

何故、白化は一つずつしか出来ないのか。

昨日今日そうなったわけではない、遥か昔からそうだった。いつの時代の種屋もこの作業を面倒だと感じていたけれど、やめることはルール違反。

ただ、時間も場所も制限はされていないから、常に片手間に行ってきたことだ。

そうだというのに、今は時間にも場所にも縛られている。

奇跡的に被害から間逃れて多く逃れてきたものが居る、小さな村の一角に種屋が居ることを流し、種を持ち寄らせる。

もちろん、現場から持ち帰ったものもあつたから、それらの持ち主と思われるものも寄るようにと広めた。

人がこんな面白くも何もないものを、欲しがるなどとはこれまで微塵も考えたことはなかった。

白化後の球体は、ただのゴミでしかない。

種から剥ぎ取る不必要なものだ。

放っておけば勝手に消える程度の取るに足らないものだ。

延々と同じ作業を繰り返していると、日が傾いてきた。

マシロの気配を感じられる場所に帰りたい。海を隔てると、いくらマシロが特別でもその存在一つを探るのは容易ではない。種屋でも無理だ。一応やってみた。

「あらあ？ 種屋さん、こんなところで何をやっていますの？」

はあ、と溜息を吐いたところで、一度聞いたら忘れないだろうと思われる声、容貌の持ち主に声を掛けられる。顔を見なくても分かる。大聖堂の現在の学長だ。

「事後処理をしています。貴方もさっさと跡始末を急いだほうが良い。貴方の指示が生徒の勝っ手か知りませんがね」

こんなところに、私が珍しいと思えるような種はない。持ち帰る価値もないといったようなものばかりだ。

面倒臭い。

適当にけりをつけて帰ろうか……。

マシロに会いたい。

続ければ続けるほど不愉快だ。マシロが大丈夫でも、私が大丈夫ではない。どんどん気分が下降し萎えてくる。

「あたくしは、そうねえ、んふ、問題ありませんわ。優秀な助っ人を呼びましたから」

「そうですか」

興味ない。

彼女が傍によると、蠱惑的という言葉そのまま香りにしたような、匂いがする。魔術的なものであるし、それによって人を惹きつけてやまないものだ。常に、そんなものを纏っている彼女の気が知れない。

「それにしても、種屋さん？ 事後処理など、こんな場所でやらなくても良いのではなくて？」

「やつても問題ないでしょう？」

「それは、そうですね……」

そこで、意味ありげに台詞を切った彼女に、眉間の皺がよる。また一つ抜き出したものを、持ち寄ったものに渡す。

「一々品定め——が必要なほどのものもないが——するもの、面倒臭いので全て均等に金も渡す。」

種を受け取れば、代金を支払うのもルールだ。

金額に異議を述べるものが居れば、答えるのが面倒臭いので、種を増やした。

本当に、早く帰りたいんです。私は。

もう一度、溜息を零して、やっと顔を上げれば手入れの行き届いた長い爪を、赤い唇に添えて首を傾げていた。

「あたくし、貴方が会話の出来る方だと思いませんでしたわ？」

「はい？」

「掛け合うということとは無縁な方だと……あたくしのお喋りに付き合っても、なんの利益もないでしょう？」

本当に何も無い。

「分かっているのなら、一々、話し掛けてこないでください。大体、話を聞かないタイプというのなら、貴方が筆頭でしょう」

不機嫌に告げても、傍に居る彼女は「あら」と少女のような――

とてもそんな年齢ではないはずだ——愛らしい声を出し、妖艶に微笑んだ。

「それが女の特権ですわ。あたくしは、話をする側の人間ですの。殿方はあたくしの美声に酔いしれ、所作に恍惚とする。当然ですわ」

大聖堂の生徒は大変だと、今始めて思い、僅かな同情すらしそうになる。

まあ、大抵のものは誘い込まれ、落とされていることに気がつくことはないだろうけれど。脳内常春とは良いことだ。

「貴方、恋をしていますのね！」
「——……だったらなんです」

突然の思いつきのような台詞に、否定する理由もなく無愛想に返せば「まあまあまあ！」と甲高い声が繰り返される。一々反応が大きい。

「素晴らしいですわ！ 種屋さんが恋。愛……、ああ、先代、先々代にもあれば宜しかったのに」
「それは無理でしょう。彼らは美しいときを欲するような弱さはなかった」

というか、先代、先々代の種屋の存在を記憶している学長……彼女は本当にいくつかのなのだろう……問いたい気もするが、マシロな女性に年齢を聞くなんて！ と膨れるだろうし、私自身ただの興味で、彼女がいくつであつても関係はない。

「あら、愛は弱さを生むものではありませんわよ」

にこにこと、花でもまき散らすように笑みを零した彼女に首を傾げたが、あっさり無視された。本当に、彼女の方が会話をする気のない人だと思う。

「でも、種屋さんを虜にしてしまうなんて、どちらの姫君かしら。とても興味がありますわ」

「貴方のような人ではないことは確かです」

マシロの美しさは彼女のように華美なものではない。夜空に浮かぶ白月の様に、穏やかで優しく慎ましいものだ。

「あら、冷たい。女性は女性をないがしろにする殿方を嫌うものですのよ?」

「……っ!」

「あら、あらあらあら、本当に心を寄せていらつしやいますのね? 愛する方にどう思われるのが気になるなんて、可愛い仔猫ちゃ……」

—— …… ガウンッガウンッ!

手を伸ばす彼女に、間髪居れず発砲した。

「私に触れないでください。さっさと仕事に戻っては如何ですか?」

「うふふ、まあ、怖い」

当てるつもりはなかったが、至近距離での発砲をにこやかに交わり、弾を地面に叩き落してしまうような魔女にいわれたくはない。

「ですが、今夜はとても面白いものを見させていただきましたわ。美しいとき……そうですわね。美しいときを望むのは、こうやって見

上げているもののみですわ……青い月には見えぬもの。で、あったでしょうね」

空を仰いで、そういったあと、私へと視線を戻して、ふ……と、微笑んだ彼女はようやく姿を消した。

本当に何をしにわざわざ出てきたのか……意味が分からない。意味が分からないけれど、すっかり陽も落ちてしまった。

人も途絶えたけれど、時間が勿体無い。

回収した行く宛てのないものを片付けよう。

早く帰りたい。

そんな風に思う場所が出来るなんて、それだけでも、歴代には有り得ないことだった。これまでがどうであつたかなんて、私にもどうすることも出来ない。

その必要もないだろう。それが、この世界のあり方だった。

ただ、今だけは、私の代だけは、少しだけ違うという、それだけのことだ。

ふ、と彼女と同じように空を仰ぐ。

二つ月が今日も変わることなく並んでいる。マシロもこの月を見上げているものだ、そう思っていたのに、まさか、月の見えないところにいるとは思わなかった……――。

前編

「――……で、最後かな？」

よいしょっ！ と、温室の一角に頼まれていた最後の一つのプラ
ンターを指定位置に据える。

「シゼ、他に手伝うことない？」

「ないです。お疲れ様でした。早々に帰寮してくださって結構です」

あ、相変わらず可愛くないなー。

私はいつもと本当に全く変わらない調子のシゼに苦笑しつつ、そ
れじゃ失礼しようかなと腰を上げる。

「シゼはまだ何かあるの？」

「ここでの作業は終わりです。片付けたら、研究棟に戻りますよ」

「片付け手伝おうか？」

「僕の仕事なので結構です」

にこりと声を掛けたのに、あんまりだ。ま、いつものことだけれ
ど。私は、シゼにそれならと温室の片隅にある水場で手を洗って、
温室を出ることにした。

「マシロさん」

「ん？」

さて、戻りましょうかというときに声を掛けられて、やっぱり手
伝って欲しいんじゃないかと、心うちでほくそ笑んで振り返れば、シゼ

もう終わってしまったようで、手を洗っていた。

…… ちっ

「今夜暇ですか？」

「え、うん。これから寮に戻って、いつも通りにカナイにちよっかい出して遊ぼうかと思ってただけだから、用事ないよ？」

「…… とてつもなく、無駄な時間の過ごし方をするんですね」「有意義といってよ」

しらつとした、シゼの答えに私はキツパリと答えた。ラウ先生に掴って、午後中途半端な時間になってしまったのだから、あとすることといえぱりそれくらいしかない。

「まあ、良いです。時間があるなら月が真上に来る頃、屋上庭園へ来ませんか？」

「シゼも来るの？」

特に考えもせずに口にすれば、タオルで手を拭いながら、はあと溜息を落とす。

「勿論、僕が声を掛けているのですから、僕も行きますよ」

いったあとで、やや黙したシゼは「やはり」と口にして

「迎えに行きます」

と、続けた。

「屋上庭園くらいなら迷子にならないよ」

「なれるようなら、なっていたいても構わないんですけど」
「すみませんでした」

かくんつと頭を垂れて謝罪すれば、シゼはくすりと笑いを零した。なんとなく、シゼの笑顔はレアで、それを見ると、してやった感がある。

今日はとても良い日だった。

まだ終わってないけど。

「夜ですから、エミル様たちに無駄な心配と手間をかけては申し訳ないです。だから、行きます。ここに立ち寄るので予定より少し早く寄りますから、待っていてください」

きびきびと何かの行事の案内をするように口にするシゼに、つい
つい悪戯心の湧く私。シゼはカナイの次に弄ると楽しい。

「はい、先生。デートですか？」

「何かいいましたか？」

「……い、いえ、何も。部屋で大人しく待ってます」

楽しいはずだったのに、最近空振りが多い。

シゼも大人になったなあ……。

そんなことを考えながら私は部屋へ戻った。

* * *

そして、約束どおり日がとっぷり沈んだ頃、シゼが迎えに来てく

れて私たちは連れ立って温室に向った。

「そういえば、エミル様たちも誘ったんですけど、揃って断られました。マシロさんだけは、余程暇なんですか？」

「……暇ですが、何か問題でも？」

実際、私も誘ったのだけど、にっこりと断られた。
今、忙しいんだって。

シゼと一緒に館内に居るのなら、心配要らないだろうからといわれたんだけど、みんな何やってるんだろうな？

シゼはラウ先生が管理している温室の鍵を開けて、私に待つようにいい中に入ってしまった。

ラウ先生の温室は今日運び込んだのもそうだけれど、正直、天然記念物とか、猛毒性があるものとか……普段お目にかかれないようなもののばかりだ。

それも毒々しい色のものが多い。

昼間ならまだしも、夜にここを見ると、樹海だ。

「お待ちせしました」

「あ、それ知ってる梯子草だね？」

「ええ、正解です。そろそろ咲く頃なので、月のある場所へ連れて行ってあげようと思ったんです」

「それ、花咲くの？」

屋上庭園を目指しつつ。シゼの手の中にある植木鉢をちらりと見て告げる。育ちの悪いススキのような草だ。

勉強不足だと怒られそうな話だけど、シゼは「咲きますよ」と簡

単に答えてくれただけだった。

「ですが、これは咲くかどうか分かりません。僕が種から育てたんです。とても時間と手間がかかって……でもね、とても昔はこの草は割りとどこにでも群生していたんですよ。今は、あまり見かけないですけど……」

そういつて、手の中でそつと鉢を撫でるシゼは、それを大切にしてきたのだとても良く分かる。

「どうして、見かけなくなつたか想像つきますか？」

「んー、開花条件に合わなくなつたのかなあ？」

「半分正解。梯子草の開花条件として一番重要なのは月光です。それゆえ、基本的に夜しか開花のタイミングがない。それなのに、それを奪うものが多い。建物は勿論ですが、大きくなりすぎた木々も邪魔になります。開けた場所でない駄目。それなのに、大樹に寄り添いその根から養分をとるという特性もある……気難しいですよね」

くすくすと笑うシゼは、ちよつと意外だ。

シゼつて、本当にここで学ぶことが好きなんだなと改めて実感した。

彼は根っからの薬師だ。

あ、開けてもらえますか？ と声を掛けられて、私はわたたと屋上庭園の扉を開いた。

「誰も居ないですよ？ 庭園の使用許可は貰つてあるので、大丈夫だと思いますが、その辺ちよつと確認してきてください」

「え、ああ、うん。分かった」

私はシゼに促されて、先に入り屋上庭園の外周をぐるりと一周した。

もう遅い時間だから、人影はない。

「大丈夫だったよ」

と戻れば、シゼは広いレジャーシートみたいなのを中央に広げてその上に鉢植えを置いたところだった。

「これ、蕾もないのに、花が咲くの？ 不思議だね？」

私はその傍にちょこんと腰掛けて、マジマジと観察するけれど、細い笹のような感じにも見えるだけだ。そんな私の疑問にシゼは笑うことなく、話を続けてくれる。

「茎にそつと触れてみてください」

いわれたとおりに、親指と人差し指で挟んでそつと撫でる。

「しこりのようなものが、中にあるような気がしませんか？」

「ん……んう……あるような、ないような」

「それが、蕾です」

そうなんだ……と頷いて、空を仰ぐ。

真っ暗な空にはいつもと変わらない二つ月。

そして、満天の星。

綺麗だなあ、と思い、エミルたちも来れば良かったのにと素直に

思う。あと、ブラックもね。

「マシロさん、寒くはないですか？」

少し離れていようと、ベンチまで下がったらそこに置いてある大判の黒い布を指された。

「あとで使いますけど、今から被ってても良いですよ？」

「へーきだよ」

にこりと告げて腰掛けると、シゼもその隣に腰掛けて、私たちはそのときを待った。

「もう直ぐだと思っんですけど……」

座っているのもどかしそうにしているシゼに、苦笑して、膝をコツコツと弾いている手を掴んだ。

「大丈夫、ちゃんと咲くよ。きっと、シゼの思いに答えてくれる」「わ、分かってますよ」

びくりと肩を強張らせたシゼに告げれば、赤い顔をして答えてくれる。いつもの弄り甲斐のあるシゼだ。

私がそう思っただけでなく、シゼは「あ」と声を漏らして、立ち上がる。

キラリと根元が光ると、あとは、いつきにぽぽぽぽと光の粒が夜空へと登っていく。

「すい……」

茎なんて私の腰辺りまでしかなかったのに、それを完全に無視して、どこまでも高く高く光の粒は列をなし、月を目指す。

「梯子草の別名は月追草といいます。月を恋い、目指し、登ろうと駆け上がっていく。でも、決してそれが届くことはありません。人も植物も何一つ月には届くことはない」

そういつて夜空に上っていく梯子草を見上げるシゼの横顔は寂しそうだった。

後編

「そろそろ諦めるかな？」

シゼが自嘲的な笑みを零したとき、ただ真っ直ぐに登っていた光の花は、ぐんつと撓^{たわ}み弓なりになる。

風に揺れるその様は、流水のような軌跡を残し夜空に幾つもの放物線を描く。

本当に幻想的な景色だと思う。

強い光に、夜空の星も霞んで見える。

これが、群生し、全てが月を目指したら、それはとてもつまなく圧倒的な情景だろう。

時間を忘れて、首が痛くなるまで私は空を仰いでいた。どうして、今これが消えてしまったのか、やっぱり不思議だ。

—— …… ばふっ

「ひっ！」

「もう散りますから、少し我慢してください」

我慢してくださいって、シゼ……。

ぼんやりと呆けていた私の頭の上から、乱暴にさっきの黒布を大きく広げて掛けた。

その中に、シゼも身を寄せて「肌が出ないようにして置いてくだ

さいね」と念を押す。

私の顔は、どうして？ と、問い掛けていたのだろう。
シゼは、僅かな隙間から、梯子草を仰いで瞳を細める。

「これからアレが降ってきます。光が残っている間。あれは、人体に有害です。皮膚組織を腐蝕させます」

「ええっ！」

素直に驚いた私に、シゼは、ふふつと微笑んで「大丈夫ですよ」と付け加える。

「大抵の場合、地上に落ちるまでに光は失われます。そうして、地面に、降り落ちたものは地に根を張り新たな月追草となる。それまでに、その種を回収したものが月の欠片と呼ばれることもあります」
「あ、それ、聞いたことある。とても強い精神安定効果をもたらせるんだよね」

いった私をちらと見てシゼは「正解です」と微笑む。

私が、シゼの話に夢中になっている間に、梯子草の飛散は始まっていて、キラキラと夜空の星が降っているようで綺麗だった。

自分で、大丈夫だいいながら、私の肌が外に出ないようにシゼは強く引き寄せて、布を手繰り寄せる。

こんなとき、ついこの間まで、シゼは私より小さかったのにと、いつも思う。

「なんか悔しい」

「はい？」

「この間まで、シゼはこんなに小さかったのに」

身動きとりにくい状態のまま、このくらいと手を振ると、シゼが
すかさず「そんなに小さくないです」とぼやく。

「兎に角、私が守ってあげなくちゃと思ってたのに、すっかり逆転」
「最初から僕はマシロさんに守ってもらうようなところありません
けど」

「そんなことないよ！ 少なくとも私は有事の際はシゼを背に庇う
つもりだったよ。もう、ちっとも隠れないけど」

今では背に隠れるような大きさではないし、現に今だって私の方
がすっばり納まってしまふ。

本当、残念。

「それでもきつと、マシロさんは僕を背に庇うでしょうね……」

「え？」

「いえ、別に、マシロさんはきちんと自己評価出来ない駄目な人だ
といったんですよ」

「……ああ、そうですね」

眉を寄せれば、くすくすと楽しそうに人の真横で笑う。

笑ったあと、少しだけ回した両腕に力を入れた。僅かな間、抱き
締められる。まだ何かあるのかと、私は動かずにじっとされるまま
だ。

「このまま……」

「え？」

何事か呟いたシゼの唇が肩に当たって、温かくくすぐりたい。問

い返せば、シゼの腕は緩んで「なんでもありません」とふわりと布を取り去った。

「もう、終わりましたよ」

これ、お願いします。と、布を私に手渡して、シゼは鉢植えの傍に歩み寄っていく。

「たった、これだけ、たったこれだけの時間人々は耐えることが出来なくて、月追草を追いやっただんです」

「え？」

「無知は愚かです。知らないことに怯えることも愚かです。月追草が危険なのは、このたった数分なのに、知識を持ち得ない人々の暴挙によって、月追草は月を追うことが出来なくなっただけ」

シゼは、枯れてしまったように萎れてしまっている鉢植えを片手に、私の傍に歩み寄りながら続ける。

「月追草が今ない理由。もう半分の正解は人的被害です。月の欠片の有効性は認めるけれど、それは他に代替が利く、もっと安全でもっと害のないものが……人が、刈り取り燃やしてしまった……とても昔の話です、けどね……今では、これを大量に育てることも禁止されています」

いいつつ、私に手を出したシゼに釣られるように私も片手を差し出した。シゼはその上にころんと二粒、降ってきた欠片、種を乗せる。

「一つは、エミル様に差し上げてください。もう一つはマシロさんにどうぞ。今夜付き合ってくれたお礼です。もっと、必要なら拾っ

てください」

「ありがと……」

「いえ、僕は薬師でしょう？ 薬が良いものであるばかりだななどと思わない。必ずついてくる副作用についても、ちゃんと理解している」

ことんと鉢植えをベンチの上において、シゼは後片付けを進める。私も受け取ったものをポケットに押し込んで、手早く布を畳んでベンチに乗せたらその傍に寄った。

「法術だって、万能ではないんですよ？ 僕、時々カナイさんとそのことについて情報交換するときがあるんですけど」

本当に、真面目ですね。お二人とも。

私、課題をこなすとき以外に、エミルやカナイの頭を借りてそんな話することないよ……。

「そのときに聞いたんですけど、法術による治癒っていうのは、体の健康な部位を削って、治癒に宛てるんだそうです。だから、完全ではない。薬とあまり変わらない……」

人は万能を求めすぎますよねえ……しんみりと口にしたシゼに答えたのは

「それはつまり、私のことですか？」

もちろん、私じゃない。

「ブラック」

「こんばんは、珍しいものが見えたので、立ち寄りました。こんな

ことをするのは貴方たちだと思いましたよ」

にっこりと告げて、私に歩み寄ってきたブラックは、ふわりと私の頬に顔を寄せてから、すっとポケットの中にあつた欠片を一つ摘み上げる。

「月追草は、青い月を吊り上げたみたいですね」

「上手いこといいますね？」

苦々しく口にしたシゼの台詞を気にとめることもなく、にっこりと交わしてブラックは月に欠片を翳す。

まだ中心が、ほんのりとした光を放っていた。

「いくつか貰いましょう」

「ええ、しっかり買い取ってくださいね。研究費にあてますから」

……商売してるし……。

私はそんな二人を眺めてぼやんとしていると、ブラックがふとこちらに振り返って、マシロ、と声掛けてくる。

「ん？」

と首を傾げれば、そつと私の傍で腰を折り耳打ちする。

私はそれに頷いて、扉に歩み寄ると、いった通り転がっていた結界石を取り除いた。

「っ！ う、うわっ！」

「え、アルファ？」

取り除いた途端、アルファが流れ込んできた。

「ほら、私よりずっと癖の悪い出歯亀がいるでしょう?」

楽しそうに私の隣に歩み寄って微笑んだブラックに力なく頷く。

「もう、みんな、何やってるの? 誘ったときに断ったくせにー」

私がぶーたれたら、みんな曖昧な笑みを浮かべて、気まずそうだ。その騒ぎに気がついたシゼが声を跳ね上げた。

「エ、エミル様まで何をされているんですかっ!」

「あ、ええと、うん。ごめん……ちょっと、気になって」

「結界石で庭園は封鎖するっていったじゃないですか、その石だってカナイさんに造ってもらったのに……」

「え、ええっと『シゼの初恋を楽しもう』企画っ!」

「ばっ、馬鹿アルファっ! 違う、こっそり応援しよう企画だ」

「ちょ、もう、二人とも声大きい」

—— ……こいつら……。

全く……と、落とした溜息がシゼと被って顔を見合わせるとお互いに苦笑した。

「白月に手が届くのは、寄り添っている青月だけですよ」

ぼつりと零して、夜空を仰いだシゼにつられて、みんなで静まり返って、夜空を仰いだ。決して届くことのない光の梯子は、人が登ることは叶わないこと、本当にそう、なのかな?

—— ……このまま時間が止まれば良いのに……

私にはそう聞こえていた。

もし、時間が止まったなら登ることも叶うかもしれない、そう思ったのか、それとほほかに意味があったのか、私はシゼではないから分からないけれど、でも……みんなで見上げる月はとても綺麗で……また、こんな時間が持てると良いなとは私も思った。

とりあえず、今日はやっぱり良い一日でした。……と。

前編

休みの日の午後。種屋屋敷の庭でのんびりティータイム。

今日は珍しく紅茶ではなくて珈琲が入っていた。この世界で珈琲なんて口にしたの初めてかもしれない。あつたんだ。

紅茶の薫り高い高貴な雰囲気も好きだけれど、珈琲のほろ苦い香りも好きだ。元の世界ではカフェオレとか良く飲んでいたので、珈琲があれば、こちらでも淹れられる。

もつと早く聞いておけば良かった。

そんなに珈琲狂というわけでもなかったから、気にしていなかった。

「マシロは珈琲が好きだったんですか？」

「え」

「なんだか幸せそうに飲んでます」

ブラックは私に切り分けてくれた、カスタードパイをそつと前に置いてくれて可愛らしく首を傾げた。

「大好きってわけじゃないけど、あつたんだなーと思って。こつちには紅茶とか、ハーブティーしかないのかと思った。ハーブティーも薬として扱われてるし、一般的に飲むって感覚でもないみたいだし」

「そうだったんですか？ 一言いつてくだされば、用意しましたよ？ 私があまり飲むものに拘らないので……それにマシロは紅茶が好きなのだと思っていました」

もしかして、だから、種屋のキッチンには茶葉が豊富に揃ってい

るのだろうか？

ブラックが好きなのかと思っていた。

違うとしたら、ブラックって……

「ブラックは何が好きなの？」

「マシロです」

来ると思った即答に苦笑しつつ、そうではなくて、と重ねる。

「違う違う。嗜好品。紅茶とか珈琲とか、煙草とかお酒……は下戸だから駄目か……色々あるじゃない？ ブラックはそういう好きなものないの？」

「嫌いなものはないですよ？」

—— ……ということはなんだ？

嫌いなものはない。好きなものも、特にない。そういうことだろうか？

「でも、ブラックって料理全般得意じゃない？ お菓子だって上手だし」

パイ生地フォークを突き刺すをさっくりとした感触がして程よい焼き具合を現している。

「私に得意じゃないものなんてありませんよ」

くすくすと普通の人がいえば嫌味にしか聞こえないようなことを、さらりと口にする。嫌味に聞こえないのは本当だからだ。

「今日は朝から、マシロが『身体が甘いものを欲してるー。美味しいものが食べたーい』と叫んでいたので、作ってみただけです。好きかと問われても、嫌いではないとしか答えられません」

私、そんなこと叫んだらどうか……叫んだ、かもしれない。

ここは辺境の町だから、お菓子屋さんなんてない。あるのは精々、生活用品を扱っている雑貨屋さん程度だ。

王都なら大好きなクリームラが近所にあるし、隣接したカフェにあるスイーツも、絶品だ。

「あ」

「ん、何々？　好きなものあった？」

ぱくりと私がパイを頬張ったところでそう零したブラックに私は食いつく。是非知りたい。

「はい、私はマシロが作ってくれたものは好きです」

にこにこそういわれても……プロの料理人にも負けない、寧ろ勝ってしまうのではないかというブラックがいつても真実味はない。

「美味しくはないでしょう」

「食べれなくはないです」

——……どーいう意味だ。

ブラックはどうしてこうデリカシーに欠けるといいうか、時々、馬鹿正直なんだろう？　分かってるよ、私の料理がいまいちなくらい。

「作ってくれたときは一緒に食べてもくれますし、いつもより長くいられます。それに何より毒の心配がないでしょう？」

—— …… 毒。

味とか関係ないのね。

美味しいかどうかよりも、一緒に居る時間と何か盛ってないか気に掛けなくて良いというところだけで『好き』だなんて、ちよつとサミシイ。

まあ、正直、美味くはないのでそこらへんは仕方ないけど……もし、好きな料理とかあるなら、練習しても良いと思っただのに、凄く残念。

「え、ええと、あの、もしかして、駄目な回答でしたか？」

私の薄い反応に、駄目と判断したのかブラックがしょんぼりと問い返してくる。耳が不安そうにふわふわと揺れている。

—— …… 可愛い…… もう耳しか見えない。

「うっん。別に、駄目じゃないけど……もし、あれば思っただけだよ」

「ごによごによと告げて、珈琲を口に運ぶ。そんな私にブラックは不思議そうに瞳を瞬かせ首を傾けた。

「あつたら、マシ口はもつと私を好きになりますか？」

「え？」

「それなら、何か考えます。嗜好品、ですよね……嗜好品……やっぱり、マシ」

「私は、飲食物ではありません」

「食べても美味しいですよ？ 十分に香味や刺激を得られます」
「間違いですっ！」

ブラックの馬鹿な発言に、ぐいっと珈琲を煽る。うつ、一気飲みするべきものではなかった。熱くなくて幸い……。

「間違いじゃないですよ、今すぐにでも食べたいくらいです」

に「っこりと微笑んだ、ブラックに気持ち後ろに下がる。今日はテーブルを挟んでいるのだから距離はあるはずなのに、目の前で見つめられてしまっているような気になる。

「そそそ、そーいえば！ ブラックって、猫以外にもなれるって聞いたんだけど、本当？」

「……話に脈絡がありませんね？ そんなに焦って、可愛いですよ」
くすくすと笑われて、ぱあっと頬が熱持つのを隠すように、ぐりぐりとパイを苛めていると、ブラックがカップにお代わりを注いでくれた。

「それで？ 誰情報ですそれ」

「ん？ テラとテトに聞いたの。この間、獣族の話になってね、私てつきりあの二人はウサギになれると思ってたから」

両手を頭に添えてぱたぱたとすると、ブラックがくすりと微笑んだ。

「彼らは他のものより、ほんの少し素養を見る目に優れているだけです。それで、それがどうかしましたか？」

「え、どうもしないけど、なれたら凄いなーと思っただけ。いや、喋る猫になるだけでも凄いいけど」

「凄い？ 凄いということは、マシロがもっと好きになってくれるということですか？」

ブラックって、感情的な部分で、特に馬鹿だよな。

本気で思ってるのかな？

いや、そもそもブラックが冗談をいつているのを聞いたことがない。

常に本気だ。

その証拠に、私の返答を心待ちにしているようで、尻尾がぱたぱたと揺れている。

可愛い。

ブラックは可愛い。

多分、猫じゃなくても可愛いと思う。

おかしい、これだけの美形なのに、可愛いと思う。そう、連呼しなくなるほどだ。

「マシロは、猫より兎が好きなんですか？」

いいながら、ふわりと姿を消した。消したというよりは小さくなった。テーブルの上に、白くて長い耳がひょこひょこつと覗いている。

私がきょとんとしていると、小さな手がテーブルに掛かってひょこりと可愛いウサギが顔を出した。

「ウサギだ」

『兎好きなのでしょう?』

「犬は?」

『……犬、ですか?　なんだか従順すぎて馬鹿みたいで私は好きではありませんが……』

ぶつぶついいながら姿を変えてくれた。今度は大型犬だ。しかもかなりスタイルの良いダルメシアン。ずっと長い尻尾をぱたぱた振って傍まで寄ってくれた。

「すごーいつ!」

『凄くありませんよ。こんなの役に立ちません』

「猫は役に立つの?」

ハクアのように膝の上に頭を載せたブラックを撫でながら問い掛ける。ブラックは、顔を上げて鼻先を犬らしく擦り寄せたあと、ふわりいつもの猫の姿になって、私の膝の上に飛び乗る。

『役には立ちませんが。最初に猫だといいましたし、マシロにとってそれが、私“らしい”でしょう?　それに、マシロが優しくなります』

「普段から冷たくはないよ」

『でも撫でてくれるのは、やっぱり猫のときです』

それは、まあ、頭が高い位置にあるし、撫でる、なんてイメージない。

「ウサギでも、犬でも撫でるよ……鳥とかでも飛べるし便利そう」
『鳥にならなくても飛べますし、それに飛んだりするより、直接移動したほうが早いです』

マシロが好きならなんにでもなりますよ、と続けて、今度は七色のインコになった。綺麗だ。

後編

それにしても、耳や尻尾、いろんなところの形状が変わっても、瞳だけは黒い。

真っ黒。

真っ黒な瞳に、私の姿が映る。

黒い瞳って、映りこみやすい気がする。

「―― …… 戻って良いよ」

「何に、ですか？」

「ブラックに、だよ、早く」

急かした私に、ブラックは不思議そうに頷いて、ぱさぱさと羽をはばたかせ芝生の上に足をつけるのと同時に元の姿に戻る。

すらりと長い手足に、うそ臭い尻尾。

うそ臭い尻尾は今、不安そうにゆらりゆらりと揺れている。

「鳥、嫌いでしたか？」

「何でも好き、何でも平気。きっと、カエルとかトカゲや、蛇になっても好き」

だから、いつも通りで良いよ。とブラックのほうを見ることもなく続けた私に、ブラックは言葉の意味が分からないというように、迷っている。

どうして良いのか分からないのだろう。

ごめん、私も分からない。

自分で振っておきながら。ただ、今は顔がなんか熱いからあんま

り見て欲しくないんだよね。

かさつと芝生が踏まれる音がした。

「マシロ」

「え、ちょ、ブラック？」

自分の席に戻るのかと思ったら、私の傍に膝をついて私の顔を覗き込んでくる。

「何か嫌なことありました？」

「な、ないよ。ないに決まってる、当たり前じゃない、私たちは今お茶してただけだよ。ほ、ほら、ブラックも立って、膝汚れちゃうし、珈琲、は、もう冷めてるかもしれないけど、でも、残ってるし、ね？」

「でも、マシロが私を見てくれません」

そつと私の手を取って、頬を擦り寄せると、捨て猫みたいに見上げてくる。

「見てる見てるっ！ 見てるに決まってる。ほら、座っててば」

また、ブラックの瞳に私が映る。普段全然気にならないのに、急に意識してしまったら、それは妙に恥ずかしい。

恥ずかし過ぎて、心臓五月蠅い。

今更な馬鹿騒ぎに、もつとずつと恥ずかしくなる。

慌てて顔を逸らした私に、ブラックは首を傾げる。視界の隅に、しょぼんと芝生の上に落ちてしまっている尻尾が目に入る。か、悲しんでる？

「ぶ、ごめん、別に怒ったとか、嫌なことがあったとか本当にそうじゃないよ？ 大体理由が無いじゃない、話だってええと、嗜好品の話と猫以外になれるのかって話しかしてないし」

だから、ね？ と重ねてもブラックは納得しない。

—— …… ペロリ

「え？」

突然ブラックは舐めた。私の指先を、そしてそのまま舌を這わせ、指の付け根を舐める。

「ちょ、ちょちょちょっと！ ぶ、ブラックっ！ 何してるの？」

「香味や刺激を得ているんです」

「だから、私は食べ物じゃないって」

「食べ物ですよ」

いつて、ペロリとまた舐める。舐められるのが初めてというわけではないが、くすぐりたい以上に、ぞくぞくとする。まだ日は高いし、庭だし本当にやめて欲しい。

「甘くて美味しいから仕方ない。それに、私だけが味見出来るんですから、尚特別です」

「だ、だったら今じゃなくても良いでしょ！」

「いつ？ いつだったら良いんです？」

いつ？ と重ねて息を吐く。手のひらに当たる暖かな吐息に、私

の背筋が痺れた。

「やだ……って、ヤダっていつてるでしょっ！」

—— ……がつんっ！

久しぶりに拳骨を落とした。

恋人関係になってからなかなかそういう機会はなかったが、それが今急に来た。ブラックもすっかり気を許していたのか、いつものことだからか、素直に殴られて私の膝の上につぶれた。

「マシロが食べたかったのに……」

「突然発情しないでっ！」

「えー、だって、マシロもそうだったんでしょう？ 顔赤かったですよ？ マシロ、そういうときあまり私の顔を見てくれなくなりますし……」

「~~~~~っ!!」

言葉を失くす。顔といわず身体中熱い。

「違うのなら、どうして、逃げたんです？」

「え、ちょ、引っ張らないで」

ぐいっと、ブラックは私の腕を強く引き椅子ごと押し倒した。椅子は微かな音を立てて芝生の上に転がり倒れる。

もちろん倒された私も、痛くはないけど驚いた。

「ねえ、どうして？ どうして、逃げたんです？ 触れなくなっただけじゃないんですよね？ なら、嫌いになったからですか？ え、嫌い？ まさか、嫌いなんて……傷付きました」

暴走してる。

人を押し倒して組み敷いて、猫が暴走を始めた。

いや、妄想？ お日様はまだ高い、青い空に、薄っすらと二つ月の影が見える。そういえば、あの月、満ち欠けが無いな……。

どうでも良いことを考える。考えてないと、この擦り寄ってくる猫に負ける。確実に。庭は駄目だろ。うん。駄目だ。外だ。でも、正直に話さないと離してはくれないだろうな。

「ねえ、ブラック、私を見て？」

首筋に擦り寄ってきていた頭に手を差し入れて、そっと梳く。ブラックは擦り擦りと私に纏わりついてから頭を上げた。

綺麗な瞳に困ったような私が映っている。

「黒い瞳って色んなものがハッキリ映るのかな？　じっと、覗き込んだら、みんなの目にも私は映りこむけど、ブラックの瞳が一番濃く映りこむ、恥ずかしいくらい、はつきりと……」

ブラックは不思議そうに瞳を瞬かせ「……確かに黒い瞳は珍しいですが……絶対にないわけでも……」といったあと、不機嫌そうに眉をひそめて

「それより、相手の瞳に自分の姿が確認できるほど、私以外と見詰め合わないでください」

不貞腐れた。

その様子に、うん……と素直に納得して、ごめんと謝罪する。

私が髪に触れていた指先で、ブラックの頬を撫でれば、すぐに眉間の皺は取れてしまい、心地良さそうにうつとりと瞳を細める。その従順な姿に胸の奥がきゅうと締め付けられる。それはとても心地良い感覚で、愛しいという気持ちがいかにこれなのだ実感する。

「良く映るのは、私が一番マシロを見ているからですよ……。それに、マシロの瞳にも私は鮮明に映りこんでいます。同じ色を持っている」

ああ、そうだ、私とブラックは別々の世界だけど、少しだけの共通点がある。

「……私にとってシル・メシアって、きつと、エミルとかカナイとか……みんなが見ている世界とは違って見えていると思う。元の世界と違いすぎるから……ブラックは、私に近いのかな？ 私と同じように、みんなとは違う目で世界が見えるのかな……」

自分でも何をいつてるんだか？ という話になってしまった。笑われたって仕方ないし、不思議がられても仕方ないのに、こういうときブラックは決して笑わないし、茶化したりはしない。

今も、そうだ。

ブラックは、もう映りこむ姿が確認出来ないくらい近くに降りてきて、そっと、私の眉間に唇を落とす。

反射的に、瞼を落とせば、優しく瞼を食み、囁くように口にする。

「マシロと同じかどうかは分かりませんが、他の住民と私は明らかに見えている世界は違うと思います。私にとってこの世界は全て無意味。色のない世界も同然でしたから……」

静かに瞼を持ち上げれば、視線が絡み、微笑まれる。

「――……でした？」

「ええ、もちろん……マシロが居れば私にも欲しいものが出来る。欲しいものが、必要なものがあれば、生きるのは無意味ではないです」

意味あるものなんですよ。と優しく締め括って、柔らかく唇が重ねられる。珍しくも感じてしまうくらい、長く触れるだけのキス。唇から伝わってくる熱が、じんわりと身体を熱くしてときどきと鼓動を早くする。

「同じがあつて、嬉しい……」

いえば、もう一度唇が重なって、今度は触れるだけには留まらなかった。

まだ、お日様は高いのに、なあ……と頭の片隅で考え、それでもこの猫が好きな私は瞼を落としてしまった。

だって、嗜好品は口にしないと、苛々するし、ね……。

マシロ視点

—— …… いつもと変わらぬ昼下がり、裏路地の一角で私はその子と出会った。

「カナイ！」

「んー。何？」

慌てている私とは対照的に、いつもと全く変わらずインドア派のカナイは、図書館の一角で本の頁を捲っている。

本を置き、私の声に驚き、位置のずれた眼鏡を外すと目頭を二本の指で、ぐっと押しながら続きを促す。

「助けて欲しいの」

「ちよ、は？」

私は胸元を片手でしっかりと押さえ、反対の手でカナイの手首を取った。そして、強引に引っ張ると、驚きながらも抵抗することなくカナイは腰を上げる。

きよろきよろとあたりを見回すと生徒がちらほら。

館内では拙いと思い。カナイの手を引いて、寮棟を抜け庭に出た。カナイはその間黙って私に腕を引かれてついてくる。

少し肌寒さを感じる季節にわざわざインドア派集団の図書館生が外にいるはずがない。

だから、人気は全くといって良いほどなかった。

良く私がうつとしていいるベンチに、カナイを座らせると怪訝な表情で見上げてくるカナイの前に立つ。

そして、片手で胸元を押さえたまま、空いた手で上着のボタンを
に手を掛けて外していく。カナイがどういうわけか慌てて私の手首
を掴んで「ちよつと待て」と止めけれどそんなこと聞いてられない。

「待たないよ！」

とぴしゃりと口にすれば、流石、カナイ。

簡単に押し負けて手を引いてくれた。ほんの少し頬が赤いのはな
ぜだろう？

「この子が……」

いって胸元を開くとタイミングを見たように「にい」と短い泣き
声を上げた。弱々しく勢いが無い。

「——……猫」

どこか複雑そうな顔をして、そう呟くと嘆息する。

なんだろう？ カナイなら飛びついて喜ぶと思ったのに。と、そ
れよりも。

「助けてあげて。凄く弱ってるの、カタカタ震えてて……」

寒いのかと思って懷に入れてあげただけど、それでもまだカタ
カタと震えている。時々聞こえる泣き声もどんどん弱々しくなっ
ている気がする。

カナイは仔猫と私を交互に見て、そつと私の手の中から両手で仔
猫を受け取った。

優しく膝に抱き大きな手で撫でる。

仔猫を抱くカナイは微塵も嬉しそうな顔をして居ない。

—— ……それが、凄く恐い。

「どうかな？ ギルドの傍の路地で転がされてたの……」

「ああ……分かった」

カナイが、何度かそうしているときゅつと力を込めて閉じられていた小さな瞳がうつすらと揺らいで、呼吸が落ち着いてきた。

「マシロ」

隣に座った私に、カナイは静かに声を掛ける。

私は続く言葉を聞けなくて「大丈夫だよね！」と、強く口にした。小さな猫の耳がぴくりつと反応する。

ごめん、大きな声出して……。

「他にも兄弟がいたみたいなの。離れたところで遊んでる仔が居たから。そこに戻してあげたい。出来るでしょう？ カナイなら出来るよね？」

「—— ……」

カナイは何度か私と仔猫の間で逡巡したあと、細く長い息を吐いた。

「分かった」

「ホント?!」

「……俺が預かるよ」

「良いよ！ 私が面倒見るから、どうしてあげれば良いか教えて」「いや、しかし」

「診たいの」
「……はあ」

カナイの溜息は重たかったが、根本的に優しいから駄目とはいわない。仕方がないな、と頷いてくれた。

それから私は、カナイとエミルの手を借りつつ、仔猫——みゃあ——と名づけた。愛はある。問題ない——の面倒をせつせと診た。授業中も心配で私が全く集中できないことに呆れたカナイが、部屋に傀儡を置いてくれた。

何かあれば直ぐに分かるということだ。

用意した籠から出ることも、寝返りを打ったりして動くことすら出来ない状態のままのみゃあに何かあるとしたら、不吉なことしか思い浮かばない。

私は気分が重たかったけれど、出会ってしまったのだ。諦めたくない。

一晩は越えてくれた。

だからきつとこれから少しずつ回復してくれるはずだ。

きつと、きつと、元気になって他の兄弟のところに帰って、お母さんのところへ戻って……時々顔を見せてくれる。

大丈夫。大丈夫。

ぎゅっと握った拳を空いた手で包み込み力を込める。
部屋を出るときと同じ場所。ベッドの隅っこに置かれた籠は微塵も動いていない。私たちが戻ると、傀儡は、ぽんっと白煙を上げて消えた。

丸くした小さな身体が僅かに上下していることだけで安堵する。

「どうしよう……もう、全然飲んでくれない……」

脱脂綿に含ませた調整したミルク。

昨夜は、なんとか少しずつのどの奥へと流し込んでくれた。

でも今日は力なく口の端から垂れていくだけだ。

じわりと揺らいだ視界に首を振る。

もう一度挑戦する。

何度も何度も。

繰り返す指先が震える。

恐い。このままこの鼓動が止まってしまったらどうしよう。

「ほら、変わるから、どけよ」

傍にいてくれたカナイがそういつて肩に手を掛ける。私は赤くなつた目を見られたくなくて、顔を伏せたまま立ち上がった。カナイは慣れた手つきで、仔猫の口に小指を差し入れて、少し口を開けさせ、出

来る限り奥のほうで、軽く絞る。

どのくらい入ったのか分からないけど、喉がこくんと動いたこ

とにほつとした。

もう少し。と思ったのにカナイは器に脱脂綿を戻して、手を拭う。

「これ以上は無理だ」

「でも、」

「駄目だ。無理にやれば苦しむだけだ……もう、分かってるんだろ
う？」

カナイのいう意味は分かる。私は俯いてきゅつと下唇を噛んだ。

「だから、お前が面倒みなくても良いっていったら……」

「――……けて」

「は？」

「助けて、あけてよ……助けてあけて……。天才魔術師なんでしょう？ 猫好きでしょう？ 見捨てないで、助けてあけて、駄目だなんていわないでっ、いわないでよ……」

どうしようもなくて、我慢出来なくて紡ぎ出した台詞にカナイが、ふいと顔を逸らした。

「可哀想だよ……まだ、こんなに小さくて、何も楽しい思いをしてないよ。もっともつと生きなくちゃ。ねえ、カナイもそう思うでしょう？」

必死に見上げる私と目をあわさないカナイの腕をぎゅつと掴む。

カナイはそれを払うこともしないでただ黙っている。

私はそれが余計に苦しくて、瞳に溜まった涙がはらりと零れ落ちた。

「――……っ、すまない」

その途端、カナイに腕を引かれて目の前が暗くなる。頭の後ろに添えられた手に、ぐっと力が入ってカナイの胸に押し付けられる。

涙が、止まらなくなってしまう。止まらなくなった涙を早く止めたくて、喘ぐように言葉を紡ぐ。

「私の、ね」

「……ああ」

「私の世界の、魔法使いは……」

「ん」

「何でも出来るの。何でも出来るんだよ……病気だって簡単に治しちゃうの、事故で不幸な目に合ったって助けてくれるの。なんだって、なんだって、出来るんだよ」

私は実際に会ったことのない魔法使いの話をする。そんなもの御伽噺の中だけだ。子どもだっていまどき信じていない。

実際に目にしている魔法使いは、色々と制限がある。

色々と……限界がある。万能ではない。

分からなくない、でも頭が理解してくれない。

大丈夫なんじゃないかという、僅かな期待が、希望がどうしても消えてくれない。

「――……すまない。許してくれ。猫だって、お前のことだって好きだ。だから何とかしてやりたい。してやりたいけれど、無理なんだ、無理、なんだよ。俺には何も出来ない、これ以上何もしてやれない……痛みから、苦痛から救ってやるくらいしか出来ない、無

理なんだ、俺は、無力なんだ…

…お前の望む魔法使いになれなくて、すまない」

微かに震えて口にする。

それを隠すようにカナイは私を抱き締める腕に力を込めた。

「ごめん……ごめんな……」

搾り出される声に、また泣きそうになる。

ずきりと悲しみ以外で胸が軋む。

私はひどいことをいった。

でもカナイは怒らない。怒らずに傷付いて謝罪している。

みやあを抱き上げたときに、私だつて分かった。分かってたのに

……縋つて、困らせて、拳句傷つけた。

苦しげにカナイは私を抱き締め、頭に頬を寄せる。

無力だと繰り返し返すカナイに胸が締め付けられる。私はあっさりと

カナイの古傷を抉ってしまった。

「ごめん、なさい……」

私の謝罪に答えたのは、カナイではなく

「にい……」

みやあだった。

同時に緩んだカナイの腕の中から抜け出して、籠に目を落とす。

弱々しく、にい、ともうひと声。

私とカナイは床に膝を着き籠の中を覗き込んだ。どちらともなく

手を繋いで、ぎゅっと力を込める。

繋がった部分はとても暖かいのに、目の前の小さな命は冷えようとしている。

呼吸がもう細い。

浅い……

「みゃあ」

呼びかければ薄っすらと瞳が開く。でも直ぐにそれは落ちた。

「――……に……い……い……」

弱い声の余韻を残して、みゃあは動かなくなった。

仔猫らしいふわふわな体毛は、呼吸に合わせて揺らぐことはない。窓から吹き込んでくる風に、タンポポの綿毛のようにゆらりと揺らされるだけだ。

もう、愛らしい声を立てることも出来ない……結局、私は何も出来なくて、みゃあの瞳が何色なのかもはっきり分からないまま、そのまま、逝かせてしまった。

じわじわつと視界が揺らぎ、涙が溢れそうになって、ごしつと拭う。そして、繋いだままになっていた手に視線を投げたあと、ふと隣を見ると。

「ちょ……」

カナイが号泣。

私が声を殺せば慌てて手を解いて、両手首の内側で目をごしごし

と擦る。

「うるさい。黙れ。何もいうな」

「……何もいってないよ」

哀しいはずなのに、口元が緩んでしまった。

そのあと暫らくして、みゃあの身体は乖離を始めた。
優しい光に包まれて、ふうわりと、消えていく光景は幻想的で、
死の痛みを和らげてくれた。

残ったのは、小さな種。

もちろん、ブラックが慌てたようにやってきた。矢継ぎ早に何事か聞いてくるブラックに苦笑する。私が粗方の説明をすると、綺麗な指が、つと私の目元を撫で、瞼に優しい口付けが降る。

「私は平気だよ」

苦笑して告げれば、そうですね、と相槌を打つのに私を包む手は心配そうだ。

ややして、ブラックに種が必要か聞いたら好きにして構わないといってくれたので、私は、庭の隅にみゃあのお墓を作った。

私の自己満足だけど、誰も何もいわなかった。

特になんの感傷もなく「水をやっても芽は出ませんよ?」と口に

したブラックの向こう脛は蹴っておいた。

まだまだ彼にとって命は軽い。

と、思ったらアルファが小声で「いわなくて良かった」と溢していた……全員の頭に疑問符だったのだろう。

エミルもアルファも心配そうに廊下で待っていてくれたのに、私たちの心配をしてくれるのに、命が尽きたそのあとにシル・メシアはとても無関心だ。

やれやれと苦笑して、地面に膝をつきみやあのお墓に手を合わせる。

瞑目していたら、

—— ……ふわっ

膝に柔らかい感覚あった。

「え」

どきりと心臓が跳ねた。

恐る恐る目を開けると、ブラックが見上げて「にゃー」と鳴く。分からないなりに、彼なりに気を使ったのだろう。

私は苦笑して、ブラックを抱き上げた。

「ブラックは長生きしてよね」

額の辺りをやわやわと撫でながらそう告げれば、気持ち良さそうに目を閉じて擦り寄ってくる。

そして、頬を撫ぜる風に混じって、にいと聞こえた。

その覚えのある泣き声に、顔を上げ地面を見る。

備えたばかりの小さな白い花が、風に揺れていたただけだった。

カナイ視点

—— …… いつもと変わらない昼下がり。今日も俺は、館内の一角で身にならない読書をしていた。

「カナイツ！」

「んー、何？」

足音を消すこともなく駆け寄ってきたマシロに名前を呼ばれて顔を上げる。

少し息が上がって頬が上気している。

マシロがバタバタしているのはさして珍しい話でもないが……そう思いつつ、俺は本を閉じると眼鏡を外し、目頭を二本の指でぐつと押さえた。

続きを促した俺に、マシロはまどろっこしそうにして答える。

「助けて欲しいの！」

「ちょ！ は？」

いつて俺の手首を掴まえて引つ張る。いつも思うが結構な馬鹿力だ。空いた手は胸元を押さえている。どこか調子でも崩したのか？疑問に思いつつもぐいぐい引つ張るマシロについて、館内をあとにした。

寮棟を抜けて、中庭に出る。

ひんやりとした風が吹いているこの時期に、俺も含めインドア派の多いこの連中が外に出ているわけもなく、人っ子一人いない。

マシロはその一角にあるベンチに、俺を座らせておもむろにボタンに手を掛ける。

反射的にその手を掴んで「ちょっと待て」と突っ込んでしまった。マシロに恥じらいとかそういう類がかけているのは分かる。分からないでもない。だがしかし、外で何をするつもりだ。

「待てないよっ！」

気を使っただけなのに怒鳴られた。

仕方ないからその手を解放してやると、上着の中から猫を出してきた。

仔猫だ。

生まれてそんなに経ってない。

でも一見して分かる。死に掛けている。

明らかに命を繋ぐのは無理だ。

マシロの必死な様子に、仔猫を受け取れば、それはより確実になる。

この仔猫は生きられない。

何度か撫でて中の様子を探れば、少し中がおかしい。足りない臓器がありそうだ……他の部分と癒着してしまっているのかもしれない……。今呼吸しているのが奇跡だ。

それを正直に伝えようとしたら、必死に遮られた。真っ直ぐに見つめて、事実を否定している。

マシロも薬師の端くれだ。

全く分からないわけじゃない。それでも何とかして欲しいと、俺に頼んできた。必死で食い下がるその姿に、何とか手を尽くしてやりたいと思う。俺だって無駄に命を搾取するようなことはしたくないし、助けられる範囲のことなら助けてもやりたい……だから何とか出来ないかと思案しても答えは変わらない。

俺に何とか出来るとしたら……マシロに嘘をついてやることくらいだ。

だから、分かったと、面倒を診ると、いったのにマシロは俺の手に完全に委ねることをしなかった。

どうして……。

ぎゅつと胸が苦しくなったが、いいだしたら聞かないだろう。仕方なく俺は了承した。

部屋に戻る早々。

猫にはみやあというありふれすぎた名前が付いた。今日明日尽きるだろうものに、名前なんて必要ないといえない自分も弱い。

それからエミルにミルクに混ぜる薬の調剤を頼んだ。

エミルはいった通りのものを直ぐに用意したが、マシロの部屋へ届ける準備をしていた俺に「良いの？」と問い掛けてくる。

「あの仔、みやあちゃん？ マシロの傍に置かないほうが良いんじゃない？」

「——……」

俺もそう思う、という台詞を飲み込んだ。

それを察したのかエミルは困ったような笑いを溢して「早く飲ませてあげて」と俺の背を押した。俺はこれからを想定すると、深い

溜息を吐き頷くのがやっとだった。

数日、持つだろうか……。

薬を運びつつ、気分は物凄く重かった。

そして、やはりそのときは直ぐにやってきた。マシロは、それでも諦めきれない様子で、何度も何度も薬を混ぜたミルクをみゃあの口に運ぶ。

あまり小動物の相手には慣れていないのか、とても不器用そうだ。

もうやつても無駄だと分かっている。

どうしようもない。

それなのに、やめないマシロに我慢出来なくなつて、変わつてやつた。

何とか一口は流せたものの、次は無理だろう。変なところに入つて溺死になつては洒落にならない。それが理解出来ないという風なマシロに「これ以上は無理だ」と告げる。

酷なのは分かっている。

分かっているけど、どうしようもない。

魔術も、薬も、その尽きかけた生命量をどうにか出来るような方法はない。

マシロはギリギリまで、尽きるそのときまで何とかしてやりたいと思つているのだと思う「でも、」と縋るように溢した言葉に、俺は辛辣とも取れる台詞を続けた。

「駄目だ。無理にやれば苦しむだけだ……もう、分かっているんだろっ?」

俯き、きゅつと唇を噛み締めるマシロに心が痛む。だから

「だから、お前が面倒みなくても良いっていったら……」

いったのに。俺が一人で見届けて、一人で送り出すつもりだったのに。鉛のように重い心が少しでも軽くなるように、長く深く深呼吸を一つした。

それと被ったから一瞬マシロが何をいったのか分からなかった。

「――……けて」

「は？」

「助けて、あけてよ……助けてあけて……。天才魔術師なんだろう？ 猫好きでしょう？ 見捨てないで、助けてあけて、駄目だなんていわないでっ、いわないでよ……」

真っ直ぐに見上げてくるマシロの言葉を受け止め切れなくて、俺は目を逸らした。きりきりと胸のうちが痛む。

「可哀想だよ……まだ、こんなに小さくて、何も楽しい思いをしないよ。もっともっと生きなくちゃ。ねえ、カナイもそう思うでしょう」

小さな手が俺の腕を掴み懇願してくる。マシロが思うことも、いたいことも、分かる。分からないわけじゃない。分からないわけじゃない。

だけど、俺には……天才だなんて名ばかりの俺にはどうしようもない。

マシロの大きくて丸い瞳が、昔の記憶と被る。
いつも俺を見上げていた。

俺だけを見て崇拜しているようでもあった。

何でも出来る。

不可能なことはない。

凄い凄いとまでやはした。

でも、結局俺はそいつすら守ってやれなかった。

俺は……。

「……お願い、だよ……」

目を真つ赤にして、涙をたくさん浮かべた瞳がキラキラと光る。

なみなみと瞳の淵に溜まった涙は、マシロの瞬きを待たずして、はらりと頬を伝った。

ずきんつと胸が痛み、息苦しくなる。苦しくて、堪らなくて、俺は闇雲にマシロの腕を引いて抱き締めた。

マシロからふわりと香る甘い香りに、胸の苦しみが僅かに解け、涙腺が緩む。

「——……っ、すまない」

謝ることしかできない。

一度溢れ始めた涙は簡単には止まらないのか、マシロは時折しゃくりあげながら、俺に話を続けた。

異世界の魔法使いはとて万能らしい。

もし、俺がそうだったなら、みゃあを失わなくても済むだろう。

この涙もこの痛みも必要ない。

そう、俺は万能じゃない。

寧ろ無能だと罵ってもらったほうが良い。

どんなに優れた素養を持っていたても仔猫一匹救えない。女一人泣き止ませることが出来ない。本当に、無能だ。
許しを請うことしか出来ない。

「ごめん、なさい……」

繰り返す俺の謝罪に心苦しくなったのか、マシロはぼつりと謝罪した。

「にい……」

それに答えたのは奇しくもみゃあだった。そんな力残っていないはずなのに、耳元に届いた声に腕の力が緩んだ。

誰かの手がなくては、生きられない小動物が好きだ。

異世界から落ちてきて、迷走するマシロが好きだ。

無能なはずの自分でも何か出来ている気になる。

小さな生き物は寿命も儂い。

だから、これまでだって、何度もこんな思いはしてきた。だから俺は慣れている。慣れている俺とは違って、マシロはきつと慣れていない。

殺しても死ななさそうな猫くらいしか傍にいないのだから……。

それなのに、わんわんと声を上げて泣きそうなのを、堪えてしっかりと見届けようとしているマシロに胸が苦しくなる。

俺は、迷わずマシロの手を取った。取っただけの手にマシロが、きゅっと力を込める。少しだけ震えている。同じだけの力で握り返せば、ふと、一瞬だけ、目が合った。

胸の奥が、ことんと音を立てた気がする。

そのあと十も待たずに、みゅあは息を引き取った。とても静かに……穏やかな声を上げて。

小動物の乖離はとても早く、短い。
感傷に浸る間もないだろう。

それでも、マシロはそれを感慨深そうに眺めていた。

その姿を眺めていると、また、泣きそうになった。
ぐっと目頭を押さえつけて堪えると、隣りに突然現われたブラックに、肩を強張らせる。

ちらとだけ俺のほうを見たブラックは、少し慌てた様子でマシロの様子を見に隣りに膝を折った。

「マシロ？ どうしました？ どうしたんですか？」

矢継ぎ早に問い掛けられる台詞にマシロは、ふっと口元を緩めた。
そして、一言だけ「大丈夫だよ」と答える。

それを待っていたかのように、エミルとアルファが、そーっと部屋の扉を開けて顔を覗かせてきた。

「あれ？ カナイさん泣いてたんですか？ 目があかい」

マシロの意味の分からない儀式を眺めていたら、案の定アルファに突っ込まれた。

「マシロ、大丈夫？ 泣いてなかった？」

「お前逃げてたろ？」

「別に逃げてないよ、ただ、ちょっと、慰める言葉が思い浮かばなくて……だからその」

ごめんね？ と苦笑して締め括ったエミルに呆れたような笑いが零れた。マシロの悲しみの基準はきつと俺たちのそれとは違うから、理解し難い。

でも、作ったばかりの墓の前から膝を上げたマシロは、どこか吹っ切れた顔をしていたから「大丈夫だろ」とそうはつきりと思えた。

腕の中の黒猫に刹那睨まれた気がするが、きつと気のせいだ。

前編

寮の自室にて、明日提出予定のレポートを書いていた。
資料はカナイが集めてくれたし、必要項目も抜粋してくれているから、私はそれを纏めるだけという簡単な作業だ。

至れり尽くせりだよね。

感謝しながらも苦笑する。

カナイ、そっけなく見せてなかなか私を甘やかせていると思う。

『どうせ、腰掛け程度なんだからこなすだけこなせば良いだろ?』

最初はそんな感じだったけど、こちらに戻ってからその調子だからいい訳にすらなっていない——これだけ簡潔、的確に纏め上げることが出来るのに、身につかない。自分の中には決して蓄積されないのだそうだ……素養とはかなり厄介だなと常に思う——とはいえ、素養ありの私でもあと一息掛かりそう。

私は椅子を傾けて、ぐーんっと背伸びをする。

開け放った窓からは柔らかい夜の風が吹き込んでくる。

心地良いなと瞳を細めた。

その風に乗って、かちゃっとドアが開いて閉じる音がした。

「あれ?」

こんな時間からお出かけかなあ? 右隣は非常口だ。音がしたのは反対のエミルの部屋から……。音だけで声はしなかったから、誰

かが来たというわけでもないだろう。

夜は基本的に寮棟の玄関が閉まってしまつまでに戻っていれば、そのあとは自由だ。

寝ていようと起きていようと、館内を出歩こうと咎められたりはない。

まあ、廊下で寮監さんに出会えばそれなりに注意はされるけど。

私は少しだけ迷つて、かたんと椅子を元の位置に戻すと立ち上がった。あとをつけるわけじゃないけど、少し気になる。

ちよつと確認するくらい良いよね。

『主？』

ベッドの上で丸くなっていたハクアが、私の動きに頭を上げた。私はその姿にもう一度休むようにジェスチャーしながら微笑む。

「少しエミルの様子を見に行くだけだから」

『共に……』

「ううん。平気、直ぐに戻るから良い子にしてて」

私がつっぱりと続ければ、ハクアはそれ以上は食い下がらなかつた。そして、さつきと同じように腕の間に頭を埋める。

ベッドヘッドにかけていたストールを引っ張って肩に羽織ると、私は部屋を出た。

夜の廊下は、しんと静まり返り魔法灯も足元を照らすだけの間接照明しかない。無音で無機質な通りは、この扉の全てに人が居る

はずなのに、無人のように感じさせてちよつと恐い。

少しだけ探して、見付からなかったら直ぐに戻ろう。
そう決めて頷くと私は歩き始めた。

「あれ？」

「ひっ！」

廊下の角を曲がると、何かにどんっ！ とぶつかった。声が聞こえたから何かというよりは誰かだ。

私は息を呑み身体を縮めた。

見上げれば人。当然だけれど、良かった。ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間。

「こんな時間からどこへ？」

「え、ええと」

「用事ないなら俺の部屋にでも来ない？ ルームメイトも寝てないと思うし、一緒に話でもしながら飲まない？」

寮棟の廊下でナンパされてしまった。

そういつて、じいつと頭の前から足の先まで眺められ、居心地悪くストールを胸元で引き絞る。こんなことなら、ハクアについてきてもらうんだった。

断る理由を考え遅疑逡巡している私が、ほんの少し後悔している間に、おいでよ。と手首を掴まえられて、びくりと身体を強張らせた。

「お待たせ」

ああ、私は運が良い。

丁度掛かった天の声に、私の手首を掴んでいた手は離れた。というか、静かに、でも、確実に叩き落された。

「なんだ、やっぱりお守り付き？」

叩かれた手を軽く振って肩を竦める寮生に、私の隣に立っていたエミルはにこりと微笑み「ごめんね」と口にした……けど、声色はそんなに穏やかそうには聞こえない。

それを直ぐに感じ取った寮生は、良いよ。と苦笑して、私には、また機会があつたらと手を振って廊下を歩き去っていった。心持足早に。

その後姿が見えなくなると、ほうと一息吐く。

「良かった」

「こら、良かったじゃないよ？ どうしたの、こんな時間に」

当然のような咎める声に私はしゅんっと肩を落とした。

私は自分の足先を見つめながら「ごめん」と謝って、「ごによ」にと続ける。

「エミルが出て行くのが聞こえたから……こんな時間にどうしたんだろうと思って」

「え？」

「何かあったのかなーと気になって……ごめんね」

「あ、ああ、そうか。そうだよ。お隣さんだもんね」

そんな答え予想もしていなかったのか、少し驚いた風なエミルを見上げると、ほんの少しだけ頬が赤い。

きよとんと首を傾げれば目が合って、エミルはどこか恥ずかしそうに微笑んだ。そして、

「ちょっと、飲みたいなーと思って、お酒を拝借しに、ね？」

と三五十mlくらい入りの小瓶を持った手を振った。こっんかつんつと瓶同士が触れ合う音が、小気味良く響く。

そっか、と笑った私にエミルは「一緒に飲む？」と続けた。

* * *

寮の屋上には初めて上がった。いつもなら、図書館の屋上庭園を利用するからこっちも上がれるとは思ってなかった。

「寮の屋上ってこんな風なんだね？ 初めてだよ」

「こっちは用がなければ殆ど人が来ないから、僕は時々来るんだ」

その言葉通り常連なのだろうエミルが、こっちこっちと手招きするのについていく。

屋上庭園よりは、点在する小さな温室が目につく。

ネームプレートが掛かっているから生徒が個人的に作っているものなんだろうなーと想像がついた。

どうぞと軽くベンチを叩いて勧めてくれる。何も用意がなくてごめんと謝ってもらった——多分、ベンチにかけるハンカチとか、そういうのがないという意味だろう。そういうところがスマートに、さらっと出るエミルはやはり王子様だ——けど、私はそんなにお嬢

様ではないから気にしない。

気にしないでと、腰を降ろすとその隣にエミルも腰を降ろした。

木々が近くあまり空は覗かない。

でも葉の擦れる音が心地良い。

かなりマイナスイオンを発生している場所だと思う。

きゅっきゅつとコルクを抜く音がして、どうぞと一本渡してもらった。もちろん、その際にはグラスを持ってこなかったことも詫びてもらった。でもこれは直接口をつけて飲むのを想定して作られている量のお酒だ。

だから、別に問題ないと思う。

「ありがとう。あ、でも、私にこれ全部は過ぎるかも……」

「良いよ、そのときは僕が貰うから」

「え……」

思わず間接キスとかそんな可愛らしいことを思い浮かべてしまっ
て、まだ飲んでもいないのに私の頬は熱くなってしまった。

でも、エミルにそんな考えはなかったのだと思う。そんな私に「
うん？」と首を傾げ自分の分を軽く呷った。

ふうと吐いた吐息が艶っぽい。

それを、見届けたあと、私も瓶に口を付ける。

こくんと喉の奥へ流し込んでから、ふと気がつく。

「これ……」

「カルヴァドス。リンゴのお酒だよ」

ふんわりとした甘さが口内に広がって、もうひと口とあとを引く。どちらかといえば、悪酔いするタイプの飲みやすいお酒だ。

香りも甘さも優しくて美味しい。そういえば、

「エミルは麦酒は飲まないの？」

別にどちらでも良いんだけど、ふと問い掛ければエミルは短く唸って「笑わないでね？」と前置いた。

「僕、苦手なんだよ」

「苦味が？」

「うっん。そっちじゃなくて、気泡が口の中で弾けると痛い気がする。だから、飲まないわけじゃないけど、発泡酒全般苦手」

……ぷ。

あまりの可愛らしい回答に私は口元を押さえた。「笑わないっていったのに」と困ったように眉を寄せたエミルは「ごめん」と謝りつつも笑ってしまっている私につられて笑みを溢す。

「あれ？ でも前にシャンパーニュは美味しいって飲んでたよね」

「え……あ、あー……あれ、ね。花見のときだよな？ うん、美味しいのは美味しいと思うよ？ それにあのときマシロが美味しそうに飲んでたから……」

目を泳がせつつ恥ずかしそうに答えるエミルが、ちょっと可愛い。

「何を飲むかじゃなくて、誰と飲むか？ ってことかなあ？」

「……何を飲むか、じゃなくて、誰と飲むか？」

エミルはご丁寧 私の台詞を繰り返した。

きつと私も、知らない人たちに囲まれて飲むお酒は苦くて喉を通らないだろう。それだったら、やっぱりエミルやみんなでわいわい騒ぎながら口にするほうが良い。

そう思っ、膝に置いた瓶を両手で包み込んで見つめると、口元が緩む。そんなときに、

「マシロって凄いね」

急にそんな風に振るから「え？」と間抜けな声をあげ顔をあげてしまった。

「凄いよ……マシロは自然と美しいときの在り処を教えてくれるんだね」

「え？ ええっ？！ そ、そんな大それた話じゃないよ」

どこか尊敬染みた視線を投げられて、綺麗に微笑んでくれる。

私はそれについ過剰に反応してしまった。エミルは、そんな私を楽しそうに見たあと「ううん、凄いよ」と繰り返した。

そして、こくんとまた一口飲んで、ほんの少しだけ頬を染めてふんわりと微笑んだ。

後編

「マシロはお酒好き？」

「え、私は別にあってもなくても良いかな。紅茶の方が好きだし。でも、少しは飲めるようになっておいたほうが良いからって、練習中」

これは飲みやすくて美味しいね。と瓶を軽く振れば、うん。と笑みで返される。

そんな他愛もない会話をしつつ、暫らく二人でぼんやりと瓶を傾けた。

不意に訪れた沈黙が特に息苦しくなるようなことはない。三人とはしょっちゅう一緒に居るし、傍に居るというだけで安心出来る関係だ。

そう、本当の家族のように。私はこの世界では一人きりで――血縁者という意味で――だから、近しい家族と読んで相応しいのは、エミルたち三人とシゼくらいだろう。

ブラックは、もちろん誰よりも近いけれど家族ではない。私はブラックが他所へ心を許すことをきつと許せないんじゃないかと、そう思うから。自分の中の黒い部分がざわつくのは、やはりブラックに対してだけだ。

ほう、と長息して私は枝葉を揺らす木を見上げていた。

そういえば、この木はまだ、葉を失っていない。

中庭の木は枝が寂しくなっていて来ているというのに、少し不思議。でも、もうその程度のことには驚きは覚えない。

* * *

「もしかして、一人で考え事とかしたかったんじゃない？」

どうして私は気がつかなかったんだろう。誘われるままについてきてしまったけど、普通に考えたらそういう意図で夜中にこっそり……だったのは明白だ。

「そんなことないよ」

そして、優しいエミルがそういつてくれるのも分かる。やはり、先に戻ったほうが良いかと腰を上げ掛けたら、腕を掴まえられた。

「ここに居て、もう少しだけ」

お願いと重ねられては、私も立ち去るには忍びない。迷惑じゃないならと、苦笑して、もう一度腰を降ろした。

「エミル、もしかして疲れてる？」

「え？ ううん。別にそんなことないと思うよ」

いつて笑ってくれたけど、ごしつと目を擦って、大きく深呼吸する。

「エミル」

「うん」

「もしかして、マリル教会のことで何かもめてる？」

ぼつりと私が問い掛ければ、エミルは首を傾げつつ私の手の中か

ら瓶を取り上げた。そして、そのまま躊躇なく口を付ける。あ、と声が出そうになるのを飲み込んだ。

こくんつと月明かりに白く浮かぶ喉仏が上下する様はどこか艶かしい。

意図せず熱くなる頬を隠すように顔を伏せれば、エミルが飲んでいた瓶がいつの間にか足元に置いてある。なくなったんだろう。

私は、内心慌しく話を続ける。

「レニ司祭のことも押し付けたし」

今更だ。今更な話題に、エミルは微笑む。

「そんなこと気にしないで良いよ。それに、別にもめてない。レニ司祭と何かあるとしたら、今はまだ、マシロとのことじゃなくて、正直いえば、シゼのことかな？」

話は聞いたんだよね？ と付け加えたエミルに私は頷いた。

「ちょっと強引に急がせたから、面白く思われてない。権威のない、継承順位の低い王子が将来有望な生徒を出し抜いて引き抜いた。表面上は、何事もなく……だけど、しこりは残つてると思うよ」

「でも、シゼはここにきたことを後悔してないと思うけど。エミルのこと大好きだし」

「え？」

「え？ シゼが、だよ？」

「ああ、うん。シゼがね」

お互いに絡んだ自然を瞬かせたあと、どちらともなく顔を逸らす。

何を勘違いしたのかは問わないことにしよう。自分で自分の首を絞めることになりそうだから。

「うん、そう、シゼね……レニ司祭の、面白くなさそうな顔……良
く覚えてるよ。飼い慣らす、暇を与えなかった、から、ね」

どういう意味か聞こうとしたら、肩がずんつと重くなった。え？
と見ると、エミルが寄りかかっている。長い睫毛は頬に掛かり、
静かにゆっくりと呼吸している……。

「寝てるし」

私は苦笑して、エミルの手の中から瓶を抜き取った。

さわさわと心地良く吹き抜けていく風が、頬を撫でエミルの髪を
揺らす。

「……じよぶ、心配ない、よ」

零れた寝言に頬が緩む。

エミルはいつも私のことをみんなのことを、気に掛けてくれている。
る。

今回のことだって私のせいじゃないといってくれるけど、私が踏
み込まなければ混ざらなかったことだ。

私はエミルと同じだけ、エミルのことを気に掛けてあげられてい
るだろうか？

その自信は全くない。ないに等しい。あるわけない。よね。思っ
て苦笑する。

それでも、紛争してくれるエミルに私は心からの感謝しか上げる

ことは出来ない。

そつと、額を撫で前髪を掬うと、柔らかな髪に唇を寄せる。

そしてそのまま、頭を支えて、少しだけお尻の位置をずらし、ゆつくりとエミルの頭を膝に落とす。起きてしまうかと思ったけど、少し唸っただけで、目を覚まさなかった。

やっぱり疲れているんだと思う。

静かに頬に掛かった髪を横に流せば、眉間に寄った皺が和らいだ。ほつと胸を撫で下ろし、私は肩に掛けていたストールをエミルの身体にふわりと掛けた。

すりつと膝に頬を摺り寄せられてくすぐったい。

零れ落ちそうな笑いを堪えてから、私はもう一度エミルの髪に触れた。

綺麗で、不思議な色をした髪のコ。襟足に少しだけ癖があるみたいだ。

なんか可愛い。

ふふつと堪えきれない笑みを溢したところで「主」と声が掛かり、びくりと心臓が跳ねた。身体ごと跳ねなくて良かった。

『何をしている?』

「しー……静かに。エミルが休んでるから、もう少し、少しだけ眠らせてあげて」

音もなく私たちの前に歩み寄ってきたハクアは、私とエミルを交互に見たあと、私の足元に丸くなった。

ハクアのふわふわが足に触れて暖かくて気持ち良い。

そうして、私のわがままを許してくれるハクアに心の中でお礼を告げた。

辺りが深閑とし、優しい空気に包まれるような気がする。膝の重みも心地良く温かい。端正なエミルの横顔を、静かに見つめつつ時折風に乱される髪を撫でる。

少しでも長く、この時間を守ってあげたい。

素直にそう思った…… —

* * *

「——……ロ、マシロ」
「ん、んう」

私、どうやら転寝をしてしまっていたらしい。落ちていた瞼を目を擦りつつ瞼を持ち上げる。

「ひゃあっ!」

余りに近い距離で下から見上げられていて私は思わず肩を跳ね上げた。文字通り跳ねさせた。

「ごめんごめん。直ぐどくよ」

エミルはその様子にくすくすと笑って、私の膝を横断していた身体を起こして隣に座った。足元に居たハクアが心配そうに鼻面を押

し付けてくる。

それに気を取られていると、ふわりと肩が暖かくなった。

「貸してくれてありがとう」

続けて「戻ろう？」と手を差し出される。

私はエミルから戻ってきたストールを胸元に手繰り寄せて片手で握り、エミルの手を取って立ち上がる。

絡めとられた指先から伝わってくる暖かさに、私はまた、眠気が戻ってきた。アルコールがまだ身体に残っているのだろう。

ふわりふわりととても心地良い。

かつん、かつんつとエミルが空いた手に持っていた瓶が二つ仲良く打ち合う小さな音も眠気を誘うだけだ。

「抱っこかおんぶしてあげようか？」

私は、いい！ と慌てて頭を振った。

その急な動きに、ぐらりと揺らいで慌ててエミルの腕にしがみ付く。エミルの方が飲んでいるはずなのに、すっかり覚めてしまったのか、くすくすと笑いながら、出来ればそのまましがみ付いていてね？ と、階段を降り始めた。

私は、膝枕が長かったのもあったのか、膝がかくんかくんして仕方なかったから素直にエミルの腕にしがみ付かせてもらった。

「マシロ」

部屋の扉を潜るまで見送ってくれたエミルが、扉の前で改めて名前を呼ぶ。

私は閉じかけた扉を、開いて続きを待った。

エミルは少し言葉を選ぶためか逡巡していたが、直ぐに私の瞳を見つめて微笑むと「ありがとう」とだけ口にした。

私も同じようにエミルに掛ける言葉を搜したけれど、どれも適当ではないような気がして、結局「どういたしまして」と返したただけだった。

ぱたんつと扉を閉じて、ノブを握り締めたまま、私はエミルの気持ちを感じる。私がみんなを“家族”なんて粹でくくることが、きつと苦しく感じている。それが分からないほど、私は鈍くない。でも、それを許してくれる、エミルに甘える。私の方が、余程ズルイ人間だといえるだろう。

エミルに対して申し訳ないな、という気持ちと、それに対する甘えから自嘲的な笑みを溢すと「主」とハクアの声が掛かる。

それとほぼ同時に隣の部屋の扉が閉まる音がした。

私は少しだけ瞑目して贖罪する。

ごめんね。

私の好きは、エミルの好きとは永遠に重ならないと思うけれど…

…それでもやっぱり、大好きなんだよ……。

「……………寝ようか？」

いつて私はそのままベッドの中へと潜り込んだ。黙って付いてはいるハクアに腕を回して臉を落とす。

―― …… 直ぐに夢路への扉は開かれた。

―― きつと今夜はリンゴ酒のような甘くて優しい夢を見るだろう……

今日も今日とて良い天気。

シル・メシアの雨季はもう少し先だ。暖かい日の光を受けつつ、私は通いなれたレンガ道を歩いた。

—— …… カランコロン

「いらっしゃーい」

いつものアーチ型の扉を潜ると、可愛いらしいウエルカムベルと微塵もずれることのない声に迎え入れられる。

私はその声のにこやかに微笑んで「今日は何かない？」といつもと変わらない問い掛けをする。

ギルド事務所の管理人の二人は可愛らしい長い耳を、ひょこんひょこんとさせて顔を見合わせると「あつたかな？」「あつたつけ？」と左右対称に首を傾げあう。

可愛い。

そして微笑ましすぎる。

「大通りでのピラ配りくらいならあるけど」

「あるけどダメダメ」

「そう、ダメダメ」

私は足元にすり寄ってきた白猫に腰を屈めて「別に私、仕事選ばないよ？」と答えたが問題はそこではないらしい。

ふわりと猫を抱き上げれば大人しく抱かれてくれる。

耳と尻尾に少し灰色毛が混じっている真っ黒な瞳がキュートなこの仔はマシロちゃんだ。私がいうと物凄い違和感があるが、仕方ない。

もうその名前に慣れてしまつてマシロちゃんと呼ばないと返事をしないらしい。

多分、私は周りから全員にいじめられているのだと思う。

最初は、カナイがこそりと研究棟の裏で飼っていたらしいが、アルファに懷きまくつて研究棟に戻らなくなり、アルファがあっさり里親と称してここにあげてしまった。

あのときのカナイの落ち込み具合は半端なくて面白かった。いや、気の毒だった。

未だに、兎が猫を飼うなんて間違つてるとぶつぶついている。往生際が悪いというか、意外にしつこい。

「目立つちゃ駄目」

「そう、ダメダメ」

「僕ら王子様に目をつけられるのこわーい」

「こわーい」

……ああ、そう。

私はまた、ランク以外に仕事の制限を受けているらしい。私のことを思つてだろうから、別に異議申し立てはしない。そうエミルたちが判断するなら、きっとそれが良いのだろう。

「……にしても、マシロちゃん、ちょっと太ったんじゃない？」

私は前足の脇に手を添えて、だらーんつと抱くとお腹が、若干…
…思わず自分のお腹と比べてしまう。

「マシロちゃんは断ること知らないから」

「仕方ないよね」

「ないない」

猫の話だと分かっている。

分かっているのに、遠回しに自分のことをいわれているような気になるのは自意識過剰だろうか？ 私が眉をひそめたところで、からんからんつと事務所のドアが開いた。

「マーシロー」

「何？」

「……」

にこやかーに開いた扉から顔を覗かせた男の声に私はそっけなく答える。

彼は私をまじまじと見たあと、こともあろうかそのまま扉を閉めようとしたので、カウンターに乗っかっていたペーパーウェイトを投げつけた。

「殺す気かつ?!」

なかなか狙いが良い。

けれど、本人には当たらずにそれは宙に止まったあと、怒鳴った男の手の中に納まった。

「なんで逃げるのよ、カナイ」

苦々しく睨みつければ、一応事務所内に戻ってきて、バツが悪そうに首の後ろを掻く。視線は私を見ないが腕の中のマシロちゃんは、ちらちら見ている。

「いや、まー、その、なんだ。マシロ二人の相手はちょっと手に余るか……」

「……さては、あんたね。可愛いマシロちゃんに餌付けして肥え太らせようとしているのは」

「け、健康的で良いだろ」

「いや、不健康だよっ！」

怒鳴った私に驚いたのか、白猫は私の腕から、とっと逃げ出して、カナイの足元にすり寄っていった。

……やつと懷いてもらったのか。

餌付けで……。

人事ながら切ない。

「懷かれるの見て、切なくなるのはカナイくらいだよー」

「切ないよねー」

テラとテトも同じことを思ったらしい。私の隣で声を揃える。

「うるせーよ」

ぶっすーとした顔をこちらに向けるが、猫を抱き上げたときには、口元が緩んでいる。

かなり締りが無い。というか……やれやれという感じになってしまうのは何故だろう。もうなんか、気の毒すぎて、良かったねと頭を撫でてあげたい性分になる。

「あ、そうだ」

「そうそう」

どうしようもないなーとカナイを眺めているとテラとテトが、良いことを思いついたとばかりに切り出した。

「マシロちゃんを散歩してあげてきてよ」

「きてよー。僕らが依頼書書くからさー」

「……猫って散歩いらないでしょ？」

呆れ気味にそういった私にテラとテトは「でもねー」と声を揃える。

「そのマシロちゃん、かなり箱入りなんだよ」
「箱入りー。引き籠もりなのー」

—— ……猫が、引き籠もりつて。

* * *

で、結局。

「それ、やめなよ、カナイ……」

「良いだろ。美味そうに食ってるし」

私とマシロちゃんが散歩に出るとカナイがおまけでついてきた。ついてこなくて良いといったのに「俺もパーティだろ？」とあっさ

り口にした。Eランク満たないくらいの雑用に手を貸すことなんてまずないくせに良いいうよ。

まあ、カナイが一緒ということもあり、私は気兼ねなく王都の門を潜って外に出た。そんなに遠出するつもりはなかったけれど、遊ばせるには広い場所の方が良いと思った。

だから、近くの原っぱまで出て、私は木陰に座りマシロちゃんを放したというのに、その隣でカナイがあっさり餌付けする。

意味がない。

意味がなさ過ぎる……。

「ほらっ！ 駄目だっていつてるでしょっ！」

殆ど強引にカナイの手の中から——多分猫用クッキー——を奪い取る。カナイは「あ」と声を漏らし、同じようにマシロちゃんも「にやう」と切ない声を上げる。……お前ら。

マシロちゃんは私に怒ってくるかと思ったけど、カナイの手の甲に額をぐいぐいと押し付けて、もっとー、とおねだり中だ。

……可愛い。

カナイじゃなくてもそう思う。

甘やかせなくなるのも分かる。

でも、テラとテトは私たちが来る前にお昼ご飯を上げたばかりだといっていた。猫に一日三食は多い。多いと思う。十分に、ギルド事務所でも甘やかされているのだ。その上に、こんな日々を送っていたのでは太って当然だ。

……というか、自分のことのように痛々しい。

「ったく、お前も何か欲しいのか？」

カナイは猫を膝に抱き、ポケットを探ると「ほら」と私に小さな包みを渡す。飴玉くらいのものだけど……。

「何、これ」

「何って、多分チョコレートだろう？ マシロのおやつ買ったときに、俺にもってもらったんだよ」

じいっと手の中を見ている間にカナイは立てた膝に猫を転がして、お腹を見せているマシロちゃんの腹を撫でている。

この上なく、お互い幸せそうだ。

「大体、ちよつとくらい太ったって愛嬌が良いだろー。可愛いじゃないか」

なあ？ と声掛ければ、返事をするようにマシロちゃんが、にやうと鳴く。

親馬鹿。

猫馬鹿……

こんな飼い主が駄目猫を作る！ とかつて見本みたいだ。

「マシロはどんな風でも可愛いよ」

不意に注がれた台詞に「え？」と「は？」がハモる。

まじまじとカナイを見ていると、カナイはじわじわと頬を朱に染めて「っ馬鹿！ 猫だよ」と怒鳴る。

その声に驚いてマシロちゃんは、カナイの膝から降りてしまった。そのタイミングを見計らって私は持つてきていた猫用おもちゃを、ぽーんと原っぱに放つてやる。

網目のボールの中央に鈴が入っているもので、りーんと愛らしい音を立てて草の上を転がっていった。

本能素晴らしく、箱入りマシロちゃんも機嫌良く追いかけていく。

「……分かってるよ。ちよつとからかっただけでしょ」

それを眺めつつ、ぶすつと溢す。

本当はちょっと吃驚したけど、でもまあ、カナイはあまりそういうことをいわないもんね。

物言わぬ小動物相手にしか……独居老人みたいだ。

そう思ったことがあまりにも嵌りすぎて、私は一人で、ぷつと吹き出した。

そんな私を面白くなく眺めたあと、カナイはごろりと草の上に寝転がった。

「俺寝てるから、何かあったときか帰るとき起こして」

片方の腕を顔の上に載せ、空いたほうをひらひらと振る。私は「はいはい」と返事をして、さつきもらったチョコを頬張った。

うん。美味しい。

マシロちゃんは今度はちょうちょを追いかけている。外に出れば一応遊びはするみたいだ。

のんびりとした時間が流れていく。

私はカナイみたいにそこらへんにごろりは出来ないから、木の幹に背中を預けてぼんやりとしていた。うつらうつらと船をこぎ始めたところで

「こんにちは」

と声が掛かった。

眠い目を擦りつつ顔を上げれば、見知った美少女だ。さらさらストリートロングの髪が風になびく姿はさながら絵画のようだ。

もっと寝ぼけていたら、天使。とかほざきそうなレベルで可愛い

……。

「どうしたんですか、こんなところで」

いわれて私は少し離れたところで飛び跳ねている猫を指差して「依頼中」と笑った。

「それで、えーっと」

「リルムです。お見知りおきを」

ふわりと初夏の清々しい風を思わせる笑みを溢してそう告げられ、私も改まって自己紹介をする。でもリルムちゃんは既に私の名前は知っていたようだ。

「先日、貴方とお会いしたあと兄からの手紙に書いてありました」
「……兄？」

ちらりと私は隣で心地良い寝息を立てている男を見る。リルムちゃんは気がついていなかったのか、はっとした顔をして、ぱあっと頬を染めた。

「大丈夫よ、寝てるから」

何が拙いのか私には分からないけど、リルムちゃんの表情から焦りを感じて私は笑った。

「それで、リルムちゃんは一人で王都を出てどこへ？」

よいしょと、立ち上がりカナイが起きないように、そーっとその場を離れた。それでも目が覚めたとき私が居なかったら心配するだ

ろっから、目の届く範囲で……。

「え、ああ、わたしはお使いで……港町の傍まで行くつもりでした」
「一人でっ?!」

驚いた私にくすくすと綺麗な笑みを溢す。そして、ちらと後ろを向けば王都から暫らく続いているレンガ道に馬車が待たされていた。

「車窓から、ちらと貴方が見えただので、ご挨拶をと思いました」

その程度のことわざわざ止めてくれるなんて、なんて良い子で礼儀正しいご令嬢なんだ。

兄とは随分違う。

カナイならそのまま通り過ぎて、あとで何やってたんだ？ と気が向いたら聞いてくるくらいだ。

しみじみと兄妹といっても似ているとは限らないんだなあと思う。まあ、自分も兄や弟に似ているとはあまり感じない。兄は面倒見が良すぎるし優しすぎる節がある。頭の出来も私とは雲泥の差だ。

弟は可愛くなさ過ぎる。全く持って素直じゃない。

そんなことを思い出して、ほうと息を吐いたところで、遊びつかれたマシロちゃんが、なーうと私の足首に擦り寄ってきた。

可哀想に……懐いた懐いたと思って、来るのはこっちか。

苦笑してちらとカナイの居るほうを見てから、私は猫を抱き上げた。

「貴方はもっと遊んだほうが良いんだよ、マシロ」

いいつつ、喉元を撫でれば心地良さそうに空を仰ぎごろごろと喉を鳴らす。やっぱり本物の猫とブラックは違うなと、ふと思う。それと同時にきよとしたリルムちゃんと目があつた。

首を傾げれば、リルムちゃんは恐る恐る口を開く。

「その猫、マシロさんと仰るの?」

「いや、うん、まあ……恥ずかしながら」

「ごによごと続ければ、リルムちゃんは凜としていた佇まいを崩し、くすくすと楽しそうに笑った。

「わたし、てつきり貴方のことだと……」

「え?」

「ふふ、いえ、その……ふふ」

リルムちゃんはツボに入ったらしい。桔梗の花が風に揺れるように、優雅な姿で笑い続ける。

「兄の手紙に良く名前が出ていましたし、この間お会いしたときにもお二人だったので、わたしてつきりようやくと懐いた“マシロ”は貴方一人だと」

—— …… 懐いてませんから。

私は複雑な気分でカナイを睨む。紛らわしいんだよ。馬鹿。

「で、でも、そうですわよね。ふふ」

「手紙は読んでるんだね?」

この間の様子ではそのままゴミ箱とかもありそうだと思った。楽

しそうにしているリルムちゃんににこりと笑いかければ、リルムちゃんはぎくりと肩を強張らせる。拙いワードだったのだろうか。

「返事は書かないので読んでいないのと同じです」

「どうして書かないの？ カナイ、リルムちゃんから手紙来たら有頂天になりそうだけど」

ああ、もう想像がつきすぎてこっちが恥ずかしいよ。

リルムちゃんは少し迷った様子ではあったが、私を信用してくれているのか、話を続けてくれた。

「兄には、わたしから近づいたんです」

これは意外だ。てつきりカナイが目に入れても痛くないっ！ っ
て感じでストーキングしているんだと思った。

私がそう思ったことを察したのかリルムちゃんは、にこりと微笑む。そしてそのお人形のような顔から表情を消し去るとぼつぽつと続ける。

「わたしが生まれる前に家を出たので知らなかったんです。偶然母の書棚から姿絵を見つけて……隠すには理由があるだろうと独自に調査しました」

子どもの発想じゃない。普通ならそのまま母親に尋ねるだろう。

「探し出した記事は華々しいものばかりでしたよ？ 魔術師系の最年少記録を全て塗り替えていくほどの人が自分の兄だという事実にも驚き、誇りに思いました……それなのに、」

きゅっと下唇を噛み締めて、暫し瞑目する。

「兄は罪人であり、裏切り者です。大嫌いです、軽蔑します」

「リルムちゃん……」

さわさわと私たちの間を柔らい風が吹き抜けていく。それなのに……と顔を上げたリルムちゃんは続ける。

「わたしは態度で表しているのに、あの兄の不屈の精神はなんですか。恐いですよね。恐いですよ」

なんだかリルムちゃん必死だ。可愛い。

マシロちゃんが腕の中からするりと逃げ出すのを見送って私は苦笑した。

「えーっと、大好きなんだよ。うん。なんというか、可愛いんだと思うよ？ 私も弟が居るし、正直好かれているか疑問だけど、かなり構いたくなるし。それでいつも怒られるけど……うちの兄だって私には激甘だし。年上って下を甘やかせたいんじゃないかな？」

「マシロさんのお兄さん？」

可愛らしく小首を傾げたところで「楽しそうだな」と声が掛かった。今日はぎくりと肩を強張らせたのはリルムちゃんのほうだ。

私がかナイを振り返るよりも早く、リルムちゃんの表情は凍った。

「王都の外まで使いに出るのか？ 大変だな」

「ええ、あの家にはわたししか居ませんから」

キツイ。

なかなかリルムちゃんがカナイに向ける台詞は辛辣だ。

それでもカナイは顔色一つ変えずに「頑張れよ」と微笑む。

臣兄もこんな感じだっただろうか？

「ではわたしは忙しいので、」

つんとカナイから顔を反らしたあと、私にはさっきまでとはまた違ったしゃつきりとした笑みで「ごきげんよう」と膝を折った。私も、またね。と手を振ればくると踵を返したリルムちゃんは一度も振り返ることもなく馬車に乗り込んだ。

その馬車が見えなくなるまで見送ってから、意外にもカナイが先に口を開く。それも予想外の内容だった。

「リルムにはお前のことを漏らすな」

「え？」

聞き間違いかと、カナイを見上げると馬車の去っていったほうを見て目を細めたカナイは真剣にいつているようだ。

「特に珍しい話をしていたわけじゃ」

「それでもだ。おまえ自身の話はするな」

益々良く分からない。

それに私はべらべらと話をしたわけじゃない、ただちょっと自分の兄弟の話をただけで……それ以上は

「お前は聞かれたら答えるだろ」

う。

確かに聞かれたら答えたかもしれない。だって、カナイの妹さんだし、特に感じの悪い子じゃない。お兄ちゃんに素直になれない可愛い子だと思う。

「あいつは商人だ。もっと幼いときに俺の個人情報事を事細かに調べ上げ、両親にばれないところで俺に顔を見せに来ることが出来るよ。うな子どもだ」

「……何がしたいの？」

「信用するなといっている」

酷い。

くつと私が不機嫌に息を呑んだのが分かったのだろう。カナイは、少しかだけ拙かったというふうな咳払いをしてから私の頭をぽんと叩いた。

「兎に角、だ、商いをする上で、情報はかなり重要だ。あいつは持ち前の素養からその術を知っている。そして、利用するものは何でも利用できるようになる」

「そんなこと」

「あるよ。ある。それが素養だ。俺たちは逆らえない……俺が秘術への誘惑に逆らえなかったように……」

カナイが余りにも寂しそうにそう締め括るから、私はそれ以上そのことに食い下がれなかった。

「なあ……」

二人の間に気まずい沈黙が落ちたのを感じ取ったように足元でマシロちゃんが甘えるようにひと声鳴いた。

私はそれに、はっと気がついてマシロちゃんを抱き上げる。お疲れなのか一人で歩くのも嫌だという雰囲気、私の腕の中で丸くなる。

私の胸元のリボンが耳を掠めたのが擦ったのか、ぴるぴると耳を振るう仕草に、なんとなく二人して笑った。

* * *

「でも、カナイってヘタレだから」

「ヘタレっていうなよ」

「ヘタレだから」

—— …… とりあえず重ねた。

「リルムちゃんに拒否られたら、直ぐに諦めそうなのに。やっぱり妹は可愛い？」

王都までの道すがらやっぱり私はリルムちゃんの話を出してしまった。だって、気になったから。

カナイは、少しだけ唸って迷ったようだけど、やっぱり答えてくれる。

「母さんに頼まれたからだよ」

「え？」

「母親っていうのは妙に察しが良い。リルムが俺と会っていることを察した彼女が俺に手紙を寄越してきた。そういえば、あれが家を出てから、初めてだったかもしれない」

ふと今更思い出したという風に口にしたカナイにはちょっと呆れる。

「あいつを一人にしないでやって欲しいって、商売一筋の旦那の後姿を見て思ったんだろ。金で繋がっている縁っていうのは、強いよ。うで脆い。深いようで浅い。これから、その世界に足を突っ込む娘を憂いだことだろうな」

ゆつくりと歩きながら、私の腕の中に居る猫を撫で、ぽつぽつと告げる。

「まあ、俺は暇だからさ。用事は多いほうが良いし……」

「そうだね。カナイはあんま要領も良くないのに、何でも背負い込むのが得意だよ」

ふとそんなことを思った。

「あのなあ……お前可愛くないよな……本当」

「カナイは失礼だよ。私が可愛くないのくらい分かってるよ。ただ、珍しいっていう希少価値があるだけでしょ？」

冗談のような本気だ。

希少価値。

そんなことをブラックやエミルの前で口にすれば、彼らはとても傷付いたような顔を見ると容易に想像がつく。

でもカナイは、そうだな。とあっさり肯定する。

「天然記念物の指定でも受けたほうが良いかもしれないな」

「あんたね……」

恨みがましい目を向ければ、にやにやと笑って人の頭を小突く。
失礼極まりない。

でも、カナイの気兼ねなさは家族のそれに似ている気がする。思
わずそこに行き着いて、ふふつと笑いを溢してしまつと、カナイが
気味悪そうに私を見て、腕の中からマシロちゃんを奪ってしまった。
文句をいう隙もない。

「マシロはやっぱり可愛いよな」
「なっ?!」

いって、ちらりと私を見て、ふんつと鼻で笑ったあと抱き上げた
マシロちゃんの鼻先に、ちゅつと口づける。

—— …… やっぱりその名前は嫌がらせでしかない。

そう私が赤くなる顔を隠して嘆息したのも束の間、カナイの悲鳴
が響いた。

寮に戻れば、頬に出来た三本傷をアルファに相当笑われていた。

前編

「誕生日、ですか？」

「そう。誕生日」

珍しく、ギルドの依頼を終えたあと、合流してカフェでお茶。なんてカップルらしいことをしてみる。

そして、話題も恋人同士っぽい？ こともないけど、そんな話題で……。

「いつかなーと思って」

フルーツタルトの上に乗っかっていた、チェリーを口に運びながら問い掛けた私にブラックはティーカップを傾けていた手を止めて、ソーサーに戻した。

「十二月ですよ」

「は？」

「ですから、十二月です」

ああ、そうだった……シル・メシア歴は十二月あるのだ。

私は一瞬冗談をいわれているのかと思って眉を寄せそうになったところで気がついた。

「ふーん……で、何日」

「年も押し迫った頃です」

「……いいたくないの？」

「え？ そういうわけではなくて、正確にいうなら、二十八日ですが、毎年あるわけではないので、適当ですよ」

ぐつ。思わずさくらんぼの種を飲み込みそうになって、そつと出す。

「誕生日適当って……」

「酷いときは三年か四年くらいはありませんか。誕生日なんて、大した意味はないんですよ？」

動揺する私とは正反対で、ブラックはことごとくそういつて優雅に紅茶を啜る。

「別に私が特別というわけでもないと思いますよ？ 大抵、生まれを聞けば帰ってくるのは、寒い頃だった、とか、暑い頃だった……もしくは、何月。くらいだと思います」

「て、適当過ぎる」

「そうですね？ それに、名前と同じ考えであまり他人に明かすようなものでもないのですよ」

がつくりと頂垂れる私に、ブラックはとても不思議そうな声を上げ、補足説明もしてくれる。

でも、確かにシル・メシア歴は十三月で回っていて、日数に関しては毎年王宮の星詠みさんたちが決定している（らしい）ので、二十三日くらいから三十日くらいの間だったりして、歴表を作る人たち泣かせだ。それに、名前と一緒にということは、生きるか死ぬかって話になるんだろうなあ。

本当、物騒でいい加減で有り得ない世界。

「重要ですか？」

私があまりにもがっかりしていたので気になったのだろう、心配そうに聞いてくるブラックに私は唸った。

「重要度としてどうか分からないけどさー……誕生日は祝うものっていうのが当たり前だから」

それに恋人がいるとすれば、それなりに重要な記念日になると思う。思うけど、この世界ではそうじゃないんだよね。

「どうして、祝うんですか？」

「そりゃもちろん“生まれてきてくれてありがとう”と“無事に年齢を重ねることが出来ておめでとう”でしょう？」

世界的にどうかは知らないけれど、少なくともうちの家はそうだった。ありがとうとおめでとうを同時に聞くことの出来るとても貴重な日になる。

だから、やっぱりお祝いだとも思う。

私にとって理解出来ない質問は、ブラックにとって理解出来ない答えになったようだ。続けて、カナイだって、といいかけてやめた。何があつたとしてもブラックと他のみんななどでは生活してきた環境、境遇が違いすぎる。

それに…… —

「桃、いる？」

いってフォークを置くと指先でタルトに載っていた桃を摘み上げ

て「はい、どうぞ」とブラックに差し出した。ブラックは、迷わず私の手を取って引き寄せると、ぱくりと頬張って、指についたクリームも丁寧に舐め取る。

くすぐつたくて気持ち良い。

軽く瞼を伏せているブラックは綺麗だと思う。思うけど、個人的には、つい、ちらりと頭頂部へと視線を走らせる。

ぺしゃんつと頭に張り付いてしまっている耳が可愛い。

ちよつと酸っぱかったのかな？ 空いたほうの腕で頬杖をついて、眺めてしまう。

ふふ。本当、可愛い。

そして、最後に指先に強く唇を押し当てられて離れた。ほんの少し寂しい。

このまま、絡め取ってしまいたいけれど。大丈夫、私は理性的だからそんなことはしない。

「今年の十二月はお祝いしようね。二十八日も多分あったと思うから」

差し出していた手を引っ込めて変わりにティーカップを持ち上げる。ブラックは一瞬、どうして？ と口にしそうになって飲み込んだ。

だから私は静かに続ける。

「ブラックが生まれてくれたことに感謝しているからだよ。貴方が居てくれて良かった」

「――……」

本当にそう思うからこともなげに口にしたのに、ブラックは何かいい掛けて軽く唇を噛むと逡巡した。目にも明らかに戸惑いと動揺が隠せていない―― 一番に、耳がぎっこぎっこ舟をこいでいる―― きっと、そんな風にいつてもらったことないんだろうな。

「ですが、私は……」

いいかけたブラックと目が合うとブラックは口を噤んだ。

どこか、しょんぼりとするブラックに微笑ましい気持ちになる。

ブラックのいいたいことは何通りか想像がつく。

実母に毒を盛られてしまっくらい軽い命であったとか、もしくは、自分が居たために私が元の世界を捨ててしまったとか、そういうことだろう。

そのどちらもお門違いも良いところだ。

ブラックも、私がそういつて一蹴してしまうのが分かったから、口に出すことは控えた。

私たちはそのくらいにはお互いを知っていると思う。

そして、どちらともなく笑みを溢して出ようかと立ち上がった。

ブラックが会計を済ませて出てくるまでの間、私は店の外でぼんやりと夕方の忙しそうな人たちを見送る。

なんとなく、今日はこのまま帰りたくないな。

楽しい時間の終わりが近づくといつも思う。でも、いつも思いた

いからちゃんとけじめはつける。

つけてるつもりだ。

今日は平日だし、明日も普通に授業がある。

「マシロ、どうかしましたか？」

そつと隣に立ったブラックに何でもないと微笑んで、自然に手を取り指を絡める。そして、歩き始めて「ごちそうさま」と告げると、ブラックはそんなこと……といいかけて飲み込むと「どういたしまして」と口元を緩める。

「少し遠回りして帰ろうか？」

「お茶を飲んだあとですけど、夕食に間に合いませんよ？」

くすくすと冗談のようなことをいうけれど、これは本気。

私がみんなと席に着くことを大切にしているから。食事は進まなくても話は出来るし、アルファが横から取っていつてくれるから残すこともない。

家族——のような人たち——とはやはり出来る限り食卓は囲んだほうが良いと思う。

私は短く息を詰めてから細く吐く。

「そつ、だよね」

でも、恋人とはもつと沢山一緒に居たい。居たいけど、ぐつと堪えて

「じゃあ、帰ろうか？」

なんとか普通に口にしたつもりだけど、そんなこと簡単に見破られてしまう。

「――……では出来るだけゆっくり帰りましょう」

だから、ほんの少しの優しさも嬉しい。

私は握る手に力を込めて、空いていたほうで腕も絡め取る。もう夕方みんな忙しいから、誰も私たちなんて気に留めないだろう。

そこから寮までは本当にどうでも良いような話を沢山した。

毎日会うわけじゃないから、少しでも沢山のことを知って欲しくて、私は出来るだけ多くのことを話すしブラックはそれを時々過剰に反応しながら聞いてくれる。それがとても楽しくて、私は満たされる。

「……あ」

そのせいで、どんなにゆっくり歩いても直ぐに寮棟の裏についてしまつて、いつも私はここで、一緒に住むという選択肢について検討してしまふ。帰る場所が同じなら、こんな風に切ない気持ちを味わわなくて済む。

数段のステップの先にある扉を見上げて、はあと溜息。出来ればブラックの前で溜息なんて吐きたくないけど、どうしても出てしまふ。だって……寂しい。意図せず繋いだ手に抱え込んだ腕に力を込めてしまふ。

寄つていく？ と聞いても良いけど、それじゃキリがない。

「ねえ、マシロ」

「ん？」

苦々しい気持ちでいると、ブラックに呼びかけられ隣を見上げる。ブラックは私と同じ場所を見ていたけれど、私の視線に視線を私へと戻す。黒い瞳にどこかから反射してきたのだろっ、夕焼けの赤が映りこんで妖しい色に光り、すうっと猫のように細められる。そして、優しく紡ぎ出す。

「もう少しだけ、少しだけ」

良いですよ。いい終わる前に、ぐいっと強く、けれど柔らかく離れかけた腕を引く。よろりとよろめけば、そのまま抱き締められて壁の凹凸部分に引き込まれる。

ぎゅーっと背に回された腕に力を込められて、心地良い息苦しさいそに襲われる。すうっと冷えるような、涼しげな香りがする。残夜の頃よるに吹く爽涼の風のように……私の心は凪なみぎ居る。

うっとうしと瞑目し、頬を摺り寄せた。

ああ……愛しくて堪らない。私を捉えて離さない…… —

後編

「ねえ、マシロ」

甘い呼び声。

返事を返すのも忘れて聞き入っていると、ゆるゆると私の髪を弄んでいた手を離し、僅かに二人の間に隙間が出来る。あ、と名残惜しげな声を漏らしかけて、ぐっと飲み込めば、ブラックの両手はふわりと私の頬を包む。そしてもう一度、緩やかに私の名を呼ぶ。

「一緒に住みませんか？ 私はいつもここにマシロを送るたびに、図書館なんて無くなれば良いと思います」

そつと頬を撫でながら物騒なことを真剣に口にするブラックに私は大きく瞬きをしたあと、その真摯さゆえに笑いそうになる。

「消しちゃ駄目だよ」

「分かってます……一応……」

語尾が心許ない。

ちらちらと視界の隅に入る尻尾が静かに揺れる。

余所見をした私が気に入らなかったのか、頬に触れていた指先が、つつと降りてきて顎を取る。

くつと持ち上げられて、そのまま目を閉じれば、柔らかく口付けが降りてくる。可愛らしく啄ばむような口付け。ほんのりと胸のうちが温かくなってくる。

「マシロに出会うまで、私はあまり考えることをしませんでした」

鼻先が触れる距離で、背伸びをする私が辛くないように支えてくれながら話を続ける。

「存在の意味はもちろん……この唇から紡ぎ出される言葉の意味も、あまり重要だとは思わなかった。言葉なんて、相手に要求を飲ませるためだけに必要なものだと思っていました」

……淡々とそう口にするブラックの“これまで”は、物凄く屈折している。

「先ほどの話もそうです。生まれだって、ただ、産み落とされたに過ぎない。それに意味も価値もなく、そのことを感謝するなんて思いつきもしませんでした」

「——……ブラック」

言葉に詰まって、心細く名を呼べばブラックは綺麗に瞳を細めて笑みを作る。

「今は、感謝しています。こうして今、ここに居るから私はマシロに触れられる。マシロが産まれてくれたから、私はこうして満たされる……ありがとうという感謝の意味を理解することが出来る」

——……私がただの種屋であつたなら、知ることはなかった気持ちです。

じわりとブラックの言葉が私に染み込んでくる。

ブラックは私なんかより、余程真っ白だ。夜の闇を背負うには綺麗過ぎるくらい真っさら。

「ルインシル……」

青い月という名に相応しいと思う。

「……久しぶりに聞く名です」

「嫌？」

思わず口をついて出た言葉は失敗だったかと不安が過ぎれば、ブラックは曖昧な表情で首を振る。

「ただ、その名は、私に母を思い出させます。何度も何度も、呪いのように呼び続けられた……姿はおぼろげ、でも、名を呼ぶ声だけは良く覚えています」

「っ、ご、ごめん。で、でも、私は、私は感謝してるよ。お母さんの思いは私には分らない。分らないけど、私にとって種屋は……ブラックは、ルインシルでないと意味がなかった」

ブラックでなければ私はいない。

きつぱりと口にすれば語尾を掻き消すように抱き締められる。あまりの強さに、刹那息を詰めたものの、それは私を苦しめるためのものじゃない。

ブラックの背に腕を回して、そつと撫で、きゅつと力を込める。

「マシロが生まれてくれたこと、私を選んでくれたこと、感謝しています。言葉だけでは足りないから、態度で……態度だけでは足りないから言葉で、ちゃんと、伝わっていますか？」

掠れる声でどこか苦しげに告げられる。

答えなんて分かっている。

でも、何度だって確認したくなる。

分かっている不安なんだ。

不安で堪らない、好きで堪らない。

私はこれ以上もないくらい愛されていると思う。

そんな気持ちに満たされて、私はうつとりとする。

「伝わってるよ……知ってる」

もぞりと身体を動かせば、少しだけ腕の力が緩められる。私の顔を覗き込む瞳に私が映る。自分に大した自信はないけれど、ブラックの瞳に映る自分は嫌いじゃない。

「だって、私も同じ気持ちだもの」

ぐいっと回した腕に力を込めて引き寄せる。そして重ねた唇を軽く吸い、緩んだ合わせ目からするりと口内に割り入った。

「……っふ、んう……」

どちらともなく漏れる声は、なるべく抑えようと思うけれど、離れるつもりは毛頭なくて、もつと強く引き寄せれば同じだけか、それ以上で応えてくれる。

優しく背を撫でてくれる手が心地良い。

「マシ、口……」

「……っん」

ざらりとした舌先が私の上顎を舐め、舌を絡め取り甘く吸い、軽

く食む。身体中が熱を持ち心臓がどこにあるのか分からなくなるくらい、全身で脈打っている。

胸の奥が、お腹の底が……ずくずくと鈍く疼く。

これ以上は駄目と分かっているのだけど、私は弱いから、もっと欲しいと思ってしまう。

縋りつきそうな自分を何とか押し留めて、ちゅっと軽い口付けで離れるブラックを許す。

「どうします？」

ブラックの背後で、街灯がぼつぼつと灯り始めた。

ほんの少し頬を朱に染めて、潤んだ瞳で問い掛けてくるブラックはちよつと卑怯だ。

私は、ぽすりとブラックの胸に顔を埋めて体重を預け短く唸る。

正直、凄くしたい。

でも、明日も授業だし、帰るといつてここまで足を運んだわけだし、それに……。

「……明日まで、我慢する……」

「マシロは我慢強いですね」

呻くように口にした私の頭上でブラックがくすくすと笑う。

うるさいな。とばやいて不貞腐ればゆるゆると宥めるように、頭を撫でられる。時折、髪を梳いて抜けていく長い指先の感触が、私を夢見心地にする。

「明日はいつもより早く迎えに来ますね？」

「……うん」

「そのときには、マシロの誕生日を教えてください。国の祭日に指定したいくらいですけど……出来れば私だけに、こっそりと」

貴方を寄り深く知るのは私だけで十分です……。

この猫は、一体どこまで私を毒すれば気が済むんだろう。そう、思わずにはいられなかった。

「――……誕生日？ 何を藪から棒に」

「カナイのあの騒ぎはいつだっけ？」

落ち着いてから――そうじゃないと確実に私は情事の後のような顔をしていると思う――寮に戻り、いつもどおり、混雑する時間を避けての夕食時。私はまたも話題に誕生日を持ち出した。

私の目の前で新聞を広げていた、行儀の悪いお父さん……もとい、カナイは、私の台詞に顔をあげる。

「五月十五日」

「……本当に？」

「嘘だけど、そういうことにしてある。何日か決めないとうるさいから、もう、それで通すことにしたんだ」

……嘘から出た真ですか？

納得出来ないように眉を寄せればカナイは曖昧に微笑んで肩を竦

めた。

「本当は十一月」

「全然、違うじゃんっ！」

私の突っ込みに、隣でエミルがくすくすとお上品に笑った。

「僕は九月ですよ。九月の初めだと思います」

ひょいと身を乗り出して、私のトレイの中からおかずを奪っていきながらアルファが答える。

「と、思いますって、自分の生まれた日でしょう？」

「そうですねー、僕、知らないんですよ」

アルファの様子では、忘れたとかそういう感じでもなさそうだ。眉を寄せた私にエミルも乗っかる。

「僕も、三月だと思うけど、正確には知らない。初旬かもしれないし、下旬だったかも……カナイのように正確に決める必要性もなかったから、そのままかな」

「知らない人、多いの？」

そんな馬鹿なと重ねそうになると、カナイが先に口を開いた。

「民間人なら、そんなに気にしないだろうから知ってるやつも多いと思うけどな。実際祝う習慣がないわけでもないし。でも、こいつらみたいになつてくると、母親くらいしか覚えてないと思うぞ。もし、知っているヤツがいても、他言は無用だ。命に関わるからな」

そう締め括って、食後のお茶を飲み始めた。

「物騒な世界……」

「お前がいう物騒はこの仕様なんだろう？」

「……う」

カナイの尤もな台詞にぐうの音も出ない。

そして、大人しくお茶を含んだ私にエミルがのんびりと声を掛ける。

「で、マシロの誕生日はいつ？」

「え？」

「あ、本当、いつですか？ もう、いつそ白月聖誕祭とかにして、国民の祝日にしましょうよ。マシロちゃんの話聞いてたらシル・メシアって祝日が少なすぎます」

大事になりそうだ。

「え、と……私は……」

続く言葉を待っているみんなから顔を逸らして、うーっと唸る。

「わ、忘れた」

だ、だって、二人だけでお祝いしようと約束したばかりなんなん……ん。

二人だけの秘密……。そこに魅力を感じないわけない。

こんな苦し紛れの嘘、元の世界なら絶対に信じてもらうことはないけれど、この世界は素敵だ。

「そっか、残念」

あっさり受け入れられた。

「えーっ！ 勿体無いっ。じゃあ、マシロちゃんがこっちに初めて来た日か、戻った日にしましょう？ いつだったかな。ちょ、カナ伊さん覚えてないんですか！」

「お、俺に振るなよっ」

「暖かいころだったよねえ……」

「仕方ない。ストーリーに聞くしかないんじゃないですか？」

「ああ、あいつなら覚えてるだろうな。確実に」

私の話題のはずなのに、蚊帳の外になっていた。それなのに、みんなの視線が戻ってきてしまう。
なんだろうなあ、この妙なノリ。

私は苦笑して

「聞いとくよ、一応」

頷いてご馳走様と手を合わせた。

「絶対、絶対、ぜーったいですよっ！」

シル・メシアに祭日が増える日も近い、かもしれない……。

言い知れない不安を孕んで、どんよりとした空を仰ぐ。木々の間から見える空は暗い。

今にも泣き出してしまいそうだ。

さわさわと葉を揺らしていく風は、少し肌寒く気温が僅かに下がってきた気がする。

「雨、降りそうですね」

同じことを思ったのだろうアルファに「そうだね」と頷く。

アルファはまだまだ雨が好きじゃない、と、思う。にわか雨とかさらりと降り、そしてあっさり上がってしまう雨であつても、そのときにアルファに出会うことがないから、分からないけれど、それが良い証拠でもあるように思う。

「少し、急ぐ？」

走つても良いよ！ という勢いで問い掛ければ、アルファはにこりと微笑んで

「ちょっとくらい急いでも間に合いませんよ」

とあっさり毒を吐く。

でも間違ではない指摘に「確かに」と同意するしかない。基本インドア派——というより運動全般得意とはいえない——の私が走ったところで王都が簡単に近づいてくるとは思えない。

本日のギルド依頼は、採取系。

ココスという果物——木々の茂る奥地。腰くらいの常緑樹に生る、小桃くらいの大きさをルビーのように赤く、食すと甘味が強い。果実酒に適している——の実を取ってくるものだただ、時期がギリギリだったから、なかなか良い状態のものが見付からなくて、予定よりもずっと遅くなってしまった。

そして、ふらふらと陽気に話しながら散策していたら、王都から結構離れてしまっていた。

——……ぐいっ！

「え？」

ふとそんなことを考えているとアルファに腕を引かれた。その動きでアルファが持つてくれていた籠から、ココスの実が数個転がってしまう。

「あ」

と地面を目で追えば「そんなの良いです」と尚強く引かれて、どんつと背中を大木の幹に押し付けられた。

叩きつけられたわけじゃないから平気だけど、鼻が触れそうなので……
…というか、既に前髪が触れてるんですけどっ！ 普段ならなんてことないんだけど、時と場所だけに、髪の毛先まで神経が通っているようで過敏に反応してしまう。

「これ、持って置いてください」

すりつと頬を寄せて耳元で囁き、目で確認は出来ないけれど、そつと私の腕に籠をかける。

どうしたの？ と問いかけようとしたら、続けて、しーっと人差し指を唇に押し付けられた。

「このまま、マシロちゃんは目を閉じてください」

「え、ええっ？」

互いの体温がじわりと伝わってくるところで、そんなことを急にいわれて驚かないわけがないのに、アルファは場違いに「かーわいい」と微笑んだ。

「マシロちゃん、真っ赤。大丈夫、恐くないですから、マシロちゃん

んは目を閉じて、ゆっくり十数えてください」

「え」

「ほら早く、平気だから、恐くない」

真っ直ぐに碧い目に見つめられて、意図しなくても心臓は五月蠅くなってしまうのに、平然とそういったアルファに悔しくて、私はぎゅっと目を閉じた。

それと同時に「数えて」と声が掛かる。私は一度大きく息を吸って、

「いーち……、にいー……、さぁーん……しい……——」

「そのまま、続けて、何か聞こえても目を開けちゃ駄目ですよ」

どうして？ と質問を重ねる前に、ふと被さっていた影が晴れ、睨越しに緩い陽光で視界が明るくなる。

「うー……お、ろーおく……」

直ぐに、私には何も察する力はないけれど、それでも気がつくことが出来るくらいの騒ぎが起こった。

幾つもの殺気だった気配が一息に距離を縮めてくる。

頬を掠めた風に——らしくなく——短い悲鳴を上げて膝を折る。それと同時に、約束を忘れて目を開けてしまった。

アルファも、それに追隨した気配も、私からは少し離れてしまっていた。

オーガ、よりは小さい。

野犬くらいの大きさだけれど、瞳が赤く鈍く光っている。

血に飢えた色という感じた。

ああいう類は纏めて“魔物”と呼ばれると前に教えてもらった。声を掛けるか迷って、私は「なあな……、はあち……」と超小さな声で数えることを続けた。目を閉じることは出来なかったけど、私はアルファを信じている。

勝負は一瞬でついた。

アルファの周りを囲んでいた魔物は、ざっと数えて七、八体。飛び掛ってくる順に、地面に叩き落された。

鮮血が飛沫のように上がり、雨みたいに降る。

魔物は、どさりと鈍い音を立てて地面に伏し、どろりとした赤い海に身を沈める。

私は環境上、血は見慣れている。見慣れているけれど、それでもやっぱり……。

きゅっと瞳を閉じて顔を伏せた。

「――……じゅ……うう」

「間に合いました？ 目を開けても良いですよ」

おっかな吃驚顔を上げようとしたら「僕のほうは見ないほうが良いです」と遮られ、頭の天辺を掴まれて、ぐいっとそっぽを向かされた。

「ちょ、アルファ」

「汚れてしまったから、見ないほうが良いです」

私の抗議を聞くこともなく、アルファは「一雨来るまでに、もう少し進みましょう」と私の背を押した。

籠の中のココスの実がまた一つ転げ落ちる。

――……あ

「もしかして、この実のせい」

「あいつらの好物で、縄張りだったみたいです。ずつつけられてた……逃げ切れないくらい間合いを詰められてしまったので、仕方なく、だったんですけど」

ぽつりと口にすれば、さらりと説明してくれる。けれど、その説明はちよつと遅いと思う。早く教えてくれていればもっと万全の準備を整えた、と思う。

うん。多分……。

「獣は嫌だな……血と悪臭を振りまくから……」

木々がざわめくのと同じくらいの、小さな声。冷たく暗い声。そんな声で単調にそう紡ぐアルファを「え」と見上げる。

聞き間違いかと思った。

一歩半くらい後ろのアルファは、わしつと前髪を掻きあげて苦々しく曇天を睨みつけている。アルファの抜けるように白い頬の上に散った拭いきれていなかった血が、赤い涙のように見えた。

「アル、ファ……」

声に仕掛けて、ぽつと私の鼻先に水滴が落ちた。

それに気がついたらあとは、ぼたぼたぼたと大粒の雨が落ちてくる。

「急ぐっ！」

ぎゅつと強く私の手首を掴んだアルファは、前に出て駆け出した。直ぐに水は足先を弾くほど地面を潤してしまふ。

「じゃあ、マシロちゃんは、これで身体を拭いて……毛布にでも包まっけていてください」

「え、でも……」

なんとか洞穴程度——目を凝らせば突き当りが見える——の窪みを発見して雨宿りは出来そうだ。

ふうと一息吐く間もなく、益々雨脚の強まった空を仰いでいた私にアルファはそういつて、いつもの袋からタオルと、毛布を取り出して押し付けた。

「服は脱げば良いです。少し奥に行けば暗いし、人も通らない。獣だってこの雨では寄り付かない」

「でも」

「僕は、燃やすもの探すので、見ないです」

風邪引かないうちに早く済ませてくださいね。とあっさり、締め括って私が止める間もなくアルファは雨の中へ戻ってしまった。

「——……脱げって、簡単にいうけど……」

確かにべつとりと纏わりつく服は気持ち悪い。長い髪から垂れてくる水も嫌だ。こういつとき髪が長いのは……とか、思ってしまう。まあ、このシル・メシアで雨に降られてしまうことは稀有なことだけだ。

私は散々迷った。

本当に、かなり迷った。迷ったよ？ 本当に！

……でも、水に濡れた服が体温を奪い始めたのに気がついて、渋々、洞穴の奥で服を脱いだ。

私はワンピースを着ていることが多いから、今日もそうだ。

季節柄、何枚も重ね着しているというわけでもないから、脱ぐのは直ぐなんだけど……全身ずぶ濡れなのは、そうなのだけど、どうするかなあ。

はあ、と嘆息しながら、まずは、簡単に水を拭って、毛布をぐりと羽織る。先ほどまでの不快感が少し薄れて、心なしかほっとした。

——……がさっ

「誰っ?!」

「僕です。火を熾おこしますから、近くまで来て」

下着をどうするか悩んでいたところで、音がして過剰に反応した私に、冷めた返事が返ってくる。

不機嫌というのは、また違う……以前も思ったけど、冷静沈着という皮を被った感じた。

だから、いつもの天真爛漫さを思うと違和感を感じる。

「……うん、ありがとう」

そう答えるのと、ほぼ同時に、ぽふっと火が灯った。なんとなく

その炎に、ほつと胸を撫で下ろす。

私は着ていた服を軽く絞って、その傍に寄った。

ほんの少し投げ込まれた枝が湿っていたのか、煙が多い。でも、直ぐに外に抜けていくから燻るってことはない。

私は出来るだけ平らで、綺麗そうな岩の上に服を並べた。足元もこの手前のほうはまだ草が生えていて靴を脱いでも問題なさそうだったから、靴も脱いで並べた。

「アルファ？」

一通りの作業を終えてもアルファは戻らない。まだ、雨は上がっていないし、いくらアルファが偉丈夫とはいえ、こんな中外に居るのは良くない。

それに、私に気を遣ったなら、もう毛布でぐるぐるだし、問題……ないとはいいい切れないけど、これは緊急非難的なもので、疚しいものなんてない。うん。だから、ない。

「アルファ……風邪引いちゃうよ？」

ちよこつと顔を覗かせればアルファは傍に居て、顔を拭っていた。私の掛けた声に気がついて、顔を上げたアルファは「直ぐ戻ります」と無表情だ。

ぱちぱちと薪が爆ぜる音しか聞こえない。

「アルファは？」

私は受け取ったマグカップの中に、ふうつと息を吹きかけながら、ぼつりと訪ねる。

恥ずかしいので、アルファのほうは見ないように心がけて……。

「あとで良い。こんな予定じゃなかったから、準備が不足してて……」

ぼそぼそと告げたアルファに「え」と顔を上げた。片方の膝を抱えて、棒で焚き火を突いていたアルファを直視してしまった。

アルファはこちらを見てなかったから、良かったけど、ぱあっと頬が熱を持つ。

なんというか、うん。

私と同じように、びしゃんこだったアルファも、もちろん服を脱いでいたし、そのえーっと……外は薄暗いし、アルファの白い肌——アウトドア系のクセにどうして日に焼けないんだ——均整の取れた体つきに焚き火の炎が陰影を加えて、艶っぽいのだ。

雨のせいもあり、いつものワンコ系の軽いノリもないアルファは色っぽい。と、か、いったら益々無言になりそうだから、耐えているところだったのに。

こういうところで、耐えるのは普通、女の子じゃなくて、男の子の気がする……。

なんか私、ちょっと虚しい。
と、それよりも……。

「ご、ごめん。直ぐ飲むからっ」

アルファの口ぶりからカップの数が足りないのだろうと察して、私は慌てて中身を呷る。

「んぶっ！ ごほっ！ あっつい！」

熱い！

邪なことを考えていたから——だから、それは男の子の役目——油断して、思い切り舌を焼いてしまった。

痛い……ひりひりする。

「あーっう……」

焼いてしまった舌を、少しだけ外に出して、ふーふーっと気持ち冷やす。

「ふふ、変な顔」

はっ！ と気付いたら、アルファにがつつり見られていた。

「ちょ、こ、こういうときは見てみないフリをっ！」

「冗談。絶対見るね。見るよ、当然」

いつていることは意地悪極まりないけれど、ほんの少しだけ空気が戻って胸を撫で下ろした。

「ココス食べる？ 焼いてあげる」

「え、でも」

「これだけあるんだから、平気。全部平らげる気なら、それで良い。」

また採ってくるだけの話だから」

聞いておきながら、淡々とそういつて細い棒に器用にさして、炎に近づける。じりじりと、皮が焼けると甘い臭いが漂った。

直ぐに、こんがりと焼き色のついたココスを「はい」と棒ごと渡してくれる。

ぺろりぺろりと簡単に皮は剥けて、赤くて柔らかい果実が、ほわりと湯気を上げた。

美味しそうだ。

「慌てて、また火傷しないように」

アルファから頂いた注意事項に頷き、私は念入りに、ふーっふーっ
と冷ましてから、ぱくりと口にした。

香り同様甘くて美味しい。焼きリンゴみたいだ。

「——……ごめんなさい」

「へ？」

いっぱい歩いたし、お腹も空いてたので真剣に食べていたら、ふとアルファに謝られた。

不思議に思っただけ顔を上げると、小さなナイフで器用にぺろんぺろんとココスの実を剥いている。

外でのアルファって、かなり優秀というか身ひとつで山簞りが出来そうな勢いで器用だと思う。

カナイは何でも魔術でやろうとするから、大抵大雑把だし、エミルはなんでも煮込もうとするので、なんか毒々しくなるし……。

「準備が悪かったのは僕のせい。それに、血なまぐさいところを見せてしまったのも僕のせいだ」

「え、いや、でも」

「僕のせいだ。マシロに血が飛び散らないように、十分に自分に引き付けてから切ったけど……もっと早く、殺しておくべきだった。

諦めれば良いのに、なんて思ったから……ごめん……こういうとき、種屋だったら良かったのにな」

「え？」

「種屋はその身に血を浴びることはない。まあ、趣味で血なまぐさいことが好きというなら別だろうけど……闇猫はそういうのも面倒臭がりそうだ」

表情を変えることなく告げられる。それはとても酷薄に感じる。怒りが滲んでいる。

やっぱり、アルファはまだブラックを怨んでる。

私は、ぎゅつと胸が苦しくなるのを堪えて、先っぽのなくなった棒を火に焼^くべた。

ぱちつと僅かに勢いを増し、また、静かに燃え続ける。

「ごめん」

「良いよ……」

謝罪を重ねるアルファにも、なんだか申し訳ない。

「僕、まだやっぱり雨が苦手で、好きになれない。ブラックの、
とも、やっぱり、まだ……。いつもは、折り合いをつけられるのに、
雨が降ると昨日のことのように思い出して、ごめん……。やっぱり、
闇猫が大嫌いだ……。殺したいくらい憎い」

瞬きもせず、苦々しく……。憎々しく告げるアルファに「仕方ない、
よ」としか答えられない。

それも、まだ止みそうにない雨音に掻き消されてしまうくらい小さな声で。

—— …… 怨まないで、許してあげて、なんて、私の勝手だ。

「……あ」

暫らく自然の音以外は無音が続いたのに、私は、はたと遅すぎることに気がついた。

「もしかして、毛布も一枚だった？ 私、占領してて、ごめん」

「いーよ、別に。それに、それ、外すわけにいかないでしょ。僕は別に気にしないけど」

ちらりと、岩に掛けられた服に視線が走る。

確かに取るわけには行かない、行かないけど、空もちつとも明るくならないし……雨のせいで外気温は下がっている。

アルファだつて寒いと思う……思っけど……。

「は、半分だけ、どうぞ」

じりじりと少し離れていたアルファとの距離を縮めて、ギリギリの幅で身体を包んで巻き込んでいた分をふわりとアルファの方に掛けた。

ひんやりと冷たい空気が、伝わってくる。

「あつたかい」

我慢してただけで、相当、冷たくなっていたみたいだ。そうほろりと溢して、小さく縮こまるアルファに、申し訳ない気持ちになる。

「ご、ごめんね。気がつくの遅くて、そのっ、えっと、」

とりあえず、肩が触れるくらいまではくつついた。少しでも早く暖を取り戻して欲しかったから。

「守られるべき人は、守る人間のことなんて考えなくて良いんですよ……」

「私はお姫様じゃないから」

騎士様に守られるのはお姫様の特権だと思う。

私は一般市民だから、そんなに有り難がられるようなものじゃない。分かっているくせにと、笑えば「そうですね」と笑ってくれる。こてんつと膝に乗せた頭をこちらに向けて、マジマジと見られると、ちよつと、いや、かなり恥ずかしい。

「そっちの端も貸してください。僕寒くて死にそう」

う。さっきまで大丈夫、気にしなくて良いといつてたくせに。

調子に乗ったアルファに、眉を寄せれば「極力見ないから」と微笑まれる。

極力つてことは見られる可能性大だ。

いくらなんでもこれ以上近いのは、と思ったけれど、アルファの身体が冷え切ってしまったのは本当で、焚き火のオレンジ色の明かりが当たっても唇が少し青い。

その原因が気がつかなかった私にあるのも事実だ。

「き、緊急避難的な、もの、だから」

ぶわあぁつと顔と身体中が熱く熱を持つのを隠すように、そういつてアルファに回していた毛布の端っこを、アルファごと引き寄せた。

大判なものではないから、端を合わせると自然と抱き合う形になつてしまう。

「マシロちゃん、あったかい。それに柔らかいし……」

「ちょ、どこ触ってるのっ！」

「見ないって、約束したただけで触らないとはいってないです」

アルファの屁理屈は健在だ。でも、少し調子は戻ってきたみたいで、ほっとした。

首筋に遠慮なく擦り寄ってくるアルファの頬はとても冷たい。

「痩せ我慢しちゃって」

思わず溢した。余りに冷え切ってしまったアルファの肩を抱いた。ひやりとして、私の体温を全て奪ってしまいそうなくらい冷たい。

「我慢で済むなら頑張ります……でも、本当に、マシロちゃんあったかい……」

ごろごろとすり寄り、時折、首筋に冷たい唇が触れる。

「ちょっ！」

「駄目ですよ。毛布ちゃんと握っておいてください。寒いです」

確かに隙間が出来ると冷たい空気が割って入ってくる。入ってくるけど。

ねえ……、アルファ、ワザとなの？ 天然なの？

凄じい、恥ずかしいんだけど……。

ぎゅっとアルファの背中で毛布を引き合わせて握り、恥ずかしさに顔を背ける。

それなのに、アルファは尚擦り寄ってきて、暖かいと私の背を撫

で陶醉しているような息を吐く。

それが耳を掠めて凄くくすぐったい。

やめて、と声を上げようとしたら、それより先にアルファが「マシロちゃん、凄くときどきしてる」と口を開いた。

確実に人の身体を満員電車の中の痴漢みたいに、ぺたぺた触っている貴方のせいなんですけどっ！　　いいえ、たかたかたのに飲み込んだ。

「甘い匂いもする。ここには、雨の音も匂いも割り込んでこない……忘れていられる……凄く幸せです」
「――……」

そんな風に、そんな風にいわれたら、嫌だとかやめるとかいえなくなる。

じわりと目の奥が熱くなるのを堪えるように、目を閉じて大きく深呼吸。

「今、ただだからね」

「……はい、残念。僕のじゃないんですよ、ね。分かってます。我慢します」

誰のものでもないといいたところだけど、誰かのものだというのがやはり私はブラックのものだといいたい。そんな気持ちも察してくれたのだらうアルファに、やっぱり私は強く出れなくてそつと腕に力を込める。

「今は、良いんですよね」

あつさり切り替えて、にこりと調子の良いアルファに、もうっ！
と返そうと思ったけれど、ごくんと飲み込んだ。
気鬱に蹲っているアルファを見るよりはずっと良いから。

「雨、止まないと良いのに……」

優しい手つきで腰から背を撫でられ、変な声が出そうになるのを、ぐっと堪えて息を詰める。

止んでももらわないと困るっ！

止んでももらわないと、私は色々限界です。

というか、なぜ私が限界？

……普通逆のような……と、そんな虚しい思案をしていれば、少しは気がそれる。

まあ、アルファは役得というか、なんというか、とても不思議なところがあつて、なんとなくその全てを許容してしまう。

だから、とても優しい気持ちになれる。

少しずつ触れ合った肌の温度が同じになってくる。

確かに人肌は温かいし、落ち着くと思う。

まだまだ、手のかかる幼い子どもに戻ったように、甘えることを許されるような気もする。

ふんわりと弧を描くアルファの金糸を、静かに撫で、梳いていく。キラキラと光が瞬いてとても綺麗だ。

「……雨、止まなくても平気？」

「マシロちゃんが居れば平気です。淒く落ち着いてる……今、僕は

美しいときを刻んでいるんだろうなと、そう思っちゃうくらい満たされる」

いって顔を上げたアルファは「これって変？　もしかして、僕気持ち悪い？」と私の顔を真剣に覗き込んでくる。

「え、いや……どうだろう……別に迷惑では、ない、けど……」
「本当？　良かったっ！」

……なんでアルファには、犬耳とふさふさ尻尾がついてないんだろ。滅茶苦茶分かりやすく振ってくれると思うのに。

でも、実は少し疑問だったこともある。
今なら聞いても平気だろうか？

「ねえ、アルファ」
「うん」

「アルファは、私がブラックの恋人だから、そうやって好意を寄せてくれるの？」

「——……え？」

大きな瞳が、意味が分からないと見開かれ瞬きする。私は、しまった！　と後悔したけど、きつともう遅い。

「どついう、意味ですか？」

アルファの声色が変わってしまった。

「い、いや、別にそんな深い意味じゃ」

「僕、マシロちゃん好きですよ。エミルさん以外に、仕事関係なく

守ってあげようなんて思うのマシロちゃんだけだし、こっやって少しでも近いところに居たいと思うのだって、マシロちゃんだけです」

それなのに……と勢いよく口にされ、私はとても酷いことを口走ってしまったのだと痛感する。

アルファの瞳が濡れている。

泣いてしまっうんじゃないかと、恐くなるくらいに。

「もしかして、マシロちゃん……僕が、ブラックを憎んでるから、だから、あの猫の大切なものに手を出していると思ってたんですか？」

「あ、いや、その、ごめん」

「酷いです。僕は、まだマシロちゃんが猫に唆される前から好きなのに、それに、僕の怨みとマシロちゃんのこととは全然関係ないのに……ずっと、そんな風に思ってたんですか？」

「あの、えっと、ずっと、って、わけじゃないんだけど、その、ごめん……」

真っ直ぐに見つめてくる碧い瞳から逃げ出さたくて逡巡するのに、腕に込められた力と視線に身体中が硬く強張る。

「……さっきから、謝るってことは、僕に許して欲しい？」

いつもの無邪気さからは程遠い、艶っぽい瞳で問い掛けられ、私は無心でこくこくと頷いた。

「うん……分かった」

力の籠っていた腕が緩められると、ふわりと私の頬を撫でる。ア

ルファの手は、剣を握るだけあって、硬くて、そして、長くそうしてきたためか人差し指の付け根が少し張り出している。

その指先が、私の唇の上を、つつとなぞる。

「火傷、もう、痛みませんか？」

「……………」

唇が触れそうな距離で、囁かれ、私はその問いに答えるより先に、きゅっ！と目を閉じて身構えてしまった。

突っぱねることが出来ない、自分が情けない。
情けなくて、目の奥が熱く痛い。

心臓が口から出そうなほど——いや、もういつそ出してしまった
ほうが楽かもしれない——バクバクと高鳴ってうるさい上に苦しく
締め付けられる。

ふ…………と、唇に掛かる吐息が熱い。

——…………ごめenneっ！ ブラックっ

と、思った瞬間、びょーん……

「ふえっ——！」

口の両端に指を引っ掛けられ左右に引き伸ばされた。

「ぷっ！ くく…………。可愛いマシロちゃん。キス、されると思いました？」

「ひよふ、な、ひよと、ないお！」（訳：そんなことないよ！）
「何いつてるのか分からないですよ。あはは……」

そこでやつと手を離してもらった。

痛い……。

私は赤くなってしまっているだろう、口元を両手で揉み解しながら眉を寄せた。

酷い。

そりゃ、されても困るけど、でも、でもでももっ！ 乙女の純情返せっ！

思わず片方の手を、ぐうに握った私にアルファは、ごめんごめんごめんなさーいっ！ と慌てて飛びのいた。

そして、当然私は慌てて毛布を手繰り寄せることになるわけで、殴るタイミングを失くす。

「あ、雨、上がりましたね」

ひょいと、少しだけ明るさを取り戻した外を覗いてアルファが空模様と同じように明るく声を上げる。

もさもさしてたから、気がつかなかったけど、焚き火ももう消えてしまっていた。

服、は、まだ少し濡れてるけど、これで帰るわけにはいかないし、そのままだったのに比べれば随分ましだろう。

「さ！ 王都までもうひと息！ 頑張つて歩きましょう」

私が奥で着替えて出てくる間に、アルファは荷物も残り火も始末してしまっていた。本当、仕事が速い。

「何、その手」

「あ、あれ？ もしかして、まだ怒ってるんですか？ キス、したほうが良かった？ じゃあ、今からでも」

じりつと近づいたアルファと同じだけ、じりつと後退した。暫らく睨み合ったあと、折れるのはやっぱり私。

「手、繋いで帰れば良いんだよね」

いつてアルファの手を取って、洞穴から外へ出た。足元はまだまだぬかるんでいるところもあるけど、このくらいなら問題ない。

ぎゅつと私の手を取り直したアルファは、足取り軽く、でも私に合わせて歩いてくれる。

「また、雨降らないかなー……？」

不吉なことをいいながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8550m/>

白蒼月銀狼譚～二つ月の集った世界（種シリーズ?）

2011年10月5日23時50分発行